

笑話



近世文藝叢書第六



近世文藝叢書第六 笑話

緒言

一、本編には萬治より文政に至る間に刊行せられたる笑話中、特に其時期を代表せりと思はるゝ者二十四種七十三卷を收む。而して笑話の本祖と稱すべき醒醉笑及きのふはけふの物語を載せざるは、前者は百萬塔及落語全集に、後者は我自刊我本に飜刻せられて已に世に流布せるを以て也。又輕口噺中古人の趣向を剽竊し、甚しきは全文殆ど同一の者あり。今是等を省略せずして原本のまゝに採錄せるは、一は原本の面影をとゞめんがため、二には笑話の變遷を知るの助ともならんかとの老婆心に外ならず。

一、百物語二卷　萬治二年刊。作者不詳なれど、其文章醒醉笑に似たるのみならず、往々同案のものさへ之あるによりて考ふれば、策

傳の流れを汲みし人の作歟。此書後再版、中本に改裝繪入とせしもの出たり。

一、私可多話五卷　寛永十一年江戸版。中川喜雲の作にして仕形話の權輿なり。喜雲の傳は名所記上卷に掲載したれば茲に贅せず。

一、一休咄三卷　作者并に刊行年代を記さゞれど、此書の後編たる關東一休咄は寛文十二年版なれば、想ふに萬治末或は寛文初年の刊行なるべし。元祿十三年に至り再掲して五卷となせり。

一、一休關東咄三卷　一休咄には關東の事を記せるものなきが故に、其補遺として出すよし序文に見ゆ。寛文十二年の開版なり。

一、二休咄五卷　一休咄及一休關東咄に倣ひて作りたる者にして、貞享年間の版なり。作者詳ならず。以上三書は孰れも逸話めきて、嚴密にいへば笑話本と稱し難きふしもあれど、後の輕口噺に影響を與へたる事頗る多きを以て、茲に收むることゝせり。

一、囃物語三卷　延寶八年の開版にして、幸佐といへるもの丶編する所なり。各噺の條下に和漢類似の事を附載せり。貞享四年に至りて再摺し、二幅一對こ改題せり。

一、枝珊瑚珠五卷　江戸噺の元祖こもいふべき鹿野武左衞門を初め、浮世繪師石川流宣及門人の噺を集めたるものなり。鹿の卷筆に武左衞門繪師の家にて噺をする圖あれば、其折々の即興を集めて刊行せしものなるべし。

一、輕口露がはなし五卷　辻噺の祖露の五郎兵衞が作を集めたるものにして、元祿四年の開版なり。五郎兵衞は京都に住し、輕口頓作の巧者にて、常に四條磧或は北野にて辻噺をなし、都の名物男こて世に持囃されしが、晩年薙髪して露休こ改め、又雨洛こも號せり。元祿十六年五月九日歿す。行年六十一。

一、正直咄大鑑五卷　元祿七年の開版にして、石川流舟の作なり。流

舟は一に流宣と號し、菱川師宣の門人にして浮世繪の名手なり。噺の名人鹿野武左衛門と交り深かりしかば、其感化を受けしものか。書中の挿繪は其師師宣の筆なり。

一、露新輕口ばなし五卷　元祿十一年刊。露の五郎兵衛が噺を集めしものにして、露がはなしの後編ともいふべきものなり。

一、輕口居合刀五卷　元祿十七年の開版にして、作者未詳。

一、輕口あられ酒五卷　此書題簽及目錄には輕口あられ酒と記し、奥書に寶永二年正月吉日とあれど、其柱書には露休とあり。且卷首の大名に□□ばなしとの如く二字削除の痕跡あれば訝しく思ひ、是を正德二年版の露休ばなしと對照せしに、全く同物なる事を確め得たり。書中元祿十三年江戸に於て嵯峨の釋迦開帳の事を記し、又雨乞の願ほどきの條に元祿十三年云々とあるによりて考ふれば、此書露の五郎兵衛晩年の作を集めたるものにし

て、其初め露休ばなしと題して刊行せしを、寶永二年に至り入木再摺し、輕口あられ酒と改題新版とし、更に正德二年に至り三摺し、舊名に復せしものなるべし。柳亭種彥の足薪翁記に、露休噺は彼(五郎兵衛をさす)が名を借て後人の作りし草紙なりと記せしは、正德二年版露休ばなしを初版と誤解し、五郎兵衛歿後の出版なれば、後人の僞作と謬りしものといふべし。

一、輕口都男三卷　鹿野武左衛門、露の五郎兵衛、又八等當時三都に名高き輕口咄名人の作を集め、是に競點を加へ評を添へたるものなり。附錄には武左衛門と五郎兵衛とを左右に別ち、噺相撲にしたるは面白き趣向なり。此書寶永年間の刊行なれど、書中元祿十年の春東福寺の開帳の節、鹿折節京都へのぼり、此開帳につい て輕口噺の即興とあれば、其折の噺を後年出版せし者なるべし。

一、新話笑眉五卷　正德二年刊行。作者詳ならず。元祿以降の笑話本

悉く上方版なるが中、ひとり此書のみ江戸版なるは珍とすべし。

一、輕口福藏主五卷　正德六年京版、輕口噺も露の五郎兵衛歿後名人出でず。其流を汲むもの只管摸倣を事とせしかば、正德年間に至り衰運にむかふの兆を生ぜり。此書は其消息をうかゞひ得べきものにして、書中載する所、先人の作を剽竊せるもの多し。

一、話稿鹿の子餅一卷、同後編譚嚢一卷　明和九年江戸版、初編に山風の序、後編に馬場雲壺の跋あるのみにて、作者の名を記さゞれど、增補稗史家傳小松百龜著述目の條に、卯雲鹿の子餅及百龜が聞上手は最も著れたりとあれば、或は小松屋三右衛門號卯雲の作にあらざるか。後考を俟つ。

一、高笑一卷　安永五年陳奮翰の序に彡甫先生著とあり。彡甫先生は何人の戲號なりやを知らざれども、陳奮翰は太田南畝の戲號なれば、此書狂歌者流の作歟、或は南畝彡甫先生の匿名にて作せ

しもの歟。
一、鳥の町一卷　安永五年江戸版。作者未詳。
一、江戸自慢一卷　三笑亭可樂の作にして、文政六年の開版なり。可樂は俗稱京屋又三郎といひ、馬喰町に住せし櫛商なりしが、其性滑稽を好みしかば、終に落語家となりて三題噺を創む。焉馬によりて中興せられし江戸の落語は、可樂によりて大成せしものといふべし。天保四年三月八日歿す。行年五十八。
一、落咄彌次郎口一卷　膝栗毛にて有名なる十返舍一九の作なり。彌次郎兵衛の無洒落に似たればとて題目とせしものなり。
一、春遊機嫌話一卷　安永四年江戸版。戀川春町の畫作なり。明和以來江戸の通人間に落語流行せしかば、年々小册子の出版多く、終には黃表紙にも落語のもの出づるに至れり。此書は其濫觴と稱すべきものなり。

一、笑府衿裂米一卷　小說家として有名なる曲亭馬琴の作にして、寬政五年の開版なり。馬琴の落語本の作は寬政十一年版戯聞鹽梅餘史（後おとき草の壽、又再咲一背譚と改題す）と此作との二種あるのみ。

一、無事志有意一卷　江戸落語中興の祖談洲樓焉馬及其社中の噺を集めし者にして、寬政十年の開版なり。後天保十年に至り開卷百笑と改題再摺せり。焉馬本姓中村氏、俗稱を和泉屋和助といひ、本所に住して大工の棟梁なり。狂歌戯文をよくし又落語に巧なり。毎月噺の集會を催して其名世に高く、門人亦頗る多し。鹿野武左衞門歿後、萎靡して振はざりし江戸の落語を中興せしは、實に焉馬の功なりといふ。文政五年六月二日歿す。行年八十。

明治四十三年十二月

校訂者識

近世文藝叢書第六　笑話

目次

目次終

近世文藝叢書第六

笑話

百物語序

此物語を百物語と名づくる事は、ある夜の徒然なるまゝに、こざかしき童より集まりてあそびしに、一人申出せしは、草も木もわが大君の國なれば、いづくか鬼のすみかなるらんとはいへども、いにしへはあの山に鬼あり、此村にはばけ物出しなどゝ傳へし事おほし、此頃の御代は四海なみしづかにおさまり、風枝をならさぬ時なるにや、世中にふしぎなし、まことなるやいにしへ人の語り傳しは、何にても百物語をすれば、かならずこはき物あらはれ出るとうけ給はりし、今宵は雨もそぼふり物すごき夜なれば、しめやかに百物語して、こはきもの出るか心見て、後の世のためしにせむといひければ、をの〳〵然るべしとて、はや物語をはじめける、先硯料紙を取出し、其中に一人筆とりにて書付けるに、かたはらいたき事共、我可こ語しほどに、語すでに百にみてんとする、今一つふたつになりし時、すはやと子どもさはぎあひて、灯をふとくかゝげてすみ〴〵を見まはし、にげ尻になりてかたりしに、はや物語はゐゝにみちけれども、さらにこはきものも出ざりければ、總の子供口々にいひけるは、むかしの人は何事をかいひをきしとてあざけりあへり、其中にこざかしきわらはは、横手をはつたと打て、こはき物こそ出けると申ければ、童共肝をけし、いづ方へいかなる物出けると、ふるひ〳〵問ければ、しづまり給へかた〴〵、たゞ今咄し給ひし其中に、こはきもの出たり、かのやつこがきたりし衣裳の色々を見給はずや、牛首布のかたびら、のりごはのしぶかたびら、みな〳〵こはきものなり、おさまりし此御代には、これらよりこはきものは、百物語の事はをきて、一貫物語にても出でまじきぞと申ければ、皆々色をなをして、げに是はいはれしとて大笑して立さりぬ、

百物語目録

目錄終

百物語卷之上

（一）人の語りけるは、東坡居士のいひをきしとかや、人の手ならひするに、先づ眞をならひ、次に行をならひ、次に草を習ふべし、眞は立がごとく、行はゆくがごとく、草はわしるがごとし、それよくたつてゆかずば、はしるものはあらじといへり、此事事文類集に見えしと也、誠に本立て道なるといふことはりなるべし、此國にならへるは、東坡のいへるとはかへさまなり、先草を習て行をならひ、眞をならふと也、かくのごとき人もまれなり、たゞ大かた草ばかり覺るゆへに、文盲にして、眞に書字はよくしりたる字にてもよみえざるなり、いと口おし、心をつくして習ばなどかならひえざらん、歌に

植て見よ花のそだゝぬさともなし
こゝろからこそ身はいやしけれ

といへり、又筆好も、手のわろき人のはゞからずかきちらすはよし、見ぐるしとて人にかゝするはうるさし、

(二)武田信玄禪家の小僧に行あひて、地ごく極樂はいづくぞと問給へば、くそくらへと申ける、信玄色をちがへて、につくき悪口のものかなといましめ給へば、是ぢごくとこたふ、信玄をかしくおぼしめし、縄をゆるし給へば、是極樂と申ける、信玄又刀をぬき小僧にさしつけ、いけるものか死せる物かと問給へば、死せるものと答ふ、ふりあげてうたんとしたまへば、にげさりていひけるは、めいわづかの内にありといへる、

(三)或寺に人なぶりの浮藏主有けるが、門外をかうじ賣の通けるをよび入、様々のおどけを云てなぶられけるに、此商人をどけものなりければ、口をたゝきて日を暮しけるに、御坊はやかへられよ、門をさすぞと申されければ、彼もの申やうは、かうじ門を出ずといふ、御坊もよかりけり、門外へをし出して、僧はたたく月下の門とてたゝかれければ、笑て歸ぬ、

(四)長谷の觀音と八田の地藏と、縮ふみに行給ひしに、折ふし旦那に行あひ給へば、河よりかけあがり、あはてふためきて、くはんをんは錫杖と數珠を持て歸らるれば、地藏は蓮華をもちてかへり給ひしとなり、其頃開帳にまいりし人のかたりし、如何にも觀音は錫杖じゆずを持給ふ、又地藏は蓮華を持給へりと語り侍し、まことなるとや、

(五)ある人物ごとにこびたる事をこのみけるが、餅はびやうのこゑなりと、雜煮をにびやうとこばされけるが、ある時にびやうを食す所へ客の來りければ、さきのにびやうがあらば出せよといはれければ、此人につかはるゝものなれば、餅をばびやうといふと心得、にびやうははやなく候まゝ、やくびやうなり共出し申べきかといひけるぞをかしき、

(六)うつけなる子を一人持けるが、或時きやうくんして申けるは、人の子はかしこくて、をのれが年よりわかき人に、ゑぼしぎのげんぶくのなどゝいひて、人まじはりをするに、其年までおさな名をよばれて、うらつきまはりて月日をくらし、身を持すべをしらず、あるひは人に物をとらるゝか、さなければ人にはらひ出してくばるか、少しやうねを取まはし申べきなり、けふは日なみよくて、當町の子供達ゑぼしぎをあそばすとかや、なんぢも會所へ出、よき名をついて來れよといひければ、會所へ罷出名をかへて歸る、親い

かゞゑぼしきたるといへば、彌六郎とかはり候と申、おやにがく〳〵敷腹をたてゝ申けるは、人の子はかしこくて、藤六郎あるひは彥九郎のとつき給に、何をもちて彌六郎とはつくぞとて、いかりけると也、

(七)赤松圓心は、禪法を聞えてじまんせられしに、ある時去禪院へ立より、東堂の心を見んと門外まで參りしに、十一二なる喝食(かつしき)士あそびして居られければ、赤松かつしきに問けるは、此寺の名は何と申ぞといへば、なんぢはなにといふ人ぞ、我は赤松圓心なりといへば、此寺は別法寺と申なりと答ければ、圓心思ふやうは、歲にもたらぬこび人かな、一問をかばやと思ひて、法に別法なし、いかなるか是別法寺と問はれけるに、喝食答ていはく、松に古今の色なし、なんぢは是赤松とこたへければ、圓心舌をふるひ、東堂にあふまでもなしとて、門外より歸られしと也、

(八)よろづせちがしこき人ありて、月夜になれば何にてもひろはんとて、用もなきにうかく〳〵とあるかれしに、少しこかげにきんちやくのごとき物をちてあり、いそぎひろはんと、あはてさはぎつかまれければ、牛のくそなり、ひとり腹をたてゝ行しに、又ある門のほとりに、何かはしらずわたぼうしのやうにて、まつ白なる物見えければ、跡より人來りてひろはんとす、此人心せきてはしりかゝりてつかみつかれしに、大きなる白いぬのふしたるなれば、なにかはこらふべき、さんぐ〳〵にくらひかゝりけるとぞ、

(九)ある人白樂天の三儀とて語りしは、

一日計在二雞鳴一　雞鳴不レ起日課空
一月計在二朔日一　朔日不レ立一月空
一年計在二陽春一　陽春不レ耕秋實空

といへる語、まことに人は心に油斷おこるにより、よろづにくゆることもわざはひもおこるとかや、古き歌に

心こそこゝろまよはすこゝろなれ　こゝろにこゝろこゝろゆるすな

(一〇)いにしへ大名碁をすきてうち給ふに、出入の者におどけたるものありしが、常に來りて碁のあひてになりけるが、打かゝると、やけるはく〳〵とひやうしにかゝりていふ口くせありしに、彼大名も氣にかかりけれ共、うちしこりてはともにいはれけるが、ある時彼をどけものに、今より以後は何につけてもや

けるはといふものには、判金壹枚の過錢を出させ申べしときはめられける、是より大がひにいひやみしが、かのおどけ人ふと來て咄しけるは、都には殊外なるおごりを仕よし承候といふ、大名如何樣の事かあると尋られしかば、茶の湯を仕るが、數奇屋の柱はみな唐木を以仕、くはんすなどはきやらにて仕るよしうけたまはり候といへば、それはやけてなるまひ事なりといはれけるに、扨こそとて判金一枚取けるとなり、

(十一)かた田舍のかたくな人共寄合て、物語せしこそおかしかりし、われ一人りこんぶりて、しらざることもしりがほにて一人申けるは、われら幼少の時分都見物に上り候ひしが、嵯峨法輪寺はさぞ年よられつらんといひければ、一人申やう、我等近頃上京仕候時承候は、嵯峨法輪寺は相果られたるさた申候といひければ、扨も〳〵いとしき事かな、見事なる大髭にて候ひしが、おしき事やといひしと也、

(十二)物ごとにふかくひげする人有けるが、客來てはなし居るに、客申けるは、御亭月は出て候かとことへば、すだれを捲あげてたゞ今月罷出られて候と申されし候也、月にまでひげさせられけると也、又ある時此人、さてもよき星月夜やと空うちながめて立れしに、となりより垣ごしに申けるは、貴樣の屋の上には一しほ星がおほく候と申されければ、尤おほくは候へども、みなぬかぼしにて候とて、はや星にも卑下をせられしと也、

(十三)ある人語しは、唐の李太白の詩に、月のもとに獨酌といへる題にて、めいよの句あり、

擧レ盃邀ニ明月一　對レ影成ニ三人一

此句の心は、ひとりくむ酒なれば、盃をさしあげて酒に月をうつして、さてわが影をうつしゝかば、三人酒をのむ心ちありとたのしみけるとかや、めづらしき見たてなり、李白は仙風をのづから有と傳へ侍る也、此句をもうけて、大德寺の澤庵和尚の歌とやらんに、

ひとりすむ庵とはいはじよな〳〵に
我かげそへて月を見るかな

(十四)ある人、山崎の宗閑が庵を見物せしとてかたりけるは、入口のがくにあげし語、おどけたるかる口なりければ、書とめかへりしといふを見侍りしに、

一、上の客人立かへり　一、中の客人日かへり

一、とまり客人下の下

(十五)男子を三人持たる人有けるが、或時三人をよびあつめ語りけるは、もろこしに蘇老泉といふ人あり、軾轍といふ二人の子をもてり、幼少の時彼二人が一生の間のことを文にかんがへをきしに、後其文に少もたがはずときけり、われも老泉ほどはなく共、汝等が心を見おくべし、何にてものぞみある事を申べし、それにてはかりしるべしといひける、此三人は上二人はちと次なるむまれつきなりし、弟はりはつものなりしが、まづ兄より次第にいふてまはせといへば、兄申やう、富士の山がほしきといふ、なにゝする、枕にせばやといへり、親喜で、扨も總領の望は大きなるともてはやす、次にとへば、あふみのみつうみがほしきといふ、是は何にかする、すゞり水にせんと云、是も大きなる分別とこそ喜で、一の乙に問ければ、我は何ものぞみは候はず、牛のくそが三かたまりほしきといふ、親子三人大きに笑ひて、何にかするらんといへば、先子供のたわけいふをよろこぶおやじに一かたまりくはせ、たゞ富士山のぞむ人にも一かたまりくはせたし、みづうみのぞむ人にもひとかたまりくはせたし、是よりほかに我等はのぞみなしとにげさりける、

(十六)一休和上さるかたへときくひに、御出あるついでに、門前の又六といふ酒屋へ立より、一つ二つ物語し給ふに、又六馳走申、彼奥殿の諸白取出し、ひたじゐにしゐければ、齋にゆく事もうちわすれ、とろりとろりとねぶり給へば、又六思ひつけておこし申せども聞も入ず、ひとり目さむるまでねぶりて目さめければ、一首

極樂をいづくのほどゝ思ひしに
すぎ葉たてたるまた六がかど

(十七)神無月の頃、尊氏將軍立花をあそばしける處へ、夢窓國師御出ありけるに、尊氏不レ斗發句をあそばしける、

梅をぬきもみぢを立のにしきかな
秋雨洒如レ絲

と夢窓わきをなされけるとなり、

(十八)幽齋と友長老とのつけあひの句おもしろしとて、人の語りしは、かりそめに見るをうらやむ草の庵といふ句に、いつはりとなる人の言の葉といひ給

ふ句は、相逢盡道休レ官去、林下何曾見二一人一とつくりし詩の心にて、つけられし妙句とかや、

(十九)一休酒に醉給ひて返(へん)をされしに、正しく蛸有けるを、人々是を見て、なまぐさき御坊かなと、口々にわらひければ、我等はくはねども、口より出ればせんかたなしとの給ひければ、皆人いよ／＼わらひて、くはざるもの喉より出るものかといひければ、中々くはねどものどよりいづる證據あり、いざや證據を見せんとて、百萬遍へつれゆきて、善導法然の畫像を見せ、あれ見給へ人々、善導の阿彌陀くはれし事いづれの書にもなし、しかれ共喉より彌陀出れば、善導もせんことなしとみゆと仰られけるぞ、有がたき作分かなとをの／＼感じてかへりけり、

(二十)ある人の茶堂坊主、あまりねぶりてやうにたたず、一時の食事にばかり目さめ、其外は晝夜ねぶりけるが、名をやみの夜とつけられける、其いはれは、くろふて用にたゝぬと云心也、ある時さん／＼せつかん仕ける夜、主の前にかしこまる、ねぶたきかといへば、いやねぶたくはなく候が、時々上まぶたがおとづれ候と申ける、

(廿一)さる百姓うけ取をとりてかへりしが、何と書つけけるぞ聞たしと思ふ所へ、いかにもじんぶつよき若侍、あつはれれき／＼といつつべき體なるに、彼百姓袖をひかへ、をそれながら此一筆御よみ給れと申かけられ、さながらしらぬともいはれざれば、をつとりよむ、此侍一文不通なる人なれば、戀し床しとあるといはれければ、百姓申やう、是はうけ取にて候といへば、實々三斗とあるは、いや五斗にて候といふ、まとに二斗わきにぶらつきて有し故みえず、物書ものは重寶にてなきかといげんを云ひ、ひたもの語れ、かたるほどよめるぞといひしと也、

(廿二)ある人のつかひし者に、きやうがるうつけありけるが、大雪のふりける折ふし、用所ありてつかひにやるに、彼もの申やう、雪ふかくまいることならぬといふ、主申けるは、何尺ふりたるぞといへば、あつさは七八寸かとおぼへ候が、はゞはしらす候と申ける、

(廿三)よろづそこつなる人、びしやもんをしんじ、毎月參詣申しに、ある時かも川の飛越みぞをこすとて、あいくちのさやはしりて先へとびける、ゆめにもしらず行けるが、足もとにぬきみになりて落て有し

を見つけて、是びしやもんの御りしやと三度禮し奉り、明日御禮に参詣仕らんといそぎ我屋へ歸り、まづ藏におさめをき、さてふれ狀まはし、知音の者共に酒をふるまひ、かくと語りければ、是は目出度御ふくなりとて、一度にどつとぞほめけるが、とてものことに其脇指拜見といひければ、尤とて藏にかけ入、彼わきざしを取出し、先をの〳〵いたゞきけるが、其中に一人これは貴様のあひ口に似たりといふ、にが〳〵しく腹を立、我等いかにそこつものなりとて、我脇指ををとしひらふものやあるといひける、座中此ことに氣がつき、能々見れば彼仁の脇指にきはまりける、をの〳〵申されけるは、とかく是は其方のあひ口なり、其方のあひ口御出しあれといへば、いやこれに候とて腰をさぐりて見れば、さやばかりぞ有ける、座中一度にどつとわらひ、扨もそこつの人かなと口々にわらひければ、あきれはてゝぞゐたりけると也、

(廿四)近頃やつこはいかいとて人のしけるを聞しに、冬の事なりしに

髮水にあたまがつはる氷かな

といふ句に又付ける、

しやつつらさむき雪のあけぼの

(廿五)或人世の中のうらめしき事共思ひつゞけて、つくりし詩ありと語る人有ければ、のぞみてかゝせけるが、いとあはれにて思ひふかし、

隨レ世似レ有レ望　背レ俗如二狂人一
情哉憂浮世　何處寄二此生一

(廿六)ある人の語りしは、恙なしといふこと、世人のつねにいへる言葉なるが、此ことば史記にあらはれたるとや、むかしもろこしにいまだ人の家なかりし時、土穴をほりて其中にて日月を送りけるに、恙といへるむし出て人をさしころしゝ事あり、此ゆへに人のそくさいなるかといはんことに、つゝがなきかといひつたへて、此國までいひならはしけるなり、雪の後に梅を問といふ詩に、先問梅花無レ恙否と云ふ句もあり、

(廿七)日待の夜色々の興ありてのち、火まはしをはじめて、ひの字をかしらにつけて、ひたものいひまはしけるが、其座の中に成あがりたる田夫一人ありけるに、火まはしといふことしかとがてんせず、され共これほどの事しらぬかと思はれむも口おしく、まじ

りゐたび〳〵つまりけるが、ある人ひよどりといふ、次にひばりといふ、彼人鳥の名と心得てふくろうといはれしに、座中どつとわらひければ、まつくすみになりていふやうは、その〳〵はみな鳥の名を出して、われらたま〳〵いひしを、かくわらふよといひければ、なをおかしくて笑ひあへり、

(廿八)とひやうなる下部ありけるが、何方ともなくやれ火事よといひ出しけるに、主申けるは、何方なるぞ見聞て參れと申ければ、かしこまりて候とて、あてどもなく走出るが、米屋の男米をせをひ通りしに、彼もの火もとは何ほどあるぞといきつぎかねて問ひければ、此おとこ火事とはしらず、一斗八升五合いたすはといへば、やれきいてあんどしたとてかへりけるとぞ、

(廿九)ある人の語りしは、何たる人にても、我家の風俗なに丶つけてもいづるなり、たしなむべきことにやと云て、諸宗の俳諧ありしを、面八句かきつけはべる、

先眞言宗の發句に　　金剛界胎藏界の紅葉かな　と

有ければ、曹洞宗脇　　そもさんか是あきの夜の月

第三は五山宗いたしける　行つくす江南すぢに雁なきて

四句めは淨土宗いたしね　西よりふくはごくらくのかぜ

五句めは日蓮宗なり　そこにこそくせもの佛やおはすらん

六句めは一向宗なり　人にかまはず御ふみよむなり

七句めは儒者　物しりの腹より出るじゆしやく道

八句めは醫師　藥のまずはしののたまはく

(三十)遊行上人にある人行あひて、ほとけの道を尋ねける時、歌よみて奉りければ、返歌し給ひて、ほとけの道をしめしたまふとなり、問ていはく、

　繪にうつし木にきざめるもみだは彌陀　かゝずきざまぬ彌陀はいづくぞ

返歌

　なむとたゞとなふる人のこゝろこそ　かゝずきざまぬそのまゝの彌陀

(卅一)かたゐなかのことなるに、都の人行て住けるが、所の里人をふるまひしに、入麵をしんじたきとふれければ、いづれもかたじけなしとは返事しけれ共、一人もにうめん食やうしらず、かゝる事しらざるといはんも都人にはづかしゝ、いかゞせむとひしめきて、その〳〵會所へよりあひ談合をいたしゝに、其中

にとし八じゆんにをよべる人、食やうよくしりたりしが、とかくの評議もいらざりけり、たゞわれらがまねをしたまへと申ければ、いづれも此儀然るべしとて日限來りければ、みな〳〵彼老人をさきにたてゝぞ出られける、亭主出合ひはやかつてよしとて出ししに、みな〳〵老人の手前をまもりゐけるに、此老人なにとかしたりけん、汁にこせうをはなすとてはなへ入、くさめをひた物いたし、たえ入ばかりなりければ、座にたまりえず、さしよりの事なれば腰たゝずして、四つばいになり末座へ出ければ、をの〳〵入麵くふ作法これなりと、わざとくさめしみなかほしかめ、四つばいになりてかへりけるとぞ、

(卅二)むまれつきそこつなれば、物ごとにねんを入すごす物にや、ある人供一人つれてのりかけに打のり、大坂より上京しけるが、淀の橋にて馬をつぐ時、供の男をよびよせ、荷物をつけさせていふやうは、先つゞら二つつけゝるか、次にあとつけのり敷つけゝるか、扨は何も取をとさゞる、まづ羽をり有り刀脇指あり、久三郎そこにおるか、まづをれはこゝにゐる、よし〳〵馬やれといひしが、よこ手をはたと打て、さきの茶屋に忘れし物ありと馬よりとびをり、十町ばかりはしりかへりて茶屋へはいり、おかゝあみがさはこゝにないかといへば、かゝわらひて、あみがさはかぶりて御座候と申ければ、あたまをさぐり見て、扨も〳〵思ひがけもなき所にありしとて、はしられけるとなり、

(卅三)貧僧のありけるが、北山のふもとに柴の庵をむすびしに、友の僧はじめて行てよめるとかや、

何をがなまいらせたくは思へ共
達摩宗には一物もなし

とよみければ、返歌に

一物もなきをたまはる心こそ
本來空の一もつぞかし

(卅四)わる口いひのおどけ人ありけれるが、あたまのきんかんなる人を見て、たるぼ〳〵とのみよびて、名をいはざりければ、さる時此人、われらをたるぼとはなにとていふぞとたづねしかば、かの人申けるは、先ほたるはしりがひかるものなり、其方はあたまがひかれば、ほたるをうらがへして、たるほと申といひてわらひけるとなり、

(卅五)ある人むまれつきをろかにして、よろづかしこだてのみしけるが、夕涼のころみな人よりあひてはなしけるに、かのものは一人とびのき、身うごきもせず居たりけるに、皆人色々はなしをしかくれ共、をともせざりしが、やゝありて其方達にこれほどぶとおほきに、かしましくはなさるゝよ、我らはしらぬかほして居て、木かとぶとめに思はせてすくむぞ、物いふな〳〵とぞ申けるとなり、

(卅六)さるうつけたる牢人都にすみけれ共、永々の牢人なれば、手前つゞきがたきゆへ、妻子友だちにいとまごひして、江戸へ身體からくりに下りしに、三條の大橋にて錢一文ひろひあげられしに、かきのへたにてぞ有ける、牢人はらをたてゝ、身體かせぎに下る門出に、さいさきあしゝとて引かへしかへりける、友達此よし聞なぶりて云けるは、侍は門出が大事なりと承る、其上みじかきがよしと申せば、尤々とほめければ、此人みじかきがよしと心得て、去方へ用の事ありて文をやるとて、一書かしくとのみかきてつかはしけると也、

(卅七)退二一歩行一安樂法、稱二三个好一喜歡緣と云詩は杜子美が句なり、此三个好といへるは、さる賢人ありけるが、隣家に子をほしく思ふとつねにかたられしに、ゆふべ子をもうけられしと女房かたりければ、扨それはよきことやといふ、其後かの子死ける、又女房いつぞやはなし申し子死候といへば、それもよしといふ、女ばうふしんにおもひて、子をまうけらしといへ共、又死せりといへ共よしといひ給ふ、いかなることならんと問ければ、それもよしと申ける、是を三ケよしといふ也、かくのごとくよろづあきらめし人はあらじとて、もろこしにも感じあへり、まことに此詩にいひしごとく、よろこばしき心の中なるらん、

(卅八)ある人めづらしき詩をかたりしは、盛齋が詩に

柳梢一穀玆緇滓　屋角双斑谷古孤

又此句よりつゞりしとなり、詩學大成には

鴨入二水中一純　蟬於二樹上一緇といふ句あり、又山谷が句にもめづらしき句あり、猿嘆山山、

(卅九)さる寺の御坊、あまりに貧僧にて一年を送りかねけるが、漸大晦日も暮ければ、だうじゆく小僧をあつめて、いかになんぢら、此春よりはいはひなをし

て、明日は元三なれば發句をいたすべし、脇第三をいたし三つ物仕らんとて、長老のいはく、

金持の死たる今日の春日哉

霞のうちに入玉ぞとぶ　　どうじゆく

門前にきかんのはたを持つれて　小僧

と仕て、どつとわらひけるといへり、

(四十)策彥と紹巴との百韻の漢和を見侍りしに、おもしろき句どもおほき中に、

難レ奈讀殘書

といふ句に

秋風に飛行螢吹きへて

と脇し給ひける、

又の懷紙の中に策彥

沙濕履無レ聲

といへる句に

しのぶ夜の雨は中々たよりにて

としられける、おもしろき句どもなりと聞し、

(四十一)道心者の庵に、弘法大師のよめる歌なりとて、壁に書つけしをうつし來て見れば、歌の句頭に一二三より十までならべてよめる歌、

一あるこゝろをしらでみな人の　しごろもごろに物をこそおもへ

二つともあらざるものをなごされば　みがきてもみよちゑのかゞみを

三寶にいのらぬとてもみな人の　こゝろのをにのつのをおとせよ

四大とて地水火風をかりあつめ　かへさずとてもかへるおほぞら

五體とて假に此世にあらはれて　出づるも入るもたれかしるらん

六道と思ふこゝろはまよいなり　おもはぬもまたまよひなりけり

七佛の世に出でざりしその先は　たゞやみの夜におとも香もなし

八萬の諸經をとくはなにならん　たゞひとすぢのみちをしへなり

九ゆる共今はかなはじ生れきて　かならずしするならひある世を

十あくをのぞく心のなかりせば　ひとときの間もごくらくはなし

(四十二)むかし伏見に江湖とやらんいひて、禪宗のあつまりて、毎日參禪參學におこたることなし、一日上堂のありしに、趙州の有無とやらんいふこそくをあげられしに、上堂過てかへる時、貞琢といふ僧一首の歌をよみて高らかに吟ぜられし、

趙州の有無のふたつにほだされて
身は淀川のからふねとなる

と侍りければ、東堂きゝ給ひて、貞琢々々とよび給ひけるに、やつと答らるゝ、東堂のいはく、それがからふねかと仰られけるに、いんたく答話をせられける、

寒松無レ聲風來吟

と有ければ、又いはく、風たゆむ時はと仰ければ

山虚有レ響

(四十三)さる山寺の御坊、雉子を一羽いけどりにしたまふが、食たくはあれ共、料理のやうすをしりたまはず、生ながら毛をひかれしが、折節だんな來ければ、御坊あはてたまひて、衣をかぶせめんぞうへをしこみ、さらぬていにて出でられける、扨だんなと四方山の物語しける所へ、かの雉子衣をかぶり、によきによきとだんなの前へ出ければ、旦那きもをつぶし、御坊これはいかなることぞと手をうちわらひ居る、御心をおこし、色々とめ候へども、ふつと思切しゆへ、ぜひなくきのふ髪をおろし、即ち我等衣をきせ候と申されければ、旦那をかしく思ひて、扨々しゆせうなる法師ぶりにて候とて、感じてかへりけると也、

(四十四)ある人喧嘩賣といひ立にして、奉口をかせぎけるに、おごけたる人ありてかゝへられしが、さる時子息風呂へ入ければ、せんとうの風呂には、かならず喧嘩出來るものなりとて、彼者をそへてつかはしける、あんのごとく彼者もの、かみあらひゆあぶるとて、とばしるちりてそばなる侍にかゝりければ、にくきりよくわいものかなと、まなこをいからかしてひしめき、はやけんくわになりぬる時、彼喧嘩賣出むかひ、扨もそなたはよしなき惡口をいはるゝや、をのれがやうなるばかは、そこなやつがくそををのれはくらへと、咎もなき侍をさしていひければ、何ぞやそこな奴が尿をくふべきかといふ、そこな奴といはれし人進出て、咎もなき物をそこな奴とはしよ侍に推參也と、二つ三つ云あふひまに、扨こそ喧嘩けんくわ賣

すましたりとて、若衆の御供仕我屋に歸りしと也、
(四十五)なりあがりの人はをかしき物なり、手前すこしよければなき事のやうに思ひ、本より文盲にてこびたがり、公儀だてをすることかたはらいたき者也ける、或人二人共に文盲なるが、中よくしてさる方へふるまひに參られけるが、こゝはれど公儀ぶりを出し、書院へ通られけるが、先とこを拜見仕らんとて、二人共に立よりみるに、柳といふ大文字一ぷく懸ければ、一人先、さても見事の、そも／＼のひまんしたる字也と云、亭主腹にすへかねすこしわらひければ、今一人せうしがり、又こゝな人の禪筆くはさるゝといひしも、禪筆は何とか心得けるやらん、
(四十六)昔ひえい山と三井寺とは、互不和なりけるが、さる法師三井寺を嘲りて、狂句をして遣しける、

寺見ニ北兵左ー

といひやりければ、

山誤ニ東東來ー

と對せしとなり、此二句の心ふかし、寺とばかりいへば三井寺也、北兵左とは比丘尼といふ字をあやまりしこと、もろこしより傳へし故事也、下心はなまぐさき寺なり、女人きんせいなるが、びくにを寺にて見たりと云心なり、山とは比叡山のことなり、東東來是もよく似る字なれば、もろこしよりあやまりしと云傳し、北兵左には三國一の對句なり、此對の下心は、聖道家のあやまりとて、むかしよりいひをきしに、いよいよがまんへしうにて武勇を第一とし、文盲なりとそしりたり、
(四十七)世のうきめ見えぬ海原に釣をたれて、しづかに歲月を送る人のかたりしは、ある時おきに舟をとめて一夜をあかしけるに、海のそこにしはがれたるこゑにて物語するを聞しに、にしさゞいとなまこと三つあつまりて、にしさゞいにいふやうは、そのほうは門がまへよくとびらよくてうらやまし、大波大風にも何事に付ても御用心よしといふ、さゞい申やう、いやさもなし、波風の時石沙うち入候へば、せばくて身のふりまはしもならず、そのほうこそ家居つよく、内あかくけつかうなるゐなしにてうらやましゝといふ、にし申やうは、左候へども戸びらひよそく、波風あらくてはいそぎはへ打よせられ、船の下などへしかれ候へば一命はて候といひて、たがひにう

らやみければ、なまこ申やうは、それには皆御雨ていのおごり也、此なまこはあかはだかになりつゝ、波風のあらきにもよるべもしらず、ゆらめきまはりてくらし候、御雨儲返々もおごりさ申けるを聞て、其身にをよびがたきことをうらやみもさむべからずと、漁翁のかたりし、

（四十八）秋の夜の長きをくるしみ、人々よりあひでんがくをあぶりてなぐさみけるが、何にてもはね字をつゞけて、いひ次第いくくしなり共食べしとさためしに、なんばんもんめんさんだんはんとて、七くし取人あり、又ある人、せんあんきんへんもんあんはんきんかんまんきんたんゐんしんさいひつゝ、十四串とりてくひけるに、はやのこりずくなになりければ、みな〳〵口はうごめけ共、いひえざるところに、はんねんつんるんべんとて、五くしくはんとす、みな人大笑して申けるは、なこそはねつるべなれ、字は一字もはね字なしといひければ、又一人すゝみ出て、そこのき給へ、あんじ出したるといふをきけば、ぢやんうんすんとて三くし食けるこそ、又なきをかしき事なれ、

（四十九）もろこしには風流なる事あり、ある酒屋の門にくれなゐの吹ぬきに、日本のなぞ〳〵のやうなる事をかきつけて、人のさとりてゆく時、酒をふるまふとなり、その詩にいはく、

時程來レ此有ニ美酒一

といふ句を、一字をわけて詩の一句となして、彼のぼりに書つけて門に出してをくとなり、其詩にいはく、

日邊有レ寺 時の字也　　千八口王 程の字也

雨人上レ木 來の字也　　七山相双 此の字也

十月半斜 有の字也　　火燒ニ辛死一（◎尾カ）美の字也

水邊有レ酉 酒の字也

（五十）東福寺の徹書記は定家の再來なりしとかや、其故を聞しに、書記京なる歌友達の方へ齋に出られけるに、雪いとおもしろくふりければ、五條の橋にやすらひ、四方山をながめて一しゆよめり、

とびきへて雲井はるかにゆくさぎの

をのが羽こぼすゆきのあけぼの

とよめりて、おもしろくおもひて、料紙を借て書きつけ、京へ出でゝ見せばやさ道すがら吟行しけるに、京なる人明日は書記御出とて少まどろむ處に、夢のうちに定家來て歌を給はる、其歌書記のよめるなりし

に、ていしゆ此むさうをよろこび、あくるをまちかねてかきつけ、書記をおそしとまつ、書記きたつて門に入とひとしく、むさうの物がたりをする、書記ふしぎにおもひて、かきつけたまひし歌をとりいだし、むさうの歌とくらべ見れば、てにはがひとつちがはざりしこそふしぎなれ、ていしゆも奇異のおもひをなしけるとなり、これより世々に定家の再来は書記なりとつたへしなり、

百物語巻之上終

百物語巻之下

(一)五山の喝食、連句に心を入て他事なし、さる人いふやうは、ちごかつしきなどは、又やはらかなる道をも御がくもんありたるよし、ちと歌學をもなされよかしといさめければ、われらが家の詩連句からは、歌はならはずとてもよむべしといはれけるに、さるかたより歌を一首送ける、

君をのみ戀こがれたるたづさみに
かと田にいでてねぜりをぞつむ

喝食返歌

われしらみふなあぶりたるあしもつり
せごのはたけでごぼうひきぬく

とせられけれこそおかしけれ、此返歌なにともがてんゆかず、みなれんくのほうにて返歌しければ、心はつうせず、たゞ字をのみつけたり、をかしかりし言の葉なり、まことにいにしへ人のいひをきし、詩作の連句はのびすぎてどんなり、連句しの詩はりこうすぎてどんなりといひしも、さもあらんかし、

(二)ある寺の御坊へ、はるといふ女だんななりけるが、親のばだひとして、白かたびら一つ御坊へ遣しけるに、出入りものによくふかき女ありけるが、をのれが小女をあまになし〻が、しろきかたびらなく候まま、申かね候へども、さきほどのかたびらつかはされよといひげれば、御坊よめる、

春くれてなつきよよといふしろたえの
　　ころもほしがるあまのかゝさま

(三)蛸藥師のほとりにある寺に、藥鑵にてたこをゆでられしに、折ふしだんな參りて、爐のほとりに火せせりして咄しゐけるに、やくわんにはかに煮あがりしを、旦那ふたをとりて見ればたこありけり、肝をけし、御坊此やくはんにたこが御座候と申ければ、扨々此間の渇水に當寺の水きれ、たこやくしの水をもらいしが、さては神體があがらせたまふかと驚きたる體にて、あらもつたいなし、此方へくだされよとて、めんぞうへおさめられしぞ、よき答話なりしと也、

(四)山もとのやつこ、山椒を買けるに、商人色々取いだし見せけれ共、何れもからくはなしとてくひちらしければ、賣手はらをたて、おみは人をなぶるか、此山椒からくなくば一斤ふるまふといふ、やつこくふて見せんとてひた物くひければ、なにかはたまるべきむせいりけるが、ものもいひえずはしりてかへりしに、道にてふと思ひ出でけるは、山椒にむせてはあかゞねにかぶりつきてなをるとや、あかゞねがほししと思ふ所へ、あたまのきんかんなる人來りければ、やくはんうりと心得て、かのきんかんあたまへぽかとくひつく、此人はらをたて、にくきやつとてひしとつかまへける、やつこ申けるは、我ら山椒にむせ、あかゞねかと存じかくのしあわせ、御ゆるしあれといへ共きかず、一腰に手をかけちまなこになる、町衆あつかひけるは、御かんにんあれ、にくき事ながらゐやうぐいにてもなし、くすりぐひにて候まゝ御かんにん有るべしと、口々にいひければ、どつとわらひてさりぬ、

(五)ある人江戸へ下向するとて、はこねやまにてよめる、

はこねぢのしり又しりをこえへつゝ
　　ひつたくだりにはてはむさし野

又幽齋のよめるは、

しりのぼりまたたに〳〵をへめぐりて
にり〳〵くだるはこね山かな

(六)京わらはほどいたづらなるものはあらじ、ある時ゐなか山ぶし、あたご山へ參詣のみちにて、六尺あまりの太刀をほりだし、祈禱刀にせんとよろこび、かの太刀をはきすまし京堀川を通りしに、さても〳〵と見る人わらひけるが、わかきもの共山ぶしのそばへつか〳〵とはしりより、一人は太刀のつかへかたを入、今一人はこじりへかたを入て、かの山ぶしをになひすましてほり川へ捨ける、山臥あきれはてゝうごく〳〵と川よりはいあがり、扨も〳〵、みやこは目はづかしといひしをいまこそおもひしりぬとて、こしを引てかへりしと也、

(七)ばくちうち打まけて、あかはだかになれるもの二人ありしが、因幡堂へまいりて、藥師へりうぐはんし申けるは、われら二人ばくちに打まけ、はだかにて候へばさむさたへがたし、衣をあたへてたび給へといのりて通夜をしけるに、御夢想ありけるは、なんぢ申所ふびんなれ共、ころもをあたへがたし、先こよひは此だうの下に、犬の子四五ひき有べし、是を腹にのせてさむさをたすかるべしと有ければ、二人づれにてたづねしに、一人は三びきたづね出す、一人は二つたづね出し、御夢想の通にはらの上に犬の子をのせ夜さむをしのぎしが、一人いふやうは、是にてもあさがさむし、いざ此方の二疋を其方へやるか、又其方のをこなたへとるか、一方へかたつけんといふ、一だんとてはやさいを出しける、かゝるあさましき身となりはてゝも、博奕のきざしやまざる事を、藥師しめし給はんとて犬子をあたへしなれば、兩人さい取出ししが、きつと思ひつゞけ、かくあさましき上にも、其方我等いまだ此こゝろざし出るよと、いひてやみしと也、

(八)山寺の小兒は、いにしへよりさかしきものといひつたへし、ある時ちごひだるさにはかりけるは、下腹いたむとてふせりしに、さる人申けるは、柚をやきてまいれとて柚をあたへぬ、ちごおきかへり、扨も扨もよき藥かな、下腹の事はをきて上腹までなをりしと申された、

(九)花見にかれりけるに、かへるさを忘れしかば、月東山にかゝやき花にえいじて、一入ながめもまさ

りけるに、みな人此夕に一首なくてはとて案じける に、一句も出ず、其の邊にやせぼうし一人たゝずみあ りき、花をながめしに、皆人おかしくおもひ、御坊一 句なきかといひけるに、われらがやうなるものなに か申べし、をの〳〵の御句聞申たしといふに、いざよ びてなぶりものにせんと、これへ〳〵と申ければ、法 師もむしろへよぢ上り、我等が句はづかしながら申 候はんといふ、しかるべしとてすゞりをならし書付 るに、かの法師の句にいはく、

出見花林夜月と御書下されよといへば、みな人こ れを聞て、うたにあらず詩にもあらず、句にてもなし と口々につぶやき、ひやうまづきてほめそやし、腹 をかゝへてわらひけるに、此法師申やう、まづ左様に 御わらひあらずとも御つけなされよといふ、いかに しても此句はなにやらんしれずといふ、よみに御よ みあれといふによめりければ、

出て見よはなのはやしのよるの月

と吟じ出して、人みなよこ手をはたと打、さて御名は なにと仕らんといふに、名もなきものといはれけれ ども、ゆるさゞりしかば、紹とばかりあそばされよと いふ、此下をせひといひければ、その義ならば其紹の 字の下に巴と書て給といへば、みな人肝をつぶし、虚 空ににげちらしけると也、

(十)ある時宗祇法眼石山寺にさんけいして、湖水を ながめ給ひしに、折ふしほたるのとびきたりて、見ぎ はのうきぐさにとまりしかば、一句

萍に火いけみづのほたるかな

とありて、ことの外じまんせられければ、くはんをん はをかしくおぼしけるにや、いづくともなく童子一 人來て、此句にてはほたるが死にぼたるなりとわら ひて、

萍に火をうつなみのほたるかな

と云、かくこそはよけれ、右の歌にては螢をつけ火に たとふるは、螢めいわく也といひて、かきけすやうに 失けるとぞ、

(十一)相國寺の横川和尚はめいよの作者なりしと 也、ある時若王寺へ花見にまかれりとて、あそばされ しとかや、

若王花世界とあそばし、殊のほか御じまんありけ れば、鼻が一尺ほど高くなりたまふたと、人みな申け

る處に、虚空に聲あつて對句をいたしける、其對句に

富士雪乾坤、

名譽の句なり、天狗やしつらんと、人みな奇異の思をなしけるとぞ、

(十二)さるぬす人、屋尻をきりてしのびいり、すのこの下へ身をひそめてはいりゐけるが、夜もはやあけがたになれ共、亭主いねざりければ、此ぬす人持病に疝氣をもちしが、下びへにてやおこりけん、地もひゞくばかりにうめき出す、亭主きもをつぶし、たいまつをともしみければぬす人なり、にくきやつかなと、うたんとすれば、ぬす人手をすり、ゆるし給へといふ、ていしゆじひ心深き人なれば、先一命をたすけゝるに、ぬす人よしをかたりければ、みな人大わらひして去に、ぬす人の云、湯をひとつ給はれといふに、のませてかへしけるとかや、是よりしてぬす人におゆとは申しつたへしと也、

(十三)ある人うつけたる子を一人持けるが、あきなひをさせけるに、まづ異見をいたしける、何事もゆだんなく精を出すべし、又そのれがやうなるうつけにはうそがおほし、よろづいつはりなくたしなみ、月々に算用を仕りきかせよといひ付けるに、彼うつけ他事なくあきなひをしけるが、扨つごもりに親さんやうをきくに、一文も利なく又そんもなし、これはなに事ぞといへば、いつはりなくと仰られしにより、百文に買し物は百文になければうらずといひけり、親はらを立、扨もりちぎすぎたるうつけかなと樣々異見し、商人はそらねなくてはかなはじ、物ごとにそらねいひてりとくを見べしと申ければ、よくがつてん仕たりとて、みせだなへ出けるところへ、ひきやくと見えしものはしり來て、かのうつけを人と思ひ、いかにや此町にのみやの彦右衞門といふ人やあるとたづねければ、此二町下なりと申、ひきやく過分なりとてはしり行、彼もい大聲出してよびかへす時に、ひきやくはしりかへる、此下の町にて候と申、又はしりゆけば又よびかへす、飛脚はらを立て、其方は我をなぶるかといへば、やすけれ共まけて參らする、つまる所は此となりにて候と申ければ、ひきやくはらを立ければ、いやおやじの仰らるゝ事は、あきなひは何にもそらねをいへとていからるゝゆへ、扨其方へもそらね申候といへば、飛脚も笑てさりぬ、

(十四)五山にはよろづの事きやしや風流をたしなむといへり、錢を何百文といふことを異名をつけていふ也、

百　文　一指　一指は天龍一指禪といふより名付しと也、
二百文　黃鶴　黃鸝は兩个黃鸝鳴翠柳と云より名付也、
三百文　木毬　木毬は雪峰の木毬とて手まり也、參徒來れば木毬を三つなげ出すにてつけたりしと也、
五百文　煙景　煙景は五湖といふにつけしと也、五湖煙景有誰爭といふ句あり、
壹貫文　圓相　圓相是一圓相也一貫也、圓きによりてかく付たり、

かくのごとき異名をつけつゝいへり、風流なることとさる人の云也、

(十五)ある人の川むかひに喧嘩の有りけるを見物する、其中におどけ人ありて、川むかひのけんくははうつるものなりといふ、又一人申か、尤ひせんがさも出物なればうつる、喧嘩も出物なればうつることも有べしと、二人ひたものたはごといひければ、かたはらなる人きゝて、喧嘩(◎にカ)がうつると云ことやある、たはけたことをいふものありといへば、そこなやつは人のたはぶれにいふことをたはけとは何といふ、をのれがことではなし、いらざる惡口ぬかすと、はや色をかひていひければ、そばなる人それ〳〵はや喧嘩がうつりたといひければ、兩方共にうちわらひてさりぬ、

(十六)徹書記の頃はことの外亂世なりしに、書記たはぶれに歌をよみ給ひしにより、さすらひ給ふと也、其歌に

中々に見ぬもろこしの鳥は出じ
　桐の葉おとせあきの夜の月

此うたの心は、いまの世のまつりごとあしきにより、世がみだれし、禁裏にうへ置桐は鳳凰の來儀をまたんためなるに、此やうなるまつりごとにては、ほうわうのくるねんはなし、桐の葉を打落して、秋の月をさはりなくながめたるがよし、みぬもろこしの鳥とは鳳凰のことなり、此歌のそこ心は君をそしれる歌なるにより、さそらひしとなり、さるほどに書記の謫處へ歌友達共見まひけるに、七月十四日によみし歌とてかたり給ひし歌に、

中々になき玉ならばふるさとに
　かへらむものをけふの夕ぐれ

此歌の心は、命あるがつれなし、死たらばしやうりやうになりて、此夕にはかへるべきものをと、ふる里を戀しく思ひつる心ざし、いとあはれふかし、扨此歌禁

裏へきこへしかば、あはれにおぼしめして、めしかへされけるとなり、いとやさしき事共也、

(十七)ある人のかたりしは、いにしへより春秋のあらそひおほし、春がよし秋がよしといろ〳〵にいひをきし中に、源氏物語の歌に

春はたゞはなのひとへにさくばかり
ものゝあはれは秋ぞまされる

又ある歌に

おほかたの秋にこゝろはよせぬれど
花見るときはいづれともなし

かく思ひ〳〵にいへる、つれ〴〵にいひし如く、折にふれば興により、いづれの時をかすつべきや、又四序のながめ、いづれをか捨べきかたなしとてよめる歌、

心うつるなさけいづれとわけかねつ
花ほとゝぎすつきゆきのとき

(十八)ある人の語しは、からには日本のごとくにさくらを賞翫せざるやらん、おほき詩文の中にも桃櫻などゝつゞけてはあり、櫻とばかりある詩は一首もなきとなり、山櫻といふ題にて王荊公がつくりしを、一首いづかたにても賞翫する也、これのみにてさらに一首もなきと博學の人のかたりし、此山櫻の詩が日本の山櫻の歌の心に能相應じたると也、よくおぼへてをくべき詩也と人の仰られしとかや、其詩は

山櫻抱石映松枝　比並餘花發最遲
賴有春風嫌寂寞　吹香渡水報人知

(十九)ある人語りしは、人は正直なるがよし、日月のあわれみをかうぶるといひをきしもさる事なり、天ぢくの事なるとや、商人に耳つぶれたる人ありしが、ともの商人の都より歸りけるに、今ほど都へはなにがむき候べし、をしへ給へと問しに、何にてもびく次第なりといひて耳を敎ければ、かたりしことは聞えず、耳をゝしへにより、みゝに似たる物をあきなひ物にせよと心得て、くさびらのたぐひをおほくこしらへ、都へのぼりければ、折ふし大王の崩御にて、一國中に魚肉をたちければ、思ひのほか利徳をえたるといへり、誠に人は正直なるがよしとぞ、

(二十)むかしある人、家貧にしてかなしみ暮しけるが、びしやもん天王は福神なるとて、七日參籠申しに、ある夜夢の中につゞみを一てう給るが、夢心に仰られしは、此つゞみ一方をうてばはな高くなる、一方

をうてばもとのごとくになる、名を天狗つゞみといふなり、なんぢにあたふるぞ、才覺をまはしなば福をうべしとてゆめさめける、かの者よろこび、さる大名のとをりしを心あて、かのつゞみを打ければ、大名の鼻一丈ばかりになりければ、是はいかなる奇病ぞやと、さま〴〵療治するに驗なし、彼者立よりなをさんといふ、よろこんで賴みしに、彼者いふやう、此鼻本復し給はゞ黃金千枚給るべしと約束して、又天狗つづみうちければ、もとのごとくになりぬ、其時黃金千枚うけ取て榮華にほこりける、今はつゞみもいらずさてなげければ、鼻高くなる方に物あたりしかば、彼ものゝはな二丈ばかりになり、むかふのはしらにきり〳〵とまきつきて、なに程ひけどもはなれず、皷をなげしばちなれば、彼一方をうてどもなをらず、しかるところにとなりより火事おこりて、はや我家に火つきける、せけ共はなははしらにまきつきはなれず、是非なくはなをひつかきてにげけるとなり、これより時の用にははなさへかくと申傳し、

(廿一)かたゐなかの人、都へ上り風呂へいりけるが、入やうをしらず、人にとはんもはづかしゝ、いかがせんと小風呂のほとりをうとつきしが、よくたち候にはや入給へといひしに、ざくろぶろなれば入てみればむかひに板あり、上の戸をあけんとすればあかず、心得たりと戸のさんをふまへ小風呂の上へ上りし時、湯女ども大きにわらひて見けるところにすべり落に、まあふのけに落けるが、ぬからぬかほにていひけるは、かやうなる入にくき風呂へ入らんより、ねたがましとておきもあがらず、

(廿二)ある人のくせとして、よくねをびれきるものたづねしを見れば、半斤入のさたうをけを上を下へともてかへして、いな事じや、此の中にをきし物がなしとてひしめきける、なにか入をきしといひければ、よぎとふとんとを入をきしと申ける、これはさたうおけなるが、氣もちがふたるかといへば、さたう桶をもちながら、いびきをかきけるとなり、

(廿三)貞德長嘯子の方へ粽を五把をくるとて、よみてつかはしける歌、

ちかきやま　ましがきずまい　きゝながら　こと
とひもせず　はるはすぎぬる

此歌くつかぶりに、ちまきこはまいらるすといふこ

とをよみいれたり、その返歌に長嘯子
ちよふとも　またなをあかで　きゝ度は　これや
はつねや　はつほとゝぎす
此歌もくつかぶりをよめば、ちまきごはもてはやす
となり、いとをかしと人のかたりし、
(廿四)富士の山は三國になき名山なれば、代々の人
讀置し歌、つくりをきし詩かぞふるに遑あらず、其中
に定家家隆のよみしとかやいひ傳し歌、まづ家隆卿
中々に雲ようりうへはいさしらず
みゆるばかりもたかき山かな
定家の歌は
餘の山の高ね〳〵をめぐりきて
富士のすそのにかゝるしら雲
とかや、明の宋京濂が富士山を聞をよびてつくれる
詩は、新選集に一首あり、其詩にいはく、
絕ㇾ入ㇾ層霄ㇾ富士巖　蟠根直壓三州間
六月雪花翻素毳　何處深林覔白鷴
又
紅雲起處是蓬瀛　十二樓臺白玉京
不ㇾ知秦世童男女　還有ㇾ兒孫跨ㇾ鶴行ㇾ

(廿五)夢窓國師嵐山に世をのがれておはせしが、庵
よりけぶりのたちけるに、尊氏將軍狩に御出有しつ
いでに、夢窓の庵へ立よりてよめり、
露の身をあらしの山にをきながら
世にありがほのけぶり立かな
夢窓國師の返歌
世にありとおもはねばこそ露の身を
あらしの山のけぶりとぞなす
かくあそばしければ、尊氏おもしろくおぼしめし、折
折庵へ來り給ひしに、ある時夢窓にごり酒をまいり
ければ、尊氏一しゆ
隱居してこゝろをすますものならば
にごり酒をばいかにのむらん
夢窓御返歌
隱居してのむべきものはにごりざけ
とても此よにすむ身ではなし
(廿六)ある人のかたりけるは、西國のかたはらにた
こおほき所あり、山よせのはか原までたこ來りて人
をくらふと語りければ、其座にめいよのたこくらひ
ありしがいひける、いかなる人くひのたこなり共、柚

酸をかけてみたしといひければ、なにほどすけりと
いふとも、かのたこはくはれまじといへば、食てみせ
んといふ論して、かけにぞしける、扨彼國へ下り、柚
酸をこしにひつ付、かのはか原にしのびゐて、蛸の來
るを待かけしに、折ふし死人ありけるに、いんだうの
長老紫衣を着たりければ、彼もの人くらいのたこな
りと、すはやくいて見せんとてはしりかゝりて、長老
へ柚酸うちかけてあたまへぽかとくらいつく、なに
ものなるとのたまへば、是は都一番のたこくひのな
にがしなり、のがすまじとてかぶりつく、堂宿旦那こ
れをみて、けうがるやつかなとて、さんざんにちやう
ちやくす、彼者おどろき手をとりて申やう、是はみや
こ一番のたこくひにて候が、此所にたこおほしとう
けたまはる、紫衣の色を見てんじて、すはやこれぞと
くひつき候、御免候へ、ある詩にいはく、
咄个入道手轉多　切懸柚酸見如何
作州一味天然別　他禁戒比老釋迦
此詩は天下老和尚一休のほんさくなり、かほどの上
人さへたこにはみだるゝ心なれば、ゆるし給へや人
人よとて、にげて上りけるとぞ、

(廿七)りくつもの有けるが、かいだうをよりごぼう
ごぼうとうりけるを、いかさまかはりたるらん、よび
てみんとてよびけるに、此牛房はいづくのごぼうぞ、
商人申やう、はたごぼうと云ふ、いや淀そうなといへ
ば、何とていつはり申さんといふ、彼りくつもの、は
やいつはりあり、やはたへはこゝもとより五里あり、
其方はよりごぼうといはぬかとてかはざりける、

(廿八)おなじ心なる人、しめやかに物語りして、世の
中のはかなきものおほき中に、石火のひかりいなづ
まのかげなどは、かげろふ夏のせみよりはかなし、あ
さがほの露の間水にふる雪、いづれかあだならぬ、さ
だめなきうき世なりととりどりにいひけるが、是ら
よりもはかなきものが一つありといふ人あり、なに
なるらんといふに、菅原のきみの御歌に

あさがほは名にこそたてれ夕つゆに
きえそふはなの色もみえけれ

との給ひし、そのそのゝ我等よりはかなきものやある
といへば、みな人此歌を吟じて、まことにはかなき身
なりとなみぐだみて立かへりしと也、

(廿九)ある人たばこをすけり、此の人のいはく、たば

ここには十損ありとて、十首の歌をよみながら、ひたのみにのまれける、其歌にいはく、

一まちに火事のゆくもたばこゆへ
わが身のうへとをしはかるべし

二くしたゞ莨のむさのお茶の湯は
火をとりけしてぬるくなりけり

三々にたばこのはいをふきちらし
やけねごたゝみむさくなりけり

四しやひきやく急ぐ使に日を暮し
たばこゆへにぞはなはつきける

五はつとは天下に隠れなきものを
それをやぶりてのむはくせもの

六さいの市にてすこしかふたばこ
ちりがつもりてやまほどのそん

七八をゝきてうき世にすむものが
さのみたばこをのむは見ぐるし

八々ときざむたばこにこかたなや
まくらゆるりのふちはそこねて

九せとしてたばこにすける人毎に
我は持びやうのなをりたといふ

十損のありとはしりてのむからは
たばこにまさるなぐさみはなし

(三十)むかし五山の名ある僧、しのびて月見にゆかんと二人たくみしに、一人はまづさきへ出て、風景よきかたに立より待給ふ、今一人は酒肴せをひて跡より来りたまひて、たはぶれていひし狂句、

重〻重重重重　對句　待〻待待待待

名誉の一對なり、重の字、をもしとよむときは仄也、ぢうところによめば平なり、まつとよむ時は仄なり、かくのごとくなる妙句即時に出ること、たゞ人にはあらじと人の仰せられし、

(卅一)廣澤の月見、今の世にもてあそびしさいへども、いにしへはことに人おほくあつまりけるとなり、あるとき澤にうきくさしげりて、月影水にうつらず、人みなむなしくかへりしに、宗祇も月見に出られけるが、水の上へ杖をなげて、うきくさのばつとのきし時、月の水にうつりしを見て、
うきぐさをかきわけ見れば水に月
こゝにありとはたれもしらまじ

とよめりてふかくまんじ給ひて、此の歌をへぎに書きつけ、いけのほとりにたてゝ、又一首の歌をそへ置ける、

此うたのこゝろはしらじをそらくは

ていか家隆もしやかもだるまも

とよみてをかれしかば、宗祇のまんしんをおかしくおぼしめしけるが、其ほとりに兒のみやとてほこらあり、此ほこらより童子一人出て、われらも歌にそへうたよまんとてよみけるとなり、

しやかだるまていか家隆もしらずせば

歌にはあらでうしのくそかな

(卅二)むかし田舍人はじめて都へ上りしが、めなれぬ事どもおほかりけるとおもしろく思ひて、まづ淸水に參りける、坂にまんぢうをうりけるを見、まんぢうをしらず、なになるやらんとまづ一つかい取、人に名をとはんもゐなからしゝと案じわづらひける、こやすの塔のほとりにて、しかとも見せずこれをなにぞといふに、みやこ人はまんぢうの名をとふにはあらじとさもつかず、それはこやすの塔といひける、中にあんのあるをみて又とふ、中にくろきものあり、これはなにぞとこふ、中なるは地藏なりと申ければ、ゐなかもの、扨も面白名のあるものかなとてくらひけるが、こやすのとうのむまさ、中なる地藏はなをむましと申けると也、

(卅三)浮藏主なる僧のありけるが、盆になれば十一日二日よりおどりけるが、十四日のあさは諸旦那へまいり、つとめをするさほうなれば、此浮藏主おどりあかして、すぐさまにつとめに出しが、去方にてつとめ經をよみ〳〵ねぶり入給ふ、旦那をかしく思ひ、いかに〳〵とおこしければ、まかせてをけらおやごはでんちうじやといひて、ひやうしをうたれしと也、

(卅四)むまれつきそさうなる人有けるが、去方へ行とて、途中にて夕立雨ふりしに、しる人のかたへ立よりからかさをかられけるに、からかさのほとりに箒のありしを取ちがへ、からかさと思ひてさしてゆかれしに、おなじくそゝこしき人ありしが、此人としる人なれば、さても能所にて御めにかゝりたり、われらも其傘の下へ入てたまはれといふ、やすき事なりとて、二人づれにて彼箒をからかさと心得、二三町も行ける、見る人狂人なりとわらひけるもしらざりしに、

一人いひ出す事は、此やうなる夕立には、かささしてもぬるゝ事みやれといへば、いや此かさ先程よりえもりがいたすと申されてがつてんゆかず、むかふよりしる人來て、さてもそさうなる仁かな、それはは丶きなるが、からかさと思はるゝか、そさうなといひし時、きもをつぶし、一しぼりになりて箒をすてゝ、二人共に立わかれしと也、

(卅五)世中の時勢詞をはいかいにしたるとて、百韻人の見せけるに、其中におかしき句ありとてかたるをきけば、

お汁にはよござんせうの辛みにて
　あへものによきあのさまのうど

(卅六)さる禪僧のかたりしは、即心是佛といふ語を、頌につくりしを見侍るに、一の句は即の字を分、二の句は心の字、三の句は是の字を分、四の句は佛の字を分し頌なり、其頌日本の作にてはなしと仰せられし、

有レ節非二手竹一　三星繞二月宮一
一人居二日下一　弗下與二衆人一同上

(卅七)李太白が詩に

呉州如看レ月　千里幸相思

此詩は朝翰といふものが、作州へ行し時の送行なり、呉州へ御下ありても月を御覽あらば、千里をへだつるとも、月はおなじ月なれば、此方の事を思ひ出されよ、此方にも月をながめんとの心なるべし、杜子美の詩にも、

今夜武州月　閨中唯獨看

此詩も武州に妻を置て、たゞひとり此方のことを思ひ出して月をみるらん、我も他州にて月を見れ共、おもひ出すほどにとなげきし詩也、又此國の名歌に

月見ばとちぎりていでし古郷の
　人もやこよひ袖ぬらすらん

とよめる心は、人もや袖ぬらすらんといひしにて、我袖のぬれしはいはずしてしれり、李杜の詩の心によく似たり、名人の心はよく通ずるものなり、惡口なる人は此詩を見て、すぐによめりなどいはんはむげの事也、つらゆきが古今の序は山谷の序より以前なり、古今の序を見て山谷の序をかくべきや、名人の心ざしかなふ故に、古今の序と山谷の序は、筆法すこしもかはらぬなりと人の語りし、

(卅八)山寺に獨法師有けり、ある時きつね來ていひけるは、我此の山に住るきつねなるがつねに飢、御坊は此山にすみ給へども飢給はず、いかなる故ぞやととふ、法師いひけるは、我ら此衣一くはんにて、町へ出れば食物おほしといへば、其衣をわれらに給はれといふ、なんぢが人に見つけられぬじゆつををしへば、衣をあたへんといひければ、やすき事とて、かくれみのをまいらせんとて、古きみのをあたへければ、法師よろこびてすなはち衣をあたへける、老狐よろこび衣をきて町へ出ければ、人これを見て、きつねが衣きたるはと口々にわらひて、こゝかしこへをひまはし、つゐにころされける、法師も彼みのを着してさるくらへ行き、たから物をとらんとするを、人見つけてころしゝとなり、きつねは法師をばかし、法師はきつねをばかし、共にころされし事、兩人畜の悪心なれば、天これを罰し給へり、狐志の倭と云故事也、

(卅九)或人の仰られしは、開元通寶の錢は唐の大宗の時の錢なり、年號にはあらざる也、元を開くといふ心なりと也、玄宗皇帝の開元は年號、かの錢は歐陽恂といふものがこもんにかきて、うらに楊貴妃が爪のあとをいつくるぞ、今日本へわたりてある錢なり、心をつけてみるべし、錢のうらにやうきひの爪あと有也、めづらしき故事なりと人の語りし也、玉海といふ書にあり、

(四十)朝鮮人此國へ來りし時、みな人立出で見物しけるが、扨もめづらしきしやうぞくどもや、こせう衆の衣裳は一樣にあかしと申ければ、去人のいひけるは、こせう衆のあかきはいまさらおどろくべからず、たうごせうはあかきものなりといひし、をかしき秀句なり、

(四十一)貫之のむすめのすみけるそのゝうちに、あうしゆくばいとてかくれなき梅の木有けるに、内裡にきこしめしをよばれ、めし上られけるに、彼女房讀める、

勅なればいともかしこし鶯の
やどはとゝはゞいかゞ答へん

とよみければ、此歌を大きに御感ありて、梅の木をかへし給ふと也、名譽なる歌なりとぞ、

(四十二)家隆定家の方へよみてつかはし給ふ歌、

とにかくに若きは猶もたのみあり

定めなき世に老の身ぞうき

とよみてをくり給へば、定家の返歌

さにかくに老はあまたの年もへつ

定めなき世に若き身ぞうき

(四十三)いにしへはいかいのれんくはやりし時、名人の句とて人のかたりしは、

(雲雁過二雲雁一 (鹿々鳴明鹿

(水魚達二水魚一 (鶉々睡莽鶉

(咄自二口邊一出 (油因二油斷一斷

(睡合二目下一垂上 (火以二火吹一吹

此句ども名譽なる句なり、てほんともなるべきと人の語り給ひて、此狂句のまねをせば、此狂句のごとく成べし、狂人はしれば不レ狂人もはしるといへば、かるき口をまなびば、かるき口ともなるまじやと語り給ひし、

(四十四)むかしもろこしのかたはらに、塞翁とて賢人ありけるが、馬をうしなひし事あり、知音きたりていひけるは、扨も馬をうしなへりと聞きし、笑止やといひければ、思ひのほかによろこびゐける、人ふしぎに思ひしに、其後一兩日へて彼馬かへりしが、まきの島へ行て、よき馬を二三疋ともなひてかへりければ、又其邊の人、扨々馬のかへるのみならず、よき馬おほくともなひ來りよき事やといへば、塞翁なげきかなしむ、人又ふしんをなしゝに、ある時塞翁かの馬にのりて去方へ行とて、此馬くるひければ、落馬いたし腰ぬけになりたり、又あたりのもの落馬をめされせうしやといへば、大きによろこびゐける、人又奇異の思ひをなしゝに、折ふし都にいくさありとて、ざいくに人夫をさしに來りて、みな人なげきかなしみけるに、塞翁落馬にてこしぬけゝれば、人夫にあたらざりけると也、しかる故に惡事あれば又よき事あり、是を人間萬事塞翁馬といへり、此心にて五山のたれとやらんがなされし章句も名譽の句あり、

任他紅葉落　塞馬月林間

此心は紅葉は見事なれども、ちりつくさばそれもよし、又林の葉ども落たらば、月のさはりなくて一段ましといへり、

(四十五)ある人座頭をすきて、毎夜五人十人よびよせ、長あそびをしけるに、下部どもはらをたて、なにとぞ座頭共にあたりて、こぬやうにとたくみて、門の

口によこつちをつりて、あたまをうたするやうにからくみをきしに、あんのごとく座頭來て、あたまをしたゝかにうつ、名譽意地あしきものなれば、又あさにくる座頭にかくさいはず、座頭八人來て八人ながらものいはず、みなかしらのわれるほどうちける、をのれ一人うちては、口惜と思ひける心いづれもあり、さるほどに、れいのながあそびしてかへる時、下部共いひけるは、扨も夜ふけて候、座頭の坊なん時ぞといへば、われら來りし時八つがしら打しまひたり、はや明候はんさいひける、すねもの也とぞ、

(四十六)もろこしに狙公といへる人、猿をおほくかはれしに、色々藝ををしへけるに、其時とちをくはする也、一日に七づゝくはせけるが、朝四つくはせて色のきよくをしへければ、みなさる共よろこびてならふ、暮には又三つくはせける、又朝三つくはせければ、さる共いかりて曲をならはざるさ也、朝暮七つなればおなじことなるに、をろかなるものぞ、世の人の愚癡なるにたとへて莊子がいひしさなり、朝三暮四といふ故事なり、かゝる事猿のみにあらず、人の上におほき事也つゝしむべしと、ある人仰られし、

(四十七)むかしもろこしに何尙之といふものと、顏延之といふものと中よく語りしが、此二人はせいひきくて猿に其のまゝなり、彼もの二人よりあひては、何尙之は顏延之を見て、扨も其方は猿に似たりさわらふ、顏延之は何尙之を見ては、さても其方はよく猿に似たりとたがひにいひあひけるが、或時道を行さて人のとをりしに、二人つれにてとひけるは、此二人が中にどれがさるに似たるとといへば、何尙之をさして此人よく猿に似たりといひて、ことの外わらひけるに、顏延之よろこび、それ見たまへさて、ともにわらひけるに、何尙之のいはく、顏延之のわらわれけるが、扨あの人は何に似たるとさへば、猿には少も似ず、其まゝ猿なりと道行人申ければ、二人共にわらひて歸りけるさ也、蒙求さいふ書にみへたり、萬事是におなじ、人の事をわらひぬれば、人又われをわらふつつしむべしさ也、

(四十八)人の語りしは、身にもをよばぬ事をねがへば、かならず天道これを罰したまふといひて、かたりしは、むかし或人きはめてまづしかりしに、あまりにかなしくおもひて、觀音は福壽界さたのもしくして

通夜をしけるに、あさとくおきてかへるさに、小判とおぼしき物土にうづもれて有ければ、これ御りしやうとよろこんではしりかへりて、大黒棚へあげをきて、あたりの人々をよびあつめ、まづ酒をぞふるまひける、さて福を見てあやからむといへば、たなよりをろしていたゞかせけるに、よく〱みればしんちうの鬢水入のそこなり、みな人興をさまし、扨もそこつの人なりと、どつとわらひてかへりしと也、いかで神佛もえがたきたからをあたへ給はんやと、いとをかしかりける、まづしき身に酒直まで出し事あさまし、

(四十九)さる人の語しは、古鼠數の中にかゞみゐてなげきけるは、世の中に生をうくるものおほき中に、われらほどかなしきものはあらじ、まづねこの食物にそなはり、又人に見つけられてはころされ、一生こそめきにげまはりて、しづかなるまもなし、あらものうやと申ければ、蛙きゝて、御なげきはもつともなるが、われらもかはらぬ身なり、此身はへびのゑじきにそなはり、草ふかき所にすめば人にふみころされ、草なき所に出れば水にかつへ、一生かなしとて二疋共になみだをながし、いざや此身の前生を聞て、後世をいのらんといへば、尤と同じけるが、ねずみ語りけるは、さる寺にていんぐは經を聞しが、鼠の前生は猫なり、ねずみを取とのみ思ふゆへ、ねずみと生れてねこにくはるゝと聞しほどに、其方も前生蛇にて、かへるをのまん〱との一念にて、今又蛙とむまれて、へびにのまれけるとおぼしめせといへば、かへるはきこゆる歌よみなれば、もつともさやうにいんぐわのまはりくる事有べし、去ながらこゝにふしんなる歌あり、きゝて見給へとて、

いにしへの淵が馬にやはまるらん
今また馬がふちにはまれり

と侍し、歌の馬が淵にはまるはことはり也、淵か馬にはまるといへる事なにともがつてん參らずといふに、ねずみしばらく吟じて見れども、淵か馬にはまるとはがつてんゆかず、かやうなる事は、世をのがれつつしづかに暮してあんじば、がつてんまいるべし、いざやとかくよをいとひ申さんと、ねずみは一けんまなかの板屋をたてゝ世をのがれしが、惡念ふかきものなれば、一月こらへず俗になりしゆへ、今に廿日ねずみとて人なをにくむ也、かへるは道心ふかく、姿わ

らのしべにていゐをつくり、あまになりて一生を過せしとなり、いまに子どもまでも、あまがへるどのはいつ死給ひたなどいひて、とぶらはれけると語りし、

（五十）或人の語りしは、あづまのやつこを見侍しが、をとに聞きしに十ばいせり、其たけ六尺あまりのおとこ、大ひげをねぢあげ、まづはだには牛首布のかたびらき、上にはふとぬのゝしぶぞめに、七八百がのりをかい、馬のかわのふと帶しつかとしめ、くまの皮の長ばをり、まつすぐなる大小十もんじにさしこなしたるけしき、身の毛もよだつばかりに候ひしが、去人に名を問ければ、鑓龕兵衞（やりがんひやうゑ）と語りける、さてもめづらしき名みやうじと、其由來をきけば、ある時がん兵衞大名とけんくわをして、敵の大せいなるを打やぶり、あまつさへ敵の鑓をうばい取しにより、鑓と名字つきしとなり、又龕兵衞といふ名は、かゝるたけきやつこなれば、はや死して龕に乘たる心とて、龕兵衞と名づけゝる語りける、

此一部の書工武藤氏寫之

于時萬治貳曆初夏上旬

松長伊右衞門開板

百物語下之卷終

私可多咄序

歌袋の口はあくすべしらず、舞扇の骨はもつ事ならず、もだして酒の席に諂ぬるを、衆人みな酔り、我獨すましがほといはれて、乞やむかしがたりもぞせんと、詞のたねをまくに、根からみなるも有、根なしかづらも有、あるひは都人とかこち、あるひは鄙人とつくる、よみする事は稀に、おとしむる事は繁く、金を黄蘗といふがごとし、凡て無實に似侍れば、誰すら耳のさはる事あり共、偏に罪ゆるしてよ、末廣に傘を出さずしては、興すくなきが故也、酌かはすさゝのたはぶれに竹冠をして、予がひがめる犬の字をくはへ、友にもてあそばしめんとす、あやまつ事は、もとほらぬ舌がなす所と、をしてはかりたうびよ、さればわかちめあざやかならねば、しかたばなしになんしけるを、人の需に應じ、萬治二つの己亥年九月、昔にあつむるものしかなり、

中川喜雲

私可多咄卷之一

○むかし／＼天下泰平におさまり、今此御代の如く國土ゆたかなりしは、百濟國より王仁といふ相人來り、なには津の歌よめるゆへなりとかたれば、一人のいはく、その王仁はつのくにゝ借屋してゐたと見へた、

なにはづにしやく屋此花冬ごもり
いまを春べとしやく屋この花

とつらね侍る也、さて家主はたれぞ、答ていふ、家主は百人一首の中の作者さうな、中納言家持といふが有、又とふ王仁は異國人なるによりて、家を日本でかはせさりしか、答て云、中々の事、そのとをりと聞へた、古き歌に

土も木もわが大君の國なれば
いづくか王仁の宿とさだめん

○むかし／＼遠國に外科有、さる者あざとる藥を給はれと云、外科心えたといへ共、此藥をいかゞせんとあんじわづらひ、かるたの札のそうたとやらんいふ

ものを黒焼きにして、天下一あざとる薬とじまんしてやつた、

○むかしさる者、鹿をくはふかと思ふといへり、友だち聞て、鹿などはあひ火もむざとくはぬもの也、何ゆへさやうにいふぞといへば、くはぬ物といふことをしらずしてひよくといふた、それならばくふまい、別の事でもない、それがしは物いひあしく、はなしににべがないと、さればしゝのにべと云ほどに、しゝをくふたらば、物語にもにべがあらふかと思ふていふた、

○昔さるかたに祝言事有ければ、知行所の百姓來り、だい所のあたりちろめきぬるに、代官する者百姓にむかつて、めでたき折からなれば、なんぢらも悦びませい、是にあるほかいのこはゐをくふか、又折のまんぢうをたべるか、何なり共のぞめといへば、百姓の云、まんぢうはいやでござる、ほうかいの食下されといふた、

○昔ぶせうものゝ貧乏人、くらまのびしやもんをいのれば、富貴になさるゝと聞て、初寅に參り、色々びしやもんを賴み、下向にかならず小判百兩ひらはせて給はれといのり、道すがら小判がおちて有かと思ひ、かなたこなた見まはせば、一文の鐚錢もなし、やどへかへりてびしやもんをのゝしりけるやうは、びしやもんしてくらふほどのものか、それではあつてこそ、

○昔ゐなか人はじめて都にのぼり、さるかたにて歌書の上に獅子の文鎮有りけるを、何といふ物ぞと思ひ、さながらとひもえせずながめゐけるに、あひきやく、さて〳〵しほらしきぶんちんかな、から物はどこやら見事ぢやなどとほめぬるを、ゐなか人きゝて、ぶんちんといふものこそ見覺へたれ、よき事ならひけると心のうちうれしく、とかくしゝのつくばひたるは、ぶんちんといふものと心得て、翌日ぎをんにまゐり、しやだんふしおがみ、こゝかしこ見まはし、きせんぐんじゆの中にてたか〴〵と、さても〳〵是なるはしほらしきぶんちんかな、から物はどこやら見事ぢやとほめぬるを見たれば、御まへなるしゝこまいぬにてあつた、

○昔へんごに外科有、くすりづつみのかきつけは、わが女房にかゝせたり、ある時かさの薬を人につかはすとて、子もちにうはがきをせよといふ、子もちいか

がかくべきぞといへば、それはたうかさの藥なり、はじめての所なれば、ちとこはせ、しよしんにかくな、たうと唐とはおなじ事也、からかさの藥とかけと云、あて所は殿か樣かととふたれば、それも殿やさまなとではうれしうない、何左衛門和尙とかけといふて、すみぐろにかゝせてやつた、

○昔かたおかでらのかねいのくはんじんとて、門に物こふもの有、あるじ出て奉加帳があるか、かたおか寺ならばかねいではあるまい、かめ井であらふ、判官どのゝみうちに、かめ井かたおかと云程にといへば、こたへて、もんだうはむやく、さらばはうぐはん帳に付せられよといふた、

○昔すま寺の靑葉の笛を見て、此寺は、すま寺はかたとであらふ、馬寺がよからふといふもの有、いかにとへば、白馬の節會といふは馬の事じやといふた、さて又すま寺のすまの字をしりたるかといふ、あるものこたへて、いかゞしらぬといへば、それをしらぬかよ、丸の字をかく、いかにといへば、烏丸のすまの字といふた、

○昔かしこうもなきもの有、くはいにんの女䱜をくへば、子がおるゝといふ事を人にならひて、東大寺の良辨いとけなき時、桑の木のもとにてわしのつかみし折ふし、木のねもとをほりていくらの䱜をかうづみ、やがて子がおるゝであらふといふた、

○昔ゐなかものゝ聞書に、かきのさねのくろやきは、まめの藥と有を、かたはらの友だち見とりて、大事の秘方こそ見とり覺へたれとて、かきの實五石ばかりくろやきにして、まめ畠へ入しと也、

○昔聖人、過不及のたがひなくとの給ひし、まことによろづの事は、すぐるもわろく、たらぬもあしく、猿はかしこきものなれ共、毛が三すぢたらずして人に及ならぬと、わらはべ共のいふ、これこそたらずしてあしきせうこなれとかたる、一人のいはく、いかにも其とをり也、すぐるもあしく、其猿の三すぢたらぬ毛が、我等がかたにあまりて有、是こそすぐるはあしきせうこ也といふ、最前の者、その三すぢすぎし毛はとふ、されば其事、たはけ、うつけ、はなけ、此三すぢの毛がすぎたといふた、

○昔馬道具に、しほでと云物はなぜに有ぞ、しほかでもせぬにといふ者有、答て云、鞍に海があるによりて

しほでといふ、
○昔具足のさしもの丶うけつ丶さすものを、がつたりといふ、なぜにがつたりとはいふぞとヽふ者有、答て云、侍は知行をほしがつたり、手からをしたがつたり、いのちをおしがつたり、
○むかし人々手かゞ見を見るに、こうぼう大しのきれおしたる所をしばらくながめゐて、扨も〳〵見事な弘法でないかとほめければ、そばなる者、眞言宗の過去帳はいかい物じやといふた、
○昔おさなきもの井戸へおちければ、たはけたる男あつまりて、いかりにてあげふとする、今一人がいひけるは、いかりよりは馬おひをやとふてきてあげさせふといふ、それはいか成事ぞといへば、馬おひはいつもこあげにゆくといふほどに、子あぐる事がじやうずであらふといふた、
○むかしへんどにそこつなるいしや有、隣郷にとしはたちばかりのかねつけたる男わづらひ、はちまきして打ふし、かのいしやにはじめてあひ、脉をとらせけるに、いしやひぢをいかつにして、脉をうかゞひすみて病人にいふやうは、此ほど月のさはりはあるか、とゞこほるかとヽふ、病人これをきヽて、それがしはおとこなり、男に月のさはりはめづらしいといふ、いしやなむ三ぼうと思ひ、其方のおはぐろつけてゐらるヽほどに、おなごかと思ふた、おとこならば男とはじめからなのりたいものではないかといふて、いとまごひなしににげた、
○昔鴻といふ鳥をくへば、子のなき女ははらむといふ事を聞はつりたるいしや有、友だちのやせ藪をみて、竹のねへ鴻をうづめ、子ができようと眞實からいふた、古より藪醫者といふは此事なるべし、
○昔遠國のもの二人都にのぼり、冠のゑいばかり有をみて、一人のいはく、是は天人の羽衣であらふといふ、今一人の者、それは天ぐのはねであらふといふ、兩人せんさくしながら、その事となくだいり見にゆかんとて、ついぢのぐるりをとほりゐるに、參内の公家衆こヽよりおりさせらるヽを見て、かのせんさくのゑいおなじ事なれば、ぜひをたゞさんと、ひそかに供のものにとふやうは、今のこヽより出させられたは何といふぞとヽふ、供の者わしのおどのさこたへたれば、かの二人いふやうは、天ぐのはねでもはごろ

もでもなかつた、わしのおじやといふた、
○昔くげの御うちに、きりといふ下女有、をのがもちいんとていはしをやきけるに、中居の女これをみて、わがためかと思ひ、そのむらさきをはやうといへば、きりをのがくふべきためなれば、返事をもせざりけるに、中居のをんな、げんじの題號をけがして、そこなきんつんぼといひたたりければ、きりこれをきゝて、わがむらさきとこたへし、
○昔藤原の實方といふ人は、殿上にて行成のかんぶりを打おとせしとがにより、さすらへのかなしさ、そのたましゐすゞめとなりて、二たび臺ばん所のいひを願はれしといへば、一人のいはく、そのいひをねがはれしすゞめは、ゐふなではなかりけるか、ふくしまといふ所のゐふなずしは、はらがみないひじや、
○昔何ものゝ子どもやらん、たかうち板をみて一人のいふは、是ほどな小判があらばよからふといへば、今一人のいふは、ほんのこばんでなく共、せめておこし米でかんにんせう、
○むかし大學の序を、わらはべのふくするをきゝて、さるもの、あのものゝ本は、すゞりのすみの事をかきたる物か、いかにといふに、人にをしゆるゆへんのはう也とある、
○むかし三體詩のせつくは、いぬの事をかきたるものか、たうけんとよみ出すほどにといふた、
○昔ではの湯殿より出たる者と、あふみの甲賀の者と、かんざきの舟にのり合ける事有、せんどうふなちんをとらふといへば、ゆどのゝ者いふやうは、それがしはゆどのより出たれば、せつちんの事はしらず、是なるかうがの人にせんちんの義はとへといふ、せんどうきゝて、其方はやさしや秀句らしき事を云、せひに不レ及、せつちんがなくば丸にゆるしてやるぞ、
○昔たかさごのぜうとうばは、あその宮のかんぬしを頼み、ほうこうをかせがれたり、さと人をあひまつ所に、らうにん夫婦きたれりとある、それまでうばはくげがたにゐられたやらん、是なるうばこそたうしよの人なれと有といふた、
○むかしいかなるものゝふも、さいごにはなみだの雨がふると見へた、さしものきよつねさへ、さいごにはなみだの雨がふりて、あまだうふくをきて死なれたか、いかにといふに、ふねよりかつばとおちしほの

とあるといふた、
○昔げんぴんそうづのなを、はじめは三ゐもんといふか、三輪に、さんゐもんに入てをせ共出ずとある、其後又名をかへ市右衛門といふか、御ころもをいちゐ給はり候へと有ほどに、
○昔大もつのうらにて、よしつねよりしづかへ、べんげいに文をもたせてつかはされしと見へた、辨慶がこう上にも、わが君の御ぢやうにはとある、扨其文は尊圓流のしゆせきか、しづかゞとばに、かくそんゐいのいつはりなくばといふほどに、
○昔なまくさき出家と、山ぶしと、うらやさんと、じゆんれいと、のりこみの舟に遊女をよび、しゆえんして、いざさらばめん／＼の身の上の事を、一きよくづつかなて、あそばんとて、まづ遊女、うたへや／＼うたかたの、あはれむかしのこひしさを、今もゆふぢよのふなあそび、世をわたる一ふしを、うたひていざやあそばんと、江口をうたふたり、次に山ぶし、うち見には／＼おそろしげなれど、なれてつほいは山ぶしと、大江山をうたふ、次にうらやさん、あべのやすなりうらなつて、かんじやうに申やうと、せつしやう石をうたうふた、次にじゆんれい、こと／″＼くじゆんれいのしんろに、ぬさをさゝげつゝと、しゆんくはんをうたひし、次になまぐさしゆつけ、ひまなくうをゝくふ時は、つみもむくひも後の世も、わすれはてゝおもしろやと、うがひをうたひければ、座中より此うたひのもんく出家にあはす、今一ふしといへば、むつかしの僧のけうけや／＼と、そとば小町をうたふ、此船中のあそびを、よその船よりきゝてうたひかける、ふねこぞりてせばく共のせさせ給へわたしもり、さりとてはのせてたび給へと、すみだ川をうたふたれば、せんどうこれを聞て、舟をばいかでおしむべき、とくとく召れ候へ／＼と、かねひらをうたへば、今一人のせんどう、ふねもこがれて出らん、舟人もこがれいづらんと、三井寺をうたふ、其後をの／＼こゝろをそろへ、同じ舟になれ衣と、ちくぶしまをうたふたるは、まことに興有し也、
○むかしぐそくびつのかき付に、前とかきたるをみて、これはおしきばこか、前とかきつけあるといふた
○むかしなまじゐにものしりがほして、ある墓所の碑の銘見るものあり、その文に長谷川石見忠堅と云

ふ有りければ、長谷の河石みればたゞかたしとよみたり、
○昔宇治にて、茶の手はじめの日をえらぶ折ふし、さるもの、それはうしの日がよい、こよみにうしの日はつめとるによしとある、
○昔つの國つゞみが瀧は、大づゝみじやといふ者有、又小つゞみじやといふもの有、いかゞとゝへば、小つゞみといふものこたへて、たきの水も肩へかゝるほどに小つゝみ也と云ふ、又大つゞみといふもの、いやひざへかゝるほどにといふ、さるもの聞きて、我らはたいこかとおもふ、なぜに、どんなあらそひになるほどに、
○昔遠國より法橋のぞむいしや都にのぼり、したしき友だちを頼み、まづちしや刀をもとめたいといふ、友だち聞て、其方は醫官をのぞむほどのものが、ちしや刀などとかたごとをいふものかといへば、いしやのいはく、我等のやう成物しりのさす刀なる程に、ちしや刀といひてもくるしかるまいと重てつくした、
○昔先例の口宣年號月日はいつなどといへるをきゝて、さるもの、くせんとは何の事にてかあらんと人にもとはず、わが心にふしんして、いかさま月日のせんさくが有ほどに、こよみに有べしと思ひ、くりかへしくりかへしこよみをみて、あげくのはてに、こよみにも八せんはあるが、くせんの事はないといふた、
○昔ゐなかにての事なりしが、やさしきもの有て、綸旨あそばす紙を宿紙といふげな、あはれ此しゆくしのしさいをきかまほしけれ共、都へのつてもなく、とふべきたよりあらざるゆへ、同じ村にいしや有、これにとふべしとて、御所にあるしゆくしの事うけ給はりたきとかきてつかはしたれば、その返事に、しゆくしとは御所にかぎらず、しぶかきにてもよくうみたるをじゆくしといふ也とをしへた、
○昔かたゐなかに、上々のきゝてをあつめて、自見につれづれ草をかうしやくするもの有、稽康も山澤にあそびて、魚鳥を見れば心たのしむといふだんをよむに、魚鳥の二つをれうけんしていはく、けいかうほどの者が、むざとしたるうをとりはたのしむまじ、さだめてとりはつるの事なるべし、うをはふくたうであらふといふた、
○むかしいもほりばうずのかたへ、さる所より文來

れり、うは書をまづ人によみてもらふに、樣とあるか殿とあるかととふ、よむものいや老とあるといへば、中々にくい事じや、らうとはきこへぬ、せめてあがりや共なふてとのゝしる、

○昔もちにあづき入てにたるを、ぜんざいもちといふはいかゞととふもの有、こたへていはく、じんざいもちといふ事也、十月朔日にいづもの大やしろへかくの如きのもちをそなふるとなり、されば神在もちとかくと、神職たる人の子のいとけなきが物語をきゝし也、たしかにはしらず、

○昔ねぢもちにあづきの付たるを、しんこといふはいかゞととふ者有、こたへていはく、しんかうといふ也、其心は夜のふくるをしんかうといふ、さればあづきをあかつきたるもちなれば、しんかうといふなるべし、

○昔十炷香の座にまじはりたる者有、札をとりてそばなる人にとふやうは、是は一をつゞけてもくるしからぬかといへば、中々其方の心しだい、三枚ながらなり共つゞけられよといふ、心得たるとて其者上座をして、我手まへゝ火もとより香爐がくると、そのまま人々のまん中へ、一のふだ三枚ながらなげ出し、次の人に二こふだといふた、

○むかしかぶきの子供をあつめ、源氏酒しけるに、名をなにとやらんいひしかぶきの子、さかづきうけもちて、をとめにさゝんといふ事を、緒留にさしませうといふた、

○昔のり物かくおとこを六尺といふは、いかなるゆへぞととふ者あり、こたへていはく、のり物の棒は一丈二尺の物也、それを二人してかたぐるにより、二つにわれば六尺也、

○昔かたゐなかに外科有、わが女ばうにれうぢ本をよませて、藥をてうがふせり、ある時かうやくをねるべしとて、こもちをたのみ書物をよみてもらふ、なに唐蠟一斤とよむ、おつときゝて、たうらうとはかなまきりの事也といひて、數萬のかまきりをころして、かうやくにいれた、

○昔口のはた黄なる男、なまじゐにひらいがくもんして、人をせゝりたがる者有、いづれも外科といふものは、れうぢばかりに精を入、學文はなきものかと思(◎とか)る、ちとなぶるべしにて、いにしへより其方のやうな

る瘡瘍科の上手はたれぞとこはしてとひけるに、外科こたへて、東垣丹溪薛己などいふ人、それがしのごとく名人なりといふ、男聞て、たんけいといふは佛師かと思ひ、さて〳〵たんけいは一色に上手なれば、よろづに名人と見へた、それは第一佛つくる事が上手であつたといふ、外科かたはらをか〻へて、扨こそなぶりかへさんと思ひ、其事々々、佛つくる事や外科ばかりではなかつた、火とぼすものめづらしくしいだされたるにより、すなはち其器をたんけいといふといへば、おとこあんどんもたんけいのさくいかとしんじつからとふた、まことに人をなぶりだてするによりて、かへりて我がつながる〻、

○昔つるのはしやうの物かたげて、井のもと〳〵といひありくもの有、わかきおのこ共聞てよびよせ、ちとなぶるべしと思ゐ、井のもとほりをまねきいふやう、れうそく一錢がゐのもとをそこへあてがへといふ、井のもとほり心得たるとて、庭へくわをひとつうちたてつちをはねおこし、これが一錢が井のもと也と、ねだりながらなぶりかへした、

○昔先祖の年忌に僧俗よびあつめ、齋の調菜に、しるにもふ、にものにもふ、さしみにもふ、さかなにもふを出したれば、俗の中よりいふやうは、僧衆の御經をとらや〳〵とよませらる〻ゆへ、ふがたくさんなといふ、僧のいはく、いやさやうではない、わうじやうもふのもの也といはれし、

○昔さるかたへ、いつぞやかしたる碁盤をか〻し給はれとかきてやりければ、さきのもの大きにはらをたて、これは何たるむじつをいひかくるぞ、さらにおぼえなしといふ、そのふみをせんさくして見たれば、かなにてごばんとかきたるを、小判かへせとよみたゆへなり、

○昔ゐなかもの都の町をとをりけるに、藤屋花屋とのうれんにかきてならびたる家有、此二けんののうれんをつく〴〵とみて、此家主はしなの〻國あそう殿の内衆か、とうろくげろくとのうれんにかきてあるといふ、つれだちける者、とうろくげろくとはいかにとへば、藤はとうのこゑ花はげのこゑとこたふ、さて屋の字を六とはいかにと〻へば、大德寺の春屋(しゆんをく)のろくの字とこたへた、

○昔いの字と八の字はおなじ事かとゝふもの有、さ

るものこたへて、字はおなじ事なれ共、ひまなる時にかきたるは八とよみ、いそがしき時にかきたるはいとよむとをしゆ、

○昔いなかもの都にのぼり、おさなきものに文をかきてもらふ、其もんごんに、先年といふ事、このむせんねんといふもじいかゞかくぞととへば、いなかものいふやうは、其方は京にゐながら、三條にあるせんぐはんじのせんの字と、四條の下にあるけんねんじのねんの字さへしらぬか、ふたつとり合てせんねんとかゝしませといふた、

○昔渡唐の天神のゑをみて、さるもの、あのこしにさげさせられた、きんちやくのやうな物は何ぞととふ、答ていはく、あれは聖一國師のむさうに見へさせられ、無準よりの印可をいれさせられたるゐんかぶくろといふ物じやといへば、いや〳〵それではあるまい、あの天神はたびをあそばしたほどに、たび人のもつでうづぶくろであらふ、いかにとなれば、さいふの天神といふほどに、

○昔はじめて茶のゆに行もの有、友だち聞て、茶のゆには色々むづかしき時宜あり、けいはくながらもいはねばならず、とかく上座と下座はむづかしきほどに、何とぞして人々のまん中にゐるやうにせよとをしへたれば、心得たるとてならひ覺へ、すきやへはいりぬる頃、四方を見あはせいろりのそばのまん中になをりけるに、意地のわろきあいきやく共にて、何ともいはずだまりければ、亭主見て、中の〳〵のごばうたちはなぜにせいがひくいぞと云た、

○昔べんけいかゆのこくひたるといふ事、いにしへより世にいひふれたり、しかるにいつの頃にや有けん、ゐなか人都にのぼり、茶の湯の道具など出したる町をとをり、是は〳〵べんけいかゆのこすくひであらふといふを、何ぞと見たれば、いろりのそこどりにてあつた、

○むかしひよくの鳥の物がたりするもの有、此鳥は二羽つばさをならべて、そらをかけると見へたなどといへば、其座にうそつきゐあはせていひけるは、われらはその鳥をいつぞやら見たがわすれた、又それに似たうをゝ能登の國の海にて見た、一疋のうをのあたまへ今一疋のかしらをさしこみて、二疋ならびてありく、すなはち七月にもちゆるさしさばの事じ

や、海にてあのさしさばのひらり〳〵とありくを、みぬ衆に見せたい事じや、

○昔いたら貝は、海ある時はいかやうにしてとるぞととひければ、うそつきこたへていふ、あのかひじやくしほど海にて取やすき物はない、竹の柄の所をとらゆるといふた、

○昔老たる侍のいふは、刀の小尻と僞とはおなじ事也と、それはいかなる心ぞといへば、あとからはへるとこたへし、

○昔物なれたる侍のいふは、たびをする時は錐を持たるがよしと也、氣づかいなるとまりにては、めしあはせの戸に内より錐をもみこみて、ねるようじんのためなり、又ふだんのねまきはうらおもてなしに、雨めんよしと也、俄の事にをき出る時、たとひうらをきてもくるしからぬため也、

○むかし白衣といふ時宜のことばはいかゞといふもの有、老僧のこたへていへるは、是は佛者より出たることばなり、法師の衣服は白きをもちひ、そのうへにすみぞめの衣をきる是禮なり、されば無禮の時は上の黒衣をぬぎて白衣になるゆへ、無禮といはんためびやくゑといふ、それをあまねく俗體にも用るといはれし也、

○むかし大坂一戰のきざみ、おさなき者共あつまり、此城はいかやうにしてとらせらるゝぞといふ、こたへて云、運に乗じて軍法にてとらせるゝ、それぐんぽうは海底のうをゝ、つりばりでとるはかりごとゝ同じ事なりといへば、此しろほどの物に何のぐんぽうもうんもいらふぞ、手づかみにしたがよいといふ、それはきものふとい事をいふといへば、其方のいひぶんは大坂のしろの事なるべし、我等がいふはこのしろと云うをの事じやといひてわらはせた、

私可多咄巻之一 終

私可多咄卷之二

〽

○むかし〳〵、天神の御なのりは世にしる人まれなり、さうでんある事とやらんなれば、たしかなる事はしられね共、そばつらきゝうけし御ゑいかに、

心だにまことの道にかなひなば
　いのらずとても神や守らん

との給はせたれば、眞道この兩字を御名のりによみやうあるかとをしみはかるといへば、さるもの、いやさやうではあるまじ、天神の御なのりは御ことふなり、むさうのれん歌の懷紙に、いづれも御とあるといふた、

○むかし〳〵、きやうげんの番ぐみにいぐゐと有を見て、これは中將基のことをきやうげんにするかといふ、いかにといへば、中しやうぎに獅子のゐぐひといふ、

○昔俳諧未練のもの、席にて人の句に、子をうみしはらといふ句有しを聞て、此句ははらみの句といふものか、但ぬけがらといふ體かといひければ、作者のいふ、是はぬけがらにてはなし、人がらといふもの也とこたへしは興なりしに、また連座よりつゐでよく古歌を思ひ出て、源氏うつせみに

空蟬の身をかへてける木のもとに
　なほ人がらのなつかしきかな

○昔後寬僧都、たんばの少將なりつね、平はんぐわん入道やすより、三人きかいがしまにながされし時、たんばの少將一人ねむしろをもち、のこる二人はねむしろなかりつるにより、一枚のむしろをよこにしき、をの〳〵ねたるゆへ、今もむしろをよこにしていくたりもねるを、少將にしくといふは、此少將なりつねよりこのかたいひきたれる事也、然ばいつの頃ぞや、糺のもりにてゐむしろをよこにしきて、人々ねころびゐけるを見、同じ友の中より、少將のよるのむしろと、八景をやつしてたはぶれければ、ねてゐたる友の中より、そのまゝ平砂のらくねといひしは、いみじかりつる也、

○昔まづしきはらから有、そうりやうの家のうちにそしを宿かして、毎月鳥目百文づゝの地子を、そしのかたより總領につかはす也、此そし百文の地子をな

しかね、しばらくをこたりければ、總領いかりてくせものなり、地頭へうつたへんなどいひてせつかんする時、庶子のいはく、如何是庶子成敗と語をかけゝれば、總領、庭前百地子とこたへし、

○昔しめず茸をくひければ、腹痛むといふ事を聞て、

たゞたのめしめじがはらのむし藥
　いしや世の中にあらんかぎりは

○むかし龍といふ物をつゐに見たる事なし、いかやうなる物にか有といへば、紀の國わかのうらには有と見へた、古歌に

わかの浦に汐みちくればかたほ波
　芦べをさしてたづ鳴きわたる

○昔東坡一文字を上下にかくのごと連ねられし、

一孤猿叫レ稍開一　一山里放言語一
一貧家類人亦一　一迯ニ數年ー輪廻一

○昔東福寺の虎關、一文字をかくならべられし、

月五ニ中岩ー閑居一
露九ニ幽臺ー孤身一レ一
一聞レ叫ニ嶺猿梢ー亦一
一迯ニ數年ー是輪廻一

○昔卅六文字の歌、　二條院讃岐

ありそ海の波間掻分けてかづく蜑の
　いきもつきあへず物をこそ思へ

五文字を二文字あまし七字あるうた、

さもあらばあれくれ行春も雲の上に
　ちることしらぬ花しにほはゞ　經信

ことばのたくみめづらしき歌、六帖に

君によりよゝ〳〵よゝとよゝよごと
　ねをのぞなくよゝ〳〵よごと

おなじもじなき歌、古今に

よのうきめ見えぬ山路へいらんには
　思ふひとこそほだしなりけれ

くつかぶりのおり句の歌、是は仁和の御門のあはせたきものをめさせ給ひけるに、人々御心得給はざりしに、ひろはたの御息所と申ける御かたより、たき物參らせられける也、

あふさかもはてはゆきゝのせきもゐず
　たづねてとひしきみはかへさじ

小野の小町、人のもとへ琴かりにつかはす折句の歌、

ことの葉もときはなるをばたのまなん

まづは見よかしへてはちるやさ

○昔さる侍のかたより、やごとなき御もとへ鯉をたてまつるとて、近習へよみてつかはしける、

折よくばあげさせ給へ二つもじ

牛のつのもじたてまつるなり

やごとなき御前に披露し侍るに、御かへしの歌を下さるゝ、

二つもじ魚の名にてはあらねども

ひまのをりふし牛のつのもじ

○昔秋まつりを見侍るに、百しやうども長刀さして、武士のまねをしけるをみて、

附子ににたさといもの子やつくりもの

人は武士はしらはひの木魚は鯛

きぬはこうばい花はみよしの　讀人不知

○昔何とやらんいひし牢人、江戸に年をへて本領にもとづきかねしじゆつくはい、

日の出いしじや四つ猿樂にひる出家

八つちやう人にゆふぐれの武士

とつぶやきけるに、ひとしき牢人有しか、むさしあぶみかけて賴むべきかたもやなかりけん、ぐそくばをりは十德となし、鐵炮いも玉をば藥ぶくろに仕かへ侍るが、晩學の心にやまたしる人まれに、世上の崇敬うすかりければ、右の返歌に

夕ぐれの武士せし時もくらしかね

日の出醫者でも夜はあけぬなり

○昔盲人歌よみて靈山の長嘯へ見せ侍り、まことに目くら蛇におぢずとはわが事なりなどゝ謙退して、添削たのみけるとき、狂歌

ふみしらばめくらも蛇におぢつべし

しらねばやすき和歌のみちかな

○むかし貞德翁に、予が父石のわたといふ句をしてみせければ、此石のわたの事出所せんさく有しに、貞德當座の狂歌に、

はらわたを持といへるは虎とみて

いる矢のたちし石にやあるらん

○むかし上の句にうをの名五つ、下のとりの名六ついれてよめる、ていとく

はなもはもさそふなあたらふくあらし

にをいばかりはおしからずかし

○昔公方のはなしのもの、物語に、木にてしたる釜

にて湯をわかせしといふ事、おかしくつくりなしてはなしけるよし、又さる者物語しけるに、予が父きゝてたはぶれに云やう、古へより木の釜あればこそとて、古歌をつゞりあはせし、

行やらで山路くらしつほとゝぎす
　今一こゑのきかまほしさよ

○昔伏見の奉行茶の湯の名人なりしに、予が父茶入をみせければ、飛鳥川と名づけしたぐひ也といへるによりて、しやうぞくなどしてもてはやしけるが、わびものゝくちおしさは、ほどなく質屋といふ所につかはし、よそのもてあそびものになせる、其後ふし見の奉行いつぞやの茶入はとたづねられしに、愚父

昨日といひけふと暮してあすか川
　ながれてはやき質に置きけり

奉行かへし、

世のなかは何かつねなるあすか川
　きのふの質ぞけふは錢になる

○むかし老僧の小扈従二人あり、老僧一人のこせうをかしづきて、あつき頃なりけるに扇にてあふがれければ、今一人のないがしろにせらるゝこせう、老僧をうらみてつぶやきける、

あだにだに思ふ方にぞなびきける
　あふぎのかぜも人のこゝろも

老僧かへし、

一人にはちりをもつけじ一人には
　あらき風にもあてじとぞ思ふ

○昔む月に人のきそはじめして、花のすがたさかりなるに、予が父いにしへの人がましき時をこひて、つぎ小袖ぬぎて見きてみ見れど、昔ににるべくもあらず、うちわらひてあば成やねの下に、日のたくるまで身づくろひし、こしかた思ひ出て、

つぎやあらぬ春や昔のやれ小袖
　予が身ひとつはもとの身にして

○昔予弱冠のころ、愚父とさがにまかりし事有、いにしへはこゝの嵐山の城主は、わが先祖のものなりしが、今は城郭さへあとなく、石ずへ井戸のかたちばかりのこれり、猶末孫のおとろへる事は、霜にいためる木の葉のごとし、老父もわびてあらし山にたゝずみ、

さむうなるはむべ山風のこずゑかな

筆のつゐでに亡父が何また書つく、鳥羽をとをりし

ときほとゝぎすを聞て、
とんでなけ鳥羽で猶なけほとゝぎす
此句玉海集に愚父が假名實名かきいり侍れ共、又こ
こにあらはす、これらの事見ん人は、はらをかゝへて
わらひのとめ所有まじけれど、とてもあざけらるゝ
ついでに、予が句をもかきこむる事まことにはぢし
らず也、いさゝか自讃にはあらず、すべて此こゝろざ
すは、他の人をおかしからしめんためなれば、わらは
るゝこそほいなれ、それがし口といひ出し句ども、
予師德昌庵法眼慶雲と能見にまかりし時、番組
わき能しらひげにて有し、式三番の翁かへりの
おり發句せよといへるに、はらがかりの扇板よ
り幕ぎはへいたるまでに、
長閑にもしらひげとなるおきなかな
水無月の事なりしに、四條の河中に床をうつし、
ともどちすゞみ、いざや柳色なる水に曲水のえ
んをもとめ、輿をもよほさんとて、四五たん川か
みよりさかづきをながし、床のもとに來るうち
に發句せんと、人々いひあへるに心せけば、石に
さへられてをそくもあれなど思ふに、よどまぬ
ながれにしたがひて、いとゞはやければやるせ
なく覺へ侍りて、
さかづきに汗をもながす川邊かな
今一たびとて又四五たん水上より盃をくだしけ
るに、
ゆふすゞみくむや三水に酉のとき
文月十六日送り火見にまかりし頃、ひがしの山
のかしらに月代あがり、はやつりばりのやふに
見へし折から、人々ほつくをいちはやくといひ
あへれば、月のみな山をはなれぬうちに、
火を見るは月のさはりやによいが嶽
雪の夜の事なりしに、やんごとなきにおほんま
へに侍りける時、畫工まかりてひとしく有、おも
き仰に繪ひとつとの給ひければ、かしこまりは
や筆とりぬるに、又予に此繪をかきをはらぬう
ちはやく讃せよとのたまはせ給ふに、雪つみた
る舟のかたちあらはれぬれば、いまだ筆をなげ
うたぬに、
雪のふねはげに雪舟のなごりかな
春の日のくるゝをもしらず、花みて東山に侍り、

よその花見のかへさの袖におどろき、我かたも木蔭を立さりけるに、まだ山にてはかばかりくらからんとおぼへざるも、坂をくだりつれば道すぢ見へわかず、あとのさゝいなるわらはてうちんもてさきだてば、友の中より前句して、つぎに花の句といひあへれば、
あさなるものぞさきになりける
よみかへすことばの花の廻文歌
又ある時友と道ゆきの折から、まへ句出してつけ句はやうといへるに、
うしろを見するひとは身にしむ
をはら木を月のくれ迄賣ありき
さる人の前句言下につけ侍る、
かみはすれどもにくからぬ中
怨しきいとまのふみの筆のさき
○昔よしなき事を長物語する者有、異名をみこの弓といふ、口きくばかりでいる事はないといふ心也、
○昔金源三がうたに、
もろこしのからくれなゐに咲にけり
わが日のもとの大和なでしこ
是秀歌なればとて、定家卿新勅撰えらばれけるとき、集にいれらるべしとあり、されどもわが日のもとのことば作者の人がらにあはず、此日のもとゝなをして入らるべきよしさた有けるに、金源三、此國に生れてはなべてわが君といひ、わが日のもとゝいはんこと其身によるべからず、一字なほされても集に入しかひなきとていらざりしと也、
○昔とつと遠國の者、歌に病あるといふ事を聞て、病のあるならば脉のない事はあるまい、歌の脉はいかやうな物ぞといふ、答て云、和歌に病といふ事はあれ共、脉といふ物はなしといひぬれば、今一人その座に居合せたるもの聞て、歌に脉こそあれ傳教大師のよめるに、あのくだうさみやくとあり、又萬葉集に、手にとるからにゆらぐ玉の緒とつらねられしは、みやくの事なりといへば、をんごく者聞て、そなたは歌のくすしどのかといふた、
○昔さる人のもとに新參の扈從あり、主人のいへるは、あそこの日本紀をとりてこいといはるゝ、こせうまかり立て、わり木を二本もちて來り、二本木とりて參りたるといひければ、そのこゝ木の事ではない、表

紙のある日本紀といはれければ、扈從、それこそがてんなるかほして又まかり立、たいこのばちを兩手に持出、拍子のある二本紀といふた、

○むかしさる所へ、史記をかし給へといひ付て遣はしければ、物の見事なる板を大男あたまにもたせて來りけるほどに、是は何事ぞといへば、しきと仰られたるほどに、しきは板の事なれば是をかりて參りたといふた、

○昔わらはべ三人づれにて下鴨へ參り、みたらしだんごを題にて、それ〴〵の趣向こそおかしけれ、

水晶のじゆずとみたらしだんごかな　小僧

てつぱうの玉と見たらしだんごかな　武士

そろばんのつぶと見たらしだんご哉　商人

○むかしもろこしより、七曲にまがりたる玉の中はとをりて、左右に孔あきたるちいさきを奉り、是に綱をとをして給はらんといふめるに、中將なりける人、蟻をとらへこしに糸をつけ、あなたなるあなに蜜に◎ヲカぬり◎ヾ、ありを入給へるに、みつの香をかぎて、あり糸・よくはへあなたの口に出にければ、糸ぬきたり、さてその糸つらぬきたる玉をもろこしへつかはされしかば、日本の人のちゑかしこくはかりがたしと也、いづみの國蟻通明神はすなはちかの中將也、

○昔孟子の母は子をよくそだてられし人なり、孟母三遷といひて、孟子のいとけなき時三たびすみ所をうつしかへ、儒者のほとりにゐてつゐに學問者になせる也、さればいまめかしき事ながら、いとけなき子をそだつるには、よき道を見ならはせきゝふれさすべき事也、かならず人はつねに有くせ、よしあしにつきてそのふるまひあるもの也、いつの頃なりけん、庄屋と商人に碁をうたせて、出家と武士と醫者と見物しけるが、思はずしらず面々の事を云出せり、庄屋碁を打入、覺へずながら、とかく地をとらふ、とかく地をひろげうといふに、あひての商人、あまり目をせるまいぞ〳〵といふ、見物の三人のうち武士のいひけるは、かつてかぶとの緒をしめよ、はた色がわるふなつたなどといへば、醫者、もはやぎばが藥でもかなはぬなどといふ、出家、しぬるか〳〵なむあみだぶつなむあみだぶつといふた、

うへてみよ花のそだたぬ里もなし

こゝろがらこそ身はいやしけれ

おなじ人間と生れたるほどに、人品を引きくらべて、さうおうのうちよきにこゝろざしたきもの也、

○昔さんごじゆのをじめをさげ、何とぞして是を人にひけらかしたいと思ひ、さるものにあひ、是ほどなほうづきはあるまいかといふてをじめを見する、見たるものゝいはく、それほどなほうづきはいかほどもあるが、そのやうにきずのたくさんなはない、きずがなうてもくるしからずば参らせうといふたれば、かの者かほをあかめた、

ひろき世に我のみよしと思ふこそ
井の中にあるかはづなりけれ　讀人不知

しる人にひけらかしてもよき物は
軍場でとるたいしやうのくび

○昔安徳天皇の御辭世に、

今ぞしるみもすそ川のながれには
波のそこにもみやこ有りとは

とのたまはせ給ふ、海のそこに都のあるがまことかととふ者あり、さし出ものこたへていふ、いかにも都のあるがまことさうな、此京のごとくはんじやうして、町屋づくりもあると見へた、時々やねのふき板にこけのついたが風にふかれてあがる、此世かいではかまぼこといふ、

○昔日でり年にあるむらの農民共あつまり、雨ごひのだんがふしけるに、こざかしきものゝいふは、のふやおどりなどはたび／＼の事なれば、めづらしからず、やまと歌は力もいれずしてあめつちをうごかし、目に見へぬ鬼神をもあはれと思はせけり、さればいにしへも、能因法師にあまごひのうた頼みければ、

天の河なはしろ水にせきくだせ
あまくだります神ならば神

といふ歌をよめるに、雨たちまちくだり、五こくじやうじゆせしときく、その吉例にまかせ、此たびも歌人をやとひ歌よませて、水神氏神などをいさめんといふ、しかる所に一人まかり出ていふやうは、一だんしかるべし、さりながら歌人を頼み又龍神にそせうするのは、人づてにてまはりどを也、少しやとひちんはたかく共、雨をぢきに頼む事はなるまいが、定家卿も雨をやとはれしやらん、時雨のちんがある、

○昔こしをれ歌といふのはふしぎな事也、歌も落馬などする事ありて、こしがおるゝかととふ、答ていは

く、中々の事、歌も馬からおつればこそ、僧正遍照
名にめでておれるばかりぞ女郎花
われおちにきと人にかたるな
○昔くれがたにさる寺にあそびけるに、鳶のやどりもとめんとかけるをみて、あるじの僧、鳴宿寺中樹と有しを、僧敲月下鐘とこたへし、
○昔さる寺の虫ぼしに竹の繪有ければ、見るもの、此竹の繪はじめて一見いたした、東坡にてやあらんといへば、つれのもの、いかにもとうばにうたがひ有まじ、經文の句も一見蘇東坡とあるほどにといふた、
○昔ある寺のむしばらひに、印陀羅の繪かゝりて有、此表具の中べり古き印金にて有し、見物の者繪をほめて、又、さて〳〵印金も見事とほむる折から、年四十許りにて遠國ものと見へし男、かほにつりひげうはひげたしかにもち、なが刀さしこなし、はかまかたぎぬためつけきて繪をながめ、人々の印金ほむるを聞て、印金といふ人は、唐僧か日本僧かとゝふた、にが〳〵しければ、返事するものなかりし、
見にきても印金をだに之しらざる
人が印陀羅あとでわらはふ
○昔さる寺の入院に、法眼なる人とつれだちまかりけるに、法眼立花ながめゐらるゝ折ふし、あるじの僧たはぶれに、法眼の春の花と有しかば、入院の秋のもみぢとこたへし、
○昔濟家の僧にあひ、名は何ととひければ、三清とこたへぬるに、一派の僧今一人ありあはせて、
白是三清第一名
とたはぶれけるに、
濟家僧裡獨分明
とこたへし、
○昔秋の夜ともなひかたらひゐけるに、雁のこゑかとおぼしく、空に聞へければ、それかあらぬかといひあへるに、うたがふ事なく白雁なるべしとたはぶれて、古き詩を取あはせし、
白眼看二他世上人一
○昔兼好法師、小鷹によき犬は、大鷹につかひぬれば小鷹にわろくなる、大につき小をすつることはり、をろかなる人といふとも、かしこき犬のこゝろにをとらんやと書けるだんこそおもしろけれ、さる所に矮狗を飼ひて置、その名を白妙とつけたり、なつきにけ

らし白妙の歌の句にて、よく人になつきたるといふ心にてつけたりと見ゆ、べいかをのが名をよく覺へて、白妙とよべばいづくまでも尾をふりて來るに、さる者此しさいよくきゝて、さて〳〵おもしろい事やとかんじ、其後矮狗をよぶとて、しろたへをわすれてうろたへ〳〵とよぶ、べいかはよく聞しりてわが事にあらざれば、少もかはるけしきなく、うごきもせず尾もふらざれば、かのうろたへとよぶ人、べいかにむかつて、あさましやまことはいぬじや、うたのこゝろをはやわすれたかといふたは、いぬよりはるかにをとれり、

○昔かたゐなかの出家、海茸くふをだんな見付、それは海茸にてはなきか、魚類にてをの〳〵などのくひ物にてにはあらずといへば、出家あはてゝかぶらほねかと思ふた、

○昔ある所のくりに玉子の有を旦那みつけ、亭坊に、あの玉子は御寺には珍しいといへば、坊主聞て、あれはかうばこにせうと思ひ、求めましたといふた、

○昔泉涌寺へ行てくるまをからふといふ者有、僧出て、當寺に車かすとはいかゞしたる事ぞといへば、ないゝ泉涌寺には舍利記があるとうけ給はるほどにといふた、

○昔業平は茶をよくのまれたるやらん、むかし男と云むかしは茶の銘なるべしといふ者有、ひとしき友だち聞て、その事、茶うけにはまめなくはれたるやらん、まめおとこともいふ、

○昔かしこうもなきものゝいふは、帶は國々によりてかはると見へた、まづ公家衆は石の帶あそばすやらん石帶といふ、又もろこしには雲などをも帶にするやらん、白樂天が詩に白雲帶にて山のこしをめぐると有、又かしまのあたりにはちや入を帶にするか、ひたちおびといふ茶入有と云、答て云、まことに所によりてかはると見えた、海のものはしほを帶にするか、おびしほと云貝が有ほどに、

○昔小野小町は歌人にて、しやれかうべとなりてさへ、どくろにすゝきはえ出て、秋風のふくに付てもあなめ〳〵といふ歌よみしとかたれば、さるものきゝて、名人は皆そのごとくなり、能筆なども死してのちもまたものかくと見へた、道風しやれかうべの手跡といふがあるほどにといふた、まことに佐理行成はいひまがふ人多し、

○昔蝿と蚊とあつまりて問答有、蚊がいはく、其方の名をなぜにはいといふぞ、蝿がいはく、貴人の御前をもはいまするによりてはいといふ、扨其方の名はなぜに蚊といふぞ、蚊のいはく、夏いづるによりて字のこゝろをもちひてかといふ、はいの云、われらははいかいの歌をもつらぬるがゆへ、又そのよせいをもつてはいともいふ、蚊の云、われらは歌道をすくゆへそのよせいをもちてかともいふ、はいの云、われらは牛蝿といひてさしつくほどりこんなけんぞくがある、かのいはく、我らはばうふりむしといひてばうつかひのめいじんを一るいにもつた、はいのいはく、神前にははいでん有、かのいはく、かぐらたうあり、はいのいはく、われらは古文の憎ニ蒼蝿一の賦に歐陽公のかかれた、蚊のいはく、われらも又無ニ蚊虻之利觜一とかかれた、蝿のいはく、われらは驥といふ馬にのりて一日に千里行たる事が有、蚊の云、我等はさい／＼血くさい事にあふた、はいのいはく、むやくの論をするうちにくもが出さうできづかひな、いざうちへはいらふ、蚊のいはく、日本一のふんべつ速かにかへらふ、

○昔かたことをいふても口のへらぬもの有、武者一騎といふ事を一きんといふ、これを友だち聞て、きんとはねぬがよしとをしゆれば、いやはねてもくるしかるまじ、馬にのるものなれば時々はねいでば、

○昔一文字もえしらぬ男、ものしりがほしたがる者有、さる所に馬の繪讃のかけ物かけたるをみて、讃の所をつく／＼とながめ、かけ奉る御寶前とよむ、そばなる者それより字數か多さうなといへば、諸願成就皆令ニ滿足一とよふだ、

○昔在江戸し侍る頃、さるおほんかたの具足の餅いはゐにまかりけるに、なんぢがちゑをためしの具足也、はやく狂歌なくては、餅たうべる事かなはじなどとおごされて、

君が代のひさしかるべきためしには
　　かねてぞうれしおぐそくの餅

私可多咄巻之二終

私可多咄巻之三

○むかし〳〵、ぶんざいに過てせんじやうもの有、親類、いさめてせんぜうをやめさせ、ぶんげんよりへりくだらしければ、せんじやうものにはかにおごりをとめられ、氣をわづらひ、醫者をたのみ藥をのみぬるに、その藥のつゝみがみのかきつけを見て、さて〳〵此いしやはそれがしが病をよく見られた、千少つねのごとくと有とよみて又せんしやうしたれば、一ぷくでけんを見せた、

○むかし〳〵、山でらの大ちごと小ちごとよりあひて、大ちごのいはく、菜飯の湯ほどうまい物はないといはれければ、小ちごきゝて、ゆよりはのこがうまいといはれた、

○昔しちもつをとるもの有、ぬす人にせがねのうつはものをこしらへ、此質屋にゆき多くの錢をかりてかへりけり、あとにて器をよく〳〵みればにせがね也、貸たる錢と十分が一にも及ばず、いかゞせんとあんじけるに、あるじたくみ出し、辻々に札を立たり、其札にいはく、きのふの夜わが家にがうたう入、方々よりあづかり置たる質物のこらずとられたり、もしそのぬし〳〵、いづかたにてもめん〳〵のしち物に見あたるゝならば、こなたへしらせ給はれと、いつはりに札を立たり、しかる所にかのにせがねの器しちにをきたる者、わが質物もがうだうにとられぬるものよとよろこび、質物をうけんといひ、なを〳〵錢をとらんと思ひ、そのまゝしち屋に行、此ごろわれらの質物に置し金のうつはものうけんと、元利の錢とゞのへてしち屋をねだらんとしたり、しちやのあるじ此はかりごとにはかりに立たる札なれば、うれしく思ひ、やがてしち物に取たるにせがねのうつはものを取出してもどし、かしたる錢元利ともに取かへしけると也、まことによきはかりごとなり、

○昔老人のいへるは、化物といふは人々の心より出て、心をばかさるゝもの也、狸狐などのかたちをかゆるは、へんげの理そなはりたる物と思ひなば、なごやばかさるべき、をそれおのゝく心にばけ物有、四季に草木のそめ出すもおなじ事也、さのみふしぎと思はねば、草木にばかさるゝものはなし、とかく目なれぬ

事もあまりふしぎに思ふべからず、其理こそあるらめと、水の氷になるたぐひなるべしと思ひさだむべし、いつの事にやらん有し、さるかたのひろまの天井の板に、人のさかさまに下からふみたる足形のごろあまた所に有、あるじ此あしがたをしかも元日に見付、何のふしぎもなさず、天井がよごれたり、足代してぬぐいつべしと、内の者にいひつけ、少もあしがたをあやしまれず有けるに、見るほどの人きくほどの人これをあやしみ、天井板にさかさまに足あとあるはふしぎなる事也、うらかたなどといひのゝめきぬれ共、あるじは少もさはがずして、よく吟味あれば、舊冬のすゝはきに、たゝみをつみかさねて、其上にて僕共の杉立したる足のうら天じやうへとゞき、どろのつきたるのにてありしなり、めづらしき事も、あまりに物をふしぎに思ひ、氣にかくるは損なり、

○昔元日の朝、さる所の庭かまどに、夜の間松茸何本もはへたり、あるじこれをみて少も氣にかけず、其上いふやうは、かまどに松だけのはゆるはめづらしからず、松だけにかまどがはへたらば、ふしぎにも思ふべきがといひければ、又二日の朝松だけあまたはへたるうへに釜をみせたり、あるじこれをみていふやう、はじめからかくのごとならば少はふしぎなるべし、人に氣をつけられて釜を見するは別の事なしといひて、かつて氣にかけざれば、何事もなくきえうせたり、

○昔物を氣にかくる者有、からすのこゑを聞、いまのなきやうはあしきといひて心にかけわづらふ也、さるものいさめていふは、あれも口もちたればなく也、鳥のなくに吉凶有とは、もしあたまのなきがらすのなく時の事也、などやくちばしの有からすのこゑを心にかけんやといへば、かの氣にかくる者、何とあたまのなき鳥があるかといふ、中々の事、からす瓜といひてくちばしのなき物有、是がなくならば、誰も氣にかけてつゝしむがよいといへば、扨はまことかと思ふ、からすのこゑを氣にかくるほどのをろかなるものなれば、又からす瓜の事もいつはりと思はず、それよりやまひもよくなりたり、

○昔かたゐなかの人まりけるをみて、あのあり〳〵といふはいか成事ぞととふ、あれは色をみてわが方へくる時に、人にばいそくせられまじきため、はやく

こゑかくる事也とこたへぬれば、ゐなか人げにもなる義によくならひ、その後さる方にてこいちやをふるまはれけるに、上座のもの色もよきなどゝほめければ、ゐなかものまりの色の事おもひ出し、わが手前へくる時、色をみてあり〳〵といふ、そばの人聞てその方はまりのやうな事をいはるゝといへば、ゐなかもの、わきからばいそくはなりますまいといふた、

○昔ゑかきの顔輝（がんひ）は、猿をえものにてよくかきたり、しかればある所に、顔輝のさるの繪有しを人々に見て、扨も〳〵かいたり、見事なるかんひかなとほめぬるをきゝて、あるもの、がんひとは草花の事かと思ふたれば、さるをもかんひといふと心得、其後山王に參りける時、御前の猿の手そぼりするをみて、扨も〳〵かいたり〳〵がんひよ〳〵、かくいふを草花の事と思ふか、なんぢが事じや、しるまいなといふ、むかしはまつこう猿がつらまつかいな、

○むかし老たる侍のいへるは、たれも幕詞しらずしてはかなはぬことなれば、おさなきものまでもよくしりて、そのことばをつかふ、味方のまくはうつ、敵のまくはひく、船にははしらかす、座敷棧敷にはかこふ、そうれいの場にははる、まくたゝむ事をしぼるといふは、そなはりたること葉なれども、用捨の所ありて、まくあくるといひ、又はおさむるといふ、あるひは野山のあそびなどにも、まくうつ又はかこふ、さてたゝむをも右の心もち有、又人の具足ほむることばも、あるひは花やかなるとほめ、あるひはすゝどきとほむる、その具足のもやうにより右の心もち有、具そくを見事とほむるはきらふことば也、されはかぶと一刎にて手負を見ごとゝいふゆへ也、せんぢやうとかく時も、刎の字首をはぬるといふにかくゆへ、羽の字をかきかゆる事もあり、すべて人にまじはるものは、詞づかひを心にかけてたしなむべし、虵は一寸よりそのかたちをしり、人は一言にてその心ざしをはからるゝといへり、されはなを、連歌、はいかい、能などやうの折ふしは、其所のさしあふ事をよくかんがふべし、あるひは人の名、みやうじ、職、いへの紋などまでも心にもちて、すまじきとにはあらず、あしきさまにすべからずといはれしは、さも有べき事とおぼゆ、余が若年の時、さるかたにて發句つかうまつりけるに、其家の紋梅ばちなれば、もてる調度も繪ある

ものはこれをかゝせ、きざむものはこれをきざませるゆへ、梅ばちをあいさつにし侍りぬ、其折からには今あしきと思ふほどには思はざりしが、のちにかんがへてうるさかりける句、

梅ばちや花をもよほす羯鼓打

みづから難にいふ、此句はかつこ花をもよほすの古事にて仕立侍れば、花ばかりに思ひ入て、梅ばちはよそになり、かんじんの家の紋面目すくなし、

又其年頃の事なりしが、あるじかた出家にて、ともあまた終日あそびけるに、坊のうへをほとゝぎすこゑあざやかにをとづれ、空かけりゆけば、あと〳〵のねはしだいにかすかに聞ゆ、をちかたにうつりぬるを、今しばし此所にとゞまる事なきを、うらみがほにはぢしめてほつくせんとあんじ、日半ほどたくみ、しかも禁句をはき出し、のちにくやしかりける句、

をちかへりなくや逃武者ほとゝぎす

みづから難にいふ、出家におつるといふことばいむなり、なを又還俗の還の字にかへるといふよみあれば、をちかへり大きにさしあひにて侍りしなり、

○むかしくまのびくに繪をかけて、是は子をうまぬ人、死、後とうしみをもちて、竹のねをほる所なりといふをきく、おなご共なみだをながし、さてゑときすみて後びくにゝとふやうは、子をうみてもそだゝぬものは、うまずとおなじ事かといへば、比丘尼こたふるは、それはうまずよりすこしつみあさし、さればとうしみはゆるして、たけのねをいがらにてほらするといふたは、よいかげんな事なり、

○昔法花宗あり、何ものによらずじゆほうさせたく思ひ、ある時わが飼をきたるねこもほつけしうにせんと、八卷をいたゞかすべきとて、ねこをとらへんとすれば、はしりてえんの下へはいりけるを、つなとりて引ぬれば、中々ねこつなになり、いろ〳〵してみれどもいです、よべども聞いれず有ければ、今一人おなじ宗旨のほつけいふやうは、其ねこはもはやすゝむるにおよばぬ、それほどじやうがこわくては、はやほつけであらふといふた、

○むかしゐなかもの六條の本願寺に參り、堂をふしおがみいふやうは、しんらん樣ずいぶんほとけにして給はれ、げに〳〵しんらん樣のお力にも佛になさるゝ事がなりがたくば、きゝやう、をぐるま、をみ

なへし、何ぞこれらの草花になして給はれといふ、そのつれ聞て、それは何事をいふぞ、草花になりて何するぞといへば、その事、草花になりたいとねがふは別の義でもない、七月七日にこゝのお花になりたさにいふ、あはれ七夕のお花になるならば、少々まだるい佛よりは、はるかましといふた、

○昔ぬからぬかほするゐなか者有、都の風呂にはじめて入、友だちに云やう、京のこぶろには火をともさぬ所でいかうくらひ、

○昔十二月先祖の年忌に、おなご共あまたあつまり、みこをよびてくちをよせさせければ、みこたゝり月をいふてきたうをし、又ふせとらんと思ひ、ことしはたゝり月が多い、をつ付けきたうせずばあしからふといふ、きくおなごの中より一人いふやうは、ことしたゝり月があるとはがてんがゆかぬ、今ははやしはすなれば、ことしは此月ばかり也といへば、みこなむ三ぼうと思ひ、にはかに大はだをぬぎ、そのふしんはもつとも也、しやばにては今がしはす也、ごくらくにては今が六月じや、さればまだたゝり月がおほい、この六月はとりわきあつうてならぬといひて、口よせをはるまで大はだぬいでゐた、

○昔いづくにても身上おもはしからぬもの、都にのぼり、友だちとだんかうしけるは、方々にてかせぎぬれ共、いづこにもあしをとめかぬるといひければ、友だちきいて、とかく今一かせぎ伯耆の國へ行て見られよと云、それは是より道何ほどあるぞととふ、こたへていはく、千里あるなり、たみのありつよき所と聞ゆ、詩經に邦畿千里惟民所レ止とありといふた、

○昔年六十ばかりの者、年中一日もしやうじんせぬもの有、友だちのいふは、其方は二親もなく兄弟衆も相果られたり、しかるに一日も年中に精進日のなきは何事ぞととへば、答ていふ、われらの二親兄弟共はみな夜中に果られたる故、夜ねてから精進す、

○昔とつと遠國の法花坊主に、他宗のわかき者共參會して、是非共魚をくはれよといへば、ほつけばうずのいはく、あまりつよくしんしやくいたしたらば、また情ごはものと仰られてそしらんほどに、人にそしられうよりはくはうといふた、

○昔おさなきもの茶をたてけるに、まだ無功なれば、しまいの時ふたにひつきりのつきたるをしらず、釜

の中へおさし其まゝふたをしめければ、客のゐなか人これをみて、今の竹のねぎりはそのぶんにてはにえまい、ぬかみこをいれさせられよといふた、

○昔大日さかきたるもじをみて、やまもりとよむもの有、いかにかくよむぞとゝへば、大和のやまの字と晩日(つごもり)のもりの字じやほどに、山もりよといふた、

○昔しらずしてものしりがほする者あり、ともなひあまたさる寺にあそび、鐘楼のあたりをへめぐりけるに、いざや此かねの銘をよまんといひて、かねのもとに立より見けるに、所々しりたるもじあれど、よみつゞくる事ならざりければ、ともにめんぼくなく、いふべきことばなくて、此かねのめいは唐音にかいた所でよめぬと云た、

○むかし烏丸のからの字は、烏帽子のゑぼの字じやが、室町のもろの字は、何とよむかしらぬといへば、おなじやうなる友、もろ町のもろは御室のろの字よといふた、

○昔むこ入のはれに、小袖をそむる折ふし、めのといふやう、いかやうにそむべきぞと、むこたる者にとひければ、地は山おろしにそめ、もん所にはゆづりはがたけをつけよといふ、めのとそれはきやうこつな、何事にてましますぞといへば、むこ山おろしゆづりはがたけといふほどに、むこにはそれがよからふといふた、

○むかしかなたこなた人の置合になりて、身のほどよりくがいする者有、されば器物にいたるまでよきを見ならひ侍る也、ある時人のもてる道具共をみて、いづれも氣にいらぬふぜいにてほめず、いひこなしければ、道具ぬしいふやうは、お手前はちとかほがやせたらばよからふ、なぜといへば、目がこへて口のひろい事ばかりいはるゝほどにといふた、

○昔ゐなか人都にのぼりけるに、あつき頃にて有ければ、あるじのいふやうは、ひやりとすいせんをまいるかととひぬるに、此いなか人すいせんといふものは草花より外にしらず、さだめて都にはすいせんくはをもくふ物なるべしと思ふ、いやすいせんのすいくちよりはにんにくをたべたいといふた、

○昔ゐなか人尺八の中とをしをみて、是は何といふものぞとひければ、それは尺八の中とをしとこたへし、ゐなか人、さて〳〵都にはじゆずの緒までめづ

らしいといふほどに、いやじゆずのをにてはない、尺八の中とをしとかさねていひければ、ゐなか人されぱこそ百八の中とをしと、

○昔ゐなか人十二律を見て、是はおくげさまたちの所の、竹がうしのきりはつしであらふといひし、

○昔ゐなかにこざかしきもの有て思ふやうは、いにしへよりの物語に、何事もよからぬ事はみなゐなか者にかづくる、口おしき事也、鈍智は都鄙にかぎるまじ、あはれ都人にあひちとたづねたき事有、ちゐのほどしらまほしきと思ふ折から、都よりかしかうもなきものかのゐなかもの丶所へ行しに、さいはひと思ひ、都人にたづねん、大和ことばとやらんに都の手ぶりといふは何事ぞととふ、都のものしらぬといへばはぢとこそ思ひつらめ、中々その事よくしりたり、都の手ぶりとはのり物になふ六尺の事じやといふ、ゐなかのこざかしきものかたはらいたくも、はや別のせつはなきかとといへば、都人まだあるをりどのやの糸くりをも都の手ぶりといふとこたへし、まことにしらざるをしらずとせよ是しれる也、といふ事をしらぬははぢしらず也と、ゐなか人にはぢしめられし也、

○昔琵琶と琴とかざりたるを見て、是は何の木にてつくるぞととふ者有、友ことにゆびさして、是は桐なり、又びはを是に紫丹なりとをしへければ、とひしもののよく覺へ、やどにかへりて友だちに、きのふきりしたんを見たといふ、友人きゝてかゝるめでたき御代なれば、まことのきりしたんといふものはあるまじと、せんさくしてよく聞たれば、きりの琴したんのびはの事にて有し、まことに靜謐の此御代などに、たとひ不吉の事をかたるもの有とも、みなそらごとのためしなり、

○むかし種姓さもしきもの丶かねもちになりて、人にまじはる者有、され共すりあげものなれば、田夫第一のおとこ也、ある時わが女ばうに、きんらんにてたびをぬえといふ、女ばう聞て、きんらんのたびをはくものが日本にあるか、いかに錢かねにとぼしからぬといふても、たびにきんらんはせぬものじやといふ、かの男聞て、いやべちの事ではない、友だち衆が我らを足もとのわるい者じやと仰せられて入魂なきほどに、金らんのたびをはかふといふた、

○むかしさる寺へわかき侍共まかりてあそび、亭坊

手もとの酒はしづくなりけり

○昔大名のみうちに國の仕置をする者有、老衰日にましぬれば、をのがつとめを人にゆづり、身しりぞかんとうつたへぬれど、大名ゆるし給はざれば、たびたび此事いひやまず、死期ちかきなどとかこちけるに、

年をへて國のかゞみとなるものは

死にかゝるをや曇といふらん

かくつぶやくもの有ければ、大名ゆるし給ひて、老後の身をやすくをきてたのしみけるとなり、

○昔大名のもとに召つかはるゝ小坊主に與齋といふ者有、ある時夜詰にねぶりければ、大名伺公のもの共に、與齋がねぶるつらを見よとはげしく見えければ、咄のものゝ中より、

もろこしの宰予は晝もねぶりけり

せめて與齋はゆるしたまはれ

とよみければ、大名も座中も與に入、與齋もつゝがなしとぞ、

○むかしへんどに子をうみて、是は鬼子なり殺さんといひあへるを、そのかたはらに老人ありて、此さたをきゝ、鬼子とはいかやうなるものぞとヘば、歯の

に云やう、御ばうもいにしへは何がしのはてにて、あつぱれ侍たるべきに、何とてかやうに出家とはなられしといふ、亭坊こたへて、われらは侍にてはなしと云、わかき者共聞、それはいつはり也、先祖をもあらまし承りたり、其上さぶらひはにんべんに寺といふ字をかけば、いよ〱さぶらひにうたがひはなし、こしかたかたり給へといふ、亭坊答て、仰のとをり侍といふ字はにんべんに寺なれ共、われらさぶらひにてなきせうこは、堂のやねを見給へといふ、わかき者共やねをみて、あれはくさりたる物也、せうこにはいかが見んといへば、坊主、されはその事、侍とこがねはくちてくちせぬといふ、われら侍にてなきゆへやねまであのごとくくちたりとこたへければ、人々しゆせうがりて再興有けると也、まことに出家のおくふかく、した心よきへんたう也、

○昔大名のはいぜんするこせう、かんなべの口よりさけをこぼしけるに、大名御きしよくあしく見へければ、そのまゝ咄の者狂歌よみて、大名のかんばせよろこばしむる、

酌人のめもとに鹽がこほるれば

はへて生れ出るものをいふとこたへたり、老人のいふ、はじめよりはの有ものを鬼子といはゞ、かみをゆふくしも鬼子か、それ人の歯は腎の有餘にて、腎勢つよく生れつくものは胎内よりはをもちて出る也、又女子に生れ出るもの陰穴なきものあり、おそろく事なくいしやにだんかふすべし、れうぢにて陰穴でくる也、又男子女子にかぎらず、七ヶ月にて生るゝ子もそだつ也、又十五ヶ月にて生るゝ子も母共に堅固也、いづれもある事なれば心うく思ふまじと、色々めづらしき事共いひて、かの鬼子といふをそだてさせければ、親に孝行 其身無病、人にすぐれ、あまつさへ富貴にして、百餘歳にて命おはりしとなり、

○昔かしこうもなき事をあんじたるもの有、あめといふものは、天にも人が有て水こしにてとをすか、またはいかいひやくをもちて、水をうつかなどといふて人にとふたり、答て、其方のすいりやうのごとく、雨は水こしからとをす時も有、又は大きなしやくにてうつ事もあるといへば、又とふ、そのこさいが聞たい、答へて、水こしからとをす故にとをり天といふ、大きなしやくにてうつによりて、上に大しやく天が有といふた、

○昔ひとりたび人よぶかに出ぬれば、道にてたうぞくあたまかこみ、金銀をとらんとす、其頃奉行所よりはしりものゝとが人をたづねらるゝに、そくたくかかりたり、しかる處にかのたび人、われは一人たうぞくは大ぜいなれば、すべきやうなく、いつはりていふは、われは金銀もちたる者にてはなし、此頃奉行所よりたづねらるゝもの也、それゆへ夜をこめて爰をたちのく也、命をゆるせといへば、たうぞくこれは思ひもよらざるものかなとよろこび、此ものを召つれ奉行所にゆき、そくたくとるべしと思ひ、いさみよろこびて奉行所へかのたび人をつれ行、此ごろ御たづね候科人召つれたりとうつたへければ、奉行此者をみてふしぎに思へるにうち、にたび人のいはく、われら科人にあらね共、夜ぶかに出てあのたうぞく共にあひ、せつなさのまゝいつはりたり、いそぎたうぞく共をからめらるべしといへば、そこにて、たうぞく扨はたばかられたるよと思ひ、ぜひなくからめられたり、まことによきちりやくにて有し也、

○昔何事によらずじまんしていけんいふものあり、

ある時貴人の御前へ出けるに、其方が國には海山などがあるか、獵をしてあそぶかなどゝたづねられしに、かのいけんい ふ者、わたくしの在所は餘國とかはり、山なども中々もたかく、海もことの外ふかし、さるにより、ざいもくぎよるいたくさんにて、よき在所といふ、貴人聞給ひて、いかにも其方がざいしよはさうであらふ、かしはざきのうたひに、在所の山たかく笑止の海ふかしと仰られし、

○むかし法頂のかづく燕尾といふ物をみて、あれはゑぼしといふかとゝふ者有、今一人はもうすといふものかと二人とひけるに、物なれたるものゝこたへやうこそおかしけれ、兩人のいひぶんをいづれもそだてたり、此ごろまひを聞しとて、かゝるむづかしきゑぼしをせきやにあづけ、帽子といひてとあるまひの文句にあはせ、兩人に對し、をの〳〵のごとくいにしへの人も、ゑぼしとまうすの差別は、むづかしき事と見えしといひし、

○昔雪のうちの芭蕉を見たといふもの有、友だちきて、雪のうちのばせをはなき物也、それは繪にかきたるを見たるかといへば、いやまことの雪のうちのばせを也、袖にふりかゝる雪を打はらひ〳〵して、馬にのり行人を見たり、馬にのりたるものは馬上といはぬかといひし、

駒とめて袖うちはらふかげもなし
さのゝわたりの雪のゆふぐれ

○昔氣血共におとろへたるもの有、こざかしき友のいふは、此やうなるしやうには、十全大補湯がよいとをしへければ、病人つぶさにならひて、さる醫者の所へたづね行、れうそく十文持參して、大ふたうかいませうといふ、いしやきゝて、是はめづらしき人かな、こゝにせには何事ぞなどといへば、十全大ふたうと承るほどに、せに十文もちて參りた、是にて大補湯給はれといへば、いしやこたへて、たゞ今十全大補湯はない、其方の病をそのまゝなほす千金内托散がある、それが用ならばうらふといふ、病人聞てたとひ死ぬるとても、千金がならふかと云ていんだ、

○むかししゆえんの座にて、あるじかたのむすこ角彌と云もの、うたひまひかなでければ、風流の老人有て、かほあからむばかりにゑひ、座興のとんさくをまひける、列座の若き人々もあれは、其あいさつの文句

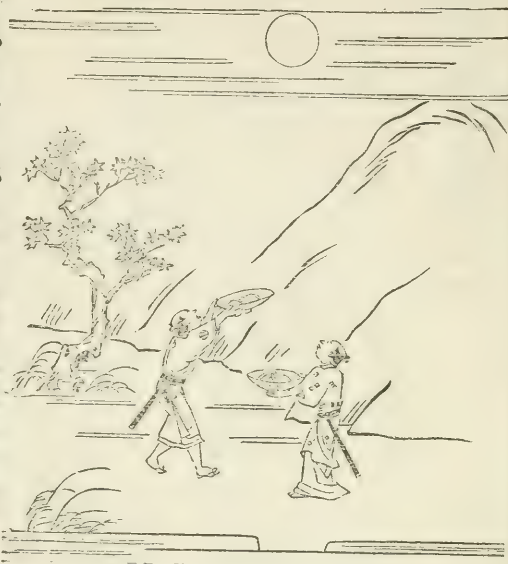
に、老人はあかくなり、若きはいつもゐひもせず、富貴の家となるとかや、長生殿のうちには春秋をとむなるも、角彌と思ひしられたりと、やさしくもおもしろくも文句をあはせまひけるに、物なれぬ若き男其座に有て、開とがめたるこそさもしけれ、其まひは、老人はわかく成、若きはいつもおひもせずにてましますせ也、たゞ今仰られたはみなかたことなりといひしは、あさましきおとこぶりにぞ見えしなり、

私可多咄卷之三終

私可多咄卷之四

○むかし〳〵、大福長者の一ばん子にかしこからぬもの有、世の中のめうもくにふしぎがある、いかにといふに、われらのやうなるかねもちのひざをゆるがすをも、なぜびんぼうゆるぎとはいふぞ、是がねてもさめてもがてんがゆかぬといへば、そばにまづしきものゐあはせてこたへける、されば此はうにもふしぎがある、我らのやうなる錢のなきびんぼう人も、時時錢もちくびになるとは、なぜいふぞとこたへた、

○むかし〳〵、名月の夜のくまなきに、かしこうもなき者二人月見して、一人のいふは、月はうごくものなり、何ぞとりはづしたらばおちさうな、あはれおちたらばひらはんといふ、いま一人のものもろこしへはおちたと見えた、月落鳥啼と云詩がある、日本へはゐんぎのみかどの頃はおちなんだと見えた、せみ丸のうたひに、世はまつせにおよぶとても、日月は地におちぬとある、され共今はもしおつる事もあらふ、おつるならばかさでうけたがよい、ふじたいこに、月おち



かゝるやましろも、はやちかづけばかさをぬぎとあるほどに、うつかりと見るなかさをもてとて、二人ながらあくる日の辰のときまでかさをかまへた、
○昔烏賊と蛸とはまばたに出て、ゐせいあらそひ有、いかのいはく、われらは歌につらねらるゝ、侍從うたに、いかにせん都の春もおしけれごと有、たこのいはく、われらも歌によまるゝ、山邊赤人、蛸のうらにうち出て見れば白たへのと有、いかのいはく、大成論にもいかしやりうとある、たこのいはく、諸經にも那由蛸とある、いかのいはく、時々われらはかみなりにもなつてあそぶゆへいかづちといふ、たこのいはく、われらは折々佛になりてあそぶゆへたこやくしといふ、いかのいはく、われらは馬によくのるゆへ、あをりいか共いふ、たこのいはく、われらは物をよくかき筆をはなすまのなきゆへ、ゆびにたこができたといふ、いかのいはく、其の方は萬事がてんのいたものにて、あたまをまろめながら何とてひつぱりだこにはなるぞ、たこのいはく、其方はあつばれかうの者と見えたが、なにとてするめになりなわにてくゝらるゝぞ、いかのいはく、われらは仙術をえて雲にのぼるゆへ、わらはべのもてあそびものにもいかのぼりといふ、たこのいはく、それは此方のことにてたこのぼりといふ、いやいかのぼりとたがひにろんじあひ、ともに八手をくだきむずとくむ所を、兩方ながらやがてれうしの手にとらはれものとなつた、
○昔よそしらぬもの、大名のもとへ來る事有、家老に仰ありて、此ものに呉服を給はる、家老ひろぶたにて呉服をつかはしければ、さて〳〵有がたし、ことにけ

つかふなるまきゑの臺まで下さるゝかたじけなしとて、ひろぶたをも呉服と共に取てかへらんとする時、さすが家老たるものゝ、あいさつこそおもしろけれ、かの者にはぢをあたへまじきと思ひ、家老のいふようは、その臺をこのはうへかるべし、今又別の人に呉服をのせてつかはすまきゑの臺、手もとにきれ侍るほどに、かゝるべきといひてひろぶたをとめをきたり、その首尾侍共見きゝて、

よむ歌のだいにもなれるひろぶたを
　　家らうの作意ほめぬものなし

○昔清少納言枕草子に、うぐひすはだいりのうちにすまぬぞいとわろき、十年ばかりさぶらひて聞しかど、さらに音もせざりきといふ事をきゝて、さるもののいふは、それはげにもらしき事也、さすがうぐひすなればこそ心ありておぼゆれ、鳥類の身としてたやすく大内にまいるはそらおそろしき事也と、老たる谷のうぐひすが、わが鳥共にいけんするゆへ參らぬものであらふ、清少納言もよく心をつけてかゝれたといふ、友だちきゝて、谷のうぐひすのいけんするといふことは、なんぞかきものにあるかといへば、公任らのうゑいしうに、鶯未レ出遺賢在レ谷とあるほどにといふた、

○昔さるものゝむこに弓をけいこするもの有、あはれ弓いるといふ事をしうとにしられたきと思ひ、ある時しうとの方へ見まひ、何ぞしてよき折からに、わが弓いることをひけらかしたし、かたり出さんと手ぐすねひきてまて共、弓のつゐでもなかりければ、かのむこ殿しうとにむかつて、まづよのはなしはやめられよ、こなたは異國の養由吾朝の爲朝をしらせられたかといふ、しうと、中々聞及びたり、是は弓の名人とやらんきゝつたへし、さて此うはさをいひ出さるゝは、其方にも弓をいらるゝかといへば、むこ聞て、いや／＼養由ためともなどほどにはねんもない事といふた、

○むかし玄昉僧正といふ人、入唐して淄州の知周大師にあひ、法相宗をならひ給ひしが、唐人げんばうといふおなじこゑの字に、還亡といふ訓有りと難じたりしが、歸朝の後つくし觀世音寺をくやうの時、空よりいかづちなりくだりて、玄昉をひつさげ雲中に入、くびを興福寺の唐院におとしけりとなん、太宰少貳

藤原廣繼所爲也といふ、されば人の名にも吉凶ある事也、

○昔うつけもの有り、わが女房の名をかへて楊貴妃とつくる、友だち聞て是は何事ぞ、やうきひといふは玄宗皇帝のきさきにて、しかも三千人のうち第一の美人也、はくらく天が長恨歌にも、回レ頭一笑百媚生、六宮粉黛無二顏色一とあれば、うるはしきかたちをしはからるゝ、其方の内方いかに美女なればとて、やうきひとよぶ事その身もはづかしかるべし、よそのきこへなをうるさしといへば、くだんのうつけもの聞て、さればそのやうきひは楊家のむすめときく、われらの女共も八日に生れたといふほどに、やうかのむすめといふ心に、やうきひとつけたと云て、友だちのいけんをきかずじまんした、

○むかし六祖のからうすふめる圖のかけ物を見て、さるもの、是はおもしろきやうすなり、われも一ぷくほしゝと思ひ、あるじに此祖師の事よくたづね、やごにかへり、ちいんのゑかきに賴むに、六祖といふ事を打わすれ、からうすふみの六藏をかきて給はれといふた、

○昔筆もつ事もしらぬ侍有、年は五十におよべり、或時はうばい、卅六人の歌仙をくりかへし見侍る所へ、かの侍ゆきかゝり、その物の本は何ぞとこふ、是は卅六人のかせんとこたふ、侍聞てそれはいくたびみてもあかぬものじや、その楠の合戰の所をよみてきかせられよといふた、

○むかしはり立のこうしや有、さるものとふていはく、この頃鍼灸聚英正傳の或問など見侍りしが、針は有レ瀉無レ補とあり、されど世上の針立補有といふ、いかゞ補有りやいなや、針立こたへていはく、我々をはじめ世間のはり立、何れも口にては補も有、益も有といへど、手にてたつる針に補のなき事うたがひ有べからず、是まことの一大事をさんげ物語なり、世の中の人々針に補ありとおもふは、大きなるあやまり也、ほのあるはりは別の事を云、人にたつる針の事にはあらず、唐船をのる時ふねに針をたてねばのられず、これは帆があるゆへとりちがへて云ひいふ事也とかたられしは、さすが名人のことばほど有て、おかしくもしゆせうにもおぼゆる、

○昔ある夜のつれ〴〵に友だちあつまり、座頭に平

家一旬所望せしに、いまだ功なき盲人にて、しかもこゑよからぬに、なか〳〵しき妓王をうなり出しければ、おもしろげはさてをきうるさくなれども、なかばにやめよ共いはれず、きく人々かたはしよりねいりければ、へいけはいつかたりすみたるもしらず、夜全の折から扈從のおこしけるに目をさまし、あまりの事にさるものかくぞ、

平家には妓王をかたり出す程に　きかでねたまぞほとけ也ける

○むかしちごのもつさうくはるゝ時、くひたらざりければ、はんだいにならべたるこせうが食をもとりてくはれける、こせうはんだいにかゝりて見れば、めしなきゆへ、ちごに何とて我らのもつそうを參りたるぞといへば、ちごのいはく、そのはうのもつそうとはしらず、それがもつそうのさばのめしがこけてあるかと思ふてくふた、

○昔御幸の折から、その里かねてよりきよめけるに、奉行から百姓共にまんぢうをくばられければ、よろこび給はりて、土民の中にかくつらね侍りし也、

御幸よりさきに給はるまんぢうの　中のさたうは是れぞあまもの

○昔かくをわづらふ物有、友だち見まひにきたりける時、いしやはなにといはるゝぞととひければ、膈といふ事をわすれて、飛車といふ煩じやといはれた、

○むかしかぶきの子供をあつめ、將棊さし侍る者あり、何とやらん名をいひしかぶき子、そばに見物してゐけるに、まだ手あきの人おほければ、かつ手より今一めん盤を持て出ぬるに、かの見物のかぶき子、心のうちに食をまちかねけると見へし色外にあらはれたり、持出るしやうぎのばんをしりめにかけ、膳が出ると思ひ、人のさしてゐるしやうぎをそばからくづし、膳が出た、まづしやうぎをくづしたがよいといふて、上座になをりけるに、そばへ持來るを見れば、しやうぎの盤にてぞ有し、是ほどそつじのいたりせうしなる事であつた、

○昔田舍もの禁中の節會のにはに參り、あの公家さまのもたせられたる物は何ぞととふ、つれだちたる都の者、あれは笏といふもの也とこたふ、ゐなかものいふ、さてさてしやくといふものはいなものや、うらゝがざいしよの庄屋もしやくもちにて、むねにつ

かへがあるとつねぐ\いはるゝが、あのくげ様もむねにしやくがつかへて、のびつかゞんづあそばす、しやくのむしといふものは、其まゝはごいたのやうなものじやといふた、

○むかし邊土にかなかきをもよみわくる三白といふもの有、さるものとつきあひて、何事も五音相通なればくるしからぬほどに、藥をかすりとなり共、とすりといふてもくるしかるまい、かきくけこつうずるほどにと、いかにもりはつがほにいひければ、こざかしきわらは聞て、それは物によるべし、其方の名を三白といふ、さしすせそ通ずるとて、寸白と云てはいかゞと一口にこめられた、

○昔凸（なかたか）といふ字をみて、おしろいとよみたるもの有、まことにおしろい屋のかたは、此字のかたちによく似た、

○むかしからのゑかきに戴嵩といふ有、牛をえものにてかく事上手なり、ある時角をふり尾をたてゝ、牛共のたゝかふをかく、一しほうるはしくいできたりと思ひて、人々に見せあへり、其後牛つかふわつぱの野かひにいでたるに此繪を見せ、なんぢがあさゆふつかふうしによくにたるかといひてとひし時、うしかふわつぱこれをみてわらふ、いかにとなれば、牛のたゝかふときは尾をたてずしてはらに尾をつくるもの也、此繪は尾をたてたればあやまり也といひし、たいすうおごろきげにもとかんじ、其繪をやぶりたり、まことに名人は何事によらずたいすうのごとく有たきもの也、たいすうはどの牛かきなれ共、まことの牛に手なれぬ事なれば、あやまりもやあるらんと、あさゆふなるゝうしかひのわつぱに見せたるは、名人のたいすうなればこそ、

○昔女のかみのゆひやうは、みな名所の名におふといふ、まづ兵庫又は島田など、いづれも所の名じやと云、さる者聞て、まだ有、吹上といふは紀伊の國の名所といふ、されば一座興に入けるに、そばよりをろかなる男すゝみ出て、まだある、かうがいわげといふ、右の人々それはいづくの名所ぞとへば、われもしらぬといふて興をさました、

○昔かしこからぬ者有、友だちにいふは、けさあるかたより文がきたが、あすの朝齋をふるまはるゝ、是にふしぎがある、雁をれうりせらるゝさうな、ときに雁

はいな事じやといふ、友きゝて、それは文のかきあやまりか、よみそこなひにてあらんといへば、中々よみそこなひにはなし、二人までに其文をよみてもらふた、いづれもおなじ事によまれた、其文に猶明朝貴顔之時申上べく候とある、さればきがんとは春の雁のことではないかといふた、

○むかしたんばのてゝうちぐりといふはいかゞとゝふ者有、答ていふ、此事よろしからぬ説あれ共、まことはいにしへたんばの百姓なるものゝ子にさかしきもの有、いとけなきとき、その親秋山よりのかへるさにくりをひらひ、すみかにいりてわが子をあいするに、あまたのくりの中ちいさきくりをわが子に見すれば、いとけなきものちいさきはいやといふ心にや、あたまをふりてかぶり〳〵といふ事をする、又大きなるくりを見すれば、うれしげなるかほばせして、おやへのついせうの心にやあらん、雨の手をたゝきてうち〳〵といふを事する、さればそれよりこのかた、手々をうつといふ心に、大なるくりを手々打ぐりといふなり、

○昔ほめられてつきあがりする者有、手跡を人にみせける時、をの〳〵、扨も〳〵見事な事かな、其まゝ弘法をみるやうに思ふ、大師のさいたんではないかとほめそやしければ、かの筆者ひとりごとにいふやうは、入定ほどきうくつなものはないといふた、

○昔かしこうなきものよき子を持たり、しる人ごと皆鵙がたかをうみたるといふ、親これをきゝて中々うれしがり、いよ〳〵子をたかといはせ、われはとびといはれたきと思ひ、さるかたへ親子めしよせられし時、雉をやきて出しければ、親のいふ、我らのせがれほど此雉をすく者は有まじ、鷹の生れかはりかしらぬ、我らは又雉よりは鼠がくひたいといふた、

○むかし大ちごのいへるは、下帶ほどついえないらぬものはない、かく事もむづかしい、されども風呂へいる時は下帶かゝねばならぬ、とかくふろをはつとにしたいといはるゝ、小ちご聞て、ふろへはめん〳〵の心次第にて、いらふといるまいとまゝ也、下帶のためならばふろよりは夏を法度にしたがよいと、

○むかし江戸あたりをありくかまはらひといふもの有、歌うたひかまどの前にてまふ也、ある時神田のなべ町にゆき、家のうちへはいる所を、しもべ是は何も

のぞといひしとき、いつもまいるかまはらひといふなり、しもべ、こゝはなべ町なれば、かまはらひいらぬといへば、かまはらひきゝて、こゝはかんだといへど、そのはうの目は南方ながらよささうなほどに、鍋町へもかまはらひがくせ事ではあるまいと云ふた、

私可多咄卷之四終

私可多咄卷之五

○むかし〳〵なりひら、かすがのさとにてかいま見けるは、鰆といふ魚にてはなかりつるかといふもの有り、いかゞといへば、伊勢物語にいとなまめいたる女、腹からすみと有る程に、

○むかし〳〵はるか遠國に出家あり、弟子にきうじをさせて食くひける時、さん〴〵でしをしかりぬるは、何とていつもゑびすおしきにはすゆるぞといふ、でし聞て、されぱその事、お大こくさならばせられて御ざる程に、ゑびすおしきにすゆるといふた、

○昔こつとかたゐなかに若き僧有、善光寺へまいるといふて、同學のもの共にいとまごひして寺をいで、妾の所へまかりて日をゝくり、やう〳〵下向の頃になると、善光寺よりかへりたるふせいにて寺へもどりければ、寺中の僧共あつまり、さて〳〵よき心ざしかな、うらやましきなどといひ、さて善光寺のによらいは、うすの上にましますと承るが、さやうかととひければ、中々の事、うすの上におはします、しゆせう

なるによらいなり、しかしながら如來にうすがあはぬ、うすには大黑がよき物也、とても事ならば、あの如來を此寺の大こくにしたい、

○昔色このみの男有、妻のもとをしのび、さるかたに一夜とまり、後のあしたくら〳〵にをきわかれ、ねまきにしたるべにがのこの小袖をかさね、覺へず下にきて、わがきる物を上にきて宿へかへりたり、山の神これを見付、そのべにがのこのきる物は、いづくの女らうめがわんぼぞとせめとがめければ、男べにがのこの小袖みておどろき、さて〳〵そつじなる事と思ひ、何ともいふべきやうもなく、あづきめしがくひたい、われはきつねじや、こん〳〵くわい〳〵といふてやぶの中へかくれた、

○むかし江戶にて、さるもの禰宜町へまかり、かぶきの芝居にいたす花を見て、

禰宜町のしばゐの花や神の幣

其後又ゆき侍るとき、句一つと人のすゝめければ、

ねぎ町は湯立か袖のあせしづく

猶ゆき〳〵て美少年などしたしみふかくなれば、やみがたく家職をもわすれぬれば、

ねぎ町の身のしみつくや貧乏神

市何とやらんいひしものに花とらせて、

ねぎ町の市どのにやるや神樂錢

○昔江戶のうかれめの有所は、葭原とかやにすむ也、此所へはよる行事ならねば、さるものゝいふ、こゝのやしきわりの時、日なみの吉凶によりて、夜ゆく事がならぬかいかにといへば、こよみによるゆかずといふ日がある、此ところの遊君は、雨ふる時あるひは道あしきには、ろくろなはなど帶にしたる奴の背にをはれて行かふ有樣いと興あれば、見んとせしまにはや宿の門に入ぬれば、たれかよみける、

つゝゐづゝ非筒にかけしろくろ繩

負にけらしな身も見ざるまに

あとよりかぶろは肩ぐるまにてきたるに、全盛ちかく見ゆる子なれば、これかれにもとづきて遊女かへし、

くらべこしふり分がみの肩ぐるま

君ならずしてたれかあぐべき

となんよみしとなり、

○昔かぶき子よびし者有、夜に入て其者きやらを取

出したき侍るに、めづらしき名香あるを折よく見付ぬれば、是を少年にゆづらんと思ひ、色々取まぜきぬにつゝみをきしをひろげ、わが心ざすは此名かう也、其外いづれにてもをくらんと、つゝみながら取さばき、したしきふせいにてひそかに見せ侍りしに、此名香とひとつきぬに一歩のかたちしたる萬金丹有ければ、少年是を夜目の事なれば一歩かと思ひ、此頭物をかい、ちと入事の有ほどに、是をもらはんといひて萬金丹を取たり、手に取てみてあんの外なれば手もちわろく、是が此中いかふほしく有けるが、大事の物ならばかへさう、此方にはいらぬといふた、扨々是ほどにが〳〵しくめいわくなる事はなかつたと、

○むかし高野に、とし六十になりてまへがみゆひたる者あり、老僧と風呂へいりけるに、六十になる若衆、わが身にしはのよりたるをみて老僧にいふやうは、いな事で皮がたるむといふ、老僧きゝて今からちりめんの小袖をきるな、ちりめんをきるゆへ其樣になるがといはれしはしゆせう也、

○昔九十六になるうば有、さるもの來りて、そなたをよき所へきもいらふ、ちらとみせてくれよといはるると云、うば聞てよめいりの事と思ひ、いふやうは、もはやいらざる事かと思へども、さりながら心ははたちばかりのむかしにもかはらぬほどに、ともかくもだんかうせう、見たくば見られう、さきはいくつぞ、まゝ子はないかととふ、答ていふ、さきは面打也、そのはうをすこしの間やとふて、小町の面のかたにいたしたいといはるゝといふたれば、うばあんの外なる事なれば、さん〳〵ふけうにて、九十六になる者が小町の面のかたによくば、百の錢をせよといふた、

○むかし佛師のつまに嫉妬のふかき女房あり、もくざうつくるにも、女體をつくればねたむなり、ある時おつとのるすに、辨才天をあつらへたきといふ者有、女ばう出ていふやうは、辨才天にして、辨才天の事心得たり、しかしながらうしろつきは辨才天にして、かほは仁王にならば作らせてやらふといふた、

○昔さるもの、年たけたる子をもちぬれ共、思はしき事なくさはる事ありなどして、よめをむかへざるに、ある時むすこ暦の下段を所々すみにてけしたり、親みつけて是は何事ぞといへば、むすこいふやう、これの暦には嫁取によしといふ所がいらぬものじやと思

ふて、そのぶんをみなけしたといふた、

○むかし一在所の婦人ども、もんきかうをむすびし中に、ひとりおつとにわかれたるもの有、もはや今日よりりんきすべきおつともなし、かけせんとりかへさんと云、あまたの女の中に取わきりんきふかきものゝいはく、其方の夫しなれたればとて、りんきが此世ばかりか、あの世へ女も死でゆけば、たとひ佛になられても、ゆだんはせぬがよいといふた、

○むかしをいてきたる男有、親とつれだちてしうとのかたへはじめて行ける時、親のをしへけるは、むこといふ者ははじめての時は、みな人の見たがるものじや、さかづきのしだい萬事に氣をつけよといふ、むすこ、いかにも心得たるとてしうとのかたへ行、さかづきの折ふし、印籠よりそかうゑんを取いだし、さかづきににじり付たり、親これをみてひそかに何事をするぞといへば、むすこ、此藥はめいよの氣付じや、盃のしだい萬事に氣を付よといはるゝほどに、氣付藥を用るといふた、

○むかし棠陰比事にいはく、夫のるすに女のくびをきりて、むくろばかりふすまの下に有、夫かへりておどろき、女の一るいにしかぐ\のやうたいなどみせ、我は夢にもしらず、るすのうちの事なりといふに、女のしんるい聞いれずして、をつとがわざならんと奉行所へうつたへけるに、夫のいふやうは、いさゝかしらずと有のまゝにいひけるを、奉行つくぐ\ふんべつ有て、夫のいふ事すこしもいつはり有まじ、是は密通のおとこ、かの女をつれてはしりたる物なるべし、あとにのこしをきたるむくろは、餘の女のむくろばかりを置たるものなるべし、さらば乞食共の中をせんさくして見んとてたづねられけるに、女のこつじきのくびばかりすてたるあり、さればこそとかのむくろに引合せ見られければ、そのくびなり、それよりまおとこをはしりたる女もせんさく有ぬれば、兩人共にたづね出され、本夫はなきとがをおはぬのみならず、二心の女妻敵共に本望とげたり、

○同棠陰比事にいはく、張擧は吳國の人なりけるが、句章といふ所に夫をころし家に火をかけ、いつはりてわが夫やけ死たりといふ、此事夫の親類うけつけず訴へけるに、張擧双方をきゝてぶたを二疋取よせ、一疋はころし一疋に生きながらたきゞをつみてやき

て見られければ、はじめよりころしてやきたるぶたは口の中に灰すこしもなし、生きながらやかれたるは口中灰にてうづみたり、これによりてかの夫の口の中を見られたれば、はいすこしもなし、夫をころしてのちに、家に火をかけやきたる物なりと、ぶたのせうこを見せられたり、其女あらそはずつみにおちけりとなり、

○昔うつくしき少年有、しかも心底けなげにて、したしき念人をもてるに、さるおとこ又此少年に思ひをかけぬれば、少年のいふやう、もとよりしたしむかたあれば、わが心にまかせがたし、ゆるしたべよとことはるに、かのおとこ、さあらばとてもいきて有べきにもあらず、さしちがへんといふ、少年きゝてすこしもおぞろくふりもなく、われゆへかゝる事、此身のおもひでなきあとのめんぼくなり、ともにしでの山をたどらんといふ、男もこのむ所也、三づの川を手に手をくみてわたらんといふ、少年いよ〳〵かはるけしきなく、はや刀のつかに手をかけゝれば、男此やうすをみて、少年のかたなのつかをおさへ、まてしばし、けふは血いみじやといふてにげた、

○昔そつじなる下部有、八瀬の木うる男のうしろすがたをみて、かみのゆひやう女とひとしければ、さらに男とは思ひもよらず、つか〳〵とはしりより、うしろより袖を引たり、木うりの男ねぢむきければ、つらはくまのかはのやうなるひげ男なれば、しもべあきれはて、かの引たるそでをもちて、此そではたもとのやうなといふてのいた、

○昔々おさなゝじみより共しらがの祖父と祖母有、子孫のさかえならぶかたもなし、財寶まどしからず、壽命と云分限といひ、めでたき事たぐひまれなる老翁老女有、されば此命ながく堅固なるをあやからせんとて、源氏のながれ何がしの子、嫡男と二番めのむすめと二人が名付親に頼む、翁心得たりとて、まづ總領を揚名介と付たり、本親きゝて揚名介とは源氏物語の三ケの大事の一つと聞、又めでたき心こそ侍らんとゝふ、翁答て、さればそ方は源氏なれば、源氏にひざうするといふ心につけたといふ、又二番めのむすめは、老女を名付親に頼みけるに、小枕とつくる、本親聞て、是もめづらしき名也、こまくらとは女のかみに用るうつはものならずや、むすめの名につけら

るゝはめでたき心有やとゝふ、老女こたへて、小まくらいれてゆふかみは、ぐなつかぬなり、さればかみがかたくなるといふ心につけたるとなり、まことにいわゐ事はくちからにて、それよりたがひにいのち五百八十年〳〵、

寛文十一年辛亥孟春吉旦

大傳馬三丁目
うろこかたや板

私可多咄卷之五終

一休咄序

此年頃くるす野のかたはらにねまりゐて、萩の下枝をあつめては雨もる宿の漏をとめ、篠の葉をならべては、嵐をふせぐよすがとなして、一鉢のまふけ藜の羹をすゝりて、うつら〳〵とねぶり暮しけるが、頃しも秋のすゑ、千代を一夜の長々しさに、ひとりねも寝られまじく思ひて、庵ちかき御寺へまいらばやと、とじよりこいとはいはねど、鳩の杖にすがりてよろぼひ出て、御寺の大ぐりの長爐のはたにかまへければ、小沙彌小喝食達出合給ひ、煎茶を給はり、むかし物語をせよと仰せられければ、祖父祖母との咄よりしらぬ我なれば、かしこまりたりとは申せども、山へ洗たくしに、川へ柴かりにと申ければ、ふるめかしの咄やな、いで此寺の先師一休和尚の放氣咄してきかすべしとて、ひた物がたり給ふをきけば、我も人も覺たるはかたことまじはり也、扨もおもしろや有がたやと思ひて、忘れては大事也と、菁紙の雑紙の皺をのばし書付、歸りてみればえこらへぬ者也、又參りて承り、そろり〳〵と鼠の鹽なむるがごとく聞覺、かへりては猫の爪磨ぐがごとくに書付、二三冊となして一休咄と名付秘してけるが、或時又御寺へ參り、おかしき達に問けるは、扨も一休和尚はいかなる御僧やらん、犬うつ童牛つかむ男までよく知申候といへば、それ一休和尚は後小松院の二の宮なり、世人の口にある歌にも、後の小松の二葉と詠ぜられける也、誠にいともかしこき人にてまし〳〵けるが、高き御位をもふみちらし大内を跳出て、十宗をたゞ一目に白眼付、達磨宗となり給ひて、九年面壁をも賊のあとの棒ちぎり木と見立て、其身はあさがら程にも思はず、うき世をばへうたんよりかるくもてなし、邪なる葫なく竹二つにわりたるがごとくの御志なりし也、路人の口碑にあれば、舌の頭の隙とし侍ると仰られ候し、扨は彌有がたし、我ら一人して見るのみも罪ふかし、梓に鏤めて、夢の世わたる人々の煩惱のねぶりさましと思ふなりと人に語ければ、一休の御事は狂雲集にくはしくと申もあへず、狂雲をもとめて見れば、まことに御一代のたはぶれは殘らぬそうなり、され共其書はもろこしのかたくな文のごとく書たれば、我も人もはぶしはつよけれ共、讀くだく事ならず、偏に胡椒

丸のみなり、風をひかぬ養生ばかりにては詮なし、よし同じ事にても、おぼしき事いはざれば腹ふくるゝわざなり、たとひ狂雲集には住吉の神なり共、是を人に見せぬもいと口おし、さてかくあらはし侍るなり、

一休ばなし目錄

卷之上

目録終

一休ばなし卷之上

(一)一休和尚いとけなき時より、常の人にはかはり給ひて、利根發明なりけるとかや、師の坊をば養叟和尚と申ける、こびたる旦那ありて、常に來りて和尚に參學などし侍りては、一休の發明なるを心地よく思ひて、折々はたはぶれをいひて問答などしけり、或時かの檀那かわばかまを着て來りけるを、一休門外にてちらと見、内へはしり入りて、へぎに書付立られけるは、

此寺の内へかわのたぐひかたくきんせいなり、若かわの物入る時は、其の身にかならずばちあたるべし、

とかきて置れける、かの旦那是を見て、皮のたぐひにばちあたるならば、此お寺の太鼓は何とし給ふぞと申ける、一休聞給ひ、さればとよ、夜晝三度づゝばちあたる間、其方へも太鼓のばちをあて申さん、皮のはかまきられけるほどにとおどけられけり、其後かの旦那養叟和尚を齋によぶとて、一休も御供にと申、かの

と待り給へば、旦那も養叟も手を打、口をあいてふさぎかねられけると也、扨御齋を出しけるが、今一度不審せばやと思ひ、一休にはわざと魚類の膳をすへけり、めづらしくやおぼしけむ、ひた物食給ふ時に、旦那、人しれぬ衣めしたる御僧の、したゝか魚をまいることよとたはぶれければ、一休聞き給ひて、口はかまくらかいだうなれば、貴きも行、いやしきもすぐとのたまへば、かゝる者も通り候べきかとて、刀をするりとぬきける、一休すこしもさはがず、てきかみかたかとこふ、てきなりといふ、しからば通す事ならず、いやみかたなりといへば、其まゝけへん〳〵との給ひて、くせ物がとをるとて、只今にはかにせきがすはりたるはといひ給へば、旦那も和尙も此お小僧の口にはかたれまじとて、ことの葉なく舌の根をふるひてやみぬ、

（二）一休和尙十二三の時、師の坊につかへて、物よみ手ならひなどしておはせしに、折ふし夜さむの頃なれば、師の坊からざけをあつものとして、たゞひとりまいりて、一休へはたうふやうの物まいらせられけるに、一休これを見て、およそ出家は、なまぐさき物

返報せばやとたくみけるが、入口の門の前に橋ある家なりければ、橋のつめに高札をかなにて書て立てける、

此はしをわたる事かたくきんせいなり、

と書付ける、養叟齋の時分よしとて、一休をめしつれかの人の方へ御出あるに、橋の札を御覽じて、此橋わたらでは內へ入る道なし、一休いかにと有ければ、一休申さるゝは、いや此はしわたることゝ、かなにて仕たるあいだ、まん中を御渡りあれとて、眞中をうちわたり內へ入給へば、かの者出合、きんぜいの札を見ながら、いかではしわたり給ふぞとゝがめければ、いやわれらははしはわたらず、眞中を渡りけると仰せらるれば、亭主も口をとぢ侍るが、何がなお小僧に不審申さんとて、又いはく、凡沙門のかたちといつぱ、にんにく二體の衣を着、ざいしやうさんげのけさをかけてこそ僧とは申すべけれ、いかに小僧なりとて、俗衣の出立心得がたく候と申せば、一休おさなけれ共、歌一首よみて答られける、

きてきたぞ本來空のくろごろも
　　袖ながからで人こそはしらね

をくはざるよしうけたまはりしが、和尚はからざけをまいるよ、くるしからずばわれらもたべんと申されける、師の坊おかしくおぼしめし、なんぢらがやうなる小僧の身として、なまぐさものくふ時は、たちまち罰あたるなりと仰せられければ、一休眉をひそめて、しばらくしあんして申さるゝは、おなじ人間の身として、小僧にのみばちあたらむや、老僧こそなまぐさき物まいらば、ばちはあたるべけれとて、あざはらひておはしければ、師の坊のたまふは、いとけなき身として、心たけたるいひやうかな、さればよ老僧とて御ゆるしはなけれ共、われらはゐんだうをして食也といひ給へば、其引導いかなることやらん、少々うけ給りたしと申されければ、さて〳〵わごぜはこしやくなる人や、いでいんだうしてきかせんとて、一盃もりたるからざけをさゝげて、箸おつとりのべてのたまはく、

なんぢ元來枯木のごとし、たすけんとすれ共生て二度水中にあそぶことあたはず、愚僧に服せられて佛果を得よ、喝、

との給ひて、ひたものまいりける、一休つく〴〵と聞て、又眉をひそめてしあんして、夜のあくるを待かねて、いそぎ魚の棚へはしりゆきて、したゝかなる鯉を一献買とり來りて、味噌汁をこしらへ、かのこゐをひんにぎり、ながたなをおつとりのべて、ほそくびちうに打おとさんとせられける所へ、師の坊立出御覧じて、是は沙汰のかぎりなり、昨夜もしめしをしへしごとくに、いとけなき小僧の身として、からざけだにも無用といひしに、其いきてはたらく物をがいしてくらはん事、もつたいなしといましめ給ふ、一休すこしもさはがず、われらもいんだうおはしますとて、去らぬていにておはしける、師の坊もあきれはて大に笑ひて、それはいかなるいんだうぞや、もししからばゆるし申べし、しからずばのがすまじとて、かの御家の一棒をこはきにかいかふて、ゐんだういかにとせめられける、一休すこしもさはがず、いで引導仕らんとて、左には鯉のほそくびひんにぎり、右にながたなをしやにかまへていはく、

なんぢ元來なま木のごとし、たすけんとすればにげむとす、生て水中にあそばんよりは、しかじ愚僧が糞となれ、喝、

とて、鯉のほそくび水もたまらず打おとし、ぐつ〳〵とかい煮てしたゝか食て、そらうそ吹ておはせしが、師の坊これを聞き、さてもよき引導ぶり、手がはりなる心得かな、昨夜のわれらがいんだうにては、からざけが佛果をえずしてくそとなるべし、なんぢが鯉はくそとならで佛果を得たり、さて〳〵活機なる人や、禪僧なるぞや小僧殿とて、彼一棒をからりとすて、舌をふるひてのたまひけるは、三年になる鼠を今年生れの猫子がとるとはかゝることをや、とかくになんぢは、たゞものにあらじと感じ給ひけるが、あんのごとくほどなく天下老和尚とみづからいへる程の活祖師にて、一休とて名を千歳に傳へ給ひて、田をかえすぢい、のりをするあま迄、物語のするまでもそれぞと人にいひもてはやされ給ふこと、誠にたゞ人にてはましまさゞるなり、

(三)一休和尚御諱は宗純と申せしが、別號を一休と名付給ひけるに、或人來て、一休と名付給ふ御心に、いかなる御心得にて侍るやとたづねければ、よくこそたづねめされける、去ながら一休にふかき心もあらざれば、かたりて聞すべきやうもなし、聞給へとてよめりけるは、

有漏路より無漏路へかへる一休　雨ふらばふれ風ふかばふけ

とあそばしければ、彼もの聞て、さてもおもしろさふなる御歌や、有漏無漏とはいかなる事にておはしけるぞとたづねければ、御そばなる拂子をとりて彼者の顔をなで給へば、目顔しかめて僻ける、一休拂子を引、合點かとのたまへば、いや何事かなさるゝとおどろきたるばかりにて、何とも心得ずと申、その何とも心得ぬ處が無漏路なり、はつとおどろく所が有漏路なりと仰せられければ、彼俗肝にめいじて、有がたや即時に大事をさづかりけるとよろこびて、さて御歌の一休とは心得申候、雨ふらばふれ風ふかばふけとは、いかなる御心にて侍りけるぞ、さればよ、わづかの道のことなれば、雨も風もいとふ事侍らずと仰せられければ、扨も有がたき御歌や、おそれながらたゞ今さづかり申せし心を、一首申して見んと申されければ、それはきどくなることゝろざしやとのたまへば、彼俗よめり、

有漏路無漏路一やすみぞときくときは

十まんおく土すんさきとしると仕りければ、一休きこしめし、善哉々々とて尻餅ついてよろこびたまひて、かゝるためしもろこしにも侍りし事也、四休居士といふ人有けるに、山谷といふ人その四休の心をとひければ、四休わらひて答ていはく、麁茶淡飯飽即休、補レ破遮レ寒暖即休、三平二滿過即休、不レ貪不レ妬老即休と申されければ、山谷がいはく、これ安樂の法也、それよく少時は不伐の家也、足ることをしるは極樂の國なりと感じて、したしくかたりて、四休の心を詩三首につゞりてうたひたのしみしとかや、其一首に

富貴何時潤髑髏 守錢奴與抱官囚
大醫診得人間病 安樂延年萬事休

と侍りしによく似たり、一休の心をとひて、今其方の歌よむ事よと感じ給へば、彼人申すやう、一休の二字をたづねて四休の四字をしる事、まことにもとめずして得を幸と注せしとかや、これ幸なりとよろこびけるが、かの四休の内三平二滿とはいかなることやらんと申ければ、其方の内方よとのたまへば、合點まいらず、見にくきといふ心かと云ふ、いやさにはあらず、おとごぜのことなりとのたまへば、扨もめづらしきことかな、誠に三平は兩の頰と鼻、二滿は額と頤よ、おもしろき故事や、去ながら女どもにきかせば、一休樣をつめり申すべしとわらひて歸りける、

（四）一休の時代に蜷川新右衛門尉親當といふ人有けるが、禪法に身をやつし心をなやましけると也、一休の發明なる事を聞及びて、導師とたのみ奉るべしとて、或時一休の庵室へたづね行て、柴の扉をほとほとと扣く、折節一休出たまひて、いかなる人ぞと問給へば、いやくるしうも候はず、佛法修行の大俗參りて候と申されければ、一休はや問たまはく、

なんぢはいづくの人ぞ、　答云、和尙と同國、

國には何事も侍らぬか、　鴉はかうかう雀はちうちう

こゝはいづくとかしるや、紫に染たる野邊、

いかんとしてか染けるや、尾花、槿、紅菊、紫蘭ちりての後いかん、　宮城野が原、

原には何事か侍るか、　水は流れて沈々風は吹て颯々、

よきかなやこれへこれへと請じ、茶をまいれとて一首よめる、

何をがな參らせたくは思へども
　だる磨しうには一物もなし　　一休

返歌、

一物もなきを賜はるこゝろこそ
　本來空の妙味なりけり　　親當

と申されければ、一休のたまひけるは、聞及びしより蜷川殿は道心者なりとて感ぜられける、扨四方山の物語過て親當申されけるは、少し承り度事有、邪正一如と云心得はいかなるが能く侍るや、一休聞給ひて、わごせは歌ずきなれば歌にて一々答へ侍らん、聞給へとて、邪正一如の心を、

生れては死ぬる也けりをしなべて
　しやかもだるまも猫も杓子も

又とふ、空即是色とはいかん、こたへていはく、

しら露のおのがすがたは其まゝに
　紅葉にをけばくれなゐのたま

又とふ、色即是空の心は、前の歌心をかへして見べきや、答てよめり、

花を見よ色香もともにちりはてゝ
　こゝろなくても春はきにけり

又とふ、佛法とはいかなる心得をよしとし侍るや、答てよめり、

佛法はなべのさかやき石のひげ
　繪にかく竹のともずれのこゑ

又とふ、世法はいかに、こたへてよめり、

世中はくふてはこしてねて起て
　扨そのゝちは死ぬるばかりよ

と、一々とふことばの下に歌よみてこたへられければ、親當舌をふるはかして、聞及びしよりたけき活僧かなと頼もしく思ひければ、いよ〳〵道をしめしたまはれ、いつまでかたるとも濱のまさごの數々なれば、先御いとま申すとて、しおりがきの邊まで歸りけるが、手をはたとうち立歸りて、一大事のあんじんわすれたり、佛にはいかゞしてなりけるぞと申されければ、一休きやつはくせものかなとおぼしめし、それはいとやすき事なりとて、ふんぞりかへりて目口をひろげて、かくして佛にはなるよとのたまへば、親當おどろき、活大禪師かなと心空及第してこそかへりける、

(五)一休和尚ならのたき木と云處に折々はおはしま

しける、其邊の村々は近衞殿の御領地にて有けるが、左近尉と云家老、百姓をひたものせぶり取けるに、百姓共是をなげきて、いかゞせんとひしめきあへり、其中の老人申けるは、いかに百姓のわたりきつしとても、武家とははるかちがふべし、御公家の長袖なればと訴申て見んとて、訴狀をたくみける所へ、折節一休鉢をひらきに出給ふ、百姓共一休を請じ、此訴狀御書下されよとたのみければ、やすき事也、いかなることぞとのたまへば、しか〴〵のことにて侍ると申ければ、長々しき狀までもいるべからず、是をもちて近衞殿へ捧げよとて、歌よみてやらせたまふ、

よの中は月にむらくもはなに風
　近衞どのには左近なりけり

とよみてこれをつかはされければ、村々の百姓、かゝる事にては免おほく給はること思ひもよらずと申ければ、一休ひらさら此歌のみ捧げよと仰られて歸り給へば、おの〳〵せんぎしけれ共、本より土のつきたる男共なれば、一筆よみかく事ならざれば、せひなくかの歌をさゝげければ、近衞殿御覽じて、是はいかなる人のしけると仰せ出されける、百姓申けるは、たき木の一休の御作にて候と申せば、その放者ならでは、かゝる事いはん人は、今の世に覺へずと興じ給ひて、おほくの免を下されけるとなり、

(十八)關の地藏をはじめて作りし時、所の人々よりあひ、此開眼をばいかなる御僧にかたのむべしと、皆々口々に評定しけるに、其中に一人申しけるは、我等今度京都一見仕りし時、京童のいひしは、今の代には紫野の一休にまさる僧はあらじと申しける、いざやこれほどの地藏をこしらへ、よのつねの僧に賴まむよりも、一休和尚を請ずべしといひければ、おの〳〵然るべしとて、はや都のむらさき野へと急ぎける、折節一休寺に御座有ける、關の者共御禮申、件の由をくはしく申上る、一休のたまひけるは、幸關東しゆぎやうに出るなれば、たちより開眼してまいらせむと仰下さるゝ、里人よろこびはしりかへり、一休こそ御下りなれとて、上を下へともてかへし、なけれど道の塵をとり、あたまを棒につき、跟をぼんのくぼにつけて、御迎ひに出ける、一休たゞ一人すご〳〵と來り給ふ、皆皆よろこび先御禮を申す、一休かの地藏はこのたまへば、さしもけつかうなる地藏をつくり、供物をそな

へ香花をたむけ、しやうごんおこたらずぞ見へける、扨開眼して給はれとて一休を請じて、いかなる事か有やらんと、われも〱とのびあがり、おしあひつまづきなどして見る處に、一休つか〱とはしりより、彼地藏のあたまから小便をしかけ給ふこと、廬山のたきのごとし、種々の供物もうきになりながるゝばかりしかけて、開眼はこれ迄なりとて、あづまをさしていそがれける、所の人々これをみて、あら勿體なの御事や、きやうがるやせ法師の物ぐるひをつれ來り、かかる大事の菩薩に小便しかけさせけるとの腹立さよ、彼法師めのがすなと、我も〱とはがみして追かけけるが、尼入道はよりあひて、扨ももつたいなや、一休坊主めがしけるとはとのゝしりて、清水を掬來りて彼地藏にそゝぎかけて、小便をあらひおとして、又供物をしなをし、ゆるし給へと禮をなしけるが、彼追かけゝる若者も道にたふれ、彼小便あらひしもの共もわなゝきふるひ、狂亂して口ばしりけるは、天下の老和尚一休の開眼なされしを、なにとてあらひ落しけるぞとのゝしりて、みな〱物に狂ひしかば、妻子眷屬おどろき、やれ彼一休和尚を追かけ、いま一度開眼をたのみ奉れと、我も〱とおつかけゝるに、桑名の渡舟に乘給ふ所にてぞおひつきけるが、彼段々はしく申ければ、それは不便のことなれども、是よりかへるに及ずとて、布下帯の八百年ばかりにもなるらんとおぼしきを取出し、これにて地藏の首をくゝりをけ、忽にやまひは治すべしとのたまへば、彼者共勿體なしとは思へども、前のきごくにおそれて、おづおづ御請申ていそぎ關に歸りければ、一休は關東へいそぎ給ふ、さて里人かへり、仰のごとくおづ〱地藏の首に、かのふる下帯をまとふとひとしく、みなみなものゝ氣のきしかば、扨も名譽の御事なりとて、其下帯をえはづさゞりけるに、一休御上りの時又立より給ひて、かの首の下帯をはづして、かねの緒にかけて都へ上られける、それよりして今の世の佛神のかねのをを、下帯のたけにくらべ、六尺に定めけるとなり、ふしぎ成事共也、

(七)一休一大事因縁の御工夫なされし時、諸旦那あるひは御伴達衆、毎日詰きましてさまたげとなりければ、かしがましくおぼし召て、御心地あしゝとて一ゑん人々に出あひ給はず、みな人心もとなくて、おり

おりに御見廻申侍れば、御長髪鬅々とし給ひて何とも色見へず、御なやみとのみ仰せられける、旦那をさきとし御知音衆もより合、是はきづかはしき事なりとて、時の名醫を入かへ〳〵かけまいらせて、御いたはりはいかにと聞ば、醫師申されけるは、御脉はいかにもよし、ふしんなる御煩とどれも〳〵申ければ、ある時旦那知音衆よりあつまり、此御なやみの様子は、如何様濕熱のなやみとは見へず、若き御僧のことなれば、もしや戀などをばなされて、かく思ひわづらひ給ふこともやあらむと一人申ければ、をの〳〵、此義尤しかるべし、とやせんかくやあらんと口々に申されけるが、いや〳〵人おほくしりたりとおぼしめさば、あかし給はぬこともや侍らん、ひそかによき中の知音のみ二三人見廻て、そとうかゞひ侍らば、誰と名ざし有べし、しからば誰人にてもあれ、此もの共がかかりなば、などか御本意をとげられぬ事は有べからずと、たのもしくいひあはせて、ひそかに三人参りたり、一休出あひ、四方山の物語すみて、一人申出しけるは、此間さま〳〵の御療治にても、御みやくは常にかはらずと醫師おの〳〵申也、平生にはちがひて、何とて心ふかくわたらせたまふぞや、定て戀をなさるると見つけ侍るはひが目か、有のまゝに仰せられよ、かなへて参らせむと打つけて申ける、一休いかにもうれしげなる御かほばせにて、此上はなにをかさのみかくすべし、此日來戀わびて、扨かくのごとくやつれはてゝ候也、よくこそ仰出されたり、何とやらんわれらにはあはぬ事にて侍れ共、おの〳〵は日來のよしみなれば、ひとへにさたなくかなへてたべ、去ながらいとによる物ならなくに、心みだれてはづかしや、それぞと名をば面上にてのべがたし、一筆かきて参らすべし、門外へ出給ひておの〳〵ひらき御覧じて、いそぎかなへて給はゞ、我等が命はながらへて、おのおのには其替りに能き道をしへ仕らんとて、おくの間へずんど入、一筆さらりと書て引むすび、彼三人に渡し給ふ、三人よろこび、御心やすく思しめせとて罷出、門外へはしり出て、扨こそ申さぬ事かとて、いそぎ其名のしらまほしくて、彼ふみひらきて見れば、御歌あり、

ほんらいの面目坊がたちすがた
一目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達磨も阿羅漢も
　此君ゆへに身をやつしけり

さかゝれたり、三人のもの共案に相違して、よこ手をはたと打、ひごろの御心もしらぬ身が、あらぬわざを思ひけるこそおかしけれ、今にはじめぬ御ごうけに、たばかられけるこそおろかなれ、まことに有がたき御僧かな、畫にうつし木にきざめるはおほけれど、わたもちの釋迦如來なりと、おがまぬ人はなかりけり、

（八）一休和尙は蛸が御好物にて、或日のつれ〴〵にたこを買につかはされけるに、折ふし棚にきれて、彼つかひの者こゝかしこと尋ねて、おそくかへりければ、待わび給ひて一首侍りける、

此たびはいそぐといふに長袖の
　たこの入道みちのおそさよ

とあそばしける處へ、蛸四五盃買もて來りければ、一休よろこび給ひて、此たこむざ〳〵と食もむざんのこと也、引導のなくてはとて、一首、

千手觀音蛸手多　刺懸₂柚酢₁拜₂如何₁
佐州一味天然別　他禁戒任₂老釋迦₁

やれ引導はすみけるぞ、火葬にすべきか土葬にせんか、いや〳〵すひさうにせよとて、手どりあしどり手に〳〵もくよくさせて、柚醋をかけてひたぐひに食て、さる檀方へ行て酒などまいりけるが、餘りにおほく蛸をまいりければ、吐却なされけるに皆たこ也、且那衆是を見ておどろき、かへりて申けるは、一休和尙は佛のやうに思ひしに、蛸をまいりけるが、なまぐさ坊や、是は〳〵とあざけりわらひければ、一休すこしもさはがず、いやとよ、われらはたこをたべね共、口より出ればせん方なし、さりとてはくはぬと、まつくすみになりてあらがひ給へば、口より吐出したるものを、くはぬとあらがひ給ふかや、いよ〳〵きこへぬ御坊やと、おどりあがりてわらひければ、いで〳〵わごぜ達に、くはね共口より出たるしやうこを見せんとて、皆々引つれて百萬返に行て、善導法然の畫像を見せて、あれ見給へや人々よ、ぜんだうのあみだをくひしことはなけれ共、口より三尊の彌陀佛出たまへば、善導大師さへ、くはねど口より出るあみだをせいしがたし、ましてや愚僧、くはね共口よりたこの出ること、さらにせん方なしと仰られければ、みな人こよ手を打て、さても頓作なる御返答やと、口をとぢてかへり

ける、
（九）一休和尚は生佛にて、魚をまいりて水中へはき出し給へば、其魚たちまちいきかへりてもとのごとくになると、洛中に此事專なりと或人來りて語りければ、一休おかしくおぼしめし、洛中の辻々に高札をこそあげられける、其ことばにいはく、
來るいつゝいくかの日さがり、松のほとりむらさき野におゐて、魚を食て其まゝもとの魚にはき出し、水中におどらさしむる事也、御望のかた〲御見物に待奉る、
太夫は天下老和尚一休大禪師
とぞかゝれける、洛中の諸人是を見て、うそかまことか、かくとは人々いひけれど、まことしからず思ひしに、さてはうたがふ所なし、正しく御自筆にて高札を立らるゝ上は、しるしなくてはかなふまじ、いざや人人見物して、末代のかたり句にせよやとて、しるもしらぬもみたもみぬも、其日の來るを待かねて門前に市をなし、我見もらさじとところぶまでのびあがりて、洛中の貴賤ぐんじゆせり、其刻にもなりしかば、大たらゐに水を入、なるほど魚を能く料理て、彼たらゐのほとりに御膳をぞすへける、一休出たまひて、さてはんぎりにむかいて、喝々とのたまひて、しばらく目などをふさぎなどしたまへば、見物のくんじゆ御顏をまもりゐ、生たる魚をはき出し給ふかと、今や〱と待居たるに、しばらくありてのたまひけるは、おの〱はる〲の御出なる程に、いつもより一きは手ぎはにはくべしと種々思案をするに、中々はかれそうにもなし、ぜひにおよばず糞になりとひりて捨申さむ、はやおの〱も御かへりあれとて內へ入給ふ、上下萬人きもをつぶし、さてもおどけたる御坊と、興をさましてかへりけるが、其中に心ある者のいひけるは、たゞ今參りたる魚は、みないきて淵におどる也、有がたき一言かな、まことに正法にきどくなしとこそうけ給はりしに、人のあまりいはんとて、ふしぎなることをいひて、一休をほめんがためにかへつてそしるなれば、其理をしめし給ふ、有がたし〱と感じければ、みな人是に氣がつきて、合點したも合點せぬもうなづきあへりて歸りしと也、
（十）白河の邊にすまひしける桑門に、名譽なるかかる

口の人侍りけるが、一休のかる口なることを聞及びて、いつぞは行て難句をしかけて心みんと、常々心がけられけるが、不斗思ひあたりたるしゆかう有ければ、さらば一休へ參りて御知人にもなり、扨一句してみんと、はるぐ\と白河邊土より紫野へとぞいそがれける、折節一休も庵にましく\て御しる人になり、とかくふるほどに、內々たくみし一句の句作も出來ければ、彼僧申されけるは、うけ給り及びし御かる口を、何にても一句あそばせかし、何とぞ付て見侍らんと申されければ、一休仰せらるゝは、客發句に亭主脇とこそ申せ、先其方あそばせとありしかば、內々たくみをきしことなれば、さらば申て見んとて、なん句をこそは出されけるが、此所は何と申す、むらさき野と仰られければ、

紫野丹波近

させられければ、いまだ息もひき入ぬに、はやつけられけるが、そなたはいづくの人ぞ、白河の者也と申されければ、

白河黑谷隣

とあそばしければ、彼僧肝をつぶし、さしもむづかしき章句なり、一句の內に二つの色字、二つの所の名、いかなるへうたんの川ながれなるかる口も、少はしぶりし給ふべしと思ひしに、貝とるあまならで、息もつぎあへず付給ふ、かゝる名對ある上は、はちやこはしとて空うそぶひて、尻をからげてにげられけるとなり、

(十二)或人畫書の土佐守に、內々掛畫を一幅たのみければ、終にかきてつかはさず、彼人心せきて直に土佐が宿へゆきて申されけるは、折ふし太皷うちねにはあらねど、ひるねをしてこそ居けれ、かの仁常々したしくかたる中なり、又內々賴みをきし事なれば、引づりおこしかゝされける、土佐眠るにたえたり、たとひ一夜ねずとなり共、晩に書てまいらせんとておきず、しかれども又晩といはゞ、あすか川の淵瀨と心がはりもやせん世中なり、ひらにといふ、是非なく筆をとり、くるぐ\とまはしてはけおつとり、さつとかいてこれく\とてふせりける、望み足ぬと其畫を取てかへり、ひねくりまはしてみれ共、何ともさらに體なく、水を書て其中に一筆くるぐ\としたるもの有、さらに見わけられず、餘りにがつてんゆかざれば、土佐

方へもたせつかひ、なになると問ども、我らもしらずと云、かゝる畵を持てなにかせん、引やぶらんと思へ共、三國一出來たり、とやせむかくやあらましと思ひけるが、いや〳〵一休和尙に賛をこひて掛物とせんするぞと、いそぎ大德寺へはしり行、一休に申上けるは、此畵は土佐守にかゝせしが、さらに此水の中のものしれず、いかゞ御覽あると申ければ、されば何共見へね共、賛のぞみならばしてとらせんと仰せられければ、かたじけなしとて賛をこふ、一休其畵に賛し給ふは、

水中に物あり、その一物をとへば、かきし畵工もしらず、持主もしらず、賛する我は猶しらず、

とあそばしければ、見る人開く人、扨もまつすぐなる御心ばせや、むこならで三國一の掛物なるべしといひしが、いまにおゐてそのかけ物、たゞうとの手にはあらずとかや、

(十二)或寺に五百羅かんを作りて堂供養しければ、貴賤群集のけんぶつ有けり、法事やみて後、其寺の僧羅かんの前に香花などとりてゐけるに、こびたる世俗二三人らかんを見物し、みな〳〵人されども、此もの共つく〴〵と見居りて、扨かの僧に問けるは、此五百らかんに一々名こそおはすらん、御坊は定めて御存知あらん、うけ給りたしと申ければ、此僧三尊の外は一人もしらざりければ、何共物はいはずして方丈へにげ入ける、折節一休その寺に居給ひて、何事なると問給へば、しか〴〵と申さるゝ、一休のたまひけるは、いらざる俗のとがめごとや、かくて藝にもならざることを、たれかは覺へ侍らん、われもしらね共いでいで云てきかすべしとて、羅漢堂へすゝみ出て、こなたへ物申さん、らかん達の名の御のぞみかと仰せられければ、おそれながらうけ給りたしと申ける、さらば一々とひ給へ、先眞中なるはしやかむに、左なるはかしやう、右なるはあなん、さて次はと問ば、南無さたんど、其次はととへば、すぎやとや、其次はととへば、おらこちと、一々しり給はねば、れんげじゆにて答給へば、五百らかんのことはおき、百貫羅漢をとへども、なにかはつまり給はんや、かの俗こと〴〵くとひて、扨もよき御覺かなと申ければ、さもなく候、いにしへは一巻はかりは中に覺て候へども仰せられければ、笑ひてかへりけると也、されば時にとつて頓作なる

御心入と、人みな感じけると也、問て用にたゝず覺えても用にたゝぬことをば、いはざるにまさるめでたし、よしなきことをすこびて問あやつられける、すべて羅かんのみにもあるべからず、

(十三)元三は歳のはじめ、月のはじめ、日のはじめとて、一天四海の人々の、かしこきも愚なるも、愁あるも愁なきも、貴もいやしきも、いはひかざることかはる事なしとみゆ、屠蘇白散(ごぶろこ)にはなり共鬚につけ、おかゞみすはるとて尻餅なり共つきて、それぞれにいはひませるありさまは、まことにきのふにかはりたるにはあらね共、空のけしきものどやかに霞わたり、大路のさゝ松立わたし、家にはながき代のためしといふしめなはを引まはし、昨日の夜半過るまで人の門たゝきて、何事にかあらんことゞしく足を空にまどふが、たゞ一夜あけぬれば、ひきかへ心もゆる〳〵と、又とも晦日の來るべき心もなくて、野邊の小松に千代萬世をいはひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに、萬のことをいみおそれ、朝の露に名利をむさぼり、夕の陽に子孫を愛し、蟻が磨をめぐるがごとく、おなじことをくるり〳〵と、五百八十年七まがりといはひて、世を秋風の心は露ちりほどもなき人心を、一休おかしくおぼしめし、誠におろかなるかな、槿(あさがほ)の晷(ひかげ)まつ間をもさかり久しき花とながめ、かげろふの青天に羽をふるひて、たのしむ間もなき世の中に、くそにはくぬる正月こさばや、たゞ時の間の慰ともなりなむと、打見るより思はるゝ、いで物見せん人々よと、はかはらへゆきてしやれかうべをひろひ來り、竹のさきにつらぬきて、ころは正月元日の早天に、洛中の家々の門の口へ、如皷々々と彼しやれかうべをさし出し、御用心〳〵とてありき給ふ、皆人いまはしくて門さしこめて居けるより、今に正月三日は門戸を鎖しける也、しかれば一休を見まいらせて、或人のいへるは、御用心とは尤至極なり、いはひてもかざりても、終には皆人かくのごとし、されども世の習ひにて、かくいはひよろこぶに、そのむくつけなきしやれかうべを、家々へ出さるゝことは、御ちがいならずやと申ければ、さればよ、われもいはひて此しやれかうべをおの〳〵に見する也、めでたしといふこといかゞ心得けるぞや、むかし天照おほんかみ、岩戸をひらき給ひしよりことおこるといへ共、此しやれか

うべよりほかにめでたきものはなしとて讀る、
にくげなき此のしやれからうべ穴賢
目出度かしくこれよりはなし
と侍り給ひて、是見よや人々、目出たるあなのみ殘り
しをば、めでたしといふなるぞ、皆人ごとにかくとは
しるらめど、きのふも過し心ならひにけふをくらし
つ、あすか川の淵瀨常ならぬ世とは目に見ぬからに、
風の音にもおどろかぬ人々に用心せよとおもふ也、
たゞ人は是にならねば、目出度事はなにもなしとの
たまへば、諸人これを聞て、さてもかしこきひじりと
て、おがまぬ人はなかりけり、
(十四)西の國の大名身まかりけるに、今はの時に申
されけるは、我死して後しゆ〴〵の佛事をもつとむ
べからず、むらさき野の一休禪師を請じて引導を賴
み申せ、是より外にのぞみなしとて死しける、人々な
げきて、御遺言なればとて、いそぎ都へ使者をたて一
休を請じける、一休折節ありあひ給ひて、やすきこと
なりとてかの使と打つれてかけり下り給ふ、葬禮の
日限きはまりしかば、音に聞へし紫野の一休和尙こ
そ、此國のなにがしに御引導のためとて、御下向あり
しとこそいふたれ、國々島々よりきくほどの人、是を
空にまどふて貴賤くんじゆし、うもんせむとぞひしめきける、葬禮の儀式、天には花
をふらし、地には錦を敷き、ことばにものべがたくけ
つかうを盡し、其日になれば數萬の見物、かの一休の
導師をぞ聞べけれど、おしあひへしあひしけると也、
さて玉のこしをかきすへければ、一休立出給ひて龕
の前に一默し給ふ、諸人いまや〳〵と耳をそばだて
居るに、一言をいひ給はず、天を見て口をひらき、地
を見て口をふさぎて、さつとひきこみ給へば、彼大名
のみだいきん達をはじめ、一門家來の人々、是は如何
なる御ことやらむ、せめては一句をしめし給はれと、
御衣の袖にすがりつく、諸人の見物も興をさましけ
れば、一首の歌をよみて、都をさして上り給ふ、人々
是非なくその御歌を見れば、
我はたゞ後世のをしへをしらぬなり
あうんの二字のあるにまかせて
と侍り給へば、皆人これを聞て、あともうんともいは
れざる御僧かなと、默して感じあへりしと也、
(十五)一休和尙は天下の活僧なりしとて、諸宗もを

しなべてたつとびけるなれば、いづれの上人長老もあがめ給はずといふ事なし、ある時一休黑谷へ御まいり有しに、寺中の人々一休をみ奉り申けるは、今の代に活佛と人ごとにいへるは此禪師なり、よき折かなれば、いざや當寺に侍る善導法然の畫像に讃をたのみ申、かの念佛無間とてあざける日蓮宗に見せて、禪宗の佛心宗だに、かく此方の祖師はたつとび給ふと高言にせばや、かるき僧なれば定て讃し給ふべしと申ければ、おの〳〵此儀然るべしと相議して、やがて一休を方丈へ請じ申、件の畫像を取出し、賛をたのみ奉る由申ければ、あんのごとくやすき事なりとの給ふ、すなはち硯と畫像を御まへに出しければ、さらりとひらき一覽あり、筆をつ取給ひ、先善導大師に讃していはく、

末法出現名善導　則是彌陀化身也

濁世末代導惡人　一切衆生易往生

法然上人には、

傳聞法然活如來　安坐蓮華上品臺

尼入道同愚痴輩　一枚起請最奇哉

と即時にあそばしければ、扨こそとておの〳〵よろこび侍りて、此兩佛に淨土宗としてかく讃をいたさば、家の事なればてほめにしたるとて、又日蓮宗があざけるべきに、かゝるうれしき事こそなけれと、かの讃を日蓮宗に見せて、大きに廣言をぞ申ける、其頃は殊に日蓮宗と淨土宗とは中あしくて、犬のいがむがごとくし、牛つきまなこをいからしければ、日蓮宗かの讃を見て大きにはらを立、一休をそねみにくみけるが、其中に一人申けるは、いや〳〵一休の御心は、ものにかざりなくすなほなる御事也、いざや日蓮大聖人の像をかゝせ讃を乞て見ん、あれ程の褒美は有べしと申ければ、もつともしかるべしとて、いそぎふためきて畫をかゝせ、やがて一休へもちて參り賛をたのむ由申ければ、もとよりかるき御僧なれば、やすきことゝのたまひ、彼畫をひらき御覽じけるが、此畫は扨もちいさくかきて、うそ黄なる衣をきせけるよとわらひ給へば、人々申けるは、さん候、いかにもけつかうに大きにかゝせたく存候へ共、先日淨土宗法然の讃をじまん申候ゆへ、口おしく候ひて、取ものも取あへず、先ちくりげにかゝせて參り候、いそぎ讃してたべと申せば、心得候とて、さきの法然の讃を所々な

をして、

傳聞日蓮活如來　香座則是妙法臺
尼入道同愚痴輩　一遍題目殊勝哉

となされ、其おくに

ぼうず〳〵小ぼうずまめの粉にぬりぼうず

とぞあそばしけるとかや、其頃又やうくはん堂の住寺黒谷の賛のよしを聞て、よき寺いかうかつ也と浦山敷おぼしめし、かほどかるき御僧なるに、何にがな此方にも讃を頼み申さんとて、先一山の人々をよびよせ談合せられければ、其中に一人申けるは、なになにと申までもあるまじ、先宗の祖師なれば、當寺につたはる半金色の善導大師の書像に賛をたのまれよと申せば、おの〳〵申やう、げに〳〵是は代々當寺の重物なれば、是にましたる物は有まじ、さらば其方使僧に成給へとて、彼半金色の善導大師の書像を持せ一休へまいり、彼僧一休に對面して申けるは、黒谷の讃のよし承りあまりに浦山敷候ひて、是まで參りて候、あはれ此方の善導にも讃をあそばしてたべと申ければ、それこそやすき御用とて、かの繪をひらき一覽あり、立ながら一筆さら〳〵とかき給ひ、もとのごとくしたゝめ、かの使僧にわたされければ、かたじけなしとて謹でいたゞき、いそぎやうくはん堂にかへり、しか〴〵のよし申ければ、さてもかるき御僧かな、本望はとげたり、まづ一山をよびよせ、讃を拜見せばやとて、やがて人をまはしければ、おの〳〵よろこびはしり參る、さてかの書像を方丈にかけ拜見申ければ、いかにも大文字に歌一首有、其歌に、

黒からん衣のすその黄になるはせん導大しはこをたるらむ

とあそばしければ、みな人どつとわらひ、興をさます人もあり、感に堪たる人もありしが、今の世まで傳へて、天下に一幅の名物となりけるとかや、

一休咄卷之上終

一休咄巻之中

（一）一休堺へ御下りの時、淀の河瀬舟に乗たまひけるに、そのふねの乗あひに山伏有けるが、御僧はなにしうぞと問、一休われらは禪宗なりと答られければ、禪宗にはわれらがごときざくはあらじといひける、一休申さるゝは、いかにもきざくおほし、其方にも何にてもきざくあらば、見せたまへと仰せられければ、いでわれらが法力にて、此舟のへさきにふどうをいのり出して御目にかけむと、一にこんがら二にせいたかをはじめて、もみにもうで祈りければ、皆々のりあひのもの共目と〳〵見あはせたる處に、あんのごとく船のへさきに、たちまちふどうの像くはえんをはなつてあらはれたり、其時山臥ぢうめんをつくりて、おの〳〵おがみたまふかと申ければ、皆人ふしぎの思ひをなしけれ共、一休は更にふしぎにもましまさぬふり也、いかに禪僧、かゝるきざくは如何にし給はんと、せぐりかけて申ければ、我らがきざくには身より水を出して、あの火焔を放つ不動をけして見せん、隨分祈り給へとて、彼不動の像の火焔に小便をしたゝかしかけ給へば、火焔は其まゝきえて山臥の法力つきければ、みな人一休を禮して奇異の思ひをなしける也、扨舟よりあがりて陸路を打つれ行ところに、むかひよりなるほど大なる犬、山河にもひゞくばかりにほえてかゝりければ、山ぶし申やう、いかに御坊、さきの行くらべにこそまけたり共、あのおそろしきいぬのいかりをやめて、たゞ今これへよびよする法力をあらはさんが、御僧はいかにと申ける、一休これはいとやすき事なり、先いのりて見たまへ、若來らずば我等にまかせたまへとのたまへば、山伏大いらたかの赤木の數珠を、さらり〳〵とおしもんで、一いのりこそ祈りけるが、一切犬はほえやまず、手もとへ來るねんもなかりければ、たつさまやよこさまかけて十文字、犬の喉とめよあびらうんけんそわかそわかといへども、犬はほえやまず、一休おかしくおぼしめし、そこのき給へ、それほどのことにあびらうんけんもそわかも入事にてはあらず、あの犬のいかりをやめ、たちまちこゝへ來らせんと、ふところよりひるげのやきめし取出し、かの犬に一め見せてこ

ろ〳〵そのたまへば、さしもいかれる犬なれど、やきめし一目見てしより、くん〳〵とて尾をふりて來りければ、山ぶしも肝をけす、みな人さても各別なる心得かなと、かんにたへてぞわかれけるとや、一(こ)なにがしとかやいへる人のおくがた相果られけるに、今はの時のいひをきに、我等此年まで佛其法ともしらずしてかくなりはつる也、ことに女はつみふかきよし、末の世いと心もとなし、うけ給はり及びしむらさき野の一休は、今の世のだるま殿とやらむいふなる間、われが引導をばたのみ奉りてえさせよと、ねんごろにいひをきしかば、妻子なく〳〵一休へ參りて、其由をかくと申上ければ、そのとしまで佛とも法ともしらずば、大かたのことにてはうかみがたし、去ながら我等が一句をさづけてすくふべきなり、水葬にせんあひだ鴨川へつれゆけとて、其まゝ座をたち、打つれて川のほとりになりしかば、其死人を出せよとて、一休かの死人の首になはをつけ、ひつかたげて川岸に立てのたまはく、

河舟をとめてあふせのなみまくら、うき世の夢を見ならはしの、おどろかぬ身のはかなさよ、

とて川へざぶとなげすてゝ、はやかへり給ひける、妻や子どもおどろきて御氣もそゞろなるが、此一句はしと、彼死がいを引あげねんごろにおさめて、ある寺江口をうたひ給ふなり、かゝる事にてはうかびがたの上人にゐんだうたのみければ、其宵よりかの夫も子どもも、さん〴〵にわなゝきふるひて夢見けるは、一休の御引導にてうかみしものを、よしなや上人の引導にてひきもどされて、中有のたびに迷ふよ、又一休をたのみてわれをすくはせ給はずば、妻子もともに取ころし、手にてをとりて三途の川を渡らんと、まざ〳〵と夢まぼろしに見へければ、是はとおどろき一休へまいりて、其よしをしか〴〵と申あげければ、我よくいんだうせしに、又こと人をたのみし故なりとて、ふたゝびかへりみたまはねば、親子のものさまざまになげきしかば、扨も不便の事やとて、うづみしがいをほり出させ、又かも川へかたげゆき、川岸に立て一首、

大水のさきにながるゝとちがらも
身をすてゝこそうかぶせもあれ

とて、がばとしがいを川へなげてかへられければ、其

宵親子の夢に、ありがたき御引導にて、いまこそうかびけるぞとて、白雲にうちのりてにしのそらに行ければ、みな人ありがたくぞおぼへけるヽ也、

(三)一休和尚山婆の謡を作り給ひし時、ひえい山に中よき人おはしければ、だんかうにのぼりてのたまふは、佛あれば衆生あり、衆生あれば山婆もありといたしける、此つぎいかゞはせんとのたまへば、彼人もさすがの人にて、さだめて柳はみどりとなされつらんと有ければ、一休、さてもよく推し給ふものかな、柳はみどり花はくれなゐの色々、扨人間にあそぶ事と仕候とのたまへば、さこそといひて興ぜられし、まことに同氣あいもとむなるこヽろざし、いとはづかしく思はれける、扨よきつゐでなりとて、叡山の堂社を拜みめぐり給ひしに、山法師ども是を聞て、一休はかくれなき能書なり、何にても書てもらはんとて、手に手に硯紙を持來りてたのみしかば、一休おぼしけるは、聖道のあて字とかや、定て文盲なる法師どもならむ、何にがなかきてとらせんと、いかにもよみがたき一句を、さら〳〵と一筆に書ちらしてつかはされければ、一山の僧よりあつまり、かヽる能書の名僧此山に來る事は、後の世までも寶物とも成べき語をかヽせをくべしとて、其中の老僧のいへるは、先よりをのをの書てもらいけるは一字もよめず、又語もあまりにみじかくて、此山のたからとは成がたし、いかにも大文字を長々と書てたべ、よみがたきはありても詮なし、いかにもよみやすき事を賴み奉ると、一山ともに望まれければ、一休のたまひけるは、紙筆は候か、中々古へ大師のあそばしける七八尺の大筆あり、紙はなにほどもつぎ申すべしと申されければ、さらば紙をつがせ給へ、御望の通なが〳〵と大文字をかきて、よくよめるを仕べし、いそぎかみをつがせ給へとありしかば、何程なりと紙は御のぞみ次第とて、ひたもの長くつぐ程に、えいざんの金堂の前より、とづさかもとの人家まで、長々しくもかみをつぎければ、さらば筆をそめんとて、墨たつぷりとふくませて。べたと紙へかきつけて、一さんかけて不動坂まで一すぢにひかれて、よめるか法師達とのたまへば、いやなにともよめずといふ、又すみをつぎて不動坂より坂もと迄一すぢにはしりびきに引て、よめるか〳〵とおめき給へば、一山の法師たち肝をつぶし、いやなにとも

よめずといへば、これはいろはのあさきのくだりにある〳〵の字也、なが〳〵と書てよめやすきは是なりとのたまへば、皆人興をさまし、さても聞をよびしよりおどけ人かなと、一度に咄と笑ひて興じけると也、今の世までもその〳〵の字、叡山のたからものとなりて有けると也、山法師達ものぞみし事なれば、いやさいはれぬ御作意と、みな感じけると也、

(四)ある人牧溪和尙の御筆なりし靈照女の繪を持けるが、一休和尙の活機なる事を聞て、讃をたのみ申べしとて、やがて一休へ持て參り、しか〴〵のよしたのみ申ければ、それこそやすき事なれ、のぞみならば讃して參らせむと筆おつ取給ひ、さら〳〵と一筆かき、かの者に渡されければ、有がたしといたゞき、さてもかるき御僧かなとよろこび內へ歸り、友だちどもをよびよせ、日來の繪に一休の讃なされしと語りければ、各拜見申さんと云、やがて床にかけ皆々拜見しければ、かなまじくりに、

汝が親の笊作り　　馬祖にだまされて
寶を海にすつる　　阿龐居士が娘

とあそばしければ、みな人よこ手打、さてもだうけたる御事かな、龐居士も靈照女も唐土にての賢人なりと、みな人いひ傳へしほどに、定てさやうの心をもあそばさるべきかと思ひけるに、各別なる御事かな、誠に天下の活祖師にてましますと、みな人感にたえけると也、

(五)一休和尙は金を山に捨、玉を淵になぐべくもあらん御きざしなれば、もとより一鉢のもうけより貯てたくはへなかりけるに、はや大晦日の暮がたになりければ、一僕申すやう、明日は元三なり、なにをかまいらせむ、八つの木は一合もなく、靑きあかゞねは一錢もなしとなげきければ、一休聞給ひて、それはなげくことにはあらず、いざ出よとのたまひて、一棒をふりかたげ、山家海道へ出給へば、折ふしかはらけ賣通りければ、のがすまじとおつかけたり、彼者おどろき一荷のかはらけを捨てにげければ、扨こそとて彼めしつれし僕にもたせて、これをしろなし初春をむかへ給ふが、はからず大名はて給ひけるとて、一休を引導に請じければ、いや參るまじとのたまふ、何とて御出なきぞと申ければ、錢をくれればゆかんとのたまふ、やすき事なり、何程か御用なると申せば、一貫八文は

しゝといへり、やすきことゝ申して奉りければ、其錢をもらいて彼おいはぎしたまひし所へ行て、かはらけ篭に錢をくゝりつけて札を立られけるは、先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文、但一枚に付一錢づつ、帳けし給へと書つけて、傍に一句、

貧のぬすみは偸盗戒にはあらず、いかんとなれば戀の歌も邪淫戒にあらざる證據あり、慈鎭和尚とて貴き聖のよめるに、

我戀はまつをしぐれのそめかねて
まくずがはらに風さはぐなり

と侍りけんとかや、しかればとて邪淫戒をやぶりたる人とはいひがたし、我も貧のぬすみなれば、偸盗戒をやぶりたるとはえいふまじき也、

と書れけるとかや、さて引導に出給ひていはく、人は六道錢とて六文出す、汝は引導錢とて一貫八文、さつしんかいちじう、さては汝は人に一貫二文まされり、十方に道あり、行たい方へつゝとゆけ、成佛正にうたがひなし、是いかんとならば、有摩地獄のさたも錢がするとのたまへば、みな人おどろきて、扨もおどけ人やと感ぜぬ人はなかりけり、

（六）或僧一休は活機なることを聞つたへて、いかほどなる道德かあるとて、大德寺へ行て尋ければ、折ふし一休は門前の酒屋が方へ行、酒にたべよひ前後もしらず臥し給ふ處へ、小僧たづね來りて、たゞ今唐僧とかや見へし、大和尚一休はと尋ね給ふ、はや御歸寺あれと引おこしければ、一休御目いまださめず、うかうかとしておはせしに、酒屋の亭主出で、御醉眠御心よく侍りたるかと申ければ、扨もよき氣味やとて、一首よみて亭主にとらせけるは、

ごくらくをいづくのほどゝおもひしに
杉葉立たる又六が門

とあそばしければ、亭主よろこびけるとなり、かゝる所へ小僧又來て、はやおかへりあれ、さきに申せし和尚の御待かねと申せば、こたへず又打かへし高鼾かいてふんぞりかへりて寢たまひしかば、小僧かへりて、何ほどおこしてもおきあがり給はずと申せば、よしよしそのねいりて何とも思ひよらぬ時、ひきおこして一問かけたらば、志いよ〱しれ侍るべしと、彼唐僧一休の臥給ふ處へさしあしして、まくらもとへどうと座し、なに共いはず引づりおこして、目もいまだ

あき給はぬに、一越聲をあげていはく、

西來意の祖師の話に俗語ありや

と問給へば、その息もつぎあへぬに一休も大音にて、

汝が俗よ

とこたへてつきこかしたまへば、彼大禪師も舌根をふるひて立れけるが、扨も活祖師や、聞しには十倍せり、汝が俗よとは即時に出まじき答話なりと、感氣きもにめいじてかへり給ひけると也、

(七)或時新右衞門誰の話を參じけるに、一休しめしていはく、

しやかみろくは是他の奴、しばらくいへ、他はこれ阿誰とひ給へば、新右衞門歌をよみてこたへけるは、

たぞといふことばの下にあらはれて
たぞこそ誰よたぞはたれなれ

と侍りければ、一休これをかんじて、此一そくにて千七百則をゆるし給ふとなり、

(八)蜷川新右衞門親當、其身いみじき才智發明の道士ながら、和尚のもとへ立入禪法に參じられける、誠に佛心の妙奥をつたへ正法眼藏をきわむ、英雄の士といひつべし、和尚も心通あひかなひて、ゆゝしく思し召けるもことはりなり、されば定業期來て寂滅の室にいらんとす、胎下のむかしより是をまつこと年久しく、思ひまふけたる道なりとて、快氣のいろぞみえにける、一門はせあつまり、をの／＼今はのかぎりに名殘をゝしみ、したひなげく事よその見るめもあはれにて、しらぬ袖さへぬらしける、ことはりとぞみへける、かゝるしうたんの折ふし、青々たる西のそらより紫雲たなびき、空中におほひ音樂きこへ、異香くんじ花ふり、妙なるかな三尊廿五ぼさつ、かく／＼たる聖衆を引つれ、まぢかく來迎し給ふ、ふしぎなり共中々有がたかりける瑞相なり、うたがひもなく新右衞門は、西方十萬億土極樂世界に往生せしめて、九品上刹のうてなにいたらん事は、たなごゝろをみるがごとしと、おの／＼かんにたえざるはなかりけり、されば落日にちかき老士、まだ物なれぬ若輩のやからは、天にあふぎ地に伏、共にしなんとぞくるひける、道理の至極とぞ聞へし、其中に嫡子は新右衞門がひざのもとによりそひ、泪を袖につゝみながら、いかにあれ御らん候へ、たのもしく思しめされて、往生安

全にさげ給へと、ゆびをさしておしへける、其時親當ねむれる眼くはつと見ひらき、我子をはたとにらんで、それ弓馬の家に生れけるものは、たとへば安養淨刹にいたりて九品蓮臺に座す共、弓箭をわするべきにあらず、書院の床に立置たる重籐のぬりごめに、矢そへてもち來るべしといふ、聞人おどろかざるはなかりけり、こはいかにと見る所に、親當弓勢なん人ばりとはしらね共、さしもつよかるらんと思しきが、やがて引くはへ引しぼり、しばしかためてひやうとはなつ、あやまたず三體の中尊、ひかりをはなちて立給ふあみだのむないたを、あなたこなたへゐとをしてければ、こくうにあまねき紫雲のよそほひ、もろ〳〵の聖衆とおぼしきが、暫時にきへてかげもなし、いかなる事ぞとれうけんすれば、處に久しきふるむじなのばけこうをへたるにてぞ有ける、誠に希有のしだいなり、終に一首の辭世を作りのこされける、

生れぬる其あかつきに死ぬれば
　けふのゆふべは秋風ぞふく

とかやうにつらね臨終をとげ給ふ、奇なるかな、空寂の玄妙を會得して、邪魔のしやうげをはらひ、其身は死門に入ながら、活人のねむりをさまされけるは、世人の珍事とする所なり、其後一休を導師とたのみ奉り御引導をこひければ、一休も此新右衛門には、一かわりかはりて引導すべしとたくみすましておはせしに、はや新右衛門がしがいをこしにのせて來りければ、一休立出給ひて、彼新右衛門が乘たる籠をたゝき給へば、死したるものがたからかなるこゑを出して、一首の歌をば一休にかけゝる社はふしぎなれ、新右衛門もたゞ人にはあらじと、今の世までも人のいひつたへ侍るなり、その歌にいはく、

ひとり來てひとり歸るも我なるを
　道をしへんといふぞおかしき

とたからかにとなへければ、其ことばのおはらざるに返歌をし給ふ社有がたけれ、

ひとり來てひとりかへるも迷ひなり
　來らずさらぬ道ををしへん

との給へば、新右衛門も實もとや思はれけん、其後はをともせずなりけり、人みな是を聞て、まことに人間にはあらず、たゞ佛菩薩のかりにあらはれ、ひとり來てひとりかへる道といへば、來らずさらぬとの給ふ、

さても有がたやと、見る人きく人あか手のかわをすりておがまぬものはなかりけるとなり、老子のいはく、死してもほろびざるものはいのちながしといへるは、かゝるためしなるべし、

（九）新右衛門が最愛の妻、いとけなき時よりよろづに心みぢかく、たけ〴〵しかりければ、かなしき者にもじひのめぐみなく、めしつかふわらはにも哀憐のなさけうすかりけり、されば人は似を友とするならひなるに、悟道の居士になれそひて、たうときおしへをしらざりける事、いか様むくひのはぢなるべしと、みな人ごとにさみしける、新右衛門あけくれふびんに思ひて、もとより道者の事なれば、たましゐをくだき、にうわのをしへをすゝめける、しかれども露したがふけしきみへざりけり、ある時あまりいたく制しければ、女房かほをあかめて聞えけるやう、

あさ糸のながしみじかしむづかしや

うむのふたつにいつかはなれん

とたゞかやうによみておともせず、親當おどろき、日頃のふるまひに相違して、歌の心おもはり殊勝なりければはづかしく思ひ、わがおしゆるにおよばずとて、肝にめいじてかんじける、ふしぎなるかな今まではういつじやけんに身を任せ、誠にくらき愚人なるとおぼへしが、叔は我よりさきにさとりける物をと思ひ、したをまきける、其後はふうふのなさけあさからず、ひよくのちぎりふかゝりけり、上しも水魚の心をなしむつびけるに、つらきものゝいひなしにてや有けん、ひそかにこゝづまをかさねてふた心有よし、まことしやかに新右衛門につげける、新右衛門もとよりいつはりをしんずるものにはあらざりけれ共、げに〴〵思ひあたる事ありとて、物をしのびぬおのこなりければ、しばしの延引もなくりべつして祉おくりける、女ばうは折ふし懐妊の心ありてなやみければ、うらみの心あさからず、つるぎをのみほのほをかぶらんともだへかなしみけれ共、ちからなくいでにける、無實の程ぞあはれなる、しかれどもあとかたもなきいつはりなれば、誠がつゐにあらはれて、ざんげんのしわざとしりにける、新右衛門後悔して、又よびむかへんとて、わがあやまりなるよしいひつかはしければ、女ばう返事に、

秋風の人の心にたつならば

實のらぬさきにいねこいわざる

とかやうによみおこせて、ふたゝびかへらざりける、それより女ばうのなさけたぐひなくいさぎよきふるまひは、かへりてまさりけりと、ほめぬものなかりしとなん、ある人かたり侍り、いみじうおもしろくおぼへければ、かごみゝのそこにとゞまりわすれもやらず有けるを、かりそめにあらはし侍る、さればかの歌にいづれもかけうた有しとなり、聞もらしぬる、口おし、

(十)一休和尚の庵ちかきあたりに、四十がらを愛してかひけるもの有しが、生有物なれば死する期有て、かごのうちにむなしくなれり、あさゆふ手なれし可愛さに、殊の外ふびんにおぼへ、いとかなしくて子にわかれたる思ひをなせり、凡非情無心の物だにも、各佛性をぐせり、ましていはんや生有物をや、死出の山、三途の河、めいどのやみいかゞ有らん、しかるべき智者をたのみて引導わたさばやと思ひ、一休のいほりにたづね入て、しかゞゝの事たのみ申たきよしなげきければ、折ふし和尚の弟子出あひ、いとやすき事なり、いでゝゝ成佛得させんとて佛前にむかはせ、足下にゐんだうわたしける、

むかし釋尊八十三ばつたい河におゐて涅槃に入、
今なんぢ四十がらむらさき野に成佛をとぐ、

とたからかにこそさづけゝる、かのものたのもしく思ひ、やがてほうむりてかへりぬ、是を一休物ごしに聞しめし、たゞ今のゐんだうはよくでかしたる小僧かな、風骨によると思しめし、大きによろこばせ給ひ、きげんのよき事なゝめならず、

(十一)むつきのすゑつかた、ある人和尚にともなはれ、逍遥して山野にあそび、見るにつき聞につきひた物例のかゝる口を仰せられ、われもよろこび人をも興ぜさせ給ふ、折ふしはるかに雲井のそらを、かりがねの友をしのび、こしにかへるかと思しくて、二羽つらなりてとび過ける、かの人一休に申けるは、いかに只今そらを過るかりがねは、いづちへかおり申さん、御申あれといひける、和尚聞しめされ、天にかね一ぱいじやのひげ三すじといへる、じやのひげはいか計ながゝらん、ちやくと申されよとのたまふ、かのものいふべきやうはなし、さればじやのひげとやらんは、けふまでいまだ見たる事侍らず、しらぬに候と申ける、

一休、さればあのかりもおうしうへかおりなん、つくしへかおりなん、終にかりがねなど丶同心してあゆみたる事侍らねば、しらぬなりとこたへ給ふ、

(十二)其頃しも、都に口瘁の妙藥をおぼへて、秘藏しける者有けり、一休きゞくを聞し召、いかにもしてしらばやと思しめされ、やがてたづねあひ給ひて、しか〴〵の御くすりをしらせ給ふよし承り およぴ候て、あはれ此愚僧御相傳をうけたくぞんじ、はる〴〵是までたづね參り候と申されける、かの人承り、中々の事、さる妙藥をわれら代々つたへ來り候へ共、一子相傳の秘法なれば、他にもらす事思ひもよらず、さりながらきゞくゆ丶しき御僧と見奉れば、いなびがたくも社候へ、ふかき御執心にてわたらせ給はゞ、他に口傳有まじき御きしやうをか丶せ給へ、しからばゆるしてをしへ侍らんとぞいひける、和尚聞しめされ、我身の大事一代一紙の誓文なれ共、愚僧にをしへてたび候はゞ心得侍るとて、すみぐろに社か丶れける、やがてならひ得て庵にかへり、あざわらひての給ふやう、人のやまひにくすりとなるべき物を秘藏して、ひとりおぼえたらんは慈悲のうとき心なり、これらの事をひざうとせば、おそらくは秘しても秘しがたき一大事因緣をばいかゞせん、さりながら佛神の冥罰そらおそろし、さらば札をかきてしらせんとて、

一口瘁のくすりの事、もしこうひをやむものあらば、かならずみかんのさねをくろやきにしてのむべし、なをる事すみやかにして、ふたゝびおこる事なし、是きたいの妙藥なり、

と書て立られける、おしへけるもの是を聞、以之外に腹をたて、せぼねをいからかしていそぎむらさき野にはしり行、一休をたづね出し、いかに御僧はかいむざんの聞僧かな、何とて大事の秘藥をならひ得て、他に口傳せまじとてきしやうをかきながら、あまつさへ高札をたて丶萬人のめにさらす事、いかなる曲事ぞやと、しのびかねたる其ふせい、打はたしてもこらへがたく、まつくろになりていかりければ、さしもの一休なれ共、おもきこゝろすかさず見へにける、され共おどろくけしきなく、そらさぬかほにもてなし、あらこさ〴〵しの有樣や、何事をかくはの給ふらん、きしやうをかきしも誠なり、しかるに札をたてしもいつはりにあらず、さりながら口傳せまじとかきぬれば、

口傳は一人もせざるなり、札をたてゝじごかゝざれば、たてたる事があやまりか、きしやうに少しもそむかざれば、佛神のばちもおそろしからずとて、そらうそむひてましく〳〵ける、かの者あく迄の〻しり、怒氣におかされて方寸にせまりけるが、一言のぬけ句に返答をうばはれ、ことばもなくかへりける、

(十三)ちかき江やかたゞのうらはに、彌五郎といふせんどう一人ありける、おのがわざながらいやしきいとなみにやつれはて、一生ほのふすまかぢのまくらをそばだて、まことの道にうとくして、心ざしさながらゑびすなり、九重の花にあそぶともがらにははるかおとり、おのづからいやじきになれて、いみじかるべき事を露しらず、かたくなにたうときをしへをはぢくやまざれば、いとあさましきよすがなりけるが、つゐに身まかりて死にける、妻子したひてなげく事かぎりなし、さてあるべきにあらざれば、火にやせん土にやうづまんとかなしみける、せめていかなるちしきをもたのみて、後世のくげんをたすけたきと思ふ折ふし、一休風雲のゆくゑをおふて、うらのかたにねまりゐて、よもの致景をたのしみておはします所に、妻子是をみて衣のすそにすがり、只今かやうのあさましきもの〻相はて〻候が、あはれ御じひをたれてかのもの〻後世のくるしみをみちびきて給はり候へ、生々の厚恩にて候べしとかなしみける、一休ふびんに思しめし、何よりやすき事也、ゐんだうさづけ得させんとて、し給ふやう祉ふしんなれ、まづ〳〵死人をよねごもにつゝめよとて、たはらに入てなはをかけ、まるた舟にかきのせ湖水の波にうかべける、おきにいたりてこゑをあげ高らかにの給ふやう、

此たはらはこれ元來米俵にもあらず、まめべうにもあらず、なんぢはかたゞの彌五郎俵なり、ごうかにしづんてうろくづのゑさなり佛果を得よ、喝、との給ひ、水のそこにぞつき入ける、是成佛のゐんだう也、

(十四)一休和尙とひとしき沙門有けり、わがゑざうをみづからうつし、心づから一入よく出來たるよとうれしくて、さもあれ一休に見せばやと思ひ、いそぎむらさき野へもて行ける、和尙此繪を一目見給ひ、あな見ぐるしやとて目をとぢ、大きにあざけり給へば、いかなれば所存をもかへり見給はず、かくわらひ給

ふぞやと、うちはらだて丶の丶しりける、其時ゐざうをとつて庭上へなげすて、土ぞうりをはきながらさん〴〵にふみにじり、一筆かうぞか丶れける、

世をすて丶かたちをすてず、びんばつをきりてぼんなふをきらず、かりにゐざうをかきておのが惡業をかづけおく、ゐざう大きなるめいわくなり、

さくゐ〴〵とさんをかきてわたされける、沙門つく〴〵とかんじ、やがて懐中してかへりける、

(十五)五月雨のふりつゞきはれまもみへず、うちしめりよものけしきうるほひ、こずゑふかくみへ渡るころ、つれ〴〵わびしく思しめしけん、しばのあみどをさしこめて、たんぜんとしておはしましける所に、みそじあまりのおのこと見へて、やぶれがさをかむりつゞれみのを身にまとひ、じやぢくるあめにそぼぬれつ丶、いかにも思ひあまりうれへにしづみたるありさまにて、しづかに物申さんさうかゞひける、一休たぞやこなたへとの給ひて、しばのあみ戸をひらき給ふ、かの男いふやう、我らはちかきわたりに侍り候ものなるが、明日はさる心ざしの日にあひあたり候へ共、ちしきをたのみたてまつるかたなく候へば、おそれながら和尚を請じ奉り、おろそかなるときをまいらせあげたく候て、是までたのみ來り候なりと思ひ入てぞ申ける、一休きこしめし、もとより出家のいとなみにいとやすき事なり、いづくの程ぞととひ給へば、おのこたへて、さん候、我らがいゑぢと申は、にごり川通そこぬけびしやくの町と申て、かくれなき所にて侍るなり、たづねてわたらせ給はゞ、かどべにしるしをと丶くべし、かならずまち奉り候とていとま申てかへりける、一休あとにてつく〴〵とあんじ給ひ、きやつはふしぎなるをしへやうをいひつる物かな、さらばれうけんしてみばやとて、やがて義理をぞひらかれける、抑にごり川といひしは是今出川なるべし、そこぬけびしやくといひしはゐがわ町といふなるべし、いで〳〵たづねゆきてみんとて、思ふあてどをとひ給へば、あんにたがはずゐがわ町といふ所にゆきあたらせ給ひける、しるしといひしは何なるらんと見給へば、おもてにしやくしをぞつりおきける、是は誠にしるしなりとて、やがてうちにいりて見給へば、きのふの男にあひ給ふ、めでたかりけるちゐぞかし、あるじかんにたへかねて、かつがうする

事なゝめならず、我らのあさましくおろかなるたはむれを申参らせ候へば、一々にときわかち、みちをもまよはず御いり候こそ、いつはりもなき天眼通にておはしますとて、ひとへにしやかのごとくに思ひける、男もけうがるくせものにて、むづかしく難問をかけんと思ひけるが、法事も過ぬればぜんを出してすへたりける、其時和尚ぜんにむかひ、殊には亡者法昧のためゑかうをなして三界にたむけ、ふたをあけて見給へば、めしにはあらでこぬかをもりてすへたりける、ふしぎに思しめされ、しるをとりあげ見給へば、是もおなじくぬかなりけり、殘りの物もさぞあるらんとて、よこ手をてうと打、あらいたはしや、扨は亡者の三七日にあたり候よと、かぶりもふらずの給ひける、男いよ〳〵肝をけし、おそれをなしてうやまひける、其時男いふやうは、仰せのごとくそれがしはちちをうしなひ候て三七日になり侍る、佛果にやいたりけん、ぢごくにやおちぬらん、後生の事におぼつかなく候てかなしく候とといひければ、一休仰せられけるは、何事かあるべき、たゞ存生のふるまひをば、他人はよしとほむるやあしきとそしるや、いゞかいふぞと宣ひける、されば平生はつねによこしまなる事候はず、ひとへに正直にてまつたき性候ひければ、他人はほとけにてありつるとほむるものおほく候と申ければ、一休聞し召し、しかればきづかひなる事なし、是あみだにもあらず観音にもあらず、則正師なり、佛果を得る事疑ひなしと、事もなげに仰せられける、男つく〴〵と承り、我は心やすく候が、又それがしが兄にて候者、三年以前にむなしくなり、つねに佛道をもしらず、いたづらにあかしくらし、はづかしながら天性ぐどんに候ひて、人のくちにぬかりものと名を得候事、口おしきしだいなり、たゞしつみをもつくらず候へば、佛果を得候はんやとといひける、一休聞しめし、中々つみとがなしといへ共、佛にはなりがたし、さやうのものは愚僧がゆるしても、人がゆるさゞればのがれず、其おつるぢごくを則あはうぢごくというふなり、たゞ今生のごとくに後生の事も侍れば、佛果とぢごくと少しもうたがふ事なしと仰せられける

(十六)そこつなる弟子、ある時一休へたづねけるは、世中になる程らいさき事を御物がたり候て聞させ給へといひける、一休聞しめし、なんぢかたつぶりさい

ふむしをみたるや、弟子いかにも見候といふ、其かた
つぶりめがかいよりいでゝはいゆく時に、かしらに
つの二つ有、其ゆんでのつのさきに國の數五百有、め
てのつのさきに國の數五百あり、合て一千の國有、し
かるに此せかいのごとく日月そらにかゞやき、山川
下にそばだちながれ、しんらまんぞうすこしもかは
る事なし、天運は須臾をもつて千歳とす、然るにたが
ひに國をあらそひ、左は右をうちとり、右は左をほろ
ぼし、かつせんさらにやむ事なし、あるひは一ねん國
をたもちては二ねんにほろび、扨ほろびし國も又お
こり、年中の間存亡たちまち地をかゆる事たび／＼
なり、さればしゆゆを千ざいとするうちに、ふゆうの
むしありて夕べに生れあしたに死する事、是よりち
いさき事なしとの給ひける、其時弟子、然らば世中に
大きなる事は何事か候はんとたづねければ、一休き
こしめされ、心得たりとの給ひて、北海に水とり有、
名を大こうといへり、胴の大きさ千里有、はねのなが
さ千里あり、あはせて三千里にはたらざりけり、此と
り南極を見にゆかばやと心ざし、北海より思ひたち
はる／＼ととぶ程に、一日にいく千萬里といふ事を
しらず、昨日もとびけふもとび、としをかさねていそ
ぎけれ共、いつ行つくべき共しれざりけり、さしもの
大こうもつかれはて、とある木の枝にとまりしばら
く羽をやすめつゝゐたりければ、下より大ごゑをあ
げて、かうらかに我ひげさきにとまりたるは何もの
なるぞとさけびける、大こう大きにおどろき、こはい
かに、ふしぎやな、われは北海の水にあそぶ大こうと
いふ鳥なるが、我かたちをもつて南極を見ばやと思



ひ、はる〴〵とび來るといへ共、つかれにおよんでちからなく、此所に羽をやすめ侍るなり、かゝる大木をひげにもち給ふは何ものにてかわたらせ給ふ、名のらせ給へとのゝしりける、其時下よりいふやうは、なんぢがかたちにて南極を見ん事思ひもよらず、我はこの南海のそこに代々經たる海老なれ共、我だに未だ見ざるぞかし、いそぎこれよりかへるべしと、大きにさけびていかりける、高慢しける大こうも力およばずあざむかれ、もとの北海にかへりける、其時海老いかりをゝこし、かゝる小鳥さへ南極をみんと心ざし、思ひ立こそやさしけれ、我見ぬ事や有べきと思ひ、南海をたち出みなみをさしておよぎける、まんまんたるさかいをあけくれいそぎけれ共、廣大無邊のみちなれば、いたりつべうはなかりけり、海老も程なくつかれはて、とあるほらのありければしばらく立いりやすみける、其時こくうよりこゑを出し、何ものかやわがみゝに入しとおぼへたり、いそぎ出よとよばゝりける、海老是をきくよりも、我はこれ南海のそこに代々經たる海老なるが、かやうのしさい候ひて南極へおもむき候といへ共、はる〴〵のみちなればしばらくこゝにやすむものなり、しかるにふしぎや此ほらをみゝにもち給ふ御事は、たれなるらんとおそれけるが、その時こくうより大千せかいにうなりわたる大ごゑにて、我はあめつちかいびやくより此海にすむかめなり、おのれが身にて南極をみん事はかなふまじきなり、思ひたちしはやさしけれ共、心ざしをむなしうしてこれよりいそぎかへるべしとよばはるこゑ、天地にひゞきてきこへける、扨はゑびもかなふまじとて終にむなしくかへりける、それよりかのかめ又南極におもむき見てかへらんと心ざし、我すむうみを立出てみなみをさしてゆきけると聞へしが、いまだけふにおひてかへらず、いはんやいつかへらんといふ事もなしと、めさむるやうに仰せられける、

(十七)都にて大ぶんげんなるもの、大事のとぶらひをしける事ありけるに、折ふし導師にはいかなる人をか請じ奉るべきと、思案まち〳〵にくらしける、其頃名高き知識あまたおはしけれ共、中にもむらさき野一休和尚にしくはあらじと、佛事は明日の事なれば、いそぎ人をぞつかはしける、折ふし和尚は庵の

ちりをはらひ、庭をそうぢしてまし〳〵けるが、すこしもなづまぬ御僧なれば、心やすくりやうじやうし給ひける、さる程にやがていやしくさまをかへ、あさましきこつがい人に身をやつし、手あしにすゝをにじり付、くさりごもをまとひ、もくづの中より出たるやうになりはてゝ、かの門にたち給ひ、こつじきのののしるごとく、御くやうの御せぎやうをたべ、御じひを下されよと、とり〳〵にの給ひける、あるじじやけんにはらをたて、見ぐるしきやつばらをおひ出せよと下知しける、其時下男二三人はしり出、くやうはあすの事なるに、けふ來ておめく曲事やとて、もとよりたれとはいさしらず、いたはしや一休をたゝき出し奉り、さん〴〵にてうちやくしふみたをしてぞ入にける、一休はからき命をやう〳〵たすかり、むざんのしはざと思しめし、むらさき野へぞ歸り給ふ、其日にもなりければ、きのふのさまに引かへてあらたにゆあみし給ひ、衣をふるつてめされける、七丈の御けさをすそながに引かけ、きんらんまじりにとりつくろひ、もとよりしゆしやうに見へ給ふ、一休御こし有ければ、旦那大きによろこび、佛前へこそ請じける、されども一休すゝみ給はず、いやそれまでは參るまじ、愚僧は是に候とて、右うすになりてにじり給はず、旦那はもだへて、是は何事にておはします、あらいたましや、こゝは下らうのむしろなり、こなたへとをらせ候へとて、手を引たて奉れば、一休御らんじて、しからば此衣に料供を給はるべし、愚僧か給はるべき子細なしとて、一首の狂歌をよみ給ふ、

わうばくの三十ぼうをあてられて
身にはれきたるせみのぬけがら

とよみ給ひて、こつじきも愚僧もおなじ火と水なれ共、きのふはぼうをくらひ、けふは御ときを給はる事、偏に此衣のいろがひかるゆへなりとて、ぬぎすててこそかへられける、

一休咄卷之中終

一休咄卷之下

(一)一休和尚は活佛にてましく〱けると、世上に風聞しけるが、餘りにいはんとて去人申けるは、此間一休へ參りければ、よく來るとのたまひて、虚空に座し給ひて、御庭の松の枝に御腰をかけられ、御すゞみなされし也、ふしぎなる事にあらずやと、しげ〲と語りければ、皆人、それは僞りに社、人間と生をうけ、かかる自在のなるべしやと取さたしける事、ほのかに一休聞し召、一條の辻に札を立られしは、

佛法の修行すでに道なり天眼通をえたり、虚空に坐んとすればすなはち坐し、坐せじと思へば則坐せず、通力自在を得たり、若うたがふ人あらば見物に來べし、

とかゝれたり、みな人是を見て、此間人の評判しけるが、かくせらるゝ上は更にうたがふ所なし、去ながら魚をくひていかして吐くと仰せられしもまことならず、さなることにてやあらんと云人も有しが、いやいやそれとは品かはりたるとて、すこびたる仁二三人つれだち一休の御庵室へ來り、御札のおもてうたがひは有まじけれど、直におがみ申度候て是迄參り候と申す、一休出あひ給ひて、中々の事天眼通を得申候と仰せられければ、其中にこびたるものすゝみ出て申けるは、是は御僞にて有べし、虚空の事は思ひもよらず、此扇の上へあがりて御らんあれと申ければ、いとやすき事なり、去ながら其扇の上へものらんと思ふ心出れば乘、今日は早天よりのらふと思ふ心なし、虚空へものぼらんと思へばのぼる、上らふと思はねばのぼらず候、重ねて御出あれ、のぼらんと思ふ時上りて見せんと仰せられければ、みな人あきれて歸りける、其中の一人申けるは、いかにしても一休也、人の餘りにいはんとて天眼通を得給ふと云を、おかしくおぼしめし、かくいましめしむるなりとて、感じて歸しと也、

(二)一休和尚へある旦那來りて申けるは、此御寺へ出入仕候とて人々申けるは、話そくの一そくもぬけたるかなどゝて、我等の愚痴なるをあなごり、何共迷惑をいたし候間、何にても一そく御じひに示し給へと申ければ、安事なり、さらば參じられよと有けれ

ば、參ずるとはいかなる事にて侍りけるぞと申せば、いや何なり共佛の道にてがてんのゆかぬ事を尋られよ、畏て候とて佛殿をさして走出る、一休おかしく思召、みぬかほしておはしければ、せつなの間に走歸る、一休いづくへ行けるぞと宣へば、佛の道にふしんあらば申せと仰せられしにより、佛の道は佛殿へ行道なると存、一はしりに見てまいり候が、いかにもがてんのまいらぬ事こそ御座候、あの山門のほとりの松に巣をかけて候が、なにのすとも更にがてんまいらず、大かた鷺の巣にはみへて候へども、しかとはわきまへず候と申ければ、いや／＼からすこそいま時分はすをかくれとのたまへば、いや、とてもの御事に御じひをたれてしめし給はれと申ければ、其義ならばとて、はしのこをもちゆき、のぼりたまへと仰せられければ、かのものいそぎのぼりて、かの巣おろしてみれば、中に鳥の子もなくなにとも見へぬなり、一休何なるとのたまへば、何もなかにはなく侍ると申せば、一休和尙、

　鷺の巣をおろして見ればからすにて

これにつけて見たまへ、こゝが一そくなるはと仰せられければ、かのもの中々何ともつけ申べき心はなく候と申ければ、一休仰せられけるは、そこなるは、我もなんぢに一そくさづけしらすべき心はなしとしめし給へば、かのものおどろき、扨は一休樣も仰せられがたく侍るかと申ければ、自心自佛と答へ給へば、よこ手をはたと打てかへり、終に自得しけると也、

(三)一休和尙片田の庵におはせし時、うみばたへ立出給ひては、毎日つりをたれては魚をとりてまいりけるに、御弟子兄弟の僧達、これは不律なる仕合なりとて、一休を一間所へよび入て、口々に異見しければ、一休のいはく、おの／＼たちはがくもんするとて、何事をかし給ふや、我等はいにしへの祖師の眞似をするを、禪宗の學問と心得たり、しかれば例なき事は仕らず、いで／＼古の例をしらずば見せんとて、もとより繪はきやうなり、蜆子の海老をつり給ひて喰し處を、あり／＼と繪に書、なを一首の歌をかゝれける、

　いにしへのかしこき祖師は海老を釣
　　我はあほうで魚をつりてくふ

とあそばして[illegible]僧達にさし付、さあらぬふりにて居

られける、みな〳〵彼繪を見て、扨も奇容なる繪や、見事なるかなの書ぶりやと感じけるが、其中にての老僧あざ笑ひて、古の祖師の海老を御つりありてまいりしとて、貴僧の若きなりにて其魚をつりまいらんこと、鵜の眞似して烏水のむといひしたぐひ也、扨貴僧は此蜆子和尚のゑびつりてまいりし御心根をしろしめしけるか、中々及びなき事やとわらひければ、一休すこしもさはがず色をもかへず、さて〳〵貴僧の愚なる心にては、蜆子の海老を食し心根がてん參るまじ、それ人は若きにもよらず老たるにもよらず、道におゐては老若はあるまじ、老たるが悟道せば、門外のむく犬も悟道したるかして、毛もぬけすねたゝずにじりありくは、若きとて悟道せまじきや、世尊は三十成道と承る、我等が祖達磨大師の古を承るに、或時般若多羅尊者の來り給ひて、光明かくやくたる璧をさゝげ、三人の皇子に見せ給ひつゝ、心をためさんとて、おの〳〵此玉をたからとし給はんやと問給ひしに、御兄二人は此璧にまさるたからは又あらじとのたまひけるに、達磨大師は七歳にて一の乙皇子なりけれ共、此玉は世寶にて寶にあらず、智光の珠こそは又なき寶なれとて、彼たまをなげうち給ひければ、尊者おどろき、かゝるいとけなき身にして、ふしぎなる人かなとて、すなはち御名を達磨とつけられける、はじめは菩提多羅と申せしとかや、達磨とは萬の事に達し通じて、みがき立たるやうなる人なりとの心とかや、しかれば悟道は老若にはよるべからずと、一休手を打彼老僧をわらひたまへば、老僧も人中にてこみつけられ、赤面して申されけるは、かる口にまかせて申されたり、如何に口にていふとても、心はさもなきものに候よ、貴僧は實正蜆子のゑびまいりし御心根をしり給ふか、一休答ていはく、中々存たり、老僧申さるゝは、おの〳〵いかにとおぼしめす、それ禪宗は以心傳心なり、いかでか蜆子の御心がしらるべき、蜆子にならずばしりがたしとあざわらひ申されければ、おの〳〵も、尤々、蜆子の御心は凡人のしりがたき事也、蜆子にならではいかにしてかしられむや、一休蜆子になりて御覧じけるかと、口々にわらひければ、一休すこしもさはがす、さて〳〵おの〳〵はおろかなることをのたまふものかな、我等は蜆子にならね共、蜆子の心根をよくしりたりとのたまへば、皆々

それはむりなりと申されければ、聞きたまへ人々よ、しからばおの〳〵はこの一休におなりなくば、一休が蜆子の心をしりたる心根をえしり給ふまじとてわらひたまへば、おの〳〵藤咲門にてにげられけるとかや、

（四）一休和尚野山へのぼり給ひて、四方の山々をながめ、さても聞しよりおもしろき風景かなと、ながめておはしければ、高野ひじり共立出一休を見て、いかなる人ぞとたづねければ、いや名もなき道心者にて侍るが、此山はじめて一見仕候へば、あまり風景がおもしろく侍れば、こしをれの詩か歌か一首つかまつらんと存じて、つく〴〵として侍るとのたまへば、ひじりども一休とは中々おもひもよらず、しほらしやわごぜはまことにめくらの垣のぞき、すくちの嘯も心なぐさむとや、その身はかみこでごそめき、うそさむげなるなりにて、ゑりのうすさは此山の名物のかみそりのはよりもうすくて、ほそくびいとあぶなしなどゝて口々にわらひける、一休かたはらいたく思しけれ共、いかにも空さぬかほにて、一首仕り候、硯紙給り候へとのたまへば、何と一首出來候とや、さてもはやしと又口々に笑て、やれ硯紙をかせと出しければ、一休筆をおつとり、東坡居士が徑山寺の詩を山なりに作りしことを思し召出されて、

七山秋葉落
五山春開花發ー空
三山迎蓮峰報佛ー心ー亦ー
一山高近都奉內院ー土ー進ー空
二山閑表華藏世界ー地ー醒ー寂
四山平幽源化佛ー惱ー亦ー
六山夏涼風煩ー寂ー
八山冬素雪ー

△此山形の詩の讀やうは

山高近都奉內院ー
山閑表華藏世界ー
山迎蓮峰報佛土ー
山平幽源化佛地ー
山春開花發心進
山夏涼風煩惱醒
山秋葉落空亦空
山冬素雪寂亦寂

かくのごとく即時に筆をひかへながらあそばしければ、一山のひじりたなごゝろを打て、扨も見事なる筆跡や、目なれぬ詩の體やと、口をあきてからふさぎかね、先より皆々よしなき事共をいひて、御僧をはづかしめけることのはづかしさよ、いかなる人ぞ名を名のり給へと口々に申ければ、其詩の下に候との給へば、まことに一文字候は、何一とか申すぞと尋ける、其中ひじり一人眉を皺め、彼詩の筆跡を見るゝ一休は

はや御いとまとて御下向あらんとす、彼僧、この筆は正しく紫野の一休也、ことに一と書しはくせ者也、やれ引さげめよとておつかけたり、一休これは何事なると仰せられければ、先より存ぜず皆々慮外申たり、御免あれ、先御かへりありて坊へ入らせ給へと、やうやうに申て留けるが、はや御下向あるべしとのたまへば、色々馳走申ておくり奉りけるに、ひじりの中に一人申やう、あのごとき名僧此山へ又のぼらじ、大師の御影に賛をたのみ申さんものをと、又おつかけ奉る、何事なると仰せらるれば、しかぐと申す、一休わらひ給ひて、それほどの事は又立かえらず共なる事也、その御影をいそぎ持來れとて、道なる茶屋にてやすみておはしけるが、みな人おどろき、大師の賛を請に立ながら思案もなくあそばすこと、聞しより大博學の祖師かなと、舌の根をふるひて、扨大師の影を持て來りければ、立ながらあそばしける、

弘法大師活佛

死ねば野はらの土となる

と一筆にさらくとあそばしける、みなくふかき事ありと、いそぎ登山して學匠に見せければ、各別のおごけ事ありしかば、又ひじり共口をえふさがざりけると也、

(五)一休和尚ある時熊野山へ御參詣ましくて、本宮へあがり給ふ、頃しも春の半過行なれば、山々谷々の櫻、都の二月の頃よりもいさめでたかりければ、拜殿によぢのぼり、四方の風色をながめてましくける所へ、社僧一人出て、客僧はたゞ人とは見まいらせずと申ければ、中々我等はたゞ人にては候はず、出家にて候と仰せられしかば、彼僧さてもよき御口かなと、一つ二つ物語しけるが、一休高野山の詩の事おぼし召出され、此山にても一首つくりてなぐさまむと、其まゝあそばされける、彼僧に硯帋を乞書つけて宮前にそなえ給ふ、此僧御筆跡のめでたきをみて、いよいよ推量申たり、都衆と見たてまつるはひがめかと申ければ、よくこそ見しり給へ、我等はみやこの一休なりと仰せられしかば、扨こそたゞ人にはあらずとはじめより申けるはといひもあへず、彼拜前へあげをき給ふ御作の詩を取來りて、御名をあそばせとこひければ、あそばしける、

七山里放光
五山瀧吟落碧三
三山海浪高船片雲社
一山廟等一扶桑神片漲景
二山客成群數萬人輪塵春
四山樓鐘動月輪惱宮
六山谷洗流煩本
八山花猶馥

一休老人偶題

さあそばしけるさて彼僧一休なりとて、横槌にて庭はき杓子で芋もり、御馳走申事中々いふもおろかなり、折節花のさかりなれば、庭前の花を見給へと酒肴を出してなぐさめ申、扨彼僧申けるは、此山へ又御出なさるゝ事ははかりがたし、末代の寶にもなるべければ、何にても一筆あそばし給はれと申ければ、やすき事也、御望あれとのたまへば、さても拜殿にての御作の詩は御自作にて候か、又いにしへもかゝる詩の侍りける事にて候かと申ければ、さればいにしへよりありし事なり、もろこしの詩人東坡居士が徑山寺にてつくりし詩にかくいへり、

七山僧
五山鳥倫來
三山雲飛片葉問
二山遠路幽深片食道
一山花發茂林沈吟尋
四山水碧沈樹相
六山猿抱還
八山客

と語り給へば、扨も〳〵めづらしき詩や、此年までかかる山のおくに住ければ、かやうなる詩は目なれも耳なれもいたさず候、とかくちと我等が愚なる耳にも、耳なれ目なれし事をあそばし給はれとのぞみければ、貴僧の耳なれ目なれたる事はなにがなとのたまふ所へ、折ふし櫻花にはかにはら〳〵と落散みだれければ、貫之が歌をふとおぼし召出して、いかにも大文字にあそばしける、

櫻ちる木のした風はさむからで
空にしられぬ雪ぞふりける

是はいかにとのたまへば、彼僧、いや是もいまだ耳なれず候と申所へ、又さくら花風にちらされさつ〳〵

さみだれければ、そのまゝあそばしけるは、

雪やこんこあられやこんこお寺の柿の木に
ふりやつもれこんこ

是はとのたまへば、彼僧はらをすへかね、さてもおどけたる御僧や、いかに耳なれ目なれし物とて、それはあまりに候と申せば、一休もわらひ給ひて、實尤なり、いでゝゝ其望の目なれ耳なれし事を書てまいらせんとて、

きねがすゞ海山木こり谷のこゑ
入あひのかねに庭前のはな

とあそばしければ、彼僧とてもよき御かる口や、まことに見なれ聞なれし物を望みけるこそ愚なれとて、御口のかるきを感じて、おくゆかしくこそ侍りけれとて、色々馳走申ておくりたてまつりけると也、

(二八)一休和尚、頃しも春の半の事なるに、花に心をよせ給ひて、いく枝もあつめ花籠に立まじへて、酒などまいり心もわかゝゝとなりておはしましける所へ、一休の旦那の奥方まいりける、よくこそ來り給ふとて、さゝなどすゝめおかしきことなど御はなしありて、ひたもの酒のみてあそびければ、日もはや西山にをちこちのたつきもしらぬ御寺に、彼女房もべんとはなし居ける、一休如何おぼし召けむ、今宵は御とまりあれと仰せられける、女房申けるは、かりそめにまいり長あそび仕候さへ、なにとやらん似合ぬやうに侍るに、一夜とまり申さばうき名や立申べし、其上夫ある身の事に候へば、いかに心はさ思ひてもかなひがたく侍る、先御いとま申すとて立かへりしを、一休袖にすがり、ひらに今宵はとまり給へと引とめ給ふ、女房申やう、いまゝでは一休さまはいきしやかのやうに思ひしが、わらはに御心ありてとゞめ給ふかや、きやうこつなる仰せかなと申ければ、一休わらひ給ひて、其方へ心をかくればこそ愚僧もぜひともにととゞめ申せ、心かけぬものが御とまりあれと申すものかと仰せられければ、沙汰のかぎりや、夫ある身がかゝる事侍るべきかと、ふりきりて輿に乘立かへりける、扨夫にあひて、一休は佛のやうに思ひ、そなたもさおぼしめさんが、いたづらなる御坊や、わらはに酒をすゝめ給ひて今まで引とゞめ、あまつさへこよひは一夜とまれとかなに仰せられける、かならずあの寺へ參り給ふなと、二心なきいけんをくり返し申

ける、夫はさる者にて、手を打てわらひ、さりとては佛なり、なんぢがかくいふもことはり也、よく思ひ見よ、いかなるものにても、我をたのむ旦那の女房に、なれ〳〵しげなく一夜とまれとは、中々出家の身にていひがたし、よし一休和尚と枕をならべば今生後生のうつたへ成べし、我等をかね侍らず急ぎ行て一夜あそび給へ、なに〳〵の誓言ぞ、我等のねたみ心はなしと申せば、左あらば引かへし参るべし、御よろこび有べしと申ければ、いそぎ参りてゆる〳〵と一休和尚をなぐさめ給へと申ければ、女房よろこび一間所へ立こもり、白粉口紅きつねのばけたるごとく引つくろひ、衣裳をかざりていそぎ輿にうち乗、一休へこそ参りけれ、一休ははや寝給ひしに、門ほと〳〵と扣、一休おどろき立出給へば、彼女いかにもほそ〳〵としたる聲にて、さきには是非と仰せられけれ共、夫の心うかゞはしくてふりきり立歸りし、あまり御殘多くて夫にいとまをこひ候へば、苦しからじと申侍るゆへ、とまりかけて御はづかしながら参りけると申ければ、一休、いや〳〵、もはやいやにて候、御歸あれ、先程はこなたへ心かゝり候が、はや心かゝらず候、はや御かへりあれ〳〵とて、門戸かたくしめて音もせず、さりとては御なぶり候かと申けれ共、あへて音もせず、是非なくかへりて夫にしか〳〵と語りければ、さあらんと思ひけることよとてわらひて、天下の老和尚なり、心のうごく時はうごかし、うごかざればうごかし給はず、もいやとはみじかし、誠に行水のごとき御心や、いさぎよし〳〵、とかく凡人にてはなしとて、いよ〳〵たつとびけると也、

(七)堺にての事なりしに、一休和尚へ常にまいりて、御心やすく御意を得たる又次郎と云町人有ける、或時河豚汁をしたゝか食てけるが、殊外に酔て終に其日の内に死しけるが、今はの時に申置けるは、我世にありし時は、死ぬる事はいつの頃ぞやと思ひけるなれば、後世とてねがひをきし事もなし、され共一休和尚へ常にしかう申、御物語共うけたまはりし結縁あれば、引導をもたのみ奉れ、かゝる不慮なる死を仕けると、さこそあはれにもおぼしめすらめ、かならずといひ置て終にむなしく成にけり、妻子眷属なげきかなしみ、遺言の通具に一休和尚へ申上ければ、いとやすき事也、扨々不便の仕合と仰せられける、然處へは

や時分もよく候間、一休御出をあふぎたてまつるさて、再三人をこしければ、一休おはせられけるは、いや〳〵我等罷出るにも及ばず、引導をつぶさに書てつかはすべし、誰にてもよみあげてほふむれよと仰せられければ、妻子なげきて、遺言にて候間ひらに御出下されよ、此度の御じひとさま〳〵にくどきければ、一休のたまひけるは、我等が出れば却てかれがまよひとなる也、すなはち書つけつかはすべしとてあそばしけるは、

海中有二毒魚一　名言二河豚魚一
面腹白背斑　人不レ食二此魚一
呼嗚痛哉又次郎　食レ之忽死矣
彼年五十四　彼年五十四

合せて數珠一連百八煩惱のきづなをふつつと截て行たい方へつつとゆけ、
木曾十七寅の年、角のないこそ添よけれ、
とあそばしてつかはされけるとかや、しかればおのおの肝をけしけれ共、仰せなれば其ごとくおこなひけるが、其ゐんだうの書たるを、其子秘藏し傳て其家のたからとし、又もなき墨跡にて、今の代々まで所持仕りて有けるとかや、

（八）一休和尚の時代までは、方々の寺々より、七月十四日には大内へ灯籠をさゝげける、大徳寺にも開山大灯國師よりゆへありてさゝげしかば、後々まで例になりて、やめがたくぞ有ければ、一休もむづかしくやおぼしけん、ある時大裏へ灯籠あげるとて、狂詩を一首つくりて其灯籠に相そへてさゝげ給ひけるは、

性靈今日出來迎　雨露直供二萬菓棚一
挑二得灯明一天上月　松風流水讀經聲

とあそばしければ、みかど御ゑい覽まし〳〵て、まことに一休の詩なる者を、やうなき灯籠をもとめけるや、自今以後大徳寺よりも何方の寺よりも、七月に燈籠をさゝぐる事有べからずと仰せ出されけると也、世の人是を聞て、扨も〳〵名僧かな、かゝる御こゝろざしにては、定而御寺には性靈祭はあるまじ、若あらばさこそかはりたる事にてや有べし、いざや人々一休の御寺へ參りて見物し、末代のかたり句ともなすべしと、四五人づれにてまいりて、一休へ御目にかゝり、此間禁裏へさゝげ給ひし灯籠の詩、洛中にて是のみ沙汰仕候、定てかゝる御こゝろざしにては、性靈祭

もあそばし申すまじく候と申ければ、いや〳〵我等は三界の衆生を思ふゆへに、有縁無縁の悪鬼をまつりて、しゆ〴〵のものをたむくるゆへ、廣大無邊なる性靈祭仕て候と仰せられければ、みな人案に相違して、此御寺にはみへ申さず候が、いづ方にか御まつり候ぞと申ければ、是より四五町わきをかりて候と仰せらる、皆人申けるは、とてもの御ことに見物仕度候、御人そへられ下され候へと申ければ、きどくなることをいひたまふかた〴〵や、人までもなし、われら同道申すべし、水むけし給へとまことしやかに仰せられければ、皆々よろこび御跡につきて行ければ、ひがし河原へ御出有て、これ〳〵見たまへとて、両方の御手をひろげ給ふ、みな〳〵どこもとにて候ぞとうと〳〵しければ、一休これ見給へとて、くる〳〵と舞手をひろげたまへ共、みな合點せざりければ、おのおのは見物はなるまじきぞ、いひてきかすべし、たゞ耳にてお聞あれと仰せられければ、みな人あきれて立居りて聞ければ、一休一越調をあげて仰せられけるは、

山城の瓜やなすびをそのまゝに
たむけになれやかも川の水

聞給ひけるか、是大なる性靈棚にてはなきかと仰せられければ、皆人扨も〳〵いや共いはれぬ御意やとて、かんにたへてかへりけり、

(九)一休和尚の御袋は浄土宗にて有しとかや、一休つねにかな法語書てつかはし、又は水鏡といふさうしを送りて道ををしへ給へども、しか〴〵御さとりもなく、明暮たゞ念佛のみにて過し給ふ、一休きこし召、一段の御心入也、念佛にても佛にならせ給はんことはうたがひなけれ共、此御所より愚僧が庵へ御出あらんに、何のうたがひなく御出あるべし、是よく常常道をしり給ふゆへに、苦もなくうか〳〵とありき給ひても、庵へは御出ある也、又かたへ夷人が我庵を尋來らんに、いか程道にまよひても、我等が庵ある上は何れたづねあふなり、その尋ぬるまでの心ぐるしき分が迷ひなりと仰せられければ、しからば何にてもしめし給へと仰せられける、一休さあらば一句申てみんとて、

目なしとぢ〳〵こゝろについてましませ

皆人の悟とやらむいふことを悟る、其ならひはじ

めに父母もなく、とつと已前の我身は何なると申すに、いかにしてもしらぬことが申さるべきかと云、といふものは何ものぞといへども、といふものをしらずとどがむるものもしらず、しかれば釋迦彌陀はよしなのとはずがたりやといふものは、とはずがたりかといひければ、一默しておりける、此心を見たまへと仰せられければ、御袋のいはく、

いへばいはずいはねばむねにさはがれて
思はぬさきやほとけなるらん

とあそばしければ、一休よろこび給ひて、とりあへず一首侍り給ひける、

いまははやこゝろにかゝる雲もなし
月といるべき山しなけれど

と侍りて、いよ〳〵御工夫尤も〳〵とてかへり給ひけるとなり、

(十)或時蜷川新右衞門來りて、佛法ばなしなどしてあそびゐけるに、一休の仰せられけるは、いま時の出家こゝろざしうすし、佛は五百戒をさへたもち給ひしとかや、せめて其數とりの五戒をばよくたもつべきことなりとのたまへば、新右衞門申されけるは、まことに沙門は申におよはず、俗の上にもせめて五戒はたもちたき事に候と申すに、一休、いや俗は是非なき事也、出家にはもたせたく思ふ也、去ながら目に見え耳に聞ゆるもの五戒をたもつ事なし、わづかなる一尺の扇子さへ五戒をやぶる上は、まして僧俗生とし生るものとして、五戒をたもたざるはことはり也と仰せられければ、新右衞門申されけるは、此扇子も五戒をやぶり申候や、中々やぶりたり、是は又和尚の出來口にて侍らん、いで五戒を一々とひたてまつるべし、こたへてきかしめ給へ、いつもの御頓作の御かる口うけたまはらんと申ければ、さらば一々とひ給へ、答て見申べし、新右衞門問ていはく、

如何是 殺生戒 答て云 竹截はねさはなさゞるや
如何是 偸盗戒 答て云 虚空の風を偸まぬや
如何是 邪淫戒 答て云 かなめと〳〵あはせずや
如何是 妄語戒 答て云 書そらごとをかゝざるや
如何是 飲酒戒 答て云 開てざゝんざいはざるや

是扇子の破戒ならずやと仰せられければ、今にはじめぬ御口なりけれ共、一入有がたく存候、去ながら五戒の内偸盗戒の御答に不審申たく候、一休答ていは

く、如何なるふしんぞや、新右衛門のいはく、古語に
扇是日本扇ホ風不二日本風一
と聞時は、扇こそ日本の扇をうごかすらめ、風は日本ばかりとはかぎらず、千里同風とあるからは、ぬすむ所いなやとおどけて一句申ければ、一休新右衛門とのたまふ、やつと答、一休一首、

音もなく香もなき人のこゝろにて
よべばこたふるぬしもぬす人

とあそばしければ、さてもよき御口や、先ほどよりの問答、むづかしながら一筆あそばし給はれとて、書てもらい掛物にせられけると也、此懸物都の中にもちたる人あり、これをうつす、

(十二)一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさづけ給ひしに、此人狗子とは犬の子なり、是に佛性とは何とも合點まいらずと申ければ、聞て見たまへとて仰せられけるは、

犬の子にあやかる人のしわざこそ
ほとけともなれ地ごくへも入れ
むかひ殿の犬子ろはまだ目があかぬか、おつぼにまゝ入てころ〳〵や、

と仰せられければ、いま目があきて候、扨狗子の所はやう〳〵いまめがあき候が、趙州の有無の所は千年工夫仕候共、愚痴の我等は得道仕る事はなりがたしと申ければ、歌よみて聞すべし、此歌をつねに吟じて心得て見られよとて、

なしといへばなしとや人のおもふらむ
こたへもぞする山びこのこゑ
ありといへばありとや人のおもふらん
こたへてもなき山びこのこゑ

とあそばしければ、彼者しばらく工夫して、しかればありともしれぬにて御ざ候かと申ければ、

有無をのする生死のうみのあまをぶね
底ぬけて後有無もたまらず

と仰せられければ、彼人此歌にて得心して一首、

有無ぞしるなにおもひけむ趙州も
なかりしさきの犬の一こゑ

と申ければ、一休聞給ひて、おつぼのまゝを一口まいりけるよとてわらひ給へば、旦那禮拜してかへりけると也、

(十三)頃しも八月の下旬なれば、大風大雨しきりに

して、洛中の家堂社塔ともそこねければ、蜷川新右衛門とるものも取あへず、一休和尚へ御見舞申て、御坊御内に御座候か、何と〳〵殊外の大風大雨、御寺はいづ方もそこね申さず候やと申ければ、一休出合給ひて、よくこそ御心付候ものかな、誠にめづらしき大雨にて候、去ながら當寺は先何事も御座なく候とて一首、

わがやどははしらもたてずふきもせず
雨にもぬれず風もあたらず

と仰せられければ、その御庵はいづくのほどにて候ぞと申ければ、一休わらはせ給ひて、さればこそ大事のことをおたづねあれ、

わが庵はみやこのたつみしかぞすむ
よをうぢ山と人はいふなり

と仰せられければ、さては喜撰法師と相住なされ候かとたはぶれければ、いや喜撰にかりて居る也と有ければ、さては借家殿にて候かと申て笑ひしかば、一休又一首あそばしける、

かりの世にかしたるぬしもかりぬしも
かすともおもはずかるともおもはず

とあそばしければ、新右衛門此歌を感じて扇に書留、かりそめにまいりても得道の徳侍るとて、よろこびてかへりけるが、門外より立かへりて、さて〳〵おかしきたはふれごと仰せられて、うかゞひ申すべきことおもふことを打忘れ候て、すでにかへらむと仕候、一首につゞり申候、此心いかゞ心得申すべしやとてよめる、

吹ときはものさはがしき風なるが
ふかぬときにはいづちなるらん

と申ければ、そのまゝ御返歌ありけるは、

吹ときはむべさはがしき山かぜの
ふかぬときにはふかぬかぜかな

と仰せられければ、新右衛門物をもいはずうなづきて、しばらく禮拜をなしてかへりしと也、

(十三)一休和尚の末期の句とて、世の人の口にまかせけるは其數多し、是か實也是は不實なりといふも不實也、如何となれば彼も御影を書て贊をもとめ、是も贊をもとむれば其贊には出るまゝにあそばしけると也、ある所の御影の贊にあそばしけるは、

朦々而三十年　淡々而三十年
朦々淡々六十年　末後啊糞捧梵天、

此句々もあり、又の語には
借用申昨月昨日
返辨申今月今日
借置し五つのものを四つかへし
　本來空にいまぞもとづく
又ある末後とやらむにあそばしけるとて人のいへるは、
生也死也　死也生也
柳は緑花は紅
喝
柳不ㇾ緑花不ㇾ紅、御用心々々々、一休筆題

(十四)ある人一休の御寺へよしありて参りけるが、或夜沙彌小喝食達をこまづけて、一休の御遺言共をおがみ侍し、一々名譽を極めたる事ども也、

一自書自贊の御影をおがみ侍しに、かうべはいかにも長髮にして眼をきつと見出し、うすあかき衣をめし、丸竹の柱杖をつき、いすにこしかけ侍りて、贊に柳は緑花は紅とあそばして、一頌あり、
行脚事畢　今日時節
折ニ主丈子一　燒ニ六月雪一
虛堂之再來天下老和尙一休宗純末後書ㇾ之
とあそばしける、見る目もすさまじくて身の毛もよだつ事なり、

一眞珠菴には末代まで出世すべからずと仰せられしが、自の一代にも出世はましまさゞりけれ共、出世の法語共は名譽なる語共を出して書置給ふ、和尙號はおくり號也、

一自いへり虛堂の再來なりと、其外ふしぎなる事を書をき給ふことおほし、其遺言のおくに、我死して百年過て、もろこしより禪師來らば我再來と思へ、又二百年に當る歳我しがいを土よりほり出して見るべし、若かたち朽たらば、いひ置しことみなたはごとゝ思ひて、書置し語共火中すべし、大かたはしがいはそこねまじとのたまひをきしと也、今年百八十三年になると也、隱元來朝なり、百年あまりと仰せられしに相違なし、隱元は一休の再來かや、しかれば二百年目は今十七年也、御しがいも定而かはり給ふまじきなり、

一今の一休の木像は近き頃つくりけるが、譜信那或は弟子衆まで、一休和尙の御そりかみをまもり袋

におさめて持けるが、かの木像をつくりし時、御長髮の體なれば、首の御剃髮を御鬢御肩御髮に佛工がうゑけると也、御そりかみを我等まで拜み奉る事有難からずや、毛の色もかはり給はず、百八十三年を經ければ、二百年めに御しがいをほりいだして見るまでもなく、ありくとおはしまさむことうたがひなし、

（十五）一休和尚の御こゝろざしを思ひみるに、寒山子の風狂にかはる事なし、寒山子の詩句に、

我心如二寒月一　秋水清無レ底

と侍りしが、一休の道歌に、

我こゝろそのまゝほとけいきぼとけ
波をはなれて水のあらばや

と侍り給ふ、これ寒山の詩の心也、寒山は文殊なりと傳へし、一休はさだめて普賢なるべし、されば狂雲集に其詩文おほしといへ共、たゞの人の目に見へぬをにくみて、その中より金聾の耳へも入やすき詩を書ぬき、盲の目にも見あきらむべきひらがなにてしばりつゝ、子供にも覺させ、おとなにもいまだしらぬ人に見せ侍らんと、かたことをかへりみず、仄平をわきまへねども、人の書あやまりしをもつてわがあやまりとす、われあやまりてもくるしからねば、かくあらはし侍る、

一休老和尚之狂詩二十首◎二首刪除

題二鉢敲一

晝不レ笠兮夜不レ茵　東西南北自由身
瓢簞扣罷有二何益一　花發十方淨土春

題二影法師一

元來有レ物不レ離レ身　揚レ手頭揚伸レ足伸
全體分明無二面目一　起居動靜似レ侮レ人

彼岸

今日彼岸欲レ開レ鉢　余身貧乏雨晴稀
無レ蓑無レ笠又無レ杖　結句食レ犬引レ腰飯

梅法師

往昔江南沒落時　起二青道心一成二法師一
欲レ開二横斜疎影古一　伊勢壺底晴皺レ眉

虱

獨臥寒衾患幾千　余身貧極有レ誰憐
夜深依レ被二半風食一　天到二曉鐘一未レ作レ眠

寄二少人一三首

紅顏綠髮冠沙喝　況忘御年十二三
若有貧僧憐愍志　寮前吹嘯致推參

其二

少年十五月如出　一笑紅顏花似開
木石無心多世上　嗚呼是此玉瑕哉

其三

若衆天然好富貴　摺切爭可入御意
無酒無茶又無餅　山僧風流只文字

賛兒文珠

看書忽忘七佛師　雲鬟霧鬢少年姿
手中經卷是何字　定有愁人小艷詩

賛阿彌陀佛

汝是柔願　一人不救　我無一願　萬民不泄

賛大黑

大黑尊天其面黔　諸人信仰置棚陰
平生愛鼠是何事　足下米囊無用心

賛布袋

菩提煩惱　睡裏乾坤　寤寐恒一　佛無虛言

靑地扇切薄

本眞白物染靑々　日本晴時如見星

又有縫玆思出事　宇治川畔亂飛螢

八島之壇浦合戰圖

射手名人能登守　兵法達者源九郎
秋風有恨八島浦　狠藉忠信亡菊王

一谷合戰圖

萬騎下山源氏兵　平家運盡出堅城
長江不洗英雄恨　日夜風濤戰皷聲

源九郎流弓圖

漫々滄波已落弓　恰如初月掛晴空
忽伸左臂取來者　天下英雄在殼中

熊谷招於敦盛圖

生年十六美男兒　身命碎珠回馬時
熊谷道心從此發　法然庵室念阿彌

佐々木四郎宇治川先陣圖

萬騎如雲宇水邊　東關諸將各爭先
功名誰出四郎上　一馬化龍何着鞭

一休咄卷之下終

一休關東咄序

比は寛文十一の年二月の比、ながさめふりつゞけ、いとさびしくて暮しかねたる折ふし、したしき友二人三人來りて、けふは末の五日天神の縁日なれば、いざや北野へさすゝめける、やつがれも心ざし有ければ、さいわいさ打つれてまうでける、歸るさに門の右左に、何とはしらず人のむれゐしをみれば、いかさまにも當世はやる虎や藥の類ならんさ立よりてみれば、さにはあらで、から大和の事ども記したるふみあき人、多くの草紙をかざりし中に、一休ばなしさなんあり、ひらいてこれをみるに、聞しにまさるかる口、おもしろき事共いふにたらず、しかはあれどかき殘せるはなしおほし、殊にはくわんさうにての物語まれなり、やつがれいやしくもこれをくやみて、むぐらおひてあれたる宿にかへり、一つ二つ三つ四ついつわりまじりのむかし物語、筆にまかせかきつゞり侍る所に、おりしも梓人來りて見るとひさしく、さてもよき笑草のたねなるかな、あづさにちりばめて世にひろめんさいふ、やつがれ見しにもあらぬ昔がたりの、聞しをたよりにかきつくれば、其ことさまたがひたるもおほからん、ことにいやしき筆に書つくれば、かたことなどもおほかるべし、いかでか人に見せ侍らんとじゝけれども、ひたすらにすゝめられて、一二さつさなして、一休くわんとうばなしさなづけ侍る、これたゞ女わらべのもてあそびなり、賢眼にをよぼす事有べからずさいふことさしかり、

一休關東咄目錄

目錄終

一休關東咄上卷

(第一)八はしにてきやうかの事

三河のくにの八はしは、なにをふめいしよにて、そのかみなりひらも、かきつばたの五もじを句のかみにをひてよまれけるとかや、一休も御らんなされたくや思しめしけん、ところのものにあんないさせて御らんずれども、八はしはあれてかきつばたもなし、ところせきまで田をうへてければ、いづれを八はしとも見もわかぬていなりけり、一休

をとにきく三河にかけし八はしも
田ばかり有てかきつばたなし

とあそばされけるとかや、

(第二)みねのやくしへ狂歌をつかはさるゝ事

おなじきくにみねのやくしは、れいげんあらたにましませば、てうせきまうずる人たえざりけり、こゝに當國やはぎといふ所に、かさをやむもの有て、七々日のぐわんをたて、まいにちをこたらずまうでける、すでに四十餘日におよべども、そのしるしなければ、如

來をうらみたてまつりて、さん〴〵あつこうしけるが、一休の御くだりときくよりも、いそぎ御むかひにいで、しか〴〵のよし申けり、一休きこしめし御しめしありけるは、如來のれいげんなきにはあらず、たゞなんぢが身をうらむべし、さりながらわれいのつてみんとて、きやうか一しゆあそばし、今晩まうでゝこれをよむべしとのたまひければ、びやう人よろこび、いそぎその夜まいりける、ころしも五月中の二日なれば、きせんくんじゆの其中に、あるひはげんせあんをん、ごせうせんしやう二世あんらくといのるもあり、又なむやくしるりくわうによらい、かれをたすけ給へ、これをすくひ給へなど〵、くち〴〵にのゝしれば、ものさはがしくて心さだかならず、しばらくなひゐんに入て、人のしづまるやうをまちけり、やう〳〵しんかうにおよべば、みな人げんじて、とうみやうのほうしとびやう人ばかりなりければ、くだんのうたをとりいだし、つゝしんでよみあげたり、

なむやくし衆病悉除のぐわんなれば

身より佛の名こそをしけれ

御こゑにて、

村雨はたゞ一ときの物ぞかし

をのがみのかさそこにぬぎをけ

ときこえけり、ありがたき佛ちよくやと、しばらくらいはいし、をきあがりてみれば、みのかさはをちてあともなし、こつずいにとをつてたとく思ひ、すぐにほつしんしてしよこくしゆぎやうしけるとかや、

(第三)一休衆道ぐるいの事

一休はしゆごうずきにておはしけるとかや、さればちごかつしきへの御ゑんじよ、こゝかしこにいまにあり、それがしたち所にみたりけるは、するがのふちうに小玉辨之助とて、所一ばんの美童ありけるに、ない〳〵御くどきありけれども、御なぶりなさるゝなどいふていらへも申さゞる所に、やがて狂歌一首あそばして遣されける、

花はねに鳥はふるすにかへれども

人はわかきにかへる事なし

とばかりにて、辨殿まいる、みやこがたのづくにうとあそばしつかはされければ、御うたにやはちけん、しみじみと御へんじ申上て、すなはちそのよいまいり、とよみもはてぬに、ないゐんしんごうして、けだかき

御のぞみをかなへけるとかや、

(第四)けいせいにいんごうわたさるゝ事

附にないぢや屋にいんごうの事

そのころあかさかに、いつきといふ名だかき遊女ありけるが、しばらくわづらひて身まかりけり、したしきものどもあつまりて申けるは、それ女は五しやう三じゆうにゐられつみふかし、ことにながれの身なれば、おほかたにてはかなふまじ、いざや一休をたのみたてまつりとむらはんとて、御しゆくしよへまいり、御りやくにゐんごうあそばしくだされ候はゞ、ありがたくこそはぞんじ候はめとて、ひたすらにたのみたてまつれば、一休やすき事と、かる〳〵しくも御座なされて、いんごうあそばしけるは、

僧は衣をうり女はべにをうる、柳はみどり花はくれない、かつ、

とのたまひければ、死人をいれたるくわんより、くはうみやうかくやくたるとみへしが、そのよすなはち日ごろしたしきものどものゆめに、じやうぶつとげたるよしみへけるとかや、又おなじき所に、往來の旅客にせんじちやをうりて、世をいとなむおとこありしが、にわかに此世をすぎにけり、近きあたりのものどもよりあつまりて、水などをそゝぎ、きつけなどせふくませけれど其かいなし、折ふし一休御とをりありけるゆへ、さいわいの事とてたのみあげければ、ちやびしやくをおつとり給て、いんごうにいはく、

一ぷく一せん、一期のあいだ末期の一句、うんきやくの話、喝、

とあそばしければ、これもわうじやうをとげたりとかや、ありがたしともいふばかりなし、

(第五)一休かいの國にてぢごくごくらく問答の事

かいの國にしばらく御とうりうのうちに、古跡一見のためにたちいで給ひけるに、所のぢたう一休の御げかうのよしきゝをよび、わざとしらぬふりにて近近さ行むかひ、それなるほうしぢごくごくらくはいかにとひければ、一休まなこにかごを立て、くそをくらへとのたまひければ、ぢとうもつてのほかにはらをたて、にくひほうしのあつこうかな、ものないわせそ、それいましめよとげぢすれば、かしこまり候とわかとうどもはしりよりて、さん〴〵にちやうちやくくして、たかてこてにいましめければ、一休これこそ

ぢごくよとのたまひければ、ぢたうかんじつゝ、あはてゝ馬よりさんでをり、手づからなわをとき、さても有がたき御けうげやとらいはいして、わがのりたる馬にのせ申し、たくに御とも申つゝ、てうせき御そばをはなれず、しゆ〴〵のちんぶつをとゝのへ御ちそう申ければ、これぞまことのごくらくよとのたまひけり、

(第六)らう人御ひきたてなさるゝ事

しばらくかいの國に御とうりうのうちに、一人のらう人御でいり申けり、一休はいきぼとけにてましませば、たのみ奉りて身上ありつきたしと、ない〳〵思ひけれども、おりをゑずしてゑも申さですぎける所に、ある時事のほか御きげんよく、御酒などまいりけるついでに、らう人申上けるは、それがし一もんれきれきはう〴〵にまかりあれども、おはを打からしぬればはぢがはしくてまいりゑず、かつはろぎんのよすがもなく、ふじゆうにてめいわく申にて候、あわれ御かげにて身躰ありつき申度よしひたすらにたのみあげゝれば、一休もふびんとや思しめしけん、打うなづかせ給ひてのたまひける、そのかたしよげいには何をかゑたりと、らう人こたへて、萬事ぶてうほうに候と申あぐる、そのとき一休、禮樂射御書數の文の類をゆひたてゝとひ給へども、一つとして存ぜぬよし申上る、一休聞し召て、さてもにが〳〵敷らう人かなと、しばらくあんじ給ふ所に、かの仁申上るは、こゝにあつもりの舞一ばん存じて候と申上る、一休きこし召て、それこそ日本一の事よとの給ひもはてず、所にてぶへんだてするもの共をまねきよせたまひ、しみ〴〵とないだんなされけり、其ほかつゞみうちなど御よういありて、しばいをしつらいまんまくをうたせ、こゝかしこにたか札をたて給ひける、

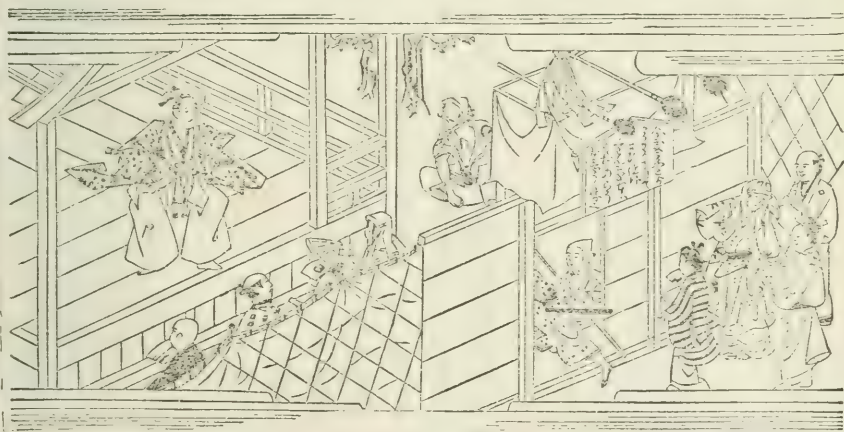
一、今度上方より幸若罷下勸進舞仕、勸進本者日本
老和尚一休

とあそばされければ、さぶらいは申すにをよばず、町人百姓五里七里をへだてきせんくんじゆして、さしもにひろきしばいはりやぶるゝほどに見へたり、さてかのらう人しやうぞくけだかくつくろひ、ぶたいへ出てあつもり一ばんまいすまして、がく屋へいるとひとしく、一人の男出て、まことにれき〳〵御けんぶつのだん、かたじけなきなどゝれいぎたゞしくし

て、さてこのつぎには何をかまはせ申さん、御のぞみしだいと申ければ、おほくのけんぶつくちぐ〵に、たいしよくわんよ、しだよ、たかだち、きよしげよ、などとよばはりける所に、かねて御やくそくにてや有けん、くだんのあぶれもの共、こ〵かしこよりのびあがり、いやとよ、あつもりをまはせよといふ、ふれたる男、おなじ舞は御たいくつに候はんといへば、かのあぶれもの共、此男がすきじや、あつもりまわせずんばしばいをふみやぶらん、つかみひしやがんなど〵いふほどに、又あつもりをぞまはしける、又男出てとへば、又あつもりといふま〵に、つゞけて四五ばんまはしける、其のちまづ今日は御いとまごいとておい出しけり、木戸口にて明日はかわるといふてふれければ、前の日より人はおほくいりぬ、又あつもり一ばんまはして、前のごとくのしぐみにて、七日までこそしたりけれ、さてこそかのらう人たよりをゑて、一廉の身上となりけるとかや、所のぢとう聞けれども、一休の御事なればきかぬふりにてゐけるとかや、

(第七)大しよくばなしの事

おなじ所に、事の外大ふいふをさぶらい有りけり、



ある時一休の御しやうばんして、御非時を給はりける、一休おほせけるは、さても其方はめづらしき大しよくかなとの給へば、かのうそいひかつにのりて、いやとよ、これはたぶるにてはなく候、それがしわかゝりし時、ともどちよりあひてかけろくしけるに、餅米一斗つかせ、一人してしよくすれども、いまだたらざりければ、そばにあわ餅したゝか有けるを殘らずたべて、あまりはらふくれければ、河へはしり出て、大きなる舟をよこにもちて、川をせき申たりと、かほ打ふりてかたりければ、一休聞し召、さてもおびたゞしき大しよくかな、それほどの大しよくはいまだきかず、さりながらそれがし存じたる山ぶし有けるが、これもかけろくして、もち二斗をつかせてひとりしてのこらずしよくし、あまり腹ふくれけるにや、ひろき松ばらにはしりいで、みかいばかり有ける松の木をねぢをりて、こしをかけやすみゐける所に、ちいさきへびおほきなるかわづをのみて、くるしげに見へし所に、みなれぬくさをくひければ、ぢみ〳〵と腹はへりぬ、さてもよき事を見つる物かなと、かの山ぶしくだんのくさをくひければ、うんのきはめにてや有けん、人のきゆる草にて、山ぶしはきへて、二斗のもち、ときんすゞかけ、ほらのかい、こんごうづえをもちてゐけるとかたり給ひければ、かのおとこ色をちがへて歸りけるが、かさねてはまいらざりけるとかや、そうじてけうがるおうふはいふまじき物也、かの男も大ふゆへに一本した、

（第八）ばけ物御たいじの事

おなじき國のかたはらなるふるき宮に、大きなる石どうろう有けるが、いづくともなくまいばんとうみやうをとぼしける、そのとうろうを大のほうしくるり〳〵とまはりけるを、見ぬ人もなくをそれぬものもなかりしかども、そよにのみ見て見とゞくるものなし、一休これを聞し召て、拙僧こよいたいじすべしとのたまひければ、所のものどもよろこびて、日の暮るを待かねて、くだんの所へゆきて見ける所に、其よもたがはず、とうろうをめぐる事かざぐるまのごとし、みな人申けるは、一休御たいじ有べきよしの給ひけれども、其しるしもなきなどゝ、とり〴〵ひやうばんをなす所に、又一人あらはれ出て、其よは二人ぞめぐりける、夜のふくるにしたがつて、みな人私宅にか

へりける、翌日一休の御しゆくしよへまいり、御口とちがひ候ものかな、やぜんもばけ物出てさうろうをめぐる事つねにたがはず、しばらく有て一人出て二人までめぐり申たりと、くち〴〵にのゝしれば、一休きこしめして、その一人はせつそうにてありけり、よもすがらおつつかへしつしつるが、ついにふみたをし、自今以後いでまじきよしさいさん申たり、かさねてはあらはるゝ事有まじきよしの給ひければ、人々てをうつてかんじけり、さてまたそのよになりければ、人々ゆきて見れ共いでざりけるとかや、ふしぎといふもあまりあり、

(第九)まめのしうくの事

一休はおんかる口にてましませば、ぢさうのおくがたへ申いれ給ひ、御はなしうけ給はらんとて、四はうよりさりまきて、みゝをすまして聞ければ、一休ゑたりかしこしと御物がたり有ければ、上﨟しうかんにたへて、もつとも御はなしはおもしろけれども、みぢかくしてほいなし、ねがはくはなが〴〵とたいくつするまで、御物がたりあれかしと申されければ、一休ともかうも御のぞみしだいとのたまひて、御はなしあるこそなが〴〵しけれ、せつそうさるかたへ夜ばなしにまかりけるに、くわしにいりまめを出しけり、かたはらより此まめしうくにてたべんといふ、みなもつとももとごうじて、さるまめのこまめのまめなやうになどくち〴〵に申なかに、かしこうもなくみゆる人いでられて申さるゝは、をくさまの吉野まいりとて、したゝかつかみてくらふ、人々きいて、これはいかにまめのしうくにをくさまのよしのまいりとは心へず、いかに〳〵とせむれば、さては御ぞんじなきか、井のうちのかはず大かいをしらぬためしあり、いづれも御ぞんじのとをり、當春それがしたのふだる人のおくよしのへまいり給ふに、それがしもともしてまかりしなり、道すがらめいしよきうせき打ながめ、さほの川、井手の里、玉水などやうのめいしよつぶさに見物して、よしのにもなりぬれば、山はさながら雪かと見まがふばかりなり、神社佛閣のこらずおがみめぐり、それより高き所にのぼりて、よもを打ながめ給ふ所に、にはかに嵐ふききたつて、をくさまのぬりがさをたにそこへをとしけり、其ときそれがしふかきふちにのぞむがごとく、はくひやうをふむ心

地して、岩ほをつたふてついにとりてかへりぬ、されどもかさはすこしはげたり、をくさま御らんじて、さてもうたてしのことかなとの給ひて、それより龍田、ほうりうじ、なら、はせなどいふめいしよ、みつ山だるまじ、たへまなどやうのきうせき御見物ありて、御上京ありし所へ、御一もんの女中御見まいなされけるに、さもじんじやうなるぬりがさをめし給ひて御いで有けり、それにつきて思しめし出され、かのかさのはげたるをぬらせよとおほせありけるほどに、ぬしへあつらゆれば銀子三錢にてぬらんと申、をくさまきこしめし、それはむづかしきことかな、さらば手ぬりにせよとて、うるし屋へてうもく二ひきをもちて、うるしをもとめけるに、むくろじほど有けり、そうじてをくさまは、ものごとおびただしくのたまふゆへにや、これはすくなき事かな、まめつぶほどありとのたまひける、さてこそまめのしうくには、三ごく一の事よといふたとかたり給へば、上ろう衆たいくつしていろわろくなりぬ、

(第十)かしまにて天ぐともんどうの事

一休ひたちの國かしまの宮だち一見のためさんけいなされけり、すでにやしろちかくあゆみ給ふ所に、しげりたるもりの木かげより、何とはしらずたけ七尺あまりの山ぶしつと出て、一休にむかつて、ぶつぽうはいかに、こたへて、むねにあり、さあらばわりて見んとて、こほりのごとくなるかたなをぬき、心もとにさしあてける、一休すこしもさはがず、まてしばし、

春ごとに咲や吉野の山櫻
　木をわりて見よ花のあるかは

との給ひければ、へんげのものいづくともなくきえうせぬ、いともめでたき御さいちならずや、

(第十一)こくしへ下をびをつかはさるゝ事

さがみの國小田原に御とうりうのうちには、片岡彌太夫といふらう人がいほりにましましけるとかや、所のぢとう聞つけて、使者をもつて申上けるは、ながのたびに御つかれあそばすべく候、見ぐるしう候へ共御こしあそばして、御つかれをはらし給へかしと申上ければ、よくこそとの給ひて、ししやをつれてぢとうがたくへ御ざなされけり、ぢとうもほんゐにや思ひけん、さんかいのちんぶつにて御ちそうをこそ申ける、さて酒をすゝめ御きげんをうかゞひて申け

るは、申かね候、其御手跡をさぞ望みける、一休聞し召、やすき事にて侍る、あなたよりしんずべしとて、御やどへ歸らせ給ふ、おつつけししやをもつて、さきほど御けいやく申候御しゆせき、此ものに下さるべく候と申てこそつかひける、一休もあまりせわしくや思し召けん、彌太夫がきさしたる文のそばに有けるを、ししやにわたし給ふ、ししやよろこび歸りてしうに見せけり、ひらいてこれを見るに、彌太夫が手也、これはふしぎなる事かな、つかいのあやまりにてこそあるらめとて、よびてたづぬれども、ぢきに御手よりとりて候と申、さてはあまりきうに申上たるによりてなるべしとて、またつかいをもつて申あげけるは、さいぜん下され候は彌太夫が手跡と見へ申候、ねがはくは御自身にかゝせ給ふをこそのぞみ申候へと申上ければ、さほどにふかきのぞみならば、いかでかおしむべきとて、したゝかつゝみたるふくろをこそ下されけり、使よろこび歸りて主に渡す、やがてふくろをやぶりてみれば、ふるきしたおびにてぞ有けり、地頭も手をうつてわらひけり、其のちおくへとをり給ふべき前に、彌太夫にやなぎごばかり大文字を一字あそばして下されける、又古きべうぶに何ともかたちのしれぬ繪ありけり、ていしゆにとはせ給へば、ふるくなり候てわけ見へ不レ申、私親が申候つるは、馬とやらんうしとやらんにて御ざ候よし申ければ、うしならばつの有べし、つのなければ馬なるべきぞとのたまふ、ていしゆ申けるは、ついでに此ゑにもさんをあそばし下し給はれよかしと申ければ、やすき事とのたまひて、大もじに馬じやげなとぞあそばしける、そのゑ今にありて、いともめでたき御くらにおさまりて、御寶物のその一つにて侍るとかや、

(第十二)ひやうたんのさることばの事

一休御てまへふつていのじぶんにてやおはしけん、一條のつじにたかふだをぞたてられける、

一、今度日本老和尚一休、三明六通を得て瓢簞をひつくり返し申、望のかた〴〵見物可レ有者也、今月幾日よりはじめ申、

とあそばして、紫野にしばゐをかまへ給ひけり、事がなとおもふ京わらべども、らうにやくなんによきせんひんぷくをいわず、足をそらになしてくんじゆしたり、さてしばゐもつみぬれば、一休御衣のまへに大

きなるひやうたんをつけ給ひ、兩手にばちをもちて、にしよりひんがしより、きたよりみんなみまで、とびめぐりはねかへりなんどしたまひて、大音をあげたんひやう〳〵とて、二十ぺんばかりおどりまはり、はねかへりなどしたまひて、其後がく屋へはしりいり、御自身に太鼓を打給ひ、かはり〳〵とておひ出し給ふ、見物のものども、これはいかなる事ぞとて、きやうをさます者もあり、あるひは又今にはじめぬ一休のおどけ事かなと。暫くは口をふさぎゐぬ者もおほかりき、

(第十三)ひゑい山にのぼり給ふ時御つけくの事

一休ひゑいざんへのぼり給ふ時、蜷川新左衛門といふもの御とも申せしとかや、一休へ申あげゝるは、ふと心にうかび候あいだ、一句申て見候はん、御つけなさるべしとて、

　ひゑの山路をひろひゆくかな

といひもはてぬに、一休

　さしとけてふもとに四貫の錢をはらり

とづけ給ふ、かくいちはやき御とんさくなり、それより山にのぼり給ひて、しゆ〳〵の御おどけ事有けれ共、前集にくはしく見へたれば、これをりやくする者也、

一休關東咄上卷終

一休關東咄中卷

（第一）一休こちをめして師の坊に見せ給ふ事

一休御やうちのころの事なるべし、はじめてくわ僧へ御たいめん有ける時、くわそう仰せけるは、それ禪宗は教外別傳にしてさとく事なし、さとりといふ事第一なりとのたまひける、一休とひたまはく、其さとりとやらんはいかやうのものにて候ぞと、くわそうこたへて、東風はいかにとゝはゞ、こちとさとるやうの事なりと仰せける、一休きこしめして、かしこまりて候との給ひて、すこしほどへてだんなしうまいりけるに、くわそう一休にむかつて、とうふをとゝのふべしと、こゝろへ候とて、一休ぢきに魚や町にゆき給ひて、こちといふ魚をめしてかへり給ひ、さてくわそうにむかつて、とうふをもとめ候との給ふ、くわそう御らんじて、これはいかに、魚にてこそあれ、とうふにてあらず、ごんごだうだんと御しかりなされける、一休さあらぬていにて、一日御しめし候つるは、東風といはゞこちと答へよとこそうけたまはり候ぬ、しかしながらそれがしきゝあやまりてや候らんとの給ひければ、師の坊あきれて口をとぢ給しとかや、

（第二）小利大そんの事

一休いとけなきとき、くわそうにつかへ給ひけり、くわ僧つねに蜜をこのみてまいりける、一休御らんじて、それがしにも給はれかしとのたまふ、くわそう仰せけるは、おさなきものこれをしよくすれば身まかるなり、かならずなむる事なかれとのたまひけり、あるとき御るすのうちに、すこしなめ給ひけるに、事の外あまかりければ、ひたものまいりけるほどに、殘りすくなになりにけり、よく／＼思しめしけるに、くわそう御歸りあらん時、なにとか申ひらかん、いかゞちんずべきとしばらく御しあんありて、きつと思しめし出されけり、ひごろくわそうひぞうし給ひけるちやわんを打わりて、其のちかのみつを口のはたへつけ、かうべよりあびなどして、なみだぐみたるていにておはします所へ、くわそう御かへりありて、これはいかなるふぜいぞとひ給へば、さん候、ひぞうのちやわんをとりおとして、打わり申ゆへに、めいわく仕り、御歸りのせつ申上べきやうもなく候のあいだ、ひ

ごろ御申なさるゝとをり、此毒をたべてしなんとぞんじ、かたのごとくしよくすれどもしに申さぬゆへ、かうべよりあび申候とのたまへば、くわそうもあきれてしたをまきたまふとかや、

(第三)一休に御ないはうありし事附御師匠の事

一休くわんとうより御下向ありて、いかゞ思しめしけん、三條河原にひんなるをんなすみけるをまねき給ひて、御ちぎりあさからずとぞきこえける、年へだたり月かさなりて、一人の子をまふけて、御てうあいなされけるが、あるときかの女にむかつてのたまひけるは、すをもとめてきたるべしと、をんな何心もなくすをもとめて歸りけるに、一休かのちごにすをかけて、はぎにかぶりつき給へば、女房おどろきさはぎて、かの子をうばひとり、にげさりてあとなくなりにけり、おもん見るに、しうぢやくをきらしめんとの御はうべんかとぞおぼゆる、

御ししやうの事

一休の御ししやうをやうそうといふせつ、前集に見へたれども、ほんせつはくわそうにてましますとかや、やうそうは弟子兄弟にてましますなり、近江の國堅田のうらに、くわそうの御かいじ今にあり、此所にてゑびをつり給ひしも、くわそうの御事なり、一休はかた田へついに行給はず、やうそうはくわそうのかた田へ御ざなされしをしたひて行給ふとかや、

(第四)かみなりおちたる事

きうか三ぷくの夏の頃、紫野ちかき者共六七人つれて、一休の御寺へすゞみにまかりけるに、にわかに夕立しけり、一休も御寺にまし〳〵て、空のはるゝまでは、これへとをりてまち給へと仰せつかわされければ、御意にまかせてみな〳〵おくへとをりぬ、とかうするほどに日もくれけり、空のくらむにしたがつて、いなびかりはげしくかみなりさはぎ、おそろしなどもいふばかりなし、みな〳〵申あひけるは、夏はいつもかみなりをきけど、これほどおそろしきはなし、などゝおそれおのゝく所に、またおびたゞしきいなびかりしければ、すはや今こそ此御寺へおちかゝるは、すでにつかみひしがるゝと、きもたましゐをうしなふ所に、あんのごとくぐわら〳〵びつしりとおちたりけり、なじかはこらふべき、其ざにゐたる者どもみな〳〵にへいりけり、やゝあつて一休御出なされ、人

人にきをつけ給へば、ゆめいさめたる心地して申けるは、さるにてもかみなりは、聞しにまさるおそろしき物にて侍るなどゝいふ、さてはかたちを見給ひけるにやとこひ給へば、さればこそ、たとへば車牛にははねのはへたるやうなる物にて侍りなどゝいふ、又かたはらより、いやとよ、それは見あやまり給ひたり、小ぢやうちんのかたちして、あかき物にて侍るなどもいふ、其ほかにわ鳥のやうにて候の、おにのかたちなる物にて侍るなどゝ、くち／＼にゆひける中に、一人ふてきものありけるが、始終心をへんぜず、とくと見すまして申けるは、いやとよ、人々の申さるゝはみなひが事にて侍る、かみなりのかたちは、たけ六尺ばかりのほうし、ひらみたるたいこをまへにもちて、おちるとひとしく御だい所へなりゆき申たとかたりける、一休これを聞しめして、むねを打てわらひ給ふ、よく／＼のちにきけば、やねのもりをとめんため、小だらいを持て一休天井へあがり給ひしが、ふみはづしておち給ふにてぞありける、

(第五)いなかへ糸瓜のかわをつかはさるゝ事

一休しばらくふか坂に御こうりう有ける中に、ほうねんじといふじやうど寺に御やどなされける、ちうじおろかもなく御ちそう申ければ、一休も御満足にや思しめしけむ、御上京のちまでも御ふみなどつかはされける、ある時ほうねんじ、一休へひきやくをもつて申上けるは、こんごくそう一だんなりつしんいたし候につき、いんしん仕るべきにて候へ共、御存じのとほりいなかにて、よろづふじゆうにてとゝのへかね候、何にても御見はからひにて、心やすくしてみばよくかさだかなる物を、御とゝのへたのみ申上るよしにて、わざ／＼ひきやくをのぼしけり、一休聞しめし、にくき出家の心かなとのたまひて、へちまのかわといふ物を、にもつ三かうりにつくらせ給ひて、御文をそへられける、とを／＼の所思しめしより申のぼし給ふゆへ、ずいぶんげじきにてかさだかなるものをくだし申候、きに入候はゞいかほどもしんじ申べし、かさねて申のぼし候へとあそばしつかはされければ、かさねてはりよぐわいを申あげざりけるとかや、

(第六)ちやうすをかりにつかはさるゝ事

一休京都に御ざなさるゝ時、御近所に人にすぐれて

しはき僧有けるが、一休へまいご御むしんをのみ申あげけり、ある時一休かの有欲の僧へちやうすをかりにつかはされける、かの僧へんじ申上けるは、ちやうすのぎ御申こしなされ候、やすきほどの御事にて候へ共、他所へかし申候へばくせがつき申候あいだ、こなたへひきにつかはさるべきよし申上ければ、其ぶんにてやみ給ひぬ、ほどへてかのうよくの僧、一休の御寺へのぼりばしごをかりにつかひける、一休聞しめして御へんじ有こそおかしけれ、やすき事にて候へ共、よそへかせばくせがわるくなり候ほどに、こなたへ御越有てのぼり給へ、

(第七)へいぐわいの事

かたいなかのものはじめて京へのぼりけるに、かのいなかものことの外かしこだてするものにて、しかももんまうなり、かりそめにもこばしたがりければ、やごぬしもこびものにて、一休へより〳〵御見まい申ければ、いなかものにむかつて申けるは、はじめて上京し給ふしるしに、いざや紫野の一休へ御め見へし給へかしとすゝめければ、もつともいなかにてもきゝおよび候、それがしがおやは一休とちん〳〵にて侍る、まづまいりて御たいめん申さんとて、やごぬしと打つれてむらさきのへとぞまいりける、折ふし一休も御寺にまし〳〵ければ御出あり、いなかものにむかつて仰せけるは、その方はいなかしゆのよし聞および候、やさしくもたづねつるものかな、くたびれぬらんに、へいぐわいにあれどのたまひける、かのいなか者何ぞたべよと仰せあると心得て、いかにもしたく仕り候と申、やごぬしせうしがりて申けるは、よくこそ御きをつけさせられ候ものかな、私躰の下れつのものは、とにかくにへいぐわいがよく御ざ候ととりなをせども、かのいなかものぬからぬかほにて、ゑゝへいぐわいの事にて侍るか、いやはや御申なさるゝとをり、國もとなどにてもめんるいのうちにては、へいぐわいそばきりなどをつねにたべ候、一ぜんは下さるべし、御出しあれといふた、

(第八)ちくゑんの事

二條堀川邊にすまいするもの、今宮へさんけいしける下向に、大徳寺をすぎてふと一休の御事を思ひ出し、人をよせける、御門前をとをり候により、人をもつて申上候、いよ〳〵御きげんよく御座なされ候や

承り度存候、などゝてねんごろに申上ければ、一休もれもいたし候てい、かのこせきならねどちんをしつらひ候と申つかはされければ、きやつももんまうなるものにて、あなたの口上は一ゑんに聞わけずして、土足にて候へばまづとをり申にて候とへんじ仕る、一休又しそうをもつて、ぞそくのよし承候、さいわい竹椽も候、ぜひ御より有べしと仰せつかはされければ、ちくゑんとは人の名ぞと心得て、中々の事にて侍る、ちくゑんもそれにおはし候か、ちくゑんへもしかるべきやうに御こゝろへたのみ申といひすてゝ、足ばやにこそ歸りけれ、

御使僧をそへられて、ちとたちより給へ、折ふししぐ

(第九)しゆせきの事

むらさきのゝかたはらに、四十にあまるまで一文字ふつうのとんせいじやありけり、をり〱は一休へまいりて御用など承りける、あるとき一休の御前へ出て申けるは、それ人の一げいは、物をよくかくにしくはなし、なにわのよしあしにつけても、ぐそうがもんもうなる事をのみくやみ存候、あしたにみちをきいてゆふべにしすともかなりと承り候、ひくれてみちをいそぐにて候へども、御手本一つあそばしくだし給はれかしと申あげければ、やすき事とのたまひて、かなまじりにさらさらとあそばし下さるゝ、とんせいじやちやうだいしてあんじつに歸り、をこたりなくならひけり、一兩日をすぎて、あさとく一休の御寺へまいりけるに、御でしたち出あひ給ひて、貴僧は手ならひし給ふときゝ候、きどくの御心ざしにて侍る、さてしゆせきはあがり候かとありければ、とんせいじや申けるは、たゞいまたべ申たと、いやとよしゆせきの事にて侍ると、なにのじぎをつかまつらふといふた、

(第十)火まはしの事

一休の御きんじよに、日まちをするものありけり、よひのほどは碁すごろく將棊などやうの物をもてあそびけるが、のちにはいまやうをうたひ、あるいはまひなどしておどりさはぎける、かたはらより申けるは、いざや火まはしといふ事をはじめんと、しかるべしとてかたはしより、ひちりめんの、ひごやの、ひどんすなどゝいへば、かしこうもなく見ゆる人ひはぶたいと、一休もその人じゆにておはしけるが、ひはぶ

かしこき御かたさまへ御そうもん有ければ、さてはのぞみあるにこそごさんなれとて、あまたの御いんもつをつかはさるゝ、其のちまたこのゑ殿ゆきて見給へば、日月のあわれみをかうむらずのわきに、すこしかうむりとぞあそばしける、さてはふそくにおはするかとて、かさねて金銀あまたつかはされてのち、又このゑ殿ゆきて見給ひけるに、すこしかうむりとかき給ふつぎに、又かうむりとぞあそばしける、

一休關東咄中卷終

たいといふ物はしらぬとのたまふ、其ときかのおぬく、いやとよおの〳〵のひぢりめん、ひざや、ひざんすなどゝいわるゝ者、ひはぶたいといはではといへば、そのぶんにてやみたまひぬ、かのかしこからぬ者一休にとがめられてはらをたて、なにがなとがめかへすべしと思ふ折ふし、一休ひこ九郎とのたまふ、そのときかのおぬく申けるは、ひこ九郎といふ事が侍るかと、一休、いかにもある、ぐそうが寺の門ばんこそひこ九郎といふとのたまへば、なにとがてんしたりけん、うちうなづきて九郎すけと、これはいかに、火まわ□に九郎助とはがてんゆかぬと有ければ、そなたの寺のひこ九郎ばかりが門ばんの、こちのてらの九郎助も門ばんじやといふた、

第十二ついには日月のあはれみをかうむらずの事

一休の御ぞくしやうは、前集に見へたればこゝにしるすに及ばず、このゑ殿一休へ御見まいあそばしける事ありけるとき、御とこに三じやのたくせんをかけられたる、つく〴〵と御らんあるに、ついに日月のあわれみをかうむらずとあそばしてけり、このゑ殿もふしぎに思しめしながらかへらせ給ひて、いとも

一休關東咄下巻

(第一)文字せんさくの事

一休御わづらひの折から、御養生のためとてかゆをまいりける所へ、はせ川與吉とてこざかしおとこまいりあわせて、御しやうばんつかまつりて一休に申上けるは、さても此かゆといふ文字を、りやうわきに弓をかいて、中にこめをかくにはしさいこそ候はめ、ふしんしごくに存候、そも〳〵かゆといふ物は、水の中へこめをいれ、しるくやわらかににたるをかゆといふなれば、あるひはさんずいにこめとか、じきへんにゆなど丶こそかくべきものにて侍るなるに、いかなるしさい候て、かやうにはかき申候やらんとたづね申ければ、一休こたへてのたまはく、この文字にはしさいこそあれ、むかし大そうに、しんのうふつきとてせい王おはしけり、其ころまでは文字いまださだまらず、米食などの文字はあれども、かゆといふ字なかりしを、ふつきしんのうあまたのせいけんをあつめて、こめを水のなかにいれ、しるくやわらかににてもちゆれば、ふくちうと丶のふてきゐやすきものなり、しかれども此文字いまださだまらず、いかゞはつくるべきや、いづれもたくみて見給へとて、さま〴〵しあんし給へども、思ひ出し給はねば、あんじわづらひて、まづかゆをたきて人々にすゝめ給ひけり、されども思しめし出されざりければ、しんのううつわ物にはしをからりとおかせ給へば、かくのごとくに見えたり、さてこそ兩わきにゆみをかきて、なかに米をかくなりとこたへ給ふ、與吉てをうつて申けるは、あつぱれ御せんさくにてましますかな、いかさまこれはゆへもなき事にて候はんづるに、何を申あげてもらちをあけ給ふ事なとて、から〳〵とわらひけり、さればとよ、これにつきて又ふしんこそ候へ、只今のごとく笑といふ字を竹かんぶりにいぬをかくこそ心ゐね、わらふといふ文字ならば、口へんにひろがるとか、目へんにしわむなど丶こそかくべき物にて侍るに、竹かぶりに犬といふもじは、いかなるしさい候てかき申候と申ければ、一休聞しめし仰せけるは、これもかゆと一どにつくられたり、わろふといふ字をたくまんとて、聖賢あまたならびいたまふ所へ、ちいさ

き犬かしらにかごをかぶりてきたりつゝ、さま〲おどけてくるひければ、人々一どにどつとわらひ給ふ、其ゆへにこそみぎのとをりにかくなりとのたまひけり、いかさまいはれありもやすらん、なくもやあるらん、いさしゆしやうなる御へんたうかな、

（第二）たきゞの寺にて金のばけたる事

一休いまだわかくましますとき、山城絅見のためたち出させ給ひけり、たきゞといへる所に一箇のふる寺有、寺號は酬恩庵とかや申ぬ、されば此寺にたへて久しくぢうぢなければ、おのづからやかんのすみかとなりて、ふるきこけはかべをとぢ、むぐらはのきをおほひつゝ、物すさまじきありさまなり、所のものどもあつまりて、かくまであれはつる事、たゞすむ者のなきゆへなり、しかるべきほうしをまねきて、此寺にすへんとて、かれこれ六七人まですゆれども、あるひはよのうちに身まかり、又ゆくゑもなくなりゆきて、いよ〲ゆきかふ人なくあれはてたり、一休これを聞しめして、此寺をわれにわたすべし、いかさましれものゝすむとおぼゆるぞとてやがて出給ふ、たきゞのものどもこれを聞て、みぎのしだいをのこらず申あげ、さま〲せいし申けれ共、われにまかせよとばかりのたまひて、たゞひとりすご〲と、かのふる寺のまばらなるに、かすかなるともし火をのみたよりにて、夜のふけゆくをまち給ふ、すでに子のこくばかりとおぼしきとき、寺内しんどうして、いなびかりすさまじきなかより、としのほど二八ばかりなる女の、いかにもやうがんびれいなるが、こつぜんとあらはれて、一休の御そばちかふあゆみよる時、一休すこしもさはぎたまはず、大かたこゝろへたるぞ、そこをされとのたまへば、跡もなくきゑうせぬ、しばらくあつておなじ年ごろのちご、ちやうしかわらけをもちて、よさむに候、酒をすゝめたてまつらんとたわむれて、御そばちかふあゆみよる、一休ちつともおどろかせ給はず、さいぜんのものは又きたるかとのたまひければ、これもおなじくきへうせぬ、とかふするほどにすでにうしのこくばかりとおぼしきとき、寺内ゆるぎさわぎ、いなびかり一入しげくすさまじくして、たけ一丈ばかりのほうし、おもてはわうだんをやむものゝやふにて、まなこはしゆをぬりたるごとくなるが、ひかりと共にとびめぐりて、ぶつだんのしたをし

きりにながめたり、一休御らんじて、すわ三ごまでき
たることこそをろかなれ、はやくつちのそこへかへ
れとの給ふよりはやくきへうせぬ、すでによもほの
ぼのとあけければ、所のもの共大せいにてかの寺へ
きたりて、さても一休とていきぼとけのやうにいわ
れさせ給ふ人の、へんげのものにころされ給はんこ
とのむざんさよと、ねんぶつなど申て一町ばかりへ
だてつゝ、一休はましますか、御坊やわたらせ給ふか
と、口々によばゝりけり、その時一休門のそとへ出給
ひければ、一どにどつとかんじつゝ、しばしはなりも
しづまらず、さて一休をたよりにて、みな〳〵寺へ入
にけり、一休の給ひけるやうは、まづ此寺をくづし、
さてぶつだんの下を、ふかさ三尺はゞ一間四方にほ
りて見よとの給ふ、所のもの共うけたまはり、仰せに
ては候へ共、此寺はすでに久しき寺とこそ承およぴ
候、いかでかさうなくこぼち申さんとをしみける、一
休の給ひけるは、さほどおしく思はゞ、此寺をくづし
てそのあとに、いかなるがらんをもこんりうすべし
と仰せければ、さらば御げぢにしたがひ候はんとて、
さん〴〵に打くづし、さて佛だんの下をほりて見け
れば、こがねをつめたるつぼを三つまでこそほり出
しけり、さてほり出したるこがねを、一つは地頭この
衛どのへしん上し、いま一つはところの者共にとら
せ給ひ、のこる金にて善つくし美つくしたる堂塔を
こんりうし給ふとなり、その時よりかの寺を酬恩庵
とがうして、大德寺の末寺にさだめられしとかや、此
寺にて一休すませ給ふ事とし久しかりしと也、今の
世にいたるまで此寺に、一休の御いんきよの寺と申とかや、
さるによつて此寺に、一休の御手跡そのほかれいほ
うれいぶつあまた有けると也、

（第三）天をかさにき給ふ事

一休くわんとうより御下向の道すがら、しかるべき
大みやうと覺しき者と、跡にさがり先になりてのぼ
らせ給ふ、比しもみな月の末つかたなれば、暑氣はな
はだしかりしかども、かさをもめさずあゆみ給ふ、か
の大みやうもやさしき者にて、使をもつて申上ける
は、かゝるゑんてんに御坊はなどかさをだにもめさ
れざるや、さいわいもちあわせて候、ふるく候へ共こ
れをめされてあゆみ給へとて、すげのをがさをまい
らせける、一休もれいぎたゞしく仰せけるは、御心ざ

しのほど近比しうちやく申て候、しかしながら此ほうしは、天をかさにき候へばあつくもぬるくも候はすとの給ふ、使の者かへりて主にかくとかたれば、かの大みやうも、いかさまただ人にてはなきぞとよ、馬のけあげをかけ申な、ひかげをよきてとをし奉れとて、なをも同道申ける、さてとまりにもなりぬれば、一休もかの大みやうも同じき所に宿したまふ、さて使をもつて申上けるは、さき程かさをまいらせんと申つかひ候ものにて候、たびはいとゞものうきものにて候なるに、此ごろのあつさにさぞや御身もつかれさせ給はんなれば、御出ありて御しゆ一つまいりてんやと申上ければ、くわぶんの心ざしなればとて、使とつれてゆかせ給ふ、さておくへとをり給へば、大みやう申けるは、そも〳〵わこくにては、人にあふてはに笠をぬぐとこそ申に、なごやぬがせ給はぬぞと申ける、ことばの下より、ぬぎ候ひてもかけ申べき所なく候との給ひける、さてこそ一休とすいし申て、しゆじゆ御ちそう申けるとかや、其のちさま〴〵のもんどうありつれ共、聞もらしぬるこそ口惜けれ、

（第四）弟子をとりてめいくをのたまふ事

一休のだんなにおろかなるもの有ける、此ものおりおりまいりて御物がたり承りける、あるとき一子しゆつけすれば、きうぞく天にしやうずるといふほうだんをうけたまはりて、ふかくしんじ、たゞひとりもちたるせがれを、御弟子にあそばし下され候へとてつれてまいりける、やすき事也とて髮そりすまして、かの小僧がかしらを御手にてさらり〳〵となでたまひて、きんになれ〳〵うしのきんになれとのたまふを、小僧がおやふくりうして、これはきよくもなき事をのたまふ事かな、ほとけまでこそなくとも、せめてぼさつになれとなり共のたまはで、うしのきんになりてなにのゑきか候ぞやとて、一休をしきりににらみける、其時一休打わらひ給ひて、されば末法の出家は、おこなひがたくしておちやすし、さればうしのきんはぶらり〳〵とおちさうに見ゆれ共、おちたるためしなければ、さてこそかくはいふ也と仰せければ、かのだんななにとか心得けん、いわれをうけたまはればおもしろく候といふた、

（第五）今出川口にてこつじきに小袖をとらせらるゝ事

一休極月の末つかた、よし田へ御ざなされける、かへるさに、今出川口の河原に、まるはだかなるこつじきのふしていたりけるを御らんじて、さてもふびんの者やとのたまひて、小袖を一ゑぬぎてとらせらるゝに、此こつじきよろこぶけしきもなく、そで打とおしきたりける、一休おゝせけるは、さてもふしぎなるこつじきかな、一錢をだにいたゞきてふしおがむは、こつじきのならひなるに、よろこぶけしきもなく見ゆるは、うれしくもなきかとゝひ給へば、こつじきこたへて申けるは、御身はわれに小袖をくれてうれしくもなきかとゝひける時、一休さてもあやまつたり、一だいじのさとりこゝなりけるぞや、いかさま此こつがい人はたゞ人にてはなきぞ、愚僧がぐちをはらしぬるこそうれしけれとて、たなごゝろをあわせ御目をふさぎ給ふ内に、こつがい人はきへうせて、たゞ小そでばかりぞ殘りける、ふしぎなりける事共かな、

（第六）一休おさなきときいんどうなさるゝ事

一休いまだ十歳ばかりのとき、くわそういなかへ行給ふ御るすに、だんな相はてたり、いそぎいんどうをたのみ申さて、死人をもちてきたり、御るすのよしをのたまへども、御でしたちなり共たのみ申とて、御寺へ死人をかきこみけり、折ふしおとなしき御弟子たちもゐあわせ給はざりければ、一休心得候とて、さもしゆしやうげに御やういありて、さて死人のいりたるくわんにむかつて、まづ死人にゆびさし、つぎに御身にゆびさし、さて兩手をひろげてなにのことばもなく、喝とぞの給ひける、さかうする程にくわそう御かへりありて、右の次第を物かげより見給ひて、さて一休にいかなるいんどうにてありけるぞとてたづね給ふ、一休仰せけるは、さん候、死人にゆびざし候は、なんぢがしにたるゆへにと申事にて候、それがしにゆびざし候は、この小僧にと申事にて候、兩手をひろげ候は、おほきなるはぢをかいたると申たるにて候なりとぞ、こたへ給ひし、

（第七）堺の浦にて遊女と歌問答の事

一休和尚さかいの浦へ御こしの時、所に旅客を宿する店屋あり、其中に地獄といへる遊女あり、一休和尚をしりて、一首を詠じて和尚に奉りける、

山居せば深山の奥に住よかし

爰は浮世のさかい近きに

一休そのまゝ返歌、

一休が身をば身程に思はねば

市も山家も同じ住家よ

和尚もたゞならぬ者と思しめし、あたりの者によしを尋ね給へば、あれこそ人のしりたる地ごくと申遊女にて候と申ければ、和尚そのまゝ、

聞しより見ておそろしき地獄かな

遊女とりあへず、

しにくる人のおちざるはなし

（第八）甲斐の國にてかゝ口もんどうの事

甲斐の國へ一休御下りの時、所のなにがし、かねて一休の答話よき事を聞及びしゆへ、一休の頓作をまのあたり聞んと思ひ、まぢかく使ふ童におしへいひけるは、一給こゝを御とおりのとき、生恁麼の時如何と申せ、和尚何とぞ言句あらば、喝といふてたちされとふくむれど、聞なれぬ言葉なれば、おぼへがたきていに見へけるゆへ、かさねていひけるは、なまといふ生の字なるぞ、恁麼はいもをはねたる物と覺へよとて、一休をそしとまちかけたる所へ、和尚御とをり有ければ、童かけいで、生いもの時いかんとゝふ、和尚とりあへず、煮てもよし燒てもよしと仰せければ、おしへのごとく喝といふ、和尚こたへて、ゑぐいかとあれば、なにがしもおかしと思ふ中にも、答話の頓なる事を感じられたり、

（第九）せきはんの當話の事

一休和尚したしき在家へ御行なされ候時、折ふし到來としてこはいひを奉りけるが、亭主こびたるものにて、和尚の當話をこゝろみんために、何と和尚せきはんなればむざとむねはとをるまじきに、そこつにまいるはいかんといふ、されば一休そらさぬ風情にて、ひきよせにぎりかためてひた物にまいりけり、亭主しきりに、一句なくしてまいるはせんなし、いかにいかにとせめければ、その時和尚こたへ給ひけるは、これ見よ、せきはんときくゆへに、てがたをつけてむねをとをすほどに、いくらもとをらではとあれば、亭主理におれてあきれけり、

（第十）極樂沙汰の事

一休和尚へ日比御でいり申たる白俗に、たゞ一向に彌陀の淨土に生れん事を願ふ心深かりし者あり、さる程に當時の名僧八宗九宗をへだてず、足をそらざ

まになし、あなたこなたへまいりつゝ、極樂淨土に生れん事の沙汰のみに日をくらしける、ある時一休へまいりて申けるは、それがしあさましくも愚癡暗昧の身と生れ候へども、たもちがたき佛性をぐし申上は、いかやうにもしゆぎやう仕り、來世はかならず極樂國に生じ申たき誓願深くおはしまし候、さるにより四方の能化達にさんじて承り候に、他の師は十萬八千里の遠きあなたに極樂ありとおしへ給ふに、和尙は地獄極樂目前にありとしめし給ふ、百里や二百里はちがひもいたさんずれど、かやうに相違あるによりて、それがしまよひ申候あいだ、あわれ御ぢひに實をしめし給へと、なみだをながしくどきける、一休聞しめし、されば迷執深き者のためには十萬億土と說、悟了通徹の者には目前と說、經に去此不遠とあるはこゝなりとのたまへば、俗かさねて申けるは、かやうにていねいのおしへ承り候へども、終に七寶莊嚴の極樂、いかほどたづねても見申たる事なし、とてもの御ぢひに、今一句ねんごろなる御おしへにあづかりたくこそ候へといふ、和尙聞しめし、さればこそ極樂目前にありといふは、七寶莊嚴のかたちあるにあらず、人のために口に說て示す極樂にあらず、人々自己に言句をはなれて悟り得ずんばしる事なし、しばらく坐禪工夫して見付よとおほせければ、かたじけなしとて家にかへり、ふすまをかぶり晝夜案じくらし明して、あはたゞしくも和尙へまいりてためいきつき、目前の極樂こそみつけて候へ、さて〳〵多くの衆生のまよひてしらざるこそふびんなれ、さとりこそはひらけて候へとて、ゑみをふくみ小おどりして申ける、一休聞しめし、さこそあるらめ、心の面目だにひらけなば、何のうたがひ有べきぞ、さりながら其方の明らめやうはいかんととひ給へば、さればこそ、此極樂と申は、貧賤富貴にもよらず、老若男女のへだてなく、朝夕きらりとある事に候といふ、和尙うちうなづき、もつとも〳〵よき心得かな、さてその極樂に朝夕安座したる心はいかんととひ給へば、さればその事にて候、美食蔬飯にかぎらず、朝夕のごくをらくにたぶる所こそ極樂にて候と、さもじまんらしく重面作りて申ければ、一休も手を打てわらひ給ひけるとぞ、

（第十二）一休山居し給ふ時にごり酒の問答の事

一休和尚山居しておはしませし時、したしく御出入申人御見まい申ける、折ふしにごり酒をまいりける所へ行かゝりければ、

山居して心すますと聞つるに
　にごり酒をばいかでのむらん

和尚其まゝ、

山居してのむべき物はにごり酒
　とても浮世にすむ身でもなし

とあそばしける、

(第十二)壁の戀といふ題にて詩歌を詠じ給ふ事

一休和尚のかる口なるをよくしりたる人、作意を聞んため和尚へまいり、壁の戀といふ題を出して、和歌一首あそばし候へと所望しければ、とりあへず、

君まつちこねばやひとりぬるばかり
　こいをしたてのなは立にけり

とあそばしける、又烟の戀と云題にて詩一首をこひければ、

冉々輕烟惹ㇾ恨長　六宮宴罷月昏黃
羊車不ㇾ至芙蓉殿　知有二佳人一慢炷ㇾ香

(第十三)一休關東へ下向の時路次にて山伏と問答の事

一休和尚關東へおもむかせ給ふ時、普化僧の尺八を吹てとをらせ給ふ、道にて山伏にあひ給ひしに、一休を見しりてとひかけゝるは、いかに普化僧殿はいづかたへ行給ふといふ、和尚こたへて仰せられけるは、風にまかせてとあれば、山伏いひけるは、風なき時はいかん、一休仰せけるは、吹て行とあれば、山伏もがをおりて口をとぢける、

(第十四)狂詩

於二一谷一

壽永三年三月天　九郎冠者乘二兵船一
源平合戰無二中計一(なかりけり)　海底死人幾萬千

題二茶釜一

有ㇾ口不ㇾ言全體圓　不ㇾ離二色相一絕二諸緣一
幷呑大海江河水　吐出趙州一味禪

題二黃鶯一

鳥亦說ㇾ經似ㇾ度ㇾ他　樹頭樹底妙音多
林間花者諸菩薩　中有二黃鶯小釋迦一

或人不動明王の古佛を秘藏して安置しけるが、一休かの家につねにゆき給ひしに、ある時彼不動を御覽じて、頓て一絕を賦し給ひける、

全躰眞黑稱明王　生付片輪日口張
一生不犯無念者　去何處罔護摩堂

題一谷

打落平家無數兵　九郎冠者大高名
敦盛熊谷進遲速　一朝懸向上時聲

落髮之時

東山々下玉毛頭　今日出家作比丘
移得天台眞羅漢　平生所望一時休

題那須與一

與一源平第一弓　判官召道射成功
寨目新念鞍馬上　七花八裂扇眞中

題宇治川先陣

賴朝大將秘藏馬　宇治川先陣給之
生食前非磨墨後　梶原源太一鞭遲

題蚤

垢耶塵耶是何物　元來見來更無骨
雖爲人喰十分肥　瘦僧一捫沒生涯

歲旦

有錢有酒有金銀　今歲初成大德人
當寺他山若僧達　未申案內往來頻

戀

日夜思君長不忘　夜深戀慕臥空床
夢中携手欲相語　被駭曉鐘又斷腸

同

花咲花而易老花　花顔花盛夢中花
花時花亦可情重　花落花過誰問花

同

生天成佛闍思君　灯下吟詩瘦十分
有力秋風不應拂　胸關鎖斷楚山雲

題性靈棚

飯在中央盛出盆　饅頭無味鐵崑崙
慇懃三酒性靈水　水出推流地獄門

布袋贊

布袋依袋眠　人言是坐禪
工夫無一字　大食腹便々

寛文十二年歲次壬子春吉辰
押小路通寺町西へ入町
書林　巖津喜兵衛繡梓

一休關東咄下卷終

二休咄序

夫物語は、人の涎を種子として萬の颪とぞなれりける、花による野良、揚やに住む禿の聲をきけば、いきとしいける物、なぞか鼻毛をよまざりける、力をも入れずして金銀を吸とられ、朋輩の中をもわろくし、親兄弟にも勘當うくるは、たゞ上氣也、しかあれど世に塵撚がちなる者出くる事は、久堅の雨の日もぬれかけをしらず、あらがねの土藏に晝寢をし、朝夕は算盤のもとを忘れぬよりぞ始りける、爰に洛の西に龍耳軒といへる何がしあり、きはめて耳ちかゝらぬ身なれば、人擧て因幡堂へなどいさむれど、醫師さへなをさぬ耳、瑠璃如來の才覺にもなるまじとて、佛をもたのまぬ本性成けらし、されど世にたづきあるえせ物にて、こゝかしこ徘徊し、難波の蘆といへば芝居咄と聞なし、吉野の櫻といへば茶やの噂と心得、有明の月といへば丹波越のことゝ頷き、年比かたほにのみ聞なせる咄の山、法性室の戸にさしこめ、持腐にせんもつたなしと、一とせの土用に分別袋より少許取出たるを、きく人是は興ある事どもと、根太も落る許笑つつ塵紙やうの物にひとつ〳〵かきつけて、昔語にも似ぬべく覺へければ、何かはしらず二休物語と名付、西今の世の中、咄につき人の心好色に成りけるより、西鶴もてはやさる、色ごのみの爲には埋木の人しれぬ三九郎を取出し、眞なる處には太平記事にもすらず書なしたり、正木のかづらの長生の中に品かはれば物かはる、杵藏もしやなら〳〵に成行旅宿ぞや、

蓮實軒序之

凡例

蜷川新右衛門子孫
蜷川又右衛門二休と輕口問答

藪藥師竹齋子孫
藪藥師荀齋二休と輕口問答

中山三介子孫
中山三九郎二休と好色問答

二休咄目錄

目錄終

二休咄卷之一

○草の庵

やう／＼東白くなりたるに、穂長ゆづりはけしきばみ、心長閑なりといへ共、毎年かはらぬ正月なれば、廿年見てからはみられず、めづらしげのすくなふなり行にこそ、さればはゝき木の言葉も、夢のうき橋に終り、徒然草の講釋も、今はする人は多くてきゝ人はすくなし、いかなるつよき者も、四書のそよみ斗を毎日十篇づゝ、三月が一月もなるまじ、澤山になりける醫者も、此ごろはへりそうなり、法然の念佛講も、今は酒の講になりかはり、千代もといのるつるがの庄の道行も、かたはし斗腰張にのこり、嵐三右衛門も三日つゞけては見られず、吉彌が鳴まねも此中はうるさし、柴のつまがのこも此國に今はなし、すべて事々物々我宿の職より外は、吉野がやうなる女房も、なれてからは、飛鳥川の淵瀨にかわりやすき人心、それにつきかわりたること有けらし、都の西に住法師あり、先祖はかくれもなき侍にはあらぬ町人にて、うき世を瓢箪は物かは、燈心より輕く見なしつゝ、四方三間まなかに草の庵引むすび、丸木柱うこぎの垣、ぬのゝもかうにて緣とりたる疊四五疊、茶釜一つ鍋一つ、たらひ大小二つ、持佛堂に山ごしあみだの繪像、おなじく達摩、雲竹の書る閑の字の額、庄六流の色紙おしたる二まい屛風、靑竹の花生、是は紙張に冬は蒲團をかぶり、常は高宮の半德にあじろ笠、その外にもとむることもなく、又何を語りても人にまけず、しかも無欲なれば人にくまれず、出家にもあらず俗にもあらず、あればくふ、なき時はくはず、さのみ深山ならねばちか／＼に水をもとめ、八木のあり次第、めしになりとも粥になりとも、なりたるものをくらひ、ゆきたき時は心まかせにありき、菊紅葉折ちらし、茶をせんじてのむなど、さりとては不思議千萬、又たぐひもなき島もの、名をとへども名もなし、一休に似たりとてみな人、二休と名付よびければ、おのづから其名をば我名とせり、爰に蜷川新右衛門親當の末孫に、蜷川又右衛門親春と云人いまそかりけり、仁和寺の花にくらして歸るさに、かの草の戸に音信し折ふし、二休物淋しげにきせるくわへ、煙を友として居られけるが、

又右衛門御尋申といへば、よくぞ〳〵來ませるものかなと、四方山の物がたりの次手に、又右衛門問曰、御坊は世間の道心者とはちがい、一鉢のまうけにもいで給はず、又きわまりぬる知行もなし、尤折々は人もまいらすべきが、其まうけのなき所は、いかゞしていとなみ給ふや、さりとては合點まいらず候、二休、よしなき事をとひ給ふ人かなと、空嘯むいてゐられけるを、又右曰、とかく天地の間に生ずるものは、草木迄も雨露のめぐみなくては生がたし、こなた斗は天地の外の人かいかに〳〵と、せりかけ〳〵とひければ、二休曰、されば其の天地のうちに有る露をねぶり、草木のかれたるにて雨をあたゝめてのむなり、又人の合力しくるゝ物を、いやともいはず又嬉しくもなし、いかにとなれば、萬物みな理より生ず、金銀米錢いづくにありてもみな是雨露也、天地の間に生ずる人間が、天地の間に生ずる物を食て居るからは別の事なし、又天地が、さのみ忝ない物でも尊ものにてもなし、又右曰、夫天地は萬物の父母なるに、さげしめ給ふこと勿躰なし、先御坊は父母の恩をわすれ給ふか、天地は父母なるに、さりとては墨染の袖に似合申さずといへば、二休こたえてよめる、

よも四郎が子孫にあらず彌三郎が
あとめにあらず墨ぞめの袖

又右曰、さては萬物各虚より生ずるの心にて候か、二休答、我は虚ぞといふものは何やらしらず、又右衛門殿には御存じか、又右曰いや存せす、二休曰、しからば何を以て虚の心かと仰候や、我等の心は、其方墨染の袖には似合ぬと仰られたるによりて、すみ賣にてはなしといふこと斗也、又右曰、げに〳〵聞え申候、しからばたづね申度事有り、同じ人間にて僧俗のわかちあるはいかに、二休こたへて、先俗の心をよめる

親春はさかやきすつて髮ゆふて
わきざしさして羽織きている

又僧の心を、

二休とはさかやきなしの丸坊主
はをりなければ脇指もなし

とよめる、又右曰、歌はさる事なれども、是非心に落着せず候、二休曰、然らばあら〳〵申さん、先世界の人、腹の中から髮結て出る物、唐土はしらず、ちはやふる神代よりみず、又僧は腹の中から坊主にて生る

るからは、出家はたつとく俗はいやしとしらるべし、又右曰、なを〳〵合點參らず候、先陰陽の化育を以て草木迄も生茂する事常のこと也、されど二氣の所爲にもあらず、元來生茂すべき理具足すれば也、又人とてもさのごとく、頭に髮のはゆる所以の理に依てはゆ、父にも母にも賴むにあらず、然るに俗は是をそだて、僧は生ずる所をそり捨る是れ第一 殺生と、きせるおつ取、疊に穴のあく許たゝきならして申されける、二休答曰、先貴殿はきる物着ずしてゐらるゝか、又右曰、是程目に見へて藏おろしの加賀裏はくろ茶にて御ざると、立はだかりて見せらるゝ、二休曰、その着物は何くより來れるぞ、又右曰、西陣のきぬや助右衞門が所にて、貳拾參匁にて買しといふ、二休曰、織らぬ以前はいかんと問ふ、又右曰、蠶の口より出たる糸、二休曰、何と蠶は有情か非情か、 又右曰、成程生(いき)てはたらく有情也、二休曰、有情を殺して身にきる事殺生か不殺生か、答は成まじ申て聞かせん、即身成佛とある時は、此身すなはち是ほとけ、此佛に風引せぬやうに、着物にてあたゝむる是方便の殺生也、爰此佛髮がきらいにてすり給ふ事、將又方便なれば、何ぞ殺生といはん、能々工夫あれといふ、又右再拜稽首して、誠に先祖一休にもまされる悟道、あつぱれ此世にいませしかばと、感涙を紙につゝみ土產にせんとて歸られける、

〇さゝの花

天下太平今日の御太夫澁谷三郎右衞門、舞納てなをし大黑もゆたかなる風流のをどり、是誠に福德の神原佐太夫なりとこそ、それ神明の昔より天津ひつぎ傳え給ひ、御裳濯川のながれ絕せず、御代はちよにや千代にさゞれ石井彌兵衞、正面に坐して祝奉り、高砂のうらに着にければ、四海浪しづかにてと、八ちよの竹村甚左衞門が請取たるありさま、目出度かりける御代のしるしなり、 されば世にもてはやらかす謠講の、なら茶天目のひゞき、夜ごとに酒のかよひ路やみまなく、まことにわれ人のたのしみとなれりける、しかるに此比うたひはさら也、能の花時(はやる)こそ木綿賣はわきを習ひ、たばこ切は笛を吹、兄は大つゞみ、弟は小鼓にうちあかしくらすさま、 まことにをさまりし御代のためし、下がしもの賤の家迄有がたき、此折にあひてふえ竹の、夜晝となく樂むことにぞ有ける、爰

に中山三介とて、都にもゆくれなきほどの分限、財寶くらに滿ちたり、代々酒家なるにより、今にたえず酒頭子を六人京中にまはして、内に夫婦は世に異なること、毎日千秋樂のまひずきにて、嫡男三九郎を何がしとかやのもとへ小鼓習はしにやり、次男三十郎今年十四歳、太夫のもとへ遣しければ、俊寛とがし高だちなんど大かたにこなしぬれば、親仁三介の御よろこび何にたとへんかたもなし、比は春の半、ある法華寺の客殿を借て舞臺とし、面藏を樂屋とさだめ、三十郎を太夫にしては役者のいぢにて來らず、それゆへ師の太夫をたのみ、ワキ六人、シテツレ二人、ワキツレ三人、笛吹四人、小つゞみ五人、太鼓三人、舞に取合ぬ狂言師八人、其外樂屋にての衣裳きせはたらき人、供まはり迄以上二百三十七人、さて舞はした、くまさかよりとりあわせて、神祇釋敎彼是以上七番、此内熊坂した二ばんを三十郎にさせて、それ見る斗の望にて、入銀合貳貫七百目にてはたらざりけり、されども三介は、おもふほどはいらぬものなりと、其日ををそしと數の役者へ、かならず御出たのみ上候のふれ狀、申計はなかりけり、三九郎は堅當者にて、此度の舞の事氣の毒なりと、二休に逢て談合、かやう／＼にて親仁舞をすき申こと、何とも氣毒なる次第、わたくしの申ぶんでは中々親仁合點いたさず、貴坊よきやうにいひて、やめらるゝやうに賴申といへば、二休きゝて、そなたはゑしれぬ事を氣にかくる人かな、親仁も銀がへりて、其後合點をのづからひとりせらるべし、かまはずともをかれよといへば、いやさやうにてはなく候、先金銀のことはともかくも、世間から惡敷いふて、あの三介はいくらほどもつて居ることぞや、小供が舞にかゝりて、たをれるなりを見るやうななどと申て、中々きいてゐらるゝ事にてなし、何とぞ賴申といへば、其義ならば先此度の舞は、仕組たること跡々のやむやうにしてまいらせんといへば、三九郎はよろこび我屋に立歸る、さて其日になりぬれば、京中の貴賤老若寺内せばしと見物す、すでに式々終りて、やゝ舞のはじまりぬる時、かたすみより笹の葉に、金入の切四五尺もあるらんとおぼしきを一つと、金一歩と書狀一通と、太夫三十郎殿參と書付、ひらりひらりと橋がかりへ遣しければ、袴きたる男立出うけとりて入ぬ、さて舞もはてるといなや、樂屋に有は

どの人、さてもめづらしき花かな、われも見ん人も見たしとこぞりよる、親仁三介先狀をひらき見るに、其文章にいわく、今日のまひ何より以てやすう候、さりながら外の舞太夫とはちがい、其身の慰一扁として大分の金銀をついやし、隊をついやし給ふこと禍者とはいひながら、家行を忘るに似たり、是仁にあらず、其上町人のぶんとして、けつこうなる衣裳を着、いにしへ名ある人のまねする事、大き成おごり也、たはむれとはいひながら、是おもふより出、尤智のなきが故也、又弟の分として兄三九郞に鼓をうたせて、其身は太夫ぐるひをし舞あそび給ふこと、是れ義にはづれたり、又親三介に腰掛をもたせ、供につれ給ふこと不孝のいたり、尤禮にはづれたり、すべて仁義禮智にもれ給ふこと、あまり笑止に存するの間、向後舞をし給ふ共勸進舞をし給ふべし、又親三介殿には、見物をなさるゝやうに孝をつくし給へ、それゆへに此金一步は、三介殿見物の時の目鏡を買てしんせらるべし、又此金入の切は、三介殿御見物の時分涎懸にし給ふべし、以上三十郞殿參、二休よりと書付たり、座中の人々も興をさまし、三介も面目なさそうに、さてもにくき二休めがしわざ、打はたしてもあきたらぬ坊主首とは思はれしが、次第によく〳〵分別して、それよりおごりをやめ、かさや新右衛門が勸進舞見物にさへゆかれざりける、

○中山

中山三九郞、二十年許にて内にのみ物せられけるが、しのぶのみだれやと、うたがひきこゆる人もありしかど、わるじやれの好事共はなくて、いとうわづらひたまふける、初のほどはむねのつかへ、町内におほき醫者、一陳湯にて桔梗などくはゆれども、次第におもくなりて後は鷄をぞのぞまれける、さしておもしくもあらざりけれど、色うす黑く、脉浩大にして手足熱し、虛勞なりとぞつぶやきける、一年あまりにも過ぬれば、三介いよ〳〵氣のどくがり、元三大師へとひにゆき、又は富士ごりの黃栢のませてもしるしなし、三柳も脉に頭をふり、三伯も匕をゆがめ、いろいろさま〴〵金銀をのむ斗にて、ある時は心やすきどちあつめて、うき世ばなし、又は鶴しづかに川原町へやりても、俯むいて斗居る、とにかく此世のものとは思はれず、されど脇指つゝみてまちても居られず、二

親の心いさし氣の毒、ある夜二休見まはれしが、たゞ此病は氣で氣をなぐさめずば埒明まじ、さあればさてむりになぐさむるとも、病人の心にうかぬ事は、かへつて病の上ぬりにて侍る、先それがし一療治いたして見んと、是三九郎、其方何にてものぞみなることはなきかといへば、されば我いまだ太平記を見ず、とりよせて御坊よみきかされよといへば、いかにも安きのぞみ、とりよせる迄もなし、爰に御身の爲になる太平記あり、我覺しまゝかたりきかせ申さんと、膝立なをし、抑本草百代の御大將人參公、素問元年廻春二十五日のことなるに、天下の大老陳皮の入道胸春、其外蒼朮の判官、同一子白朮、國々の大名には、武藏の國の住人川原の藤太柴胡、大和の國の住人葛根の別當筑前の守桂枝、山城守半夏、鶴倉太夫叙目、田面の冠者澤瀉、深山の太夫茯苓、垣根次郎荊芥、紫蘇の藏人治風、同蘇子の太郎治次、其外諸藥のこらず御前にめされ、扨も先年惡風心がわりをして瘧疾を發すといへども、常山入道の三陰の經にはせ向、のこらずきりふせ、ことゆへなかりし處に、牝瘧足の大陰の經にかくれつゝ、則一子癆瘵と云大惡のあぶれ者あつて、來春本經にせめのぼるべきよし風聞す、しかればゆるがせにてはかなふまじ、此度は我本經に向て氣血をめぐらし、癆瘵をほろぼすべしと思はいかにと仰ける、いづれも一大事の病症なれば、御うけを申す者もなし、しばらく有つて、入道陳皮すゝみ出て申さるるは、上意尤至極仕候、さりながら元これ三陰の經にて、常山にきりもらされたる痰瘧の庄司が、すゝめたるむほんと存候、されば先某心肺の二經にはせ向て、痰瘧が立てこもつたる城郭を追をとし申べし、しかる時は癆瘵何ほどはやるとも、藥種の勢にをそれ、時節を待のみにて、をのれと大腸にをちくだり、自滅うたがひあるべからずと、手にとるやうにぞ申ける、大將人參きこしめし、尤痰瘧が城一所にせめをとさんことは、何よりもつてやすけれども、かれは氣によつて出たる者なれば、たやすくはうたれまじ、先其方は半夏茯苓甘草をともなひ、痰瘧が城にむかうべし、其跡より某時をはかつて防風をあひぐし、三陰の經にむかうべし、みな〳〵心得候へと、杉原山へぞ入たまふ、さるほどに、癆瘵此のよしきくよりも大きにさわぎ、邪氣どもを虚にせうじて皮膚のかたへまはしつ

つゝ一類の惡疾をみなこと〴〵くあつめける、先風寒暑濕の兵を四天王と名付たり、扨三陰の經にては、咳逆の太郎胸近、頭痛の左衛門頼風、眩暈法師、齁咳法師、四氣感坊、傷寒坊、嘔吐の兵衛鳴重、泄瀉の太夫水正、宿食の冠者腹滿、積聚の十郎有忠、脹滿の入道、同一子水腫の八郎足肥、消渇の三郎瘵病、四郎目舞の助霍亂、祕結の庄司が一男風祕の太郎、二男寒祕の次郎、三男氣祕の三郎、四男熱祕の四郎、五男濕祕の五郎、其外翻胃、五痺、五疸、脚氣、腰痛、脇痛こゝやかしこの惡濕惡熱、のこらず腸胃の間にあつまりける、つがう其勢四百四病、一身をさはがせしはすさまじかりける次第也、人參此よしきこしめし、邪氣共も大勢にて、こゝかしこよりせめのぼると見へたり、此方よりも種をわけてつかはすべしと、金の匕をおつとつて、一々加減をなされける、先手の太陰の經へは檳榔子の武者所道友、大腸の經へは三浦の芒硝、胃の經へは坂田の牽牛朝光、脾の經へは和田の神麯左衛門、心經へは赤松入道細辛、少腸へは黄栢の七郎、膀胱へは猪早太車前子、腎經へは松浦五郎肉桂心、包絡へは近藤山梔子、扨又山田八郎川芎、黄連法師、青黛左衛門、任脉背脉の手わけをなしげぢしたまふ、三七日のたたかひに、自汗は瀧のごとくにて、津液はなはだかわきける、かねてたくみやをきたりけん、癆瘵の方よりも命門に火をかけて、すでにたかぶらせんとせしところを、當歸の別當酒洗、天門冬、麥門冬、地黄なんどの一劑同前の藥味ども、竹瀝の勢にかゝりてせめければ、何かはもつてたまるべき、邪氣こと〴〵くうたれけり、さてこそ君火位し、相火精神を守て脾土皮肉をかたむれば、上少澤より下竅陰の穴に至まで、をさまる御代こそめでたけれ、されば三九郎も、ずいぶん心で心をとりなして、大てきとなる邪氣どもを、藥にてたいらぐるやうにし給ふべし、是御身の爲の太平記に候と一時許かたられければ、病者も物語の德により、久しぶりのわらひがほ面白そうに見へければ、親立大きに喜び、さてもよき療治かな、いよ〳〵なぐさめて給はれとあれば、いかにも心得申たり、然らば少し心もちもよき時分、我庵室にきたられよ、よき藥まいらせん、必ず〳〵と約束してぞ歸りける、

二休咄卷之一 終

二休咄巻之二

○戀の種

夕間暮、道たど〳〵し急がんと、月代長く色青ざめて木綿足袋、秋雨のやゝ晴れわたる西の家かげを、つたひ〳〵て二休の庵に行けば、太義々々よくこそと、爐のかたによりつどひて、此比のりやうぢかわりて、少心もちもよかるべし、されば〳〵思の外、手あしかろく成侍る、いよ〳〵たのみ申さ有ば、我もさまでよかるべきとは思はねども、先御手前の心もちを、つねづねよく存たるによりて、機嫌とりたる斗也、今少遲くは、秋ながら經帷子に衣がへさせねばならぬはづ也、よく〳〵分別し給へ、さてそのほうを爰許へよび申事わけ有ての事、其方心もちつね〳〵あまりわかきものゝ似合ぬ堅なり、ちさなをさせ申さんとの分別ゆへなるぞや、先其方の病は、心肺の間に鬱氣といふものゝ有ゆへ也、尤良醫の藥にて愈ることもあるべきなれど、今時の醫者がいかほどあぢをいふても、みなすいやりにいひなし、くすりも目なしどりにしてあはするくらいなれば、中々氣遣ひにてのまされず、爰によき藥あり、是より西にあたつて島原寺といふ女郎宗の寺あり、其面白さいわれたことにあらず、ゆきて心見られよとあれば、三九郎色をちがへ、さても其方は出家に似合ぬことを仰らるゝ物かな、常々の御心底とはばつくん替り申たり、分もないことゝ聲をふるはし申けるに、いかにもさやうにいわるべしとは、三年まへからさすが神子也、其心なるによりて煩也、かくいへばとて、御身を傾城買の悪性ものになすにはあらず、此さとへ通ひ初てからは、いかな四方髪殿も、ひた〳〵とやわらぐ事、いはねどしれた小豆餅、しかしそなたのかたいぢは、此道からなをさねばなをる事なし、先丹波口の野はづれへ、によつきりと踐出すといなや、荒木與次兵衛よりかたき三九郎も、なまりの玉を火にあつるがごとく心がやわらぐ、其跡は横になりとも竪に成とも、心のまゝになる事なり、必すごす時はよこに成やすしと、しばらく案じて、されば詩にも、

朱雀西方眕道遐、　小歌三味線常嘵、
傾城只不傾城耳、　入此幾人貴盡家、

とあるからは、よき時分にやむる時は、本心の人間になる事ぞや、今御身は人間といふものにてなし、いかんとなれば、日本は和國なり、和國とは大きにやはらぐとの訓あり、其やはらかなる我國に生れし三九郎が、其かたさにては中々人間とはいはれぬ也、其方もしらるゝ通、柳下恵といふ人は、女の足をあたゝめてさへやられしぞ、まだいひ度事のありけれど、長々しければさしをく、先明日より長者町の利介が方へゆきて心見られよ、ひらに〳〵とすゝむる時、三九郎もいなことをいはるゝ物かなと、さら〳〵合點せざりしを、又せなかほつとりとたゝいて、こりや御手前が分別貌は、こちにくて居るぞ、親仁手前は此坊主にまかせよ、もとこれ親仁からすゝめてくれよとの事、其せうこには最前金子五兩請取て來た、是を見よ、親の心子しらずとは此事かと、なげ出せば、三九郎きもをつぶし、さては我身のやうぜうのため、かうしたことか、しからばなるほどまいるべし、してあの里のあいさつ、諸わけとやらんは、いかなることにてかとくとうけ給はりたし、いかにもよいふしん、ずいぶんいらぬこといはぬがよし、先丹波口の茶屋は、我下人のごとくあしらふべし、次に出口の茶やは、どう仕やれかう仕やれ、いかなる家であらうとも、何者がいはうとも、あみ笠ぬがず、物いはずにそゝらぬがよし、さて女郎はよう御出なされた、なんとあそばしたなどとのあいしらい、よし諸事此外のことは、太鼓と利介とにまかせておく時は、くるわの內をはりひぢて通りても、あら手の大々大臣樣とて、みな人のひで通すなり、此外はいろ〳〵品々面白きことあるべし、それが御身のとくなりけり、とかく明日は利介かたへゆきやれ、かならず金はさきへやつておくぞと、利介方へ金子にそへて狀遣す、利介ひらきて見るに、明日俄に中山三九郎うなり、ずいぶんよき太鼓を一人引付申さるべし、さて入用はあげせん太夫引舟七十六匁、揚屋へ一角、やり手に一角、內の下男下女いくたり有共、中へ小判一兩、出口の茶屋やに一角、丹波口へ一角、駕籠代三枚、肩二丁八匁、其方きもいり代一角〆貳百拾九匁、則小判三兩と一歩二つと、銀九匁と遣す、能やうにはからい、手のわるい事し給ふな、當座銀にかふものは、やぼとやいはんなれども、此方に分別有ゆへなり、以上利介殿參、ふたつよりとあり、利

介きもつぶして、やれかゝよ、見事なる大臣樣の御出なさるぞとて、糸より車をかたわきにをしやりて、あくるをおそしとまちにけり、

〇初しのび

あやめもしらぬ戀をすゝめられて、三九郎は長月十三日、枝大豆男になり行や、飛さやのはだぎ、東京紬のすゝ竹、升の內に桐と云字の古文字五所紋、ちよろけんの帶ふとからずほそからず、むすぶちぎりの末の白雲、かゝるもうき世のならはしかと、利介が本に付しかば、よう御出と一間なる所へ請じ、かねてやくそくの太鼓もち、西覺といふ坊主に引合せ、酒すこしのみかけ、いざやといふほどこそあれ、すだれをろしこめてはしり行ば、ほり川の水も北へながるゝかとうたがふまに、二十町ばかりもあるらん、丹波口ますや庄介が元へのりこめば、おもひまふけぬかゝが、きげんとり〳〵に、びんなでつけ帶しなをし、やき印の物ふか〳〵と、誰しのぶとはなけれど、ぱつとしたる野はづれに出れば、折ふしの虫の聲々にあはれなる秋も、忘れはてゝおもしろおかしき、あせのほそ道つたひ行て、杦出口の暖簾ごものゆうなる氣色に、氣をのばし又鼻の穴の糸をのばし、平野や七兵衛が元へ立よれば、是もよろこびのいろ付とて、さかづき出し、天氣がようて今晩の月は、などとけいはくのけらわらひ、西覺申さく、是此殿は中さまと申て、此里はじめての御出、向後御ちそうたのみ申、さて又これにおりまするは、此家の亭主平七と申ものにて御ざります、則銀を見てはきげんのよい親仁、御めをかけられましてと、わるじやれのあいさついひすてゝ、どうすぢをうなり行ば、ふゑんの太夫、わたもちの天神、なまじほの鹿戀、すあしの道中ながめ行ば、思入さの山がたや二郎右衛門親子、共にいつもかわらぬ御あいさつ、さて女郎さまはいづれか、金太夫は今日は御隙入、もろこしはごなたやら、御さぶらひ衆の御約束のよし、さてもきのどく、夕霧はそれはなんと御ざりませうぞ、いやではあるまい呼ましてこいと、しばらく有て太夫樣御出といへば、きぬの音なひ、箱はしごのひゞき、ゆう〳〵くはん〳〵ぎし〳〵と、かいつかねたる髮のわげに、きる物の肩のあたり、十二ばんめの羅漢のごとくぬぎかけ、どこやら大へいに、又くらい高くおも〳〵しく、引舟は御階左のかたにつき奉

り、かぶろやりて　いながれ、其外くはしや平七、庄介、西覺、利介七八人、おの／＼三九郎さまにしたがひなみ居しは、つたへきく、唐の蘆左衛門がうなりも、是ほどにはとさわぎ出して、たれやら戀のよせ太皷引いだせば、西覺は、むざんやな少將は五郎にふかくとかたるやら、かぶろが末のまつ山うたふやら、はしの間にはすご六のせり合、おくの二階にはしめやかにうたがるた、臺所はまな板の音、平七は一心不亂にさかづきのつめびらき、時うつりことさり、おさだまりの夕めし過て、床とり／＼に歸るさの道、のこりおほきおもはく、又おせ／＼、

〇品さだめ

葉山しげ山しげき人めをつゝみ、わりなく通はんこそと、ある時は太皷なしのぬけがけ、はじめのさわぎ上々のまことになれば、女郎もにくひ人にも、なるればいとし末のまつ山、波はこすとも我が心かはりなふ候まゝ、かたさま御こゝろがはりなふたのみあげまいらせ候と、實からの筆のすさみに、ころりとなげ首して、ひとりねがちをうらめしく、利介が方へ文の音信きゝにゆき、うはさたづねて居られし所へ、うかれ大臣二人、西覺をつれてしのびやかに來られしかば、ちやくと二階へ上りぬ、あとにて利介、西覺が耳のそばにより、何やらさゝやくは、品さだめて我事なるべし、さて二人の人、物ごと氣を付て、こゝにめなれぬ雪踏あり、利介、是はいかに二階にたれぞあるかとはれて、例の手くだ口、いや是は今朝あさごみの旦那衆、御あづけなされましたと、よいかげんにもつてまいる、時に西覺、くるしかるまじ御ちかづきにせんと、中さま／＼とよび立られて下りければ、こなたなるは下立うりのしげさま、是はからす丸の三二さまと申御かた、又こなたなるは中さまと申て、内々御咄申ました方、向後御心やすく折々御同心のさわぎ、是こそうき世の花盛、わかいが二度はない物ととりはやされ、すこし酒ごとして例の一ぱいきげん、いざ此きほいにをせといふ、利介きゝて、りよぐわいながら無分別と申もの、島原がにげていぬる所では御ざりませず、たがいに御首尾のよい時御申合なされ、わたくしかた迄御やくそくの御左右あそばせと、御さだまりの實ごといふにぞ、尤となづき、こゝに居るもようない事、今宵は西覺振舞ぶんにして、あるじまふ

けせよと、夕暮の西覺宅へのかたゝがへありこそ、狹き六疊敷の二階に、しかも道具多くかたすみにつみかさねて、日野やのそば切三桶、樋口やの酒二升、生貝するめなどのりやうりに、手間のいらぬ物ながら、すこしはたべすごして、とかくよその嘲しはせず、かの里のうわさ、松屋半兵衛がくはしやは、なんとよい物ではないが、さてもきれいなるもの、揚やふせいの女房にはをしきぞや、大銀もちの御かつさまにしても大事ない物よといへば、西覺そのやうなよい物も有に、すべて人のうるさがるは、藤屋彦右衛門がかゝ、あれほどこづらにくいやつはといへば、それいかに、わらふ貌さへ作りぞこないのゐんま大わう、又なんとおぼしめす大坂やの天神高砂、さりとてはたぐいあるまい、ひたいつきびんつき、自然のはへどまりにて、しかもあつくくろし、びんのあつき女郎は、くるはの内にたぐひまれなるものならずや、かくあれば太夫にもなりそふなもの、どこぞに疵が有にこそ、きづこそあれ、何やらよろしからぬとの沙汰、又同じ内の關寺、あいつめが心入のにくさ、小野山宇治右衛門はいそなりといへば、ごうりこそ、此中二人ながら大坂へちくでんせられた、よろこびたまへとわらふ、さてなんと井筒やの御大と、菱屋のさつとは、ふじの山を花にやもらいけんあの腹はと、あほう口たゝきて、いでや此世に生ては、女郎のうわさはしのぶずりにいふなるべし、なにとこよひ、男のしなさだめしてなぐさまん、尤と先、中さまを光源氏にして、さて三二さまは藤式部、しげさまは馬頭にならせられ、此西覺は今宵斗位をあげて頭中將、さあ〳〵雨夜の人數はそろうたり、○銀も多からず、きわにも一ぱいにしてしまふ人のむす子、岡村が飛鳥川の狂言などを見たる折ふし、色里の物語をきゝて心をごり、三十匁の露を袖にして、壬生のまへを南へ、あぜのほそ道ふみ分てかよひ初る心、行さき思はぬ物ながら、女のよれるはなげにはつなぎとめらるゝぞかし、○すこし手前もよき人のむす子、すみまへ髮より茶屋づかをにぎりつくして、あつぱれ色里のつめひらき、いづくにてもしかねはせまじ、そ島原の諸わけも草子に書てあるをとり、合點なりと友にさそわれ行て、物ごと大やうにのつたりさしたるてい、又こまかしき諸わけの、合點のゆかぬにころりとこまり、心はづかしくおぼしめ

さるゝ事、たれも昔は男山、塵をひねりしこともありしに、○又はじめて揚屋をふみながら、あしもとにも氣をつけず、あたまからすいだてをしてそゝる男、わがめには見えねども、耻かしき事數々、よその袖さへよだれにぬれて、いやはやおかしいとし、○過しせつくは三日ながらつゞける今日、いでよこをきらいではと、思ひこめてゆきぬれども、何やらかやらいひて逢にもこず、かぶろ斗こしたるは、我から我とはらのかはがひきさける、○扨よこ切に行て、其かひも波間にはめられて、又やくそくの日をきわめられたるは、いよ〳〵つらの皮がいたくなり侍る事よ、○ほれたる女郎に酒などすけてやり、又はあなたよりやわらかなる手にて、あたまをさへさせ給ふ、其男の心すぐにしにくされ添し、○又ほれたる女郎に手くだして身ふりをかへ、しらぬあげやへゆかんとせしを、堂筋にてやり手に見つけられ、せんさくするこそあとへもさきへも、○またそれよりほれたる女郎に、しらぬあげやにてしめやかにあい、わたくしは此里はじめての事なれば、よろづかはゆがりたのみますなどいひて、さてしめやかにかたらんと思ひこみたる折ふし、もとの女郎きゝつけはしりきて、いたいめにあひたるは、是れなんのいんぐわぞや、○水あげしにゆく男なりとしれたるを見れば、あれか〳〵、さても又なくあほうらしきなりよ、○あげせんつもりてすましかねながら、おろせとだんかうして、あぢまやかたにことはりいひておきたるはうれしきもの、しかし、ねざめのむしのごく、胸のつかへ、めしのとりゆも、のどへとをりかねつべし、○首尾引さげてやけになりたる男は、言語どうもいへぬだんなり、○孫迄もちたるせんもんの、新ぞうをすきてかよはせ給ふ笠の内は、ゆかしげもなし、○人の手代、主の目をぬき、二六の十四とさん用のちがいて、請人にはかまきせ、さかやきそらして、やう〳〵あつかいはすみながら、浪人して又しのび〳〵に、女郎に文やる心、數勝にも又ふとひやいつめなり、○はしぐるひをする男、けちぎり斗に身をやつし、友だちの御てきののんれん上て、今いにますが、文やらせられぬる、とゞけてやりましよと、水鼻すゝりていふはごんなりけり、○かしこひ男は高あがりせず、○それよりかしこひ男は、くるはへ一度もゆかぬ人とかや、田中常矩もいへり、もつと

もさることぞかし、○伏見のしもく町は、かこひがかぶろつれて、ねだんも同じことでやすいものなりと、島原を下戸が、酒屋のかど通るやうにして行く男も、なにはの蘆は伊勢のはま荻、かはらぬはなげの長なんめり、○けち切斗四五度して、心やすだてにても、はやせつ〳〵あひまし、朋輩衆もしつていさんす、ぐわいぶんでも御ざんす、此廿一日にはあげてくださんせと、はねちらかしていふ時、ぬけらぬわけになりて、やくそく拾五匁あいたしこ、○我ものいらずに太鼓もちと名をとり、人をすゝむるものは、我からあぢをやると思ふめれど、よく〳〵氣を付て思ふに、天ぢく震旦我朝三國にも、又たぐひなき大たわけ、○名ある太夫にあいおくられて歸る大臣の威勢と、さては一もんじやのかうしの內、大坂やのかうしの內をのぞきて、ゐゝあれをなあ、かねがほしやなあ、○揚屋の亭しゆ、ちと花がおそひかすくないかなれば、まつかうくさき貌して、おかしき事いふても、わらいもしくさらぬはきつてすてたし、○揚屋男の床とるはかはゆらし、○出口の茶やに、はじめての客つけてやる時、まはる事一時がわりの自身番のごとく、一貫町も同じこと、○をろせといふものはよくうそをつくもの也、あるいは我しりたるものを、そんぢよそれは、ようゆくげなどいへば、いや〳〵けもない事、あいに太鼓には御ざりますなどいひ、又そんぢよそれは、いかいすいじやのといへば、いや〳〵やぼすけで御ざりますとこたふ、又いかいやぼすけじやのといへば、いや〳〵すいで御ざりますなどこたふ、餘はみな是にならへと、夜のふくるをもしらずかたりぬれば、とうふうる聲のほの〴〵と、きぬ〴〵の羽織の袖に引わかれて歸りけり、

二休咄卷之二終

二休咄巻之三

〇世の中

世の中に絶て親仁のなかりせば、うなる心は長閑からましとは、三九郎が身の上に思ひしられたり、折ふしは來ん夜も、ふかき契たがふななどと語り、あるは小櫻千之助などはり札のある宿に御見廻ひ申、又は糊やが許のいぶせきもいとはず、一ヶ月三角の揚者、とにもかくにも白粉の色にそみ、伽羅の油の香にめでて、別をおしみて銀をおしまず、三介も今はもてあまし、二休を賴て止るやうにとの事、心得たりとことうけして、三九西覺兩人を呼にやり、示されけるこそおかしけれ、凡島原寺といふ所へしげく往く物にあらず、先西覺は師かと思へば大きなる野暮なり、もはや止時分、合點がゆかぬか、向後はすつきり御無用、三九郎、あまり夫は難面といふ、いや二休迄が迷惑いたす、西曰、是は師に似合ぬことを仰らるゝ物かな、面白い最中色遊の花盛、わが通路の關守と成給ふ御坊の心底慈悲なし、浮名のたつにこそあれ、此折に止よとは何事ぞ、今やめては御遣なされし銀が皆死ぬると申もの、二休曰、沙門に對して慈悲なきとはいかが、色にふけるを留る是すぐさま慈悲の眼なり、凡彼里に通ふ人を見るに、面白事也といふ斗りにて、百貫目持たる人も、色ぐるいする時は、心の中のうさつらさ、やるかたもなく限りある財をついやし、かぎりなき契をねがふ故に、次第に銀はへりて、逢ていひたき事は山とかさなるまゝ、終に裸と成て門にたゝぬ斗也、又は我が内の首尾よく親に不孝にあたりしこともなく、かくあじをやるは、我ながら賢き物かなと自賛し、ひた物行とひさしく、限りある財是もどこぞの程にては、ことのかけぬといふ事なし、必あぢやると思ふて往く人は、猶止がたき事、くだり坂に玉をわしらしむるがごとし、唯色里の和氣をのみ能せんと思ふから、忍しれぬ分別出來て、ひとつも直なることはなく、皆盗人の下地となる、財寶は夢の世中、ありても死ぬる時は匹如にてなどと、心にも思ひ口にもいひ、遣果してさらばきれいに死にもすることか、得死もやらず親の名をよごし、親に思ひをかけ、其身も末は露の五郎兵衛が手代になることと遠からず、又は物日

物日の數々、揚錢つみかさなりては、心よかりし人も次第にわる賢くなり、内の借銀は夫ともせず、浮言いひまはりて濟さず、くるわの分を能するによりて、あなたにもいよ〳〵まはるに付、面白く處ゆき、世間の銀のすまぬはことはりなり、此面白さはすてらるゝ物にてなしと、諸人めいわくするもかまはずたはけ盡す人、石川五右衛門とひとし、去ば經にも、身雖丈夫行同畜生といへり、此の心は、身は歷々の人躰にして、おこなひは鳥獸にかはらぬとの事也、今時の人を、釋迦や達磨に見せたらば、衣の袖も淚に朽なんとぞ思はるゝ、西曰、夫は仰らるゝ迄もなし、唯も〳〵よくしりたる事、くどし〳〵、二休曰、しりて居ながらかゝる色通ひを止ざるは、自暴自棄とて聖の戒にもたがへり、先其方には行き樣さへしらざりしなり、夫島原といふ處は、金銀を持あまし、隙にて一日の日をくらしかぬる人の、氣なぐさみに行く處、又は直段のたかきやすきありて、人々の程につけつゝこしらへたり、又人の妻をぬすまぬやうの心得にて、昔よりなくてかなはぬ處也、夫をしらで糞虫のたかあがり、たかき物を買てから銀もへりかゝれば、心をくるしめ物案じをする事なり、主親にそむき、我と我身をくるしむるより、罪もなき揚屋くるわを、惡所のかくれ里の、やれ人の物をすひとるの、やれ盜人同前に此方より思ひなして、をのづから惡所にする事、さりとては不仁の至なり、猶揚や茶や下々迄國の民、なされませの、此中は御出ござりませぬ御見かぎりか、いや御恨が御ざりますのなどゝいふは、恒産なければ恒心なしにて、品こそかはれ巾着切はならず、商口といふものなり、家賣て成りとも御出なされませといふにこそあるべけれ、うそは須彌山の山をつらぬき、香の物さへくう食はずに、内にては始末をし、天神買ふたり、太夫かふたり、はて〳〵は丹波へと心ざし、律義千萬なる女郎迄、うき名をたつるぞかし、是行やうをしらずして行といふ物ならずや、既に今三九郎も欝氣ばらしにとて、藏にたゞある銀を少つかふて、欝氣もはるゝによりやむる時は、内の首尾よし、銀もへらず、別もよく心もゆるやかになる物を、中々帥だてをして、今度の節句は誰もせぬげな、爰はひかれぬ所、内の首尾はとうぞせう迄といひて、封つきいくつといふかぎりなく、後は目あてゝみられぬ躰たらく、あの

人は傾城ぐるひしてあのやうになられた、いとしやとて錢三文人がたゞくるゝものにあらず、能合點してふつ〳〵やめられよ、三九曰、いかにも仰せ面白く侍る、しかし今仰候は、女郎は飛鳥川淵瀬ざためぬ物と承候が、律義なる物と仰候はいかに、二休曰、夫は蹉の土がごくと落ぬ故、合點の參らぬ也、尤昔はうそつきたるもしらず、今時の傾城がうそつく物にてさら〳〵なし、僞多則爲レ亂にて、うそをつきてはうれぬ故也、男の方より替り行により、をのづとかはらねばならぬ、諸分此趣たきつけ草にくわしく、今あらためいはんもおこがまし、三九曰、たきつけ草にあるとの給ふからは、さては此里に行は戀にて候か、二休曰、いや〳〵戀といふ物にあらず、戀といふ物は、露霜にしほたれ、こゝかしこに立もとをり、信夫の浦の蜑の見るめを忍び、月にかこち夕をまち、折ふしの逢せには曉をうらみ、又は情心のいでき、無常の理を觀じ、萬やさしきを戀するとはいふ物也、此島原通ひする事は、日をおなじうしてもかたられず、先主親の金銀を盗出して、遣心は情なき事ならずや、又一回逢みんことをねがふかと思へば、其氣はなく、我身を能思はれ、師なりといはれんがために、せんしやういひ散してゆく、是も戀に非ず、月など打ながめ、腰折にてもつらぬる事か、十五夜物日也と斗いひて、雲のかゝるも、月は陰やら陽やらしらず、酒飲すごして腹つゞみうつのみにて、さらに戀といふ事しらず成行なんあさまし、西曰、女郎はしられずしらぬ物迄も、馴てからは眞實を語る物なれば、男のかはゆがるも尤ならずや、二休曰、尤にてなし、東の奴郎左、いかなあらえびすなりとも、馴てからはにくふなき物也、女郎とてもさのごとく、なれてからは愛するはづ也、しかれば金銀のついゆる女郎をかはゆく思ふよりは、同じ心にて損のゆかぬ、東の奴郎左をかはゆがりたるがまし也、今よりして傾城をかふならば、内の首尾よくつとめ、隙あるかねにて行時は親仁もこはからず、ゆるりとしてね覺はよく、胸のつかゆる事もなし、是を上々の師といふぞや、此事ひとつにても闕る時はゆかぬがよし、其ゆかぬは猶以て上々吉の師なりとかたれば、三九西覺ともにうなづき合て歸りけり、

○伊豫

をよびをかゞめて、十はた三十四十などかぞへし人

にはとかはり、いよや彌三右衛門といふひげ男の碁すき有、あけても暮ても、雨のふる夜もふらぬ日も、同じ穴のきつねの又兵衛、たぬきの十郎兵衛、針立の三玄、扇やの喜介などいふ、四天王の御へた共をかたらひて、内には鍬の柄がくつるやら、藏のしりを鼠が切やら、よねんもなつの晝中に、扇やの喜介と朝めしまへより、八つ時分迄打つゞけても、またゐのふとはせず、かうしたらどうなされうと一心不亂にて、内から御食まいりませとよびにくれ共、をうといへをうといへ〳〵と、それをくちくせにいひやまず、夕方になりてあはたゞしく内より下女はしり來て、申々、御かた樣の目がまいりますと、大いきついでよべども、こちらむきもせず、目がまはふとまゝよ、此二もく取てからといふてゐられければ、下女もあきれて立かへる、むす子は大きに腹を立、つか〳〵と來て碁石をばらりとつきくづすにぞ、にら見付て、こゝなやつは何をしくさる、何をするといふことがあるか、はゝじや人の目がまふて死にかゝつてといへば、くそたわけめが、かゝがしぬればこの碁をくづすはづかと、ぬからぬ貌で、これ三文の借じやが合點かといふ、喜介きゝて、こゝな人はいなことをいやる、今の碁が三文や五文でかはるゝ碁か、十二文のかしが有といへば、とんなことをいふ、くづれた物をと言葉あらそひ、つかみやはぬ斗で埒は明ず、むす子もあきれて歸るさに、二休にはたとゆきあふた、是はなんと、さればさればかやう〳〵の次第、何とぞいけんしてもどしてたべと、段々かたれば、二休きゝていかにも尤也、さても親仁はやくたいもなしかなと、

年もはや八十左衛門はわらんべよ
子は八歳のおきなりけり

といそがしき内にもやられければ、はてわけもない事とて、むす子は内へかへりぬ、さて二休喜介がもとへ行て見るに、又打なをさんととり付所を、これ彌三左、そなたは仙人になる合點か、御内義は死なれて五百年はすぎたれど、またひさしいまじやとはおもはれぬか、先内へ歸られよといへ共、雨長天になりて氣がつかず、是はいかな事と、こがいなとつて引ずりもどし、御内義の枕もとへよせて、目のまふ貌を見すれども、中々きかず、ま一ばんうたねばならぬとわめく時、二休手桶ひつさげ、あたまからさつとあびせけれ

ば、はつといひて夫婦ながら、一度に氣のつきけるこそいとおかしけれ、

○望月

今の京堀川の西黒門といふ所に、張物屋次郎介とて家貧く、しかもかたくなにして、耳は龍におやかりて聾なり、かれがもとへ八月十五夜、二休の友とすと人二人三人さそひて、夜の更る迄月見る事侍りけり、其夜二休次郎介にかはりて作れるものあり、よみてみれば文なり、

乙丑之秋八月望日、二休與レ客信レ足遊二於龍耳之家一、西風徐來、初夜未レ鳴、擧レ盃指レ客、誦二中町之詩一、歌二投節之章一、少焉月出二東側之屋根一、徘二徊廂之間一、笑語横レ溝、大口接レ天、於レ是飲レ酒樂甚矣、扣レ扇而歌之、歌曰、杉箸兮竹串、貫二里芋一兮、斫二酒流一渺々兮予懷、望二女郎西一方一、客有下吹二尺八一者上、倚二小歌一而和、其聲嗚々然、如レ笛如レ虫如レ雨、筒音嫋々不レ絶如レ縷、舞二座敷之酌人一、笑二勝手之下男一、二休咍然直レ衣、死罪問曰、何爲其然也、客曰、椶櫚葉帚爲レ寶、親仁此非二杵藏之跳一乎、西至二揚屋一、東至二茶屋一、相傳囂乎喧々、此非下杵藏之敎二於子供一者上乎、今何不二面白一乎言、二休聞レ之而眠、覺レ目曰、杯盤狼藉酒無レ觴、賓客狂終主不レ言、明月在レ天以二尺八一、夜深吹醉二耳龍軒一、

さて〳〵面白しとはいひたけれど、よき赤下手の賦にて候とて、ごよみに成て夜は明ぬ、

○うら島

むかし男、紀有常が割分に成て後、何やら遣とて歌よみてなんおくりければ、忝しとて返歌したる由季吟の拾穗抄に見えたり、さなることにあらず、蜷川又右衞門二休の許へ消息おくる、二休よみて見るに、杳久不レ能二面談一、御口邊に罷過候、彌御無爲御遁居被レ成候哉承度候、仍而此素麪三把、御好物之由承候間令二進上一候、とよみも終ず硯引寄、御狀忝奉レ存候、殊更素麪三把送被レ下候へ共、否にて御座候、此素麪と申ものは湯にて燒き、其上汁を拵へ、からみをこしらへいたさねばくはれ不レ申候、かやうの六ケ敷ものを、此蝸坊主が何にいたし候はんや、かへし申候、若是非被レ下候はんとおぼしめし候はゞ、よく拵て被レ下べく候、なる程くい可レ申候以上、と書てかへされければ、又右衞門肝をつぶし、扨々あやまりたりとて、よく拵

させ、我身もせうばんせんとて急がれける、二休見て、是でこそくへたるものなれ、さりながら、二人してはみな食しがたかるべし、たれかれといはんより、彌三左衛門よびにやれと、素麵もち來りし男をよび、歸るさに彌三左衛門所へ、是をとゞけてたもれと手紙遣す、その文章にいわく、手紙にて申入候、只今拙僧宿へ素麵大勢押寄申候、ふせがんといたし候へ共、身方小勢にてふせぎかね申候まゝ、早々御出じん御加勢たのみ申候以上、彌三左衛門この手紙を見るといなや、心得たりとせつた引よせゆらりとのり、まいりそうといふまゝに、三人のあばれ食、すさまじかりける次第也、時に親春

三人の口の音羽の瀧なれや

とせられければ、彌三左衛門下の句をせられけり、

くろき筋なしそうめんの糸

と付たり、二休わらいて、尤見立は面白けれども、是は下から上へすゝり上る物なり、又音羽の瀧は上よりながれ落る物ならずや、上下ちがいの御作意、同心にあらずといへば、尤なり、しからば御坊一句あそばせ、なるほど二休が見立あり、素麵をくふ口もとは、浦島太郎がひげに似たり、されば彌三左の年も八千歳、又右のとしも八千歳、二休の年も八千歳、目出たしくと、

あはせては三八二萬四千筋

今のみこむやうら島がひげ

又二休

とはいへども面白いこともなく

玉手つかぎは明てくやしき

とてどつとわらふて別れける、

二休咄卷之三終

二休咄卷之四

○香久山

中比、西京に住みける藪川筍齋、江戸深川に年久敷有て、富貴にさかへける、もとより二休とは無二の中なれ共、山國を隔て音信さへ絶々なりしかば、なつかしく思ひ上京せり、先二休のいほりにたづね行に、昔に引替籠駕（かごのりもの）にぞうり取、さぶらひなどめしつれ、其身は八十にちかく頭はげ、山に消のこりたる雪をいたゞき、しはがれごゑにて御無事に御ざるか、筍齋參りましたといへば、二休もめづらしく、ようこそ遠路御太義、昔をわすれず御詩添しとあれば、筍齋も丸頭巾取て久しぶりの物がたり、二休つくづくと見て、さてもいとしや年はよるまいものじや、貴人頭上曾不レ饒となぶられ、筍齋とりあへず、

筍齋は夏來にけらし丸しらが
　づきんとりては恥をかくやま

とむかしを思ふてのあいさつ、二休かへし

恥かしと思ふ心はいさとへし
　目もとも尻もしはだらけにて

など例のわる口いひなぐさみて、又筍齋二休年何幾、二答佛同年、齋問佛年何幾、二答二休同年、齋問二休何生亦何死乎、二答二休が生死筍齋同、齋問二休四十許筍齋は近二八十一、如何可レ同乎、二答老若男女貴賤上下、死無二三界一生有二三界一、合點歟、齋問何三界云、其時答て歌によめり、

三界はをとがいほうがい小がいなよ
　是れ人間の一身にあり

とこたへられければ、いくつになりてもやまぬは御坊のかる口とて筍齋も高笑、

○水の音

むかしあふはかの長が四天王を殺せし毒の酒、よこ山が大酒、近くは明石右衛門にのませんとたくみしを、くすりや佐左衛門が長口上に、はらりとしれしうそ物語、其外かぞふるにいとまなし、比は文月中旬おどりの手拍子もしづまり、洛中物すごきうしみつとかやに、明る午の刻迄井の水に毒ながれ入の間、今宵早々汲をくべし、さなくば死することと人息をまたずとふれけるにこそ、我をとらじと汲そつるべの車の

音、天に舞地をくつがへして汲上る、あけの日御定りの髮結の床にて評判、まことに夜部は有難や、内裏様より仰出されて、毒水のなんをのがれたり、さても不思議や、いかなる晴明が生れきて、かゝる事をつげぬるぞ、日月地に落玉ず、天道人をころさずとは此事なりといふ人も有、又かたへには、何きつねたぬきのわざならんとてあざけるも有、又はよしやきつねたぬきにもせよ、とてもくむべき水を今朝のほねだすかりといふもあり、とりどりさまざま心々にいひぬれど、點の打てはなかりけり、二休人にをこされて水をくみけるよし、又右衛門きゝて、さてさて御坊は死をいとはぬと申されしが、ちか頃見ぐるし人と同じやうに水くみ玉ふはいかにとあれば、いやとよ死をかなしみて汲にあらず、今宵の毒水にて死すると佛になりがたし、それゆへまづ死なぬ合點なりといへば、又右衛門きゝて、たとへ毒水にて死りた共、又弓戰にかゝり死たりとも、心だに清淨ならば、などか成佛ならざらむ、いやとよしかほど心清淨なりとも、夜前のごとくこゝもかしこも水をくむならば、さだめて極樂の功德地の水も佛立のくみへらし玉ふべし、しかる時は弘誓の渡し舟がすわりて出まじ、しからば極樂へはゆかれまじ、ぢごくへはいやなり、それゆへ水を汲侍る、

○なる神

同じき文月晦日、こよひかぎりのおどりとて、上下各待居たりし、其日は又右衛門も二休も彌三右衛門宅にありしが、夕暮より稻妻黒雲をもよふし、蓮子格子障子などのすき間よりひかりわたりて、宵のほどは五條あたりにあらねども、からうすの音のやうにごほほときこえ、さして雨もいたくはふらじなんどさだめあいしが、やゝ深ゆくまゝにやまず、音次第につのりて須磨の浦のことまで思ひあはさるゝ許也、女子は天井の有所へ身をよせ、隱居のかみ殿は忍びやかにじゆずつまぐりて念佛、となりには亭主の聲として、さてさておくびやうな、神鳴が何がこわい物じやとはいひながら、長者町のあしだやのことを思ひ出せば、あまり面白うはなしとつぶやく、此方には奥の間に三人まくら引よせ、よもすがら神鳴の咄、彌三左衛門いふ、先神鳴は火水のあらそひと說こと可也と覺ゆ、音にをそれて猿の落ることさもあらん、此

義見ぬ事ながら尤なる見なりとあれば、又右曰、仰のごとく水火のたゝかひ誰しも同心に候、しかし又方方にて見侍るに、神鳴といへばおそろしき形を書、蜘蛛の巣のごとくなる物に太鼓をならべてかける、繪そらごとゝはいひながら、今少し書やうも有べき事なり、しかしながら昔より書來りたることなれば、あのかたちも有ことにや侍らん、一概には申がたし、いづれまとならん、二休は何と思しめすとあれば、二休曰、繪に太鼓を書くは無理也、水火のあらそひといふは無理にあらず、いかにとなればたしか成證據有、小野天神の繪馬に、神鳴が水風呂へ入ところを和田源七がかけり、是神鳴は火しや水風呂はみづなり、水火のあらそひならずしてなんぞやと、十めんつくつて申されけり、

○法の人

好色屋の西鶴が曰、今の世に多きもの、供壹人つれし醫者と道心者、さりとてはよくいへり、二休あるうとくなる人のもとへ、八月彼岸揩小木にてこねまはしたるものを喰に行れし、是京のはやり物ぞかし、先見世に出て鉢もらいを數へて見るに、年比四十許なるが、此年迄かせぎても樂する程の銀も出來ず、とかく來世にてゆるりとやつてのけんと、內は女房にまかせ、我一人うら屋かりて一日暮しすると見えて、碁番島のうら八つ緒のせつたにて、恥かしげなる貌つき、又年比三十許なる呉服屋の手代らしきが、さらしの衣唐木綿の香の圖の紋つぶしたるが、かすかに見えすきておかし、是は茶屋のかねあふて無常のをこりたるなるべし、其あとより平のるりこんの衣にすげ笠、ふはいといふ聲ほそやかなるは、こしもとならんか、半年も癪病わづらい、それより尼になりたるとおぼしくて色青し、又あとより六十許のばゝいそがしげにはしり來て、名聞聲の南無阿彌陀佛、のりうりのかゝがなれのはてなんめり、又十一匁位の木綿鼠色にして袖長く、錫杖つきならし大へいくさきは、手習子供あつめし人の埒のあかぬなるべし、はるかに跡より二人ならびてつれ念佛の尼、是は組屋の女なるべしと、其外役にたゝぬとながら、亭主と二人して數へ見るに、此家にて米やりたる道心尼、合て一時の間に九百四十五人、是みな衣きたるもの也、此外にももれたる者幾千萬かあらん、ことごとく京中よりや

しなふなれば、かけのよらぬは尤ぞかしといへば、亭主の曰、御坊も同じ役なしの内に〻侍るものを、猿の尻わらひしたまふかとあれば、二休きゝて、我もさには思ひつれども、又我一人坊主をやめたり共、世のゆるがせになるにも侍らず、商せんもゑきなし、無理に人の物もらはんともせず、人の喰あまりしたる物を喰居るからは、さして鉢もらいも世のつひへともならぬわけもあるべし、さりながら坊主はぶせうものの大たん物と心得玉ふべし、いかにといふに、此もうけにくい何やらんを人にもふけさして、朝の間に一日のたくはへこしらへ、其身はらへ一遍の分別よりをこりたる坊主也、又世をすてゝ深山にすむとてもうき世に同じ、西行が歌に、世をすつる我身はすつるかはすてぬ人をぞすつるとはいふとよめり、しかるを又兼好はしづかならでは道は行(ぎやう)じかたしといへり是すこし兼好の物ずきなるいひぶん也、亭主曰、兼好のしづかならではといへるを、物すぎ也との云ぶん何事ぞや、しからば御坊も西の京ならぬ東わきのにぎ〳〵しきあたりにはすみたまはで、淋しき今の西の京を好み玉ふは何事ぞや、二休曰、をろかなることを仰候物哉、西なればとてさびしきにあらず、東西かはりたることなし、先東に地主の櫻あれば西に仁和寺の櫻有、東福寺の紅葉 高尾の紅葉、安井の藤 千本の藤、音羽の瀧 音なしの瀧、あみだが峯 鷹が峯、鳥邊のゝ墓所 舟岡の墓所、清水焼 御室焼、祇園の二間茶屋にあわせのたうふあれば、今宮にあぶり餅、鯉やのはたご ふしみやのはたご、二拾間茶屋 七間茶や、野良かげまあれば太夫天神有、金閣寺 銀閣寺、東門跡 西門跡、誓願寺の阿彌陀 嵯峨の釋迦、目やみの地藏 油かけ地藏、黒谷のほうねん 正傳の弘法、大佛の堂 廣澤の池、三十三間の矢數 松尾相撲、深草のきゝす 嵯峨野の虫、稲荷の地黄煎 桂の粘、川原町の車 大宮の車、四條五條の高瀬舟 大井川の筏、ひゑい山 あたごさん、其外といふところを口に手あてゝやめにけり、

○沖津

時ならねども蟻のごとくあつまり、東西にわしるや大晦日、銀とりに行人有、とりてかへる有、されども二休はとりにくる人なく、まして人にかすべきたくはへもなければ、いつもかわらぬ我心、いそがはしき

といふことをしらず、餅もつかず、法師なれども年玉の納豆拵ることもなく、盃やら正月やらしらぬが佛なり、こゝに沖津一舟とかやいへる俳諧師、點者ながらへたのかわにて、身は俳諧の捨りたるをなげき玉ふぞ笑止なり、内に居れば米や柴やにせがまるゝをうるさしと出れ共、爰もかしこも明日の味糟引、太箸つゝみ、大豆煎音 天秤の音 そろばんのをと、此やかましさを其まゝに物いふ人もなければ、二休の庵に行て内に居られ申さぬ首尾、今宵一夜の御宿かり申度とあれば、二休よめる

何もかもかりて迷惑する人の
　また我宿をかるぞうるさき

さりながらそれほど内に居られぬ首尾ならば、やすき事也、こなたへとあれば、御出家の御慈悲さても忝しと、大晦日をわすれて物語數々、一舟申さく、是は町にかはりて物しづかなる御すまい、一句まいらすべしとて、

なき里は冬ぞ淋しきかけこいの

とぢまん鼻の先にあらはれて發句しけり、二休おかしくてわきをせられける、

思案の雪の下折たけの

一舟曰、是は發句にのとどめ申たり、下折の竹となされといへば、いろ〱無理をいふが、今のはやり物これでなければ面白からず、いざ是にて歌仙いたさん、尤とみなのゝ字を下にをきて、

十二月三十日

歌仙　一舟 二休 雨吟

なき里は冬ぞ淋しきかけこいの
思案の雪の下折れ竹の
朝風に煙も絶へぬ雁首の
米つみ車月にゆくねの
布ぶくろ結び添たる白露の
小萩一もとなげ入筒の
奥方に文もてかよふ佐男鹿の
ちぎりうれたき首尾の端山の
夕間暮戀の枝折をさす袖の
上々絹糸かゝるすだれの
村時雨いく度ぬれし平蜘の
癖かはれて高間のみねの
雲ちぎれ月影もるゝつぎ切の

隱居の老母まねく薄のあし引のぬり桶かけて立霧のあらはれわたる世間ばなしの寺遠く時相の鐘にちる花の乞食たよる軒の柳のゐてとけてけさ流るめり白水のこしらへぐすりいとふあらしの常盤山麓になびく漉紙のいはねばこそあれあぶり豆腐の底ふかみ紅葉ちりくる摺鉢の久三かこぢてうらむや猿の鯛の骨旬ひをしのぶ思ひねの夢もむすばぬ四十八夜のしら〳〵し有明の月に饅頭の紙札もらふ比しも秋の木引町むすこをひさりをく露の紅の袖うらをのがすかたの風はやみ籠はしらして行雲の百會人中延冷丹の間ならく必覺を書く筆の

惣地はあぶら要はぎんの道具も言葉の花に更る夜の隙におかして來たりや春のさほの〳〵松立わたして、長閑なるそらにふりける、

二休咄巻之四終

二休咄卷之五

○秋風上

下秋九日、五節句の終りとまちかまへたる朝より、嵐はげしく吹來れば、諸人はかまのかたを折、髮は亂れて行べき所へもゆかず立歸れば、めり〳〵とやねのこけらを吹をとに、洗だく仕かけたるひとへ物をうらがへして、縄帶しどけなくやねに上れ共、吹くる風に足ふるひ、やねより我身を氣づかひに、よつばひに成てやう〳〵むねに上り、こゝかしこくゝり付、どうもならぬと下るも有、かくて四つの時分より雨をもよふし、風もいまだやまず、又右衛門親春はもゝだちからげ、から笠もほね斗に成りて二休庵に來て見れば、東面のやねはまだき木葉こちり〳〵になりはて、西のやかげ持佛堂の前にうづくまりて居られしを、是は笑止や氣のどくやといへば、何の氣の毒なる事もなし、面白きことありとて、

けふといへばやねはまくれて秋風に
こけて落ちくる峯のさゝ栗

是をひろいて喰申す、西山に住かい有て面白し、こゝへ來られよとあれば、いや〳〵此まゝにては居られまじ、先此方へ來られよ、内のやねはあたらしくて氣づかいなし、ひらに〳〵とむりにつれて歸られける、

○秋風下

立歸れば、内には又右衛門内義、豆藏といふ小者とさんざん云事して居られし、是は何事にやとゝへば、さればば〳〵あの豆藏めが供にはうせず、木をわりをれと申ますれば、どのかうのつぶやきますと談りもあへぬに、豆藏こゝなおかさまはいな事をいわしやる、是ほど木をわつて居るに、それ程氣に入ずは隙を出したがよいと又つぶやく、又右衛門は又何わけもない事とてかまはず、二休豆藏がそばへより、やれそのやうに腹をたてずともよく合點せい、此大風にて米藏と豆藏は給分も上るはづじや、其にとのかうといふ事が有物か、なじみほどよい物はない、氣げんなをしてよく奉公せいといへ共、何事を仰られても一つも耳へ入ませぬとはら立る、さらば耳へ入事いふてきかせんと、豆藏が耳を引よせ、こりや内々又右衛門の噂に、豆藏はりかう者じやほどに、宿へはいる時

分、見ぐるしうないやうに、着物をたくさんこしらへてとらせふといはるゝ、又内義も女房などよぶ時分、銀がいらばいくらもとらせふといはれた、今少しんぼうしてまて、たわけめとさゝやけば、又二休様の人をたらすやふな事仰られますとて合點せず、いやいやうそでない、うそでない證據には、書物さしてやらふといふ時、豆藏欲心きざして、いかにも書物さしてくだされましたら、今までの二そうばいもせい出しましよといふ、さてこそとふうふをかたすみへよび、かやう〳〵にたらし侍る、見事文字はよみ申か、いかな〳〵牛の角もじさへしらずといふ、しからばさいわいの事、此坊主にまかされよと、たくみ書ける一札之事、

一其方よく奉公いたし候はゞ、宿へはいる時分、又右衛門方より何にてもたくさんにやるべからざる事、豆藏女房よぶ時分、銀がいらば内儀方よりおはぐろのかねいくらにてもとらすべし、其ためかくのごとし、

又右衛門
内儀

豆藏参

口合二休とみな〳〵判をしてとらせければ、かたじけなしとをしいたゞき、奉公に精を出す事かぎりなし、又右衛門も物がゝぬ身のあさましやと、おのづから慈悲心おこつて、れき〳〵に豆藏を仕付たり、二休曰、是當分人をだますににたれども、双方わぼくの謀、おそらくは分別ものとてじまんせられけると也、

○石山

東西南北の正中と思しき三條の辻に、九月十五日石山觀音開帳と札立ければ、南無三寶けふよあすよとくらせしまに、一日二日に成にけるかなと、二休は又右衛門方へたづね行て、かう〳〵の札如何思召といへば、我もさに思ひ御坊をさそひ申さんとこそ存つれ、こよひよりこゝにとまり玉へ、明日早々御供せんとあれば尤と、さて晝めしはいかゞいたさん、二休曰拾五文もりもついへ、とかくこりめしにしくはなし、豆藏が腰につけたのしみ、此内に箱樽もつゝみこめて、夜の明ぬ先にをこせと、枕引よせ夢もむすばぬ先に、長き夜も早ばら〳〵おひ出し立出行は、誰に大みやを過て、秋の下立うりを心なくふみ分、有明の油の

小路の光を西洞院に見なし、金の釜の座を親に孝ある人は今もほりて見たかるべしと、あてごといひつゞけて行ば、寺町通印判やのむす子がねまき着ながら帯もせず、目を半分あきて上見世上るもおかし、夜があけたは、是から尻からげていそげとわしる男女はかぎりなし、とうとい寺を心がけて、もろ共に小橋大橋打わたれば、をごろ〳〵しき男共五七人、籠しんせましよといふを、二休

われならで錢ある人をまつむしの
籠やりませよの聲ぞうれたき

とあわた口をたゝきて又右衛門いふ、これなるは庚申のおわします所、是れは寺か社か神か佛か、二休いかに、

そんな事は見ざるきかざるいはざるよ
われもさるからさぞと思へば

右の方にぎおん清水通すじの書付たる石有、見世明かたに家々のかねの音、此あたりに雨替やは澤山になき所、たゞしこよひの間に、龍宮からぬすみて來たかと思へば、みなきせるのかね也、又右衛門

あけがたのかねのひゞきに目をさまし
見れば枕のきせるなりけり

とは思はずや、色のくろい若衆達とあしばやに行ば、左の方に新敷つくりたり小宿、つき山など手細工にならべ立たり、是は伊勢まいりの下向を待て、飲だり喰たりする所、むかしは又しては太刀刀にて、けんくわ間なくありし所なれど、をさまる御代にあい奉り、わや〳〵といふては喰ふ合點有難しや、天照大神はさのみ喰へとは仰られまじきにといへば、二休

くふ爲にさんぐうとこそ名付たれ
まいる所もげぐうないぐう

是できこえたかと山道行ば、過し比三井寺にて沙汰のかぎりの坊主男、江戸へにげてのこぎり引にあひぬる、親類請人の首色よりおこりて、親の首に繩を付けたるは是なりと、いかな若いものもたしなみ心出來て通ば、是れ善にちかき道とて、思ひの外に淋しきは、左の方の山の細道いやな所なりと、日の岡峠にさしかゝれば、くるま牛のよだれをつゞけて、いつ迄か時ならぬところてん、あたゝめては喰れぬ物をといへば、その親仁はらたちて、

春秋も冬でも夏の日の岡は

あつい所ぞてんかうぬかすな

と見しらすを取あへず、二休[illegible]

日の岡のところてんかと思ひしに

所ぞてんかゆるしたまへや

と機嫌なをして行末は、天の帝のこんごぬぎ給ひて天へ上り給ひし野有、つゞきて山科の里、二休がすきの籔の下と云所、しかさへたへず久しきたばこ火鉢にわらの灰、ことはりなしに吸付て、駕の休所は奴茶や、引茶の得ならぬ芳きにつかれをはらす、是程うまい物、此東海道に又たぐひの有べきやはとこちらむけば、京よりとをし籠と思しくて、御池の玉すだれまきあげさせ、三十に近き女郎、羽二重のしぼりの上をむらさきに染つぶし、見事なる紅うら、綸子の籠ぶとん、しゆんけいぬりの箱にしたるたばこ盆まへにをきて、跡なるも同じ風の籠に、五十あまりのうばらしきが、ふりわけ髪の子をいだきて黒きぼうじ、又右衛門氣を付て、是は京の内にてもいたりたる銀もちの御内義なるべし、されど供の者一人もなし、さても不思議と見立かねたり、二休籠に追付見れば、昔見しやうな者、たがひに貌見合て、半分ほどわらふやうに又わらひもせず、目づかひのけんな所は町にてはなし、げに思ひ出したり、過し比まで都の西うき世町につとめし鹿戀の女郎、かくれもなきそれしやの色名はいはず共、焼印の編笠きるほどの人は、九月十二日石山まいりめされしといふ事思ひしるべし、又わけしらぬやぼすけは、何いふても馬の耳に小判一つも埒のあかぬ事、跡になり先になり追分の露わけ行けば、袖はありながら手のなき御山人形、猿に衣きせたる繪姿のおかしくをそろしき虎屋にも、やさしき針をするかなと、楢はしり井の水のいさぎよき姿も、百年の小町がなれのはて、いかほどなさけ内にこもるとも、是見たらば百年の戀もさめて、今こそこゆる逢坂の關、右の方の山かげに目のくさりたる六十許のばば、旅人の鳥目をねがふ、

これやこの行も歸るも見えぬ哉

蟬丸に似たあふ坂のはゞ

せうと立やおわしますとたづねてきけば、萬日の鐘の聲かまびすし、釜には餅をあたゝめ、鍋にはせんべいの油あげ、京内にくだ物は有まじや、其となりには摺鉢の山にそうめんのふりつもり、ふじといふ出女、

藤田小平次は物かはと白粉を貌にぬりくり、あたゝかなるひやめしまいれと鼻聲になりてさへづるをのぞけば、京にて見しりたる人、一人はせつくまへに前髪をろしたる姿、今一人は末摘花に似たるかたちして、二休々々とまねき入、まびき大根のくきをさかなに、所は山路の水くさき酒、何かはのまれ申さんと、ふり切て急げば、ふみ馬御免の札の辻、立よる親仁が何いふぞときけば、石山へのらせられぬか、もはや出舟なりと取付をもぎはなし、今行道町つゞき、京にかはらぬやねのふきやう、見事なりとほめられて、うれしがる人はなきか、有しむかしの物語、こゝにきそごの、涙の雨、笠かす人もなかりける哉といへば、ごうりこそ雨のといや、八大龍王の宮ゐ物ふりて見わたせば、立あふひの幕いと數勝なり、こゝでこそ笠ぬいでとをれ、もつたいなし、八幡宮のやしろ末社は千々の松林、波のつゞみや風の笛、太鼓は即末社なりと、あだ口たゝきて跡を見れば、十五六なる小むすめ、なれぬわらんぢに足が草臥ました、下向には籠にのりましよといへば、はゝおや今からそのやふなことい ふてなる物か、下向にも札辻迄ゆかずば、二百の錢がどこから出るといかるを、たとへ箱にもせよ、あのむすめなら二百出して、をれが負ふてやらふとわめくむす子たちいとにくし、左右の松林もながめ盡して行は、十八日講中の挑燈かけまくも忝しや、石山の觀世音山下半左衛門も、これ程ははやるまじとうしろむけば、近江の浦々大かた見ゆれ共、此ひもじさにては面白からずと、觀音にいとま申て、門前のしぶ紙にてやねふきたる小宿へ入、ぎしぎしといふ床の上に坐して、件のこりめし取出し、香物の鹽じみたる味は甘露もかくやらんと、豆腐さかなに飲かゝれば、親仁が來り、よき鮨も御ざりますとしらせて立出る跡にて、又右衛門さてさて觀音の御開帳に鮨迄開帳するかとわらへば、二休きゝて、文盲なことをの給ひぞ、むかし此くわんをん、鮨のなれぬをかなしみ給ひ、あのごとく鮨の重石にこしかけて今もおはします、ありがたき御慈悲ならずやと、それより舟にのり大津の方へ上りける、

○尾花川

名所たづねて舟よりをるれば、二休がしるべの人、折しも尾花川といふ所に有ければ立より侍る、世にい

ばら川といふ所也、あるじ心よき男にて、せひこよひはこゝにとまり給へともてなしぬ、そも此里と申は西はにほの海まん〳〵たり、うしろは則里の名の尾花なみよる入海、南は丸太舟のゆきかふ川波、北はしがの浦風はげしきよすがら、音するは竹のはしらにわらのやね、竹のすのこにわらむしろ、しく物もなき宵の月、ながめもつきぬ折節、浦の尾花の風ならで人をときこゆ、あやしやと見る所に、月にさわらぬ松火ともして、こゝやかしこに舟よするさま、こゝにうづかひの有べきかと主にとへば、纒といふ米のとをしのさましたる物にて、あさみの鮒をとることに侍るとかたりぬ、ねられぬまゝによすがら浦の八景をよめり、

三井晩鐘　　二休

春ならで秋のゆふべは三井寺の
入相のかねに露ぞこぼるゝ

唐崎夜雨　　親春

唐崎の松にあらしのはら〳〵と
つゆ吹こぼす雨の夜すがら

堅田落雁　　二休

波よする堅田の浦の眞砂地に
月をしたひて落る雁がね

比良暮雪　　親春

雪寒き比良のたかねの夕風に
にほはぬ花の色ぞちり行

勢田夕照　　二休

夕日影暮れあへぬ間に旅人の
急ぐかひなき勢田の長橋

石山秋月　　親春

鳰のうみや昔の人の跡とめて
月に忘れぬ大和ことの葉

矢橋歸帆　　二休

立歸る矢橋の舟の眞帆かた帆
風のかけたる夕暮のそら

粟津晴嵐　　親春

遠近の雲もあらしに末晴れて
木々もあはづの森の下道

と打ずして、硯筆もこゝかしこに取みだし、しきたへの枕によらんとせしが、はや曉をつぐる鳥　村すゞめの、ちう〳〵かあ〳〵におどろきて、日たけぬ内に京

へなどいひて、とかくきのふもくれ今日とうつり、今日もくるれば明日となる、たゞ妄想の境界うつゝなの事やとて、二休

夢といふ此いふ物も夢なれば

　　ゆめのうき世の夢がたりせむ

二休咄巻之五　大尾

跋

聾軒

酪のうへの判字ものにはそら嘯き、呉の使にはひかくれ、つねに燕石を鬼の斉なりと重寳し、道風の朗詠を秘藏し、はらにさらすべきものもなく、心を穿夢も見ぬ、此方寸の暑さ、今端溪が塵をはらひ、蒙恬をひねくり、蔡倫が顔をよごして、二休と名付て左扇子つかふのみ、

噺物語序

さびしさに宿を立出てながむれば、いづくもおなじ秋の夕暮、とよまれし古歌の身にしみて、思ひ出られ侍るに、折しも雨さへ降て、宿を立いでんもわづらはしく、獨燈のもとに、鴫の羽經とかやの風情して侍る所に、したしき友のをとなひ來て、此秋の淋しさいかにや過すといへり、嬉くも訪ひきましたれ、降りくらしたる宵の雨、これぞ雨夜の物語して、徒然をもはらさんといへば、さ思ひてこそ來つれときこえしまゝ、先予物語侍る、

昔去所に夜更て盜人來り、家の戶をひたもの押けゝれば、亭主聞付起あがり、刀脇指をさすまゝに、白綾たゝんで鉢卷し、盜人戶を押破てはいらば、拔討にせんと鍔本をつくろげて待かけた、案のごとく押壞り顏さし入て覗所を、亭主刀ひんぬいて首を礑ときる、され共切損じけるか、頸落かゝり不落々々としけるを、此盜人首をかゝへ一さんかけて逃行、亭主あまさじと追かけゝれば、にぐるに邪魔にやなりけん、首を捥放ふところへ入て、終に逃のびた、亭主是非なく立かへり、翌日早々奉行所へあがり訴へけるは、夕部私方へ盜人入申候ひしを、一打に討申候へば、かやうかやうにて逃失候と申上ければ、御奉行聞召れ、よくこそ申來りたれ、さらば國中へ觸をまはせさせて仰出さるゝは、若頸のなき者道を通り候はゞ、見あひ次第に急度からめまいるべし、

とかたりしかば友大に笑ひて、物語せんと申さる程に、耳を澄し聞居たれば、思ひの外の戲言也、さようの事を咄とこそいふなれ、世の噂にもまことしからぬ儀を人のかたれば、夫ははなしにこそあらめといふにても辨へしられよかし、話とは出書正しき事をいふなるべし、伊勢物語の註にも、其有しことをかたるを聞て書たる心なりと侍るとかや、いで只今のはなしに似たる事を、物がたりしてきけ侍らんとて、

朱雀院の御宇に平の將門といふ人有、桓武天皇の御子、葛原の親王より五代、上總の介高望の孫、義政が子なり、承平五年二月に謀叛を起し、伯父常陸の大掾國香を討てより、東國をなびけ、下總の國相馬の郡に都を建、平親王と自名を稱しけり、天慶三年二月に國

香が子貞盛、藤原の秀郷兩人大將承り、下總に發向してさま〴〵に責しかども、城强して落がたかりければ、秀郷身を窶ねらひけるが、將門我に似たる兵七人友として、更に主從の義なき故、すべてわきがたかりしを、八幡大菩薩の御助力により、終に秀郷將門を討にけり、將門が首四月の末に京着しけるを、獄門にかけしかば、此首齒嚙をなし聲を揚げ、我軀は何方に有ぞ、はやく來れ、頸繼合せて今一軍せんとて號形勢、冷じといふもおろかなり、有時藤六左近といふ者、

將門は米かみよりぞきられけり
たはら藤太がはかりごとにて

とよみければ、將門首しゝとわらひて消えうせしとなり、

かやうに出所有事を物語といふなりと語らるゝ、誠にさも有べき義なれども、予はかつてしらずかし、所詮僕は噺し侍らん、そこには似通ひたる事を物語し給へとて、是より次第々々かたみにし侍りし、

噺物語目錄

上卷

中卷

目録終

囃物語上巻

(一)天下一目醫者の咄し

去目醫者日本無双の上手なるが、療治にありかゝる時、辻放下其外何にても人だかりあれば、立留り見られしなり、されどもせいがひくうて、人の後からは見へぬにより、兩の眼玉を小刀にてくじり出し、撞木杖のさきに双べてさし上見られし、扨仕舞へば又目の玉に粉薬をふりかけ押入ておかれし、

華佗物語

史記評林、魏の華佗といふ人、養性の術を悟り、年百歳に至ても殊外顔象若かりき、時の仙人なるべしといふ、病有人に藥針を以て療治せられ、又藥針の及がたき病は、酒にて麻痺散をのませられしに、病人酔て前後をしらず伏ぬる時、腹のやまひ背の病、總じて其病の有ところを裁割て悉洗流し、又本のごとく縫合せ、神膏を付ければ四五日に疵愈、一月の間に透と本復せしとなり、下畧

(二)籠ぬけ咄し

長崎より名譽の輕業上りて、四條河原に芝居をかまへ、さまぐ〳〵藝を盡しけり、中にもちやるめらとかやいふ鳴物を吹立、太鼓かねを打て、長さ八尺の籠の中を走かゝつて拔けるが、身のかるき鳥のとぶがごとし、見物の貴賤群集しけり、ある時雨ふりければ、其日は芝居をやめて、四條繩手の髻屋へ遊びに行、良暫はなしけるが、折節眠氣さしければ、もとゐやの見世に心地よく寢入し所に、庚申の代待鉦をならし通ければ、此鉦の響寢耳へ入しかば、其儘起て行に、釣てある髻の形を、あうといふてぬけた、

鉦の音をちやかめらかと思ふた

列子物語

列仙全傳に、鄭の列子と云人、關尹子といひし人を師とし、壺丘子といふ者を友として、二人の道を學び得て、風に乘て飛行せられしが、身のかろき事木の葉又は蟬の拔殼の風にふかるゝが如くなり、又唐天寶初著書行世

(三)大風に逢し舟の咄し

去人西國へ下りしが、大風吹て舟を馳ける程に、いづち共しらぬ島に吹付られ、辛き命たすかり、漸島へあがりてみれば、此世界の外にて有やらん、其國の人の長四五寸許なり、あやしく思ふ處に、魚賣と覺しきもの、籠に魚を入て荷ひ、韶陽魚の切賣はく〳〵と喚りけり、此者興をさまし、いや〳〵爰にては中々口過の成べき所にあらずと思ひ、それより道の有に任せて、山を越谷を隔て行しに、又國有、人のたけの高さ五六丈も有らん、爰にても魚賣のよばるゝをきけば、鰤雜喉は〳〵といふ、よく見れば三間四方程の升にてはかつて賣し、

人の長長短の物語

三界義、此娑婆世界初劫の時、人の身の長千尺或は二千尺、壽命八萬四千歲、此時の女人五百歲にて、初て嫁をこなふ事をしる、是より次第に壽命も身の長も滅じて、三災の時節は壽命十歲、身の長二尺短は一尺、此時の女人生れて五ケ月に嫁を行ふ、

(四)香嗅名人咄し

昔山口源五右衞門とかやいひし人有、生れつき鼻の高き事天狗は物かはなり、香を嗅事名人にて、大名高家にかぎらず、伽羅を求る人々は、此源五右を賴み善惡を極られし、或時山口を始人々打寄、十炷香をせられしが、會終りて亭主申されけるは、時分柄殊外あつ

く侍る、十炷香は果しまゝ、是からは不禮講にして、丸裸に成て緩々遊び給へといふ、座中の人々是は能御氣がついた、さらば左様にいたさうとて、面々絹を脫捨寝僊、或は俯に成て咄しける、折ふし座敷の片隅に弓矢有、源五右是を見て、御亭主の得物かととふ、亭主、されば此中ちつと稽古いたし侍るが、所は狭し自由に射る事も成申さずといふ、源五右聞て、かやうにせばき所にては、空矢を射て弓勢をためしたるがよく侍るといふ、亭主、そらにて矢と申に虚空へ矢を射ることか、それはかへり矢、浮雲侍るゆへなり申さずといふ、源五右、いやさ少も苦しからぬ物なり、我等射て見せ侍らんとて、裸ながら庭へ立出、弓矢おつとり打つかひ、彎て虚空へ放つ、其弓勢強して雲をわけてぞあがりけり、人々見て射たりや／＼と擧けるが、此矢空より落かへり、山口が高き鼻を寸半續、あまる矢が勢をねよりふつと切て落す、人々驚き、先あたゝまりの有内に繼やとて、周章翔し程に取違へ、𨳯を鼻の跡へ付、鼻をば臍の下へ付たり、此後より源五右小便をするには、鼻の上より瀧を流しけるなり、扨人が賴みて香をきいて囉へは、前をまくり香爐を跨へ入て嗅けるに、蕃是をきゝわくる事少もあやまらずとなり、扨も奇妙な事かな、鼻の付所違ふても能きゝ覺し、是ぞ眞の名人なるらん、

小野小町物語

小野小町は其の名字かくれなき歌人なり、古今集序に、そのゝ小町はいにしへのそとをり姫の流なり、あはれなるやうにてつよからず、いはゞ、よき女のなやめる所有ににたり、つよからぬはをうなの歌なれば成べしと有、無名抄、業平の朝臣、二條の后いまだただ人におはしましける時、盗取て行けるを、せうと達にとりかへされたる由いへり、此事又日本紀の二に有、ことのさまは彼物語にいへるごとく成に、とりてうばひ返しける時、兄達其いきどをりやすめがたくて、業平の朝臣のもとゞりを切てけり、しかあれどたが爲にもよからぬ事なれば人もしらず、人ひとつにのみ思ひて過けるに、業平朝臣髪おほさんとてこもり居たりける程に、歌枕共見んとて、逸に事よせて東の國へ行けり、みちの國に至りて、やす島といふ所にぞやどりたりける夜、野の中に歌の上の句を詠ずる聲あり、其詞にいはく、

秋かせのふくにつけてもあなめ〳〵

といふ、あやしく覺て、聲をたづねつゝ是を求るに更に人なし、只死人の首一つ有、旦に猶是を見るに、彼髑髏の其かしらの目の穴より、薄なん一本生出たりける、其薄の風になびく音のかく聞えければ、あやしく覺へて、あたりの人に此事をとふ、或人語りていはく、小野の小町此國に下りて此所にて命終にけり、則かの頭是なりといふ、爰に業平あはれに悲しく覺へければ、なみだをおさへて下の句をつけゝり、

をのとはいはじすゝき生たり

とぞつけゝる、

たゞ今の咄しの香きゝし名人は、其身存命てのことなり、小町は死てされかうべに處て迄、目の穴より生し薄の歌の上の句を詠じけん事、有難き名人ならずや、

(五)提重のはなし

去人萬に異風なる事を好みけり、提重餘多持たれども、いづれも同じ樣にて氣にいらず、何とぞ手がるいやうに風がはりにせんとたくみ、色々案じけるが、兎角張抜にしてみんと思ひ、重箱を五重にして、蒔繪に薄など歯にかゝせ喰けり、扨友達衆を同道して東福寺の開山忌に参り、下向に門前の芝の上に緋莚しかせ、彼提重を取出す、人々是を見てさて〳〵異風成能物進かな、先は手がるうて面白しなど取々褒て、酒一つ二つ呑ける所に、十月の事なれば大嵐吹來り、彼張抜の提重に五重共に虚空へとつて行、人々噪けれども、空へ吹上し事なればせん方なし、其後東福寺邊の人の咄しをきけば、今年の開山忌には不思議有しと云、いかやうの事ぞととへば、白雪のふる所も有、紫の雪或は黄色の雪ふる所も有しが、地にたまりしを見れば、紫の雪は章魚、黄色の雪は卵、白雪と見へしは蒲鉾、其外卷鯣などが降しと、

仙郷の雪物語

八雲御抄に、仙郷には、むらさき、黄色、淺黄の雪ふるとあり、倭漢合運、孝元天皇三十九年乙丑六月大雪ふる、推古天皇九年辛酉五月火の雨ふる、聖武帝天平十四年壬午奥州紅の雪ふる、厚さ二寸、堀川院長治二年乙酉六月北國紅の雪ふる、あつさ五寸、後土御門院文明九年丁酉七月北國紅の雪ふる、一寸、

此外、夏雪雹非常の物降し事有、繁きに因て畧す、

（六）能太夫ばなし

江戸にて去能太夫親子づれにて、出入する屋敷方へ節句の禮に行しが、去御大名の所へ參りければ、大名仰けるは、折ふし今日は徒然也、其方山姥を久敷見ぬほどに、仕れと仰らるゝ、親仁畏候とて御手役者を催し、山姥一番果た、殿も御機嫌よくて、又むす子にも楊貴妃を御所望あり、むす子謹で申上けるは、今朝より方々御禮に伺公仕、殊外草臥罷在候、恐ながら今日は御免被レ遊被レ下候はゞ有がたかるべき由申上る、親仁傍にて是を聞、大にせきて申されけるは、やれやれ其方はよく合點せよ、御意を背は慮外に非ずや、其上我等年寄て行歩叶はぬ身でさへ、しにくい山姥を一番したではないか、なんぞや其方若くさかんな身で楊貴妃をせまいとは、扨々榮耀にほだされたか、冥加につきようはしじやといはれた、

聞やうがわるければおかし、

土佐日記物語

土佐日記、二月五日、けふからくして和泉のなだより小津のとまりをおふ、松原目もはるばる也、彼是くるしければ舟とくこげ、日の能にともよほせば、梶取船子どもにいはく、

み舟よりおほせたぶなり朝北の　いでこぬさきに綱手はやひけ

此ことばの歌のやう成は、かぢとりのをのづからのことばなり、梶取はうつたへに、我歌のやう成事いふにもあらず、きく人のあやしく歌めきてもいひつるかなとて、書いだせれば、實にもみそもじあまりなりけり、下畧

是は聞やうよかりし故おもしろし、

（七）鳶鳥の物をいひし咄し

去人鳶と鳥が物をいひたるを聞たといふ、それは不思議の事也、鳥の鳴聲を何事と聞わけ給ふ事奇特なることじや、してして何といひしぞとゝへば、答ていふ樣、去所の屋ねの上に鵄が魚の腸をくふて居る所へ、鵶がとんで來て買たかかといひければ、鵄がいひしは、ひいろたひいろたとこたへし、

鳥の聲を聞わけし物語

論語首書、公冶長といひし人は孔子の弟子也、衛の國より魯の國へ歸られし道にて、鳥の鳴聲をきけば、淸溪に死人あり、いざ行てくらはんといひて、友の鳥と

打つれ飛さりけり、かゝる所へ老嫗一人泣々來りければ、公治長見て何とてなくやと問へば、老女こたへけるは、前の日幼少の子家を出行て今にかへらず、何國に居るともしらず、若死でも有か、覺束なさに啼と云、公治長申けるは、最前鳥の鳴をきけば、清溪に往て肉をくらはんといひしなり、おそらくは老女の子なるべしといふ、老女清溪に行て見れば、尋る子死て有、涙ながら立歸りて國の司へ訴へければ、司聞給ひて、何としてか其死骸の有所をしりぬると宣ふ、老嫗承り、公治長に行逢侍りしが、汝子は清溪に有と申せしにより知侍ると申せば、扨は公治長が殺した物なりとて呼寄、老女が子の死骸有し所、如何してしりぬると問給へば、公治長答へて申けるは、鳥の語を聞て悟り侍る、努々我ころせしに非ずといふ、さらば汝に重て鳥の語をきかせて、其聲を悟るにおゐては命をたすくべし、若さとらずば汝がころせしに紛なき間命を取べしとて、公治長を獄屋へ押込られけり、籠へ入て六十日目に、雀集りて嘖々嘖々と鳴ければ、公治長笑を含けり、籠守此體を見て、司へ參りて申けるは、只今獄の上へ雀きたりて啼を、公治長聞て咲をふくみ侍るといふ、司やがて公治長が前へ來り、雀の鳴聲は何とか聞しと問、公治長答へて、雀の鳴しは白蓮水の邊に、粟をつみし車くつがへりしが、牛は角折たり、こぼれし粟をひろへども盡ず、いざ行てくらはんといひし也と申ける、司うたがはしく思ひ、白蓮水へ人を遣し見せければ、公治長が申せしに少もたがはざりけり、是によつてゆるしぬ、

（八）念佛數取はなし

去者死て黄泉の旅に赴しが、婆婆に有し時つゆ許の善根はせず、定て地獄へ行であらう、是非に及ばぬ事哉と心ぼそく、曠々たる道をたどりし所に、背の方より八十許の姥竹の杖をつき、何かはしらず大き成布袋を肩にかけて來る、此者見て近くさし寄て姥にいふやう、その肩にかけ給ふは何ぞといふ、姥答て、是は我等婆婆に有し時、常に念佛申侍しが、珠數を買事も太儀さに、藁莛を一寸程づゝに切て、念佛一遍にしべ一つゝにて數を取侍しを、布袋へ入て此度持參るといふ、彼者聞て、扨々殊勝な事や、見れば老體のそれを肩にかけられ、術なさうに見へはべる、亡者は相互、我等若役に持て進上さいふ、姥、嬉しやさらば頼

ませうかとて渡す、彼者懐に請取宥に懸、飛が如く逃行、姥驚、やれ盗人よ出合々々とよばゝりけれ共、折節行かふ亡者もなし、彼盗人しすましたりと悦び、閻魔王の前に來り申樣、我等は平生念佛怠らず、一遍一遍にわらしべにて數を取、袋に一杯御座候間、極樂へ御やり被レ下候へといふ、閻王聞召、汝が臉魂は念佛など申さうには見へぬなり、名は何といふぞと問給ふ所へ、姥杖に把大息ついで來り申やう、あの念佛の數取はわたくしがにて侍るを、あの者私を驟奪取候と云、ゑんま王聞召、さこそ有べきと思ひしなり、乍レ去ばゝがしべならば、凡數を覺たかと仰ければ、されば一斗程御座りませうといふ、ゑんま彼袋を御覽じ、いや／＼殊外重たかし、五六斗も有べし、先々はかつて見よと冥官におほせつけられ、升にてはかり見れば、實にもしべは一斗有、其殘りはみな／＼牛馬の沓なり、これはなにとして入しぞと仰ければ、能うけたまはり、それはわたくしは入ませぬ、さだめてこの横着者がしわざで御座りませうといふ、えんまきこし召、言語道斷兇奴かな、一斗の莚ではすくないとおもひ、六道の辻で牛頭馬頭の履を拾ひいれて、かさだかにしてきたりしなり、己最前もとふたれども名をいひおらぬ、名はなにといふとおほせければ、加賀屋加兵衛と申、そのとき扣帳を見たまへば、娑婆にて長崎の俵荷をしたやつが、それに懲もせず又似袋をしをつた、

重怡物語

元亨釋書、重怡比丘は伯州の人なり、比叡山に住て顯密の法を學び、後に鞍馬寺のうしろに、丈六の阿彌陀を安置したまひ、大治二年より保延六年まで、十四年があいだ念佛を唱へ、小豆にてその數をとりたまふに、二百九十七斛六斗あり、兼て往生の日を知、沐浴して左の手に五鈷をとり、右の手に念珠を持、西に向日出度命終たまふ、

同書に、興福寺莊嚴院の實覺法師の下人、其役をゆるされ、髮を剃て法名を願西といふ、飛鳥寺の側に庵を結で佳彌陀を唱ふ、念珠をもたず、小豆にて數を取、その數七百餘石、天承元年七月朔日病おこる、諸人にかたりて曰、我死たりとも三日葬事なかれ、形象三日があいだに壞ずば、極樂に生れしとしるべしといひ已て、西にむかひ定印を結で、寢がごとくして死す、

四日めに諸人大桶に入、葢の後に置しが、十餘日過て高野の僧四人きたり申けるは、我々夢の告ありて來れり、願西の死骸を見せ給へといふ、人々潰爛て臭をるべきと思ひて遠慮しければ、四人の僧すこしもくるしからず、夢の告によりはる〲來りし上は、憚に及ずといふ、其時桶の葢を取て見ければ、身體變せず生たる人のごとし、髮鬚一寸餘のびてあり、四人の僧諸人ともに禮拜せしなり、年は七十五、

（九）泰山府君まつる咄し

去人以の外わづらい、色々藥をつくせどもしるしなし、むす子いかゞせんと歎きけるが、此上は祈禱して見んとて、急ぎ山臥の方へ行、我等が親仁散々わづらひ、今は藥の力及がたく侍る、哀佛神の御たすけを蒙り、今一度本復あらせてたべと念頭に賴む、山伏尤御斷なり、して〱御父の年はいくつ、煩はいつ頃からぞとこまごまととひて申やう、此病人は泰山府君をまつらねばならず、祈禱料銀子十枚也といふ、むす子聞て、本復さへいたさう事ならば、何かおしかるべきといふ、其時山伏申けるは、我等が崇し不動は、靈驗あらた成明王にて、定業必死の者にでも、一度は本復申す也、祈禱をいたす時、御前の御幣必ゆるぎ出侍る、則願叶へば搖中間、氣を付てよく〱見たまへといひ含め、四方に五色のしでを切かけ、十二の燈明あきらかにかゞやかせ、洗米供物さまざま備へ、御幣を大き成德壺に立て、不動の御前にすへ置、扨山伏壇上に打上りて、施主にむかひて申けるは、最前も申ごとく本復あれば、祈る内に此御へいゆるぎ申程に、心を付て見給へといひ渡し、頭巾篠懸引つくろひ、伊羅多加の珠數押もんで祈る、かた手には洗米を蒔ちらし、或は菓子其外の供物をつかんでまきかけ〱、按にもうで祈りければ、暫有て德壺にさし入し御幣、ゆらゆらとゆるぎければ、願成就目出たしとて、山伏も施主も感淚を流し悅びけり、扨施主申けるは、有難き次第にてこそ侍れ、其御幣を迚もの事に病人にいたゞかせたきといふ、山伏聞ていかにも左樣にし給へとて、德壺に指置し御幣をぬき出さうとしけるが、へい串が長さに誤てとくりをこかしたり、とくりの中より鯲二升許出でて、護摩の壇をはね廻る、施主もあきれ、山伏も赤面して斗方にくれた、能々思案して見れば、供物色々有中に、鯲を山のごとく臺に盛て備へし

有、最前供物をまく時、此鹽をとくりの中へ蒔入しにより、鰍が上を下へ返しける時、御へいゆる〳〵とせしなり、

有國物語

寢覺記、勘解由の相公有國といひし人、父豐前守輔道に具して筑紫に有ける時、父重病を請て死門に及びければ、有國心を盡して法のごとく泰山府君をまつりけり、三時許有て輔道活かへりて語りていはく、我閻魔の廳に召出されつるに、美麗成饗膳を備へたるによりて、返しつかはすべき由定め有つるに、一人の冥官の曰、輔道をかへさるゝといふ共、有國をばめさるべし、其故は其道の者にあらずして其祭をつとむる咎、のがるべからずと申、又床に着たる冥衆の曰、有國科有べからず、其道の者なき遠國のさかひにて、孝養の心に堪ずして祭をつとむ、更に咎に非ずといひ出たるに、面々冥衆どうずるによりて、今かへさるゝよしをかたりし、

庾黔婁といふ人、南齊の時の人にて、孱陵縣の令と成て出つかへ、十日もたゝぬに、忽胸さはぎ汗流れて心も心ならざりければ、即令官を捨て故郷に歸ければ、父の病發りて二日目なり、一門もあまりはやく來れることをあやしめり、庾黔婁父の病いかゞあらんと醫師に問ければ、醫者の曰、父の病の輕重をしらむと思はゞ、父の糞を嘗て見よ、其味苦くばよかるべしといひければ、父が糞を泄しを取て嘗て見けるに、味甘かりき、黔婁が心彌うれへ悲しめり、いかにもして父の命をすくはんと思ひ、夕に北極の星に祈り、頭を扣き悲しみて父の命に代んと願へり、これ廿四孝の其一人なり、

誠に孝行の至極成べし、父の恩にくらべては須彌山もひきく、母の恩は蒼海より深しとなり、今の孝は能養ふをいふ、犬馬に至る迄能養事有、敬せずば何を以てかわかたんとは、孔子の御詞なり、

(十)防風を買し咄し

去人防風を買て來れとて、下人を青物やへつかはしければ、したゝか成蓮の根を買て歸る、主人見て、是は蓮なり、何と聞あやまりしぞといひければ、下人申けるは、八百屋中を見ましたか、ばうふらしき物は是より外にはござらぬといふ、しかれば是を棒に見立たか、それでもふがたらぬといひければ、下人聞てよ

うぬかりませうぞ、これ〳〵とて懐から麩をひとつ取出した、主人も叱事はおゐて尻餅搗てわらふた、

馬を求る物語

瑯耶代酔、伯楽が相馬経に、隆顙趺目如二累麹一と有を讀て、此りうそういふは額大き成事なり、又てつぼくとは目のすゞやかに大き成事、るいきくのごとしとは、蝶螺などのやうに、上へ前あがりにたくましき事をいふなりと講釈しければ、其子是を聞て馬を求に出けるが、爰かしこと尋る所に、大ぎ成蟾蜍有しを見付、取て歸り父にむかひて申けるは、我馬をもとめたり、其相額大きに目もすゞやかなり、さりながら蹄たくましくはなしといふ、父我子の愚なるをしりて、不レ怒てわらひしとなり、

囃物語上巻終

囃物語中巻

(一)鱣かばやきの咄し

或町を夜半過に、鱣のかばやき〳〵と賣て通りければ、去人の下男折節寝入られはせず、睦々として居けるが、幸是を喰べしと思ひ、かばやきを呼て、門にては人も見る程に、内へはいりて焙給へとて、門の戸をあけ中戸の際にてあぶらせけるが、是をたゞくふも可レ惜事也、冷食に添てくふべしと思ひ、皆々家内は寝入たれば、潜に臺所へ行て食櫃を探ども、闇さはくらし摸あたらず、とかうする内に鰻が焼過る、かばやき賣小聲になりて、久三郎殿やけまする〳〵といへども、奥の臺所なれば得きかず、せんかたなさに大きなる聲にて、久三郎殿やけまする〳〵といひければ、主人聞付て、やれやけるといふは、久三郎起よとて、憧翊走出て中戸をあけゝれば、鰻の香颯と匂しかば、南無三寶ちかいは、魚の棚さうな、

中納言子安貝物語

竹取物語、昔竹取の翁といふ者有、野山にまじり竹を

取つゝ、萬の事につかひけり、名をばさるきのみやつこといひける、其竹の中に光る竹一筋有、それを見ればば三寸許成る人、いとうつくしうして居たり、翁云やう、われ朝夕見る竹の中におはするにてしりぬ、子に成たまふべき人なりとて、手に打入家へ持て歸り、妻の女に預けしが、いとおさなければ箱に入て養ふ、此後翁竹をとるに、ふしをへだてゝよごとに金の有竹を見付る事かさなりぬ、かくて翁漸ゆたかに成行、此小女養ふほどに、すくすくとおほきに成まさる、三月ばかりに成程に、よきほどなる人になりぬれば、髮あげなどして几帳の內より出さず、此むすめかたち世にたぐひなく、屋の內はくらき所なく光みちたり、此子いとおほきに成たれば、みむろといんべのあきたを呼で名をつけさするに、なよ竹のかくや姬と付侍る、世界のおのこども、あてなるもいやしきも、此姬を聞めでて戀ざるはなし、中にも色ごのみといはるる人五人、よる晝きたり門に立けり、其五人の名、一人はいしつくりのみこ、一人はくらもちの御子、一人は左大臣あべのみむらじ、一人は大納言大伴のゆき、一人は中納言いそのかみもちたか、此人々なりけり、かの家にたゝずみ、或は文かきてやれども返事もせず、或時は翁をよび出して、娘を我にたべとふし拜み手をすり宣へば、翁が心にもまかせずといひて月日をへたり、或とき翁かくや姬にいふやう、我七十にあまりぬれば、けふあすもしらず、此世の人は男は女にあひ、女はおとこにあふことをす、其後門廣くも成侍る、此人この年月を經てかうのみたまふを、いかでむなしくは過し給ふぞといへば、かくや姬いはく、能もあらぬかたちを、ふかき心もしらであだ心つきなば、悔しき事も有べきと思ふ計なり、其人のふかき心ざしをしらであひがたしといふ、翁のいはく、抑いかやうなる心ざしあらん人にかあはんとおぼす、かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ、かくやひめのいはく、此人々の心ざしひとしきなり、いかでか中におとりまさりをしらん、五人の中にゆかしき物を見せ給ふ人あらば、御心ざしまさりたりとてつかうまつらん、此よしを人々に申給へといふ、翁心得たりといひて人々を待けり、日くるゝ程に人々又れいのごとくあつまりぬ、翁出てひめが申けるやうを語る、人々聞て是よき事也、人のうらみも有まじといへ

ば、翁内へ入てかぐや姫にいふやう、五人の人々にゆかしき物をみせ給ひなば、御心ざしふかき方へまいるべしといひしに、いとやすき事なり、何成ともこのみ給へと宣ふといふ、かぐや姫聞て、いでこのみ侍らん、石つくり御子には佛の御石の鉢といふ物有、それを取て給へ、又くら持の御子には、東の海に蓬萊といふ山有、それに白銀を根とし、こがねを莖とし、白き玉を實としたる木有、それを一枝折て給はれ、今ひとりには、唐に有火ねずみの皮きぬをたべ、大友の大納言にはたつの首に五色に光玉有、それを取て給へ、いそのかみ中納言には、つばくらめの持たる子安の貝とりてたべと、此やうに申させ給へといふ、翁又まかり出て、五人のひとぐ\にかうぐ\といふ、人々きゝていづれも求めがたき物なれども、命を捨てももとめんとて家々へかへられけり、中略、中納言いそのかみもろたかは、家につかはるゝおのこ共の本に、燕の巣くひたらば告よと宣ふ、何の御用にかあらんと申、もろたか答へ給ふは、つばくらめの持たる子安貝を取べきなりとのたまふ、おのこども申やう、つばくらめをあまた殺して見たるにも腹になき物也、但子產ときいかで致らんと申、又一人が申やう、おほいづかさの飯炊屋の棟に、つくの穴ごとにつばくらめは巣をくひ侍る、それにあくらをゆひあげて人を付置、つばくらめ子をうむ時、うかがひてとらしめ給へといふ、中納言悅びて、よくこそいひたれとて、まめなるをのこども二十ばかり、あなゝひにあげすへられたり、扨子安貝取たるかと中納言隙なく問にやり給へば、をのこども御返事に申やう、人あまた上りいてさぶらへば、それにおぢてつばくらめ巣にも來らずと申ければ、いかにしてか取べきと思ひわづらひ給ふ所に、官人くらつ丸といふ翁申けるは、大勢上りて侍ばこそつばくらめ得來らず、此あなゝひをこぼちて人を皆退て、まめならん人一人にまもらせ綱をかまへて、鳥の子を產時つなを釣上させ、與風子安貝をとらせ給へと申、中納言のたまはく、つばくらめはいか成時にか子を產としるべきと宣ふ、くらつ丸申けるは、燕子うまんとする時は、尾をさゝげて七度めぐりて產おとす、七度めぐらん時、引上て貝をとらせ給へといふ、中納言悅び給ひ、二十人ばかりの人を皆々しりぞけ、あなゝひをこぼち給ふに、つばくらめ來り巣を作

れり、中納言みづから貝を取べしとて、籠に乘てつられあがりうかゞひ給ふに、つばくらめ尾をさげていたくめぐる、時分よしと思ひ、手を捧げてさぐり給ふに、手にひらめ成ものさはりしかば、すは貝取たり籠をおろせよと宣ふ、皆々あつまり、とくおろさんと綱を引過して、綱切たりければ、鼎の上へのけさまにたち給へり、人々淺猿がりて寄て抱奉りしが、目は白目にて臥給へり、人々水をそゝぎ奉る、からうじて活出給ひぬ、御心地は如何とゝへば、息の下にて、物はすこし覺ゆれど、腰はうごかれず、されど子安貝はにぎり持ちたれば嬉敷思ふなり、先紙燭してこよ、貝のかほみんと御手をひろげ給へるに、貝にはあらずして燕の古糞をにぎり給へる也けり、是御覽じてなを心地なやみ給ひしかば、かくや姫傳へ聞てとぶらひにやる歌、

年をへて波立よらぬすみの江の
まつかひなしときくはまことか

と有を讀みて聞せ奉りければ、よはき心にかしらもたげて、人にかみを持せて、くるしき心地にからふじて書き給ふ、

かひはかくありける物をわびはてゝ
しぬるいのちをすくひやはせぬ

とかきはつるとたへ入給ひぬ、

咄しとは不都合なれど、燕の糞を子安貝と思はれし所と、鰒燒し香を魚や町の火事也と思ひし所、いづれも本を見とゞけぬ故をもつて、麁相仁にして對するなり、

(二)身代りのはなし

去者散々わづらひ頼すくなう見へければ、友達來りて其方の病今は爲方なく覺ゆる、偏に往生を願ひ給へ、又何にても心にかゝることあらば、申置れよといひければ、病人聞て、能ぞや勸給ふ、迚も命の有べきと思ひ侍らねば、極樂往生を願申也、去ながら此頃と申は、そんじやうそれさまと申御若衆を不圖執心に存じてより、誰を使に此物思を傳へまいらせんやうもなく、寤ては思ひ寢ては猶君の俤のみ立添て、片時も忘るゝ隙なく、終になやみ侍る、此事いひて無益と思へど、かつうは後生の障共成らんと思、懺悔の爲に申也と涙を流しいひければ、友達聞て、扨々左樣のことならば、など今迄はつゝみ申されしぞ、其君は我等

も心安く申合せ侍る物を、いかならん事をも申傳へ侍るべきに、今とても此纔かなひ侍らば、其方の病本復せらるゝ事もあるべし、申てみんとて走出、彼若衆にかう〳〵と語る、若衆聞召、數ならぬわが身を左樣に覺し入んこそ痛敷御事也、いかで否と申べき、とく病人の本へ參り、二世の契約致べしと仰ければ、友達大きに悦び御供申行しかば、病人感淚を流し、扨々有がたき御事や、最早露命たすかりがたく覺侍る、去ながら百年の御情も只今の御出にて同じ御事、草葉の影にても御恩はわすれ申まじ、御一代蔭身に添て守り侍らんと大聲揚て泣居たり、責て御盃成共といふ程に、若衆一つ請給ひ付ざしにし給へば、病人重き枕を漸揚、三度頂戴仕、一口呑と見へしが、其儘絕入しければ、一座の面々聲をはかりに呼活けれ共、終に空敷なる、扨も〳〵本意なき事かなとて、泪ながら野邊にいたり、骨を高野山に納けり、其後若衆高野へ參り給ひ、彼者の卒都婆に向、一蓮托生の回向して、扨御下向ましますす所に、山の僧達十人許打つれ行逢しが、此若衆を見るよりも、望所の幸と中に取込、押仆立替り入かはり心のまゝにおこなひける、下人もせんかたなくて逃けるが、さるにても大勢してたしなませまいらせし程に、たまる事では有まじと思び、立歸りて見ければ、僧衆は一人もなし、若衆斗打臥て御座、下人走寄引起し參らせ、扨も大難に逢給ひしが、御心は何と侍るやらんといふ、若衆聞召、初僧達幾人も寄て我を手ごめにせられし迄は覺しが、其後はたゞ寢入て何事もしらずと仰らるゝ、下人承り不思議に思ひ、又彼念者の墓へ行て見れば、卒都婆の後下の方に穴があいて有、扨は疑もなく身代に立給ふ、必守の神と成べしと仰られしが、屆きたる事やとて咳上てないた、

丹州菩提寺觀音物語

元亨釋書、感世といふ佛師有、暇に任せ常に法華經よよむ、或は一兩卷或は一二品、細工の隙に隨ふ、又普門品三十三遍毎日怠る事なし、丹波の國桑田郡に宇治宮成といふ者有、感世を呼よせ觀音をつくらせけり、宮成其價を厚く施す、感世錢帛を請て京師へ歸りけるに、宮成忽惡念を發し、佛師に與へし物は大分なり、所詮道にて殺し奪ひ取べしと思ひ、則追かけ大江山にて追付、感世を切殺し錢帛を悉くうばひ取て歸

けり、其後觀音を拜み奉りしに、御肩の上割切たり、其疵より血流れて地に滴る、宮成大きに驚き、佛師を斬しと思ひしに、此觀音、御有さまこそ不審なれと、て、都へひざを馳て成世が樣子を見せければ、成世は何の恙もなし、使者直歸此由をいふ、宮成騒いそぎ成世が家へ行、うばひ取し物皆々返して、觀音の像を斬し事を語る、成世申けるは、我大江山にて賊人に逢て所持の物をうばはれ、漸逃て爰へ歸りしなり、扨は觀音の我に代て其難を請給ひしとて、二人手に手をとりて感嘆せしとなり、應和二年の事なり、穴穗寺ともいふ、

佛師の感應今更いはんも事あたらしけれど、信の至ればかゝるためし昔より多かりき、彼筑紫の押領使が薬なりとて、土大根を信じて食せしだに、勇士と變じて賊を拒しぞかし、まして佛神におゐてをや、其利益にあづからぬは、偏に信のいたらざればなるべし、

(三) 法花宗往生の咄し

去者借屋して居けるが、屋賃ちとおそなはれば、家主權柄をいひてせがむ、思ふやうに商はなし、萬苦になる事じや迚、生涯の中には家持になることはあるまい、死だらば佛に成事は及びもない、責てあの世にては、間半口の家成とも持て屋賃を取、ゆる〱とくらしたいといふ、相借屋の亭主聞て、そなたの宗旨じや程に、隨分題目をさへ唱られたら、寂光淨土のごうぶくらに、何ほどの家なり共もたれうと常々放氣しが、ある時此法花宗煩ひ死にければ、彼相借屋思ひけるは、つね〱いはれしは、あの世にて間半口なりとも家が持たいと申されしが、何になられたぞ覺束なしと思ふ所に、ある夜の夢に彼人來りていふやう、今ほど寂光淨土にて、面七間裏へ廿八間の家持に成て侍る、是七字の題目二十八品を表してなり、屋賃を取て心安く暮し侍るといふ、相借屋聞て、それは羨敷事や、年中の家賃は何程あがり侍るぞといへば、

あの世にて七間口の家もちて
年中とるは一分八くわん

と讀かと思へば夢はさめたり、家賃一分八貫ならば、八貫の錢も金子に直し、壹兩三分何百文とよまれさうな事じやがと、能々案じ見れば、實々法花經は一部八卷なる故かくよまれし、生涯のうちに大般若をよ

まれたらば、六百貫づゝ、取家をもたれう物を、殘た事なり、

義孝往生物語

日本往生傳、右近衛の少將藤原の義孝は、太政大臣贈一位謙德公の四男なり、佛法に深く歸依して、つねづね法花經を讀たまふ、天延二年の秋疱瘡を病往生し給ひしが、臨終の砌方便品をよみたまふ、其座異香薰じ有難き往生なり、大納言藤原の高遠といふ人、義孝と親友なり、或とき義孝を夢に見給ふ、まじわりつねのごとし、義孝一句の詩を詠ず、

昔契二蓬萊宮裡月一　今遊二極樂界中風一

釋書にも此事あり、文字少し替りあり、

昔約二蓬萊宮裏月一　今居二極樂界中花一

(四)うらなひの咄し

昔去所に占の上手ありと聞及び、さらばうらなはせ見ばやと思ひ、我所へよびよせ、大重箱に金柑八十一入持出て、此重の内何にて侍る占給へといふ、博士暫工夫して曰、金柑なるべしといふ、扨數はいくつ候ととへば、八十一と答ふ、亭主横手を拍て、さて〳〵聞及びたるより上手なり、おそらくは神の變化なるべし、一向我等を弟子にして、御相傳頼入るといふ、はかせ聞て、實さやうに思ひ給はゞ、いかにものこらず相傳いたすべし、先七日か間是々の行ありとて、ことごとしく書立をして渡す、此者則作法のごとく七日の行終りて、博士の方へ行ければ、禮物にも式法ありとて大分金銀をとり、其上に他言せまじといふ起請をかゝせ、ひそかにいふよう、先日其方にての占物を、何にてあらんと工夫して居たれば、庭へ蜈が一疋這出た、それを鷄がくらふたによつて、むかでくふといふ義理にて金柑としるといふ、彼者あきれしが、さらぬ程にて數は何としてしれ候やとゝへば、其庭鳥か蜈をくらふてくゝ〳〵といひしなり、九々八十一とうらなふと、

安部晴明物語

晴明物語、村上天皇の御宇に當りて、縫殿頭安部晴明とて古今無双の博士あり、都西の洞院に居所かまへて禁中へ仕へ奉る、爰に播磨國印南郡に道滿法師といふ者有、俗姓は蘆屋の村主清太が後胤なり、清太は法道仙人に逢て、天文地理易暦を學し、書典に記し家に傳へしを、道滿ひそかに學び、大むね其理に達した

り、されども佛法はしらず、其心我慢にて誹法亂行なり、尤占兆長じて時々奇特をあらはす、自曰、易暦陽陰五行におゐて、天下にを肩ならぶる者あらず、然に都に晴明とて名譽い占出て、官位に預り禁中へ伺公申とかや、此道滿を閣て左程の者天下に有べしとは思はれず、急ぎ都に上り奇特をくらべ、其晴明に耻辱をあたへ、我身天下の名人とならんと思ひ立、都に上り拯市町の人に近付、晴明が事を尋しに、市人答て申やう、晴明は限なき奇特者にて、廿日許以前より、播磨の國より我と論議しに上る人ありとて、相待るゝと語る、道滿も是に驚しが、されども何ほどの事か有べきと、晴明が家へたづねいたる、晴明則出むかひ、汝を待しと良久、よくこそ來られたりとて、さまぐ\にもてなしけり、道滿申しけるは、某是まで來るは、汝ときざくをくらべん爲也、迚もの事に禁中の南殿の御庭にてはげまゝんといふ、晴明尤と同心して、此義を奏聞しければ、則勅許有て、兩人ともにうちつれ參內しけり、帝南殿に出御、后妃簾中に出給ひ、公卿殿上人地下の衞府諸司相ならぶ、先一番に道滿法師御庭の白砂を手に取、暫持念して小石を空へ投上ければ、燕と成て飛めぐる、晴明扇をもつて一打うちしかば、數十のつばめ一同に本の小石と成にけり、其時晴明座を立て陽明門の方に向て持念す、俄に大龍空より降り、雲を起し雨をふらす、庭に有人々濡にぬれてぞ立にける、道滿さまぐ\すれども雨やまず、御溝の水陸にながれ、船を指ばかりに見ゆ、庭にありし人人腰だけつかり立あがる、今はとて晴明又一言唱へければ、則雨はれ水干たり、御庭の人々ぬれたりと思ひしも、すこしも沾たる所なし、道滿いはく、是魔道の術にして正理にあらず、占を以て決せん、此上まけたらん方は弟子となるべしと、晴明尤と應じければ、奥より長櫃一合に、大柑子十五入鎰をかけて出す、道滿占て、是大柑子十五有べしといふ、公卿臣下此事をしろしめされし人々、拯はたがはずとおぼしめす、晴明立寄加持し替て、是鼠十五疋ありといふ、人々すは晴明うらなひそんじたりと色をうしなふ、其衞府の官人立より蓋をひけば、鼠十五疋かけ出、四角八方へ逃失て、大かうじは一つもなし、簾中階下同音にかんじたまふ、道滿大きに耻て弟子と成、

(五)びくに咄し

去田舎衆京へ上り宿を取、端居して四方を詠けるに、熊野比丘尼のあぢ物帽子にて頭を包み、小妻を取てあゆむを見て、扨々異風者かな、あれはなに者で候ぞととふ、亭主こたへて、熊野比丘尼にて侍るが、小歌をうたひ勸進いたすなり、若き衆は小歌に心をうかし、價を得させ契り侍る、かれらがから名を手きざ見と申なりといふ、手鬮とはいかやうな義理ぞと問へば、油ひかずといふことなり、總じて女は髮にあぶらをつけて嗜侍れど、あれはかしらをまるめ侍る故、油を用ひず、去によりて蒟蒻にたとへ侍といふ、田舎衆聞て横手を打て、京衆は種々のかる口をいひ給ふものかな、さてまた我等が國本には賈女ありて、夜ごとに辻に立申が、京にも左やうの者侍るやととふ、亭主聞て、中々總右衛門と申て、其やうな者侍るといふ、して〱其總右衛門と申義理はととへば、亭主礑とつまり、總がゐもんいたすと、

女は總右衛門は似合がたしと思へど、むかし新左衛門といふ女もありと見へたり、

女郎花物語、新左衛門と申女房に忍びたるおとこ、外に宿をもとめ出あはんといへば、

春霞たちいでんこともおもほへず
　あさみどりなるそらのけしきに

とよみて侍り、當時の女ならば、春がすみ立出てなびきやすく、名をながすもかへり見まじきに、新左衛門が心ざしやさしくこそ侍れ、女はかく身をもつべきにや、

（六）推と違ふた咄し

去所に夫婦背戸口にて諍ふをきけば、女房はあをのきにしたがよいといふ、夫はうつぶせにしたがよいといふ、女房、いやとようつぶせにすれば思ふやうにはいりもせず、どうでもあをのきにしたがよい、わらはが申やうにしたまへとて、扨物をもいひやみぬ、鄰の人壁ごしに右の問答を聞付、さては晝一義をおこなふと見へた、物をいひやみし程に、今は最中なるべしと思ひ、屛覆に階小さして上り、能々覗見れば、瓜の香の物を夫婦して漬て居た、

艾子物語

事文類聚、艾子といふ人齊と魏との間に旅宿せしに、夜る隣の家に人ありていふやうをきけば、一しゆなり又暫ありて一しゆなりといふ、暫有てまた一しゆ

なり、曉に及で六七首に至る、艾子思ふやう、是必詩人なるべし、終夜詩をつくる事六七首と見へたり、夜も明なば彼詩をきかばやと思ひけり、夜已に明ければ、冠正しくして隣へ尋行しに、其かたち疲たる商人なり、艾子案の外におもひながら問けるは、昨夜足下には終夜詩を作られしと見へたり、一覽の爲來りたりといふ、商人答て、我は賣人なり、詩作るやうをしらずといふ、艾子再三所望しけれども語る事なし、艾子又といふ、昨夜我隣に居て終夜聞に、汝かいふやうをきけば、一首なり又しばらく有て一首なりといひしが、詩にあらずして何成ぞ、商人笑て曰、それは君の誤なり、昨夜我腹俄にくだる、紙を尋に及ばず、手を穢してのぐふ、六七度手を膩たり、故に一手々々といふ、一手を一首に聞なし給ひしと、

（七）大上戶の咄し

去者嵯峨へ祭に行しが、夜にいれどもかへらず、親心許なくおもひ、友達どもを呼あつめていひけるは、悴今朝より嵯峨の一門どもかたへまつりに行しに、今までかへらぬは若氣ゆへ、道にて喧嘩などして切ころされても居るやらん、太儀ながら各我等と同道してたびたまへ、やうす見てまいらふといふ、いづれも聞て尤なり、去座同道いたすべしとて、續松とぼし行ければ、西生河原に仆臥たる者あり、松明振上よく見ればむす子なり、大きに驚きゆり起し、或はよびいけて見れど息もせず、親仁歎き悲しみけれども甲斐もなし、友達ども歎きは理りなれども、頓死と申こともみな〳〵定りごとなり、もはやかへらぬ義じや、兎角葬送のいとなみめされよといふ、親仁涙をおさへ、萬事能やうに各をたのむといふ、其時みな〳〵談合しけるは、どうしても此西生河原で火葬にせずばなるまい、しからば此死骸を宿まで持てかへらうより、今夜愛へ寺の御坊を呼よせ沐浴させ、すぐに爰のをんぼを賴、今宵火葬にせうといふ、皆々尤と同心して寺へ人をはしらせければ、御坊はせ來り、髮をそれ湯灌せよとて手取足とり沐浴して、をんぼを雇、火屋へすぐに死骸を入火をかけゝれば、其とき此死人火の中より躍いで、是は付火か手過が、やれ火事よ〳〵と叫喚んでかけ出た、親仁をはじめみな〳〵肝をつぶし、宿へつれてかへつた、大上戶故殊外酒に酔て、さがより歸るとて西生河原に酔ふしたりしが、火をかけら

れて正念が付しとなり、天窓をそられしほどに、本のごとく髮をはやさんとしけれども、火葬のとき悉あたまは焦て髮一筋もはへず、藥鑵の尻のやうになりしまゝ、是非なく十德を着る、

國輔物語

發心集、中頃但馬の守國擧が子に、所の雜色國輔といふ人あり、ある宮原のはした者をおもひて、心ざしふかく契りし頃、父但馬の守に成て下りければ、國輔も下らでは叶はぬ事に成けり、馴そめてより一日もまみへぬ事あれば、互に泣かこちわりなく覺へけるに、立わかれてはたえぬべくもあらねど、すべきやうなくてさまざまにかたらひ置つゝ、泣々わかれにけり、國へ下りても妻の事のみ心にかゝり、京への便りごとに文をやれどもとゞかず、障がちにて返事も見ず、心許なくなつかしくて年月を送りしが、ある時人の語るをきけば、京に人多くやみて、世の中噪しきといふにも、先覺束なく思ひしが、得こらへずして京へ上り、妻の有し宮のうちを尋させければ、其人は煩ひ付て此宮のうちを出たまひしといふ、使むなしく歸りて、此由を國輔に申ければ、胸つぶれて何の斐も覺へず、又使を押返し行衞たづねきかすれど、知人もなし、せんなくて心のあられぬまゝに、馬に打乘てすゞろに何國をさすともなく打出たり、西の京のかたにより、知人あるやうに常に聞しかと計、ほのかに思ひ出て、そこはかとなく尋ありきければ、あやしけ成家の前に、妻の召つかひし女童立て居たり、最嬉しく思ひ、詞をかけんと思ふ間に、家のうちへ逃隱けり、馬よりをりて內へ入て見れば、妻は尼に成て打そばみ居たり、あら嬉しや爰におはしけりとて、うしろより抱て、日頃なつかしかりつる事共かきくどきけれども、此尼いらへもせず、さめざめと泣より外の事なし、扨は我を恨み給ふか、心うきことなりとて、さまざまいひなぐさめ、扨もなど後をむけ給ふぞや、いつしか見奉らんと思ふ斗に、杳からうじて上りしに、餘り强面侍るとて引むけんとするに、いとゞ泣まさりて更に面をむかへず、强て引むけゝれば二つの眼なし、木の節のぬけたるごとくにて、目もあてられず成しが、漸心をしづめ、扨もいかなる事にかくはあるぞととふ、妻は音をのみ啼て、兎も角もいはねば、やうやう女童ありし事をかたるやう、御下りの後しばしは御

文の音信も有かど、人しれず待給ひしかど、更にそよとの便もなくて、一とせ二とせ過にしかば、物をのみおぼして明し暮し給ひし間に、御病つき給ひて宮を出給ひき、したしき御あたりにも便りあしき事どもありて、さるべき所も侍らざりしかば、是にてあつかひ奉りしに、御病おもらせ給ひ、終にはかなき露ときへ給ひし程に、今はせん方なしとて、此前の野に御からを捨奉りしに、日半許有て思の外に活かへり給ひしに、其間に烏などのしわざにや、かく淺間敷御目になして侍る、態も殿を尋奉るべきにてこそ侍しかど、此御形勢の心憂さに、今はいかで世に有者と人にしられじと、ふかくおぼしたるも理なれば、兎もかくれ奉らんとは仕しなりと泣々かたりけり、國輔心うきこと限りなし、こはそも何の報ひにてかゝる目を見るらん、今は此世の限にこそとて、頓て是より比叡山へ登り、甘露寺の敎淨僧都の房に慶祚の弟子と成、眞言の秘法を傳へ、唐の坊法橋行周といふは此人なり、山王に逢奉り灌頂し奉りし人なり、

暫の內に形の替りし故、似たる事にして喻しと對するなり、

元亨釋書曰、行圓姓は源氏、太夫國擧が子なり、初行圓國輔と名乘、父に隨ひて國に赴、妾あり都にとゞめ置、一日潜に京師に來り女を問、或人曰、其女は病て看病する者なし、生死をしらずといふ、國輔尋もとめ野を行に、其尸脹爛して目もあてられず、國輔家に歸らず、則園城寺に入て剃落し、智淨心擧の二門に隨ひ修學す、如意輪觀自在の供を修す、觀音身を現じ光を放つ、又山王明神と常に淸談す、明神曰、我名は山王といふ、三諦即一を表せり、山の字竪の三畫と空假中横の一畫は是即一也、王の字横の三畫は三諦なり、竪の一畫は又一なり、二字三畫しかも一貫の象あり、故に我立て號となすなり、一心三觀一念三千、又々かくのごとし、下略

案ずるに是行因と同人なるべし、諺に三たび寫せば烏焉馬のたがひめ有といふなれば、發心集の板の誤りならんか、しかれば行圓といふなるべし、又釋書に行圓といふ今一人あり、但是は行願寺の開山革上人の事なり、同名にて別人なり、

（八）鯉の目はなし

去人下人にいひ付て鯉をあらはせしに、此下人鯉の

目を水で呑ば、萬に薬なりと聞及、鱗ふきて後鯁の目を操出しける所を、主人見付て、そこな粹者何事をしをるぞと、大聲揚げてわめかるゝ、下人肝をつぶしけるが、雨の眼玉ひよいとぬけ出俎の上へ落た、下人の傍輩是を見て、扨々目のぬける程しからるゝといふは此事か、やれ〳〵目の玉を入よとて周章ふためき、鯉の目を取違へ、彼者の目の跡へ鯉の目を入し程に、目のはた落くぼみ、見苦しけれども是非もなし、其後此下人大坂へ使に行とて、伏見より夜舟に乘て下りしが、夜半時分に船より這出川へはまる、船中の人人、やれ誰やら川へはまつたはとて引揚、扨も危相な人や、小便するとてはまられたかと問へば、いや〳〵我等は曾て覺へず、現にはまりしといふ、能案じて見れば鯉の目を入しにより、本の魚の時川にばかり住し故、古郷なつかしくてはいりけん、

安勝物語

扶桑隱逸傳、安勝といひし僧あり、國族姓はしらず、つねに法花經を讀誦せられしが、其聲微妙にて、聽聞の人隨喜のなみだを流しけり、又慈悲ふかくして、貧人には食物着物をあたへ、病有物には薬を得させて惠給ふ、しかれども此聖生つき殊外色黒し、去によつて時の人黒色沙門といひしなり、それを耻しく思ひ人にまじはり給はず、或時長谷の觀音へ參詣して、極て色黒きは何たる因縁ぞや、願は大悲の御力に其故を示し給へとて、三日籠たまへば、夢の中にうつくしき婦人枕上に立給ひ、汝が前身は牛なりしが、持經者の邊にありて、常に法花經よむ聲をきゝ、經の力によつて今汝と生れ替しなり、しかれどもいまだ牛の餘殃不ㇾ盡して色黒しとの御告なり、夢覺て彌々菩提心を增たまひしとなり、

咄しは鯉の目の餘殃にて、川へはいりしとなれば、牛の餘殃にて色黒きといふを以て對するなり、されば總じてかたわに生れつるも、又は貧賤なるも皆々前生の因縁によるなるべし、强に悔悲しみ叶はぬ願ひをせんより、たゞ後の世を思ふべきにや、

(九)錢をひろはぬ咄し

去者の子幼少なるが、外より歸て母にいふやう、下の町の辻に錢が落してあつた、ひろをと思ふ内について人がひろふたといふ、母親聞て、なんぼう程有しぞといへば、とゝの〇〇程にあつたといふ、母手を打てお

しい事じや、すくなくとも百四五十はあらうに、

道鏡物語

日本王代一覽、弓削道鏡といひしは、孝謙天皇の寵愛甚しく、太政大臣禪師の位を授給ふ、其後又法皇の位をさづけ、內裏の西宮に住居す、下略

下學集、道鏡は法名なり、丹州弓削の人、のちに入洛して弓削法皇と號す、孝謙女皇の夫なり、馬陰過量可レ笑、

と有レ之、然れば馬の道具が優れたると見へたり、

（十）子供に世を渡す咄し

去者子を二人持けるが、或時呼付ていひけるは、我年よりて世のまじはりもむつかしき程に、我等は隱居して心やすく暮し度思ふなり、十貫目の銀子を、兄に五貫目弟に五貫目渡す程に、左樣に心得て隨分精出し、我等をはぐくみ家の立やうにせよといふ、弟むすこ申やう、十貫目の銀子を五貫目づつ請取申べき事心得がたく侍る、兄者人は總領の事に候まゝ六貫目御渡し、我等は四貫目請取申べしといふ、兄むすこ聞て、扨々其方は不合點な事をいふ、親の仰をそむくか、是非半分づつとりて、以後は銘々に隨分精出しかせぐべしといふ、弟又いひけるは、我等はいやにて侍るといふ、兄はごう有とも親の仰にても、我等はいやにて侍るといふ、兄はごう有とも親仁次第にせよといひて、親をあかめせり合しを、隣の人與風來りて、此評を聞横手を打、さてさて方々は聖人かな、當世は欲に迷ふて親をしへたくり、目をぬきても身がちに計し侍るに、弟は四分六分にわけてとらうといふ、兄は半分づつとらうといひて評給ふ事、ためしなき心底なりと泪を流し感じぬ、其後能々內證をきけば、せり合しこそ道理なれ、十貫目の借銀有しが此事なりとぞ、

伯夷叔齊物語

史記評林、伯夷叔齊は孤竹君の二子なり、父卒するに及んで叔齊を跡目に立るに、叔齊順にあらずと思ひ兄伯夷に讓る、伯夷曰く、父の命なりといひて遂に逃去、叔齊又伯夷が國にあらぬ事を思ひ同逃けり、國人其中子を立て主とせしなり、宋朝の文王といひしは、能老者を養ひ給ふと聞て、二人ともに出て仕へしが、文王果給ひて後、其子武王紂を亡べしとて義兵を擧て、父文王を木像に作り車に乘せ大將とし、すでに發

向せんとし給ふを、伯夷叔齊武王の馬を叩て諫申けるは、父の文王死て、未うづまずして軍を起すは孝心に非ず、又紂は是君なり、臣として君を弑する事仁心に非ずと申ければ、大公望が曰く、伯夷叔齊は義人なり、義の向ふ所は尤なれども、討王の政人望にそむけり、是全く身の爲に非ず、しかしながら民の爲なり、今此時を天より武王に與ふ、天のあたへをとらざればかへつて其咎を受、時いたりて行はざればかへつて其殃をうく、暫も逗留すべからずとて、已に打立、終に紂を亡し、武王天下の主となりたまひしかば、伯夷叔齊是を耻て首陽山といふ山に隱れ、蕨をとりてくらひ、周の粟をはまざりしに、或人曰、首陽山も武王の地なり、其地のわらびなればいかゞといひければ、二人共飢死せしとなり、下略

是は父遺言して叔齊に國を讓しを、兄を閣ては順にあらずと伯夷にゆづらんとしければ、伯夷は又父の命にそむく事をおそれ、たがひにあらそひて國を捨たり、はなしとはうらはらなり、

囃物語中卷終

囃物語下卷

(一)琥珀の咄し

去人琥珀の緒〆をもとめ、塵などすはせて試ければ、上々吉の玉にてよく塵を唾ふ、頓て印籠巾着に付て腰に降、或時魚屋町を通しに、俄に印籠巾着重くなりしかば、不審に思ひ腰を撫て見ければ、うるめを二俵吸とりたり、大きに悦び宿へ歸り、さて〳〵塵をよく唾こはくは、か樣の俵物を取る、是は重寶な物じやとて、又同じこはくにて根付を大きに拵へ降られし、其後米屋の門を通ければ、何かはしらずしたゝかなる物を吸とりたり、殊外腰重くて自由にありかれもせぬを、汗水になりてそろ〳〵歸り宿へ行着て、やら嬉しや米を一俵吸とりしと、獨笑してよく〳〵みれば、薦を被たる乞食の死骸にて有し、

大海增減なき物語

三界義、問、雨つねに降、川々の水流入、しかれども大海の水增もせず減らざる何の故ぞ、答、華嚴經に曰、大海に四つの熾燃光明大寶あり、大海の底に布て、性

極熱にして常に龍宮川所〻注の無量大水を飲縮、此故に大海增減なし、其四つの大寶は、一つには日藏といふ、大寶光明照觸れて、海の水を悉變じて乳となす、二には離凋大寶光明、其乳を照觸して悉く變じて酪となす、三には大焔大寶光明、照觸して悉其酪を變じて蘇となす、四には無餘大寶光明、照觸して其蘇を悉變じて醍醐となす、火の熾燃成がごとくにして、悉盡て餘なしと、云々、若心地觀經によらば、大海に牡象口有、海悉流入滅盡して餘なし、

大海の水を吸込なるべし、嗤しの琥珀の塵を吸とも是には及ばじ、

（二）盗人のはなし

去所へ盗人來り壁を毀ければ、亭主やがて起直り、屏の際へ行くに、盗人終に壁をすこしこぼちあけて、其穴より手を差出しければ、亭主其手を捕へ、錢二百文握らせていひけるは、我人世を渡る方便がなければ、盗なりともせねばならぬものなり、去ながら若きついやつにとらへられては命あぶなし、此二百文輕微なれども、是にて硫黃賣なりともして、賊をやめたまへさいふ、盗人さて〳〵かたじけなや、去ながら此やうにさせらるれば、重てもまいりにくいといふた、時宜が聞事じや、

安養の尼物語

寢覺記、惠心僧都の妹安養の尼の許に强盗入にけり、ある程の物どもみなとりて出にければ、安養の尼は紙衾といふものばかり引着て居られたりけるに、姉なる尼の許に有ける仕へ者のあま、走來て見れば、小袖ひとつ盗人の取おとしけるを取て、安養の尼に奉りけるに、尼上のいはく、其を取て後は、盗人わが物とこそ思ひつらめ、ぬしの心ゆかざらん物をば、いかが着るべき、いまだよも遠くはゆかじ、とく〳〵持て行て盗人にとらせ給へといはれければ、門の外へはしり出て盗人を呼返し、是をおとされにけり、慥に奉らんといひければ、盗人共立留りて、しばし思案したる氣色にて、惡敷參りにけりとて、取たる物どもさながら返し置て歸りにけり、かゝる正直今の世にをこの嘲有りぬべし、いかにいみじき事も、世に似ず時宜に叶はぬ行跡をば、人是を用ひされば其益ある事なし、但賢を見ては等からん事を願べしといへり、まことに其ほど至ぬれば、謗をなす人あるべからず、しか

れども心をば古にひとしくして、擧動は今の世にかなへるをよしとす、

(三)りんきばなし

去家中の侍衆寄合、さま〴〵の雜談の次手に、其中の一人申されけるは、我等女房殊外りんきがふかうて、ちと見よき腰本は置つけぬ、迷惑なりといふ、其時又一人申されけるは、どこも〳〵りんきふかきは同じ事じや、我等も二人ばかり手かけが欲いが、何とぞりんきさせぬやうにしたい、又一人がいふやう、所詮殿の仰付られにて、知行百石に付女房一人づつもてとの御意じやといふて廻文を作り、御家老のそんじやうそれ殿は千石なれば、女房十人と書つけ、それより次第〳〵に知行に合て、誰幾人かれ何人判として、そなたの方へ持せてやるべし、其方は三百石じや程に、手かけ者二人置給へ、御内方共には三人なり、いかにりんき深くとも、殿の御意じやといふならば、せく事もなるまい、搗はれて慰給へといふ、尤よき分別なり、しからば廻文を作り、我等方へ御こし賴入と約束して、扨家へ歸り、何となく内儀に向ひ、世間ばなしの次手に、昨日何事やら殿の御内談なさるゝ事有て、家老衆を召れしと聞たが、何事も觸てはこなんだかと問、内方聞て、いまだ何の沙汰も聞侍らずといふ所へ、彼廻文を持來る、悅びて押披見て眉をひそめ、しばらく物案じ皃にして見せければ、内方見て、あら心許なや、何事の御觸にて侍るやらんと問、答て、さらば陂果た事じや、知行百石に付女房一人づつもてとの仰付られなり、家老殿は千石じやによつて女房十人、其外次第〳〵に御請を申、知行に合せて女房數を持と見へた、皆々印判書判つきならべた、氣の毒な事哉、其方一人にてさへ身體がならぬに、今二人持たらばなを〳〵借錢の淵にはまらうが、殿の御意にて一家中御請を申たる事を、我等訴訟したりとも叶ふまいが、氣の毒やといふ、内儀聞て、尤三百石で侍れば、我身ともに三人女房御持なうてはなるまい、御訴訟なされたりともかなふまじ、所詮知行二百石殿さまへ御上げ被レ成候へば、わが身一人にてくるしからぬ程に、百石どりに御成あれといふた、

身體三分一に成てもくるしからぬと思ふは、ふかきりんきの、

趙飛燕昭儀物語

劉向烈女傳、漢の成帝と中王の后に、飛燕其妹昭儀とて、二人ともに寵愛し給ふ、姉の飛燕は寵衰ふ、然れども皇后に備はる、昭儀は寵盛なり、昭陽舎に住居けり、樓閣七寶を以てかざり立、善盡し美つくせり、しかれども姉妹ともに子なし、帝又許美人といふ后に幸して子を産ければ、昭儀これを聞て帝に恨たてまつりけるは、常に中宮に遊び、わが居所へ來らせ給ふとの勅ありしが、何とて許美人には御子出來させ給ふぞとて、高欄より白地へ身を拋、泣叫びて物を食せず、最早宮闕にありてもよしなし、當に歸らんといふ、帝然らば許美人の産し子を殺べしとて、昭儀が目の前にて縊弑し給ふ、其後又偉能といふ后に幸し給ひ子出來たり、昭儀又うらむゆへ、是を殺べしと勅有り、籍武といふ臣奏しけるは、かやうに有ては繼代の君あるまじ、殺し給はずとも王子に立給ふべしと諫けれども、帝用ひ給はず、生れて八九日になる子を殺し給ふ、是にも昭儀が腹や居ざりけん、偉能に毒を與へたり、偉能いふやう、適〻太子を産しも昭儀が惡心に殺されぬ、生ても甲斐なき我身なれば、所詮此毒を呑て死なんとて、終に死けり、此後は帝幸して子ある者は自毒を飲で死けり、下略

寔におそろしき嫉妬ならずや、さらぬだに女人は五障の雲厚く、高野の山を初として詣得ぬ靈地數多し、佛の御をしへにも、面は菩薩のごとく内心は夜叉のごとしと侍るとかや、萬つゝしむべき事にこそ、彼の紀の有常の娘は、業平河内へ通ひ給ひしを、ねたき心はもたずして、風ふけば沖つ白波龍田山と詠じけん、するの世の女の鑑ならんかし、

(四)北野へ無實を祈るはなし

むかし北野の天滿宮へ異形の者三人籠けり、一人は折烏帽子着て色淺黑き男、一人は法師にて其色まつ黑なり、今一人はせいちいさく腴臉(しかみつら)なり、三人ともに念珠押揉(もみ)、祈誓終りてひとつ所に寄集り、面々懺悔物がたりしけり、折ゑぼし着たる者申やう、我等信濃の者なるが、無實の難に逢、杳(はるぐ)上りてこの御神へ參籠し侍るといふ、二人の者聞て、何たる無實にやと問、されば我は蕎麥なり、人間そば切を進(すき)好み、美旨(うまき)に喰ひ過しては、兎角そば切は腹中の毒じや、必はらがくだると申て、我等になき難を申なり、よい加減に喫へばたゝる事はなきに、無實を申に付今宵通夜し侍ると

いふ、其時いろ黒き坊主打諾、さては我人似た事にて侍る、我等は愛元のものなり、名は憲法と申、則黒茶にてはべる、人間着物を染申に、くろちやは弱きと申なり、淺黄の上を賦して絲花色に染、又洗濯して其上を海松茶に染、後はそむべき色がなさに黒ちやに染侍る、久敷着馴て地のよはき事はいはず、黒茶は弱しと申、初から新しき絹を黒茶に染たらば、何しによはく侍るべき、是無實なりといふ、又しかみづらの小おとこすゝみ出、我等は疝氣市助と申者なり、尤人間の腰或は腹にかぎらず、折々いため侍る事我等が所作なり、然るに疝氣けもない奴原が、主人或は親のいひ付る事に不性をかまへ、疝氣が發ていためますとて其まゝ打臥、仕事がしたむなければ疝氣、遠所へ使にやりさうなれば疝氣、己等がぶしやうさに何氣もないにせんき〳〵と申事、是無實なり、

直幹の物語

撰集抄、むかし橘の直幹といふ文章の博士、無實を蒙りて流さるべしとて、明日なん宣下くだると聞へけるに、直幹力なし、前世の宿執にこそと思ひ侍れと、年頃最惜く侍りし妻子もわかれがたく、住馴し都をふり捨て旅だたん事の悲しく覺へて、北野の神こそかやうの事には、あらた成こと共おはしまし侍るなれとて、其夜參りこもり、泣々終宵祈念し侍りけり、曉方に御殿の内に大きに炭御聲にて、道風々々とよばせ給ふに、道風の聲にて應へ申てけり、さて仰下さるゝやうは、此の直幹が歎き申事あり、無實にて侍れば、御免除あるべき狀書て直幹にたぶべしと宣ふ御聲あり、承るに身の毛竪て忝覺てへ待居たるに、良暫ありて立封じめの文を翠簾の内より颯と投出されたり、直幹急ぎ披きて見れば、文章の博士橘直幹依二無實一蒙二勅勘一事返々不便也、於二今度一者可レ有二御優免一之由天神之御氣色候、小野道風奉也、とかゝれたり、悦びをなして急ぎ宿に歸りて、此有さまを委しく奏聞し侍るに、叡慮御驚有て、道風が自書の中文をひらかるゝに、天德二年正月二日餘りの比、近江守を望める狀、

紫宸殿之皇居七廻、書二賢聖之障子一、大嘗會之寶祚兩度、續二書圖之屏風一、親二三朝之德化一、身猶雖レ沈二本朝一、鬧二萬里之波濤一、名是得レ播二唐國一、

とかける手跡に、聊もたがはざる上は、帝おそれをな

させ給ひて、流罪をとゞめ給ひて、剩日頃申ける式部大輔になされ侍りけり、殊にあらたにぞ覺侍る、

（五）杣怪我のはなし

木曾の山家に住者あり、朝夕木を樵て世を渡りしが、或時山へのぼり木をきるとて、斧を打はづし足の甲へ打込し程に、ふかさ二寸ばかりきれたり、されども疵より血も出ず、漸々家へ歸り、里に外科有しを呼よせ見せければ、外科申されけるは、斧を深く打こまれしが、疵の底に血か肉か赤き物見へ侍る、さりながら足垢をおとし給へといふ、さらばとて湯を涌しそろそろ垢を洗落しければ、足の甲にすこしも疵つかず、二寸ばかり垢がたまりて有しなり、それ故斧を打込けれども血も出ざりし、疵の底に赤く見へし物は、色よき紅葉の葉一枚足の甲に取付て有しが、其上ひた物あかのたまりし物なり、生れて後終に洗足せなんだか、

大樹仙人物語

大唐西域記、羯若鞠闍國に仙人有、定に入て數萬歳を經たりければ、形枯木の如し、然に鳥共集り、尼拘律の果を仙人の肩の上へ落しければ、年を累て果生出大木と成て、仙人の肩の上にはへたり、定より走て此木を取て捨んとしけるか、梢に鳥の巢有ければ、怖へて取も捨ず有けり、又其國の王を梵授と申ける、或時容顔美麗の女房百人花を飾て伴ひ、兢伽河の邊に遊び給ふを、仙人見て愛欲を發し染着の心出來たり、其後王宮に來りければ、王出給ひ、何として爰へ出來ると宣へば、仙人申けるは、我林藪に住て多の年月を送る、定より出で遊覽しければ、王の伴ひし餘多の美女を見て心うかれけるなり、いづれにても一人我に給へといふ、王否ともいひがたく、先歸りたまへ、いづれにてもまいらせんと約束して、百人の女房に宣ふは、仙人女を一人くれよといふ也、たれにても彼所へ行べしと仰ければ、女房達一人も行べきといふ者なし、王思ひたまふは、若仙人に女をあたへずば、通力をもつていかやうにか仇をなすべきもしらずとて、憂に沈み給ひし所に、幼稚の女王の傍に來りて、何が御心にかゝりてうれへしづみ給ふぞと問、王仙人の望を語、女の一人もまいらぬ事を歎き給ひければ、此小女申けるは、王のうれへだにやむことにて侍らば、我稚なりとも仙人のかたへ參るべしといふ、王大き

に悦び、小女を伴ひ仙人の廬へ行給ひ、是をあたふべしと仰ければ、仙人よろこばずして、何とてかやうの小女を給ふやといふ、王開給ひ、殘る女は我命に從はず、此小女一人は仙人につかへんといふ間、つれ來ると宣へば、仙人怒て惡呪して、九十九人の女一時に腰曲て形衰と咀ひけり、王は內裏へ歸り見たまへば、殘る女悉腰かゞまり、一生和合ならざりけり、是より後は內裏の名を曲女城といひけるなり、此仙人肩に大木生し故大樹仙人と申き、

是も一生身を洗ざりしか、

（十八）淨瑠璃語りはなし

當時嘉太夫曲節角太夫ぶしなどとて、洛中に專淨瑠璃はやりけり、去者此二流をひたと稽古して、隨分の上手に成しが、愛の日待かしこの月待に雇れて、是を所作とする、或時太秦に近付有てやとはれ行、夜に入て京へ歸るに、朧月夜の覺束なきに、野邊を只ひとりすご／＼と步しが、何とやらん心すごく思ふ所に、行べきさき半町ばかりに、猨二三十立ならび、此者ちかづかば一口にくらはんと待かけた、此體を見て扨々是非もない事かな、逃たりともやわかにがしはせじ、

すくむべきやうもなし、斗方にくれて居けるが、畜生ではあれども隨分詫言してみんとおもひ、わなな く／＼申けるは、いかに猨さま、私は都の者でござりますが、淨瑠璃をかたりに、うづまさ邊へ今朝よりやとはれて參り、只今歸ります、命を御たすけ下され候はば、成程面白き所を語つてきかせませうといふ、餘多の猨の中に、頓頭ふるも有うなづくも多し、此者思ふやう、先諸猨多ければ語つて見ばやと思ひ、聲繕してふるひ／＼、善光寺といふ淨瑠璃を、角太夫ぶしのひんぬきに語けり、二三十の猨どもつく／＼として動もせず聞居たり、既に六段語り仕舞けれども、一疋もかへらず、さてはわが淨瑠璃上手ゆへ、畜類といへども感にたへで、今すこし聞度思ふてかへらぬと見へたり、最早命はたすくるなるべし、先心は落着た、去ながら又淨瑠璃をそなはりてはあしかりなんと思ひ、今度は賀太夫ぶし、三社の託宣をつりがね三柱七つゆり、愛を大事と語りしが、初段過しかば夜はしら／＼と明にけり、朝日のさし出るに能々見れば、猨ではなくて芳を苅たばねて置しにてぞ有ける、宵よりかぶりふつたりうなづいたりせしは、風の吹し

ゆへなり、

憶病さに夜ー衞ない目に逢た、

盃中蛇影物語

書言故事、晉の國に樂廣といふ人有、或時客來りしに酒をのませけり、其客二度來らず、樂廣客の所へ行きて、何とて久しく來らぬとゝふ、此人答へて、前日酒を給はりし時、盃の中に小蛇のかたちを見しなり、それより心地なやみて得ゆかずといふ、樂廣不審に思ひ工夫して見れば、座敷の天井に角膝弓を置しが、此影盃の中へうつりて、蛇のごとく見へし物なりと思ひ、客をわが屋へ同道して、最前の弓を天井にかけて、又盃に酒をつぎて、先日の小蛇は是なるべし、この弓の影なりといひければ、客得心してやまひ本復せし、

是も一念のまよひなり、

(七)繪像の阿彌陀ばなし

去者後生第一に願ひけるが、繪像の阿彌陀を持佛堂に掛奉り、香花を供養し時々念佛怠らず勤けり、或時みあかしの油を繼とて、如何したりけんゑざうの御顏へ油を懸たり、さて〳〵怪我とはいひながら勿體ないこと哉、去ながら是を幸に本佛にせんとて佛師に頼み、舟の光に九重座莊嚴奇麗に好み、箱佛にして崇、有し繪像をくる〳〵と卷、持佛堂の片角に押込置けり、其後此者頓死して黃泉に趣きしが、瓢々たる野原に出たり、爰許は何國にてあるやらんと心細くて徊けるに、向より光明赫奕たる御佛、紫雲に乘て來らせ給ふ、よく〳〵拜み奉れば、御面相に油かゝりて黑し、疑もなく娑婆にて崇し繪像の如來なり、大きに悅び御前近く跪、謹而申上けるは、私娑婆にて賴奉りし事なれば、此度極樂へ導かせ給へと歡喜の泪を流し申ければ、如來佛勅ありけるは、汝尤初の間は我を尊みけれども、みあかしの油を觀へかけ、其上持佛堂の隅へ押込て本佛をたうとみしなり、最早我はしらぬぞ、日來の九重座の本佛をたのめ、

地藏物がたり

砂石集、むかし鎌倉に或武士二人知音なりけるが、地藏を信じて倶に崇供養しけり、一人は世間貧しかりければ、古き地藏の相好も調らぬを花香捧て崇ける、一人は世間ゆたかなりければ、いみじく造立して厨子なんと美麗に仕立て、あがめ供養しけるが、此人先

立て世をはやしける時、まづしき知音に地藏を信ずる人なればとて、本尊を讓けり、悦びて今の本尊を供養して、年頃の古き地藏をばかたはらに打置て供養もせざりけり、ある時夢に此の地藏うらみたる氣色にて、

世をすくふ我も心にあるものを
　かりの姿はさもあらばあれ

古德の口傳にいふ、佛の眞身は無相無念なり、大悲本誓善根の身によりて、種々の形を現じたまふ、形象も應身の一つなり、然るに行者の信心智惠の分に隨て、木石の思ひをなせば、佛體もたゞ木石の分なり、木石をも佛の思ひをなせば、佛の利益有、恭敬の心も信仰の思ひも、誠にふかくまめやかに念頃なれば、生身の利益にすらしもたがふべからず、愚なる成にて輕慢のふるまひなれば、利益の用あらはれがたし、人をうやまへども、佛の御前にははなはだおそれずのみ世間にふるまふ、いかでか佛德をもかうぶり利益にも預べき、返々もをろかなる人の慣なり、

（八）坊主倒惑の咄し

去坊主二人づれにて、旦那の方へ齋に行、經念佛過て膳を出す、さいに酢韲有、酢かよくきゝたり、此二人僧前日に、酢鱠をひそかに拵喰しが、酢のきかざりしにより、それを思ひ出して一人の坊主、さて〳〵此酢でのう此酢でといふ、今一人の坊主も、されば〳〵といふて打うなづき食をくふ、亭主相伴しけるが、此酢が御氣に入侍らば、何にても御好みなされよ、只今こしらへてまいらせうといひければ、其時二人の僧倒惑して、此酢で素麵をたべたらよう御座らふ、

乙鶴丸物語

徒然草に、大納言法印の召つかひし乙鶴丸、やすら殿といふ者をしりてつねに行通ひしに、或時をと鶴丸外より歸り來るを、法印いづくへ行つるぞととひしかば、やすら殿の許へまかりて候といふ、法印又やすら殿は男か法師かととはれしかば、乙鶴袖かき合て、いかゞ候らん頭は見候はすとこたへ申き、など頭の見へざりけん、

是も推量するに、乙鶴丸女房などの方へ通ふとて、やすら殿とかりの名を付て、つねに〳〵法印の前を繕ひ置しに、男か法師かととはれしとき、倒惑せしと見へたり、

(九)虎平ばなし

去人伊達な名を付度思ひ、虎平と名を付けるが、ある時友達四五人同道にて參宮せしに、總中間として乘懸一駄仕立て、道の程をつもり、一人に五里づつのればよしと定て、道中を替々のる、虎平は六里乘れ共おりず、人々申けるは、最早おり給へ、定の外に一里過たり、乘替るべしといふ、虎平聞きて、我には不達者に侍る程に、合力にのせ給へといふ、いづれもいふやう、虎は一日に千里を走と申なれば、流石の虎平不達者には有べからず、おり候へといひければ、いやとよ我等は大唐の虎にてはなし、とら猫の虎なりとて無理に乘行、扨伊勢に着て、太夫殿にてさまざまの料理出ければ、虎平肴どもをしたゝか喰て、我等は猫の虎じや程に御免候へとて、人々の膳にある肴のわけをとり喰ふ、其時連の中に一人座敷を立、裏のはきだめに鼠の腐たるが有しを取て來り、猫ならば似合たやうに是を喰とて、五器の中へ投入ければ、あら膩やとて吐逆する、人々見て、さればこそへどをついたは、

無理の助物語

甲陽軍鑑、花澤の城門脇へ五人つきたる衆は、四郎勝頼公、長坂長閑、[illegible]和無理之助、初鹿傳右衛門、諏訪越中也、城の鎖子を無理之助揚られよと初鹿傳右衛門申候へば、矢鐵炮しげくしてあげらるゝ所にてなしと無理之助答也、そこにて傳右衛門立上り鎖子押上る、諏訪越中つゞいて、我持たるかま鑓を以てつきあげて歸る、傳右衛門越中兩人にて、無理之助が是足の上に着たるなはの羽織を剝取、以來無理之助とは名のらせまじと申、勝頼公あつかひ被レ成、繩の羽織は其場にて返し候、中略

一、此御陣中に甲州信州の信玄公本參衆より、歌をよみ板に書付たつる、

無理のすけ道理の介に名はなれや
むりなることをする身でもなし

寺院の號、さらぬ萬の物にも名をつくる事、人の名も目なれぬ文字をつかんとする益なき事也とぞ、吉田の兼好ものたまひし、

(十)道心者臨終の咄し

去道心者往生せられしが、日頃は隨分の人にて有しが臨終に屁を晞れたと語る、傍な人聞て、其やうな事もある事さうな、先年我等が親仁の臨終の時、去長老

さまの仰らるゝは、必々りんじうが軍じや程に、取はづし給ふなと親仁に返すがへ仰られし、しかれば取はづして死ぬる人もあると見へた、

張善和臨終物語

諸上善人詠、むかしもろこしに善和といふ者有、大唐の風俗にて牛を食する故、此善和牛を殺して商賣しけり、或時病に伏死ぬべき時に、牛餘多善和が枕本へ來りていひけるは、汝我を殺したりと人の物いふやうにいひければ、善和大きに怖て妻に告て、急ぎ僧を請じて我苦を救といふ、妻走り出て僧を伴ひ來る、僧則すゝめけるは、十六觀經に云、若人臨終に地獄の相を現ぜんに、十たび南無阿彌陀佛と稱せば、即淨土に往生する事を得んとすゝむる內に、善和申ける、便地獄に入ぞといひければ、僧香爐を取に暇あらずして、手にて香をさゝげて西に向ひて念佛しける、未だ十遍に滿ざるに、又善和申けるは、我阿彌陀佛の西方より來迎し給ふを見るといひ訖て往生す、

かゝる惡人すら、臨終の知識に逢ひて、極樂に生るる事有がたき事ならずや、又たのもしからずやと發露々々涙にて語るゝ、予が申けるは、嬉敷事を聞つる物哉、珠數をだに手にふれし事はなけれど、臨終には知識をたのみ天晴往生すべしといへば、友かぶりを振て、其心得大きに惡し、つねに念佛し給へ、頓死眼に遮る時人をまたざれば、いつを期とか知、又思ひがけぬ災に死せんも量りがたし、古歌にも、

夢の世にまぼろしの身の生れきて
露にやどせるよひのいなづま

はげしき無常の風、りんじうの知識をまつ物かはなど勸めらるゝ內に、八聲の鳥の告渡れば、暇申とて出られき、名殘は惜みながら又こそとて返しぬ、されはこそ噺は屁にて果侍り、物語の品々は玉を琢し詞成を、兒童の見やすからん爲に、をろか成毫に書穢し侍る、罪の遁るゝ所なき事を知也已、

延寶八庚申年中秋上旬　幸佐集之
祇園縄手大黒町
滿足屋清兵衛板行

囃物語下卷終

枝珊瑚珠序

珊瑚珠は毒を知らせ、喘しは氣をおぎなふ、しかしねりさんごじゆの益なき古文くさき物語は、なほ虚勞の病にもとづくならん、たゞしゐんにやか琥珀の塵を吸よりも、はやき玉の盃のそこつもの、腹のかわのうつゝなき口拍子にまかせ、田舎鶯の里なれぬ囀もまたおかしくて、春風の上氣にそゝりかきつゞくる、ありそふでなきは葉なしなれば枝ざんごじゆか、

枝珊瑚珠目錄

目錄終

枝珊瑚珠巻之一

(一)野父に剛い者　宜

譬ば葛西村に孫左衛門と云ふ百姓のもさひ、よしありて禪僧の來たりけるに、近所の人あつまりて、法のしめしを請たまわりたきなどとこぞつて申ければ、あら〳〵經論のさたし給ひ、たゞ念佛のほかによのぎなし、我宗ていは顯正悟道をもとゝするなれど、さとる事はならずと仰ければ、はるか末座にいねむり居たる久八と云頓飄者すゝみ出て、ひさおゝけれどわたくしはさとりましたと云、一座の人興をさまし、何事をいわるゝといへば、長老きこしめして、いやとよさにはあらず、野父に剛者むかしもその例おゝし、六祖は米ふみなれど悟道し、寺省禪師は七歳にて頓悟し、倶胝童子は十一歳にて省悟し、法演禪師は八十一歳にて大悟し給ふ、菩薩乘に曰、佛の稚義をしらんと欲せば、當にしせつ因縁を觀ず、佛法において遙に遠と思ひをなすべからず、その心ざしをつげざれば、未來永劫をへるとも、自心是佛することしる事あるべからず、その心ざしにつきざせんするときんば、一分において大悟たちまちに是あるべきなりとて、久八にむかへてらいし、さとり給ふ心はいかにといわれ、久八ひざ立なをし、此重箱の中は熬豆で御座らふと悟りましたといふた、

(二)しつたふり　女心

作内と云者、鄙人なれどよろづまめやかに、しらぬ事もしりたるやうに間を合るものあり、あるとき近所の人振舞に同道したり、彼作内仔細らしく、家つくり庭のありさまなどほめ、そののち龍と虎を墨繪にかきたるついたてあり、にじりよりて、是はなにさまただ人の爲にてはなし、さりとは見事なりと云、ていしゆこなたはめきゝもなるてふな、狩野隼人がかきたりといへば、また作内重ねてはなんで御座ると云、おどけた人かな龍虎で御座るはといはれて、主が龍下が虎か、さて〳〵御しんぷのかほには似ぬ子で御座るといふた、

(三)淺草並木の火事　鹿

ころは睦月廿四日、午の刻ばかりに北風はげしく、あさくさ觀世音の寺内より火事いでき、ひろこうじに

火の子をさばす、所の者神鳴門に來りなげきけるは、只今並木の家は一有ものこさずやけおち候べし、あわれ風の三郎殿、かせかわらせてたまわれかしといへば、風天もつともの事なれど、にし南は當社あやうし、また東風になをしたらば御城府におそれあり、とかく時のうんめいと仰ければ、そのきならば神鳴の御ちかいに雨をふらせ給ひ(ママ)かしといのる、かみなりあら丶かに目を見ひらき、ぼんぶにならはずとも雨はふらせたけれど、今日は御成日なれば鳴事かなわず、ならねば雨はふらせられずとて、風天と打つれ火よけの畠へひつこまれた、

(四)同僮僕のせき筆　　　　口前

何の某と云武士觀音へもふでられけるに、か丶るおりから火事を見とゞけてこそと、馬にむち打て四方をのりめぐり、やけたるあらましかきつけんといわれけれど、おりふしなれば筆硯もなし、口取り關介、やうじは御座りまするかといふ、ありといはれければ、たびのかたのやうに墨にて作りたるほうひげをなでて、硯は爰に御座りますとゆふた、

(五)同神鳴の狂歌　　　　宣

淺草觀世音の火よけの畠へ、風天神鳴二體ともにねせおきたり、若き者あざけり申けるは、風の三郎どのは扨置き、まづかみなり門と云からは、火事におふこそじせつなれ、せめてつげはありそふなものじやと、狂歌に

　神鳴の火事に太鼓はうたずして
　　畠の中へよこにねられた

かみなりむく／＼とおきかへりて、

　人並木火事をくゆるの淺草よ
　　神鳴とても風はさむらふ

(六)時のはやり事　　　　宣

神田めつた町に、德齋とてぬけたるかうやく賣り、いつも貧にてやう／＼ふうふのとせいをおくりけり、ある時女房いけんしけるは、そなたのやうに氣のはたらきなき人は、一生があひだとぼしくくらすものなり、世間の人はりはつにて、おなじかうやくをうれど、喜三郎かかうやくすべ／＼となをるなど、かわりたる事云てはやらかす、そふべつ何にてもはやり事をしだせばもふける物なり、おり物にさへいちのやおり、さんやれおり、そめ物にも延寶年中にそめい

だしたりとて、ゐんぽうぞめあり、きんねん好色とゆふ事がはやれば、好色ならちや、かうしよくたばこなどと云、ちとはやりごとを云て膏藥もうりやれといへば、徳齋しごくして、その翌日より箱をかたげて、萬膺膏藥と云まいものでも御座らぬ、しかしゐんにやかと云て賣ありくほどに、人みなきちがいそふなと云た、

（七）駒掛の猿屋　　流　倚



淺草駒かたに猿やと云饅頭屋あり、お出入の御屋鋪に御祝言ありて、こなたの御姫樣どなたへお輿がいると日間さだまり、諸事御やうをさゝのへけるに、御用人とりぐ〜さたし申されけるは、此度の御菓子は、かれが所にてとゝのゆる事、御祝言にさるや不吉なり、ぜひうりたくば家名をかへよと仰ければ、かしこまりて候とてかへり、猿に扇をもたせたり、御屋鋪衆來らせ給ひて、いへなを替ますると云たが、もとのさるじやと仰ければ、ていしゆなるほどかへました、さるがあふぎをもちましたれば、猿舞屋で御座りますとゆふた、

（八）付るくすり　　宣

赤坂傳馬町に、豊田やと云ふげんの者あり、子二人もちたり、嫡子を案太郎、二男を案二郎といへり、案太郎はむまれつきたるうつけ者なれば、そうりやうつぎがたしとて、隣町田町に店持せ、案次郎につとめさせける、ある時すこしの出入ありて、名主より豊田やが戸をしめられたり、近所の人案太郎が宅へ見まいて、御親祖さまふりよの御座るよし、申ても御一所の事なれば、とかくおこしなされて、よきやうに御だん

がうあれかしとよ、おやご斗の苦勞にはなるまじといゝければ、もつともにおもいけるが、行て親祖に向へ、◎こなたひとりの苦勞にもなるまい、見せをあけて商ひをなされ、かへりましておれが所の戸をしめておきませふと云、おやちあきれはてゝ、そこなうつけもの、そのやうなじゆふかなるものか、馬鹿にはつける藥がないといへば、案太郎ぬからぬ貌で、あつたら賣ませふといふた、

(九)はなしのほん　流下

與九郎と云在郷ものをおきたり、雨中のつれ〴〵に、咄しの本をもとめてこいといゝつけて、鳥目三百文わたしければ、かしこまり候とかけいだして、翌日かへりけり、いかにしておそかつたとて、さん〴〵しかりければ、ほんになさるとおしやるさかい、ずいぶんぎんみいたしました、一つあるか二つあるか、はなしはまれな物で御座る、やう〳〵もとめましたとて、八十ばかりなばゝをつれて來た、

(十)緣喜の文者　宣

長崎町の邊に休德と云者あり、たのしき物にて金をかして世をたのしむ、されども無筆不知惠なる事あさまし、さる方の內儀よりきうとく女房のかたへ、はつ春のしうぎに文おこしたり、休德よみてきかせよといへば、女房なに〳〵とよみて、目出たくかしくと御座るといへば、ていしゆ腹をたてゝ、ものをかきてもぶんをしらぬ、目出度借し苦とは何事じや、かして苦をしてよいものか、返事には目出たくかさぬ德とかいてやれといふた、

(十一)旅の雪隱　口青

江戸しな川町の者、京都へ用の事ありて上り、かへりにぬまづの宿にてひるやす（み字脫歟）して、雪隱に行けば、また江戸より上りの者二人づれにて來り、獨を門にたゝせて、となりのせんちにいりたり、壁のくずれよりみれば、わが同じ町のものなり、彌介どのかことへば、たゞいま御かへりなされますか、御宿にても何事も御座りませぬ、よいところで御めにかゝりましたと云ふ、かどのはつれしうか、つれで御座ります、それならちとよせませふものをといはれた、

枝珊瑚珠卷之一終

枝珊瑚珠巻之二

(一)田舎の飛脚　宜

かた夷中より用事ありて、京都高家方へ飛脚をつかわしけるに、公家の御名はおぼへがたしとて、ひきごとにておしゑける、成ほど心へ候とゆふて、東の洞院をのぼりに、新在家下の町通に小川坊城どの丶門に行て、くげしうの御屋敷はこれで御座るかと問ふ、番の衆ゑせたるといやうさおもひながら、さきはどなたときく、空をとぶよふな名で御座ると云、さては鳥のたぐひなるべし、飛鳥井どのかといへば、そのやうな名では御座らぬ、いたづらなとりで御座ると云、さては烏丸どのかといへばまだいたづらじやと云、鷹司どのかといへば、まだいたづらな鳥で御座ると云、鷲尾大納言どのかとゆへば、そのわしどのとてかけだへた、

(二)萬日のかんばん　宜

元祿三年三月十一日より廿日まで、淺草淸水寺に萬日のゑかうあり、江戸中の貴賤くんじゆをなす、ある人ゆいけるは、御當地の萬日きんねん回向お丶し、されどもこのたびのゑかうの師晃岳法印は、名僧におわします、二王門の前なる三十三間堂の面に、きたひのかんばん出たり、さだめてりうとうのたぐひなるべし、萬日光物色々有りと、くろぬりの掛判にかきつけいだしおかれたりとかたりければ、人々ふしぎのおもひをなしゆきて見るに、さのごとし、しさいをたづねければ、よろづ日光物いろ／＼あり、とゆふかんばんじやといふた、

(三)新橋のかみゆい　不笑

新橋のはしづめに、彌太郎と云床髮結あり、このごろ八王子の者を弟子にとりて置ける、おりふし山の手の角内、あたごまへりのかへるさにたちより、さかやきをすらせける、彼しんべいあたまよりそりおろして、まつ黒につくりたてたるほうひげ、かた／＼ずらりとすりおとす、角内おどろきて庭中におどりくるい、孫六が打たる二尺三寸ひきくつろげ、我十三年此方、此の鬚のちからをもつて、七兩二分にきずをつけず、ひげなくては壹兩の金もとりがたしと、とび色のこわねをいだして、はしくづれよとひしめきたり、彌

太郎蝶鳥のごとくかけ來り、御もつとも御座る、とかく山だしの田舍者、御ゆるしこそと金子三兩いだしてあつかい、やう／＼に返しける、しかるに肥前の國より江戸見物のためにくだりける沙門、おわり町のほとりによしありて下けるが、江戸入なれば彼者にかみをすらせける、三百里の永旅に、ひげさかやきのわけも見へわかぬほどはへければ、心のまゝにすりけるほどに、みぎの角内よりなをいさぎよきやつこにぞすりなしたり、彼坊主きもをけし、是はゑせたるしわざかな、此のありさまの入道なれど、方十町の景臺、八間四面の本堂、三十二間の廻廊あり、百三十石の寺領を持て、ゐにふせらるゝ身なれども、江府の錦城おがまんため、忍びてくだる老僧を、なぶると云は江戸ならいかと、はつたとにら見ていかりける、かのじんべいぬからぬ貌で、またすらせて金をとらふと云事か、もはやくわぬといふた、

（四）五尺てぬぐい　宣

越後の旅人はいせ町に宿をとり、佐渡のたびうとは小ふな町に居たり、ゑちごのたび人こめかしのはしにて、ながき三尺てぬぐいをおとしけるを、佐渡のたび人ひろいける、此方の三尺てぬぐいなりと云、是は三尺てぬぐいにてはなしとあらそいけるほどに、橋のうへにてしばしはりおふ、兩町より立合ひきわけれども、いまだせんぎひず、とかく名主殿に申てこそと、兩方の名主立あいてやうすをとわれければ、越後の者、わたくしが三尺手ぬぐいに、まぎれ御座らぬと云、佐渡の者は五尺てぬぐいなりと云、ながそめたるがしやうこなりとてかへさせ、いせ町の名主いわれけるは、さどのたび人も此ゑちごのたび人とは、筋向に宿とりながら、あらそわるゝわけもあらじ、小ふないよこのやどがわるいにきわまつた、宿がよければ名もたゝぬといわれた、

（五）さいたいゑん　流下

牛込の邊に、日下見現さてかびたる牢人あり、齊大圓と云めいほうをおぼへて、常に賣り薬してとせいをおくる、日蓮宗にて殊外なるしんじやなり、諸宗にすぐれたるくすりなれば、是ひとへに法華經にひとしきとて、

諸教十王最第一四十餘歳未顯眞實とゆふもんの心を、くすりうり言葉にませて、しよびやう十方さいた

いゑん、四十四色見現が解毒、ほんもんしゆりやうの南無めう凰髓丹と云て賣りありく、法花宗はかれがくすりをのむこそほう／＼なしとて、ことのほかにうれたり、となりに彌五介とてほていふり、つねに芝肴うりて世をわたる、かれは淨土宗門にて、見現とつねにしうろんやむ事なし、彼みけんが法の力にて、くすりのうれる事をそねみて、わが賣るさかなにもよびくせをつけたり、鯵十疋三文づつ、鮪いつさい味噌こくせう、鯑八文しよしやうくわん、かいせあみしやこはと云てうるほどに、日蓮宗はいやらしとてもとめず、念佛しうはもつたいなしとてかわず、ふつと賣なんだと、

(六)火の見やぐら　　梅女

中小姓らしき侍本町を通りけるに、町のなかばにてせきだのはなをふみきり、おりふしうひ草履ももたせざれば、僕におゝせて、此あたりでぞうりあきなふところやあると云つけゝる、作介かけまわりて見れば、時しも春の風しづかに火の見やぐらの太鼓もおとなくて、番の者ぞうりをつくりてつるしおきたり、作介下よりその草履かわんとゆふ、十二文なりとこたゑければ、錢をつゝみてなげ上げけるに、つるし置たる鉦にしたゝかに打つけたり、町人肝をけして、いづくに火事やあるとあしを空さまになしてさわぐ、番の者氣のごくにおもひて、いやつゝみてなげましたと云、さてはつけ火なりとていよ／＼さわいだ、

(七)しまつの繩　　長子

大坂町の裏店に、佐五左衛門とて隠れなきしわ者あり、なわを見るとたとへはきだめにありても、不動のさずけなりとていたゞき來り、よりわけてやねにひしとほしおくこと小山のごとし、ある人來りて、この繩のあたらしきはことはりなれど、ふるきは何のやうに立ととへば、古きをつぎてあたらしくしますと云、此くさりたるはと問ば、くさりなわにもとりへとて、すだにきりまするど云、しかしひろい給ふはよからず、人のとりさたあしくいけんしければ、御ゐけんはかたじけなけれど、人は一代繩末代と申からは、そまつにはならぬといふた、

(八)酒屋の八藏　　流侚

かうじ町六丁目伊丹やが内之、越ヶ谷と云在郷より十八九なるでつちをおきたり、まめやかにはたらきけ

れば目をかけてつかいける、有時酒樽ののみぐちをあけさせ、酒をだせと云つけゝれば、口はあけましたれど、酒は一しづくもでませぬと云、ことはりなりあたまにきりもみをせよといわれて、上に錐もみをするよりはやく、みなぎり落る瀧のごとし、八藏よりぼうほどなるなみだをながして、しばしはおきもあがらず、ていしゆおどろきて、いかなるゆへなればとしさいをとへば、酒につけておやがなつかしう御座りますと云、わが親祖は上戸であつたかといへば、いやわたくしがおやはしやうべんがつかいてしにましたが、おやさへいきておれば江戸まで奉公にはまいりませぬ物を、しりませいでのこりおゝい、あたまにきりもみをしたらば、しぬまいものをといふた、

(九)笠着俳諧　宣

龜井戸の天神に、毎月廿五日に俳諧あり、かさぎとてたれと見わかぬやうに、あみがさふかぐゝときて、數百の人口をそろへて云ほどに、そのころおびたゞし、宗匠執筆是をあらため、あしきは返、句よきをかきうつす、懐紙なかばへて、

水にしん苔や空の月影

と云前句に郭公と五文字を云、しゆひつ、季がちがへ候といへども又時鳥と云、そうしやう、まへ句月の句にて秋なり、蜀魄は夏なりといへどやまず、杜鵑と云、しゆひつ請て、

子規鳴ころ植し田を刈て

(十)稻荷の笠着　宣

しんざいもく町稻荷の神前にて、かさぎはいかい有しとき、前句

胡蝶のひげもいひはいわるゝ

と云句に、おふせいの中より秋の鹿と云り、さきのごとく季ちがひなりといへど、くりかへして云うけて、

秋の鹿春にもちゆる江戸かのこ

右の二句は珍句なればかきしるせり、

枝珊瑚珠卷之二終

枝珊瑚珠卷之三

(一)理くつの思案　　宣

ある人麥飯の一汁一菜の約束にて、近所の人を振舞ける、ほどなく料理出たり、ときしも五月なかば、筍羹にとろゝ汁なり、二十ばかりの男しるの蓋をとり、また菜のふたをとりて、いづれももとのごとくふたして、食ばかり喰人あり、ていしゆ是はいか成事なりとゝへば、此とろゝは山の芋で御座らふと云、なかなかといへば、此しゆんかんにも山の芋が入ましつらと云、さてはやまのいもおきらいかと問ふ、私は丑の年で山のいもはたべませぬ、うしにやまの芋はさじ合かといわれて、さては御存じないそふな、丑寅の歳は虚空藏のけたいなり、山の芋は泥鰍に成と云さかいたべぬと云た、

(二)はんじ物　　鹿

中橋の南がわに、三尺許の黒き勘判に、白くありくと上々二挺立とかきたり、ふしぎなる事におもひて立より見けるに、淺草苔なり、氣の通りたるかんばんとおもひ行に、あさくさに壹間のみすすだれに、無類薩馬ありとしるせり、すだれの内なれば、是はいかなるものやらんしれ難し、いかさまさききやうなるはんじ物にこそとおもへて、すこしもとめたきといへば、葛西海苔をいだして見せたり、

(三)淺草觀音の利生　　流倚

本庄二ッ目に安樂と云町人あり、うき世の世話をしもふたや隱居してすめり、我が此世のおもいでに、稲荷の宮のこんりうをねがひけれど、六十に餘りて明日の命も知れがたし、また命の内にじやうじゆせざれば、後生のさまたげなり、とかく淺草の觀世音は、らいけんあらたにましませば、建立の内壽命をのべたまへといのりけるに、七日にまんずる朝た、鳥目百錢ひろいたり、安樂よろこびてかへり、女方孫子若ひ者あつめて、われじゆめうをいのりけるに、はしたにもあれかし百までとひろいたるこそうれしけれ、むかしもしゆんじやうぼう、諸國をくわんじんして大佛をこんりうし、大伽藍のくよふせしに、六十にあまりければ命あやうしと清水にいのりける、莚をひろいて二十をのぶるとの御ちかいとよろこびて、ねが

いじやうじゆせしためしあり、有がたき御つげと上下ざゝめきわたる中に、譜代の久藏一人涙をながす、人々たちよりてかほど目出たきおりふしに、いかなる事なりとゝへば、久藏申けるは、莚をひろい二十を延とはんじ給ふは事なり、百を百まではとはんじるでは御座らぬ、大かたころりとしなしやらふと云事で御座らふと云た、

(四)吉原ほめ言葉

山の手のよし樣と云御方、いつもおくつに參りける、下谷池のはたに住む唐物やのすけ、一ヶ谷の大樂院山常陸より行通ふ百姓に、兵次かれこれをめして、今日は麗天にして蒼穹の雲しづかなれば、いざや色里に足をとばせ、榮花のはな見をせんと、淺草舟に艫をはやめ、眞土山の月をかこち、今戸川のふち瀨にせまり、おせさゝさつと舟宿につけば、戸手の上風うわきにまかせ、ゑもん坂をひきつくろいて、君がやきてに大門口、江戸町二丁目堺町、角町しん町京町の、これぞまつたくなかの町、六道のちまたに待合の辻、上屋町の角に門だちして、言葉の和氣の花いかだ、ながれの君の御すがた、ちつとこなたでほめもうそふと、

よし樣　太夫格子ほめ言葉

靑陽の朝より高尾のもみぢはいろをあやし、やなぎのゑだのみだれがみ、照るまゆずみや四方拜、かすみまばゆき薄雲に、たなびくまつやあいおいの、くらいあらそふたゆふさま、けんごに〳〵御おつねんき、ゑつぼとんとあさからず、そのおもかげのかわらぬは、げにとこなつのかきつばた、小紫のいろまさり、ほとゝぎすの初音より、なをちんちやうな西尾の君、これぞ和國のまれ物と、唐國までもゆふ志賀野、みよしの山戸とは、ちぎりてぞしる花崎の、花をふんではおなじくおしむ柏崎、ともしびをかゝげてはよせいしらるゝ千年の君、和歌山のみちひろく、ときしりがほの朝霧は、このはいろづく丹州と、いわでもさとるつまべにゝ、すこぶるきみは小若佐の、月のひかりや小更級、こいにぞひらく白菊は、ふゆも常磐の和歌松と、ゆきのうちよりはなふくむ、梅が枝にかほるかせ、四季のはなさくあげや町、おゑどの花里とはゆふまい物ではは御座らぬ、

(五)町人　局ほめ言葉

江戸町のきやく立さらでのみ、角町のしやみたゆる

ことなし、げにや女郎の手くだには、局こそなをおもしろけれ、たつとからずいやしからず、けふのよるべはきぬ〳〵に、かわればかわるかねごとも、ちぐさにかこつ思草、その女郎花のいきはり合、そなたこなたの佻くらべ、かごとばかりの僞り、いわでの山のいわつゝじ、それとそいねのゆめだにも、うつゝとはせぬさよ衣、つまごもおもふ身ならねば、うらみあらじすがたのはな、ぼんのふ〳〵さめがたき、ぼたいのための金仙花、やればたのしむ商人の、正月やうにかごかごを、のぞくばかりのれいてんぐ、かけてもとらん三重の帶、とけてはとつと情あり、つくまゝつりのなべならで、手鍋さげてとゆふしでの、神の名にたつちぎりだに、かわればかわる君ごゝろ、きのふと今日と飛鳥川、てくだはくわぬ通り者、しよじせはなりと夕霞、おもひは今宵一夜妻、そうばく〳〵に程をたてゝ、わずか五匁三匁、いつときのゐいぐわにわ、千年の君になずむこんだ、

（五八）山伏　山茶ほめ言葉

陰陽の昔日は、空々として寂々たり、ほこのしたゞりこりかたまる、そのみなもとはふたはしら、いま我朝にはびこつて、人間のゐいぐわとす、ことにおさまる御代の春、はなのお江戸の和氣の里、そのいろ〳〵のしなさだめ、上には太夫格子の君、下に局やなみつぼね、くわんじやうおろし奉る、なかにもたつとき御女郎、山茶の君とあらはれて、まづしん町に三浦屋の、名にきゝふれしこしきぶ樣、すみ町の女郎には、まんじやの藤浪樣、くじやくやのわかな樣、めうがやにはつせ樣、ふぢやの内にふじの樣、つたやにきゝし大くら樣、ひしやの君はなか島樣、まんじやのむらさめ樣、かゞやに見たる花月樣、山やの内のこさわ樣、うづらやのゆきへ樣、名にこそたてれ江戸町の、二丁目出たきひだりがわ、たわらやのこきん樣、きりやの内にみゆき樣、いせやにきてはみはな樣、はなやの名あるはなよ樣、四つめやにきんだ樣、ひらのやにゆきへ樣、ひしやのうちにいづみ樣、ゐいらくやにてはつね樣、つのくにやに小太夫樣、まつやのきみはたかまつ樣、またみぎがわに名をゐたる、あづまやのかつま樣、まんじやのよしの樣、山田やの小太夫樣、あふぎやのゆきへ樣、中むらやにいちはし樣、むかでやのあかし樣、すゞきやのきんだ樣、かりがねやのとやま

様、さごやに名あるみよし様、ひやうごやのたまかつら、かぎやにふるき瀬川様、いせやにきゝしさかた様、さもへやのみゆき様、まつや内によし松様、そうじてさんちや三十七けん、其しんぞうの君達まで、七なんのやぼをさつて、七福の大臣をけないにしつかとおさめ、女郎はんじやうの御きねんと、

(七)百姓　ほめ言葉　なみつぼね

錢こぞ契る御契錢、百姓の身にしあれば、たよふかうしのつめひらき、それとばかりもきせちなし、まつた讃茶のやかばねの、てるばちない二階にて、ちやうしゑんをくやらかし、わんぼうに香をとめて、いしくもあらぬいきばり合、局の君がおさぼねの、ゑこせぬくせりもかしがまし、一疊半のおへやずみ、あしをばかりに一里塚、つかのま君と伏見町、かしのいよこの女郎たち、きせるくわへてつぼつこい、まなこのしほのしほらしや、ゆへばいわるゝ江戸かのこ、こくもうすくも紫の、色をぞたのむひとへおび、五尺てぬぐいなかそめて、そめも染たよ京町の、三浦まがきのすじむかい、いなりやしきでうつぼれた、おもいはこれもおれがつれ、とづてもてこいかきのれん、色をも香をもしる人よ、たゞしゐんにやかそれとても、せずやうがないやぼすけの、めつたやたらの太鼓もち、うつほどのびるそば切が、けんどんの君にほだされて、さいこく西國さいこくしゆんれ、むねにきふだのたゆるまもさんやれ、

(八)火の見番　流下

岩井町のひの見やぐらの下より、過しころすこしけむりもへ出たり、されどもはやく見つけてけしたり、町人むれあつまりて、鉦はうたぬさいへば、火の見のばんのものはいかにして、鉦はうたぬさいへば、火の見のばんのものはいかにつねぐ名主さまのおゝせつけに、遠はしづかに三つ打べし、十五六町近邊ならば、しづかにひさしくうて、もし隣町ならば、なるほどきびしく打、それぐにおゝしてこあれば、下よりやけ出るには打べきやうなし、鉦を下へなげましたと云た、

(九　扇子の發句

彌生の半ちり殘たる櫻も、朧月のおもしらふ冴たる宵に、友だちかたらいて、世中のうわさはなして遊びおるうちに、ほと奈良茶やうのものいだして、下戶ならぬこそ咄にはよけれと、盃のかずかさなれば、こと

のほかあつしと、ひざまくりはだぬぎなどしける、ていしゆいつもたばこの火もうるさくなりて、扇にころうつりかわるとき、うらさる御屋鋪へ團扇のたぐいつかいものにするとて、ひとへよりおゝせておきたり、今宵のあつさに何もひまいらせん、扇の發句と望みければ、

神風や二見が浦の金扇　雪子

破ても扇子は腰の力かな　清

冷しさは氣にさからはぬ扇哉　宣

(十)與九郎が意　短才

ある人水風呂をたきて、近所におわしける出家衆をよび湯に入たり、與九郎と云下男、ひたもの火をたきけるほどに、あつさかぎりなし、僧いかなればかやうにたくぞ、いまじぶんの湯はぬるいがよし、しよたいもしらぬ者かな、だんなのためは思はぬかといわれ、與九郎、御前の入しやましたさかいたきまする、今日はわたくしが心ざしの口で御座りますとゆふた、

枝珊瑚珠巻之三終

枝珊瑚珠巻之四

(一)文盲の狀　口青

青山宿久保町と云所に、彦左衞門と云者あり、八町六段の田地をもとめける、下町銀座町によしのものありて、金を借につかわしける、むひつなれば近所の人をたのみてふみかゝせける、いよ〳〵御堅固に候哉とかけば、此田地は下田にてねだん安き所也、ごけんごとかきては合點せまい、せめて十間小とかいてくだされと云、いや是は利足のことではなし、御そく才かと云事じやと云て、かれこれかきしまいて、とめに貴面のときをごし候とよめば、金をかりながら木面どころではない、金面とかいてくだされといふた、

(二)遁のそゝう　宣

淺草並木の火事本庄へとびて、日くるゝまでやけたり、隣町の番太郎おきかきを持來りて、あまりさむし火をひとじうのふたもれとて、とらんとせしとき、くらのわきに居たる彌五介かけ出でて、さん〳〵にしかる、ばん太郎はらをたてゝ、しわいやつがあるもの

じや、これほどだいぶんの火を、何にしやうとてくれぬぞ、おのれ見をれ、こんどおらがほうの火事に、火をやるかといわれて、彌五助、これも淺草からもろふた火じやとゆふた、

(三)淺草むし蕎麥切　　流侚

淺草駒掛のけんどんむしそばきりを、やつこうちに入ておもふさまにくらい、あたへなければとかくこちてこそとおもひ、時がらなれば蠅二三疋とり、かの茶わんに入て亭主をよび、大の眼に角をたてゝ、だいじの錢をいだしくふ物に、此ごとくはいをいれ毒をかふ事やある、我そんじやうそれが家來なり、屋鋪へきたるべし、わけをたゞさんとゆふ、ていしゆさわがず、御もつともなれど、其ためにかんばんにも、むしそば切と御座ると云、扨はむしとありて虫を入ば、そば切ならばすこしそばを切んと、脇指ぬきてひらめかす、近所の者二三人かけよりて、したゝかにうちける、やつこいよ〳〵はらをたてゝ、むしそば切に虫あれば、そば切をするに此たゝきたるりくつありやと、あらゝかにいへば、さやうにむたいなる人はゆるさず、手ぎつければけんどんと申とゆふた、

(四)無筆の醫者　　似鹿

下谷に案伯と云いしやあり、一字をひく事もならねど、いしやのむひつはあしきとて、物かきのやうにもてなしける、菊月の節句まへ、さる人餘所へつかへを遣はしけるついでに、案伯へよりて藥をとりて來れと云付ける、使の者雉子つがへかごに入てさげながら、手紙をあんはくへ渡す、ひらきて二三度うなづき、つかへの者にむかつて、きじつかいやり申と文にありと云、いやこれはよそへまいりますといわれて、またてがみをひろげて、ことわりじや、なを〳〵がきにやらぬとあるといふた、

(五)やつこのかごかき　　鹿

三月五日のでかわりに出たる、作介角内云あわせけるは、ことしはおもひのほか思ふやうなる口もなし、當分のかせぎに、品川口にてかごなりとかきてこそと、籠一挺もとめて往來の人待居たり、廿餘りの男とをりがけに、かごは日本ばしまでいくらとといへば、三百と云、廿四文でやらぬかと云すてゝ通りける、二人がゆいけるは、今日はじめて出たるに、はつかごかりをかさぬはぎゑんわるし、のせてこそとよびもどし

たり、のりて半町ほど行すごし、かごまてと飛出、おれが親祖がやすきものはよせといわれたり、日本橋までは二百でなければのせぬこころを、廿四文ではくちすぎもないはずじや、かごかきがぬすみものにきわまつたといわれた、

笑　口

(六)撝判の見そこない

田舍もの龜井町によしありて一夜をあかしける、旅のくたびれやすめながら、湯にいりたまひと云、いづくにあるやらところしれずといへば、江戸はなににてもおもてにかんばん御座ると云、扨はやすしとて外へ出、三四げん行てかつばやの見世にきる物ぬぎ、はだかになりてないしやうへはいる、ていしゆおどろき何事なりと云、たびうござわがぬけしきにて、つねの湯はめづらしからず、とうゆにいらふとゆふた、

口　計

(七)八内が出來立

有る人すきやをたてたり、萩垣など物ずきにして、雷地に二三間根笹をうへける、廿日ほどへてすきとかれたり、氣の毒におもひて、なんぞくすりもありそうな物じやといわれければ、僕の八内きんじよの宮内どのよびて來りける、ていしゆ、よく御出なされましたといへば、只今は御使いかやうの御用かと問ふ、わたくしは申つけませぬがと、八内をよびてといへば、笹がかれましたに、藥がほしいとおつしやつたさかひ、宮内樣は藪醫者と申まする、御藥をすこしくだされませいと云た、

似　鹿

(八)不審の行燈

本挽町つきじに、常にしたしくつき合牢人衆、以上六人をあんどぐみと云、ある人ふしんしけるは、いづれも樣をいかなればこ行燈組と申とへば、かれこれみな總髮なり、四方紙とゆふぎりじやと云、五人はそふがみなればきこへましたが、獨の坊樣がてんゆかぬといへば、あれは聚あんどんで御座ると云た、

似　鹿

(九)蹤目公事

南傳馬町に何がしと云て、七八百兩のぶげんなり、死病のがれがたく、過しころ相果たり、しかれども十八九許なるやうしの子一人あり、後家はとかく嫁もとりて、あとをくずさぬやうにといへば、子は蹤くずそふと云、さまゞきやうくんしけれどきかず、おやと子と公事になりて、名主へ此事をきかせければ、親子共よびて、母おやのあとをたてんと云に、いかにして

やうしの身にて、子はくずさんとゆふぞと、さん〴〵しかりければ、子の申けるは、仰はさる事なれど、わたくしが所には、馬が三疋御座りますと云、それいかなればとゝへば、親祖つね〴〵かるた打ながらも、馬が三びきあらば、かならずくずせといわれましたとゆふた、

（十）天狗の奇瑞　　口青

四つ谷に孫作と云者、ぐわんらい生れ付たるおくびやうにて、四十にあまれど物おじをしけり、さるほどに杉の木には天狗のすむときゝて、杉さへ見れば禮をなしてとをりける、あるとき高井戸村までやうありて、黄昏時に原中をかへりける、杉のなみ木にありければ、しばらくこしをそらさず、上よりしわがれごゑにていひけるは、ぼんぷの身にて、おれが居る事をしりたるこそやすからね、ことに禮をなす心ざしのやさしければ、すがたをあらはせ給ひ、不老丸と云くすりなりとて、三粒くだされける、そも〳〵此くすりは若き者にもちゆべからず、一粒のめば十二年づゝわかくなる、そくさいゑんめいの薬と仰ける、ありがたしといたゞきて、一粒はのみたり、女方男のかへりたるを見れば、四十にあまりけるが、三十より内のおとこにぞなりたり、女方きもをけしてしさいをとへば、あらましかたりて、此くすり一粒のめばひとまわりづゝわかくなる、せがれわずか十なれば、のむとなくなるぞ、わ□れもいまだわかければ、見もすることなかれとて、かけ硯に入おき錠をおろしおきたり、女方ていしゆの留主に、いかなれさやうのことはあらじとおもひて、一りうのめばそのあぢかんろのごとし、のこり一粒もくいけるほどに、廿七の女方が三つになりて、いろりばたに茶を立居たるこそ、男かへりてきもをけしたりとなり、

（十一）蜆（しゞみ）の折檻　　流下

去年の冬、十二三になる田舎出のでつちをおきたり、春になりて親來りければ、旦那申されけるは、そなたの子ながらも、さりとてはあの竹藏めはぶせうなやつじや、毎日湯せんだくもさすれど、蜆（しらみ）がだいぶんたかるとはなされければ、さて〳〵にくいやつで御座りますと、さん〴〵にちやうちやくする、下人共ひきはなして、せつかんのところへわゆかぬ、いけんをしたがよいといわれて、まことに花のお江戸へまいり

て、湯水風呂に入ながら、何としてしらみがたかるぞ、おれはなん年にも湯をあびたることなけれどもといひながら、ゑりをひろげてみせければ蜆あり、ごふりで御座ります、あれもわたくしも白山權現のうぢ子で御座りますといふた、

枝珊瑚珠巻之四終

枝珊瑚珠巻之五

（一）奇代の身なげ　流倘

三十にたらぬ男、兩國橋に身をなげたり、所の者ひきあげて見けるに、右の手にとうがらし、左に竹をもち、赤き足袋をはきて、下帶もせであり、人々いかなるしよぞんありてかくは出たちたらんと、とり〲さたする中に、わたくしかんがへ見るに、唐芥子はともし火、あかきたびは愚人なつのむし、とんと火に入心なるべしといへば、通りかゝりたる牢人、それにてはいひたらず、とうがらしはからき物、竹は世中、下おびはまわし、たびはあしもとなり、からき世中にまわしはならず、あしもとのあかいうちにとゆふこゝろじやと云た、

（二）しんべどの　宣

下町に住ける新兵衛と云もの、吉原に行てかゑりに、道すがらもひとつしてこいしんべどの〱とひたもの云、しんべいきのご〱におもひて、とかくはやりごと江戸中のしよにん云はやらかす事なれば、とめん

事大水を手にてふせぐなるべし、佛神をいのりてこそと、淺草とうこうゐんのやくし如來は、むかし傳馬町にまし〳〵げんぶしやなりときくとて、御佛にまいりて、此ころのはやりうたに、
見ればたらふくつるてん〳〵、たらふく〳〵たんたらふく、
なぜにこじよろはでてあわぬ、しんべどの、
と申て、我みのやうにてめいわくに御座ります、ねがわくは此歌やめさせて給われかしと、其夜はつやしける、うしみつばかりに、御格子のうちよりひかりさして、あらゝかに人の云事はせひなし、我佛なれど野郎は藥師のきらい物といへば、此ごろ陰郎退轉したるも、われゆへかとうらみらるゝこそいとかなしと仰ければ、さてはほとけはじひふかし、神にいのらばやと長田ばゝにまいりて、山王權現のいのり奉る、是もみとしろの內より聲あつて、山王のさくらのきに、猿が三萬三千三百三十さがつたと、われはばかりならず、つかわしめまできやりにゆへど、いかにせんとあれば、とかく神のつかさなる太神宮をいのらばやと、芝の神明ゑりうぐわんせしかば、ありがたくも童子一人あらわれさせ給ひて、人の口には戶もさゝれず、我さへゆるさで酒のみたる者を見ては、天照太神があがつたと云、九月のまつりもしんめいまつりとはいわで、目くされまつりと云、伊勢はしんめいの總名なり、此ほどまたふるきうたをおもひ出して、伊勢のおたまはあぶみか、ちよいとくらかさうたふ、凡夫さかんに神たゝりなしと仰られた、

(三)九々の神鳴　　　　口前

かみなりにおそるゝものあり、やみの夜のよばいぼしにもきもをけし、秋の稻妻に氣をうしなふ、ましてごろ〳〵となるおとは、たましい身にそわず、ある人ゐけんしけるは、雷のなるたびにおつる物にはなし、それかみなりは山々に六十四あり、言ばをかけてもおつる事なし、五六々々云は三十の鳴音なり、八八と云ときばかり、六十四のかみなりみな出たりとおもひたまへといへば、さてはけんいちはおぼゑずとよいといふた、

(四)和氣の小衣　　　　宣

新吉原二丁目松屋の阜衣といふ遊君あり、蜷川氏清樣と云人に深く三歲世のなじみ、すへの松山と眞土

山にちかいて、角田川のふかき底意を都鳥にことよせ、まつ宵の月はおのづからくもり、きぬ〴〵のわかれは、鐘つく人をきつねはめなどとかこち、おふさきるさのさゞめ言は、秋の夜もみぢかく、おもふ人のきませじと、思わぬ人にそいねの時は、夏の夜もあけかぬるとぞくるしみける、此ほどいたわりの事ありてほどへ、佐野のふなばしわたりなければ、たよりいかにと松浦がたにあくがれ、袂は海士の袖かとうたがふ、さればとてつとめの身なれば、今日のちぎりにたわむれ、その事となくおりし時から、しよやの鐘のいまだみゝふれぬに、籬におとづれありて清様ときけば、たち居てかなわねばこそうき世なれ、今宵はさわりあります、またの夜にこそ待まするを、相思草すいつけて、見物もめづらしからぬに、此きせるもたせられて、かへらせたまへとさしいだす、蜷川氏清とりあへず、

逢までをまつや思ひのけぶり草
今日の情にきせるさごろも

まつやの皐衣返歌

蜷川の淸きにあらふやぶれぎぬ
ながれの末やむすぶ皐衣

（五）人の情

有る人座敷を立なおし、近所の人を新宅へ申入てふるまいける、酒なかばに内方出て、なにも御座りませぬが、しんたくを御馳走にさゝひとつまいりませといわれければ、一座さりとてはお物入で御座らふが、けつこうな御ふしんで御座ると云、内方、うちのちからばかりでは御ざらぬ、みな近所のしうの御かげじやと云、與茂作かへりてはなしけるは、それどのゝ内儀は、さりとはくわをいわぬりはつな人じや、あのしんだいでたれにごうりよくもゑらりやうぞ、これこれいわれたりとほめける、女方、それほどのことがいわれぬものかといひけるが、十四五日をへてよろこびをしたり、七夜のいわひとて近所の衆をよびたり、今日は日出たし、御内儀もよろこびて御座らふ、やすやすと御平産、ことにおのこゞで御座るなどといひければ、女方まかり出て、ていしゆばかりのちからで出來たでは御座らぬ、みなきんじよのわかいしゆのおかげじやと云た、

（六）樂齋が目藥

似鹿

同朋町に樂齋と云者、めいほうをおぼへて目藥を合せける、いかなる目にもよしとて、らくさいめぐすりとさたし、江戸中のひやうばん賣る事かぎりなし、となりへまためいしやこして、樂齋とかんばんをいだしたり、とりちがひて是もうれたり、らくさい腹をたて、似せことをいたすよし大屋名主へ事はりければ、兩方をよびてせんぎせらるゝ、いまの樂齋申けるは、わたくしはにせらくさい、あの者は眞らくさいで御座るといふた、

(七)筆屋の勘判　流下

俺相者かたりけるは、昨日しろかね町を通りけるに、あたらしきかんばんを見たり、此ごろにゐかふとおもふが、そなたもいきやるまいかと云、いかなることぞとへば、吉原よりましな事が御座るは、京から女が三人くだりたそふな、江戸の名とはいかふかわつた、一人はたきも、一人はとよう、一人はひつじんと云、ねだんがやすい、ひとつつび一匁づつとかいてあると云、是はよきなぐさみなりとつれだちて行きて見れば、京くだり瀧本やう筆人、一對壹匁づつとかなにてかきたり、

(八)お寺の禮　笑口

ある人申けるは、世中のつとめほどきのどくな物はない、ぎりしゆんきにこまりたり、中にも寺まいりがきのどくじやと云、それはごふしたことにとへば、五十はすくなし二百はすぎる、錢の持ていきやうがないと云、それなら百文でよふ御座るといへば、百を紙につゝんだところはごふやら○○のやうで、おてら様へはだしにくひと云た、

(九)柿暖簾の狂歌　宣

六十あまりの牢人、せんだい紙子のいろつきたるに、ときならぬ一重ばをり、きざみざや朱ぬりのなべづるのごとくそりたる刀、やくわんのふたのやうなるつばをうつて、あいくちのわきざし、扇を弓手にぶらつかせ、酉うしのなみ局こまやかにのぞく、かき暖簾のなかほどにて、ふとりたる女郎、見世ばのつまのつましなくて、かいつくもふてゐたりけるに、いかにしてかかのところすこし見へたり、牢人しばしこゝちまどひ、くめの仙人がむかし語りおきく、しばらくながめおりしほどに、女郎こゝろづきてゐなりける、牢人たちさりながら、

百なりと名にこそたてれ柿のれん
○○をいだすはへたな見せかけ
女郎おいかけて
牢人のつらこそしぶきかきのれん
○○までむけどもたぬこしせに

枝珊瑚珠巻之五終

跋

春雨のつれ〴〵かれこれ集りてはなしけるを、予おかしくて筆をならす、ある人諸事世話らうしけれど、世の氣ばらしに櫻にちりばめて見せまほしさ、ひたすらに云もすてがたくて、そのひと〴〵の名をあらわしてかけり、しかし當時の咄しは獨の心なり、言草のしなかわりたるこそなを興あり、言葉の玉のみかき合るはなしなれば、めづらしさても朶さんごじゆか、

はなし	紅葉軒								板本		畫謡軒	
	鹿	似鹿	口青	如心	笑口	宗計	口前	短才	不笑	口計	梅女	長子
	流下		流角		宣							

元祿三庚午初夏日

繪師　石川流宣

板本　相摸屋太兵衛

輕口露がはなし目録

巻之一

巻之二

卷之三

卷之四

卷之五

目錄終

輕口露がはなし卷之一

第一、文盲なる人物の書付をひはんする事

一、ずんど文盲成田舍侍、供人少々めしつれ、京むろ町をとをり給ひ、家々ののうれんの書付を見て行けるに、よめたる字一軒もなし、或所に戶をさし借家かし藏と書付けしを、しばらく立止り、ひそかに下人を呼、あれは何といふ字じやとゝはれけるに、かし家かし藏ありと申す、主人うちうなづき、尤手はよろしからねど、いかにとしても文章がよいといはれた、

第二、京の何がし丹波へむこ入する事

一、京の何がし、丹波のおく山より緣をむすび、程へて聟入するに、土產物には大きなる生鯛一枚、小者にもたせける、七條大宮にて道中の用意にとて、ふのやきを買ひ道すがらくふて行けり、扨舅の家に着ければ馳走に水風呂をたき入けり、小者も水風呂へ入とて、懷中よりふのやき一まいを落ける、山家の者共これを見て、扨も合點のいかぬ物じやと、いろ〳〵評判すれども、つゐに見しりたる者もなし、さらば堂の坊主と

庄や殿をよびてこれを見せるに、坊主のいふは、愛らの衆のしらぬが道理なり、是は天狗殿のやいごのふたじやといふ、又庄や殿に此魚は何と申物ぞとゝへば、庄やの申さるゝは、是は京祇園の小宮にも有、ゑびす殿の腰にさしてゐらるゝ太刀じやといふた、

第三、筆まめ成書付の事

一、ある人のかたへ、夏の頭客きたりて、素麪をふるまひけり、からしの粉をたづねるに、紙袋に書付なくて、氣のせくまゝにあれこれとさがし、漸々取出し振舞過けり、日暮にをよびむすこ外よりかへりき、親父いふやうは、あのかみぶくろにはそれ〳〵の入たる物を書付せよ、總じてかきつけのない物は、いそぐ時のやくに立ぬぞと云、いかにも心へましたとて、頓て親父ねられける時、紙張に大筆にて此内におやぢ有と書付た、

第四、本國寺大門にうへ松の事

一、本國寺大門の南は、十年ばかり以前迄民家なりしを、近年は小松植りけり、此松に付うへ木やを呼、あの大門より北にはむかしより大木の松八本あり、あれは法花八軸をかた取八本也、然るに此たび南のあき地には、法華二十八品をかた取廿八本うへべし、直段如何程といへば、木屋申は、さかく法花經の義理はそむかれますまひ、直段一歩八貫文に御買下されよと云、寺にも指當高直とてねぎるべきやうもなし、其中に小ざかしき男罷出、木屋の宗旨をとへば淨土といふ、然らば其方の宗旨にて金子三歩經にまけよといふた、

第五、茶といふ言を利口に取なをす事

一、利口成者の噺しに、茶道坊主といふ言葉をそばにゐける人聞ていふ樣は、尤ちやを立るなれ共、あれはさだうさいふ物じや、總じて茶にはさといふこと葉を用とをしえければ、彼者が云、それは其方の申されやう無理也、さゝちやと同じことならば、笹屋の三郎兵衛を茶々屋の茶ら兵衛といふても大事ないかと云ふた、

第六、重言くるしからずといふ事

一、重言をいひ付たるくせにて、夜るの夜中にてもあらばこそ、晝の日中に山中の山なかにて、馬からをちて落馬して、うでのかいなを打をりて、醫者のくすしに懸て養生して、りやうじしたれば、やう〳〵なをり

平癒したといふを、友立聞て、扨も言葉はみな重言也、よそにて左樣の言をかならず申されなとかたく異見すれば、彼者へらぬ口にて返答せしは、其方は文盲な人じや、聖人賢人の語に多く重言有といふ、それは何の書物に有といへば、諷の本に有、高砂の浦に着にけり〳〵と有、それは目出たひ事故苦しからず、然らば跡とぶらひてたび給へ〳〵といふ謠も有ぞや、

第七、大皷と太皷の謂れの事

一、今時のわけしりは、世間せんじやうのために、一町あゆみ行にも、太皷といふしやれものをめしつれありくなり、それに付あの太こといふ義理は何といふ事ぞといへば、さかしきおとこが頓作をいふは、總じて大じんも太こもみな〳〵六齋念佛の宗旨であろふ、其いはれは太じんはかねもち也、太こといふ者はからり〳〵の身體なれば、かねもちに付て步まねばならぬといふた、

第八、目は欲のもとでといふ事

一、田舍人はじめて京へ上り、方々見物せり、大佛の釋迦を見てにはかに欲心發り、つれの友にいふやうは、目は欲の許手じやといふ、あの佛の御手程おれが手も大きならば、京一番の兩替屋の門に立、手に一ぱい小判をつかみ取たいといふた、

第九、淚は人も尋るたね

一、うつくしき女中ひとり途中にやすらひて、ものあはれさうになき居たり、ゆきあふたる人、何事のかなしみありて、さやうに淚にむせび給ふととひければ、女聞て、さればこそ、あれ〳〵あそこへ衣を着てあみ笠めしたる人は、都にかくれなき歌念佛說敎ときの林清といふ人なり、あの人のむねの內にいか程あはれしゆせう成事の侍らんやと、おもひやられて袂をしぼるといふた、但ぬれかけのある女かしらぬ、

第十、六波羅の勸進といふ事

一、無意氣成にはか道心、六はらの勸進といふて門々をありく也、人々不審に思ひ、何と六はらの堂が立なをるか、慥きのふも東山へ行とて通りたるに、作事の體は見へず、いかさま此坊主は似せ勸進にて有べし、いざ〳〵よびてたづね申さんと、二三人立よりて此坊主に謂を聞けるに、御不審尤なり、愚僧が庵室は六はらの片原町に罷在、庵に計居たるは片はらよと、そのまゝむねをひろげ腹をたゝきてをしえ、勸進と申

は此ろく腹へといふた、

第十一、老てもわかきにまけぬ事

一、或在鄕に七十ぢかき姥あり、にあひたる者の方へよめ入をするに牛にのり、二十許の孫に牛の口を引せ行なり、道にてさはる荷物の有をみて、孫牛に聲をかけ、のいてとをれと云、姥これを聞そふて、通れといはんこそ本意成に、のいてといふ言葉は氣にかゝり不吉也、いや〳〵けふは行まひとよめ入をやめけるも興あり、

第十二、推量と違た事

一、ある所に久七といふ下人有けり、かたのごとくよくはたらき、主人の氣に入奉公せしが、或時主人他行の折ふし、お内義へ近頃はづかしながら、私が心底をつゝまずはなし申度といふ、内義は面をあかめて、あらけうこつなる人や、何をいふ事の有べしと申されける、久七かやうに申うへに、御聞きなきにおゐては覺悟いたしたさいふ、内義申は、それほどに思ひ侍らば、重て折も有べしと申されけり、さいわひたゞ今は人もなく、よきしゆびにて候まゝ、ぜひ今申さんと、つか〳〵と耳のはたへより、小聲にさゝやく様は、あすより飯のしやくしをおし付て下されよといふた、

第十三、人をけしてはまりのはやき事

一、ある人京にめづらしき輕口咄しはなひかさとはれけるに、さして思ひ付たるはなしも御座らぬ、此ほど京中のとをり道をよくいたし、門の眞中をたかくかまぼこなりにいたすといひもはてぬに、そのはなしはふるひぞ〳〵とけされければ、さればこそ其ふるひによつてかまぼこにいたしたさいふ、此人は肴やではないか

第十四、人はそだちの事

一、ふり暮したるつれ〳〵の折節、二三人呼あつめ、ところゝ汁を振舞ける、其中にこびたる人の申さるゝは、色々の御馳走、ことにけふのことづて汁は、いつにまさりて、一入出來たるとほめ給ふ、そばに相伴したる人、これはめづらしき御言葉やと思ひ、其しさいをとふに、されば此汁にてはいか程も飯がすゝむゆえ、よくいひやるとのえんにより、ことづて汁といふならん、聞えたる作意やと感じ、宿にかへりてやがてくだんの汁にて客をよぶに、ことづてをとはれて、めしのまゝをやるとぞ申ける、

第十五、恥をいはひなをす事

一、或町に寄會有けり、二階座敷にてつとめける、事過てかへるさに、長座にくたびれ、そさう成者はしごのもとにて、大あくびするとて、尻の邊よりぽんと音のせしを、そば成人さんざくを申された、扨も天下大へいで御座るといへば、彼者もされぱこくとあんどいたしたといふて笑ふた、

第十六、小僧が利口で却てめくわくといふ事

一、去寺にうつくしきお児有けり、旦那參られて小僧をちかくよびて、あの児はどなたの子なればあのやうにうつくしひぞといふ、小僧あれは屋敷方のお子なり、爰の弟子に成に御出有といふ、旦那きゝて、おれが思ふやうならば、あの児を女子にしてほしひと申せば、小僧がいふやう、いづれ人の目は九分十分じや、さたはない事、長老様も左様に御申あると云た、

第十七、惡性の名付親

一、去所に二十許の惡性成むすこあり、夜る〳〵外へ遊びに出けり、おや大きに腹立して、念頃なる人を頼人かたらひ、御太儀ながら今ばんむすこめが居る所へ同道頼むよし申て、扨親父は入まきよりぼうなどもちて、常に子が行所を見とゞけ、あはたゞ敷表の戸をたゝき、爰にこちのむす子はゐぬかと急にたづねければ、子は親父が聲とき、やがて二かいへはしりあがり、かくれ所のなきまゝに天井へとび上りければ、腰より上は天井にてかくれたり、親父友三人ながらにかいへ行見れば、何かはしらずこしより下斗の物有けり、子も絶體絶命爰なりと息づむひやうしに、大き成屁を一つぽんとこきたり、扨一人が云様は、是



は定てろくろ首といふ物じや、又一人がいふは、いや首は見へぬほどにろくろ尻にてあろふといふ、親父も興をさまし、いづれもの量見とはちがふた、ろくろくびでもろくろじりでもない、先のなり音を聞からは、六郎兵衛にてあらふといふた、

第十八、羨敷は食物の火事

一、四條河原にうつくしき野良あり、古郷親里は京の西じゆらくの者也、五月十五日は今宮の神事にて親里へまつりに行けり、常はつとめの身なれば隙なく往來する事更になし、さるによりおやも一しほ珍敷不便に思ひ、何哉馳走せんとて餅をつきくはせけり、野良も逢た時かさをぬげとかや、人目もはぢもかまはず、したゝかにくいけり、されども夕陽にしに入あひのなるころ、我すむおやかたの内へ歸り、ねてもをきてもくるしさうに見へけるを、ほうばいの野良見かねて、そなたの煩はこゝちいかゞ有とといひければ、唯けふのもてなしの餅をくひすごして、むねのやけるがくるしいといひければ、おれもちとその類火にあふて見たいよ、

第十九、親父がはたらき三國一

一、夫婦をごけ者にて、嫁も娘もあつまりて、冬の夜寒の折ふし、たうふを二三丁もとめ田樂にする、親父いひ出すは、をの〳〵秀句をいふてくふべしと、嫁やがてわれは佛のつぶりと申て三くし取てのく也、むすめはいなば堂とてやくし取たり、母は屏風のかげより出るをみれば、髮をばつとみだしたすきをかけ、左右の手にて目口をひろげ、われは鬼なりこなくはふとて、有だけ取たれば、せんかたなさに親父はふるき手ぬぐひをあたまにかぶり、手をさし出し、乞食に參りた一つづゝとらして下されといふ、

第二十、苦身も品によるといふ事

一、上戸なる親あり、町内に伊勢參宮の坂迎とて出けり、暮にをよび内にかへり、むねをなで額をさらへ、あらくるし〳〵と、時すぐるまでかなしがるを、利口なるむすこ有、とゝはそれほどくるしひ酒をよひころにのみもせでと申せば、親は目を見出し、おのれはこざかしく何をしりがほにぬかすぞ、此酔のさめるがくるしやといふてあそぶに、

輕口露がはなし卷之一終

輕口露がはなし卷之二

第一、伊勢講の當番

一、去醫者いせ講の有し所へ風と立より、これはいかうにぎやかなる體じやと申さるれば、亭主申は、伊勢講にて御座候、それは御太儀といふに、されば貴様のお藥と同事にてよくまはり候といへば、ことの外醫者よろこびかへりけるに、又存知たる所へ寄ける、爰もごたくたといそがしく料理しけり、亭主申は、今ばんはいせかうつとめ申也、さいはひの所へ御出なされた、勝手にて酒ひとつまいれといふ、これは御太儀ながらも目出たい事と申すれば、亭主されば貴公の藥と同じ事にてさい〳〵あたりますといふた、

第二、蚤の式三ばん

一、ある人蚤を壹疋とらまへ、式三番をまはせける、むかひの親父これを見て、扨もおもしろき事かな、吾ものみ一つほしやと思ひ、着類を見れ共、かねて女房きれいずきせしゆへ壹疋もなし、是非なく四五日も程過、ある夕ぐれ時分何かはしらす壹疋とらまへうれしゆ思ひ、三番さうを始め、自ら口笛を吹ゆびにて疊をたゝき、片手に扇子をもちきげんよくまはせける所へ、成人の子外より歸り、親父これは何をなさるると云、のみに三番さうをふまするぞ、おれは目がかすんで太夫殿の舞ぶりが見へぬに、火燭を灯してちやと見よといへば、むすこゝろへたとて火そく持きたりみるに、何とよくまやるかととふ、いや親父まひはせぬぞ、まはぬも道理で御座る、役者がかはりて白身太夫じやといふ、

第三、藤の丸がかうやく

一、ある所に藤の丸のつきたる　のうれんかけたる家にて番をつとめけるに、折ふし田舎人通りあはせ、そのまゝ立より、かうやくを買てみやげにせんと所望する、番の者こゝにはなしといふ、して是は何ぞととふ、いやかうやくにてはなし、是は町役なりと返答した、いと與有答にや、

第四、はなし鳥のさた

一、じやうのこはき者二人寄あつまりゐける所へ、門をはなし鳥〳〵と賣歩く也、一人が云やう、あのつばくらといふ鳥はとび魚に成といふ、又一人いやそれ

は大きにうそなりといふて、両人赤面してせりあひける所へ、わるじやれなるおとこ一人來り、此せんさくを聞、むかしよりも山のいものうなぎになる抔といひならはしけれども、つゐに見たる事もなし、然れごもさも有べし、おれも此廿五日に北野の天神へまいるとて、はちくのかはざうり一足十九文にて買はひたるに、宿へ戻りみれば長刀になつたといふた、

第五、蛸やくしへの日參

一、三條邊にうはき成男あり、いつの頃より蛸藥師日參いたし、其身一代の内蛸をくはぬとて人にも披露せしが、祇園の涼みの折ふし、四條河原の床のうへにて友立酒のみ居けるに、茶屋の肴とてもみ鹽の大蛸を物の見事に切はやし出ける、彼おとこ、やがて此たこをしたゝかにくいけり、つれの友、それはたこなるに何とて其身はくい給ふぞやといへば、此おとこ、さればきのふ十二日に、ふや町のほてい藥師へ願をかけかへ、向後われ一代の間は布袋をくはぬといふて、蛸のさいしんを乞たり、

第六、親も閉口

一、十二三成むすこに親異見するは、おのれに何をいひ付ても返事せず、打うなづひて斗ゐるていたらく、近頃見ぐるし、をし五郎にてはあるまひ、人の物いふにはいやをの返答申せよ、但しうなづく斗にて物事濟ば、しぜんおれが目が見へずば、その風俗は見へまひし、然らば一代埒のあく事は有まいなどと、さんざんにらみ付しかりける、子がいふやうは、返事を高聲にしたればとて、もし親父つんぼの時はといふた、

第七、佛前三具足

一、去田舎に一村みな一向宗にて、道場へまいりて御讃嘆を聴聞いたし、事をはりて講衆申さるゝは、佛前のみつぐそくの内、らうそく立を仕なをし申さずばなるまひ、あの鳥を何んぞよの鳥に好み申度が、何とおもはるゝやといへば、いづれも此義に同じ、されば鳥やには鳥もいかゞ也、何がよかろやとせんぎしけり、其中に小ざかしき男のいふは、とかく白さぎにめされかしといふ、座中此義然るべしと談合きはめけるに、坊主罷出て申さるゝは、いや／＼さぎは無用になされ、其しさいはござう坊主にさし合じや、

第八、一家の内の物語

一、ある所に一家まじはり、色々の物がたりをする次

に、中ゐの女房がいふには、あの正月ある事は五月かならず有となれば、萬事いはひもつゝしみもいたしたがよひと申せば、十四五成こしもと女が是を聞、さてはさやうにあることか、おれは左右も思はぬ也、正月はかちんをさい〳〵見もしくいもしたが、五月のけふは廿八日になれど、餅とて一つもみぬ程に、

第九、疱瘡の養性

一、上京新在家あたりを、三十許の男とをりけるに、にしの方よりとしごろ成女房、下女一人めしつれ來るとて、此男をみてほや〳〵と笑より、粗忽ながら其方さまを私所へ御供申たきと語る、此おとこ常に色このまぬにもあらねば、早速に同道してかの女の所へ行見れば、れき〳〵の家居なり、やがてろじの戸をあけ、屛風引ちらしたる座敷へよび入、種々料理をくはせ、さて最前の女房いふ樣は、ちかごろ申かねたる義におはしまし候へども、わたくしはこれの養君に乳をまいらせしうばにて御座候、今年十六になり給ひて、あちこちより緣付の事のみ申參しが、そもじ樣に一めあはせまいらせたく存。さてかく申入たる事に候まゝ、是非御あひ下されよと、手をとりおくの一間へつれ行けり、男夢かうつゝかなどと思ひながら、ふるひ〳〵屛風のそばまで行けり、かのうばむすめの枕もとへ寄ていふ樣は、もうしおまへ樣にかゝせられますなと申證據は、此人を御覽じませ、おかきなさるゝとひとしく、あの人の顏のやうにみつちやが出來ますといふた、

第十、道化者があひさつ

一、文盲にしてしかもだうけ者あり、其となりによしある人住けり、或時夫婦いさかひはじまりて、たがひに聲たかくなりけるに、かのだうけ者行、けんくわ最中にあひさつするこそ、おまへ樣がおまへ樣なればこな樣がこな樣なり、事のたとへにも大坂に介六といふ大工さへ御座るに、かんにんさしやんせといへば、此つかぬ言葉がをかしゆなりて、夫婦ともににがにが笑て中をなをりた、

第十一、風呂入

一、ちと御めんなれ、草臥ものでひえ者で、どうもならぬが、あき所はいかゞ、御とをりなされおくはむさし野にて侍る、近頃かたじけなしと云ふて、小風呂の内へ入けるに、去人出たかきがゆへにたつとか

らずと口ずさみに申を、なま物じり成ものが是を聞、又庭訓のたゞ中をいはるゝといふにおかしく思ひ、又一人がいふ、その方は物しりがをな事を云、あれは庭訓にてはない、節用集といふ謠の本に有事じやと、しまはんと云ふ、百姓聞て、あらもつたいなや門出あしゝと大に腹立しけれ、兎角いひより酒をのみのませけるが、立て行ざまに、さきほどの腹立は、たがひにねもはもをりない事よと上ぬりを申た、

第十二、欲ふかき姥

一、ある山家に欲ふかきうばあり、人の物と見ては、木の葉ひとつわら一すじ成共、くれい〳〵とたくしもらふ也、ある時大き成鼠をとらまへそこなふて、尾斗引ちぎれ捨けるを、それをくれよといふに、人これはねずみの尾なり、そなたにやりてもやくにたゝぬ物よといへば、かの姥成程やくにたつと云、何にするやとへば、その尾を干してをき、姥が家に傳りたるきりのさやにするといふた、

第十三、舞まひと百性と口論

一、それ〴〵に忌こと葉のあるぞかし、茄子にはまふといふことばを百姓も忌る也、都七條朱雀にてなすびをうへる百姓あり、又その節は吉祥院開帳の折から、參詣の人に勸進をせし舞をまふ男あり、或時とをりあはせ見れば、大きなる土工李に盃をそへて有、ちと是をなん望にや思ひけん、畠へ立よりさらば一ふ

第十四、坊主魚の願

一、ある所の地頭と中のよき出家あり、振舞によばれて色々食物の咄し有しに、海月と云物は精進めきたる物也、出家にもまいらせたや、殿に云て是をゆるしにせんなどと語る、年たけたる弟子聞て、殿へ仰上るつゐでに鯉鮒の事をも賴入、又私が名を替ます、宗加と申がすきで御座ると、

第十五、きれいずき

一、きれいずき成もの有、けぬきを持て口のはたのひげをぬきゐたり、そば成るもの少それをわれにかし給へといふ、かし候はん間むさい所をぬき給ふなとて渡しける、扨もよくくふけぬきじや、なんでもたしなみ人かな抔とほめちらし、大かたしまひ、のどの下をぬきければ、かの者いふやうは、それむさい所よとゆびざししければ、のどの下にむさき所が有やとどがめければ、成ほど〳〵むさひ、御身の下帯をはさむ

所じやといふ、

第十六、ひけう者の喧嘩

一、夜ふけて三條大はしを通る者あり、むかふより來る人に橋の中ほどにて行あたり、それをとがめたがひに口論になし、一人は大男一方は小男、双方につかみ合、大男は苦もなく小男をくみふせ、馬のりにしてゐたり、小男今ははやこれ迄と思ひ定め、九寸許のさすがをぬきつかんとせしを、上成大男これをみて、高聲にやれ人ごろしよ出合々々といふたは、組ふせて居ながら排興者ぞと、

輕口露がはなし卷之二終

輕口露がはなし卷之三

第一、御靈大明神へ福を祈る事

一、上京にひとりの職人あり、朝夕を送りかねゐけるが、とかくは氏神へ祈りをかけ、急に富貴に成べしと思ひ、御靈明神へ七日詣でいたし、私に銀子一貫目得さしてたび給へと、かんたんくだき祈りける、滿ずる七日の夜あらたに御告あり、汝うらむる事なかれ、よく分別して神をもいのれ、分在に過たる願は得さしがたし、われ多くの氏子を持たるといへども、上で御靈下で御靈とて二所ぜよたひにて十六七兩に及べり、何とし目の望なれば、今小判にて十兩なり、汝一貫て成べし、さりながら氏子の事なれば不便に思ふ、いそぎ是より眞如堂の稻荷へ參り、福を祈れと御れい夢有、此おとこ目をさましすこしりくつをこねたり、稻荷とはいねをになふと讀なれば、百姓の望こそかなふべし、我等はしよく人の事なれば、百姓の手はざはならぬ也、とてもならぬ事ならば、七日迄つらずとも、とくにしらせ給はひでと大に腹立し、社壇をにら

み、扨もにくひ四一雨めがといふた、

第二、鹽打豆

一、或儒者の所へ町人見まひければ、茶をのませ、其うへにて小者に其鹽打豆すこし持参せよといふ、やがてちいさき臺にしほうちまめを少入、座敷へ出す、町人是をみて此まめの名は何と申と問ば、鹽打豆といふ也、其心はいかにといへば、鹽はしほ打はうち豆はまめと講釋せられ、今すこしたべ候へといへば、小者が申は、もはやなしといふ、主人ふぎうりき也といふを、町人又其御言葉はいかにに、不及力といふ事じや、扨はこびたる口上を覺へたると悦びかへり、内の女房にいひふくめ、件の豆をこしらへ、誰がな此言葉を云て振廻たやと待し所へ、舅の親父來れり、亭主その鹽打豆持参せよといへば、女房あ〻と云ふて少し出しけり、親父何心もなくひた物くひける、亭主よろこび今少出せといふ、女房打わすれあ〻といふてすでに出さんとせしが、急度思出し、いやもはやなしといふ、亭主、何鹽打豆はもはやないとや、不及力を忘れて、あのふぐりなしめがと女房をしかりければ、女房それは言葉違で御ざろふ、女に何のふぐりがあろふといふた、

第三、目くらの頓作

一、針立の目くら坊主、旦那がたへ療治に行、よも山の物語にとりまぎれ、しばらく隙を入ける所へ、客來りはじめて知人に成、客より申は、何と座頭どのはどなたの御弟子にて候や、いち方かせう方か、定て琴三味線も平家小うたも上手にておはし候はん、以後は拙者所へも申入、一曲承り候はんなどと念頃に申されければ、此目くらもあまりゐんぎん成あひさつにいたみ入、たうわくせしめ、いや私はいちかたにてもせうがたにても御座なく、はりかたにてと申た、

第四、賀茂川の大水

一、きのふけふの大雨にて、都の賀茂川一ぱいに大水出たり、四條三條の邊にて諸人見物する中に、ひとりがいふやうは、さのみ大水といふ程にもなひ、夕部と見合に水の高さ五寸にはまされずといふ、ありあふ人の申は、それは目ちがひにてあるべし、夕部とは一尺や二尺のましと云事はないにといへば、かの者じやうこはく、はてさてへたなことをいはる〻、今二寸たかければ、爰のぼんと町は一なでじや、

第五、をどけ事もときによる

一、おどけたる者或時長老を申うけ齋を進じけるに、老僧だんなにむかつて、今朝の追善は、六親の内たれ人の年忌、どなたのためにて候と申されば、亭主ゐんぎんにかしこまり、手をつきまき舌の口上にて、高高と申けるは、御尋にて御座候條つまびらかに申上べき、今日は拙者が兄嫁や妹むこのしうとの日で御ざると申た、こびたる口上うるさし、只親の日といはひで、

第六、人より鳥がこはひ

一、ひがし山黒谷の邊に畠をうつに、となりの百姓通りあはせ、是は何をまくぞといふに、彼はたうち小手まねきして、あゝ聲がたかいぞひきう／＼といふ、扨は世にまれなる唐物の種をうゆるにやと思ひ、心得たりとさし足してちかく寄たれば、いかにもおのれが聲のてうしをひきくいふには、大豆をまく鳥や鳩がきく程に、

第七、百萬遍の萬日參り

一、ある人夫婦づれにて、百萬遍の萬日ゑかうに參るとて、今出川のひがし野中にて知人に行あふたり、扨も御亭はといへば、女房そのまゝ返答におよばずはしりより、そゝと物をいふて給はれといふ、扨は誰ぞにかくるゝかや、いやかくれます人も御座らぬが、内にあまをねさせてきたが、もし聲のたかきに目がさめればめいわくといふた、

第八、しはき坊主の若衆ぐるひ

一、しはき坊主が去わかしゆを戀わびて、かず／＼文をかよはしくどきければ、若衆とをり者にて、一夜坊主の方へとまり行ける、曉雨のふるをとを坊主きゝつけ、南無三寶とめてくやしや朝飯をふるまはずば成まひ、そらね入して起てかへるを、しらぬふりにせんこそよからめと思案しければ、若衆そと起て行ける、もはや門のそとへも出ぬと思ひ心もとなさに、おきて見ければいまだ門の内にやすらへるを見付、仰天し立てゐながら目をふさぎ高いびきをかき事よ、

第九、わたましの祝儀の使者

一、あたらしく普請出來たる所へ、知音の方より祝儀をもたせ使をやるに、かまへて常の所へ使に行とは違ぞ、一言にても卒忽なる言葉を申なと、畏て候とて行ける、さきの亭主悦び、献々をくみ馳走いたす、されどもつゐに疳のごとくなれば、亭主すまぬ事に思

ひ、貴所はいかな子細により無言の仕合ぞや、わめきさめくこそ目出たけれといふ時、さればさき程から物がいひたふて胸がやける程にあつたれど、

第十、とがのなひ盗人

一、おれが秘藏せしわきざしがみへぬ、そちがぬすみたるといふ、いやとらぬ、さりとては證據人有とつよくいふ時、取はせぬ人の見ぬ、まにもらふた、

第十一、魚がしやみせん引事

一、月花の遊興に、琴三味線を引もよほすは人間のなら ゐ也、さる程に此度われら西國より上り海上永々かゝり、めづらしき事を見侍るといへば、座中何事なるぞ、おもしろき事ならはなし給へといふ、さればしやみせんは人間斗のなぐさみにてなひ、海底の魚も引ならふといふ、それは近頃聞をよばぬめづらしき咄しなり、但貴所も久々西國の住ゐにて口がしこく、御江戸にはやるけいあんことばを申されけるといへば、いやしかも小うたにのせて鰐とふぐと毎日引あそぶ也、其小うたは、たんたらふくつるてんたらふくつるてんと引、

第十二、せいじんの娘に異見する事

一、さる人むすめ二人持けり、あねは年十八、妹は十六、ふたり共にえん付せり、さきにてあねはにくまれさられ、妹はよつばりたれるとてさられける、おやさんぐ腹立しけれ共、是非なくてしかぐ異見申より外はなし、かゝる所へ頓作のよき人來り、此よしを聞き、親にいふやうは、さのみ御異見無用になさるべし、今年は道理也、來年からは兩人の子達よくなをり申べしといへば、おや、ことしはあしゝ、來年はよしとはいかゞ心へがたしといふ、彼もの申やうは、あねはにくまるゝはづじや二九の十八、妹のよつばりはししの十六なり、とかくことしは其はづじや、

第十三、東寺の塔にてばくち打

一、さる博奕打とうじの塔へしのび入、三國へよき所とて大聲あげてうち居たり、所の衆僧より申は、此塔へ出入する事かたくきんせい、殊に見れば博奕也、其儀は日本國の御法度也、いそぎ立さり申べしと申さるゝ、博奕打共口をそろへて申やうは、御法度なればこそ爰で打ますといふ、それいかにと申に、塔の下にてことに大勝負にて更になし、錢にては八文にたらず、高九りんの勝負也といふた、

第十四、淨土宗と法華宗と相住居の事

一、さる町人に情のこはき法花宗と淨土宗と、一軒の家に壁をへだて住ゐける、或時念佛講にて大鐘を打ならし、夜半の頃迄念佛申て、扨夜食になら茶をせしが、件の法花のかたへ、今ばんはおやかましゆ候はん、あまり夜寒に候まゝおくり候よし申て、かのなら茶をやりける、忝とて此食をしたゝかたべけり、くふとひとしく腹中いたみ、夜中に廿五たびくだりける、かた法花の事なれば口すさまじくそしるこそ、いやの南無阿彌陀佛を數々聞たる故、法然が日と同じやうに雪隱へ行も廿五度と、さん／＼につぶやきけり、翌日はらもなをりければ、女房いふは、今朝のくだりは何と有ぞ、されば南無阿みだ迄はやみたり、さりながらまだ殘りたるやらぶつ／＼といふ、

第十五、兒のつまみぐい

一、さる所に茗荷のさしみありけるを、お兒是をつまみくいけるを、そば成人申やうは、これをばむかしより今にいたり、物よみ覺ん事をたしなむ人は、みなごんごん草と名付、物わすれするとてかたくはぬ物じやといひをしへければ、兒聞て、それならばおれは猶くふべしといふ、ひだるさをくふてわすれうといふた、

第十六、兩下ちがひ

一、ある人番にあたり上下を着してつとめけるに、ひがしのかたよりあじろの駕に、びろうどのたて笠、はさみ箱、供人あまたつれて通られける、番の者どもいかさまよしある御かたなり、座上慮外のいたり成べしと思ひ、土べにをりてひざまつき、つゝしんで待うけたり、のり物なるは淨土宗の長老なり、此よしを見られて時宜するとは思ひもよらず、十念の望なるべしと心得、やがてのり物の戸をひらき、合掌して南無阿み／＼といはれければ、番の人々興をさまし、はかまの土をふるひけるとぞ、

輕口露がはなし卷之三終

輕口露がはなし卷之四

第一、始てよばれし祇園會の客

一、京に富貴なる人あり、生國は田舍人にて、十歲より京へ上り、物事しはくて銀をのばしける、寒き時は灯明の火にてせなかをあたゝめ、暑き折には越中ふんどし一筋にてかせぎ、こまかうして銀高八千貫目持、毎年諸方へかしけり、其銀の廻る事淀の水車はいそなり、幼少より京へのぼり、かほどの身體に成といへ共、つゐに古郷の親類ひとり呼たる事なし、或年六月ぎをん會にはじめて呼ければ、何が田舍ものゝ事なれば、いとこはつこに至迄、宵の日よりとまりがけに上りける、神事の膳分は、つまみ大こんの汁、黑米飯、瓜なます、おま酒一ぱいより外に、香の物もくはせず、中にも亭主に近き人いふやうは、はじめてよばれ候神事には、料理そさう成といふ、されば今年程無仕合なる事はなし、さるによつてそちたちをまんなをしに呼たるぞ、來年は仕合して結講申べしといへば、それは心もさなしいか成事やとゝふ、其やうすは見せ申べしとて、みな〳〵引つれ五間四方の藏の戸あけて見せたり、十貫目入の箱入を物の見事につみかさね、あれ見給へいつもは一はこもなきに、ことしはかし所がなふて、かね殿が晝ねをしてゐらるゝといふた、

第二、野郞の金剛念佛講

一、野郞の草履取を異名に金剛といふとかや、あるとき途中にて念佛講の同行に逢たり、それに付此月の講は其方が自前に宿を持たるよし、そちは此季より、あたり番成が、いかゞつとめ申さるべきやといふ、いかにも明晩つとめ候はん、同行衆へも其よし申給はれといふて互にわかれける、扨宿へかへり女房にかくといへば、女房あきれていふやうは、こちはいまだ此ころの宿ばいりにて、佛もなくいかゞすべきといへば、男聞て氣遣するな、其才覺はふんべつしたぞ、さいわひ夜るの事なれば人の見知り有まじと思ひ、立像の佛一體かりとゝのへ、箱持佛堂へ押入つとめけり、何れもわれいちとしこりかゝつてせめ念佛を申、已に回向とおぼしき時、かの佛の御面くるりとめぐれ鬼の顏に成けり、何れも念佛を申やめ、おそろし

やこれは〱と斗申けり、亭主是をみて、其はづじやくるしゆなひぞ糸がきれたといふ、せんさくすれば、芝居より借用したからくりのはりぬきじや、

第三、人のうわさ

一、二三人よりあひて物のよしあし評判せしが、そんせうそいつは賢いやつじや、水の中をもぬれずにくぐるやうなやつよといへば、一人がいふ樣は、それは其方のあまり譽ごての言葉よ、今でもよびよせ水に入れたらばぬれべし、殊に紙子を着せたらば猶ぬれべしとせり合ける、してもかしこひ者じやといひけり、それは御身の申されやうあしく、丁簡の不丁簡といふ物也、人の目にみづにいる時は、ぬれずにくゞる事は扨をき、ねてゐて、もいかなことぬれまひといふた、

第四、たき物の取ちがひ

一、よしある人の方へ振舞に行ければ、飯後の湯出たるに、風味ことにかうばしく大きによしとほめけるを、內儀聞つけ、うれしげにのうれんのひまより顏さし出し、お湯のかうばしきもことはりや、薫物をくべた程にと申されければ、座敷にゐたる人々も耳にしみてぞかんじける、中に一人うらやみ、宿にかへり女房にかたれば、それ程の事は誰もいふべき物をとあざわらひ、知音をよびならべ飯の湯を以前のやうにとゝのえ出し、人々かうばしやとほむる時、女房はゞからず、おゆはかうばしからふ、柴を三束たらずくべた程に、

第五、譃講の參會

一、常に申よき友立十人許講をむすびて、さい〱參會せし、名をうそ講と付たり、此いはれは色里へ往來せんための手くだの沙汰なり、或時友々途中にて行あふて、晚には內々の講をつとめ候間、御出候へとかたくけいやくして、暮におよびて行ければ、晝すぎより他行いたし宿にはゐぬといふ、講中せんかたなくかへりける、あけの日彼友がいふやうは、夕部みなみなわれ所へ參られたるを聞てゐたれども、わざと留主をつかふたといふ、それはちかごろ屆かぬしかたじやとせんぎすれば、彼ものいふは、元來此衆中にて筈の違ふ事はくるしからず、寄程の者はみなうそつき講じや物を、

第六、物のあはれは人の行末

一、むかしは大金持の大じんなれど、世の盛衰とて近年をちびれ、雑式の金ばうよりいたきびんぼうにたたかれ、あしこしもなやみはて、せん方もなく乞食になり、或時は清水寺又は北野七本松の邊にて、往來の人に袖乞してげり、然るところへ當流の大じんと見へて、友だち多くつれだち、太こ交りにて辨當したゝかにもたせ、上下さゞめきありく所へ、かの乞人やぶれあみ笠かぶり物を乞折ふし、おとに聞えし太こにへたとあふむ也、はづかしく思ひちやくと見ぬ顔せしが、何が當世のさをり者の太こなれば、むかし思を見たるよしみあり、彼袖乞人にことばをかけ、少し小腰をかゞめいふやうは、もうしおまへはそんせうごなた樣にては御座らぬか、扨もひさしや、して是はいかなる事にてかやうの御すがたにならせ給ふぞと、いとしみ〴〵とたづねければ、むかしせんじやういふたるくせにて、あゝ音たかし〳〵必さたはなひ事、わざと此身に成て親のかたきをねらふといふた、

第七、印判屋のむすこ

一、ある所に印判屋はとし頃の親父にて、常にめ金をあてゝ細工せられける、去人ゐんばん一つ誂へさき銀をわたし、いつ〳〵の日は出來申すけいやくして、扨其日印判を取に行ければ、折ふし親父他行いたし、百の錢十一二文ぬけたる廿許のむすこがいふやう、其方樣は見知りませぬといふ、先日あつらへ申時、そちは爰に居てよく存たるはづじやに、何とてさやうには申ぞ、今日夜舟にのり大坂へ下る也、是非ゐんばん請取べしといふ、件のむすこ、今しばらく御まちなされといふよりはやく、親父の目がねを取出し、わが目にあてゝ此人を見て、私は見知らねどもをやぢの目金で見れば、先日御出なされた人じやといふて印判を渡した、

第八、船のしかた

一、町人四五人寄て酒を呑けり、其中に始ての衆兩人あり、たがひに盃をいたゞきけるに、肴をはさみぬる體をみて、われにくれると覺て、盃を下に置手をさし出せば、その人にはやらで、おのれが儘にはさみくふ也、かの手をさし出した人、はづかしくてにはあしくて、もうし何れも樣沙汰はなひ事、此私が手は舟によく似ませぬかといふて引たり、

第九、文盲なる者の子細を習ふ

一、さい〳〵醫者衆へ出入いたしたる人有、醫師病人にむかひて、瀉するか結するかとゝはるゝを聞て、ある時其子細をとふに、瀉するとはくだる事也、結するとはくだらぬ事也、是はこびたる言葉やと思ふ折ふし、親類中の商人來りて、明日長崎へ罷下が、なにも御用の事は候はぬやといふ時に、何とて長さきに瀉するとや、やがて無事にて結せよといふた、

第十、灸をろしのさた

一、あけくれぶら〳〵煩ものあり、醫者の許へ行て脉を見せければ、藥ばかりにては中々治しがたきせうも也、これはふじ三里にをもさま灸をすへられよといふに、病人かさねて談合申べしといそぎ宿にかへり、扨々うつけたるくすしの申されやうや、富士はきゝおよびたる大山也、其ふじ三里が間に灸をせよとは、いかに病がなをるとて、そりやそももぐさがつゞく物かと、

第十一、新佛一體の望

一、にはか道心をこし、新佛一體のぞみて佛師所へ行、大座後光のせんさく申折ふし、それに付京の因幡堂の本尊藥師如來は恭ばんに乘らせ給ふが、あれはめづらしき大座にて侍る、何と謂れの有事かといへば、成程いはれもあり尤成事なりといふ、其子細はあの因幡堂は四町にかゝつたといふ、

第十二、同不審

一、又信州善光寺の如來は臼に乘らせ給ふと聞及たり、成程尤さうなり、ゑんぶだんごなればうすへ入ましたもことはり也、して立像かと問ければ、杵藏にて有べし、

第十三、花見の張賃

一、われ人ともに一日の遊興、千年を延る心地ぞせり、爰に西陣の內さる一町中のこらず、東山双林寺へ花見に行けり、春宵一刻あたへ千金の永日も、夕陽しに入あひのなるころ、番やの又助家々をふれけるは、迎に人を御やりなされよといふ、何れも絹やの事なれば、女弟子斗にて男ぎれは鼠もなし、とかく町中の迎なれば、總ようの名代に又すけ何とぞ了簡せよと、宿老の內儀が申された、又助やがて會所の家より張賃を取出し、東山さして行ける、又すけお迎に參たるといへば、いづれも座敷を立けるに、道闇なれば又助ちやうちんをとぼしける、常の張賃にてもあらば

こそ、町中のかたみうらみもいかゞとて、町のたて張賃を長きさほ竹にをし立、はりひぢ肩まくりして持たるをみれば、西陣何組何の町と大筆にて書付け有なれば、花見戻りの群集きもをつぶし、火の手も見へずはやの音もせぬにふしぎや、如何さま氣遣なりと、諸人此ちやうちんをみてどこじや〳〵と云た、

第十四、りんきばなし

一、りんきふかき女房あり、其となりに夜半のころいさかふ聲しけり、何事にやと夫婦起て聞ゐたれば、男の惡性いたづら成によりをこりたるりんき、いさかひの修羅なり、此女房もとなりの事を身にさしあてもらひ腹を立、何の理も非もなく我男のあたまをつづけばりにはりけり、男これは何とする事ぞ氣が違たかといへば、いや少しも氣はちがはぬ、そなたも向後たしなみ給へ、此後もあのとなりのいたづら男のやうに身をもつなといふ事よ、

第十五、同講のくはだて

一、わかき嫁の方より、陰居のかみ様方へこしもとを使にやりければ、何事の使に來たぞと仰あれば、いやおくさまの仰られには、少物の講を御むすびなされますにより、御ゐんきよのかみ様も、人數に御入なされぬかとの使に參りたると申す、あらけふこつや、是ほどいそがはしくてならぬに、それは何の講じやとはれければ、別の子細にあらず、悋氣講をおく様の大將にて、誰々も御入むすび有と申せば、りんき講ならばおれもふたりまへまじらふぞと云てくれい、成程つね〴〵おれがこのむ所よ、

第十六、辻談義

一、去人辻だんぎを說坊主に逢て不審するは、あの雉きじ杯といふ鳥をみるに、男鳥の毛色は殊に見事に侍る也、あれは先生は何ものが生るゝと問けるに、とんさくのよき坊主にてあれば、大方役者の若女房若衆方の生れ替りそふな、其子細はうつくしく衣裳かよひといふた、然らば女鳥は毛色あしきが何ものぞ、あれはびんぼうなくはしや方の生れたると因果經にあるといふた、

第十七、順禮捨子の咄し

一、關東の言葉になまりの多き順禮二人つれだち、はじめて京へのぼり、五條の橋を通りけるに、折ふし捨子あり、かの順禮此子を見て先へゆく同行にいふは、

爰に子ぬがすて丶有といへば、つれ聞て米ならばひろつてこひといふ、しかも赤子めだと云に、それはたいたう米であるべひ、よしさくるしゆなひこんだに、はやくひらつてこよせといふた、いかひ雨けちがひじや

第十八、文盲なる人水瓜のせんさく

一、祝言振舞のうへにて亭主水瓜を出しければ、其座に文盲なる人のいふは、此すいくはと云物はくはぬ物じや、これをくえば神鳴につかみころさると片じやうしきにいふ、座中興をさまし、其方はちかごろそさう成事をいはる丶、さやうの言いはぬ物じやと笑止がりける、扨はいづれもは物のわけを御存知なひとみへた、神なりは水瓜のた丶りといふに、

軽口露がはなし巻之四終

軽口露がはなし巻之五

第一、誰にもせよきびのよい事

一、思ひもよらぬもうけをしたといふ次でに、おれも噺そふ、きのふ河原の村山が芝ゐへ見物に行ければ、狂言最中に行か丶り、せんかたなく棧敷の下にて立ながらみてゐたに、何かはしらず眞中程をちらと見たれば、年廿許の女房やんごとなき御姿にて、下女一人つれて見物せられけるを見ると、其ま丶戀風ぞうと吹、心もうか／＼と成、舞臺の方へは目もやらず、いかさまくどいてみたひ物じやと思ふ折ふし、かの女房下女をつれてかへりける、おれも跡に付出ける、扨それより、祇園清水大谷大佛方々を行けるに、さのみ禮拜の體もなく、いか樣此女はわれをみて當世のしかけ女じやと思ひ、いやこれは是非共宿を見屆、重てくどく種にも成べしと思ひ定め、そろり／＼つき廻りけるに、もはや日暮に及、かの女せいぐはんじ墓のをくへぞ行ける、幸よき所よ宿迄行にをよはず、爰にてくどき是非念をはらさんと思ひ、われも墓のそ

ばへ行ければ、却て女の方よりわれに言葉をかけ、おまへ樣はけふ一日わらはに付そひ、これ迄御神妙御出忝し、とくにも言葉をかけまいらせたく候へども、さすがに人め遠慮いたしたり、おまへ樣の物が此中におはしまし候はゞ御取なされよと、はな紙袋きんちやく、又は金銀の入たる打替かず〳〵の物を懷中よりなげ出した、おれも案に相違したと仰天して、是はみな私が物で御座るといふて、有たけ取て戻りたと、大きにはなしける、是はみな夢のはなしじやといふた、

第二、葬禮の七五三

一、ある人あほう成者にいふやうは、あすは上の町よりけつこう成葬が有と咄す、けつこうといへば振舞の事じやとこゝろえて、押かけたくさんにくはうと思ひ、一めもしらぬ人の葬禮に行、大勢の人は皆かへりけるに、此ものはしりはてにかへり、すぐにきのふ咄したる人の所へ行て、そちは大き成うそをつき、おれをはまらしたとうらみける、それは何事なればといふに、尤けふの葬は七五三程けつこうにあれ共、膳は出なんだ、あまりな事じやと思て、もり物に手をかけたれば、をんぼうめがたゝきころそといふた、

第三、小法眼の二幅一對

一、明後十一日靈山宿阿彌におゐて御酒進上申度候、御出可レ忝候以上、おの〳〵同道していそぎける、亭主本走の小法眼が書し龍虎の二幅一對をかけられけるを、みな〳〵立より詠め居て、ひとりの文盲成おとこつく〴〵虎を見て、扨も此猫は上手のかいた物かな、此やうないちもつを一疋持ならば、夜の目のあはぬ事はあるまひといへば、又ひとりがいふやう、ねずみ取やうな目で何やらにらんでゐるといふ時、宿老龍の繪にゆびざしゝて、實々そのはづで御座る、寃なからざけをねらふてゐまする、

第四、道頓堀にてきんちやく切とらへし事

一、去る町人、大坂道頓堀にて巾着物をとらへて、先のきんちやくを返せとてせごしけれ共、此盜人いろ〳〵ちんじけるが、次第に人多くかさなりて、それふめたゝけなどとこへ〳〵にいふ、かの者が申やうは、貴樣の巾着は取とひとしく同類に渡、こゝにはなし、明日返進申べしといふ、それはいよ〳〵肝のふといひ分かな、とかくてうちやくせんと申時、かのぬす

人獨言を聞に、じたひおれがのが分別ちがひじや、やつぱり大ちやくな分なればよきに、いわれぬきんちやくに成たるゆへよと、

第五、性わる〳〵の坊主

一、さる町庵に坊主あり、妹といふて女を置、甥といふて子を持けり、され共念佛の音聲よく鐘をよく打により、俗衆の念佛講へやとひける、いやなくせにて博奕をすいて、人にかくれて折々其場へ行けり、或時念佛講同行衆とて庵へさそひ寄ければ他行のよし、今晩は講にて爰の御坊をつれねば講中にかね打人なし、何方へ參られたると留主居の女にしきりに問ければ、是非なくそこをおしへける、先へ行みれば最中さかりと勝負有けり、扨々人には人くずとて御身あたまを丸め、なまぐさし寄てかやうの掛勝負をめさるゝ事、所存のあしき事なり、よしあし人にうたはれぬ先に少たしなまんせ、內に女房子もない物かなんぞの樣に、性わる〳〵と散々にしかりければ、坊主がいふやうは、其やうに御しかり無用なり、掛勝負にては更になし、座中共にみな現金勝負なり、念佛講のかねはみな來世がねじや、まづ〳〵今ばんは、御ゆるしあれといふた、

第六、此碁は手みせ禁

一、有德成町人せいじんの子共に世を讓り、その身は禪門になり裏座敷に隱居せり、同町に又さのごとくなる人有けり、あけ暮碁を打てたのしみ、相手もかはらず此兩人より外に碁の友とする人もなし、或日一方の人つゞけて二番まけられ赤面して打程に、又三番めの碁もまけにみへける、大石しにたる所を一手みせよといへば、中々見せるけしきはなし、是非共是は見せよ見せよと、たがひに盤の上にて手をねぢあひ、あげくの事に黑白の石をつきくづし、たがひに腹立しておのれしのれといひ合、向後一生そちと碁はうたぬぞ、いかにも參會止にいたすと、堪當言葉にて罷かへりける、扨其日も西にかたぶき外の友とてもなく、枕引寄つく〴〵とけふの口論を思ひ出し、とかくむかしより短氣は損氣といふは爰ぞかし、先程の碁一番まけて打ならば、今時分まではしこりかゝり打てなぐさまん物をと、兩方ともにこうくはひしける、同町の事なれば、明れば早天よりかの相手の門を通とて、たがひに尻目にてにらみあひ、一方よりい

ふは、なま年よつて朝腹から碁のうちたそうなつらなさいへば、門を過たるが立止り、打たひがおのれにかまふかと、目に角入てとがめける、打たくば爰へうせをれ、慈悲にうつてこませふぞといふ、慈悲にもせよあだにもせよさあ〳〵打て見くされと、誰あひさつなしに中をなをりた、

第七、伊勢ぬけ參

一、江州矢ばせの船にて、九州肥後の者なるとて、年十一二歲なる子供、伊勢へぬけ參とて兩人船に乘ける、此もの路錢すくなく持けるにや、たゞし腹中ひもじさの折からにや、一人がいふやうは、あの三上山が飯ならば唯一口にせしめん物をといへば、又壹人端的の返事に、此水海がとろゝ汁ならばをれでもなふくいかねはせまひといふた、乘合の中に心ある人や、此言葉を不便にや思ひけん、船中にて勸進をあつめ、錢壹貫文くゝり、此兩人の者につかひける、誠に神德有難し〳〵、

第八、九品の淨土九々の算用

一、さる法化の坊主と淨土の俗と、道づれに成行途中にて、坊主いふは、其方は何宗ぞと問、俗聞て、忝も極樂淨土といふに、坊主何の忝事が有べしとあざけるを、俗、念佛のありがたき事は、佛ぼさつ祖師達九品九々の淨土と申也、しらずばいふを聞給へ、先二四八三四十二日は藥師、三五の十五日あみだ、三六の十八觀音、三七廿一日弘法、三八廿四地藏、五々廿五日元祖法然、四七廿八日親鸞、かくのごとく念佛の宗門みな九々に合なりといへば、坊主聞ていかにもさこそ有べし、又此方の日れん上人の日も左のごとしといふ、何と十三日が九々に合かといへば、九々も算用も入らばこそ、十三日は世界の衆生を二まひのあたりなれば、一つにかきなでゝすくひとるといわれた、

第九、常題目の地形

一、北野に常題目といふ所あり、去法花の俗人聞及て、はじめて參られけるに、寺内事の外ひろしといへども、地形たかひく有て見ぐるしゝ、迚もの事に地をろくにならしたき物かなと噂するを、亭坊申さるゝは、此高ひくありてこそ題目も相續すれ、ろくじは此方にさし合じやといふ、

第十、ゑびす講の書狀

一、十月廿日ゑびす講の振舞するに、嘉例の客、もん

もう成人の方へふみをもたせ呼にやりけり、今日はゑびす講にて御座候、早々御出御所に候以上、誰殿參ると書したゝめもたせやりけるに、此文をみて事の外に腹立していふやうは、此やうなへたらしき文のかきやうがある物か、此さむぞらにおよびて御出あをぐ所とは何事じや、御出なされ候はゞこだつこだつと書たい物じや、

第十一、辯說の過たる乞食

一、乞食は座入してより袋を首にかけてありくとや、ある所にて辯說にまかせ口をすごしける乞食を、さん〲たゝきければ、此こじきしたゝかたゝかれて後いふやうは、おれも神主のながれ也、汝にかならずばちがあたるべしと、大きにのゝしりけり、それいかなればさはいふぞとゝふに、此袋は忝も社也、それをいかにあれば、紙のやどり給ふなわ社だんじやといふてりくつにつめ、なぜに打ちやくしけるぞ、弓矢八幡勘忍ならぬと大きにねだれければ、打ちやくもたゝきもせぬ也、おのれ乞食にてくれよといふにより、慈悲におもさまくはしてとらしたといふ、

第十二、入院ぶるまひ

一、眞言寺へ村中のこらず入院振舞によばれ、住持弟子に申付、寺の什物こと〲くとり出し、それ〲の道具の名をいふて見せられたり、何れも見物いたし、其中に輪によくにたる物は何と申ぞとゝふ、是はりんぼうと申物じやといふに、もんもう成百性、さてさてむかしよりつゐに見た事がない、耳にきくさへいやじやに、まして目に見る事うるさし、はやく捨給へ其びんぼうをと、

第十三、知らねば是非もなし江戸の島原京の島原

一、江戸の芝居をしまばらと云、京のけいせい町を島原といふ、江戸より去人はじめて京へのぼり、上京に何共ならぬこくめん成人の方に宿取ゐけり、或時四條がはらの芝居を見物してかへりけるに、亭主今日はどこを見物なされたるとゝふ、客は何心もなく今日は島原へまいりたるが、扨々おもしろい事かな、酒をのむ所もぬれかけたる所もあり、近年のなぐさみ又明日も參るべしといふ、亭主色をうしなひ、扨て扨て惡性人かな、きのふけふのぼりて程もなきに、はやけいせいぐるひをめさるかと大に異見した、

第十四、欲のふかき長老

一、欲ふかき長老同宿をつれてある齋に出し、齋料に布施をつゝみ、童子にもたせ長老の前にをき、是は百文とみへたり、後に亭主廿疋つゝみけるをもちて出、同宿が前に置、長老あら不審や前後失念にてこそあらめと、寺へかへりて同宿にむかひ、さいぜんの布施は施主取ちがへたると覺たり、おれがのをそちへやり、其方がのをこちへとらんといふ、同宿めいわくなるふりをするに、いよ〳〵ほしく思ひ、我分をなげ出し、かの二百文づゝみを取あげて見たれば、蠟燭二丁有けり、

第十五、後家の町役

一、或町に番の事あり、家役なれば名代立べきやうもなし、其町にひとりの後家あり、此人にも番させんといふに、めいわくに思ひ色々わびごとを申けるは、もつとも町義の仰をそむきて番せまひにては御座ざらぬ、はかまを着ては小べんが成ますまひと思ひ、これ一つ氣のごくであんずるといふ、

第十六、小間物屋が覺帳

一、一生よみかきしらぬ文盲成小間物や商人ありけり、ひかへ帳あきなひ有ごとに人には賴まれず、自らさいかくして、小刀をもつて三尺計の木にきざを付、我覺へとして埒をあけゝり、ある日暮のくらまぎれに小間物を賣たるを、又かの木にきざを付るを、むすこながめゐて、とゝくらがりで物をかひて、手をきりやるなといふた、

第十七、十夜の長談義

一、關東よりのぼりたる長老寺へすはりて、始て十夜の談義をとかれける、洛中の男女くんじうせり、長老高座にて申さるゝは、それに付うけ給はれば、愚僧がだんぎは長がくてたいくつなと、女中方の申さるゝと評判あり、理句義のよくつまるやうにと存て申也、さりながら今晩のも何れも次第にいたそふが、女中だち何と思しめすぞ、みぢかひがよいか長がよいかとくりかへしとはれける、参けいの男女返事なくくつ〳〵とわらひけるを、長老腹立せられ、高聲にそれはかたがたの氣のやりやうがわるひといふた、

第十八、江州土山のばくらう

一、江州土山の者、ばくらうのもとにて馬壹疋買ける

に、眼爪かみくら下其外そろひたるとほむる時、何と川わたりはよきかととふに、中々の事川は鶉じやといふ、めでたし〳〵とてよろこびもどりけり、四五日過て雨ふり田村川の水まさりける時、かの馬荷を付川をわたるに、中程にてどうと臥たり、買ぬし氣のごくに思ひ、やがてばくらうが所へ行き存分をいひけるに、さればこそ川は鶉じやと申たは、鶉といふ鳥の水を見ていらぬやあらんといふた、

元祿四年未七月吉日開板

輕口露がはなし卷之五終

しやうぢき咄序

あけらほんと相思草(たばこ)のけぶりに口びるをふすぼこかして、行返る昔いまの噺の品をつく〴〵と思ふに、定すくなきいつはりがちなり、されはとて萬にいみじくとも、咄好まざらんおのこは、たまの御客にあいさつなき心地ぞすべきと、せんしやうもの丶ふるき言葉をとりては、予正直咄大鑑となづけて、正敷見聞たる所の噂をつゞるに、四卷半あまりて見るにをかしさして、かたへの人にほのめかすれば、手をひろげ口をゐごく〳〵として、しばしものをもいわず、なふ是はとそこらうちをつ丶けばこそばし、腹筋の替色香もよしや吉野の山櫻に、花のお江戸の笑草、いざとゆふべの物語、其色品をかきわけて、題號にあらはすものならし、

勝詞記咄大鏡目録

青之卷

一、はなしの咄　なむあみだ六字にかなふ人ごゝろ

二、だいじやうご　すゞしさやこゝろのそこの柳樽

三、お寺のいぬ　ふかくとりてあさき川瀬の二度びくり

四、花車(きやしや)商人　みてもやさし人の言葉の花ざかり

五、ふしぎの神託　しん〴〵は萬病にきくふじの丸

六、六塵のゐんねん　むねたはろふ理はさま〴〵に鳥ばゝき

七、谷中のりせふ　一すじにたのむ佛やかんのふじ

八、雲井のうそつき　田舍人の口に狂ありをどけ事

九、託宣のよみかへ　あくといふも善にもとづく神のじひ

十、すゝむる功德　いのるしるしはやくひらくる妙法花

黃之卷

一、おどけ法問　とふて智惠なみたるこゝろや一旦那

二、非人じせい狂歌　土中にもくちぬこがれのくちずさみ

三、文盲のおやち　しらざるはしらざるぞよき老のさた

四、商人のよびくせ　もんだうはたがひにさがなにないぼう
五、時のかねの云なし　是かあれかおのが心のうけごたへ
六、猫のちほう　成佛はたゞいちもつのどうりかな
七、商のけいこ　だんこうのあるにもあらぬたさい事
八、天道のめぐみ　からかさのさすがに是もりくつもの
九、三味線の物ずき　かたりじやうずそのしな〴〵や一二三
十、赤銅のめきゝ　さいわいにあるもむかでのあしきふん
十一、ひよくの魚　ことはりはつきぬちぎりのふかき海

赤之巻

一、かた事のうはぬり　そのしなもしらで詞のこはしだて
二、無筆の字せんぎ　それぞともいふにいはれぬ物をしへ
三、あまりの卑下　ですぎじと思ふ計の身だしなみ
四、買て小辨　よしあしにいふせわごとや江戸ならひ
五、萬病錦袋圓　さいかけてつまるその身のちぐすり
六、盗人のりやうけん　つみならでひいき〳〵はさきのさり
七、御家の八藏　ゐんれんのきいてふこくな下をとこ
八、角内が物をじ　をくびやうは心の鬼の身をせめて
九、利くつの金公事　かるくちやさすがこなたもとなりもの
十、扶持人のざとう　さみせんの引手もおほき名つけおや

白之巻

一、吉原上郎のみ立　つめのことばはどうも先手後手
二、田舎者の口上　ぎせちなくつくろふ花のお江戸さあ
三、浦川の舟賃　口ろんぎうつもはやすもしもがかり
四、官女のうはさ　くものうへありしむかしの物がたり
五、上方の顛瓢者　まかり出てそこつながらもやさ男
六、大織官淨瑠璃　人ごゝろさとるむすめのあながしこ
七、勘判の讀そこない　かくべつやあきれはてたるものわらひ
八、とぶらひの難儀　をもひよらぬさてももふじやのかわり言
九、もつとものあつひ　なにとなくいろにこゝろをよせいもの
十、はなしの仕様　かみなりやなちつゐていへさきのきやふ
十一、異名の蝿　のぼるべきはらのかわつたふへのさた

黑の卷

一、後家の事はり　おもしろくこゝろをつけしろのわん
二、番太郎が出來口　いやしくもなさけごゝろやおなじ道

三、和氣のたゞ中　石よりもかたき　しなしもなさけなり
四、同二番目猫の中媒　あいみての　後のこゝろや戀の種
五、やぼの小僧　是はさてのふおそろしき　はつしぐれ
六、大津の高札　つけすぎしくぎりの　程のこれにさて
七、夢想の馬藥(めうやく)　ものごもやおかたの　わけはそれほどに
八、いらぬいひわけ　らちもないふすまの　かげにむく／＼
九、庭前の桃　春雨のぬれにいろづく　花のゑだ
十、戀の空事　天も地も一心にある　はなし口

目録終

正直咄大鑑青之巻

第一、はなしのはなし

堺町邊にてさる人きたりて咄けるは、さて／＼とんだはなしがござるといふ、いかにとゝへば、信濃の善光寺にいらるゝ坊樣の江戸見物にわせられた、芝筋を見せんと思ひてつれだちてゆきますに、新橋の方よりざるをになひて、なまあみじや／＼といふてかけきたる、彼坊みてじゆづをとりいだして、かのあみうりをおがみながら、どこの人じやとゝふ、三田の者で御座るといへば、何方のかたじやとまたとふに、あとの方をゆびざしゝてかけとをりけるを、かんたんくだきておがみ給ふ、なぜおがみ給ふとゝへば、さて／＼お江戸にはほとけがござる、おもき荷をもちながらも名號はわすれず、南無阿彌陀／＼ととなゆる、どこの人じやとゝへばみたのものとこたへ、ほうがくをとへば西の方へゆびさす、あまりに有難しとておがまれた、田舍坊主ほどおかしき事はなしとかたる、ていしゆ評して曰、それはおかしき事になし、

目出度坊様かな、それ人のこゝろに物のおともおふづるものなり、たとへばきぬたをうつに、子供かゝさまゝゝといふときはひゞき是におなじ、なまいたなまいたと云時は、またひゞき是におふづるがごとし、そのひと名號心にたへぬるに、生海糖を南無阿彌ときゝ給ふ事此人佛なり、むかし栂尾の上人道をすぎ給ひけるに、川にて馬あらふおのこ足々といひければ、上人立どまりて、あなたふとや宿執開發の人かな、阿字々々となふるぞや、いかなる人の御馬ぞと、あまりにたふとく覺ゆるはと尋給ひければ、府生殿の御馬にて候とこたへけり、こはめでたき事かな、阿字本不生にこそおい侍る、うれしき結緣をもしつるものかなとて、感淚をぬぐはれけるとぞ、ありがたきこゝろゆへ、兼好もつれゞ草にかゝれたも、是におなじといわれた、

第二、大上戸

爰に大酒をこのむ男あり、春はとそ酒に命をのべ、桃の酒に心をうつし、夏は柳樽のもとにすゞみ居てはひやざけをたのしみ、秋はさか月のかげにまくらをかたむけ、隣家にさけをあたゝめて紅葉をたき、心のすまぬ折節はにごりざけをたのしみ、冬のさみしき時雨の夜すがはあられ酒を友とす、されば夕部に大酒してあしたにしすともかんなべをのみはなさじとす、時にしたしくかたる友達、此人はつゐにはないそんの生成とて、さまゞゝといさめけれども、酒こそいのちなりとてすこしももちゐず、有時大酒してさんざんにはきたる中に、友達鳥のきもをいれて、つねづね云たるにさけをとめ給わぬこそぜひなけれ、今貴殿のはきたまふを見たまへ、人に五ぞう有、そのうちの一ぞうをこれはき給ふぞ、五ぞうが一ぞうかけたれば、あとは四ぞうにきわまつたといへば、かのものきひていやくるしからず、天竺にも三藏法師あり、我が町にも下の町にかぢやの二藏もいまだそくさいじやといふた、いかいすきの、

第三、お寺のいぬ

去御寺のおしやう犬を秘藏せられけるに、名をさげをとつけられたり、あるとき心易き旦那衆四五人きたりて、ひめもす遊ばれけるに、ひとりの云出されけるは、犬の名もおほき中に、さげをとつけさしつたは、さりとてはかわつた名じやといへば、かたはらよ

り、いや此御寺樣はさぶらひ筋のお人じやさかひ、武士道でつけさしつつら、まづいぬは用心のためじやによつて、あのいぬが内にあればわきざしにそふといふこゝろで、さげをであらふといふ、獨の云けるは、たゞし下緒とはげじよとかくなり、見ればめいぬそふなさかひに、しもの女といふこゝろでさげをかと云、又ひとりの云けるは、どなたもりくつはあれども、それでも下女のしよの字がきてじじや、さりながら脇指の下緒に相きはまつた、あのいぬいつも庫裡のかたにばかり居るさかひに、くりかたにつくと云こゝろかといふ、とかく御寺樣のつけさしやつた名じや程に、成程ふかいりくつであらふとて、和尚の前へいでゝとへば、おもひの外にちがふた、あの犬門へさへでると、となりのいぬにかまれ〲して、それに恐れておゝさげてありくさかいに、下尾とつけたといわれた、

第四、嘩唓(きやしや)のあきびと

南鍋町、八官町といふところを、商人四角成かわごをおふこにかけてかつがせ、きびら、ならざらし、しまだがみやと云てとをりしに、間口十四五間に美々しく立ならべたるやかたのかうしのうちより、ほそやかにけだかき御聲にて、なつ衣と仰けるに、商人我をひとへによび給ふやといふて立寄ければ、うば臺所口のかたゐまはりて、お姫樣の帷子ごらんなされたきと仰じやに、きたまへとて内へいれける、御年の程は三五夜中眞月の色めく御かほばせ、ゐもいはれぬむすめ出て、帷子を取いださせ、古のならのみやこの八重ざらし侍るやと仰ければ、京九重にをりいだしますといふてさらしをいだしける、ほの〲と明石ちゞみはおわすかとあれば、島がくれぬるもよふよしがござりますといふてみする、扨色々のそめかたびらもとりいだしけるとき、娘はないろのもよふをみて、此色はなにとやらんいやしきやう成がとて、又難波津にさくや此花いろも人のかふかとおほせければ、いまをさかりにうるやはないろと申ける、うばききゐて、賣かふものもおほき中に、お姫樣のといやう、あきびとのこたへやう、おもしろくのたまふ、ごこ言葉でござりますといふ、そばにありし上郎、あれは歌のかみにてとい給ふ故に、歌の下にてこたへ給ふといわれて、いまゐとくしたりとて、うば與作丹波

の馬織はござらぬかとゝへば、あきびと、いまはお江戸のかたなさしがきますといふた、

第五、ふしぎの神託

過しころ湯島の天神類火のとき、門前人こぞつてなげきけるは、じせつきたれば御神ものがれさせ給はぬ事ながら、御氏子の中にもわけて御手子なれば、かかるくわなんにあふ事をつげさせ給はぬこそほいなけれ、神は人のうやまふによつていをまし、人は神のとくによつてうんをそふとかや、などはんじやうの上にもはんせうをねがひ奉るところの氏子、ことに此御神はれいけんあらたにをわします事、むかしより諸神にすぐれさせ給ふに、いかなる御事ぞ、神はてんじやうなさせ給ふか、とかく湯花をあげて御託宣をきかんと、かぐらをそうし御湯花をさゝげ奉る、有難くも神はのりうつらせ給ひて、ところの氏子なげく事ことはりなれども、つげはまへかたよりありけれども、ぼんぶさとりなし、たかむろほつきやうけんりんにゆいつけて、あまねく江戸中へふれさせたり、天神前骨薬〳〵といわせしを、しらねばせひなしと、神はあがらせ給ひけるとかや、

第六、塵のゐんねん

去人珍客のきたるよしにて、座敷を掃除しけるをりふし、いつも出入しけるすかんぴんの浪人來りけるに、ていしゆ出合、明日すこしきやくゝをゑまするゆへ取込でござるが、おはなしなどゝもてなし、さて此ごみといふ物は、さりとはつきぬものでござるといへば、浪人その誇をごみとおほせはひが事じや、それはごみとは申さぬ塵と申といはれた、さてはごみといふ物はちがひましたかとゝへば、なか〳〵塵とは千里とかいた字じや、いづくよりくるとはしらねども、ほこりはなにほどたてこめたる宮殿樓閣ゑもいるものなれば、千里ひとはねといふぎりで塵と申とかや、また塵にまじはるものに五微六塵とてあり、さればごみのみの字六ぢんのぢんの字をあわせて、めにも見へぬところのほこりを微塵といへり、所謂色、聲、香、味、觸、法是六塵なり、五微と云も、世中のついゑにして、人うるさくいやがる物五つあり、蚤、蜆、鼠、盗、暗闇これが五微じやといはれた、

第七、谷中のりせう

谷中感應寺の高祖は、いかなる願望にてもかなはず

といふ事なしとて、江戸中の諸人さま〴〵の立願のかけるといふをきゝいで、さる人痔をわづらゐてくるしみのあまりに、淨土宗にて有しが彼寺にまいり、平愈の願の立、百日法花に成こもりける、七日にまんずる夜、夢中に有難も日蓮大聖人あらはれさせ給ひて、弓手には唐芥子をもち、めてに御經を持せられて、けだかき御聲にて、これを朝夕三年喰すべし、すなはち妙薬なり、かくのごとくの物はみな藥のためにこれをあらしむ、令百由旬内無諸衰患とのたまふとおもへばゆめさめぬ、ありがたしとらいはいしてかへり、終にくわいきをゑたりと、去法花宗にかたりければ、此僧たとへに曰、さる事あるべし、一切のくすりもほとけのおしゑにもれたる事なし、たとへば唐に計伊といふものあり、和國におほき瘡毒をわづらひけり、いまのかさこれなり、なか〳〵むさきやまいなれば、垣岸山といふやまにすてたり、計伊ふかくなげき天にきせいしけるとき、一人の童子あらはれ、其山に有し荊棘をおしへたまひて、是好良樂今留在此汝可取服勿憂不差此もんをかくおほせられて、われは文珠師利菩薩と雲井にひかりをはなつてうせたまふ、これ法花經のもんなり、このよきらうやくをいまとゞめてこゝにをく、なんじらとつてふくすべし、計伊いへずとうりやうる事なかれとのこゝろなり、計伊かんるいきもにめいじ、彼ねをとりてふくす、病いゑて日數百餘日すぎ古里にかへりたり、みるにわかやぎいろつやゝかなり、所人ふしぎのおもひをなし尋とへば、右之次第をかたる、末世の寶藥とて、名付て山歸來といへり、やまよりかへりきたるとかけり、いままた日蓮のさづけ給ふも法花經のようもん、令百由旬内無諸衰患とかきて、ひやくゆじゆんのうちにもろ〳〵のすいげんなからしめんとのこゝろなり、されば法花經はよきやうにすぐれてくどくふかしとて、すゝめて法花宗になした、

第八、雲井のうそつき

有所に大せい寄合ばなしける折節、何事をといかけてもつまらず、それ〴〵にはなす者ありければ、ひとりの中いだしけるは、公家衆などの御名は、成程けだかき名ばかりありそふなものじやに、きくに鳥の名がおほい、まづ鷲の尾どの、烏丸殿、鷹司殿などはみな鳥の名でござるは、がてんがいかぬとさふ、それは

さりの名がことはり、鳳凰樣へつかへさしやる公家衆じや、鳥はそらをとぶものなれば、そのやうな名をつかしやる方を天上人といふといへば、それならば下のなはつかしやらぬはずじやに、上よりしたにゐる海にすむかいるいのたぐひを名につかしつたがござる、馬刀の小路、辛螺きの小路などは貝の名でござる、そのはず錦小路萬里小路殿は主御門へ伺公の方がたじやといふ、さてまたちくしやうの名をつかしつたがござる、佐目牛殿、猪熊殿是はどうしたものでござる、このかた〳〵は御節會などのおりから、出御のとき獅子いでんへつめさしやる衆者さかい、けだ物の名でござると云た、

第九、託宣のよみかへ

淺草のかたはらに、不動院といふたつとき山伏おはしける、だんぼうより日待をたのまれ給ひて、小座敷床に三社の託宣のかけ、まへにくもつをそなへ、よもすがらいらるゝをりふし、盜人宵よりしのびいりて、つまどのわきにたゞずみ、内のしづまるていを待居たり、夜はしんかうにおよべども、内のあかりはしめらす、何樣有明をとぼしなくなるべし、寶の内にいりながら、手をむなしく夜をあかさんも口惜き事におもひて、ゑんがはにあがり障子のすきみれば、床のまへに坊主ひとりいねぶりいたり、障子そろ〳〵とひきあけ内にいりて、屛風のうしろにまはり、かけてありしけさごろもきるものなどとりてひくとき、不動院みつけて屛風をひきあけて見れば、おとこひとりうつぶしになりてゐる、何者ぞといへばこたへず、其時さてはおのれはどろぼうそうなが、扨々ふびんな事かな、いかにして左樣なるわざをする事ぞ、あの三社のたくせんを見よ、雖レ爲二計謀一眼前利潤一必當二神明罰一といふ事はしらぬか、我坊主の身ならずばすべきやうあれどもゆるす、かならずとゞめよといはれければ、其時あたまをもちあげて、さりながらごらんなされませい、雖レ非二正直一一旦依怙終蒙二日月之憐一とかいてござります、それでぬすむとゑかふをいたしますといふ、坊主から〳〵とわらひて、正直なれば一旦の依怙にあらずといへどもとこそよめとおほせければ、それならばおむづかしながら、かへりてんをつけておかしやりませいといふた、さてはよみそこないゆへのぬす人ならばかさねてはとゞめよ、うゑに

つかへてつぐわんはしよくすとも、ぬすみはするなとて、お初尾の錢を二百文とらせ給ひける、むす人おかしやりませいといふていたゞきながら、じひのしつにはおもむくべしとかけいでた、

第十、すゝむるくどく

江戸通町のかたはらに、店借にてぢゝとばゝをわしけるに、もとよりまどしきむまれつき、舟と橋とはおほきながら、渡りかねたる世のいとなみに心をくだき、佛とも法ともしらず、近所に法花宗にてことのほかなる後世ねがひの人ありけり、もとよりすこびたる人彼者をふびんに思ひて、常にきたりてすゝめ申されけるは、此世はわずかの借りの宿、ながき後の世の成佛をねがい給へかしと、ひたすらにいわれて、おやぢいひけるは、佛になりたり共ゐきなし、さりながらをらが大屋殿の樣に、だいぶんのたなをもちあきないしやうとも思わで、屋賃をとりてらく〳〵とくらす事あらば、ねがいませうといふ、それこそやすき事なり、われ法花經をさづくべし、されどもならひ覺へん事かたければ、そのだいがう妙法蓮花經をとなへたまへ、これすなはち一大事なり、すこしもうたがふ事なかれ、經に曰無量珍寶不求自得ともとかれたり、またいわく、當智如是人自在所欲生、このこゝろは、まさにしるべしかくのごとくの人は、わがまゝなるところにむまれ、ほつするといふこゝろなりとて、法花經をさづけられ、それより後生にもとづき、りんじうの夕部までだいもくおこたらず、つゐに大往生をとげたり、百ケ日にあたるに、彼經をさづけし人不思議のゆめをみたり、うばが方へきたりてかたられけるは、おやぢの成佛うたがひなくねがひのまゝなり、われにゆめのつげありしが、ゐんのふの門前に家屋敷をもらゐて大屋となり、屋賃が壹兩三歩八百文づゝあがりますといわれしほどに、夢のうちに我といいけるは、八百のはしたはなにゆへとゝへば、いまぢごくのせにのそふば壹歩に壹貫貳百します、法花經壹部八卷をさづけ給ふゆへに、やちん壹歩八貫づゝあがりますといわれたとはなされければ、ばゝ、とてもの事に大般若をさづけ給はゞ、なんでもなふ六百貫はあがろふものをといふた、

正直咄大鑑青之卷終

笑事記咄大鑑黃之卷

第一、おどけ法問

去禪寺の頭堂となかよしにて、つねにきたりあそぶだんなあり、今宵もきたりければ、頭堂はるすなり、きやくでんゑ月のさしけるに、十二三歲小僧をあいてにして遊居けるが、だんなもすこびたるものなれば、小僧をなぶりてあそばんとおもひよびて、お小僧は名をなにといふぞとヽへば、弘雄と申といふ、源五平とも與作ともつかいで、こうをとはむつかしい名じやといへば、小僧旦那にとびかヽりて手足をつめる、何事をするといへば、弘雄つみまする、こうをつみてこそ頭堂にはなれ、たとへにもしやみから長老になられぬといヽます、それでもつむではないつねるはといへば、歌に身をつみて人のいたさぞしられけりとよみました、又旦那弘雄は肴がすきかと云、こなたはおすきか、なるほどおれはすきじやといへば、小僧庫裡へかけゆきて、にないぼうを持來てさんざんにたヽく、是はまたどうした事じやといへば、こうをとよびかけてさかながすきじやとおしやるは、こうをのさか名はをうこで御座るほどに、したヽかにふるまいました、だんな、にないぼうをおうことは、小僧、歌に陸奥のちびきの石と我戀は、になわばおふこなかやたへなんと申はしらしやらぬか、旦那もあきれてなにがなむりな事いひかけんと思ひて、弘雄あの鎭守は何の宮じやととふ、あれは稻荷の宮でござる、神は內にか留主かととふ、いなりといふからはるすではござらぬといへば、こちらはなにのみやじや、あれは不動でござる、不同ならばうちにいられぬるすかといへば、あれをしらしやらぬか、戶をたヽひとかけゆきて、戶びらをばた〳〵とたヽひてもどる、事もおほからふ、みてきやれといふ、小僧心ゑましたれば板をとのしましたといふ、また旦那なにをかいわんと思ひて、弘雄あれほど月はさへてござるに、雲がかヽりてきのどくじや、たヽきやれといへば、また小僧つきやまへかけのぼりてかへる、旦那たヽいたかとヽへば、おもふさまたヽかれてそらぢうがはれたといふた、

第二、非人じせいの狂歌

本庄業平塚のわきにとし久敷住けるひにんあり、なにさまよしあるもの丶はてか、いとやさしきゆへに、所の人のたすけにて露命をつなぎけるが、すぎにし霜月のすへよりおもき病にくるしみける、ちかきほとりの非人共きたりて、よきにいたわりしが、次第にまさるさむさに、よるのむしろもうすれば、めんつふの食もたへだへになり、極月廿二日にはしきりに取つめたり、したしみける乞食のなかに、わけてふかくねんごろしける非人ふたりありけるが、枕本によりて、まことに御身いまをかぎりに見ゆる事こそかなしけれ、世におはします旦那衆は、けふはとしこしなりとてそれ〴〵にことぶきのよそほいあるに、せめてさばかりの事こそなくとも、こよいばかりは待給へとなみだながらにいへば、彼非人おもきまくらをうごかして、さもくるしげなるいきをつき、最早此世のゑんたへて、われめいどにおもむくなり、人ならぬ身なればとて、さすがに和歌の御神、そのなもこ丶に在原に、昔男の御びやうしよに、ひさしく年をふるつかの、ほとりにすめる甲斐もなく、しなん事も口惜し、たとひうたにあらずとも、ゆひてこそみんとて、じせいに狂歌しける、

いにしへは世に在原の身なれども
　いまこつじきとなりひらのつか

獨の非人、やさしくもの給ふものかな、此塚にて最後をきわめ給ふは、なりひらのしゆじやう済度のみせしめに、かりにあらはれ給ふように思ふとて、是もついぜんの心にて笑歌をしける、

こころしも爰にしかわる業平は
　これぞまことの在五中將

またひとりのひにん、さりながら日こそ多きに、今宵しもせつぶんのよにりんじうし給ふは、じやうぶつうたがひなし、

なりひらぎさすがこよひのまめ男
　鬼はきらゐでおくるごくらく

第三、文盲のおやぢが事

去人年のよわひもこよみの一廻をこゆる程なれば、入道してゐんきよじよをしつらひ、子息によをゆづりけるに、近所の人きたりて申けるは、ごじぶんさまは御子息様へかとく御ゆづり、おらく人にならせられまづもつて御目出たし、さだめて名もかへさせら

れつらん、法名はなにと申ますとゝへば、おやぢ宗圓と申といわれけるに、そうはさだめて宗でござらふ、ゑんは圓でござるかとゝへば、いや〳〵ゑんは板でござるといふ、きやくもあきれてあいさつなしにかへつた、あとにてむす子しかりけるは、おやぢのしらずばしらぬふりがよいに、ゑんはまるいといふ字かととふに、あふといわれいで、ゑんはいたじやとはなにごとじや、あせが出たといへば、そこなたわけもの、おれもゑんきよじよは竹ゑんじやさかい、まろきはがてんなれども、ぐわいぶんを思ふて板じやといふた、

第四、商人のよびくせ

さるわたり歩行のもの、町宿へきたりて遊びゐけるに、何ともならぬこしやくものにて、よろづに言葉とがめしける、あるとき西瓜をかうとて、おてまへはなにとしてすいくわをすいくわん〳〵とうるぞ、どれをきゐてもさりとはかた事じやといへば、このあきうど、おとがめは御もつともなれども、商人のよびくせにて候、あやまりなりともてうしのぼるやうに申ます、たとへばいろりをゆるりといひきたれば、あやまりなれども申とおなじ、すいとつめてまたくわとつまつた字でござるゆへに、くわをはねました、つれ〴〵などにもおゝかめれを、よみくせにかんめれとはねじを付る事も、言葉優美にきこへて心ふくめるがごとし、そふべつ芋なども聲高くよばんとおもへば、いもう〳〵と申ます、二字につまりたるはよびにくさに、わざと入言葉をいたすといふ、彼歩行者、二字につめてよびにくきは、此中おてまへが大根牛房をうるに、だいこ〳〵とつめてよばれたはがてんがいかぬとゝふ、それも御もつともなれども、あとの牛房をうるときてうしをのぼせんために、だいことつめて其はねしをごんぼんと申で、よびくせがよふござる、牛房をはねるために、大根をつめました、人丸の歌になが〴〵し夜をといわんために、やまどりの尾のといひ、山鳥をいわんために、足曳のといふ枕言葉とおなじこゝろなり、まへをひかへまへをのばしまする事も、あきんどのよびくせとて大事で御座る、すこしの言葉ぐせをもつてことばに云あり、おまへなどの殿様のおともにおあるきなさるにも、馬とりはさみ箱持などは、はい〳〵と云を、おまゐなどは

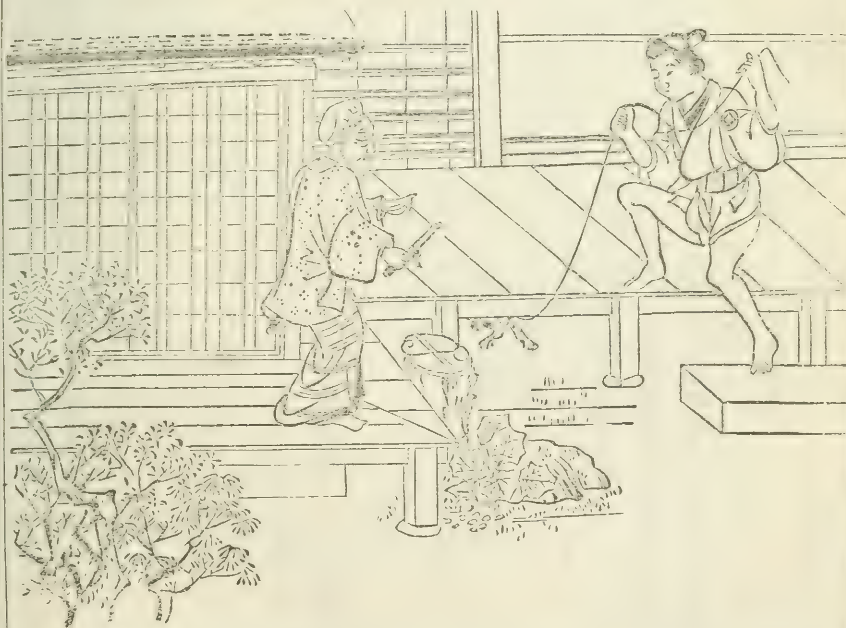
はあい〳〵とおつしやるで、言葉けだかくしさいらしく聞へます、是もあのじが一字多い、土倚がほんでござるといわれて、かのおさぶものをいわなんだ、

第五、ときのかねのいひなし

去者振舞にゆきていさふ夜更迄遊びて、酒によいふら〳〵と歸るに、淺草新寺町をとをりけり、もんぜき前の番太郎に、もはやいくつじやとといへば、六十二になりますと云、さていかひたわけの、かねの事じやといへば、かねをもちますれば番太郎はいたしませぬと云、彼者あきれはて、いやその事ではない、ときはとといへば、ときは明日おてらでござりますと云た、

第六、ねこのぢほう

芝牛町にとつとかたき法花宗のおはしける、きんじよより猫をもらひもとめけるに、さき様淨土宗にておわしければ、此猫もせうご成べし、とかく我所におくからは、ぢほうさせんとて、つなぎをきける猫をとらへていひふくめけるは、一さいの經々のなかに、わがほうの妙法花經は、餘經にすぐれてくごくふかし、されば釋迦如來も、四十餘年未顯眞實とときたまふ、諸敎十王最第一、いかなるちやうるいちくるいも、こ



のきやうにじやうぶつうたがひなし、經に曰若有聞法者無一不成佛とときたまふ、このほうをきくものあらば、ひとつとして成佛せざるといふ事なしとのこゝろなり、龍女じやうぶつのゑんにまかせて、此法花經の五の卷をいたゞかせんとて、こんじんよりぶつしんにいたるまで、此經をよくたもつと云ながら、きやうをもちていたゞかせんとするとき、ねこおどろきてゑんのしたにかけこみたり、ていしゆそれひきいだせと三助にいひつけゝれば、ひたものくびづなをひけどもいでず、やれひけ〳〵といへば、なにほどひきましてもなか〳〵いでませぬと云、ていしゆ、でぬか、でませぬ、それならをけ、それほどじやうがこわくば、法花にきはまつたといわれた、

第七、あきなひのけいこ

世のいとなみもまどしからずくらされける人の、二十計なるせいじんの子を持たり、有時近所のねんごろなる人四五人きたりてはなしける折ふし、ていしゆ申されけるは、それが太郎めにもする〴〵のためなれば、いかよふなるしよくなり共、あきないにてもしならわせたきが、いづれもいかやうなる事がやうござろふと談合しかけければ、獨のいひけるは、御子息樣あきなひのたなをだきしやらふならば、とかく鑷子はさみ剃刀などがよふござらふといふ、それがあきなひのしならいによきやさとへば、かんばんをみしやしやれ、ござれゝ小刀とかいてござるといふ、またひとりが申けるは、いや〳〵夏むきならば木綿足袋、ふゆは革韈などがよふござらふといふ、ていしゆ利のかゝるものかとゝへば、まづかわゆひ子にはたびをさせよといひまするといふに、頓瓢者出て云けるは、それよりもずんどよひものが御座ります、とが人のくびにかけまする錠がござる、是をこしらへならはしやれと云、それはだうした事にとゝへば、昔よりたとへにも、子は三界のくびかせと申ますと云た、

第八、天道のめぐみ

五六人寄合ばなしけるをりから、獨の申けるは、世中に天だうのめぐみほどありがたき事なし、まづよる晝といふ事あらずば、人こんきうすべきに、夜といふ事ありて、上は高家下は賤きわれ〳〵、ひとり下人もやすむまあり、これ天のめぐみ、また雨といふ事なくば、かうさくは申におよばず、草木いかにしてあるべ

し、しからば人間のしよくなし、風といふ事あらずば、ふねの渡海もかなはず、また草木五こくのみもいらず、みな天道のめぐみにて、それ〴〵にある事ありがたきといへば、末座にありし顛瓢者すゝみ出て、まだそれよりも天道のめぐみにありがたき事ありといふ、それはとゝへば、雨といふものが上から降ほど有難事なし、もし下から降ば傘がさゝれまひと云た、

第九、三味線のものずき

有人萬人にかはりたる事のみこのみ、諸道具に物ずきをせられけるに、三味線をあつらゆるとて、さいさい人をよびていわれけるは、さをはしたんにして、どうは大方くわりんたがやさんなどをすれども、手おもく思わるるあひだ、桐にしたきと云れける、さいく人申けるは、おものずきはよふござりますが、それは御法度でなか〳〵仕ます事が成ませぬといふ、これはかわりたる事をいわるゝ、いかにして御はつとじや、どうをきりさをゝしたんなれば、きりしたんでござりますによりなりませぬ、あまつさへそのねいろまで御法度でござると云、それはまたどうした事じや、桑やくわりんたがやさんはかたき木でござりますにより、ねいろもよふござりますが、桐はひゞきがわるふて、ばてれん〳〵となりますと云た、

第十、赤銅のめきゝ

去人四方山のはなしのつゐでにいひけるは、物はなんぞとりゐがなふてはかなはぬものじや、たとへばこはくはちりをすふものなり、さんごじゆはどくをしる、家の内にどく入ときは、おじめなどにつけてゐるに、たちまちにわるゝ、去程に玉のうちのたからなり、またしやくどうを身につけると、むかでがそばへもよらぬものじやといへば、ていしゆ云けるは、赤銅には百足がおじますか、それは〳〵百足のきわへ赤銅をよすると、たちまちしぬといふ、わたくしもさるかたより赤銅の小づかをもらいましたが、みせませうとてとりいだひて見する、彼者見ていや〳〵是はにせ赤銅じや、なにのやくにもたゝぬといふ、ていしゆおほきにはらをたてゝ、是はにせではござらぬ、さきの人がなるほどたいせつがりてくれました、こなたは赤銅見しり給はぬそうなといふ、折節かやゝなれば二寸ばかりの百足がおちたり、幸じやとて彼百足のありくさきへおけば、そのうへにのぼりてゆく、

彼者あれをみやれ、これはにくるみといふものじや、にせにきわまつたといへば、ていしゆいよ〳〵せいて、出所がよいさかいで、この赤銅はにせではござらぬ、大かたこの百足がにせでござろふといふた、

第十一、ひよくの魚

有人申けるは、天にあらばひよくの鳥、地にあらば連理枝といふて、戀路の道はいづくもおなじ事のやうにいふが、此界の下の龍宮にも、戀といふ事はある事やととふ、おろかの事、そうべつたいの有ものに、ひとつとして和合かくる事なし、ことに龍宮にも一つの浄土なれば、いかでその事なかるべし、さればこそむかし浦島太郎も、りうぐうのおとの姫とちぎりをこめて、玉手箱を持て歸りしためしあり、それのみにかぎらず、ひよくの魚といふて、ひとつにしめあわせて居るうをは見たまはずやといへば、なにしに左樣成ものを見ませふ、話しにきくさへこれがはじめなりといふ、扨々おくみゝな人かな、七月澤山くるものなり、ぞくなはさしさばといふものじやといふた、

笑事記咄大鑑黄之卷終

正志記咄大鑑赤之卷

第一、かた事のうはぬり

無筆成者ある人にたづねとひけるやうは、此中かわつた言葉をきゝました、牢人衆でござるが、去方で出合ました、そのところのていしゆ、いかゞして御暮しなさるゝときけば、手習の師をしますといわれたるに、亭主さやうでござらふ、まことに貴樣は手をよくあそばさるゝほどにといへば、いやはやかたゐなかにをりますれば、しやうじんのむちやうとうのへんぷくでござりますといはれましたが、合點がいきませぬといへば、無鳥島の蝙蝠とは、とりなきしまのかうもりといふ事じやとおしへられ、能事をおぼへたり、ゐんぎんなる座敷にてなんでもいわんと思ふをりふし、去御屋敷へゆきてさま〴〵のつゐでに、おてまへはいかなる事をしてつねにくらすぞとはれて、爰こそと思ひ、すこしぼうを覺へをりまするゆへに、近所なるわかき衆にたのまれしなんをいたしまするとき、御自分はぼうをつかはるゝよしきゝ、およ

んだといわれて、むちうとうのりつぷくでござりますといふ、さき様はかた事とはしらず、しばしかんがへて、夢中等の立腹とは、ゆめのうちのともがらのはらたつやうなどのこゝろかといへば、いや／＼左様なあさまな事ではござりませぬ、とりなきしまのかうもりと申事じやといふた、

第二、無筆の字せんぎ

屋敷へ萬ふしんがたの御用をきく町人なれば、清帳をかきけるに、竹垣(たけゑん)といふ字をわすれて、しばしあんじゐるに、近所の人きたり、何を物あんじがほにおはすととへば、亭主いや竹ゑんをわすれましたといふ、扨々竹ゑんはから竹よりも女竹がよふござるといふ、いやさ書様の事でござるといへば、わらびなわでひきしめ／＼かいたがよいといふ、それではござらぬ字の事でござるといへば、地は赤土がよふござるといふた、

第三、あまりの卑下

淺草に安樂寺といふ禪寺あり、あるときらうにんしう二三人ふるまひによばれける、いづれも近付ならねば住寺引合て、御浪人たがひのことなれば、ひとつは御ちかづきにいたさんために、各々申いれましたなどゝいひて、たがひのしきだいおはり、四方山のはなしになりて、扨ひとりは當地のらうにん、獨はすぎしころまで奥州仙臺城下にいたるよしかたりける、ぢうじ、まことに陸奥は大國五十四郡なれば、さぞ名所もおほからふなどいはれけるに、なか／＼とてあらましかたる、又當地の牢人いまひとりのらうにんに、御自分さまの御住國はとへば、此牢人ことのほかなる卑下するやつにて、あなたのおくにのあとでは申されぬといふ、それはいかにしてといつめられ、いや駿河でござりますが、五十四ぐんのあとで、七郡ばかりの小國は申いだされぬと云、さて／＼あまりの御ひげじや、小國なれども駿州はよくにこへて名所おほく、宇都山、木枯森、清見潟、三保浦、奥津里、田子浦、浮島が原などみなめいしよのよし、いにしへの歌人もこゝろをつくし、ことに天竺漢土日本三國無双名山富士を朝暮にごらんなさりやうの、御うらやまし、せめて一たびのぼりまして見ましたいといへば、彼浪人おのれが手作の山のやうに、田舎でござればなか／＼御目にかけるほどの山ではござらぬ

といふた、

第四、かふてしやうべん

商人の賣物にねをつけてまけたるとき、かわぬを江戸ことばにしやうべんのするといふ由來を委たづぬるに、とつとむかし公家衆、御當地へおんくだりありしに、なにの左少辨道明卿の御家人、日本橋あまが崎のたなへきたりてものをとゝのへけるに、いろ〳〵ねぎりてまけたれば、高きほどにかわじといふ、商人大きにはらをたて、たかきやすきは右にすこしはわきまへのありそふな事なりと、さん〴〵にあつかうすれば、右少辨のけらいならばみぎにすこしも辨があらふけれども、左少辨のものじやさかいに、ひだりにすこしわきまへたゆへに、あとで高いとおもへつけたに、ゆるしやれといふてわらひにしてかへつた、さすが公家につかへるほど有て、とうはかよきとさたして、それより今の世迄、すこしわきまへよといふこゝろで小辨といふとかや、又四ヶ市廣小路にて、脇指の道具をうる店へ、やつこきたりて古鞘をことのほかねぎりたり、商人まけたれば爰があしきこれが氣にいらずといふ、あきうどしやうべんするかといへば、やつこ腹を立て、おれをなぶるすいざんなりといさかふところへ、つれのやつこきたりていか成事ぞととふ、商人、是をねをさしつて少辨さつしやるさかい、少辨かといへばはらをたてしやると云、つれのやつこ、いかにもそなたのことはりじや、此男はさるの年じやさかい、だらいふんじがわるいほどに、かんにんさしやれとてやつこをつれていつた、

第五、萬病錦袋圓

下谷池のはたにくわんがくや大助といふて、あまねく江戸中にかくれなき藥店有、おもてに金銀のちりばめ、瑠璃のつぼ、珊瑚のゐだ、琥珀のだい、めなふのいし、すいしやうのかゞみかざりたてたる、緞子のしとねのうへにはかうらいなんきんのつぼをならべ、にしき、金らんをもつてくちを包、壹間のきんかんばんに萬病錦袋圓とかき付て、諸人是をもとめてくわいちうするほどに、うりかふにいとまなし、折節しさいらしきろう人きたりて、かんばんにふしんしけるは、それやまひは四百四病あるに、此錦袋圓いかにしてか萬病によしとはいひたまふぞ、こざかしきわかいもの出て、四百四病と御さだめはさる事なれども

千萬億のやまひあればこそ、にん〳〵にもつやまひに、まづせんきといふわづらひあり、物每にこうまんのこゝろあれば、必らずまんきといふわづらひいづる、貴樣方のやうなる御牢人樣も、ひよつと臆病と申やまいいでたがるものじや、されば千萬億のやまひなしとはいわれますまいといふた、扨もりかふなもの〳〵。

第六、ぬす人のりやうけん

去人の女房ふかく猫をあいする事、じゆりやうじんが鹿をなで、林和靖が鶴をこのむより倘まされり、あるときていしゆ遠國より九寸あまりの生鮎をもらゐて、珍物とよろこび、是を馳走にきやくをよび、人數にあわせてやき物になしたるに、てがいの猫ゟそばにありけるが、ひとつたちまちみへず、ていしゆおほきにいかつてさん〴〵に猫をちやうちやくする、女房はらをたてぬす人はねこにもきわまらず、しやうこもないにむたいなりとてふうふいさかいをし出したり、一座の人やう〳〵にとりさばきをきけるに、翌日女房の云けるは、さりとては夕部はこなたのがむりじや、ねこはむじつをいひかけられ、くちをしがりてぬす人せんさくしだしましたといふ、それはごうしてしれたといへば、夜中ゆめもむすばずない〳〵ないかとなきあるきてせんさくしましたに、あらふ事の、八つじぶん庭鳥がとつてかうと云ましたほどに、ぬす人は庭鳥にきはまつたといはれた、

第七、御家の八藏

伏見屋のなにがしどの〻うちに八藏といふて、としごろ四十四五になるおとこあり。あるときねんごろなる人伏見屋の所にきたりてあそびける、はなしのつゐでに申されけるは、是の男はよほどのとしごろなものを、八藏とはにあいませぬ、八兵衞とも八右衞門ともつけさしやらひでといばれば、亭主御ふしんは御もつともなれども、あれに八藏といふゐんねんがござるといわる〻、それならば御ことはり、扨樣子をうけ給はりたいと思へば、人にしん、かん、じん、はい、ひとて五つのざうはきはまつてあるものじや、あれは外にぞうが三つござるといふ、まづ立居よろづにぶしやうさ、ものい〻つけてもいらいなし、さりながら木藏なり、何にてもいくらもとりこむ喰ひこむは是がござう、又つらつきまがりくねり阿呆らしき

ほらぞうにまがいなし、是で八歳じやと云れた、

第八、角内がものをち

此角内はいなかものなれどもたくましき男なれば、江戸なか間者の内にいつてわたり奉公をしけるに、このごろらうにんにてほうばうほうこうのくち〴〵にかせぐをりふし、淺草觀音の廣小路菓子屋のとなりに、嵐自俊といふ醫者の内へほうこうにいづる約束にて、みめへほうこうしけるに、ばんがたかへりて宿の亭主にかたりけるは、なか〳〵奉公はなりますまいといふ、なぜにとヽへば、人のきろふものゝあつまりてござる、人ごとに風、地震、火事、雷公この四いろたれもいやがるに、まづいかづちは觀音のかみなりもんのまへでござる、それのみならず旦那とつとはげしきよし、みやうじをといましたれば嵐と申ます、あらしがはげしくてどうなりませふ、あまつさへ名はじしんと申ます、是がわるい寄合でござらぬかといふ、ていしゆもおかしくおもひて、みるときゝはちがふものなればくるしからずといへば、ことになりがとつとわるきといふ、それはいかにとヽへば、角内こ聲になりて、けさかんばんをよみてみましたが、日本第一萬おんくわしどころと書てござると云、

第九、りくつのかね公事

爰にはなしの武左衞門といふて、ふるなのべんせつをもつては、はなしに目連のしゆずをえたり、一休の輕口をまなび、竹齋がをごけばなし、そろりがとんさくの言葉にまさりたりとて、世の人もてはやしけるほどに、はなしの名世上にひろし、さてしも氷ノ口のなにがしとて、ぶげんなる町人べつしてめをかけ給ふに、かの武左とかくして金子五拾三兩ときがりにゆひかけたり、當座のようならばやすき事なりとてかし給ふに、三ケ月五ケ月をすぎ其年をこへてもかへさず、たび〳〵こわれて金子三兩つかはし、是にて相濟申間手形をかへしくだされといふ、氷ノ口おほきにおどろき、武左大屋五人組なぬしまでとゞけたり、名ぬしこの事をきゝて、とかく是にはしさいあるべし、借し金公事は御法度なればとて、兩方のなぬしたちあいてやうすをとふ、武左衞門申けるは、もつとも金子五十三兩かり申たるところは實正なれども、手形にもはなし武左衞門とかきました、上はをなしますからはしさいあらじと存まして、金子三兩つかはし

ました、もとよりひのくちどの御存のはなしのそれがしなりといふ、武左方の名ぬしきゝて、是も一利有といへば、氷ノ口方のなぬししばらくかんがへて、はなしと手形にかきたるや、なか〳〵と申、手形にあるからはもつともじや、それならば三両のうわははよしにして、はなしに五拾両をすましやれといふた、

第十、ふち人のざとう

去御方にめしつかはれる小座頭、いまだ名もつけたまはでおわしけるに、あるときだんな近所の衆におほせられけるは、是が名を何とぞ座頭によそへてつけたきと仰ければ、口々に申けるは、かれが名は一代牢人とつけなされませい、こゝろはとあれば、一生目みへがないと申、また申けるは、いやごふちくださるるからは牢人とはいはれまい、ふる茶うすとおつけなされませい、こゝろは人にはよくまはれども目がないと申ける、ざとうとかく私が名はあつもりとおつけなされてくだされませいといふ、こゝろはむまだむくわんじやと申た、

正志記咄大鑑赤之卷終

性次記咄白之卷

第一、吉原女郎のみたて

駿河町の四郎、材木町の六、伊勢町の清、この三人はこれならびなきかいて、よしはらにて月日をおくりける、されども太夫格子などにあふ事はなく、あけくれ山茶をのみかぞへける、有時四つ目屋にて一座したり、なさけらしき手くだ、わけらしきほだし、口々のたは事いひやみて、四郎云出しけるは、扨われらは何を商賣にしそうなものじや、君達のみたてをきかんといへば、四郎にあふ上郎、かたさまは碁打でござらふ、こゝろはとゝへば、御見にいるといとしらしき仰に、ずんどしにまする、殊に初會のばんから、もはやよい手が見へたは碁打じやといふ、六が女郎に、をれはなにとみたてじやときけば、そさまは將棊さしでござらふ、心はとゝへば、まづさしあいはよし、やうの事などいひやれば、逢て〳〵と返事して、おいでのときはりくつづめにつめさしやる、また花などをくださるに、いつとても一分じや、つゐに二歩がござ

らぬといふ、また清が女郎にみたてをとへば、貴樣はおふたりとはちがふて、男のしわざでござらぬ、双六打じや、こゝろはととへば、まづ御出のときはそのまゝだきついてずんごごふをはなさしやらぬ、それさへあるにいつもむしにさつしやるからは、雙六打にきわまつたといふた、

第二、田舎者の口上

去年人衆いなかものをつかはれけるに、年始のれいにいづるとて供につれたり、さてかのものに、むかひへゆきて源五左に、みどもれいにまへつたといへといひ付ける、そのまゝむかいゑゆきてものもふといふ、どれいとていづれば、源五左にをらがだんな樣おれいと申といふ、さきのものあきれて居る、旦那もきもをつぶして、田舎ものじやさかいでぶちやうほう、よきやうにたのむとてたちさり、扨々をのれはたわけめかな、さきさまを成程いんぎんにゆふて、をれをげさげにこそいふものなれ、此江右方へゆけといわれければ、彼田舎者賢こそふにかけ行て、頼みませうと云、どれからといへば、江右衛門樣ゑといひ乍ら、旦那の方へ指をさして、此奴がお禮申ますと云た、

第三、浦川の舟賃

安房國の府中平郡といふところへとをるみちに、うらかわといふところに舟渡しあり、かのわたしぶねに、近江國甲賀のものと、出羽國湯殿のもの乘合せたり、向の岸に舟をつけて、せんどう舟賃をよこせといへば、おれは湯殿のものなればせんちんはしらぬ、甲賀のものからとれといふ、甲賀のものにせんちんといへば、平郡へとをる者が浦川のわたしで、甲賀のものゝ舟賃はとられまい、そちもこちもみなおなじたぐひじやといわれて、せんどう扨々これ程の大川をわたして、まるにそんはなるまひといふた、

第四、宮女のうわさ

さるうかれもの京見物にのぼりたるよしにて、名所物語などしけるほどに、定て内裏樣公家衆などもみたまふか、さて〳〵けつかうな事じやあらふといへば、なか〳〵たとへていはふやうもなし、一條より九條まで南北三十八町、西朱雀よりひがし朱雀まで東西十八町、公家天上人の御やしきびゝしくいらかをならべ、禁中は十二の御門、紫宸殿清涼殿其ほか禁闕宮中の間なか〳〵ことばにおよばれずといふ、さて

またさきの上郎などもみへさせ給ふかさいへば、大裡上郎もはじめて見ましたが、それは〳〵うつくしさ思ふたよりはがをおりました、よく〳〵でござる、しやうべんのなさるにも、公家衆の名をよばしやるといふ、それはいかやうな事じやといへば、きよらなる御肌をいたして、たかいゐんからしやうやうをなさるに、まづしやう少將となされて、なかごろに中將となさるに、おさめのときはくらゐがあがります、侍從とさまりましたといふた、

第五、上方の頓飄者

京三條通りにすみけるもの、俳諧にのみ身をやつし、きもうか〳〵となりて、身上の取つぶし、おもはずのあづまくだりして、江戸白銀町に宿をたのみ、手代奉公をのぞみ居ける、され共むかしはわすられず、からはらにもうたをぎんじ、ねざめにも發句をいふ、近所の人おかしきものなりとて、ひたものかなたこなたゐよびて、歌仙五十韻などして遊びけるほどに、近付ひろくなりたり、あるとき近所の人、はかまきていそがはしそふにかへるを彼者みて、いづく〳〵の御出といふ、名主殿へ一日せんぎ有ていま迄いましたといへば、心に俳諧の事のみ思へば、一日千句ありときひて、わたくしもまいらふに、そのはかまをかし給へといへば、何心なくぬぎてかしたり、扨名主へゆきてみるに、人二三十人なみゐたり、いつぱしゐわんと思ふきなれば、おほくの中をのりこへまぢかく寄てきけば、名主御法度の御定目をたからかによみたり、一ばくち諸勝負人宿の事といひもきらぬに、彼者いでゝこふもござりませうかとて、春風は其浦々をふれながしといふ、名主こいつは氣はちがいはせぬかといへば、季がちがいましたらば、秋風さおなをしなされくだされませいと云た、

第六、大織官の淨璃瑠

牛込八幡の庭にて、つねに淨瑠璃をかたりてゐるものあり、おほくの人たちよりなみゐてきくに、四十餘りの女十六七なる娘をつれて、神前にまいり、かへるさにこれもよりて聞ば、だいしよくわんの淨瑠璃、海士龍宮にゆきて、めんかうふはいの玉をぬすみにぐるに、しゆごのあくりうおつかけきたる、ちの下をかききりたまをおしこみたりといふに、彼母をやなみだをながす、むすめ、かゝさまはあまりあわれなさこ

みでもないに、なぜなかしやるとゝへば、扨々左程名高きあまでも智恵がなふてしなしつたか、いとしさになみだがでるといふ、娘それはなぜにとゝへば、ちの下をかききらずとも、それぱかりのたまはおしこみごころがあらふにといへば、むすめ、海士もさすがな人じやさかい、それほどな分べつのない事はござるまい、されどもそれではめんやうくさいの玉になりませうといふた、

第七、かんばんのよみそこなひ

田舍者横山町の新道をとをりけるに、一流無增月水ながしといふ事を、おほきなるくろぬりのかんばんのうへに、白くかなにてあり〳〵とかきてあり、彼田舍者これを見つけ、内にいり申けるはかんばんにつゐてすこしたのみしたい事がござりますといふ、醫者出ていかやうな事ぞといへば、こなたはつき水をながしやりますか、なか〳〵とこたへける、代物はいかほどでござりますといふ、金子壹歩宛でござるが、月はよほどかさなりましたかとゝへば、いかにもよほどに成ますする、その人をつれてござらふか、またはくすりをしんじやうかときけば、すぐに私で御座ります、醫者おかしく思ひて、男がつがもないといふに、おなごがよくば女房なりともつれて參らふといへば、いしやさりとはがてんのいかぬごあいさつじや、どうしたわけじや樣子をかたらしやれといわれて、去年八月から私が田へ水がつきましたが、壹歩ばかりでならふ事ならば、西の方の谷へながしましたいといふた、

第八、とぶらひの難儀

木挽町の方邊(かたほとり)まどしきものゝところに、ていしゆにてゐける作平といふもの、過し夏永々のわづらひにて死にける、宿の亭主はいなかへゆきて留主なり、念佛講なかまへ女房かけまはりてたのみければ、こうじう十七八人寄合ける、寺は深川法善寺の寺中のよしなれば、桶などとゝのへてつれゆきける、もとより身にもかゝらぬ事なり、せしゆはなし道すがらをごりくどきにていそぎける、れいがんじま大渡にてふねにのせ、舟中にてもさはぎけるほどに、彼桶をとりおとしたり、人々おどろきてやう〳〵にとりあげたれども、桶のそこぬけて死人はなし、ぜひなくむかいへあがり、桶ばかりかつぎ行に、玄信寺といふ法花寺

のまへに、四十ばかりのこつじきさかやきぼう〳〵としたるがねてゐたり、これこそくつきやうの事と、彼非人にいひけるは、なんじ死人になりて此をけのうちにいりゆくべし、とぶらひすぎてやきばへつれゆくとき、道にてもどすべしと、三百文にてやといたり、乞食思わずのよろこびとてをけにいりぬ、さて寺になればもくよくなどさせ、いよ〳〵しにたるふりよと約束して、お寺のおこそりをあてられけるに、百日あまりすらぬさかやきを、なまもみにてするほどに、いたさたまられず、されどもしばしこらへけるに、同宿立かわりて死人のあたまをそるごとくに、ゐしやくもなくかみそりをたてければ、かのしにんをどりあがつて、三百が五百でもこれはこらへられぬとてかけいでた、

第九、もつとものあつかい

爰に三島屋の何某といふ大盡有、春の初のなぐさみには、柴方にむかつて野郎を祝、秋の半の樂には、あげやにきたつて女郎をあいし、極遊の人なりければ、出入のうかれもの太鼓のうちつけより、かしらか丶むしんをいひかけ、三味線の引手には今貳三兩の金をかり、大政殿とうらやまいたり、あるひやうきんもの、ときがりにとて金子五兩かりて、ほどすぐれどかへさず、大臣腹をたて丶、ない〳〵の金子いかにしてよこしたまはぬといへば、それはおまへの暦をみてござるときかりましたに、何返〳〵ませふと云、これはだうした事とヽへば、そのこよみを持てござれとて、こよせを見せて、これごらんなされいと、五墓日がかなでかひてあつたれば、こむにちとかひてござるさかい、五兩こみましたといふ、大政それならばなをよこしやれ、中段にとるとあるほどにとあらそひけるとき、そば成もの、これは兩方ながらことはりじや、お言葉の中段なれども、わが開日を申さふ、そなたは口をとづるがよい、ひらくとわるい、よこしかねやうとあやぶではないが、ふくちなればのぞく事もなるまい、おれがたいらにおさむぞ、たがいにおしやつたは水になされて、是でさだな、下段にさけよしとあるほどに、さけ一樽でわびごとと、さけになりすまいたれば、あまつさへかん日してくろふひといふた、

第十、はなしの仕様

それはなしは、壹がおち、貳が辯說、三がしかた、こと

に當世は、いにしへのそろりなどの噺の風俗とはかわりて、かる口におかしくしどけなく、利をつめげびたよふできやしやなり、まづおちがわるふてはつまらぬ、さりながらひとつはあとしだいじやといふに、去口合のよきもの云けるは、さて〳〵かわつたはなしがあると云、それはいかやうな事じやとゝへば、夕部中橋の三文字屋といふしちやへ、いなびかりおびたゞしくなりて、かみなりどの太鼓をしちにをきにござつたといふといへば、うそをいふ人があるものじや、稲光はしたがならぬものをといへば、ならねばこそ質をおきにござつたといふ、これはきこへたが此咄はかさねては御無用じや、あとがよさに利がきこへた、ならぬがといわずばおちぬといへば、はなしのうちでかみなり計は、なるほどおちぬがよいといふた、

第十一、異名の蝿

朋達知五六人あつまり、四方山のものがたりしける中に、蝿の左吉といふものあり、ひとりのいひ出しけるは、人の異名もおほき中に、はいといふ異名ほどかわつたはあるまい、また左吉といふもよほど耳にたつ名じや、されどもさけづきなれば左吉といふこゝろでもあらふ、はいはがてんがいかぬといふ、左吉御ふしん御もつともじや、心ある異名じやほどに、なぐさみにはんじて見さしやれといふ、獨のいひけるは、此男ごふもならぬ人たらし、いつももみ手して空おがみなれば、手をするといふ心で蝿であらふといふ、ひとりは、左吉じたいすりきりなれば、ふけばとぶといふ心ではいであらふといふ、またひとりは、此男あなたのおつしやるとをりくちあいがよさに、いかなるものにもやきてをくわせる、さればうづめばつち、燒ば灰といふこゝろであらふといふ、左吉どれ〳〵もちがいました、まづ蝿といふ虫もとよりこゝろなきものなれば、むさくけがわらしき身にて、いかなる天子高位もわきまへずうへにのぼる、われまたいやしき身としてよき女さへみると、いかなる女郎お姫様もみわけず、腹の上へのぼりたがるとて、蝿じやといふた、

性次記咄白之卷終

盛紫記噺黒之巻

第一、後家のことはり

津の國中川と云所に、長十五町が間堤のふしん有けるに、そのつゝみをつく所々の村やくにあてゝ、あるひは食やさいを出しけるに、下村の名主はごけにて、三歳になる子をやういくしたり、されば諸事は後家とりをこなひけるに、今日のひるめし此ごけのやくにあたりたれば、にしめなどとゝのへてひるめし出しければ、奉行ごけにむかへて申けるは、是ほどのひるめしに、そなたはなぜに汁はいだしたまはぬといへば、後家わたくしが〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、なるほど汁をだしませうが、いまだ上の村に御座るさかひ、しるはだしませぬといふ、奉行それはもつともなれども、此方の〇〇しだひにかゝろふはといわれた、

第二、番太郎が出來口

番町に助兵衞といふばん太郎ずみけるが、殊外なる〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇かゝさず、かゝもあまりにくたびれて、さりとてはこなたのやうな〇〇はあるまひ、ときどくはまびかしやれ、命がつゞきませぬといふ、助兵衞されどもかんにんなりがたしといふて、ひたものにかゝりければ、さてはせひなし、びくになりともかわしやれといわれて、むかしよりいひつたへたる辻君と云者、番町筋はおほくありくに、よる計ごるゆへに、是をなづけて江戸言葉に夜たかと云、彼夜鷹をよびて〇〇〇〇〇〇まゝ、なじみふかく成て夜喰などこしらへてくわせけるほどに女房あまりにみかね、助兵衞をしかりけるやうは、さりとては人めもいかゞじや、鷹をのみかわゆきものにして食迄くわせる事やある、のちはどのやうな事であらふといわれ、扨々われのけて何しにかわゆかろふ、にくいによつて食をくわせるといふ、それはだうした事じやとといへば、古しへよりのたとへにも、にくい鷹にはゑをかへといふ事はしらぬかといふた、

第三、和氣のたゞなか

爰に武籠長兵衞といふ人あり、商人なれどもその身うとくに富榮へ、よろづの世話をしもふたやにて、只一心に名號をねんじ、末法萬年余經ひつめつ彌陀一

きやうりもつへんぞうの道理にかなへ、つみもむくひも淺草のかたほとりにすまれけるに、十八才になり給ふむすめひとりおわしける、心ざまよにこへて萬の事にさかしく、御きりやうは申もくだ糸しどけなき御よそほひ、みる人こゝろをうつしゐのまなばぬ女子はなかりけり、されどもいまだ妻定もおわしまさず、花のさかりをはる〳〵と父もろともに淨土文にいりて、後生の一大事をのみねがひ、則念佛考芬蔬莉花、あるひは彌陀三十五のぐわんに轉女成男とたて給ふをありがたき事にいのられける、しさいをくわしくたづぬるに、此君いまだ三五のころゐんぺんのむすばれしに、いかなる無緣のしゆくがふにや、それとばかりの便して、今朝吹風ともろ共に夕部のつゆときへられぬ、されば世はあぢきなきものにおもひ、かみをもきりとんせいびくともならんとおもはれしを、只獨子なればやう〳〵になぐさめおきぬ、しかれども世の人彼君を戀忍び、ふみ玉づさのかよふ事二六時中にはかりなし、ふたりのおやは、哀此子がきもをれて、いかなる人にも思ひつけかしと神佛をもいのる心なれば、めしつかひの下女にもあへて、此事はしめさず、たゞれんぼあいじやくの物語のみをはなせといひをしへられけれども、むすめはきゝもいれず、つゐに文をさへとりあげたる事もなし、いよ〳〵往生極樂をのみねがはれける、むすめの名はおいわさいへり、いかなるものかしたりけん、武籠長兵衛のかごにらくがきをしたり、父のみやうじ娘の名をかき付たり、

長兵殿裏春秋留　武籠門前日月遲
きみが名はちよに八千代にさゞれいしの
いわほをとふせこれのむすめ子

第四、猫の中媒

武籠氏のむすめお岩のきみ、いかなる事にかねこをふかくあいし、へんじもはなし給はず、されば世の人女三の君とぞ申ける、さてしも隣家に牢人衆のこにて、幸之助といふ今年十七才になれる若しうありしが、かたちいとやさしく、いにしへの源氏業平などは名のみきゝしばかり、いまこのせうじんにくらべんに、まばゆきほどにこそとおもわるれ、たがゐにしたしくてつねに來りあそびける、石よりかたきお岩のきみも、この人にはこゝろをよせて、むかしもかゝる

人ありて戀といふ事もこそと、いとゞいとしさます、鏡、くもらでいつもあれかしと、ふかきおもひのいろ出て、なさけまじりのさゝめ事、さすが心も幸之助、いかで戀路はしらまゆみ、引手になびくあをやぎの、いとたよ〳〵としたふにぞ、たがひに花のかほばせの身になりてこそしられそめ、人にはいわで岩つゝじ、しだにこがるゝこひごろも、またきていやまさり、あわれ人めのせきもなく、こゝろのそこのうちと、けて、むすぶゑにしを待侘しに、佛をいのるしるしにや、菩提もいまはぼんのふの、たすけの道のあらわれて、たのみたる旦那寺に、ぶつじとてふたおやながら、よふくるまで歸らず、いつものごとく幸之助來りけるに、よき留主とおもひさま〴〵とくどきよる、もとより思ひはふかけれども、さすがこゝろのはづかしく、色々といひのべぬ、幸之助いろをかへ、なさけまじりのいつわりを、誠と思ふくやしさよと、かへらんとしたるとき、お岩たもとをひかへ、いやとよ是もきみがため、するもとをらぬものゆへに、そめてくやしきむらさきの、後のこゝろをおもふなりといわれければ、幸之助すへとをらじとは何事ぞ、お岩かたさまはおんとしわれにひとつおとらせ給ふゆへに、たとひつれそい申てもにあわじとのこゝろなり、さてにやわじとの御心ははじめよりしれずして、いまおもひつけ給ふや、とかくかなわぬうき世成と、なみだぐみて居けるとき、お岩こゝろもくるしくて、手がひの猫をひざにあげて、我はいかゞ思ふといふ、ねこにやわうとなくとき、もしねこが似合といゝますほどに、そさましだいといだきつけば、幸之助いろを直し、またもやぎよいのかわらんと、たゞそのまゝにかたかげにひきいれて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、こぐらきこころに、ものかげの〇〇〇〇〇〇〇を、ねこみつけてすこしあとへしさりながら、ふうふつとおごしたり、お岩是をみて、もはやそれを女房にさしやらずばなるまい、猫がみつけてふうふ〳〵といひますといわれた、

第五、やぼの小僧

芝土器町常笑寺に、塞龍といふて十四五になる小僧あり、心ざましごけなく、とりなりたよ〳〵と、ものうちいひたる言葉つよからぬありさま、楊柳のくわんをんともいひつべし、ある時ねんごろなるだんな、

夜ふくるまであそび留りたれば、とぎにとてかの小僧をそばにねせたり、だんな思ひけるは、まことやこぞうはかつけのくすりときく、ひとつはくすりぐいのためたり、又お寺にすむからはきりやうはよし、きはとをりてこそあらめとおもひ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇なるほどしづかなり、まことに不思議の御ゑんにてなどいひながら、〇〇〇〇〇〇ける、しづか成こそことわりかな、なるほどよくねいりたるが、〇〇〇〇〇〇めをさましそのまゝはねをきて、こゝの外はらをたち、そこなきやくじんづらめ、おらがおてらのをれを〇〇〇〇じやとおしやつたに、よくあけをつたと、とう〳〵ゑんがわにかけいで、ちやうずばちの水を、ひさくに一ぱいもちきて、ごく〳〵とのみ、是がもつたらきかぬほどにといふた、

第六、大津の高札

ひだちのくにみとのもの、かみがた見物に同行五人にてのぼりける道すがら、名所舊跡うちながめ、大津の宿をこへてひのくちといふざいしよをとをりけるに、むぎばたけに高札あり、大津ひのくちむぎばたけむざと人に草からせ申間敷候とあり、かのものども此邊にすこしやすみふだをみつけ、是はいかさましさいありげなり、たれよめかれといへども、みなむひつなり、されども同行のうちに坊主のありしが、あとにさがりたるをまねぎて、これはいかなるふだぞといへば、ものしりがほに立寄てたからかによむ、大つびのくちむきはだけむざと人にくさがらせ申間敷候とよめば、同行のもの共これはもつともおきてじやといふた、

第七、夢想の馬ぐすり

岩井町といふ所にすみけるもの、淺草の觀音のふかくしん〴〵せしに、あるときふしぎのれいむをかふむりたり、馬になりたり人になるじゆふのくすりのほうをゑたり、まことにきたいのみやうやく、さかい町へいでゝかねまふけせんとよろこび、さてかのやくみ調合してにかいにあがり、はだかになりてそろそろぬりて見れば、かほむまになりまた手足むまになりたり、女房來りて是をみつけ、さて〳〵いかなる御事にいきながらちくしやうにはなり給ふとて、とりつきてなげく、彼馬云けるは、すこしもくるしからず、人になる事またじゆふなりとて、わがてにくすり

をぬりて、くびも手ももとのごとく人になりたり、女房扨もきたいなる事かな、最早くすりをぬらずとおかしやれ、こしよりしたはむまがよいぞといふた、

第八、いらぬいひわけ

去人近きころ女房をもちければ、なかも吉野の花めづらしく、たゞこれとのみ心をうつし、ひるはひめもすちわ事をいひ、よるはおなじよぎのうちに、ひとつこゝろはふたりねの枕ならべて、いだきあいしめつゆるめつよねんなきありさま、なつといひし下女もこゝろのみだれがみ、いゝよる人もがなとうらやましく思ふおりふし、女房里へとまりがけに行たり、留主物さびしとて友達二三人よびてはなしけるが、夜にいりて皆かへるに、御内室の御るす今宵はひとりねのさびしさおしはかるなどいひける、ていしゆされば是非にかなわぬ、こんやはなつがふところへでもはいりてねませうと云て打笑ふてかへり、さてしも座敷にいりてていしゆはねたり、下女のなつ心におもひけるは、かみさまのおるすもしあわせじや、旦那のおれがふところへきてねよふとおしやつたほどにと、ひとりつぶやき、おさなきとき正月のきたるこゝちして、ねいりもせずいまか〳〵とまてどもこず、扨は旦那ねいりてわすれ給ふやら、こなたよりゆきておこそふと思ひ、座敷のふすましやうじをそろりとあける、だんなたれじやといふ、下女いやなつでござりますといへば、おのれはなにしにうせたといわれて、あんにそふいしたりとおもひ、さきほどわたくしがところへきてねやうとおしやりましたさかい、いやとゆひに参りましたといふた、

第九、庭前の桃

比しも文月すゑつかた、おひめさま庭前におんいでありて四方をながめさせ給ふに、おほきなる桃のいとうつくしうあかるみて、ゑだもたゆむ計になりさがりたるを御覧ありて、このもゝの名をよろいごおしとは、いかにしていふぞとたづねさせ給ふに、姥大きさ九寸五分まはりござりますさかい、よろいどうしと申ますと云、こゝちよき桃なればとりてまいれと仰ければ、木末たかければおふなのわざにはかなはず、おだいどころの作藏をよびて、桃の木にのばせけるに、作藏かたびらを七チのづまではさみあげて、上よりとつておとすとき、お姫様も木のもとに御出

あり、あれこれとおほせけるが、作藏が〇〇〇〇〇〇〇とするものを見つけさせ給ひて、うばあれはなんじやとはせられければ、姥いぞきみれば、しわのよりたる〇〇〇〇〇〇〇〇をみて、〇〇〇と申ますもので御座ると云、お姫樣ごうりでおれが〇〇〇をひくといわしつた、

第十、戀のそらごと

去人戀といふ事はごつからはじまりたとひければ、戀は天よりはじまりたり、さればいざなぎいざなみも、天のかみにておはします、これ戀の根元なりとかたりけるに、いまも天にこひといふ事あるやさとへば、なか〳〵の事、先けんぎうしよくじよの星、これもめをのふたほしにて、年に一夜のちぎりあり、みやうじやうぼしもよいあかつきとて夫婦おわします、みなそれ〴〵にむすび給ふ中にも、やもめの星もあるやらして、よばひすると云もあり、またしゆだうとゆふ事も有、すばりぼしといふもありとかたる、さてまたあのかみなりといふは、天にござりてもすさまじいお人じやといへば、いや〳〵ずんとそふでない、つきそふてみてなるほどよいお人じや、ことにあたりもかゝやくような御內儀を持ていらるゝ、それはだうしてしつたとといへば、さてしらしやらぬか、稲妻とゆふて御座る、それは〳〵きのかるいずんと座持じや、それでなつむきなどは、羽衣壹つで大こもつてかけまはらしやるといふた、

盛業記咄黑之卷終

跋

勝詞記咄は、一たんゑご〳〵と笑らふにはあらねども、つゐにしつきのあわれをもしろおかしい、かうした和氣ある物がたりのいろ〳〵を、取あつめ書集て、三島暦のふるめかしき去年のうわさも、今度おんあらための新暦々衆のとりさたよりして、下はみんかん賤のしわざ、田打男のとりなりは勿論、品あるはしとなる雷公のぴつかりごろ〳〵と夕立に、竹の子供そだてられて色をふくめる女郎花、くねるとかきし水ぐきは、男山のむかし語となり、ひさごをかしがましとてすてしといふとり沙汰も、あつた事なればこそあづさにもちりばめたれ、言葉の花盛、筆の林に音凄く、口もさがなき世風俗、みるにつけきくによそへて、なみだ川戀の淵瀬にしづむも有、ふかきなさけも有明の月すみわたる、聖賢の教に事をいひなせば、一座二座三座のたくせんかけて日待の御伽ばうこうにことふり似たれども、ふるきをたづねてあたら敷をしる、また是一座のきやうげんきぎよの口佛しやうのゑんをもとめて、つゞりあつめしうそのかわつた本の寔の盛紫記ばなしと、紙はそのまゝあきまなくなりました、

作者　石川流舟
日本繪師　菱川師宣

元祿七甲戌九月日
江戸日本橋萬丁
萬屋清兵衛板

露新軽口ばなし目録

卷四

卷五

目録終

露新輕口ばなし卷一

(一)ねがはぬ事

去大名の若殿、御國初知(しよち)入御目度さて、百姓賣人御むかひに出けり、御供の侍衆、大儀〳〵、扨爰元はこちらが西にあたるかと御尋あり、百姓衆御願申は、大殿様の御代にはこちらが東こちらが西にて、此方が南こなたが北にて御座候、御慈悲に先殿様の通り、こちらを南に被レ成被レ下候ば、難有奉レ存候と申た、

(二)八百屋のぐはんだて

去八百屋觀音へ願かけ、私久々あきないたし候へ共、不仕合にて何とも迷惑仕候、殊に觀音様は慈悲第一の佛にて御座候に、何とぞ仕合致候様に守らせ給へと、一七日こもりけるが、ある夜のつげに、いかに汝慥にきけ、一切衆生我を念ずるものに福徳あたふるといへ共、汝斗はわが力にをよばぬ、何方の神佛なりとも頼め、まづ此觀音の音の字を見よ、眞にてかけば音(ろつぴやく)なり、さうにてかけば音(しちひやく)なり、此音の觀音が、何とて八百屋が守られうぞとおほせられた、

(三)よい事をしらぬもの

田舎者京の室町を通りし時、去所にて京の町人衆、おもて坐敷にて酒もりをしていられしが、さかなに燒蛤なり、目なれぬ事なれば田舎人、あれ彌太兵衛見や都はいたる、伽羅の油を肴にして酒のむといふ、伽羅の油をしつたがよいがいつもこがいか、

(四)いたるあきんど

きらず賣が、おかべのからもふるし、たうふのかすも猶いやなり、のつしりとちらし豆腐といふもおかしや、たゞしおぼろ豆腐のやつしか、

(五)あてずいの事

かたことながら物たづぬる、あのしやうぎは義經記じや、それはいかに、たゞのぶが横川の覺範をころすといふ、忠信が覺範にかつ事一ゑん合點がゆかぬといひければ、さればその事、忠信が覺範にかつことならず、判官どのに忠信がなり代りて、金になつたによつて、忠信も覺範をころすと云もはなし、

(六)にごり字しらぬもの

とらやの商賣人の家名にとらやと書て、則其家に紺暖簾にとらを染め、假名にてごらやとかいた暖簾なり、さるもの通り見て、こゝの虎はからかはにきはまつた、あのとらがのうれんにあるといふた、しらぬはおかし、

(七)灸おろしのいしや

去者口合のよい醫者どのに、七のづに灸おろして被レ下候へと申ければ、もとより下手な人にて灸所しらず、八のづにおろされた、病人とこゝろが違ふたといふ、いやくるしからず、上の町がやければ下の町もさはぐにより、苦しからぬといふ、よいかげんのいひぶんなり、

(八)はやわざの事

此比都へ大坂より舟のぼり申、取分西風にてをいよく順風に帆をあげのぼり申に、山崎おもてより風かはりて俄に舟又くだる、船頭中々氣の毒におもひて、何とやらん云所へ、頓作なる人懷より紙袋をいだし、是を帆柱へゆひ付給へと申す、船中の人々何なるぞと尋ければ、此内に和中散あり、くだりをとむるといふ、

(九)山伏があらはれた

とくほういんとてかご〳〵はらいに行かげにて、は

じめて大峯へ入て俄に鼻が天狗殿にあやかり、おごりいで島原の北むきに五分ばかり取みよしと申女と少なじみしに、去時みよしの申は、そ様とわれら事二世もとなじみ候へ共、つとめまうし、殊に曲輪ずまひの事にて候へば、御いたくとてもしらず、其上に其方様のあたま合點ゆかぬと申ければ、とくほういん色をつけ、われは金持の子にて、親のかげにて京中に千軒の家たて樂人と申、みよし心の内によろこばしく思ひゐたりしに、去人參り申やう、扨々愛へくる大じんは山ぶしにて、こちへおいせんどのにきたといふ、みよしも是にさたをかぎり、重ねて來りし時、其方樣は山伏じやといふ、とくほういん答へて、其事は何ものがいふたぞ、いのりころさんといふた、

(十)すきなればせひなし

去大名ひげずきなり、かく内と申つき髭の男鑓持に有、參勤の時分道中にて、六條の本願寺道にて鑓持の髭を御らんじて、扨も見事な髭やとてよび給ひ、御手にて髭御なでなされ、金子三歩御門跡より被レ下候、おがみに出し百姓ばゞ年寄衆、扨も〳〵有がたき御手のかゝるあのやつこのひげ、あやかりものとてかの髭を一筋もらへば、われも〳〵とさしいだし、御門徒衆大ぜいたかりてぬくほどに、奴の髭御手いかゝるかた一方こと〴〵くぬきければ、やつこは迷惑ながら主人へ歸り右のだん〴〵申上、髭かくの仕合にぬかれ候まゝ、殘り申かたひげすり可レ申と申上ければ、髭ずきなる殿、いやかたはら町のはれにせんとおほせられた、

(十一)やぶいしやの藥

去藪醫者町通りけるに、しち屋のかんばんを見て、藥になる蜂の巣じやとおもひて、此蜂の巣はいかほどいたすと申、若い者それはしちのすなりといふ、いしや殿、扨々おかしい事かな、今一のすたらぬゆへ藥にならぬほどに、やはり今一年さらしてをかれいと云、

(十二)ほめぬがまし

去所に新宅を立て人々家見に行けり、其内に一人そさうもの申は、扨もきれいな柱かな、皆こと〴〵くひの木のふしなしかといふ、ていしゆはざい木に念入申といふ、かゝるそさう者申は、此やうな木に火がついてからきへぬものじやといへば、亭主大きに腹を立、はじめていたすふしんに、それは餘り成いひぶん

と散々に腹立ければ、かのものの手を合せて、御ゆるし候へ、われらはかやうなる事申ものにてはなく候に、ひよつと申た、どうしてもけちじやと申す、

(十三)本をわすれた

去をんごくのもの京へ奉公に参り、諸事よきうつくしき事き丶ならひて、雪隱へ行をかうやへ行とは、高野へ行てかみおとすといふことを聞て、やぶいりに在所へゆきてしさいらしく、あの雪隱へゆくのをかうやへと行といふ事は、かうやにてわらをおとすゆへにといふた、

(十四)川ながれ

かつら川に川ながれあり、在所衆やがて引あげ、其方はいづくのざい所ぞ、名はなにといふとさまぐ\にとへど返事もせず、是はきがつかぬ、氣付に水のませいと申ければ、やがておきあがり、水は下ちがあるとおきていにけり、

(十五)川ながれはひらいがち

有時おほかみなり大水川に大分出けり、か丶るところにくるま長持一つながれ來る、さるものひろい宿へもち歸り、あらうれしや仕合なをりたぞ、よぎふとんは申におよばず、かねが大分有べしと大きに悦び、やがてぢやうまへあけ見てあれば、八十ばかりのおやぢ、かみなりがなりやんだかとて出にけり、

(十六)そさうな小者

さるもの御さうれいを寺町へおがみに出たり、あまりおそくたいくついたし、小者にいづくまで御出ぞと申候へば、小者おもてに出てかみを見て申やう、上の町まで御越候が、しよもうが御座候やらおそく御座候と申た、

(十七)かみなりのばくち

さる寺の庭に大きなる銀杏の木あり、その上へかみなりおち、いちやうみぢんになり、根まで掘をこしたるやうになくなりけり、長老どうしゆく二人つれ出て見、扨々大きなるかみなりかな、是はかみなりにてはあらず、かくの如くいちやうの根から取は、さだめてすりにてあらんといふ、神なり上よりきいて、いやすりにてはあらず、成程かみなりなり、坊主三人出たやらんと云、長老すいさんと云、かみなり、大きな銀杏はおひちやうなり、ねからとるは三人の坊主はさんまい坊主よ、是ふだなりといふ、長老、そちはなに

かみなりぞ、はち〳〵のあいの三と云、

(十八)戒名の事

さる寺へ死人つれ行うづめかへる時、かい名を長老書おかれたれば、ごう宿衆とりちがへ、八百屋の書出し三分五りんと有しをやる、せしゆ三分五りんと云かい名はないはづじやとて、さかさまにはりておく、參る程の人々、厘五分三と廻向いたした、

(十九)浪人歸參の事

都東山のほとりに柴の庵を引むすび、床に達磨のかけ物をかけていられける所へ、おはを打からしたる浪人ゆきて、さて〳〵きれいにちんまりと味なすまいかな、して御坊樣は曹洞宗にてやましますとはれければ、いや私はいしやにて御座候といはれた、浪人、扨はおいしやにてござりますか、私は永々の浪人ものにて御座りますが、何とぞ本國へもどり候やうになる藥は御座りますまいかといはれければ、それこそなりさうなものとて、一服調合してやられける、かたじけなしとて歸り、かしらせんじしてのみければ、故主より歸參と申來る、二ばんせんじのみければ、二百石のかぞうと申來る、扨歸參してより不思儀なるいしやとて、右のとをりを殿さまへ申上られければ、其藥いかやう成儀ぞ、はいざいの程秘密の御ざつらう、きゝてまいれとて使立ければ、醫者、さのみとんだるくすりにてもなく候、附子にきこくをくはへたといはれた、

露新輕口ばなし巻一終

露新輕口ばなし卷二

（一）入ぼくろの事

四條川原に水木辰之助とて、いやはやそれはどうもいへぬ、今業平とも云べき若女方あり、衆道柄をにぎる若衆、かの辰之助と一座して、をさへたかゝへつの上にて、おさかなにいればぼくろとて、腕はふるし額に水木辰之助といれられた、酒のゑひさめて、これは何共屋敷へは歸られぬ、何とかせんと案じわづらひてゐける時、一人のつれ、いや〳〵やけざしたとて歸りてはいへとて、小刀やきてかの入ぼくろの上へをしあてた、水木辰之助はきえ丹波守とあり〳〵と殘る、

（二）すまふ取の無筆

さる所に大せいよりあひ相撲とりけるに、二三人づれの一人まけて、一人のつれにかち相撲一ばんとこれといはれければ、いや私しは無筆といふ、すまふに無筆がいるものかと申ければ、あてからぬといふた、

（三）遠慮せいでも大事ない事

さる所にあたらしく藏をうち、成程手をこめてふしんして、出來てから皆人來り見物して、さて〳〵ていねいな藏かな、よく出來たりとほめければ、亭主申さるゝは、いや藏も火に逢ねばしれませぬといはれた、

（四）上戸のこたつ

あるじやうごども四五人寄合て、今宵は夜さむなにこたつに火を入られよといふ、亭主まだこたつをきらぬといふ、一人が申けるは、こたつより酒一升御かいあれ、打よりたべ我等がふところへあし御さしあれと申、此儀よからうとて酒とりよせ、何れものみてかの人のふところへ足ふみ入、そろ〳〵ねられた、ひといきねて目をさまし何れも申けるは、さても是はひへごたつじやといへば、一人の申は、今五合かきさがいたらよからうといふた、

（五）たなつるやどがへ

さる人やどがへして、ある人にたのみ棚つりてもらはれけり、心得たりとてさもてばしかくつりて歸り申されし、うれしやかたづけんとて、たなへそれ〳〵あげられければ、棚ども殘らず皆おちたり、あくる日くだんの棚つりたる人わせたり、亭主被レ申けるは、きのふは棚を何とつりてたもつたやら皆おちたとい

はれければ、それは何ぞあげやつたものであらうといふた、

（六）なぞに心さられしむすこ

さる所に十二三に成むすこあり、なぞはやりける比、朝夕なぞに身をやつしてゐける程に、おやぢしかりて申けるは、いきばるめがとしかりければ、むすこ申けるは、おやぢそれといた、きやくしゆのせきたふかと申す、母おやの申さるゝは、おやぢのしかりやるにもなぞにしをる、ごくつぶしめといはれければ、おつとそくいべらといふた、

（七）無筆なるおやぢ

さる無筆なるおやぢあり、よそから文が來りても子の留守には返事ならず、氣のどくにおもひ子かへりければしかりて、今からよそへ行ならば、返事二つも三つも書て置てからゆけといはれければ、子申けるは、何事か申來べきに返事の書置がなるものかと申ければ、さもあるべしとて、それよりふだん庭へかべ土をこねをきて、よそより文がくるとくだんのかべ土へ兩手をつきこみ、使の人に見せて、かくの通り故御返事申さず候、是より申さうといはれた、

（八）はしらをとる心

あるつゞくり普請する所へ、さる人來り物語して、あのはしらはうつとしいに御とりあらぬかといはれければ、亭主、私もさやうにぞんじ候とて、大工をよびよせとらせられける、その次の柱もそのあちらの柱も、こゝの角のはしらも、此はしらも御とりあれといはれければ、大工、それでは屋根がおちまするがと申しければ、大工迄のしあんはせなんだといはれた、

（九）一息に備前へついた

當六月暑氣の頃、大坂川口にてさる人酒におびたゞしくゑひて、あつさのまゝに川口へ出られたれば、折ふしびぜん船にわたしのかけてあるを見て、乘てすずまんとおもひゆかれけるが、眠氣つき、こけるやいなや高いびきをやらるゝ、船頭、是船をだすが、こなたはびぜんへかと問ひければ、をうといひける間、船を出して、追風にまかせ備前へつき、かの人をおこしてあがり給へといひければ、是はどこじや、備前じやといふ、何とて是へはつれてきたといふ、船頭、船いだす時をうと御申しやるによつてのせてきたといふ、扨大坂へ便有に此人文をやられけるは、其元の我等が

われらにて御座候哉、こゝもとのわれらが我等にて御座候哉、一圓がってんまいらずとかいてやられた、

(十)りやうげちがいの事

さる所にしやうわるの男有けるが、ばくちにうちまけ、あまつさへはてにはさん／＼氣色あしく成て煩ひけるに、ある人來り申けるは、上の町の玄德はおかうしやなおいしや樣じやほどに、ちと見てもらへと申ければ、さあらば行てたのみませうとて、行てみやくを見てもらひける、玄德樣おほせらるゝは、さてもとりあげたしやうかなと御申あれば、八幡まつたくとりあげませぬと申す、しからばせんきかと御申あれば、いやまたする氣にて御座ると申た、

(十一)あみうちのはなし

さる人友達に咄されけるは、扨々われらが近所にとうあみの名人が御座る、いかやうにもこのみ次第にあみをひろげ申候、或は櫻の花のごとく成共、桔梗になりとも、わちがへに成共、尤四角にも菊の花になりとも、好み次第に打申候と咄す、其後右の人々桂へ川がりに行時、かの咄しのあみうちたのまんとて、右の人の所へさそひがてらゆき、いつぞや咄しのあみうち雇ふて給はれと申されければ、さて／＼やすい事じやが、殘りおほい事は、今朝葵の紋をうつてとらへられたといふた、

(十二)なづな五郎八

あらたまる年のはじめ、太郎も二郎も寶引などして遊びしに、さる所に五郎八と申十四五の子あり、夜もすがらかるたさばくりして、夜あけ七日の朝かへりいねぶりゐけるに、母おやの申けるは、五郎八是五郎八とおしければ、おつとおしてうけましやうといふてぜんを引よせける、いや是みそじやといひければ、てみそ共にうけたといふた、

(十三)初午の事

稻荷の社人御そせう申上られけるは、正月晦日二月朔日みむまと去年も今年もつゞき、何とも氣の毒なる事にて御座候、中の馬を初午にあそばされ候へと願ひ申さるれば、朔日の馬にも參らせて、初むまを三度せうといふ事かと仰らるれば、いやさやうにては御座なく候、はじめのむまはすて候て、中のむまをと申上れば、いや／＼すてむまは御法度でならぬと仰られた、

(十四)楊貴妃があらはれた

さる所の中居の女、美人には袖の香ひがすると聞きはつり、二六時中たもとに袖をたやさずいれて持たり、見世の若い衆いづれも、お夏わがみはいつもゆのにほひがする、いかさま美人さうなといはれければ、しや何いはんすと袖をふる拍子に、くだんの袖ころりとおちければ、扨もかなしや楊貴妃があらはれたといふた、

(十五)金を食にする出家

しゆしよう顔にて慾ふかき長老あり、常々病者氣にてねつおきつしてゐられけるに、有時心易き旦那參り内證へはいり、長老樣の御目にかゝる、御そばに方方よりの志ふせ共あまたありければ、旦那申けるは、どうしても長老樣じや、われらは年中身をくだいてあがけ共、かけに斗成てすたるが、和尚樣は寐て御座つてもようされますといはれければ、長老の仰に、ごうしても善光寺の釋迦のまねはならぬ、ねていても思ふやうにされぬ、剩くはねばよけれどと云れた、

露新輕口ばなし巻二終

露新輕口ばなし巻三

(一)修行者とんさく

さる修行者米屋へ修行に行けり、米屋の女房、とほらしやれ〳〵とけんどんに申ける、亭主きゝ、やい〳〵其やうにけんどんにいふものか、朝は弘法大師のござると申すに、そのやうにけんどんにいはぬ者じやとさん〴〵にしかりけり、女房まことゝおもひ、米びつへかゝり一にぎりつかみ、是いれましやう〳〵とあとよりをつかけければ、かの修行者あたまにてもはらるゝかとおそれにげゝり、猶しきりにおつかけければ、修行者辻の雪隱へ迯入ける、かの女房戸口にたち、入れましやう〳〵といひければ、内よりかの僧、弘法大師高野山へ入給ふ、女人けいかいの所なるぞ、そこ立のけ〳〵といはれた、

(二)八百屋島原がよひ

さる八百屋島原へさい〳〵かよひける、女郎申すは、あの人は八百屋じやが此所へさい〳〵みへるが、さらばなぶつて見んとて、もうしおまへ樣は町は何か

たにて候ぞ、われらは二條室町邊にて御座る、御商買はなにやにて御ざんす、われらは本薬屋でござる、さいはいでござんす、大人參はいかほど仕るぞ、さればおほ人參はたばによるといはれた、

(三)氣まはすもの

さる若い衆寄合て、其内より一人申けるは、あのもうせんは何に染るぞといひければ、其中に一人申けるは、せうゝに酒をのませて血をとりそむると申ける、扨はさやうに候かといひける所へ、小もの茶を持ていでけり、かの人、さてもゝお手前は利根な人かな、われらに茶をのませて小便をとらふと云事か、それはなるまいゝといふた、

(四)親仁のとんさく

さる町内に東山へゆさんに行れた、其内におやこづれにてかへり、かのおやぢ酒にえひ小歌ぶしにてかへりけるが、我町内になり主が家も行過たり、むすこ、これゝこちの家はこゝなるにといひければ、おやぢさらぬていに行、今はいれば小歌があまるといはれた、

(五)田舍人色里へ行

さる田舍もの、四五人づれにて島原へ見物に行けり、又京衆ゆきて女郎の名をいひ、井筒さまの夕がほさまの玉の井さまのと色々ほめける、かの田舍もの、扨はうたひの名にてほむると心得、さらばうらゝもほめんと思ひ、ようゝ橋辨慶さまとほめければ、やりて、こゝな人は太夫様をはしごへん樣とは、とさんざんにしかりけるを、よう由うばさまといふた、

(六)あさねの事彡

さる一向宗毎日朝事にまいられける、あるときねすごし、肩衣をとりちがへ、女房衆のまへだれをひつかけ參られければ、道にて同行衆に行あひ、こゝなはいかうあかう御座るといひければ、されば其事いそぎまするといはれた、

(七)親仁命ごひ

さるおやぢ壽命をねがひ、淸水にまふで、われ百までのじゆみやうを與へさせたび給へとて、七日まふでけるに、あたる七日目に三年坂にて、白紙に百といふ字の書たるをひらはれ、是こそ觀音の御利生とよろこび、宿にかへり兒むすこに見せ、かくのごとくとかたりければ、兒つくゞと見ていふやう、是は命乞か

なひたるにてはなし、文字をよみくだせば、一日ぐらしといふ事にて候といひければ、又弟いふやう、いや左様にてはあるまい、それはころりゆけといふ事にて候といふた、

(八)繪心ある人批難をいふ

さる人何を見ても只批難ばかり云人有、例へば狩野の筆にてもさんを入れけるが、ある時友だち二三人つれだち嵯峨邊へ參られける、折節白鷺二三羽田の畔におりければ、つれの人云やう、[ムシクヒ]かの批難いふ人申やう、いや／＼鷺のひつせいはあのやう成物にてはないといふ、とやかくいふ内に鷺飛去る、又つれ申やう、何とあの飛さる所は見事ではないかといふ、又批難いふ人、いや／＼とぶ筆勢はあれが何として、あのやうなる物ではないといはれた、

(九)久三郎馬追喧嘩

さる久三郎辨當をもちかへりければ、むかふより馬をひ馬を引來りけるが、かの辨當に行當り重箱ふみわりければ、久三郎大に腹を立、脇指をぬきかの馬を切ければ、馬をひ腹を立、聞まいといさかひければ、あたりのものども出合、此やうに重をいたしければ馬もはねゝばならぬ、又馬子もかんにんせよ、きりときつたればつんとあがられぬといふた、

(十)雪隱をおがむ人

さる人せつちんへ行てはあとを拜みければ、むすこいふやう、何とこなたは雪隱へ行跡をおがましやるが、何とした事ぞとたづねければ、おやぢいふやう、己は物をしらぬやつじや、あれは大事の菩薩のはかばじやといはれた、

(十一)田舍もの手の筋を見る事

さる田舍者京へのぼり、手の筋の看板に手のかたありければ、いなかもの見て、此内に手をうるさうなとたづねければ、内より出、いや／＼是は手の筋を見て、一代の善惡をいひまする、所望ならば代物十二文にて見てしんぜうといひければ、しからば見て下されといひて見てもらひ、代物はらひ、扨下の町に足袋のかんばん有をみて、是は足の筋を見る所さうな、手の筋を見て足の筋を見ぬもいかゞと思ひ、かの足袋屋へはいつて、此足見て下されと足を出しければ、足袋屋は足袋をあつらゆるかとおもひ、ほんを取て、是は拾一文じやといひければ、かの田舍者、手の筋は十

二文じやが、足の筋は一文安いとて錢をつかれた、

（十二）かはつた買物

さる方にいろはかなくそ文字を知り、きゝてぼうもんにこびたがる人あり、むのじははね文字のんの字と同じ事じやときゝはつり、先月八日因幡藥師へ參り、本見世を見まはり、うたひの本が有かといはれければ、何がいりまするといへば、たんらがあるかといはる、本屋、いやそれは御座りませぬといふて、十ばんばかり取出し、これらはいりませぬかといへば、十册ばかりの上にかんたん見へけるを、かの人是はかんたんじやといふて下を見られたれば、たむらの本も有けり、是ほどたんらも有にないといやる、二ばんさうなといはれた、

（十三）當流のうたひ

何がしとて專當流のうたひを自慢せらるゝ人有、そこへ去人遊びに參られたるが、例の當流うたひの自慢いはるゝをきゝて、此仁いふやうは、貴樣當流をじまんなさるれども、われらほどなるまいといふ、亭主きゝて、その方はつるにはれな場へも、双林寺へも出られた事をきかぬ、我等は竹村甚左衞門が弟子にて、かくれおじやらぬ、しからばうたふてきかさつしやれといふ、何がし殿ゐなをりてうたはるゝ、

右のかひなをうちおとせば左りの御手にて六彌太をとつとなげのけ今はかなはじとおぼしめして ヤチハ

とうたはるゝ時、此人、いや〳〵それは當流じやないちがふたといふ、何がしどのはらを立、何のちがふた事があらふ、しからばお手まへのをきかふと申さる、その時此人うたはるゝ、

右のかひなをうちおとせば左りの御手にて六彌太をとつてなげのけ今はいしやぼんとおぼしめして ヤチハ

とやられた、

（十四）鳴物法度

さる御大名御他界にて、御國中鳴物法度のふれあり、御城中にても町々に番をいたし候時分、荷つけ馬とをりければ、はら〳〵とおり立て馬子を捕へ、是程鳴物御法度のきびしい御ふれの有に、そむくは大ちやくものじやとて、さん〴〵にちやうちやくする、馬子めいわくに思ひ、まつぴら御免被レ成候へ、御ふれ御

座候故鈴をもはづし、神妙に追ますするといへども承引せず、しばれ〳〵といからるゝゆへ、馬子扨何たる科にて左様に御腹立なされ候やといへば、番の衆、まだ如在な事をいふやつじや、あれ程子供が太鼓うて豆〳〵はせう〳〵といふを、あらがひをるかといはれた、

(十五)わらぢ錢たしなむ

さるこあげ酒のみにて、ならぬ中から毎日酒かふて飲みけるが、殊更此比は酒のねだんもあがり、こあげもすくなければ、女房うとましくおもひ、しかりけれどもきかずして、ひたすら酒手をつかひけるゆへ、ある時女房、てつきり今宵は寒き程に、又酒であらふと思ひ、錢のあり所をかくして置ければ、こあげどの内儀のねいる時分にそろ〳〵おきて、錢をさがしいだし、こしにつけ買に行かんとして、徳利をさがしける音にて女房驚き、火をともして見れば、亭主うろ〳〵と物をさがす、女房、それは何をさしやるといへば、いや物がないといふ、ものとは又とくりがなたづねさしやるかといへば、いやそれではないといふ、まづそのこしな錢は何事ぞといへば、さればとにまよふたさかいで、どこへゆかふやらしらぬによつて、まづ錢をこしに付たといはれた、

露新輕口ばなし卷三終

露新輕口ばなし巻四

(一)無筆成人無筆の所へ手紙の事

さる無筆成人、金ざしさかせと書て手紙をつかはされた、先様是を見て、これは金をかせといふ事也、さらば返事をせんとて、食つぶと茶の葉と書てやられた、さてかの無筆の人これを見て、さん〴〵に腹を立女房にいふやう、扨も〳〵上の町の孫左衛門はきこへぬ人じや、かねをかりにやりたれば、なの葉とめしつぶとかいてくされた、めしははんの聲あるによつて、なはんをせいといふ事じや、扨も〳〵きこへぬ事をいふと、はらを立ければ、女房、いや〳〵それはなはんではあるまい、めしはいひの聲ある、ないといふ事で御座らうといへば、亭主きゝて、まことにさやうの事もあらう、ないならばかなで書ておこさいで、おきなあてじをかいた、

(二)かんばんのよみやう

田舍人京へのぼり、さる所にてあきた新わらびと有看板をみて、是はめづらしき事や、いかやうなわらびぞきかんとて、かご口にしばし立ていられしを、内より何の御用ぞと申、いや秋田新わらびがきゝたいといはれた、内の者共くつ〳〵と笑ひければ、かの田舍人申さるゝは、さてもおかしもない、わらいに看板をだされた。

(三)主にかゝりの事

ある所の手代あたごへ參るに、道すがら謡をうたはれた、やう〳〵二三番おぼへられたれども、大音聲がよかつた、亭主きゝて、さてもよきうたひかな、さらばとはんとて、申只今のうたい、上かゝりにて御座るか下かゝりにて御座るかとはれた、いや上かゝりにても下かゝりにても御座らぬ、主にかゝりにて御座るといふた、

(四)田舍衆三條やど屋の事

田舍衆十人ばかり三條のやど屋にとまりけり、二階座敷へあげゝれば、日なれぬ所ゆへ、さて〳〵天にちかい所にをくと申ければ、京はいしの上のすまいといふは惡口、大かた屋根の上のすまいと、かしこらしき人いはれける中に、水風呂にいれとて下よりよび候へば、あがりはあがりけれ共、おりやう如何とひし

めくうちに、一人、これ〳〵われにつきておりよと
て、階子をさかさまにくだる、下にいける人々わらひ
ければ、いやとよ、さきに猫がかやうにしておりた、
なわらいそといふた、

（五）夜食のめしばち

當年の寒氣けしからぬゆへ、おやぢこたつを離れず、
夜食のおはちと共にあたりいらるゝ所へ、十二三に
成むすことばゝ〳〵と來て、こだつへ足をふんごみ、お
やぢの足をしかとふむ、おやぢはら立て、あのばちあ
たりめが、親の足をふむものかとしかられば、かの
むすこいふやう、何しに罰があたらふ、食ばちをばふ
みはせぬにといふた、

（六）字の書やう

さる人觀音のをんの字は、どうやらかくといひけれ
ば、ある人、さればしんにかけば六百と書、さうにか
けば七百と申されし、

（七）利口すぎた小僧

さる寺にうつくしき、それは言葉にも述がたき二八
斗の小性有、旦那衆まいられ、さて〳〵うつくしき生
れつきかな、此市三郎は女にしてほしい事じやとい
はれければ、小僧申けるは、和尚様にも左樣のお望に
て御座りますといふた、

（八）わるずいなかんだ

あるひだりかんだの人と四五人打より、酒のみて遊
びける、左の手にてかんだをかくし立居共にせしに、
ある一人、左の方から是さしますといふて、盃をさし
ければ、けはしさに左の手にてうけとり、いつもかく
す目なれば、うけざまに右の手にて右の目をふさが
れたれば、火のあかりが見へぬを、はてわるじやれ
な、たがけしたといはれた、

（九）茶入の蓋師

さる田舍の茶の湯者、秘藏の茶入の蓋われてなかり
けり、京へのぼりたるこそ幸と思ひて、蓋師の所へ
行、色々と吟味の上にて誂へられければ、蓋屋てうじ
やうへやのぼりけん、あはぬさいくなれども、重ねて
の細工のためにて御座りまする程に、して見ませう
と申ければ、そちの手ならひにあはぬ蓋は、いらぬと
いふてかへられた、

（十）はや口にてゐとき

さる所に開帳あり、いろ〳〵の寳物ども繪ときの坊

主のべられけるは、是は弘法大師の作の觀音、あれなるは傳教大師の御作の大黑、其次なるが同作の十一面觀音、こなたの彌陀が太子の作、是が法然の二くずしの舍利、おゝがみあれど、息をもつがずに申されければ、皆人々、にくずしならば此開帳急直せといふた、

(十一)持佛に鬼の事

さる人持佛のまん中に、見事に鬼をつくらせて本尊にたて置、朝夕未來は申にをよばず、現在共にたのみ奉り候と、ふかく怠りなく祈り被レ申候、有人みて、扨扨其方はおかしき事をいたしをき、何とて鬼をたのみ申され候と申候へば、いやとよ、佛菩薩彌陀如來はこちがたじやといはれた、

(十二)利根なき人物かす事

さるしわき人、又しわき人の所へはしごを借につかはし候へば、安き事にて候へども、其方へはならぬ、此方へ來てのぼり給へと返事しければ、扨もにくい返事かな、何ぞあいつが借によこさぬ事はあるまいと云所へ、水風呂桶御かし候へと申こし候へば、さてこそと思ひ、安き事此方へ御出おいり候へといふた、

(十三)ころも屋の事

田舍衆、三條通りを四五人づれにてとほりざまに、見世に親子二人いられけるに、四五人の衆いなか聲にてたか〳〵と、島原へはどちらへまいる、敎へてくだされよといはれければ、是を西へと敎へた、かたじけないとて西へ行、島原には暖簾なが〳〵とかけて、色よき女ばうの居るときゝ及び、見んとおもひて急がれければ、衣の店へ行、さてこそ長暖簾あり、さらば思ひのまゝに見物せんと思ひ、のうれん押上々々見られければ、女ども大勢ころも縫ふてゐけるを見て、扨こそとおもひて、ようぬけまするといはれた、

(十四)城請取の事

さる大名、西國邊へ城請取に御くだりの折節、若き侍衆、大坂道頓堀にて三つ足の子を見せものにいだししを、立どまり見てんやと有ければ、木戸のもの申候は、きのふ迄三文宛で見せ申候へども、今日はまけて一文づゝと申候へば、侍衆、大事の門出に一せんにまけてはならぬとて、見ずにかへられた、

(十五)有馬の火事

湯元の藥師如來は行基の御作、めいやくしなり、然るに大きなる火事にて、藥師如來やけ給ふとも申す、

のけ給ふとも申す、いかゞと問はれければ、ある人申けるは、いつくしは燒け給へども、三くしはのけたといふた、

(十六)はり札の事

ある醫者、宿札に生田上成とかきて置し、さる者見て內へはいり、扨々珍らしき御事や、私つゐに見申たる事なく候儘、一目御見せ被下いと申、內よりそれは何の事ぞといへば、表にいきたかみなりと書きて候と申、いや〳〵いきたはさてをき、しんだかみなりもないと笑ひし、

(十七)利根なる豆腐賣

さる所に庚申の夜、豆腐うりしをよべ〳〵どきかず行しを、人をいだして呼びかへし、そこな豆腐屋耳はないかといへば、やう〳〵一つ御坐りますと、耳豆腐を一てう置て行しと、

(十八)はじめとはちがふた

芝居へ見物に行しに、或者編笠きてさきに見物して居ければ、あとの人、編笠とられよとてさい〳〵申せどもぬがず、いかいじやまの人かな、口でふ時とらいで、引ばかなといふてもとらぬ、男達かと思ひて、こらえかね編笠を引たくれば、にが〳〵しきかさかきなり、引たくりし人も笑止におもひて、やはりきて御座れとて又きせた、

(十九)夜番御用心の事

夜番ども寄合いふやう、何と上の町の又兵衞が御ようじ程、大音でよい聲がないといふ、其內にしさいなものいふやう、いや〳〵又兵衞が聲はよいけれど、ぶひやうでもちつと棒にのらぬ、

露新輕口ばなし卷四終

露新輕口ばなし卷五

(一)くすりぐひの事

さる寺に坊主四五人集りて、藥ぐひにごぢやうを買に、徳利もたせて小僧をつかはしけり、道にて小僧何をか買にいかれた、小僧申は、この徳利は酢か醬油か、さしたらば一疋やらうといふた、

(二)繪心なきもの

繪心なきものにて、てうちん屋の看板かきて下されと申、ゑかゝねど口口かく如くかきてやる、去もの申は、是は行燈の看板じやといふ、かきたる人、さてはあて字かといふた、

(三)よいかげんな事

去在所もの參宮いたし候に、大夫どのにて風呂に入、草臥た、たまはりた、おはらい〱といふ、一人のもの申は、おはらいはまづ風呂をあがつてからの事といふた、

(四)七條のやきちん

さる有徳なる人相はて、七條にて火葬にいたし候時、をんぼうやがて帷子をはぎて火葬に致し申候、灰よせの時分、燒賃とて錢六文やりければ、をん坊、是は燒賃にはすくなしといふ、いやそれにてよし、其方が帷子をはぎたるにより、今ははぎやきは五文六文じやといふた、

(五)男禁制の所

御葬禮のあと泉涌寺にて拜み申時、男はならず女ばかりおがみ申、在所よりぢゞばゞ來られたり、男はならぬといふ、ぢゞ腹を立、ゑこひいきあらば歸らんといふ、ばゞ一人おがみにゆく、ぢゞ腹をたて、ばゞその方斗一人おがみて佛にならばなれ、高野で思ひしらせんといふた、

(六)目出たい世の中

百姓家根ふきなをす、内の三藏屋根より落ければ、人々きもをつぶし、目がまひたるか腰がぬけたるか、たゞしは死はせぬかと、あはてふためく、旦那きゝ、いや〱此やうなよの中のよい時は、下へこぼれたものに、わるいものはないものじや、

(七)かしこうない人

さるしまつな者、錢百文ひろひたるが、此錢に紙に書

付の札あり、一匁八分と書付あり、今は錢百文が一匁四分五厘なるに、一匁八分にてひろひ候へば、三分五厘の損なりとて、ひろはれなんだ、

(八)よき葬禮見ぬもの

田舍者四五人京へのぼり三條通を行、然る所へよい衆相果られて、結構なる葬禮來る、つゐに目なれぬ事なれば、あれは何成ぞ、上人樣が白いのりものに箔つきたふろしきをしき、大勢人が上下にて來る、何なるらんと申候へば、しさいらしく申人有て、あれは諸國の大名衆より、御所がたへ御音信ものがゆくといふた、大事のものかといへば、いやこわめしといふ、つれども、それは中にも見ぬにといへば、こは飯の證據に、皆額にこまじほをあてゝゐるといふ、

(九)あてのつちがはづれた

花山に萬日のゑかうの時、大分に雨ふり、茶屋、あき人、役者、其外のものまで相應に損をせり、十念おろし給ふ御長老衆、いつもは南無阿彌陀ぶつとさづけられしなれども、かれども雨ふりて氣の毒に思召、十念をあうまい／＼と授けたまふ、花山とははなの山とかく字なれども、くわさんとかなにてかく時は、くはさんがじやうなり、

(十)いひさうな事

さる所にごぜにろくろ首ありと若き衆申せば、見に行かんといふ、一人申はよい[ムシクヒ]、さる時に五三人夜に入て行、さま／＼遊びいたりけり、歸らねば寢ぬほどにとて、歸るていにて表をあけ、皆々椽の下より、かのごぜ樣入候を見て居たりけり、案の如く客衆歸ると思ひ、寢屋に入けり、くだんのろくろ首そろ／＼ぬけ、かの見へぬろくろ首にて、向になにがあるもしらずぬけゝるが、行燈に行あたるを見てこらへかね、かの椽の下より右へ／＼といふた、

(十一)又いひさうなもの

さる所にをしの乞食、門々をごきたゝきありきしに、さる人、あれはにせなるといふ、旦那きゝて、其やうにいひまするな、ふびんなる事かな、その方はふびんや、そちはしやうじんのをしじやといはれければ、かのをし嬉しく思ひ、あゝといふたもおかし、

(十二)むごんの事

さる者三人寄合、廿三夜まちをいたし、夜中迄の事なるに、夜中迄無言して月を拜まんとて、むごんと定

む、一人あくびして、物いはずにいられんものじやといふた、二人目の人、無言にものをいふかといふて二人破る、今一人のひといふやう、まだいはぬものはおれ斗りだといふた、

（十三）かたきうちの仕出し

こじきには程なし、さる者非人になりて有しを、いにしへのちかづき逢ふて、その方はなにとてかやうに非人になりたるぞといひければ、いや我等は親仁をもちし、誰ぞ殺したらばと存じ、かたきうちにいでたといふた、

（十四）俄道心

俄道心あり、しやく杖をふりて修行に行けり、さる人申けるは、世間の修行人は、念佛かはつちにいで給ふに、其方はしやくじやういかに、されば其事、私は俗の時大分に借錢をいたし、先樣へしやくでう手形いたしつかはし申候、其埒今にあけざる内に坊主になり申候故、そのほごこしにもなり候はんと存じふり申候、又ものいはざるは如何にといふ、借狀手形の奥書にも、一言申まじきとかきて候、

（十五）所ちがひの事

さる者絹三尺もとめ、肌の帯にいたし、絹の下の帯を喜びありく、さる人とはれけるは、加賀かと問いければ、越中といふた、

（十六）むすこが自慢

さる人四五人よつて話しゝて居られけるが、はなしの上にて一人いはれけるは、私がおやぢは毎日寺參りばかりしていい申され候といはれければ、皆人、さてさて夫はきどく成事でござると、色々ほめければ、其中に無分別なる人あり、われも人にほめられんと思ひ、私がおやぢは生れてよりこのかた、女の肌をふれられませぬといへば、皆人いふやう、こなたは養子か實子かとゝふた、成ほど私は實子で御座るといふ、しかればこなたはどこから生れたといふ、その所へ氣がつきませなんだといふた、

（十七）犬のまじなひ

さる人云事は、犬のおどするには、小指に虎といふ字をかけばをどさぬといへば、又人、それでもいつぞやかきて通りけれ共、上の町の犬が大ぶんおどしたといへば、いや〳〵それはいちがひにはいはれぬ、無筆な犬なれば、しやう事もないといはれた、

（十八）大佛の釋迦へ願立

さる人一子をわづらはせ、大佛のしやかへ願をかけ、此世倖本腹いたし候へば、おまへに戸帳をかけて進ぜませうと申せば、さつそく平癒いたしました、夫婦喜び禮參りいたし、扨戸帳のもくろみいたし候へば、さても〳〵大分いり申ゆへ、是はいかにしてもなり申さず候ゆへ、せめてきごく頭巾にてこらへて下さんせと申された、

（十九）おさこ自慢

ある裏長屋多き所にて、一人の女房の申けるは、さてさてこちのおやぢは、皆々の聞かしやるやうに、一杯すぎると酒が酒を飮む事じややら、いやが上に飮まう〳〵といふて、ちとをそいとたゝくやらわめくやら、氣の毒な事で御坐るといへば、皆々、おなごはひとつじや、かさねてつえとりばへをするならば、皆よみまするとて約束してをく、案の如く又よい機嫌になりてもどり、酒のもう〳〵とあたけ、女房をたゝくつてたゝきかへさん、おしらしやれと申ければ、たの時、女房約束の如くほうばいへ申ければ、廿人斗のあひ借屋のかゝや後家たち、手々に火吹竹すりこぎなど持よりて、おやぢやらぬ小言いふかとぶつてかゝれば、女なれども多勢かなはず、隣へ逃こみて屛風のかげにかゞみゐる、隣の亭主是を見て、あさましや女にたゝかれせうし〳〵、此男はうちのやつと十五年そへども、つゐにこぶしひとつもあてられぬといふた、

元祿十一子歲正月吉日　藤兵衛板行

露新輕口ばなし卷五終

輕口あられ酒目錄

卷一

卷二

目録終

輕口あられ酒巻之一

(一)嫁取だんご

さる人よめよびたくおもへど、有はいやなりおもふはならず、おはりの一もんより、むすめをくれんといへ共何とせん、又さる人申は、大名もごりが有、これをきもいらんと云、如何せんと有ば、さるそそうな人、かきもの見てしんせうとて、こよみとり出し、大めうからはいらぬ物、おはりのになされ、大名五む日八せん、おはりよめごりによしと有程に、

(二)嵯峨のしやか江戸にて開帳

釋伽如來開帳、十月にはさかいへ御のぼりなされる、またおがみ申事もまれ也、けちゑんのために、春まで御かいちやう御のべ下され候へと、江戸中ねがわれければ、つき〴〵の出家衆申され候は、のばす事はかなはぬと有、いや〳〵ま〳〵も、かいちようのびたる事御ざ候と云、いや釋伽のかいちやうはちゞめはするとのばす事はならぬ、それをいかにといふに、しやかがしらじやとゆふ、

(三)江戸にて御身ぬぐい

釋迦如來御身ぬぐい、絹さらしのきれ持參いたし、御身ぬぐうが錢百文宛に定め、さるものぬのぎれ壹尺に錢五十文そへ、御身ぬぐい頼とゆう、いや御身ぬぐいは定めが錢百文とゆう、五尺三尺有きれも百文、これ一尺にたりません、五十でまけて下され候へとゆう、しやかきこしめし、にくゐ申分哉、しや迦のさほうやぶる、しやかはきわめが百文なり、あわせも百にたつ、なんぢ五十にねぎる事、三國一の此釋迦を、あをにヽするかといわれたり、

(四)釋迦如來おだわらにての事

さか如來小田原にて、もはや日本の地をはなれたかと有、いやこヽは日本小田原と申す、ういろうの名所と申す、しやかによらい、うゐろうやのかんばんに、とうちんことしてあるほどに、からかとおもふた、

(五)如來御身ぬぐい

しやかの御身ぬぐいとて、さらしのきれ二寸程に切、鳥目百文づヽにていたゞかす、いづれも申うけられ候衆申され候は、これは如來の御身にあたりたるのにて御座候かと申す、成程せいもん御身ぬぐいたるさらしのきれ也と申す、人々よろこび、いたゞき歸る人衆をしらず、さて如來さがへ御登りは、十月廿日晝の四つ也、しやか大津にて被仰候は、三條より四條からかへるべし、ぎおんのおたびへより、せいもんの見やへまいらふといわれた、

(六)小僧りこん

寺のちやうろう小僧つれときにゆかれ、ふせに錢貳百文つヽむ、こぞう受取、頃日(このごろ)は小遣もなし、百はわたくしにせんとおもひ、百文かくし殘百文かみにつつみ置、ちやうろうこぞうに、さきのふせはと申さる、小ぞう百文出す、ちやう老ふせは貳百文と申さる、こ僧いや百文にて御座候とゆう、これうはづヽみのかみに、ふせ貳百文として有、小僧、いやふせに百文と申た、ふせに百文か

(七)小歌ずきな人

さるていしゆなげぶしがすきにて、よるよそへゆくとかごをうたふてありく、あるとき夜る男留主なりけるに、おもてをなげぶしうたふてありく、内儀こちの人じやとおもひ、おもてのとをあけてまちいられた、かごをうたひて下の町へゆく、ようにたこへとて

又内に入ところへ、おとこ歸りけり、女房申は、扨もよくにたこへ有、今おもてをうたふて通つた人、こなたかとおもひ、むかひに出候が、下の町へゆかれたといふ、いやおれであつたが、うたがあまりたにより、下の町までゆき、うたいしまふたとゆわれた、

（八）宗論

さる法花宗申は、いかに淨土、その方は何をたのみ佛になるぞ、こちはあみだ如來を賴むと云、法花宗申は、それはひだるいものを賴む、如來はおんなきたるとかく、女らいが何がかたじけないと云、妙法の妙はおんなへんに少ほうれんげきやう、同じ事といふ、

（九）鳥指小僧

ちんさいと申す小ぼうず、ぶてうぼう成小まい舞いもうし候、御ちそうにまはしもうさんずるあいだ、おんゆるし下され候へと申す、何れも御きやく方、これ一だんとしよもう有、殿ちんさいを召なされ、何れも樣へ御ちそうにおさかなど仰せ付られ、ちんさいかしこまり、さいた〳〵見さいな、鳥をさいた見さいな、ひとへの日は又壹つひよ鳥、日よりよかれとさいづるところを、ちうでさいておつとつた、二日の日はまた〳〵、二日の日はまた〳〵〳〵とばかりにて、さすものわすれとのさまの、ちりめんのはおりがざしきにあつた、やがてはおりをさゝれた、御きやくをはじめ、ちんさいよきものさいた、ためになりそうなもので御座ざるとて、何れもおほめ有、とのもおかしく思召、すぐにわれにとらすとて、羽おりをちんさいに下された、はおりにちんさいあぢを得て、三日はまたまたとのさまの、さしがへの金作りのかたながあつた、此かたなをさそうとした、とのさま御らんじて、それはおれがさすのじやといはれた、

（十）今なり平の事

町方にわかいしゆ二三人づれにて、まちをとをりけり、むかうより廿三四許なるわかいしゆ、びんあつくまゆほそく、きりやうよき仁まいり候處に、二三人の内より一人ほめけるは、扨々よききりやうかな、しやうじんの今なり平と申けり、中に一人こゝろにおもひけるは、あのようなるはなりひらと申す、我等もなり平とほめられんとやどに歸り、かみゆひをよびにやり、さかやきをこのみ、びんあつくまゆほそくとこのみけり、かみゆい仰のとをりすりけり、かの人よろ

こび町方をとをりけり、久しき人にあひ、さて〳〵久じうあい不レ申候と一禮ありて、さて貴さまはいつのまになりになりやつたぞ、かの人、さて貴様は季をのけてなりとは、しやれた申分ゆはれたと悦、まゆほそきゆへか、

(十一)すまうのなのり

さるすもうずきなる人、しゆじやかのくはんじんずもうへ参られ候、かの人、小むすびより段々せきわき迄とりほしけり、大關くま右衛門をのぞまれけるに、行事あつかひ申され候へ共聞不レ入、ぜひ〳〵大ぜきにのぞまれけるに、ぎやうじ申すは、左様に御ざ候はば、今かの三ばんなのり候へ共、六ばんのなのりに仕候と申しければ、かの人合點して、ぎやうじなのらば何と申候ぞと聞きければ、かの人名乘は御座なきと申ける、しからば何やにて候と申す、こんにやく屋と申す、行事心得、今日のすもう東の方において、ろくばんからこんにやく屋となのりける、けんぶつよりふわあとわらわれた、

(十二)一ぱいきげんで遣だんな

さる旦那下人よび寄、ことの外さむく候へば、なんじさけを一つのみて、ふし見へつかひにまいれ、やれだけあつくかんをいたし、八藏にのませと有、下女かんよく候と申す、だんなこゝへ持て参れ、われかんをみんとて、ちやわんにつゞけざまふたつのみ、さてよきかんなりよいきびかな、このいきおいにゐてこいといわれた、

(十三)よわき者けんくわ

さる町にけんくわあり、さん〳〵にふみあいければ、あたりの人ひらに〳〵かんにんあれ、こなたのあひてはにげたとゆう、むねんやせんをこされた、おれがにぎやうとおもふたに、

(十四)しわきおやじ

さる所に七つ八つ許のまごあいはて、は丶おやおば一もんなげく、しはき親もつともかなしきはことわり也、しかしおれもかなしけれ、こゑをあげてなけばあたりへきこゑ、とむらいに人くれば、めい日にちやもたてねばならぬ、そのやうな事ではせたいならぬ、やい三藏、この子がしんだが、そうをいたす事人にしらすな、野だちがあれば、立酒の壺つももらねばならぬほどに、人のしらぬやうにふごに入れ、さんまいへ

その方一人かたげてゆき、うずめて歸れ、これをうづめたら、さだめて土があまろほどに、もどりにふごにつちを入てもどれ、へつついのうはぬりにせうといわれた、

（十五）四條石かけ町大文字やの事

たつの四月なが雨にて、かも川の水大分に出けり、石かけ町大もんじやのやましう小ゆきさて、廿二三なる女、水けんぶつに川ばたへ出ければ、川の石かけくゑて川ゑ流れけり、人々あわてゝ引上げたれども、ふかき大川ゑはまりければ、まづきつけに水のまさんにもしたち有、さまざまかいびやうしけれども、ついにしゝたり、町中より合、扨もふびんの次第かな、心だてもしおらしきものなるに、ふびんなる事なり、まことに人間はひほうの死はいたさぬと申せども、しやうじんのこれはひほうなりとゆう、町の年寄申されれ候は、いやこれはじやうがうなりとゆふ、又みな申され候は、年より候てが長びやうにてこれがじやうがう、此わかきものゝしにたるはひほうとゆう、しゆくろうまた申され候は、たゞのものかわへはまりてしなばひほうなり、これは大もんじやとゆう茶屋のおやまなり、ゆう女がながれの身でしぬるは、ぜうごうなりといわれた、

（十六）掛物あらそふ事

さる所にふるまい有、いづれもざしきに居ながれ、何れも、とこにかゝりし鶴の繪はちよくわんの筆なりとて、ていしゆてうはういたしおかれましたが、今日みなさまへ御ちそうに、かけられましたそうなと申されたれば、でんぶな人すゝみ出、いやあれはつるにてあらず、がんじやと申ける、いやつるじやとゆう、いやがんにきわまつた、つるならばろうそくをくわへているはづじやとゆう、

（十七）おやこともにたらぬ

さるむすこ月夜に長ざをもつてそらをうつ、親仁見て、何をする、むす子きゝ、ほしをかつとゆう、親ぬからぬかをにて、下からはとゞくまい、屋ねへあがれとゆうた、

（十八）すいせんをしらぬ人

極月のころ、さるざしきのとこにすいせん一本いけてあり、さる人見て、さてめづらしいとふしんがる、ていしゆ見て、その方樣にも花にこゝろがありそう

なとゆう、いや心はなく候へども、かんのうちににんにくに花のさいたは見はじめとゆうた、

輕口あられ酒卷之一終

輕口あられ酒卷之二

（一）たんきな牢人

さる牢人ほうろくづきんにかみばおり、なべのつるのやうなかたなをさし、さむけれどあふぎ遣ひ、山寺などうたひて、さる町人衆の所へ行、色々のせんせうばなし長々といたされた、夕喰時分に成ければ、お内儀あなずりがましく候へども、今晩はおみいをたきましたとて膳すへければ、ろうにんふたをあけ見て、さん〴〵にはらをたて、やがてかたなにそりをうつ、ていしゆ御もつともあやましたと申、牢人、いや〳〵ていしゆ、内儀は申分少もない、云ぶんは此ぞうすいに有、やいぞうすい、おのれはなにのいしゆにて、おれがゆくさき〴〵へついてまはるといふた、

（二）米屋男そさう

高直な米次第にさがり、皆々よろこぶ折節、雨ふり道しるし、こめやの男げたをはき、四斗俵かたげとくいゑゆく、町の宿老見て、米をもつてゆくかと云、米屋の男も宿老にあひ、ぼくりはくは慮外と思ひ、たかう

ござりますとゆう、しゆくろきもつぶし、又あがつたかといふた、

（三）あま乞の願ほどき

元祿十三年夏の頃、丹波の山家にいへ廿許の在所に、高十五石の所有、庄屋あまりに雨ふらず、其在所のうぶすなに一尺許の宮あり、庄屋願かけ被レ申候は、雨を給はゞ此うぶすな様へ、やくしや五六十人程に、三番つゞきの大狂言、水がらくりをいたし、いさめ可レ申候と願かけゝれば、其夜雨降世の中よし、扨雨乞のぐはんほどき致し可レ申とて、京へ役者やとひに登す、役者五六十人參候へば、雜兵百人の上參り候、銀子一貫五百目取行と云、さん用いたすに高十五石の所、五十匁米にして廿年が間一粒も不レ殘、雨乞の願ほどきに入事なれば、かなはぬといふ、去者是は一つとも成、しかし神の事そまつには成申まじ、私錢一貫にて五六十人程よせ、水がらくりいたしうぶすな様へいさめ可レ申と申ければ、餘りやすし、手形被レ致よとて、やがて一貫わたす、うけ取九百文もうけたしあんかくべつ、かのうぶすなの御こしになわをつけ、せなかにひつかけ京へ登り、都萬太夫が芝居の內へ入、



かのおみこしをまへにかゝへ、今度の雨乞のぐはんほどき也、能御らん候へとてみせた、

(四)そさうないしや

さる醫者かぜを引いられたるに、又病人有よびに參る、いしや參られて、わたくしも風引居申候、定て貴樣のもがいきならんと脉をとり、われらのも其方樣のも同じやまひ也、藥調合いたし置申べく候まゝ、取に御越なされ、かはる事あらば申こしませうといわれた、

(五)はりつけにいけん

粟田口ににせ金いたした物、はりつけにかゝり、木の空より皆樣一蓮たくせうのお念佛頼ますると、ゆう、やつこにらみ、今は念佛申也、重而おたしなみやとゆふた、

(六)下り船にゑんりよ

ゑんりよせいでもだいじない事、ゑんりよする人申され候は、おれは大坂へ下るのに、夜ぶねで下りたいが、親子兄弟ふねにのるに、伏見でごぼううるので何ともめいわくじや、

(七)きまゝな親仁

さるきまゝな親仁、一もん子供よび寄、我等そくさいの内、その方共にゆひ置いたし置なり、今度の門跡さまの御そうれいおがみたが、かね大分に入ても極樂より便りもなし、おれがしにたりと物の入ぬやうにそうをいたせ、子供、その方樣ゆい言の通りにいたしませう、こしでやりませうか、いやそれでは物がゐる、のりものでか、それでもかねがいる、ぶりにないしてやりませうか、それでも日用二人やとはねばならぬほどに、たゞかねの入らぬやうに、おれがしんだらかちでゆかうといわれた、

(八)かんの内にあせかく

さる若衆よりて申は、扨々さむし、もはやことしあせかくことはあるまいとゆう、亭衆、もしあせかくことこそあれ、去かたへまいらぬといふ、四五町ほどゆき酒屋のおもてをたゝく、何ものぞとゆう、見れば酒めしむすそうなに、一ぱいだせとゆふ、酒屋の男あばれものたゝけとて、ぼうちぎりきにておつかける、そりやにげよとてにげにけり、さかやの男共、何のこともないあばれものじやに、かゑれとてみな〳〵もどる、にげたるもの共ほう〳〵一所によりて、さて〳〵云

れぬ事申にげさせた、あせかいたとゆう、亭主、その方立あせがかきたいと被レ申るゝによつてと云た、

(九)碁にあぶながる人

さる人ごうつを見てゐられたり、たゞ物あぶないあぶないと申された、うつものきく、なにがあぶないぞ、おさへたらぬく、やしきらばわたらふ、見な石はつゞくが何があぶないぞ、いやはなゝ石がおてうかと思ふて、あぶないといふた、

(十)同じく助言ゆふ人

さる人碁にくせとして助言云ずきな人有、うち手衆いやがり、今から助言ゆやるならば、くはだいに錢百文宛取ほどに、かまへてゆやるなと申せば、かの人助言云をこらへかね、五十文でまけてたも、そこな黑石渡れと云すてゝゐんだ、

(十一)おやぢ當作

去所の親仁目鏡をあてゝ、物の本見ていられたが、とろ〳〵ねいり、後にはゐびきをかゝれた、內儀見て、ねらるゝならばめがねもはずして、ろくに休だらよかろうとおこせば、おやじぬからぬかほして、ゆめを見るとゆはれた、

(十二)進上物書付よみやうの事

或御所がたへ去ところよりしん上に、杉のはこ一つ上るつけがみあり、かなにてなにはとかきてつけてあり、使者役人請取、ひろまにて申は、さて〳〵ふしぎや、これ〳〵なにわと申事かきてあり、これは中なにやらんとあんじいしが、人々より口じこじたことかな、なにわの梅のなにしおゝにてもなし、なにはづにさくやこの花ともいわれず、なにわのあしなにはの入江にてもあるまいと、さま〴〵あんじた、あけ見たれば、なが一わあつた、な二わ、

(十三)あんじん事

さるものひたいに手をゝきて、さて〳〵わすれた、そばなるもの何ぞといふ、いや去年の八月十五日は、月かやみかわすれた、そばなる人もたらぬ人にて、こよみをみやといふた、

(十四)たらぬ人

さるしゆつけくびにじゆずをかけ、あじろ笠きて通る、たらぬ人見て、ふしぎやあのじゆずはかさよりちいさし、何としてくびへはいりたぞ、たゞしくびともにじゆずやへあつらへたかとふしんがりて、あさ

よりゆきと見れば、このしゆつけ近付にあひ、扨久しう御ざるとさをぬぐ、かのたらぬ人見て、さてはかさをきぬさきに、じゆずはかけたものじや、あんどした、

(十五)こう屋へ男を使にやる

ぎやうさんぬけたる男を紺やへ使にやるとて、色は花色にしてあられこ紋をつけてといへ、あられをわすれたらば、二月十五日にいりてくふた、あられを思ひだせといへば、心得ましたと行けり、紺屋にてあられをわすれて、色は花色にして、しやかのはなくそをつけてたもれといふた、

(十六)間にあひな宿老

さる町に月なみのより合有、くわい所にていつもの法度書よまれたり、町内遊女野郎かたくきんせいとゆうことを、すぐにのらかたくきんせいとよむ、壹人のひと被申候は、それはのらにてはない、やろうじやとゆう、宿老申され候は、やはりのらとよまれよ、とても此町にやろうかゝゆるものなし、若き者共がのら〳〵する程に、やはりのらきんせいとよめと云た、

(十七)そゝうなたばこのみ

ある人よるの夜中時分にめをさまし、たばこのまんとて臺所にゆき、下女のまくらもとに火打箱有を、火打といしを持、下女のきわすみに火をうちかけたれば、あの玉へいしあたりたり、下女きもつぶし、目より火が出たとゆう、かの男ぬからぬかほにて、その火で一ぷくせうとゆうた、

(十八)正月うたひぞめの事

さるものより合、今夜はうたひぞめなり、ばんうたひこそしらず共、小うたひ成共一切づゝ也うたわんとゆう、一人のもの申は、おのれはたかさごやこのうら舟にほをあげと斗おぼへたとゆう、ともだちおかしくおもひ、しからばそれほどなりともうたひ出されたら、すへはみなつけんとゆう、しからばくわいぶん也たのむとて、人なみにざしきにつらなりおもひけるは、かずなきうたひなれば、人のうたはぬさきにとおもひつき、ともなしに高砂や此浦舟にほをあげてとうたへども、いづれもあきれてつけず、うろたへ顔きかとおもひて、高砂やこのうら舟にほをあげてゑと引ども、つけず、なをうろたへてたすけ舟と云た、

輕口あられ酒巻之二終

輕口あられ酒卷之三

（一）下馬札を見た事

むらさきの丶大徳寺の門に、下馬としてあつた、そ丶うなもの見て、やすいことじや、一分の馬があるとゆうた、

（二）はやらぬだんぎ

天ぢくのさる所に寺有、くれ合より談義いたされ候へども、參り衆四五人ばかり也、寺おとこきのどくにおもひ、あづきがひをたきて、だん義まいりにふるまいければ、しだいにまいりかさなり、十人が五十人、五十人が百人になりけり、長老大きによろこび、今はわれがだんぎき丶入、大分のまいり有とてよろこびたまふ、男いやさやうにてもなし、勿論こなたの御そんにては候へ共、あまりしやうしにぞんじ、小豆がいをたき夜喰にまいり衆にふるまい申候故、まいりもおそくなり候と申、ちやう老もつともさもあらん、ずいぶん馳走いたし、まいりのあるやうにたのむと有、しかし頃日はあづきがいたきけれども、次第に參りもなく、寺のおとこせき、談義はてじぶんに門に出、明日より談義かわり、なめしにでんがくじや〳〵、

（三）相撲の關金いかり

さるもの申は、さて〳〵ほしな寺のすまふは、男よりばゞが大分見物にゆくといふ、すまふは男のものなり、ばゞのゆくことがてんゆかぬ、いやわきの勸進相撲はみなみやがた、あそこは寺がたでばゞがいたと云、あれはなにとてほしな寺とゆう、むかしたゐかうさまの、あの寺におこしをかけられたとき、ぢうぢ御目見へのため、ほしな二れん上げられた、それが寺のとく根になりて、ほしな寺と申、寺號はかうぶくじとゆふ、しかればなにとてくはんじんずまふねがひた、あの寺もしんだいならず、如來樣をしちに入ることしながれそうなによつて、かないかりでとめた、

（四）鳥のまねの嫁取

さるむすめ嫁入するは丶親被レ申候は、たにん中ははづかしく、さきへゆかれ候とも、ものごとをしおらしく、うぐいすごへに被レ申とあれば、むすめこ丶ろゑたりとて、吉日きわまりよめ入夜、まづしうぎにぞうに出けり、さいにくきのありけるを、よめにはひか

ず、嫁大分に餅をたべられむねやけゝれば、やがてうぐゐすごゑにて、くきくおうとゆう、むこもしうげんに鳥のまねをするとこゝろゑ、うづらのまねにて、たこくをといはれた、なかうど人の女房しやうしにおもひ、かみさまよめごさまもおわかく、今よりおせわで御ざりませうとゆう、しうとめもりちぎにて、しうげんには鳥のまねをするとおもひ、からすにてあゝといわれた、下女たけきもつぶし、さてはよめいりのときは、とりのまねをするとこゝろゑ、や八藏かまのしたをくはつ〳〵とたきやといふ、八藏もしばをとつてかうとゆう、

(五)厚く物しらぬ人

さる者十月十六日に、東福寺のかいさんきまいり、目出たい此がらん、しやう一國師よりついにゐんじやうのない寺ぢや、つうてんの紅葉こゝもとのめいぼくなり、まことに諸木おゝき中に、もみぢのかうやういたしたるは、見事なものじやといゐば、何もしらぬ事、さて〳〵大きなもみぢの木哉、あつたらもみぢのはがみなあかうかれたといふた、

(六)あほうなでつちそゝう

さるだんなでつち壹人つれはなしにゆき、でつちに申され候は、だんがうもある、定てひま入申べくまま、そのほうはてうちん火をけし、こしかけて休居よと申さるゝ、出市、火がきへぬと申、だんな、やいたてておいてはきゑぬぞ、てうちんも下におけと申さるる、出市、したにおけばしはがよりまするといふた、

(七)けちみやくのにせ

さるとが人、かのにせがねいたしたもの、しざいにおこなはれ、めいどへゆく、六道の辻にて鬼むかひにゐて、地ごくへおとさんといふ、にせがねいたしたもの、さりとては鬼の目にもなみだ也、何とごくらくへまいる事があらば、おしへて給はれといふ、鬼きいてけちみやくはないかと有ければ、まんれいさまのけちみやく成とて、酒屋のかよひ出す、おに見て、これはにせなり、しやうじんいだせと申、しやうじんにもにせにもこれ斗也、しからば歩をひいて下されと申た、

(八)むまのとむらい

さるばゝの馬のつなぎしを見て、なみだを流された、さて〳〵あはれや、あの馬が死でかわをはがれて、そのかわをたいこにはられて、そのまゝたたいこもし芝

居のやぐらだいこになつて、どんどんさたゝかれ、その下でふだをかひ、かく太夫があやつりに、とよかつをしたをおもへば、なみだがこぼるゝ、

（九）鹽うりがなみだ

さるしほうりのおやぢ、鹽になひほそきはしをわたる、けつまづきなみだをながす、さる人見て、さてさてほそもとでにて、しほをこぼしなげかれ候事もつとも也、しほうり、いや二斗ばかりの事なるが、かはいや川の魚共がのどがかわかんとぞんじ、それがかはゆうござるど申た、

（十）ながだんぎ

去寺にだん義あり、折しも此談義永くいづれもたいくつせられた、漸々だん義はてゝ、さるばゝ壹人殘り、せきだたづねいられた、寺男ゆうは、犬がくわへいだい所へまいりたか、おしい事じや、せきだはなお犬がくいきりをつたとゆう、ばゝ大きにはらをたて、此はなをくろうたとなにの腹のたりにならふ、それほどくいたくば、あの長老の永だんぎのさきくいきらいでとゆふた、

（十一）あらたな石佛

さる所に御たけ貳尺ばかりのあらたなる石佛の地藏あり、さる人此地藏にむかひ、まことに此ぢざうさまげんぶくじやにて、むしくいばなど御なをし被成候、わたくしも何ぞしんだいのやくにおん立下されと申、ある夜ぢぞうぼさつ枕もとに來り給ひ、なるほどやくにたつべし、當年はな大こんやすし、何時成共くきをいたし候はゞ、おもしになるべきとの御事成、

（十二）浪花善くはうじ

大坂ほりゑ阿彌陀池へ、ぜんくはうじによらい壹體、元祿十二年にすはり御座て、五十日かい帳有、人々參詣す、正直成おやぢ、ふしぎや此みだ如來、三國傳來のみだによらいにて、いきによらいと承る、いごきもゆがみもなされぬとゆう、そば道心じや申されしは、成ほど生如來樣なれども、今は生物見せ申事御法度ゆへ、ひらかたにてしめてまいつたと申された、

（十三）むすめにいけん

十四五なるむすめ、正月のあそびにはねつきゐたり、わかい衆見て、そのはごいたをかしやとて、むりにとりちからまかせにつけば、はねやねへあがる、とりもせでかのわかい衆はにげてゆく、さすが女の子なれ

ば、ぁれ見さしやんせかゝさま、はねをわかい衆がやねへあげさしやつた、はゝおやきゝ、それいわん事かの、つねに若しうにつかしやんなとゆふに、つかしてとまつた、となりのばさまにおろしてもらや、

（十四）ねむたいうへのねむたさ

さるでつちだんなの夜ばなしの伴にゆき、こしかけにていねむりいたり、何のやうもなゐに、はやくたちたまわいでさねむる、宿の下女もしまいたいねむいとおもひ、でつちに申すは、長ばなしするものは、せきだのうらにやいとすへれば、はやうたつものじやほどに、もぐさやろうといふ、出市よろこび大きうしてするけり、旦那申は、宵やら灸のにほひするとてなをはなされた、

軽口あられ酒巻之三終

軽口あられ酒巻之四

（一）商賣があらわれた

さるかみ結のわかい衆、けいせい町へあげ屋ゑゆき、上娘よびにつかはした、遊女したくの內、かみゆひのわかひ衆、上郎をまちかねいねむりいられた、しかる所へ上郎きた、こゝははしたか也、とこへ御こし候へとゆう、かみゆいのわかい衆、いや今日はとこへはゆかぬ、日平間をやとうたとゆふた、

（二）有馬のゆなげく

國々の人々養生のために、ありまへ湯入いたされけり、ゆよりあがりては、宿にて酒もりいたしあそび、こうた上瑠理などかたり、さかもり有、さる人肴につなの小うたひをうたひ、つわものゝまじはり、たのみ有中のしゆゑんかなうたひければ、ゆな涙を流し、もはや有馬もめつぼう也、そのやうにみなつはものになりては、ありまへまいるしうはござるまいとてなげかれた、

（三）まはしに二色

さる人云は、人はしれぬものじや、いせや又兵衛はしんだいがならなんだ、いまはかねが出來たやら、十貫目のまはしをしやる、さるすまう取きゝて、扨々おれが一兩三分で買うたまはしもよいが、十貫匁とゆうはいかようなまはしで御ざるとゆう、それはなにのまはしぞ、はだ帶ではないかといふ、こちのゆうはかねのまはしの事、十貫目のまはしはおもとうてなるまいとゆうた、

(四)萬日にかいみやう

萬日の回向場へ、としのころ廿二三なさむらいゆき、改名たのもとゆう、坊主衆何とゝゆう、しくんやうさんと申しに、師匠の師をかく、さむらい字がちがひたと申す、又ようさんにも山と書、是も字がちがひましたいろ〳〵とかきかへ候へ共、氣にいらず、しかるを七十許成道心者かゝれければ、よろこびかへられ候、ふしぎや此方色々とかき候て氣に不レ入、其方樣御書候へば合點めされ候、何と申たる事やらんといへば、さればへに仍て法をとく、あのわかいさむらいの、むじやうのためにもあらず、こいよりをこるとおもひ、か樣にかいて思君樣參とやつた、

(五)子どもかる口

或とき四つ五つ許の子供まゝごといたしあそび、蜜かんのかわをさかづきにして、實をしぼり酒もりいたしあそぶ、中にもいやしき子壹人、しぼりたる實をくう、ともだち、そちはしうにせんとゆふ、なぜといへば、かんなべをくやつたとゆうた、

(六)大こく舞も見立

大こくまいきて町をありく時、大こくどの御ざつた、一にたわらふまへて、大こくどの御ざつたとゆう、さむらいは大こくはあまりしんじまいとおもふて、ぶし方では、御ざつた〳〵ゆみやかみさき立て、お八まんの御ざつたとゆふ、寺がたでは、大こくまいは如何おもひて、寺のにぎあいをおもひてござつた〳〵、念佛を前に立、往生人が御ざつたとゆふた、

(七)こしやくな子供

さる人十許な子と、七つ許な子とをもつ、さるときは物まいりいたすとて、かみなどゆいきる物着かへ出られば、あにむす子見て、かゝさまも内ではやうないが、出たちやればすてられぬとゆふ、てゝおや聞て、口をすぎたがきとてにらむ、弟きゝ、そりやぬし

の有ものに、うか〳〵してよいつらじやとゆう、

(八)たんきな長ろう

さるよそのてらにだんぎ有とて、何れも大勢まいられ、だんぎはじまらざるうち、口々にいろ〳〵のはなしいたしいられたり、しばしいたしはんしやうもなり、長ろうさまも御出あれば、まんざしづまりはなしもやみけり、長ろうもいろあをして申され候は、ふとわたくし出まして、いづれもしづまりました、はなしのじやまになりませう、まづわたくしは臺所へまいろう、それにてゆるりと御はなしなされませいとて、だんぎはなかつた、

(九)あたらしき事たくむ

さる人、あたらしき人のせぬ事いたすれば、大分かねもうけるほどに、何なりとも人のおもひつかぬ事を仕いだし、大分にこしらへ置一度に出し、るいのなきうちに大分にかねをもうけんとおもひ、六疊敷ほどのところに取こもり、壹人も人入ず、半年程かゝり、六疊敷にいつぱい出かし、うりにだされたが、壹文にもならなんだ、ひなのそうれいの道具をこしらへた、

(十)何を見てもふるいと云人

さる時五條ばしを夜中時分に渡る、はしのまん中に小坊主一人いる、やれわれはばけものか、小僧にばけるはふるいとゆう、此ばけ物かぶろにばけた、いやかぶろもふるいとゆふ、化ものも是非なく小ばんにばけてあし元にいる、こばんと見てよくができ、ばけものゝ事わすれけん、天道のあてがい有、かたじけなしといたゞきければ、小ばんひたいよりはなれず、きもをつぶし、こばんにばけたはふるゐといへば、化もの今吹もふるいかとゆうた、

(十一)かごかきのとむらい

去所に親子あいがたにて、かごかきとせいをゝくるものあり、或時親仁申されしは、もはやはゝの七年也、世に有人はとんしやせがきもいたすれど、金銀いだす事ならず、てらへときまへ上る事もならぬ仕合也、何とかせんと有ければ、むすこ申は、左樣におもはれ候はゞ、めい日にこなたとわれら辻に出、あしのよはき人を法界にかごにのせ、とむらはんと申す、親仁もつともとて、その日親子辻に出、かごやろうと申せども、のらんと云人もなし、しかる所へ坊主一人來りたり、駕籠やろうとゆう、坊主申され候は、錢がな

いとゆう、いや此駕籠はほうかいにて、錢はとり申さんとゆう、坊主たゞならばのらんとゆうてかごにのり、これは何とてたゞかごにのせ候と申、かごかきゆうは、おやの七年に相あたり申候間、さてこそほうかいにのせ申候と申す、しからばゑかういたさんとて、かごのなかにてゑかういたされた、さていづくへやらんと申す、坊主、いづかたへなりともいへのおゝきのき下へと申す、こゝろへたりとてのき下をとをる、町のまん中にて、かごの内より坊主大おんにて、ようくはん堂常念佛はつちといわれた、

(十二)大こくまいにゆだんせん

さるしんだいのよきにわへ、大こく舞きたり、庭にて御ざつた〳〵ふくの神のござつた、大こくの御ざつた、大こくの能には一にたわらふまへて、二につこりわらうてとゆうておどる、だんな見てけらいをよび、やい三藏、大こくさまの御ざつた、せきだかくせといわれた、

(十三)不生な下人

さる旦那下人をよび、なんぢはさかいへ遣に參れ、下人申は、夕部大分に雪ふり申候と申す、だんなきひて、ゆかれぬほどにはあるまいと申さるゝ、いやあつさは五分許つもり候へ共、はゞがしれませぬと申た、

(十四)馬にのりつけぬ醫者

江戸にては、さむらい衆よりいしやをよび寄候、むかひに馬をやる、さるいしやむまは不得手なれども、馬にのりくらにかぶりつきていられ、きう病人なればむまはやくゆく、道にて知己申されけるは、道才樣いづれへと申す、此くらいならばどこへ參らうやらしれぬと申された、

(十五)あちらこちら

すご六と申ざとう、よるてうちんをとぼしもてあるく、さる人、そのほうは目も見へぬに、てうちんはなにのためぞと申す、ざとうきいて、いやむかうより來るものが、もしゆきあたろうとぞんじての事と申た、

(十六)ふく參り

正月朔日に俗仁と山ぶし道づれにて、ぎおんとのまいりに、たかせの川にかうりはりつめたり、俗仁申は、先ことしのきつけうめでたし、わたくしはさみせん屋に、一年中かわをはり申候は、早くかようにかわのかうりはりたるを見ることしは、仕合よく候はんと

てよろこぶ、又山ぶしなみだながす、何とてながれ候ぞ、われ山ぶしなり、水がなうてほへると申す、

（十七）二人そヽう

さるおもてに、ぞうりわらんず大分つり置あきうどあり、そヽうな人、ふし見へはかうゆくかといいければ、内よりむかうは四文、まへは六文と申す、とうた人もかたじけないとてゆかれけり、

（十八）親ににぬ子はおに子じやとゆう

さるものふた子うむ、男ほどたらぬ人にて、うむやうすをよく見、とりあげばヽのゐなつくまでをよく見とゞけ、おやにぬ子はをにかとゆうが、おれににたやらほう引がすきかして、ゐなをふたりでひつぱりたとゆうてよろこぶ、

輕口あられ酒巻之四終

輕口あられ酒巻之五

（一）柴賣ゆひわけ

さる山家より馬に柴をつけ、京七條口まで來る、さいはいその日わたり物有とてにぎわひけり、しばうりのおやぢ陽氣ものにて、柴やすくうりてわたりものを見んとて、かちはおそきとてやがて馬にのり、むろ町上へあがる、辻々に立けんぶつ、渡りものがかみからばかりとおもへば、下からもわたり物が來るとゆう、おやぢもうろたへ、是はたんばのしばうりで御ざるといふた、

（二）子に自慢すぎた

去人申され候は、世間に子は多く持べきが、おれが子程きようなものはあるまいといふ、また去ひといふは、御子息御きように御座候よし承り候が、碁はたれ位に御うち候ぞ、本因坊に先手と云、將棊は何と、そうけいに片香車はづし候とゆう、小鼓はなにととへば、かうの清五郎に片皮はづしますとゆふた、

（三）わるじやれな茶やぐるい

さるちや屋にきやくあり、また外の衆二三人ゆかれ、六疊敷の下座敷に入 手をたゝく、茶屋のおやま共返事はすれど、おくのきやく斗あいしらい出ず、客はらたて、此方見たておつた外の茶やへゆかんとて、何れもたつ、さりとてはにくい事じや、出をらんくわいたいに何ぞぬすまんとて、かねのたばこぼんを取たれど、持て出むやうなし、やがてせなかに入て持て歸らんとす、おやま今日は大寄ぶあしらい也、近い内にあんせとてせ中をたゝく、かのかねのたばこぼんぐはんとなる、若衆もぬからぬ顔にて、かうしんのばんにこんといふ、

（四）おとなげないおや

さる所に廿四五になるむすこ有、未女房ももたず、へやずまゐに、去夜女一人さるかたよりよびへやに置、夜半許にはゝごへやにゆき、ふしぎやない事、へ屋に人のおとする、きぶんにてもあしく候や、こゝろもとなきと申されければ、むす子きもつぶし、いやきぶんも能候が、今夜何といたしたやら、のみがせゝり候と申、しからば氣遣ひもなし、にくいのみかなとて、はゝごもおもやへかへられた、かの女夜あけぬさきにいなしけり、夜あけてゝおやおゝせられ候は、いかにあにかわいそうに、夕部ののみにもあさめしをくわせとゆはれた、

（五）化ものにうはまへ取

去大工編笠を着、間ざほをもち、在所へ普請請取に、野中に見こし入道うしろよりのぞく、大工爰にないないばけもの有ときゝて有、心得たりとてけんざほに編笠きせ、見こし入道より一尺ほどのばす、入道まけじとまた一尺ほどのばす、大工又のばす、見こし入道猶のばす、だゐくまけじとけんざほのはしをもち、かいな一ぱいにのばしけり、見こし入道もせんかたなくまへゝまはり、さてたかうのび候、今日よりみこし入道のうはまへしんぜましやうと申た、

（六）けんくわどう切

大坂かうらい橋にけんくわありて、どう切して本人にげたり、あたりの人きもつぶし、まづいしやをよぶ、外科[illegible]（◎マヽ）さう〳〵來り、扨も大分の手おいかな、しまづかうやくをつけられた、さつそくなをりたり、しかしきりこ口一所へよせて、かうやくつけたらよからふに、きれはなれ成につけゝれば、二つに成てそく

才に成たり、こしからうへは手にてほう、腰から下は足にてありく、先こしより上は江戸へ奉公に下す、江戸にて火の見やぐらの遠目に有付、こしから下は十年切にふやへ幸公にやりて、今にふんでいらるヽ、

（七）白人ばくち

さる者おれはよみはしたつが、かうをしらぬ、何と何とがかうぞ、さる人ゆうは、七と二とがかう、三と六とぼうずとかう、九一枚にぼうず二まいもかう、四と五とぼうずもかうじや、それをすればかわをみなとり候とゆふ、皆々白人じや、ほどにはれといふ、やがてまきつけおやふだあけた、四と五とぼふずじやところかといふ、やれとれてはたはみなとりた、白人はとうどりはいらぬもの、四と五とぼうずはぼうずじや、十でもむまでもきりてもなかつた、赤二の上にほていがあるのじや、

（八）喜藏うをあらふ

さるだんな下人よび、いけぶねの中にて大きなる鯉一ぽん、川にてあらふてこいとゆふ、かしこまり、やがて川へゆき水につけヽれば、こいの一はねにてにげにける、しつ〳〵ゆへどもかなはず、やがてかへりかやう〳〵と申、だんな大きにはらをたて、どんごにくきやつかな、しかしたわけをつかふゆへ也、今はゆるす、重てさやうのものあらいおらば、ゑらへなはをつけ、川のくいへ成ともくヽりあらい候へば、たとへ手はなれてもにげぬと云、喜藏こころへ、又重てさけをすヽあらへと有ければ、やがてかわへ行、からざけのゑらになわをつけ、川ばたなる石にくヽり、からざけをかわに入、あしにてふみつけ、さあにげて見よといふた、

（九）善光寺如來のさた

さるもの中は、善光寺のによらいは、坐ぞうかりうぞうかとゆふ、さる又びと申され候は、いやきねぞうであろう、いかにといふに、此程もどうしんじやが、せんかうじへつきにけりとゆふた、

（十）正月朔日そヽう

さる人せつきのしまいさん〴〵にて、大晦日のよるの八つ時分、漸々しやくせんこいも、わび事のたらだらにかへし、その身もさん〴〵くたびれ、丸ねにいたしね入られたり、夜もほどなく明ければ、正月一日なりとて、おもてをたヽきものもと云、かのものふと目

ざまして、又しやくせんこひかとおもひ、ゐきまはりて御座れといわれた、

（十一）そゝうなきうおろし

さるきうおろしをたのみて、きやうくはんにてきうをおろし下されとゆふ、こゝろへたりとて、やがてほうげたへもぐさ大きくいたしすゐたり、すへられし人ほうげたをいがめて、扨もあつい事かな、これがきやうくはんかとゆふ、きうおろしきゐて、おれはきやうくはんかとおもふたによつて、ほうげたにすへたら、見かへり佛にせうとおもふたといわれた、

（十二）河内平野のはなし

かわち平野大念佛ゆづうの本地、大通上人の後從りやうぜん上人は、ぢゐいまでににんぜられ、ねりくよふまでなされ候へ共、きうせんのしゆくゐんに、大つう上人へむりのふそくをゝく、其外しゆつけあく事廿箇よ有し之、元祿十二年五月廿五日に、大坂南口にてさいたと申すところにて、はりつけにかゝられたり、きせんこれを見物する、其中に七十許のむば、さめざめとなきけり、人々見て、かよう成しやうわる坊主のはり付にかゝる事、なにがかなしくてなかれ候とゆう、ばゝ申され候は、いやあの人がはりつけにかゝり候ゆへ、それがかなしくてはなかず、あのやうな惡人としらずして、ねりくよふのとき、おぢうねんをうけて、それが口をしいとてなかれたり、

（十三）はな見辨當のばん

或人賀茂の芝原にてあそびゐたり、辨當をひらき色色のさかなとりいだし、あれよこれよといふ折から、赤犬來て壹つくはへてにげた、旦那、久三郎よあの犬めをすかしよせて、くはせいといひすてゝ宮へ參られた、かへりて酒をのみ、さかなをだせといへば、久三郎先にくはせよと仰られましたにより、犬にくはせましたとゆうた、

（十四）うつけ者加茂の競馬に餅うる事

うつけたる男かものけいばに餅を賣に行たり、或ものゝ云やう、此やうな人ごみには、すりが有て賣物をぬすみ、又當世の六方は、物をくふても錢をださずにげてゆく程に、用心をしやれといへば、心ゑたりとて荷をおろし、餅をならべてゐたり、かゝる所へ馬きれてさわぎけり、かの男大はだぬぎて、ぬかる事でない、人にくらはれんより、をれがしてやるとてかたは

しからくふた、

寳永二年正月吉日

寺町通佛光寺下ル町

谷村多兵衛

神村理兵衛

板行

輕口あられ酒巻之五終

輕口居合刀

題曰

むかし〳〵猿智恵なる者のいひし、八間々半の蕪も一ぱいはくはした、迹今犬兵法の抜さやを我も持て參つて、やつとう〳〵三尺八寸さうらいし、居合刀と名づくるのみ、

書林　松壽堂

輕口居合刀目錄

三、田舍者巾着切る事
四、在郷に入聟を取たる事
五、無筆なる者銀請取に行事
六、賀茂の競馬に餅を賣事
七、紺屋へ使に行事
八、秀句のまねをする事
九、手の筋をみる事
十、べらぼうをしらぬ事
十一、めつたにこぼす者の事
十二、脚半をかたしはく事
十三、人のむすこを女じやと爭ふ事

第三

一、飴相なる坊主の事
二、ぬけたる男數寄に行事
三、うつけもの旦那にしからるゝ事
四、下京道伯の事
五、飴相者使を請取事
六、堺の者御節會拜に參る事
七、大佛にてふと箸ひろふ事
八、御局をしらぬ事

九、文盲なる者法躰する事
十、さむらひ飴相の事
十一、萬日回向に商ひする事
十二、物いまいする坊主の事

第四

一、或者湯屋へ行事
二、稲のほにてかざりする事
三、公家衆の長屋にて咄の事
四、小き子丼のもとへ落る事
五、かたいぢ成おやぢの事
六、山水なる者洗濯する事
七、或者友達と喧嘩する事
八、或親仁人に狀頼む事
九、北野の木屋在郷へ行事
十、とひやう成人の事
十一、佗人狂歌の事
十二、落首の事

第五

一、大きな虛言の事
二、吉峯へ目藥取に行事

目錄終

輕口居合刀第一

(一)田舍者まんぢうをかふ事

田舍者三條のつゝみにて饅頭をかはうといふ、一分宛でござるといへば、田舍者じやと思ひぎやうなそらねをいやる、一もんにとをうりやれと云、亭主あきれて、いやはやきやうがさめるといへば、はて三貫あめさへ一文にうるはといふた、

(二)山家の者蚊屋をしらぬ事

とつと奥山の者市へ出ければ、宿の亭主、爰元は蚊がたく山にいまする、かやへいつて休ましやれといへば、かやをみて大きにぎやうてんして、是をみやれ、此袋の中へ入れと云は、寐入りたら締殺さうとのたくみであらう、うつかりとは寐まいぞと云た、

(三)うつけたる男買物する事

ぎやうさんうつけをつかふ人あり、買物をさするとて、むざと買ずとも百の物を一文に付るもならいじや、方々であたつて見てかへよといひけり、或見世にてこたつをねぎり、まけませうといふ、それならば火

をたもれといへば煙草をいだす、火入をやぐらの中へいれ、羽織を打かけて、百の物を一文に付るもならひ、先あたつて見て買うといふた、

(四)しはき者の事

しはき者ありしが、他國より客あり、愛元は肴の大切な所で、御馳走もゑいたさぬといふ所へ、鯛や〳〵とうりければ、むすこ、とゝ様さかなを賣ぞといへば、己が何を知て、あれはあたりの若衆が、魚買のけいこをしやるといふた、

(五)魚くい坊主の事

坊主鯰なますを大きなる鉢にてあへてゐる最中、旦那來る、かくすべきやうなければ、彼鉢にむかいてたからかに陀羅尼をとなへたり、是は何事ぞといへば、旦那衆振舞をしらるゝが、俄に献立かはりて賴まるる程に、今の間にかまぼこに祈りかへるといはれた、

(六)奄相者公家衆へ參る事

奄相者、御公卿の短册を書て讀せらるゝを聞て、御名乘がいやしう御座りまする、おかへなされませいといふ、何とてさうは云ぞと仰ければ、金茂とはくひ物のやうで、氣びてきこゑまするると云、又同じやうなる男、さういやるな、昔も中院や食といふがあつた、

(七)山家の者饅頭をひろふ事

山家の者市にいでゝ饅頭をひろい、ねぢひねりて見れどもしらず、とかく庄屋殿にみせませうとて、見せければ、なんぞの玉子であらう、あたゝめて見よといひければ、綿に包てあたゝめ、二三日してみれば毛がはへたり、庄屋大におどろき、玉子から毛がはへた程に、鬼の玉子であらうといふた、

(八)或人小者に辨當もたする事◎此咄輕口あられ酒五卷所載と同じ

或人賀茂の芝原にて遊びゐたり、辨當をひらき、色々のさかな取出し、あれよこれよといふ折から、赤犬來て一つくはへて逃た、旦那、久三郎よあの犬めをすかしよせて、くはせいといひ捨て宮へ參りた、かへりて酒をのみ、肴を出せといへば、久三郎、先にくはせと仰られましたにより、犬にくはせましたといふた、

(九)ぬけたる息子の事

或者腫物をわづらいしが、よそより見まひの狀をおこした、御はれ物平愈被成候哉、折角快氣をえらるべく候と書たり、むすこ此狀を見て、平愈とは何の事でござるといへば、親人、なをるといふ事じやと敎へ

たり、打うなづきていたりしが、友達の口說して和睦したる所へ狀をやるとて、兩方中を平愈被レ成目出度候、折角快氣をえらるべく候と書てやつた、

(十)田舍者京のぼりの事

或所に萬寫物といふ看板あり、田舍者、看板を見てきました、何でも寫してくださるかといふ、いかにも御好み次第、本を見て書うつしますするといへば、てふでふの事、本は是でござるとて、眞黑なる肌をぬぎてうしろむひた、是はどうぞといへば、此せなかのたむしを、楨にうつしてくだされといふた、

(十一)在鄕での男をおく事

或者在鄕での男を置けるが、火のもとを大事にせよ、火事ある時は京にははやがねがなる程に、聞きつけたらばやうちを起し、あたりにも知らずばおこせよといひければ、心得ましたとて其日も暮たり、下隣にじんじやうを申おやぢ有しが、例のせめかけてかねを叩きければ、かの男きゝつけ、やれはやがねをならすはと、やうちを起し、其儘かどへ走り出で、火事よ火事よとわめきければ、町中騷動する事おびたゞし、さらに火もとしれねば、彼男をしからぬ者はなし、重ねてからは隣あたりのなり音を、とくと聞き定めて人を起せよといひつけゝり、其後裏の町より火いでやけたり、亭主おどろき、久三郞めは誠の時には何處に居るぞと尋ねければ、見世に耳をあてゝ、平ぐものやうになりていたり、何をするぞ、火事のゆくのを知らぬかといへば、をしゝづまりたる聲にて、初めから聞てゐれど、まづ隣あたりのなり音を、とくと聞きまするといふた、

(十二)關東者愛宕參の事

關東の者あたごへ參詣しけるが、ひろ澤のほとりにて、或茶屋にはいりて茶をたてたり、關東者茶を飮ふといへば、折しもばゞがありて茶をたてたり、關東者なまりたる聲にて、在名は何と云ぞといへば、ばゞが耳には、改名は何と云ぞと聞て、めうせひといひまするを云、その事ではない、所の名は何と云ぞといへば、所は近江の者でござるといふ、いやそれでもない、こゝの小名の事じやといへば、是いさて、こなが事を知つてござるか、こなはこの中京へ行ましたと云、彼男はらを立てゝ、それはきよくるかといへば、されば今日くるやら明日くるやら、知りませぬと云た、

(十三)祝の座敷へ𢈘相者來る事

或人法躰をして振舞などする所へ、𢈘相者來りて、御法躰めでたう御座る、お名は何と申ますするぞと問へば、道夢とかへましたといふ、𢈘相もの聞て、さてもうれいな名をつかせられたと云、かの仁はらをたて、それは何事をいやるぞといへば、はて其證據には熊野のうたひに、泪ながらにかき道夢をうたはぬかといふた、

(十四)かけすゞりをぬすまるゝ事

ぬけたる男かけすゞりを盜まれたり、人々聞て笑止やといへば、此男少しも驚かずして、ようござる、やがて持て來て返しませうと云、それは何事ぞ、まじないにでもめされたかといへば、いやさやうでもござらぬが、鎰がこちにある程に、あける事がなるまいと云た、

輕口居合刀第一終

輕口居合刀第二

(一)祇園町にて羽織をひろふ事

或者、夕べ花見の歸りが落したる縮緬の黒羽織を、祇園町にて拾ひたるとて悦びけり、とつとぬけ男二人是を聞て、いざおれらも拾ひに行ふとて行けり、あなたこなた見まはしけるが、一人のもの落てあるぞとて、づか〳〵と立より取らんとしたれば、眞黒なる犬がわんといひて飛かゝりければ、にげてかへりた、つれの男、ひろやつたかといへば、ぬからぬ顏にて、羽織は落てあれど、犬めが先をこしたといへば、扨はあいつも拾ひに出たよの、

(二)與作といふ者を使にやる事

或侍與作とてたゞ一人の若黨を使けり、今日はあれの所へ使にやる程に、口上つめ開きよくたしなみて、をれが外分をつくろへよ、御使の御名はとゝはゞ、與作丹波のといふ小歌を思ひ出して、丹波與作と答へよといへば、かしこまりましたとて使者に行けり、案の如く御使者の御名はと尋ければ、丹波をば取ちが

へて、しやんとさせ與作といふた、

（三）田舍者巾着きらるゝ事

田舍者三條の辻にて巾着をきられ、大に驚つたとおつかけて行たり、或摺箔屋へかけ込、なんでも巾着きりは爰へにげたであらうとわめきければ、町中も出あひたり、これの亭主はすりの大將さうなといふ、これはさて勿躰なや、何の證據があるぞといへば、あれ程暖簾にすりはぐやと書てはないかといふた、

（四）在郷に入聟を取たる事

或在郷に入むこを取けるが、ぎやうにぬけたる男なり、しうといふやう、地下をありくとも人にじぎせよ、仕事などしてをる人には、あいさつをいへといひければ、心得ましたと云、かの聟野へ出しが、向の岸に大木にのぼりて、枝をきる者あり、是を見付て、是是と手招きしければ、急ぎふためきておりて來り、何事ぞ心もとなしといへば、別の事でもござらぬ、御太儀でござるといふた、

（五）無筆なる者銀請取に行事

無筆なる男銀子を請取に行たり、先より請取をなされよと、硯紙を出しければ、憚りながらこなた被レ成て被レ下よといふ、先の人もきやうをさまし、手形の事なれば、そちの手で書かねば埒があかぬといへば、惡筆でござるといふ、あしきは苦しからぬといへば、ひしとつまりて、いやじたいかゝぬ筆でござるといふた、

（六）うつけ者賀茂の競馬に餅を賣事 ◎此咄輕口あられ酒五の巻所載と同じ、

うつけたる男、かもの競馬に餅を賣に行たり、或者いふやう、此やうな人ごみでは、すりがあつて賣物をぬすみ、又當世の六法は、物をくふても錢を出さずに逃てゆく程に、用心をしやれといへば、心得たりとて荷をおろし、餅をならべ居たり、かゝる所へ馬きれて騷ぎければかの男大肌ぬぎにて、ぬかる事ではないぞ、人にくわれんよりをれがしてやるとて、かたはしからくふた、

（七）紺屋へ使に行事 ◎此咄輕口あられ酒五の巻所載と同じ、

ぎやうさんぬけたる男を、紺屋へ使にやるとて、色は花色にして、あられ小紋をつけてといへ、あられを忘れたらば、二月十五日に熬りて食たあられを思ひ出せといへば、心得ましたとて行たりしが、紺屋にてあ

られをはたと忘れて、色は花色にして、しやかの鼻くそをつけてたもれといふた、

（八）秀句のまねをする事

或所に四五人咄して居たり　、一人菓子に有し飴をとるとて、せう〳〵のよるの飴をくはふといひければ、又ひとり、おれは平沙の落雁をしてやらうといふ、是はよき秀句なりとほめけり、それを聞きたる麁相者、をれもどこぞで此秀句をいはうと思ひたりしが、或時東福寺の前を通るとて、彼秀句を思出し、つれの人に、いざしやう〳〵のよるの地黄煎を買はうと云た、

（九）誓願寺の圖子にて手の筋見る事

誓願寺のづしに手の筋を見るものあり、八瀬の男、みてたもれとて手をさし出しければ、筋を見る者麁相者にて、八瀬の男髪をつのぐりたるを女じやと心得、こなたは子をうむたびに平産であらうといふ、八瀬の者大きに驚きて、おれは男でおじやるといへば、ぬからぬ顔にて、なんぼう男でも手は女じやといふた、

（十）べらぼうをしらぬ事

とつとぬけたる男いふよふ、向の道塲の御坊は、名をかはられたをしりやつたかといふ、いやしらぬといへば、御坊のけさ通られたれば、次郎や三郎がいはるるには、あれべらぼうが通るといはれたで聞たといふ、それはかはりた名ではない、あほうじやと云事よといへば、かの男、扨はをれをも、あの衆がせんみつみつといふも、よい事ではあるまひの、

（十一）めつたとこばす者の事

めつたとこばすものあり、或人、こなたの親仁様に逢ひましたが、おたしやで目出たう御座るといひければ、かの男、こなた様の御親仁様こそ御太平にござれ、私の所のはもはやたいはに及まして、はなども恐く破損しましたといふた、

（十二）脚半をかたしはく事

麁相なる侍あり、鷹野の供にでるとて、脚半をかたしはきて出たり、傍輩どもどつと笑ひければ、急ぎ宿へかた〳〵取にやりた、小者とりてきたり、わきよりどこにあつたぞと問へば、緣柱にはかせてござりましたと云、彼侍さはがぬ顔にて、それほどどうけねば面白ふないといはれた、

輕口居合刀第二終

輕口居合刀第三

（一）麁相成坊主の事

或者旦那、坊とつれ立てありく所へ、見事な鯉を持て通りけり、さても見事な鯉かな、あれをさしみにしてやりたいといひければ、坊主、さしみが一の料理でござるといはるゝ、旦那あきれて、何とて刺身を知らせられたぞといへば、ぬからぬ顔にて、いやそれが過去生で、ぎやうなすきでござつたといはれた、

（二）ぬけたる男數寄に行事

或者數寄によばれて、かこひへ脇指をさして入りければ、脇より笑止に思ひ、小聲にて長物をぬきやれといへば、かの者もさゝやきて、内でぬいてきました、鼻毛の事かと云た、

（三）うつけ者旦那にしからるゝ事

うつけ者旦那にしかられたるをきゝて、おなじやう成者いふやう、そちが旦那はいかふしかるのといふ、しかられたる男、ようはをぬくやつじやといふ、して前からはをぬくかといへば、昔からじやといふ、ちかい比からであらう、目利がある、あたまがしほう髪でないかといふた、

（四）下京道伯の事

或方のお小性衆、もつての外に腹を痛み給ひしが、道伯とてとつと麁相なる醫者きたり、食には何を參りたぞととふ、夕べ鯉を參りましたといへば、手をちやうと打て、是は扨てき藥かなといふ、それはどうした事ぞとヘば、はてさて鯉にこしやう衆は禁物じやといはれた、

（五）麁相者使を請取事

端玄清（はしげんせい）といふ醫者、或時俳諧師の所へ見舞申された、草履取はしりきて、端玄清御見舞申といへば、そさう者使を請取、主の前にてはしげいせい御見舞と云、爰へはし傾城のくるはづはない、不思議な事やといふ所へ、彼醫者きたられた、歸りて後、彼麁相者をさんざんにしかれば、おやぢいはるゝは、叱るなゝ、あいつも宗因流の俳諧をするそうな、扨もようとりなしたといはれた、

（六）境の者御節會拜に參る事

堺の者正月京にのぼりければ、よき折からなり、大内

の御節會おがまうとて、大内に行けり、いまだ初まらざりければ、御白砂を見物しけり、それを京の者が見て、今宵は田舍者が來たそうな、繪にかいた公家をば見ようが、生公家は今宵が見初であらうといふ、孬の者腹をたて、京いやつは生れてから死だ鯛ばかり見て、生鯛はえ見をらぬ、おのれ等は生公家より生鯛を見たがよいとて、つゐといんだ、

（七）大佛にて太箸をひろふ事

或者年の始に大佛へ參詣しけるが、拜みて立ざまに前を見れば、ふと箸一膳あり、是は目出たき物、如來の御福なりと押戴き歸て、悦ぶ事限りなし、かゝる所へ鹿相者來りて、あまり悦びやるな、大佛の前では少少大きな物もちいさう見ゆる、ふとばしじやと思やらば、太皷のばちであらう、それが去年大佛の堂で手拭をひろうて、内えとてきて見れば、古脚布であつたほどに、

（八）御局を知らぬ事

或者御公家方へ行たが、あなた方にははし傾城をつかひ物になさるかして、おつぼね〳〵といはる丶、不思議な事じやといふ、わきより、こ丶な人はそれを知りやらぬか、お局とは年のよつた女郎衆の事じやといへば、尤じやといひしが、或所にてこなたのおか樣はいかふわかそうなといひければ、かの男いやわかうもござらぬ、おつぼねでござると云た、

（九）文旨なる者法躰する事

或者法躰しけるが、名は何と申ぞと問ふ人あり、ほうゑつと申といへば、ほうはのりで御座るか、ゑつはよろこぶと云字であらふといへば、かの男、こばさんと思ひて、ほうはのりでは御座らぬ、そくゐでござるといひたり、先の人もよいかげんにあしらいてをかれた、そこを歸とてつれの云やう、そなたは文旨な事をいやる、ほうはそくひといふ事がある物かといへば、それも本字は知つて居れども、わざといはなんだといふ、それならば本字は何でおじやるといへば、ほうはつらでござるといふた、

（十）侍鹿相の事

或大名小性を寵愛し給ひが、其小性をめしつれて、鷹野に御出ありしに、いづともなく蜂飛來りて、其小性をしたゝかさしけり、みるうちにはりあがりたり、殿を初め何か藥ぞと詮議ある所へ、鹿相のもの罷出、よ

い藥がござりまする、あのお子のはくそをつけば、その儘直るといふた、小性衆のはくそいとめづらし、

(十一)大佛の者萬日回向に商する事

大佛のほとりに菜やにんじんを賣者あり、五條の萬日回向に、何がな商をせんと思へども、もとでなければ是非なしと歎きけり、目をかける人錢五百文かして、子供のすく物を賣れよといへば、かしこまりましたとて歸る、さて萬日回向も十日終りければ、錢をかしたる人、あきないがあつたかといへば、一文も賣りませぬ、子供のすく物を賣れよと仰られたるにより、土人形や飴をうりました、不思議な事や何とやうに賣りたぞといへば、うれぬこそは道理なれ、彼男例の菜や人參を賣るごとくに、あめぞい、しやうの笛、きんひらぞいとうりた、

(十二)物いまひする坊主の事

或寺の住持にごつと物いまひする有けり、大晦日に小僧をよびて、あすは何事も麁相を云なといひ付られた、扨元日の朝、小僧いろりの火を吹とて灰をふきたて、御坊のあたまくだしに灰がかゝりければ、以の外に氣にかけられ、目出たく取直さではあしかるべしとおもひ、やい小僧一句したほどに、目出たふ祝へとて、

小僧こそ福ふきかけるけふの春

なんでも目出度ぞとて悦ばれければ、小僧、私つけませうとて、

お住持様の灰にならしやる

と付ければ、ぎやうさん氣にかけられた、

輕口居合刀第三終

輕口居合刀第四

(一)或者湯屋ゐ行事

或人、お公家の仙洞樣ゐござるのをば、仙洞ゐいんざんすると仰らるゝといへば、庖相者聞て、湯屋を錢湯といふ其事じやと心得、それを今迄しりませなんだ、して女房をば何と仰らるゝぞといへば、お局衆と申といひけり、あくる日彼庖相者湯屋へ行たり、女房ども出て、此中はみえませなんだといへば、爰でちとこばさんと思ひ、此中は隙入があつて、ゐんざんもしませなんだ、お局衆はかはつた諸分もないかといふた、

(二)正月稲の穗にてかざりする事

或在鄉の者、來年は祝ひてかはつた飾りをせんとて、まへの年より穗長き稲をあつめ、それを飾にして、子ども孫ども打よせて、あゝ目出たや穗に穗がさいたといはせて、よろこぶこと限りなし、かゝる所へ庖相者ひよか〳〵と來り、此かざりを見て、是は扨珍敷かざりやといふ、見やれ穗がさいて目出たいのといひければ、いかにも〳〵、今年からほだれがさがるといふた、

(三)御公家衆の長屋にて咄の事

或御公家衆の長屋にとひやう者が集りて、萬の咄をして居たり、一人いふやう、こちらは御公家樣に使はるさかいで、うろたへた藪の中の荒神よりはましじや、旦那とのは神佛半分の人じやといふ、それはどうした子細ぞといへば、先神の證據には野の宮樣、佛の證據には誓願寺樣じやといふ、又一人、それはそうじやが籠かきの御公家樣もあると云、こゝな者はとひやうな事をいふ、どの公家さまぞといへば、はて手ふり三條どのじやといふた、

(四)小き子井のもとへ落る事

或所に何とかしたり、子が井どへ落たり、やう〳〵引上て、久三郎に醫者殿をよんでこいといふ、かしこまりましたとて行しが、醫者どのを呼んでこいで婆をつれて來た、是はどうぞといへば、久三郎いふやう、此おばゝおちやないかといふてありかれました程に、おちがあるといふたれば、見て談合せうといはれた程に、つれてきました、

(五)かたいぢなる親仁の事

或者振舞に呼ばんといひければ、客になる人、何も馳走は被レ成な、一汁一菜に被レ成よといひければ、わきよりおやぢすゝみ出て、一汁も無用でござる、一菜にしておかしやれと云、むすこいふやう、あの人は苦しうもないが、其やうな文盲な事はいはぬ物でござる、一汁とは汁の事でござる、汁を被レ成なといふ事がある物かといへば、親仁ぬからぬ顔にて、其汁の汁は知てをるよ、おれがいふのは豆腐のじうの事でおじやる、豆腐をにては重箱へ入れぬかといはれた、

（六）山水成者洗濯する事

さんすいなる者ありしが、洗濯をしたく思へど着がへなし、いかゞはせんかと案じたりしが、女房いふやう、そなたを負ふて、をれが着物を二人してきて洗ふと云、是がよからうとて女房におはれたり、かゝる所へ或者ちよか〳〵と來りければ、かの男、びろうながらたかうござるといふた、

（七）或者友達喧嘩する事

ぬけたる者友達と喧嘩をして、思ふさまな目にあひて、家にもどりて思ふやう、あのやつに手がへしはならず、何とがなせんとあんじたりしが、杓子を持て行、かの相手のかど口にて、ひた物まねきゐたり、皆人おかしがりて、何をしやるぞといへば、あいつめは三年の内に死ぬる筈じやといふた、

（八）或親仁人に状をたのむ事

或文盲なるおやぢ、他國にむすこを持たるゝが、嫁が死たると聞て、むすこの所へ状をやるゝ、其執筆にたのまれた者が迷惑をいたされた、態と一筆申とこのまれて、跡がらちがあがねば、依てと書かせうかといへば、親仁、いやどこへもよりは致させぬ、すぐにやりまする、をれがこのみませう、おなつが死んだとの手を打た事なり、ちつともなげくな、又いかやうの者もよんだがよい、心をはつきとして鬼になりて、茶をのめべく候とこのまれた、

（九）北野の木屋在郷へ行事

北野に文盲なる植木屋あり、奥山へ植木を買に行て、色々身の上のよせい咄しけるが、をれは上々様方へ植木を指上て、直にお言葉にかゝるといへば、扨もめうがな事でござると感じければ、其時自慢らしく、御所がた樣殊の外御念比でござる、此中も參りたれば、はて扨よふきたとて、簾のうちへ呼ばせられ、きさき

こいやいと仰せられたれば、天人の如く成が雲霞の如くお出被レ成た、やい〳〵あの木屋に、昨日關白から來たるくしがき三串とらせいと仰られた、

(十)とひやう成人の事

或侍初對面の侍にあふて咄するとて、侍はわたり者で御座るといひければ、親仁すゝみ出でゝ、さても倅が麁相を申ました、お氣にかけさせらるゝな、やいそこな麁相者、侍はわたり物とはどうした事ぞ、あのお人がとがをなされたとて、わたり者になるものか、じんじやうに切腹を被レ成はといはれた、

(十一)侘人狂歌の事

とつと輕口成わび人有しが、秋も更行くまゝに、障子の破れよりもり來る風も肌寒ければ、はるべき紙なければ、一首の狂歌をよみて、或人の方へ紙をもらいにやられた、

かみなくて障子は破れ秋さむや
佛のときしのりはあれども

(十二)落首の事

或所に恩地五郎兵衛といふ侍あり、殿の御とり立の者にて、うへ見ぬわしとくらしけり、殿御死去の折は、追腹を切らいでは叶はぬ所を、をしだまりてありければ笑はぬ者はなし、何者かしたりけん、彼五郎兵衛が門に一首の落首を立たり、

おん五郎ひやうしんだり全義理しらず
若とのゝ世にあぶなうんけん

輕口居合刀第四終

輕口居合刀第五

(一)大きなる虚言の事

ぎようなる空言をいふものありしが、或者、當世は俄盲目がおほいといふ、かの者、あの盲のはやるは、それが親仁がはじめられた事じやといふ、それはどうした事ぞといへば、それが親仁淸水の舞臺にて桃をくうてゐられたが、どうかしつらん桃をとりおとし、何がしはき親仁なれば、南無三寶といひて飛下られしが、とんと落つくはづみに目の玉がぬけました、桃をくふてつぶれたによつて、ひよく\とつぶれる目をば、俄もく\といひまする、

(二)吉峰に目藥取に行事

或者目をわづらひしが、吉峯に目藥をとりにやりてさしたれば、すきとなをりたといふ、とつとぬけたる男聞て、目藥が吉峯に澤山ござるかといふ、それもとりに行ませうといひしが、あくる晩に來りて、けふ吉峯へ行て尋ねたが、目藥らしいものがなかつたといふ、どうしやつたといへば、木の根にあろうと思ひ、掘かへして見ましたといふた、

(三)火事見舞の事

或所に火事いできけるが、隣へ大勢見舞てもみけしたり、亭主云樣、隣まで燒けましたに、のがるゝ事は皆樣の御影でござる、酒をまいりませいとて出しけり、やかましき上に御馳走でござるといへば、亭主、是は扨何事もいたしませぬに、御禮でござるといへば、ぬけたるむすこすゝみ出て、その代にそちのやけるときに、こちらから參ませうといふた、

(四)堀川にて鍔をかふ事

或者堀川にてよき比の鍔をねぎりしが、折ふし代物なくて、後に取におこそうとて宿にかへり、小者をよびて、此かねをもちて今の鍔を取てこいといへば、かしこまりましたとて出たりしが、夕暮になれども歸らず、何としたるぞと詮議する所へ、によこく\と歸りた、鍔をとてきたかといへば、何程尋ねましても今の見世はござりませなんだ、けつくよい鍔かふて參りましたとて、取いだしたを見れば、くわんすのふたであつた、

(五)數寄者かこひをたてる事

すきしやかこひをたてられしに、むすこ其咄をする所へ、町の年寄とつと文盲なるが來りて、其かこひの名は何と申といふ、かのむすこは額の事を問ふかと思ひて、松月と申ますといへば、彼年寄殿其晩に町の會所へ五人組をよびあつめて、そんじやうそれは是程御法度の遊女を抱へて、傾城屋をしやるが、各御存か、急度せんぎをしませうと云、皆肝をつぶして、是は不思議な事でござりまする、こなた樣はどこで御聞被レ成たといへば、慥な事、しかもむすこがかたられました、傾城はかこひでござる、名も聞ました、松月といひまする、とかく油斷はならぬといはれた、

（十八）湯治して髪を剃事

或侍病氣に付湯治仕度候と殿へ申上ければ、いかにも暇をとらする程に、何事も心まかせにゆる〳〵と仕れとあれば、御意忝くと悦で有馬に湯治しけり、心持はよけれども、濡たる髪の雫身にかゝりて氣の毒じやといへば、つれいふやう、何事も心任せにせよとの御意ある上は、それ程苦にならば又はゆるものじや程に、すられよといへば、尤也とて其まゝ坊主になり、是で一段心もかろしと悦びけり、やう〳〵日數かさなれば國にかへる、親族一門是を見て、こは如何なる事ぞといへば、有し次第をかたる、いかに殿の心まかせと御意有とても、是は格別成事じや、とかく申上いではかなふまじきとて申上たれば、手を打てぎやうてん被レ成た、扨御前えふるい〳〵出たり、其方は坊主になつて俗名ではすまぬ物じやとて、御咄の者を召て、あれに名を付てとらせよと仰ければ、其儘安わんといけたり、殿聞召て、是は珍敷名じや、何たる子細ぞと仰ければ、さうじて直段安きごきは、湯に入ますれば其儘そりまする、此男も湯に入るとそりました故に、安椀でござりますといふた、

（十七）年始に耳の聞えぬ事

或者年の始にいふやう、私はよひの年から耳が聞えいで、つんぼに成りましたといひければ、りはつなる人、それを氣にかきやるな、今年から仕合せがよからう、福つんで目出たいぞといへば、悦ぶ事かぎりなし、其をぬけたる者聞て、よき咎話也、ここぞで云はんと思ひ、其よりひた物ありけれども、耳の聽えぬといふ者もなし、斯る所へふくといふ下女が來りければ、やれわれはつんではないかといふ、あちにはかるたの事

と思ひて、いや此春ははう引をしまするといふた、

（八）黒谷門前のうつけの事

黒谷門前に道心の庵あり、夜な／＼戸をたゝきて、たぞといへば逃て行者あり、こよひも來たらば捕へんとて、道心者十人許待かけしが、夜半の比に例の如くこと／＼と叩く、すはや來たぞとて手毎に灯をともし、棒を持出て捕へたり、何者ぞといへば、ぬす人でもござらぬ、毎夜戸をたゝくも皆是後生の爲でござるといふ、こは何事ぞといへば、はて扨道心に似合ぬ事を仰らるゝ、貞安の御談義に、とかく此世はかりの世ぞ、道心おこせとの御すゝめなれば、毎夜おこしまするといふた、

（九）むすこ夜ありきする事

ひやうきんなるむすこあり、親仁夜ありきを折かんすれども更に用いず、殊に盆には猶いでけるが、或時女出立をして夜あくるまで踊り、くたびれて部屋に入、かの出立の儘にて打ころぎて寝たり、晝になれども起さざれば、親仁ふしぎして部屋へ行て見れば、みなれぬ女前後も知ず寝て居たり、是は何者ぞ、むすこは何處へ行たぞと、せんさくする聲に目をさまし、大きなる聲にて、松坂越てやつさと云ざませぞへ逃た、

（十）墨跡のはなしの事

或貴人の御まへにて、酒の上にかけ物墨跡のはなしがあつた、一人かたはらの麁相者にむかひ、昔よりすたらぬ物は手でござるといふ、麁相者、いかにもさやうでござるといふ、貴人聞召、其方もすきかと仰ければ、すきでござりまするといふ、をれも好で集てをいた程に、取よせうとて小性よび給ふに、おそく來ければ、彼麁相者、私申付ませうとてかつてへ立たり、しばらくして大きな鉢をかゝへてきたり、御前様の御すきな程ござりまして、よいのがござりましたとて、下女置たを見れば、たこの手であつた、

元祿十七甲申歳正月吉日

江戸日本橋南一町目　須原茂兵衛

大坂本町一町目　萬屋彦太郎　板行

輕口居合刀第五終

輕口都男目錄

目錄終

輕口都男卷之一　さしあいなし

獨吟　　　　都の露

珍重『題內花見◎『』は點なり、以下同

早くもの名代にて座もと山下半左衛門、されば牛は牛づれ馬は馬づれ、上手の役者は上手同士のつきあい、山下半左衛門が女房、常にしたしき竹島幸左衛門、坂田藤十郎、二人の內儀達を內花見とてふるまいけり、半左衛門が女房いはれけるやう、成相觀音開帳の狂言、よめかゞみ此かたの當物、これといふも幸左衛門どのゝおかげとぞんじ、よろこびまする、高左衛門どのゝげいには、こちの人のげいを、半左衛門じやと評判やが、書きくさりましたと、さもにくそふにいわれければ、幸左衛門が女房のいふやう、なんぼ上手じやとほめてくださんしても、わしが身のうれしい事は、みぢんほども御ざりませぬといふ、それはなせうれしう御ざらぬとさへば、げいは上手じやが、男つきがわるいと人ごとの評判、一期つれさふ亭主を、男つきがわるいといわれ、何のうれしい事が御ざりましよ、げいは下手じやが、男つきがよいと一人でもほめてくれてがあらば、いかふうれしう御ざんしよといへば、藤十郎が女房さし出ていふやう、されば見物の御人さま達、藤十郎はいかにしても大じんしやと、ほめ給はぬはなけれども、內證は木から落た猿で御ざるといふ、いづれもがてんゆかねば、木から落た猿とはどうした事ぞとたづねければ、世間の世話に一門のないものは、木から落たさるのやうなといひますする、なんぼ見物のお人が大じんじやとおふせられても、內證には錢が一文ないといふ事じやと、かたられたるはおかし、

一門を一文に取なされたる所一作有、しかのみならず、なれあいの狂言しゆかふあたらしければ、長點〻珍重、

『題念佛講

さる有德人念佛講の當番にあたられ、同行七八人參けるが、其家の持佛堂銀にあかして、けつかふ成しやうごん、しかれども中尊のあみださまは新佛にて、兩脇の觀音勢至さまが作り佛、一人の道行がいふやう、新佛は銀さへいるれば何時でも出來るもの、作の佛

はさあといふて俄にはもとめられぬもの、あの雨勝の觀音さまか勢至さまか望じやといへば、其中に將棊ずきな男がいふやう、それほどほしくば、あみださまのむかふから桂馬一まい打やれ、どちらぞ一體はついとれるといわれたるはおかし、

よき見たてにておかしければ長點、

『王手

禁中さまの事、平人の口では、はなしするもつたいなしといへば、一人の男いふやう、されば將棊でさへ遠慮して、王手を玉といへり、是何ものゝいひはじめたる事ぞ、こまこふ氣をつけたものじやといへば、又一人の男がいふやう、いや〳〵是は何もしらぬもののいひはじめた事そふな、玉といふより點といふがよいはづじやといふ、その道理はとたづねければ、將棊にかぎらず、すべて盤上は親子兄弟一門のあつまるざしきに限て、ゐてあるもの、其中で玉といへばごふやら耳にかゝつて聞にくい、王の字に點打ば玉といふ字に成ゆへ、玉といふも點といふもおなじ事じやといふ所、お茶あがりませいとこしもとがさし出す、氣をつければ是もおかし、

此はなしさしあいのかすりなれども、一圓耳にたたず、言葉のこりて下心おかしければ長點、

珍重「題藥鑵

在郷なれども家居都はづかしく有德成人有、此ていしゆはげあたまの十すじ右衞門、ある時其家の分限なるを聞およひ、夜盜に入くせもの有、頃しも十三夜の大豆喰しまふて、滿月のたゞ中、二人は內にはいり、一人は外にまたせ、窓から物出してはこばする仕ぐみ、亭主折ふし目をさまし、ねずみかと聞耳たつれば、ねずみよりも其音きびし、是はがてんのゆかぬ事とおもひ、そつとおき出窓から外をのぞけば、月かげにひかりて其まゝのやくわん、一人外に待盜人さゝやきけるは、手もとに衣類はないか、此やうな直打のやすいふるやくわんはいらぬもの、しかし是もとらぬよりはましじやといひさま、はげあたまへ手をかけ引出さんとすれば、亭主おどろき、是は何ものぞさのゝしりけり、盜人もきもをつぶしながらいふやう、さる方へ參、ひよつと干さんしやう一つぶたみましたが、さてもどうよくにむせました、さんせやうにむせたは、やくわんのしりをねぶるがまじないじやと

いふ事聞およんで居まする所、ところがけにこなたのあたまを見つけ、是はうれしや藥罐があるとおもひ、さても大きにはまりましたといふ、亭主打うなづき、いや〱それはそなたの聞あやまり、はげあたまをねぶるがまじないじやといへば、そんならさんせうにむせたまじない、上々はげあたまありとおもての軒にかんばんをうたしやれ、なんばのはげあたまも見ましたが、こなたのやうにむごふはげたは終に見ませぬといふかとおもへば、三人共にいつのまにやらにげて逝んだるはおかし、

はげあたまをやくわんに見たて、ちやうちんの代に用る事古今めづらしからねども、まじないにねぶりたりとは一作、はたらいた所有ゆへ平に珍重、

珍重「題御所柿

法花經は大乘妙典、それをたつとむ日蓮宗門にじゆすきつて、妙聞寺といへるを旦那寺にたのむ人有、寺に旦那のますは商にとくいもふけたとひとしければ、なじむまで大せつぶりをするが、寺も町屋も世の中のけいはく、此寺在鄕なれば境內ひろ〱、竹木くだものさま〲なる中に、御所柿の見事成有、それを枝折にして門前の久介をよび、手紙そゆるもしさいらしと口上でゆいつけ、新旦那のかたへいんしんせられける、彼新旦那物ごと念のいりたる男、料紙取よせ禮狀を認けるが、使の男にゑんは何ゑんじやとたづねければ、竹ゑんで御ざるといふ、いやそふした事ではない字の事じやといへば、夏むき蚤の多い砂地で御ざるといふ、いやそふした事でもないかきやうの事じやといへば、かきやうはわらび繩でかいて御ざると、初中後くいちがふた返答はおかし、

此ていふるしといへども、三度のといに三度の返事よくいひあふせて都合すれば、平點に珍重、

珍重「小性

物ごとせちがしこきくせに、文盲第一よくのふかき男有、西國大名に御小性ずきあつて、よき子小性なればよいかねがとれると聞、俄に粉にして人に先こされじと其城下へ行、大かんばんに上々粉ごしやうありと書ておけども、終におたづねなし、あまりたいくつして近所の人に御子といければ、おたづねのないこそ道理、殿樣のおすきなさるゝは若衆小性の事じ

やといふ、彼男それでもがてんをせず、その若ごしやうはからみがぬるふて、うどんなどにはかいもくきかぬ物じやといわれたるはおかし、

子小性を粉胡椒に取なしたる、はなしていあつてふるき仕出しなれども、若ごしやうどんにきかぬといわれしが一作なれば、平點に珍重、

題傘

上京に高宮や新右衛門といへる人、平野仲庵と肩をならぶ程の能筆、寺子取て上下十人の餘ゆるりと暮し、氣しつりちぎに、かりそめの事も大事がる男、からかさの書付に實名書て難儀した事を申傳へ、高宮や新右衛門を中略して、高新と書ておかれける、或雨中の折ふし、近所の家に一つ二つ物語する事あつてゆかれけるが、からかさすぼめるほどのひまとらぬ事とおもひ、門口にひろげながらおきけり、折ふし外の人來り、からかさの書付を見て、あれはいかい代まち手じやとて笑ひけり、新右衛門大きにはらをたていふやう、こなたはわたくしが手ですぎるといふ事御ぞんじあつて、あて事いわるゝにうたがいなし、よふてもわるふてもていしゆ御存知之通、上下十人手計ですぎまするといふと、赤面していひければ、彼男めいわくして、わたくしは手の善惡をしるほどのものにあらず、あの書付を見るに高新と御ざるゆへ、それで代待手と申ましたといはれたはおかし、

高新を庚申に取なし、代待手一作興あれば長點、

「題田舍寺

田舍寺の長老、弟子にきうじさせてめしくいける時、さんぐ\弟子をしかりぬるは、何とていつもゑびす折敷にすゆるぞといふ、弟子聞て、されば其事大こくとゝらばせて御ざるほどに、ゑびすおしきにすへまするといふたはおかし、

かるふおもしろきはなしなれども、みゝなれ候ゆへ平點、

「題常香

となりの香をその家の常香じやとおもひ、そさうなる人のいひけるやう、こなたは若けれどもきどくなお人じや、常香をたかしやるそふなといへば、ていしゆすこしもつくろいのない男、それはそんじもよらぬ事、犬がまがないゆへ常香はもらぬといふ、いやいやそれでもまつかふのにほひがするといへば、む

むそれはおやじのにほひで御ざろうといふたはおかし、
　まつかふくさいおやじとは、わらうつわらんべまでもしりたる世話、かるく常香に取なしおかしければ長點、
　〽題月夜
大佛の邊にすまひせし男、月夜にかねひらふて、京のたゞ中にて五間口に裏行十九間の家を買ふて、宿がへするあり、近所の人々がいふやう、程遠き所なれば車がよかろといふ、いかにもわたくしもそふぞんじますれば、車屋へ行あすのやくそくしてきましよとて立出、泉涌寺の玄關へしかゝりものかふといふ、侍衆立出、何の御用と尋ぬれば、私儀明早天より中立賣邊へ宿をこしまする、それにつき車一二輛かりに來ました、直段何ほどにておかしなされまするといふ、侍聞て、そちは氣ちがいさうな、わけもない事いわずとも、早ふそこを立のけ、此お寺はかたじけなくも御門代々御廟所、だちん車などかす所にあらずとしかられければ、そんなら泉涌寺のしやりきといふ物の本はうそで御ざるかと、はらだちそふにいひすてゝ逝んだるはおかし、
此はなし舍利記を車力に取なされけれども、耳なれてふるし、しかし獨吟の卷軸、かねひらふて家かふたるとめでたく留められたる所、是斗は書林某もあやかりたくおもふゆへ、温故知新の長點、
　長　珍重一
皆點十之内長　五
　平に珍重三
　平　一
　　　判者　書林某
寶永七年正月吉日

輕口都男巻之一終

輕口都男卷之二 さしあいなし

又八

獨吟

珍重「日吉

去る子の年卯月なかばの頃、東山の邊において、日吉彌右衛門勸進能をせられけり、其頃ずんと遠國の人、京打まいりして、三條中島に宿を取逗留して居られしが、辨當さゝゑなどもたせてゆく人の多きを見つけ、宿のあるじにやうすをきけば、勸進能を見にゆく人じやといふ、彼男終に能といふものを見た事なければ、是はめづらしい事、われらも見物に行べしと、急身ごしらへして見物にゆき、能はてゝ後宿に歸り、宿のあるじ、けふはよいなぐさみで御ざろとあいさついへば、あれほど大ぜい見物にゆくは、何ぞおもしろい事があるかとおもひましたれば、年頃な立役とくわしやがたがよりやい、しやみせん引さへなふて、つづみ太鼓ふゑ計、何をいふぞとおもへば、はじまりからはてまで、謠一色で仕まいましたと、はらたちそふにいわれたはおかし、

今度日吉が能に付てのはなしなればあだらし、しかのみならず、はじまりからはてまで謠一色で仕まふたといわれし所、一作あつて秀逸なれば長點に珍重、

「題旅宿

さる人山中に行くれ、是非一夜の宿といへば、亭主なさけありて、それこそやすき御事と、かろくうけやいもてなしけり、しばらくあつて亭主のかんきんせらるゝをきけば、鐘打ならしたねんなくたのむぞ鬼さまたのむぞ鬼さまと申されける、是はかわつたかんきんとふしんにおもひ、持佛堂を見ればあみだ如來、かんきん仕まふを待かね、亭主は何宗ぞとたづねければ、淨土宗と答ふ、からばお念佛でありそふなものじやが、たのむぞ鬼さまとはかわつたかんきんじやといへば、さてもこなたは通らぬ人じや、あみださまはこちがたなればたのむに及ず、てきになる鬼さまをたのむがよいはづじやと了簡して、今のやうに申まする、是斗はわしがじまんで御ざるとはなされしはあじな、

あみだはこちがたといわれしが、一作あつておか

しければ長點、

「題水火

いかづちは水火のたゝかいかたちあるものといへば、なきものといひ、此論むかしから落着せぬといへば、さる人のいふやう、成ほどかたちあつて天竺の神さまじや、しかれどもわるい病があるゆへ、外の神さま達がませさしやれぬ、それを是非ともまじわらんといふてさし出らるゝゆへ、やゝもすれば外の神さまだちにつきおとされ給ふといふ、そのわるい病は何やまいぞといへば、神なりといふからは、いわねどしれたさんびやうの事よ、それにうたがいのない所、異名を雷神といへば、いよ〳〵病にきわまつたといわれしはおかし、

かみなりのはなし、板行の咄しにさま〴〵あれどもよろしからず、此はなしよくいひおふせられたる所あれば長點、

「題宿老

物ごと念の入過た宿老あつて、俄に町の用人をよびよせ、今日の寄合一人ものこる事ならぬとふれさせける、是は何事やらんときもつぶして、いづれもよりやいける中へ、年寄しさいらしく罷出られ、けふの寄合別義にあらず、天水の分つぼでも桶でもおく事ならねば、早々けふの間に取たまへといふ、いづれも興さめ、是は何ともがてんのゆかぬ事、天水は火事の用心、ない家にはこしらへいとありそふな者、それをとれとは御公儀様のおふれで御ざるかといへば、いやいやおふれではなし、夕部天水に白鳥のとまつたを見付たといふ、町中口をそろへ、その白鳥のとまつたにやうすが御ざるかといへば、こなた方は毎月二日よりやいはきゝ給はぬか、博奕野郎遊女の宿する事は第一の御法度じや、白人といふ遊女があれば白鳥は遊鳥にうたがひなし、そのやうなくら宿するものを、町内のやねの上におく事はならぬといわれしはおかし、

是も取なしおかしく一作あれば長點、

「題六角堂

むかしのでがわりは二月八月、今のでがわりは三月九月、九月が十月に成ば手間がいらず、そのなくれもの六角へゆくがあれば、おきそゝくれし人かゝゑにゆくもあり、しかるに男つきりつぱ過たをじまんし

て、給銀をたかばり、もはや神無月になれども、いまだ牢人宿のかゝにすゝめられ、六角堂へゆけば、折ふし時雨して寒さ身にしむ頃、そのはれ間待んとて六角堂へ立より男を見れば、どこもかもあかつき、ときあげのひとへもの、其まゝすゞふるひにひとし、何も白虫きづかふて立のくもしらず、付た癖とて其身に成てもせんじやうはやまず、彼りつぱな奉公人を見て、そちは奉公人か、おれが所にかゝゆべし、今まではいづかたに奉公したものぞとたづねけり、彼奉公人おもふやう、さてもこにくい事、あのなりしておれをかゝゑんとはにくさもにくしと、尻にかけての返答、今まで居ました所はおなら町に居ましたといへば、かのすゞふるひはらをたて、京の町にそのやうなむさい名はなし、今まで牢人して居ても、まだ口はへらぬと、其類をもつて返答しはおかし、

下心むさくしかもふるし、しかれども新作にいひかへられた所もあれば、捨がたくして平點、

珍重二「題一つ口

京はたまさかに雑水たけども、米がちにたくゆへ、田舎むきの菜めしよりはまされり、それといふも王城のかげ、一つ口にいふはもつたいなし、ある時所用あつてずんど遠國に赴し事有、其國の米と云は麥、麥斗喰ふ人は一在所に一人か二人、芋を大目に麥少斗、その一色さへあるに、麥と芋とのまぜやわせなれば、さぞおならの出やむ間があるまいとたづねければ、在所の人いひけるやう、それにはまじない有て、いかな事取はづしてもこきませぬといふ、其まじないわととへば、めしよりさきになま大根一本づゝかみまする、その大根上へおくびに出んとすれば、麥と芋とが下へひきさげ、麥と芋とがおならに出んとすれば大根が引あげ、始終腹中でもみあい、おならにもおくびにも出ませぬとかたられしはおかし、

是も下卑たはなしなれども、利のつんだまじない、さもありさふにおかしければ平點に珍重、

「題無筆

さる人雨中のつれ〳〵に、歌仙の本を開いて見ていらるゝ折ふし、無筆なる友ども來り、めくらのかきのぞきして、何の本ぞと尋ねければ、是はかせんの本じやといふ、其は雨中に面白い本を御覽ある、總別昔のかせんは花々しうて、今きいてもいさぎよし、こな

た、一人口の内で讀ふよりは、たかふよんでわれらにも少し聞して下されい、とてもの事に辨慶かきんひらがかせんをよましやれといふたはおかし、
歌仙を合戰に取なし此ていふるし、じかれども辨慶か公平と望ける所、合戰に相應じつよくきこへて捨てられぬ所あればぞ平點、
『題いろは
さる男學文者の家にゆけば、折ふしあまたの四方髮達會合して、無點ものはよみにくい、此點道春はごふ付ておかせられたぞ、點のつけやうで大分義理のちがいさふな所と、點付の本と引やわさるゝを見れば、點付といふには、そばにこまかな付ものがある、たしかむすこが手本につきものはなかつたと、それをじまんしていひ出すやう、わしがせがれは當年七つに成ますが、無點のいろはを、けつまづきもなふよみまするといふたはおかし、
唐本の太平記、唐本のつれ〳〵などいふたぐいのはなしは、耳なれ候へども、無點のいろはは先作なくあたらしければ長點、
「題水風呂
さる侍の家にはいでの男をかゝゑ、水風呂のかげんがよいか、見たらよかろとおゝせければ、こゝろへましたといふて、茶わんに一ぱいくんで來り、よいかげんか御らんあれとさし出す、旦那きいてやれたわけもの、水風呂の湯を茶わんでくむものではない、その茶わん打くだいてすておれ、今いふたは入かげんがよいか見てきおれといふ事じやとあれば、又こゝろへましたとて湯どのへゆき、どこもかもぬれねずみのやうに成て旦那の前に出、さてもよいかげんで御ざりまする、おいりなされませといふ、旦那おどろきおのれが形はどうした形じや、そのやうすは湯からあがつたやうな形じやとあれば、成ほど入てかげんを見ましたといふ、さても慮外ものとしかり給へば、それでも入てよいかげんか見てきたれといわしやつたものとつぶやきける、いつそ手のつかぬあほう、しかる事は外に成り、旦那どのも奥さまも大、笑
此ていふるしといへども、人ごとにおかしがる咄なれば平點、
『題千貫目
何もかも打て〳〵博奕に打あげ、ぴたひらなかもな

いちんぶらりの興作、なんぼすいでも錢がなければ、ばくちの場へも人がませず、たが異見せねどもひとりとまつて、くら馬のびしやもんさまに福をいのるはおかし、されども佛の慈悲とて、いのるものゝ眞實があれば、見捨給ふ事ならぬが佛中間の御法度、びしやもんさまも此男にはこまり給ひ、さまぐゝしあんしておぼしけるやう、こいつに何ほどの金銀あたへたとて、物三日と持ているにこそあいそもあれ、そのまゝ持出て博奕にとりあげらるゝは必定、とかくその博奕について福をあたへんと了簡し、ある夜かたじけなくもかの男の兩手の中に、戉ほどすゝやかな口口一つ宛に錢百文そへてあたへ給ふ、彼男目がさめて兩手を見れば、夢うつゝともなくびしやもんの御つげにたがわず、それより鳥目百文を元手にして博奕の場へ出て、三まいの常胴勿論手の内に目があるゆへ、ちらまさしてほしいものゝより取、わづか一兩年の内千貫目といふ銀もちに成、それよりよくはなれてばくゑきを留りけり、すべてばくちに手目があるものじやと、人ごとにゆだんせぬは、此いんゑんよりはじまりたるといわれたはおかし、

此はなし獨吟の巻軸、はいかいでいふ時は、歌仙百韻などのあげくにひとしければ、めでたくとめるが式法也、一旦惡性にておちぶるゝといへども、びしやもん天のおかげによつて千貫目持に成しと、こまかふ氣がついてよし、しかのみならず、手目のいんゑん、つくりごとながらよくかないて、さもありそふないひかけ、彼是もつて秀逸なれば長點に珍重、

皆點十之内

長に珍重 二
長 四
平に珍重 一
平 三

判者 書林某

輕口都男巻之二終

輕口都男卷之三

都の小路
武藏の丶鹿　懸合咄

前書にいわく

忠と孝とは車の兩輪、孝は親の氣にしたがい、風寒暑濕起臥食味に氣を付て、つかふまつるが第一、もろこし廿四孝にゑらばれたまふ曾參、親に杖あてられ其力おとろへたるをなげきたまふ、その評にいわく、杖あてられて力おとろへたるをしる事、親のきにそむくがゆへ也、氣にそむいて杖あてられ、力おとろへたるとなげかんより、氣にそむかず杖あてられぬが眞實の孝なるべしといへば、ある人それを再評していわく、先評一理に焦りてへんくつなり、その理いかにといふに、大惡無道をたくむ親ありとも、孝は氣にしたがふがもとなりとて、ともに其大惡にくみするがよく候や、一旦氣にそむいて杖あてらるゝといふとも、大惡としらばたゞ幾度も善のいさめをいふが孝なるべし、されば不孝の孝行孝行の不孝といふ事有、其理によくかないて、孝をなすが子たるものゝほいならめ、又忠といふも理は一致也、つかゆる主君惡人なりといふとも、三たびこらへていさむべし、三たびいさめて用ざる時は、身をしりぞいて世をのがるゝが、臣の法なりとかたれば、

其忠に付て輕口ばなし、

一顚猿　　むさし野の鹿

東國の城下米澤木工太夫といへる侍、世にならびなき不男なれども、由緒正しく武藝萬事に付て發明なれば、祿百石を得て新參に有付けり、其年殿の御用に立事三度、翌年加增被下三百石に成ぬ、しかるに此人の貌其儘猿にいきうつし、おもてむきにはいわねども、かげ口の異名を猿の木工太夫といへり、其事いとけなき子どもきゝふれ、木工太夫通られけるを見て、あれ猿が通るとあだ口たゝくが木工太夫耳に入ぬ、しかれども十をかしらに七つ八つの子供なれば、きかぬふりしてやしきに歸り、其日めしつれ給ふ草り取の角平を近くよび、けふ子供のいひし事定てなんぢも聞べし、何とそれがしが貌猿に似たかと御たづねあれば、角平かしこまつていふやう、是は近頃もつたいなき事を御申なされまする、旦那さまの御貌

が、畜生ものに似てよいもので御ざりまするかといふ、そんなら似はせぬかと念入らるゝ時、旦那さまのお貌は猿には似ませねども、猿めが貌旦那さまに似ましたといへば、おのれそれはおなじ事じやと旦那大笑をせられけり、總別物ごとに氣を付る旦那、今角平がいひしはおなじ事をいふやうなれども、主をたつとむ忠言也、其子細は主を畜生に似てよいもので御ざるかとあがまへ、見れども似たものを似ぬといふは、主をたばかるにひとしきゆへ、猿めが貌旦那樣に似ましたとは氣をつけたいひぶんと、ほうびに青ざし壹貫文頂戴したは角平が仕合、

前がきにいわく

人をつかへば、苦をつかふとはよふいふたもの、商賣屋の手代を見るに、利根に商して何事もさばきかねず、大分かねもふけする手代に限て、銀つかふ事も利發にて、壹貫目もふければ貳貫目つかい、十貫目もふければ廿貫貫目つかふて、旦那の勘定たゝぬゆへ、丹波ごへしてかげをかくし、親請人にはかまきせ、漸々旦那の慈悲は是非に及ぬと損してかんにん、自前になれば元手に事かいて、旦那に居た時の百分一もはがきかず、利發うづもれてそろ〳〵と肩に棒を置けども、仕なれぬ事なれば猶不埒、其後は角太夫が嘉太夫ぶしの引がたり、是も類が多ふてくふ人がすくなければ、わがからだもくわれず、とかく佛法の世と見すかして靑道心、是も眞實がなふて衣の袖に赤いわし、佛のばちはぬるいとはいひながら、そふした氣からは人がうやまわぬゆへ、それさへへりくだりてこもかぶり、又一錢半錢わるづかいもせず、物ごとりちぎなる手代とおもへば、商ひして銀もふけるすべしらず、醫者のはさみ箱持も、りこうなものをとおもへば、給銀の高いくせに見こなして、主を三文ともおもはず、給銀下直て物いわずじやとおもへば、物ごとぐどんでつかわれぬといへば、

其ぐどんに付て輕口ばなし、

一題小便　　都の露

ある上京のやぶ醫者、はいでの男をかゝゑ、はさみ箱持せて療治に出けるが、彼醫者門のきわにて小便せられけるに、彼はいで旦那の跡に、一分に二文取たやうな貌つきして、小便せらるゝ間すつくりと立はたばつて待て居る、旦那小便しまふていわるゝやう、今

から人が小便するなら、其仕まふ間はさみ箱下において、つくばふて居るものじやとおしゑければ、心得ましたとがてんして歸りけり、其日十町許ある所へ彼男を使にやられけるに、八つ時分に七つ過ても歸らず、漸々たそかれに成て歸りければ、旦那大きにはらをたて、さん〳〵今まで何をしていくさつた、言語同斷にくいやつとしかりければ、旦那どのはやうすもきかいで、むしやうにしからしやる事じや、けふほど小便仕のおゝい日は御ざるまい、やう〳〵立て一足か二足あゆめば小便仕、又立ば小便仕、いかにしてもあるく間がござらいで、今になりましたといへば、此返答には旦那どのもこまられた、

鹿のはなし、沙石集、聖學法師是の長短なる物語によつて作られたると見へたり、しかのみならず、一作はたらひて興あれば長點、露のはなしおかしき所はあれども、品こそかわれ　此のていのはなし類あつて　みゝなれたれば平點にて、露のかた一點のまけ、

前がきにいはく

今の世のはやりもの、千日萬日寺々の靈寶、ふるいものさへあれば、其寺の什物になれば、ほうろくのわれもめつたにすてるなと、しわい住持のいわれしはさる事ぞかし、いづれうりかいにせぬからは、何をもつてもたから、牛の角を馬の角じやといふても同じ道理、一文の散錢さへなぐれば、まいる人の苦にならぬ事、たれあつて、正じんじやにせじやといふて、ぎんみする者なし、しかるに元祿十年の春、是こそうそのない東福寺の靈寶、いづれも見てもおろかなるはなく、一幅持てもよいかね目、おれが持たらまづかねにして、借屋も不自由なれば家かふて、むすこにもよめよんでとらせ、むすめをばよい所へよめいりをさし、おれも禪門に成、ふだん絹ものを常住着にして、朝夕ぶゑん一色づゝはかゝさぬやう、諸白の二年酒を日に幾度ともなふのんでくらさふものおと、よそのたからにむねざん用して下向するが多いといへば、

其東福寺靈寶開帳に付て輕口咄、

『題つれの袖　　むさし野の鹿

二人づれにて東福寺の靈寶に參、一人の男つれの男の袖を引ゆびさして、あのかきつけを見やれといふ、いかにも書付を見たが、あの書付に何ぞしさいがあ

るかとたづねければ、彼の男いふやう、いかにおしやかさまなればとて、死んでからごう物がかゝれるものぞ、しきやうの筆とは大きなうそさふなといひければ、つれの男がいふやう、いや〳〵それはこなたのりやうけんちがい、あれは法花宗にたつとむおしやかさまじやといふ事じや、そのしやうこ、しきやうなんじといふ經があるといわれしはおかし、

前がきにいわく

五人あれば五つのゆびのごとし、いくたり持ても子はにくからぬもの、されば人の親としては慈にとゞまり、人の子としては孝にとゞまるとは、大學の掟じやといへば、

其子をあわれむに付て輕口ばなし、

「題養子　　　都の露

一條室町の邊、金糸や平九郎といへる男、七年に七人の年子、身體ともかくも喰かねゝば、六人迄は内でそだてけれども、そふ〳〵内でばかりもそだてられず、銀百目つれて丹波の何がしへ不通にやしはわせけるが、此子ほどなく病死するゆへ、急飛脚したてゝ平九郎かたへかくとしらせければ、いふても問のない事、いかに何がしなればとて、なべ町の事などおもへば、死がい見ぬ内は打つかずと、あわてふためいて丹波へ行、死がいを見るに別義なし、然れども親の身なればふかくかなしみ、もつとも定業とはいひながら、わが所でそだてたらば、しなぬ事もあるべきに、さてもかわい事いたしましたと、すゝりあげてなきければ、養子の親ふきやうげなる貌付して、なんぼこなたがそふいふても、此やまいこゝで出たやまいでなし、そのしやうこ、どの醫者に見せてもきやうふじやによつて、むしめがむねへのぼりつめ、もはやかなはぬとおしやりましたといふたはおかし、

評にいわく、鹿折節京都へのぼり合、東福寺の靈寳に參詣せられける時、此開帳について輕口の咄一つとつれにのぞまれ、その座さらずにさつそくのはなしなれば、一入あたらしくきこゆるゆへ長點、しきやうを死去に取なしたるはなしとこゝろへ給へ、露のはなし、是にも驚風を京風に取なしたる咄し、しきやうとおなじ仕出しのはなしなれども、これはみゝなれたる所あるゆへ平點にして、露のかた一點のまけ、

兩吟皆點四の内 長二 平二

句引、此卷鹿の方ニ點勝

判者 書林某

輕口都男卷之三終

輕口福藏主序

まことに日本は、かしこくも天照大神代々のすべらぎ、ひさかたの國のごやかにおさまりて、民も千とせをいはふなり、げにや和國の風俗、人のこゝろ柔和にして、仁義禮智の道をたゞしふし、朋友のまじはりを旨とす、尙禮の用は和を尊しとすとかや、爰に優々ぶら〳〵うきにういたる豐年春、ふく藏主と名付、當世輕口ばなし五卷にあつめ、老若男女長夜の眠をさます物なり、

輕口福藏主目錄

目錄終

輕口福藏主卷之一

（一）大黒の御威勢

去歴々の人、なにとかして近年不勝手になり、色々思案して、とかく物は信心がらじやとて、あらたまのとしのはじめに、大黒殿を藏の乾のすみに祭り、富貴を祈られた、その夜藏の内にて、あはれさうに泣聲しければ、亭主猧娜人にて一首、

びんぼ神大こく殿に追ひ出され
　　今をかぎりとなきぞわかる丶

と口ずさみ祝ひたれば、其年より大ぶん仕合よく、富貴の家とさかへられた、

（二）鉢の木

文盲なる樂人寄合、今は人が利根に成て、いかな家にも行燈が三つ四つなひ家はないが、むかしはなかつたそうな、適〻あれば大事にかけて、大名衆への御つかひ物になつた、むかしの事をきくに、あんごにとりそへたまわつて候と、謠にもうたふといはれた、

（三）竹生島

文盲なる老人よりあひ、一人のいふやう、むかしは木のまたから人が生れたといふが、まことであらふ、まづ鶯はみな竹から生れたといはる丶、人々きゝて、それはめづらしいはなしじや、いはれをかたり給へといへば、されば延喜の御代に、竹から鶯が生れた證據がある、ちくぶしまの謠にも、竹にうまる丶鶯のと、くりかへしてうたふ程に、たしかなことじや、

（四）現銀掛直なし

さる御大名相撲御すきなされ、方々より名人のすまふとり大分あつまり、御前にてとらせられた、其中にとし頃四十餘りの、色白き弱さうな男罷出て、歴々の相撲とりをかたはしよりひろいがちにして、手にたつものなし、殿樣も御自慢の御手相撲皆まけ丶れば、大きにせかせ給ひ、大關に出てとれとの御意、かしこまりましたとて出てとる、是も又何の手もなくこかしけり、行事名乘をとへば、現銀かけねなし、まけぬこそ道理なれ、

（五）女むしや

さる人、むかしは歴々のつわ物に、女がたんとあつたそうなといふ、友達聞て、それはなぜにといへば、ま

づともへ、山ぶき、金平が母などとて、つよき女武者があり、また梶原源太も女であつたといふ、友達聞て、それは合點のゆかぬことをいやる、梶原がおなごとはどふした事ぞといへば、さればむかしより、皆人ごとに伊藤どの土井どの、どいがむすめかぢはらといふほどに、おなごにまぎれはなひといはれた、

(六)三尊

文盲なる者二人づれにて寺へまいり、彌陀三尊をおがみて一人のいふやう、あのわき立に腰をかゞめて、なにやら臺のやうなものを持てござるは、なにぞといへば、今一人のいふやう、あれはあみだ樣の御茶をまいりますゆゑ、茶の給仕なさるゝ菩薩樣じやといふた、

(七)神代の秤の家

近年方々の開帳はやり、これは弘法大師の尺八、いや善導大師の杖のといふて、いろ〳〵の靈寶おゝきうちに、蟬丸の琵琶とて見せけり、文盲なるもの二人づれにて、一人のいふやう、あれは何やら大事にかけてあるといへば、今一人のいふやう、あれをそなたはしらぬか、あれは神代のはかりの家じやといはれた、

(八)ひげぬき

こざかしき人繪をこのみて、細工繪に唐の玄宗皇帝のぐし君と、楊貴妃と圍碁を評ひ給ふところをかき、自慢して人に見せければ、或人いふやう、唐人の繪には髯が有はづじやが、これにはひげがなふて、唐人にてはなひといへば、尤じやといふて、そばに毛貫をかきておかれた、さてもよきさんさく、

(九)錢のさがる當話

二人寄合、なにと頃日は大分の錢のさがりじやが、どふした事じやまでといへば、今一人のいふやう、さがる筈じや、小歌に橋のらんかに腰うちかけてとうたふさかいで、おあしがさがるはづじやといへば、それならば小判のさがるはまたどふしたことぞといへば、はてきんもともにさがる道理じやと、こたへられしもおかし、

(十)碁盤屋のかんばん

關東もの京へのぼり、寺町通をとをり、ごばんごいしやとのうれんに書てあるを見て、扨々何方にても金程人のほしがる物はなひ、このかきつけをみや、こばんこいしやと、のうれんにさへ書付てあるといふた、

（十一）大學の大意

文盲なるもの、隣にて大學のそよみするをきゝ、友達にいふやう、大學は何事をかいたものぞとおもひしが、硯の墨の拵樣をしたものじやといへば、友達きゝて、それはなぜに、人のよむのをきけば、人におしゆるゆゑんのほうなりとあるといはれたもおかし、

（十二）やしま

ちしやは〳〵とて賣まはれど買手もなく、ちと休まんとおもひ、橋の上におろしてしばらく休み居ける所へ、座相者ゆきあたりて、一荷のちさを川へこかしたり、ちさうり腹を立、我が一せきのもとでをかやうにながしたからは、まごはせねばきかぬとて、さんざんつかみあふ、彼ざとうもの、是非共堪忍めされよ、けがじやといへば、ちしやうりいよ〳〵はらをたて、ざふでもまごはせねばきかぬといふ、其時彼座相もの、其の方の云ぶん尤なれども、ちしやはまごはずと、八島のうたひにさへあるほどに、堪忍しやといふていんだ、

（十三）らいくわう

文盲なるもの酒天童子の狂言を見て、あの源の頼光は、あみだ如來の家老であつたそうなといふ、つれききて、それはいなことじや、なぜにと問へば、彼文盲人、されば御談義にも、偏に彌陀のらいかうをたのめと仰られたといふた、

（十四）後生が大事

さる歴々の奥樣後生ねがひにて、旦那寺の長老樣にはいろ〳〵有難事をきゝ、餘念なき折ふし、おならをぶうとやられた、めんぼくなさに疊をならし、いろいろまぎらかさんとせられしとき、長老のすゝめに、たとへ此世はとりはづすとも、ながきみらいをとりはづさぬやうにめされとおしやつた、

（十五）和藥

今時は世がじやうびて、大躰の醫者の藥はのみてもなし、藪醫者の寸鐵とて、とつと文盲なるいしやあり、くすり呑ものなければ、とかく身躰しまい、江戸へかせぎにゆかんとおもひ、くすりのあまりを賣遣、錢にせんとて藥屋の手代をたのみ、いか程にかやるぞ、直段よく買ふてたもといへば、手代見て、皆わやくばかりで錢めはなひと云ければ、寸鐵まつくろに腹をたて、かやうの體になりても、誓文まつたくわや

御上人様に、高祖様の南無妙法蓮花經のふるきはめ句を仰られてさへ、かやうにだいぶんの御普請が出來るといはれた、

くをいたす心ざしではないといはれた、

(十六)玄賓僧都俗名

もんもうなる親仁三輪の謡をきゝて、玄賓僧都は俗名を市右衛門といふたが、ごふした事で出家になられたしらんといふ、友達の親仁きゝて、それはめづらしい事をきいた、ごふしてしられたと問ば、さればうたひに、御衣を市右給はり候へとうたふほどにとやられた、

(十七)髪ゆひ傾城ぐるひ

さる髪結傾城を買にゆきて、なにのかのといふて、酔まぎれにとろり〳〵とねむりけり、女郎見て、もしもしとおこし、床へござんせといへば、かみゆひ目をすり〳〵、いやとこへは、手間取をやとふておきましたといふた、

(十八)はめ句

あたらしき俳諧笠付の題を出して渡世を送る黠者、ふたりづれにて本國寺のいしつき見物にゆき、一人のいふやう、なにとその方や我等、いろ〳〵思案してあたらしき句を出し、精をだせども漸くふたりか三人の口さへくひかね、宿賃さへはらびかねるに、この

輕口福蔵主巻之一終

輕口福藏主卷之二

(一)刀の空鞘

さる浪人勸進能見物にゆかれ、先かたなをぬきて下に置ゐられけるが、人おほくおしあひ、能の最中にごめん〳〵とて彼浪人の側を通り、もし其御かたなを御のけ下されませと申せば、彼浪人のいはく、その刀のこじりの方を御とをりあれ、そこはそらざやじやといはれた、

(二)やりはなし

奥州のもの長崎へゆくとて、みちのほどもしらず、先都をさしてのぼり、三條の橋にて長崎へはどちへまかると問へば、これもてんぱものにて、おかしくおもひ、いま二三町西へ行き尋ねめされとおしへた、

(三)侍を蹴る萬歳樂

正月中頃、御所のうちを歴々の侍とをられけるが、むかふより萬歳樂きたり、彼侍を足にてしたゝか蹴る、さぶらひ大きに腹を立、やがて萬歳がむなくらをさり、にくき奴とてさん〴〵にしかられた、萬歳いふやう、御侍と見かけいわゐましてといふ、さぶらひいよいよ腹を立て、ぶつてたゝいてといへば、萬歳いふやう、いはれを申ませふ、萬歳の大事の言葉に、みとのさかへまします、まことにめでたふ侍ひけると申ますといへば、侍も返答なく堪忍せられた、

(四)御寺の大黒舞

正月そう〳〵におふくの面を着て、かど〳〵を女の裝束して、ござつた〳〵大こくどのがござつたといふてまはる、爰にものごとに念を入て尋ぬる人あり、彼大こく舞をとらへて、大黒天神は男神にて福の神じやに、なぜ其ほうはおんなのすがたにてありくぞと問はれければ、されば私は御寺がたの大こく舞でござるといふたもおかし、

(五)肥滿男

肥滿したる男、御出入申御屋鋪へまいり、殿樣の御機嫌うかゞひまするなどと申、御きげんの折ふし御前へ出た、殿樣御覽なされ、其方は以前よりことのほか肥滿したと仰られければ、ひげする事とて手をつゐて、私の肥は半分は垢でござりますといふた、

(六)少氣者普請

さる人、町の角屋鋪を買普請しけるが、大かた出來て念頃の人一兩人よび、ふしんの樣子を見てたもといへば、友達のいふやう、扨々そなたはいかいふしんべたじや、角屋のおもひ出に、なぜに兩口にせられぬぞといへば、彼律義者、我等もさやうに存じましたけれど、口一つさへ遠慮にぞんじましてといはれた、

(七)無筆の口上

さる御公家樣方へ、遠國の武家がたより使者をつかはされた、彼使者先樣へまいり、案內してげんくはんへ通られければ、外樣の侍衆出て時宜をのべ、扨御口上を承るに、ことのほかながき口上にて覺へにくければ、かの侍帳を持て出、大事の御口上にてござりますほどに、此の帳に御書下されませい、旦那かへり候はば、御使者のよし申ませふといへば、彼使者きのどくにおもひ、私は無調法にござりますほどに、それにて御かき下されませといへば、かの侍わたくしも御同然に無調法にござるとて、たがひにきのどくがる時に、使者のいふやう、合點致しましたとて、ふところより印判をとり出し、その帳におして、御歸なされ候はゞ、よろしく仰上られ下されませといはれた、

(八)葬禮の借上

借上者親にはなれ、葬禮のこしらへ有べき道具調にやるとて、世間體のそうれいには天蓋一つじや、あまりおもはしからず、我等親仁のそうれいには、てんがい二つもたせふといふた、

(九)むくろばら立人

さる人友達にいふよふ、隣の又右衛門は、つね〴〵ものにはらたてぬ人じやとおもふたが、さて〳〵むくろばら立る人じやといふ、友達きゝて、はてあの又右衛門は、せう〳〵の事に腹立る人ではないが、何事でかはら立られたといへば、されば昨日晝寢して居られたほどに、まめつぶほどの火を耳へいれたれば、ことのほかむくろばらを立られた、おもふたとはちがふた人じやといはれたも餘りな事、

(十)くせはなをらぬ

ねんごろにはなす人二人寄合、一人のいふやう、そなたはつね〴〵くせにて、鼻を橫撫にするとて世間にて笑ふ、また我等も御存じのとほり、あたまをたゝくくせありて、人が笑ふほどに、いざいまよりいひあはせ、互にくせをやめんといへば、彼鼻すゝる人、なる

程とやうでござる、今よりたがひに申あはせ直そうとて、扨四方山の噺して、なにと頃日の矢數をみやつかといへば、なるほど見たが、五人ばり程の弓にて心易そうにこうひいたとて、つゐ鼻をなでられた、いま一人これを見て、なにその矢が通りたら、した〳〵といはふがやといふて、また天窓をたゝかれた、

(十一)看板に僞なし

さあ〳〵生た虎じや、昨日阿蘭陀よりのぼりました、僞ならば錢はとらぬ、はやひが賞翫錢はもどりじや、ゐいとう〳〵といふてわめく、こざかしきもの木戸にて、なにと此かんばんの通にちがひはないかといへば、なるほどかんばんにすこしもちがひはござらぬ、はいりてとくと見給へといふ、此かんばんのとをりに僞りなくば、見るに及ばぬといふていんだ、

(十二)とし子に七人

さる人田舍よりのぼり、久しくあはぬ人の方へ行、先何事もなくて目出度と、なにやかや噺のところへ、七つばかりの子出けり、客此子を見て、是は貴樣の御子息か、さん〳〵よき器量やといへば、いや娘でござるといふ、又六つ許の子出たり、客見て是は男子か、はてよい子持じやといへば、是れもめらうで御座るといふ、客も手持あしき所へ、四つばかりや三つばかりや、又うばにだかれた子や、七つをかしらに七人まで男の子かと挨拶すれば、みな女の子にて客も當惑して、はてそなたさへおとこなればよふござるといはれた、

(十三)聖人に夢なし

さる人七つばかりになる男子をもたれけるが、器用者にて四書五經までよみおぼへ、親も悦び近所の人もさて〳〵おとなまさりや、わづか七つや八つにて、此子のやうな人はあるまい、誠に聖人といふは此子の事でござると譽ければ、彼親よろこび、皆人ごとに左樣にほめさしやるさかひで、此中も夢を見るかと尋ねけれども、夢は見ぬと申ますとつくされた、

(十四)そさうな寄合

さる人下人八助をよび、やいわれは明日江戸の店へやるぞ、ゐてこひといはれた、かしこまりましたとて、なにのこともきかず、朝七つにおきて江戸へくだり、店頭に逢ふた、たながしらいふやうは、八助は何の用でくだりやつた、京には何事もないかと問へば、

八助はつと氣がつき、されば我等京をたつまへの晩に、旦那の明日江戸のたなへゐてこひと申されましたゆへ、なにの用の事もきかずついくだりました、ほんに用事をきゝて來るはづでござつたものを、

（十五）火の見矢藏

田舍者二人づれにて京へのぼり、北野の天神へまいるとて、千本通をあがり、ひの見やぐらを見て、あれは何のための番所ぞといへば、一人のいふよふ、あれは近國に火事のゆくとき、あれより見て鐘をつけば、火けしの衆御出なされて、けさせらるゝためじやといふ、それはきこへたが、また下の方に窓があるはなにのためぞといへば、あれもちかくの火事を見るためじやとおしへた、

（十六）火事場のすゞり

此已前江戸大火事のとき、火けし役の御奉行御出なされ、やがて消させられた、さて祐筆をめし、様子書付よと仰られた、祐筆硯をわすれ迷惑するを、氣のきいた鑓持見て、もし當分の御こゝろ覺へのためばかりならば、わたくしのすみひげを御つかひなされませといふ、祐筆悅び楊枝のさきをかみ、墨髭にてかきつけ歸り、扨殿様御機嫌の折ふし、わが無調法鑓持がさつそくを申上る、殿様ことの外御きげんにて、大分褒美をくだされた、傍輩のつりびん浦山敷おもひ、われも何日ぞ才覺をせんとおもひ、其後又火事のとき大分にすみをつけ、方々かけまはれども見てもなければ、彼やつこ火事場へ首さしのべて、もし火事場のすゞりは御用にござりませぬかといふた、

輕口福藏主卷之二終

輕口福藏主卷之三

(一)弓のけいこ

さるもの弓を稽古せんとおもひ、矢はぎの所へゆき、けいこ矢のずんとよきをかいませふ、直段は少もねぎりはいたさぬほどに、よき矢を見せ給へといへば、なる程かしこまりましたとて見せた、やがてよき矢五手取て、錢卅文渡したり、矢師のいふやう、これはごふでござりますといへば、十本の代で御座るといふ、いや此矢は卅文や百文には賣ませぬといへば、はてそなたは無理なことをいふ人じや、むかしより雁は八百、矢は三文ではないかといわれた、

(二)番太郎

冬の夜かせ烈しき時分、町の番太郎家々の戸をたゝき、火の用心はよふござりますかといい〳〵まはれば、なさけある町人見て、さて〳〵あの番太は奇特なやつじや、さむからふに呼で、茶漬なりとも喰せて、酒をてんもくに一盃のませと、でつちにいひつけられた、かしこまりましたとて彼番太をよび、茶漬や酒をのませて、何と其方はきどくなものじや、隨分大事にかけてせつ〳〵町中を觸よといはれければ、番太郎かしこまつて、御意のとをりでござります、火ほどこわひものはござりませぬゆへ、御町中を一軒々々たゝきましてふれまする、ことに今晩はいかふさむうござりまして、難義つかまつりましたが、御影にてあたゝまりました、ありがたふござりますといふてかへりしなに、もしおまへさまの火の用心はかまひませぬほどに、御勝手に被レ成ませといふてゆるしたもおかし、

(三)鯉のかんばん

二人づれにて黄蘗へまいり、さて〳〵きゝおよびしより結構なことかなとて、方々見物して、扨食堂に木でつくりたる鯉のつりてあるを見て、一人のいふやう、寺には似合ぬものがあるといふ、今一人のいふやう、これは出家衆の齋くわしやるとき、こいといふてこれをたゝけば、みな〳〵あつまり給ふといへば、いや〳〵それではあるまい、まへの池をみれば鯉が大分に有さかいで、さだめてそのかんばんであらふといふた、

(四)おいはぎにうはまい

さる兵法の名人すこし用事ありて、夜半時分に猿谷とをられた、例の山だち五六人出て、酒手をわたせとなくばのがさぬといふ、彼兵法つかひきゝて、我等は酒手はもたぬ程に、堪忍してとをしやといへば、さかてがなくば其着物脇指ふんどしまではげとて、脇指ぬきつれて切てかゝる、兵法つかひ見て、さてはのがれぬ所とおもひ、一尺八寸するりとぬき、六人を相手にしてはや二三人に手を負せたり、追剝肝をつぶし、いや〳〵いのちこそ物だねとて、三人は行方しらず逃たり、彼兵法つかひ手負の脇指羽織をとりていんだ、あとにてかのをひはぎども寄合、さん〴〵今夜は仕合がわるい、たま〳〵とをればあのやうなつよいやつにて、大事のわれらがもとでの脇指をとられたと悔めば、一人の律義な追剝の云やう、總じて其方達がわるい、此猿谷な皆人が用心のわるいといふところへ、きていやるがちがいじやといふた、

(五)小判のしかけ

さる律義なる商人、途中にて一歩一つひろひ、うれしくおもひあけて見れば、金一歩代十五匁と有るを見て肝をつぶし、たゞいまは金一両がわづか四十九匁ほかせぬ、小判を六十匁の算用にしては、一割八ぶ半のしかけじや、大分の損がゆくとて又すてゝいんだ、

(六)親がゝり

さるれき〳〵の謠講の塲へ、とひやうなかしこうもないもの來り、私も一番うたはんとて、猩々を上がゝりやら下がゝりやらしれぬ四座のぬけぶしをうたへば、座中はらをかゝへ、なにとそなたのうたひは、上がゝりが下がゝりかといへば、いやわたくしの謠は親がゝりでござるといふた、

(七)石のうへのすまひ

田舍もの四五人づれにて京見物にのぼり、まだ日もたかければ、御内裏樣を見物せんとてゆきたるが、折ふし御公家衆へれき〳〵の使者有て、供の者ども門前のきり石にかしこまりて居るを、彼田舍もの見て、まことに在所にて、京は石のうへのすまひじやといふがまことじや、あれをみや、皆石のうへのすまいじやといふた、

(八)奉加帳

さる在所にところの總堂破損におよび、念佛講中の

とりもちにて奉加帳をこしらへ、講中すゝめにありきにける、なにが百姓の事なれば、聲高にそなたは貳百文つき給へといふ、亭主きゝて、御ぞんじのとをり百姓の事なればといふを、隣の酒屋に奉加にゆきし者どもこれをきゝて、あれきゝ給へ、となりにさへ百しやうとおしやるに、こなたには五百なされませといふた、

(九)攝待

謠稽古の若い衆寄合、いざ此盆のうちにうたひ講をはじめんとて、先番組をかきつけ、ゆやはたれ道成寺はたれ、いや攝待の卒都婆小町のといふを、うたひしらぬ親父きゝ、扨々わかき衆じやが、きどくな供養をめさるゝとかんじ、やがて茶一斤とわり木一束もたせて、わたくしのこゝろざしでござりますほどに、攝待のとき御つかひ下されませといふてやられた、殊勝なこゝろざし、

(十)座頭坊當話

ある座頭の坊夜咄しに行、歸りに挑灯をかりませうといふ、亭主きゝて、そなたはてうちんは入まいがといへば、いやわたくしはいりませぬけれど、目あきがゆきあたりまする、

(十一)げびた事

ずんどまずしき者、質種つきておかわを質屋へ持てゆき、是にてよき程錢をかし給へといへば、是には四四の十六文かしませうといふ、それなれば歸りてばばに問てくそといふた、

(十二)三國傳來

さる後生ねがひの樂人四五人寄合、なにと嵯峨の釋迦如來、このたび江戸へござつて大分御繁昌であつたといふ、又一人のいふやう、はてそのはづじや、嵯峨の釋迦如來は三國傳來の御佛にて、何方でも御はんじやうなさるゝといへば、輕口なるものきゝて、いや〱三國傳來とは、善光寺の如來樣の事じやといふ、なぜにといへば、はて嵯峨の釋迦如來樣は、內裏樣へさ江戸へばかりござつたゆへ、嵯峨の御釋迦樣は二國傳來の筈じやといはれた、

(十三)八百屋が借上

八百屋のむすこ大坂へくだるとて、夜舟にて乘合衆とはなしに、我は吳服屋のいや米屋のと名乘あふて、さて彼八百屋殿に、御自分は御商賣は何をなさるゝ

ぞと問へば、此むす子借上ものにて、さながら八百屋とはゐいはず、我は藥種屋でござる、それゆへ大坂へ買物にまかる、いつも大分に買入いたしますといふ、乘合の衆きゝて、なにと大人參はたゞ今いかほどいたしますと問へば、大人參もたばによりますといはれた、

(十四)しまつの當話

しわき男、友達にさそはれ島原にゆき、つれのいふやう、その方はかやうのわけは初てゞあらうほどに、太夫とおもへど太夫もあまりじや程に、天神にしやといへば、彼しはき男、いや〳〵我等は鹿戀にいたさうといふ、つれきゝて、いますこしの事じやに、ひらに天神にしやれといへば、いや〳〵かねはかまはぬけれど天神はならぬ、在所のおばがしなれて火がわるひとへられた、

(十五)捨子

さる寺の門のうちへ、二歳ばかりの子を捨置けり、長老寺中の衆をよびいろ〳〵談合して、とかく御慈悲の世界じやほどに、すてゝもおかれまい、かねつけてささにやる談合きはめ、方々きけどもさとにやしなひてもなし、寺中難義におよび御代官所へまいり、いづかたへ成共御指圖あそばされ候樣にと御ねがひ申上る、御代官聞召、かねさへつけたらもらひてがあらうほどに、金つけてやれとの御意、その時寺中左樣でござりますけれども、世話にも寺からさとへと申て、とりてがござりませぬといはれた、

(十六)借上病本復

分に過たる借上者あり、親父異見して、其方がやうに分際に過たる借上をいふものなし、自今以後借上をやめ、ものごとうちばにせよとしかれば、むす子俄に借上をやめければ、萬事おもしろからず、うつら〳〵と煩けり、親父こゝろもとなくおもひ、醫者をたのみ藥をとりにやりけり、むす子藥の書付をみれば、せんしやうつねのごとくとあり、むす子よろこび、さてさて此醫者殿はいかい上手じや、見立がよいとてまたせんじやうしたれば、一貼にて驗をみせた、

(十七)ばいそく

文盲なるもの上手の鞠けるをみて、あのあり〳〵といふはいかなる事ぞと問へば、あれはいゐを見て、我がまへゝ來る時、人にばいそくせられまじきためじ

やさいふ、文盲人尤とおもひ、そのゝちさる歴々のかたにて、濃茶をふるまはれ、上座の人いろもよきなどんほめければ、彼文盲人物のことをおもひ出し、ありありといふ、そばなる人これをきゝ、その方は何ことをの給ふと問へば、彼者、わきからばいそくはなりますまひとつくされた、

輕口福藏主卷之三終

輕口福藏主卷之四

(一)御はらひ

治まれる御世のしるしとて、國々よりの伊勢參宮ひきもきらず、同行十五人づれにて、先太夫殿へ着た、なにがいろ〳〵の馳走、まづ風呂へ御いりとて、上手のふきてを馳走にいだされ、其中に風呂數寄の客人ゆる〳〵とふかれ、さて〳〵かけじけ、もはやおはらひ〳〵といへば、同行きゝて、あらもつたいなや、風呂のうちで御祓をいたゞくといふことが有物か、先あがりて、手水などつかひてからの事にめされといはたれ、

(二)こんにやく屋

去る人はいでのでつちに、蒟蒻賣がきたらばよびてかへといはれた、かしこまりましたとて居るところへ、こんにやくや〳〵と賣ければ、旦那聞て、あれなぜにかはぬぞ、呼んてかへといはれし時、でつちがいふやう、いや〳〵あいつがやうな、おゝへいな奴がのはかいますまい、いつ喰をふとこちのまゝじやに、こんやく

やく〱とおゝへにぬかしますといふてかはなんだ、

(三)がんひ

繪師の顔輝は猿がゑものにて能かゝれた、去所にがんひの猿じやとて秘藏してみせられければ、人々見て、さても見事出來物かなとほむれば、其座に文盲なる人ありて、扨はがんひとは草花の事じやとおもひしが、猿をがんひといふところへ、其後友達とつれだちて叡山へまいりしが、彼山に猿が大分あり、友達にいふやう、あのがんひを見や、さても大分のかんひかなといへば、つれきゝて、顔輝とは何の事ぞといへば、猿をしへて、あれががんひでないか、其方は文盲な人じやといふた、

(四)民は伯耆國

なにをしても仕合の悪敷男、友達に談合して、とかく何國へなりとも、他國へかせぎにゆかふとおもふと語れば、こざかしき男、其方は伯耆の國へ行たらよからふ、とかく住よき國じやそうなといふ、彼男悦び、みちはいか程あると問へば、千里あり、民のありつきよき國じやときいた、詩經に邦畿千里惟民レ所止とあるといふておしへた、

(五)精進は夜

年頃六十あまりの男、年中に一日も精進せられたるを見たるものなし、或人の云やう、そなたは兩親兄弟衆ともに相果られたに、そなたの終に精進せられしを見た事がないといへば、彼精進ぎらひの云やう、其筈でござる、我等の親兄弟ともに夜に入てしなれましたゆへ、夜る寝てから精進をいたすといはれた、

(六)かまばらひ



江戸神田鍋町へ、釜はらひませふとて、釜のまへにて祭文をよみければ、八助見て、なにさてんがうせずといね、此町はなべ町にて、かまばらひはいらぬといへば、釜ばらひの云やう、そのやうにかきやぶりにはいはぬものじや、此所をかんださいへど、目のよき衆が有といふた、

（七）大佛師

遠國者二人づれにて、初て京見物にのぼり、寺町どをり通り、大佛師とのうれんに書付有を見て、一人のいふやう、さて〱あの大佛を、いかなる大工が建たるとおもひしが、此家の亭主がたてたそうな、のうれんにかきつけが有からは、

（八）りくつ

近年ごろ坊とて、かたり坊主徘徊して、人をたぶらかしけるゆへ、或人の申されしは、今時の坊主にはゆだんがならぬといはれた、其座に去る出家居合しが、方方にてさやうに申され、何共迷惑にぞんじます、本より坊主は盗はせねども、ぬす人めが坊主になりますと答られた、尤な返答、

（九）太補湯

文盲なる親父うつら〱煩はれけり、念頃な人これを見て、そなたの病には十全太補湯がよからふといへば、親父よろこび、やがて醫者殿へまいり、太補湯をくだされませとてもらひ、錢十文出しけり、醫者殿見て、これはごふでござるといへば、されば十錢太補湯ではござらぬかといはれし、

（十）和歌の浦

文盲なものあつまり、なにと龍と云物を慥に見たものなし、いかやうのものぞ見たいといへば、子細らしき者云やう、紀伊國和歌の浦には龍が大分にあるそうな、歌にうそはないはづじや、されば、

和歌の浦に汐滿くればかたをなみ
あしべをさしてたつなきわたる

（十一）歌の醫者殿

歌に病ひあると云ふ事を、文盲な者きいて不審におもひ、やまひがあらば脉のない事はあるまいとおもひ、歌の脉はいかやうなものでござるといへば、こざかしき人きゝておかしくおもひ、成程歌にみやくこそあれ、傳教大師の歌にあのくたら三みやくさ有、萬葉集にも手にとるからにゆらぐ玉の緒とあり、これ

歌のみやくじやといへば、文盲人きゝ、さて〳〵そなたは歌のいしやどのじやといふた、

(十二)ゑびす折敷

さる寺にて、旦那衆よりいは佛事有けるが、小僧住持の膳をすへければ、住持小僧をよびつけて、いつもいふ事じやに、なぜにゑびす折敷にすゆるとて、さんざんにしかられければ、小僧云やうは、和尚様はいつも大こく殿とならんでござるさかいで、それでゑびすおしきにすへましたといふて、ちやつと口をふさいでにげた、

(十三)子あげ

去所に三歳になる子を井戸へおとし、やれ碇よ熊手はないか、すいがうやくですいあげさせよと、みなみなうろたへまはる所へ、隣のぬけた親父見舞に來て、いづれも氣遣めさるゝな、こちのとなりの馬士よびにやりて、あげさせふ、いつも子あけにゆくといふほどに、子をあげる事が上手であらふといはれた、

(十四)忌言葉

とつと物いわゐする念者、娘を去方へ縁づきの約束して、先長持挾箱其外蒔繪の道具ども、前方よりあつらえんとおもひ、塗師屋をよび、とかく直段はたかくとも、萬事念と入たのむといへば、塗師屋きゝて、少も御氣遣被レ成まするな、出來合をめしましたぶんでは、終一度ではげまする、わたくしが致しましたは、たとへ五度や三度よめ入なされてもはげぬやうに、堅地にいたしませうとうけあふたもおかし、

(十五)古ふんどし

鍛冶屋の仁藏、盆正月のため小錢をあつめ、責て一度は八坂の茶屋へゆきたしとおもひ、やう〳〵貳匁五分たまりければ、うれしくおもひ、古ふんどしにくゝり付、節句のごゑんをまちかね、八坂のあたり何屋とかやへはいり、盃のうちにつく〴〵おもへば、わがふんどしのあまりきたなきことを耻かしくおもひ、金の事もうちわすれて、二階からそつと捨てけり、折ふししたに下女せんたくして居けるが、これをみれば太閤様時代の木綿ふんどしなり、下女の云やう、もしこれはおきやく様のかといへば、仁藏いや〳〵それはおれがのではない、そのくゝり付てある金ばかりが、おれがのじやといふた、

(十六)湯殿の山伏

湯殿山の山ぶしと江州甲賀の者と、矢橋の舟に乘合物がたりのうちに、舟も松本ちかくなりければ、船人もこびた男にて、舟賃おはらひなされといへば、山ぶしきゝて、我等はゆどのゝ者じや、せんちんなれば甲賀の人にとれといふ、船人きゝて、扨は秀句でやらるゝ、それならば其方はまるにゆるすといふた、

（十七）鐘鑄の奉加

むかし片岡寺のかねいの勸進とて、奉加帳を出しすすめけり、こざかしき人ありて、片岡でらならばかねいではあるまい、龜井であらふ、判官殿の御内に、龜井片岡伊勢駿河といふほどにといへば、勸進する人のいふやう、とかく問答はいらぬ、ほうぐわん帳につき給へといふた、

輕口福藏主卷之四終

輕口福藏主卷之五

（一）白粉いろ〳〵有

遠國者おしろい屋へはいり注文出して、まつしろき白粉とあかきおしろひと、黑きや黃いろや皆々そろへて買ませふといふ、白粉屋きいて、いやおしろいに黑きやあかきはござらぬ、白きばかりのものでござるといへば、買手きゝて、さてもさんすいな白粉屋といへば、亭主腹を立、どこの國にか黑きやあかき白粉が有物かといへば、買手の云やう、此方にもなき事は申さぬ、夫ならばなぜに其方は、御白粉いろ〳〵有と書て置たと詰た、

（二）かわつた油つぎ

去輕口なる人途中にて友達にあひ、なにと其方の町の宿老は、油つぎになられたのといへば、それは合點のいかぬ事じや、人が油つぎになるものかといへば、彼輕口男のいふやう、なるほどあぶらつぎになられた證據は、會所へはいられたといふた、

（三）四方髮

こざしき人伊勢の太夫殿に逢て、何とおなじ神様にも、社僧とて出家の御もりがあるに、御伊勢様ばかりは出家はなふて、四方髪の禰宜衆ばかりじやが、ごふしたいはれでござるといへば、御師のいはく、神は正直のかうべにやどり給ふ故に、あたまを大事にかけるといはれた、

(四)さんごじゆ

僭上者さんごじゆのおじめを買、人にひけらかさんとおもへど、見てもなければ、彼僭上もの大勢の中にて、なにとこれほどなほうづきはあるまいか、ほしいとておじめを見せた、傍なる人見て、それ程なほうづきはたくさんにあれども、そのやうな疵の有のはない、疵がなふてもくるしからずばやらうといへば、顔をあからめていんだ、

(五)圍碁の大事

碁數寄な樂人寄合、毎日碁をうたれしが、或夜大事の手をあんじいられし所へ、勝手より加減がよふござりますとて、坪皿に赤貝のねり味噌を入出しけり、亭主碁筒かとおもい、つぼさらの蓋をとり、赤貝をひときれとつて暫案じてうたれた、相手の禪門も少時あんじ、大事の手が見へた、赤貝の手にはこまつたといふてまけられた、

(六)もじや

とつと出家の昔寄合、一人の云様、いまは世がおさまつて、假初にも袴を着るといへば、傍な老人きいて、人は着る筈じや、鬼さへ袴をきるそうな、三條通をみれば、鬼もじありと看板が有といふた、

(七)たうふのうば

若き者念頃な女房をたのみ、そなたのむかいのたうふ屋のうばをわれに肝煎てたも、我等も三月には隙もらひ、宿へはいりて小商致すほどに頼むといへば、なる程心得ました、あそこのうばはいかふよひとて、方々からいへど、前方より約束があるとて脇へはやられぬけれど、我等申たらなるほどなりますといへば、彼人よろこび、とかくそなたをたのむといふ、必脇へ約束のないうちにはなしてたもといへば、心得ましたとてたうふ屋へゆき、うばのことといへば、そなたの事ならやすきこと〻いふ、其後彼男自體道具こしらへ、とかく宿へはいりてからよべば物がいるとて、祝言と宿振舞とひとつにせんとて、彼念頃なか〻

に、内々のうばを晩に頼むといへば、心得ましたとて其晩櫃一荷にいれ、是が五十匁がうばでござる、精出して賣しやれといふていんだ、扨も大きなはまり、

（八）老人の目利

とかく人は習ふより馴ひといふが尤じや、去所にて日待の座に大勢寄合、碁の双六の將棊のといふて、面面の數寄々々なり、物に心得らる老人あつて、あの碁を打てゐる衆の家業を、我等いひあてんとて、あれは侍衆、是は出家衆、又あの人は醫者、此人は商人と、一一さヽれしがすこしもちがはず、いかにさやうに知り給へるといへば、されば打言葉に、

侍衆は、はたいろがわるひ、勝て甲の緒をしめたがよひ、

出家衆は、死る〳〵、南無阿彌陀佛々々々々々々、

醫者は、もはや耆婆が藥でもない、脉があがつた、

百姓は、とかく地を多くとつたがよい、地をひろげふ、

商人は、細に目をせつたがよい、とかく損せぬ樣にしませふ、

といはれたでしるヽ、

（九）三文が井戸

京の町をいのもと〳〵といふてありくを、田舎者ききて不審におもひ、これ〳〵賣ませふとよびて、そこへ二三文がのあてがやといへば、心得ましたとて、唐鍬にて庭を三鍬ほり、これはまけでござるといふて、三文とりていんだ、

（十）ねこに受法

堅法華宗、我が内にゐるほどのもの、ねずみまでに受法させけり、ある時友達のかたより猫の子をもらひ、これも受法させんとおもひ、やがて八の卷を持てかかれば、彼ねこたヽかるヽかとおもひ、緣のしたへにげた、綱をひきよべどもひけ共いでず、側に同行衆ゐられしが、もはや猫は法華宗になつた程に、すヽむるに及ばぬ、是程にじやうがこわふてはといはれた、

（十一）わけごり

きんちやくきり五六人寄合、方々にて取たる物どもわけてとらんとて、せんさくするうちに、中でもずんと重き巾着一つ見えず、これは合點のいかぬ事じや、此うちに手くせのわるいものはないかといふた、

（十二）久三郎はまり

去人家來を寒夜に使にやるとて、今宵はいかふ寒い、かんさせて一盃呑んでゆけとてかんさせられた、もはやかんがよからふ、もてこいとてかん切、旦那ばかり呑て、いかふ能氣味じや、きおひにちやつといてこひといはれた、久三郎いかいはまりの、

(十三)狀の留書

去人念頃の中に、大名の祐筆戻りありて、はなしに參られけるとき申されけるは、何と世間の人書狀のとめにいつもとかき、い上とかきかトとかゝる、いづれがよひかしらぬ事なれども、わたくしはかトとかくといはれければ、彼祐筆も返答なくてかへられた、

(十四)しわい男

さるしわひ男、友達のかたへ狀つかはすとて、きりの葉に狀をかきつかはしける、彼男よみてさて、使をよび、さて〳〵そちの檀那は世帶しらずや、此葉は燒つけになる、肩をぬげとて、使のせなかに返事かき、とめに御覽ののち火中々々とかきてやつた、

(十五)菓子賣にける火事

日の暮あひに菓子々々と賣て通るを役人きゝ、やれ火事よと觸れける、折しも横町に過ちしけるに出和、消して悦び、よくしらせたと譽らるゝ、明る晩に又〳〵わしや通る、心得たとて町中をふれさわぎけれど、何の氣もなかつた、

(十六)井戸のとりちがへ

去友達寄合、三井といふ名字はいかなるいはれあるか、どれも金持じやといふ、ひとりの者いふやう、あれは井戸が三つ有、四つありし古家をかふてから、分限になりたるにより名字としたといふ、又一人、いや〳〵さやうにの給ふな、人の腰を四つゐといへど、おいどは一つじやといはれた、

(十三)孔雀太夫

ちかき頃くじやく太夫とて女を男と僞り、御穿鑿ありて籠に入、さる者申やう、ふびんのことかなといひければ、友達に口がしこき者ありて、あれはその筈じや、男の女に化るは野郎とておゆるしじや、女の男にばけたるは、かならず籠屋じやといはれた、

(十八)蚊は日本のたから

人ごとに夏はよけれど、蚊ほどいやなものはないといふ、去老人いふやう、さやうにの給ふな、蚊といふ

ものは人を養ふものじや、まづ蚊帳屋、紙帳屋、かやの木や、其外人のためによきものじや、其上日本のためによきものじや、其上日本のたからじや、證據には海士の謠に、蚊ほど目出度たからを、なにとて日本へは送り候ぞとある、

（十九）丸裸の御公家樣

むかし御公家樣の御寄合の折ふし仰出さるゝは、定家の謠に、狩衣の袖を冠のこぢにうちかけてとうたふ、かりぎぬのときは烏帽子なり、大きなる誤りとあれば、はるか御次に御出入の醫者ぼん居られしが、罷出て申上るやうは、それはさやうのこともあるまひ事ではござりませぬ、去枕繪に、御公家樣の丸裸で、冠めしてござるのが慥にあるとやら申まするといひすてゝにげたげな、

正德六年正月吉日
京寺町松原上ル町
菱屋治兵衛 板行

輕口福藏主卷之五終

新話笑眉序

風聲水音も是天地のはなし、況や人としてつかのまも、たゞに默りてすごさんは、いとほひなけれ、はなせやはなせ有無無事、そこから一つ爰から二つの數を集めて、此一卷とはなりぬ、開ゐてみれば、ヘマムショ入道も、笠をぬいで頭をたゝき、眞向の布袋は、無遠慮なる腹をかゝへて、しほの目し給ふ顏ばせを名として、惠身のまゆとはいふものならし、

正徳二年たつの正月吉日

新話笑眉目録

目錄終

新話笑眉卷之一

(一)椀飯振舞

或人椀飯振舞にゆかれ、歴々の中にて例の癖出、指を鼻の穴に入、鼻毛二三本づゝひきぬいたれ共、膳にはをかれず、左右の客もじろ〳〵見る、おさめ所なければこまりはてゝ、また元のはなのあなへさしこまれた、

(二)章でしらする文字の作意

片膝立て三味線をいだき、椽がわの柱にもたれかゝり、當世の歌や道行一つ二つ引かゝれば、かたはらよりびくとすること、文字せんさくしたがる者出て、只今御引なさるゝで思ひだした、さみせんのばちと云字はどう書ますとへば、撥、こふ書ますと疊へ書て見する、御早書故片がしれませぬ、木へんでござりますか、いや木片では御ざりませぬ、てへん〳〵、

(三)見たて影法師

海邊を通りける旅人、鯖の足喰ふを見て、常々咄には聞及たれば、眼前見る事今がはじめ也、とくと見てゆ

かんと思ひ立やすらへば、又友だこ來り云樣、さてさて貴樣は見ぐるしき形かな、八本の足を七本迄喰給ふ、今少はやく來りたらば、それ程迄はくはせじものを、足たゞ一本殘りていかふ見ぐるし、彼鮹聞て、それ程見にくきや、さらば水鏡を見申さんとて、海水に形をうつし見て云樣、てんと團扇だまで、

（四）龍宮のあやつり

龍宮に能芝居出來て、ごばん人形々々とよばり立ればゞ、大小の魚こぞつて見に行、中に櫻鯛とおぼしくて、はむき出しひれをいからかし木戸口にかゝる、いづ方よりの御客ぞとゝがめられて、自分は夷三郎客と云てずつと通る、次にゆる〳〵と油ぎりたるうなぎ、是も木戸口斷なしに通らんとするを、いづ方の御客ぞとゝがめられ、拙者は虛空藏菩薩家來、夫なればお通りあれ、次にむく〳〵としたる大き成なまこ、おへいらしくぬつとするを、是はいづかたよりとゝがめられ、私は業平者、

（五）繪師の理くつ

細工繪を好む人、燒筆を持唐紙引寄、なにやらちらりちらりと、下繪書ていらるゝ所に、日頃心やすき近所の人來り、何の繪をおかきなさるゝ、いやちとお待なされい、今しれますと墨にて有々とかくを見れば、くくり頭巾かぶりたる親仁、居風呂に入たる繪也、見る人是は大黑そうにござる、どうけたるお繪かな、いかう面白い、しかしいかな大こくでも、ゆへ入るにづきんは着ますまいといへば、亭主そうではござれど、づきんがなければしろうとにまがいます、

（六）祈禱者のそさう

いつか先に降た儘やら、思ひだされもせぬ長日でり、近在の百姓氣の毒に思ひ、江戸のそんじやう其町に、奇妙なる法印有て、雨の祈大めいじん、祈もはてぬにはや雨がふるげな、此人たのめさ、お山伏の方え人をやり、右の段たのむ、法印心得たりとて出たつ、其日の裝束は、かきの衣に大太刀はき、ごまもちの樣成頭襟をいたゞき、いら高珠數、金剛杖、其外衣ふく等、爰をはれと綺羅をやり、葛西の方へおもむく、路次にてしる人に出逢ふ、法印いづかたへ御ざるといふ、けふは賴れて雨の祈に參る、そう見へていかふりつぱな御裝束、でがよふござる、出ぶしきいて、されば〳〵ふらねばよふござりますが、

（七）下手の談義

いでく聽衆のねむりさまさんと高座に上り、殊勝らしい顔してかね打ならし、選擇集など何やら卷を開らき、頂戴しておだんぎにかゝられしが、かの説て殿辨がわるふて、したゝか成るおへたなれば、五人歸り七人へり、やうく跡に二人殘れり、夫をばしらで、和尚はありがたそふに目をふさぎ、只りんじう正念南無阿みだ佛くと御となへなされい、何もといわふとして目をひらき見まはせば、てうじゆはすきと逃歸り、殘りては我共に三人なれば、高座を一つとんとたゝいて、な御兩人、

（八）水中のためし

誰やら父もしれぬ子をはらみし下女有、はたしてうみ出しければ、内のうばやら物ぬいやら大勢寄合申樣、さてく其方は、いつのまにかやうに子をはらみしぞ、夫はたぞつゝまずいやとせめかくれば、下女赤面して、何のいらへなし、其時物ぬいこう者成ものにて、か樣な男のしれぬ子には、親のしり樣がござる、たらいに水をくみ胞をひたしますれば、男の定紋が胞にあらはるゝものといゝ傳へましたとて、たらいに水汲ゑなをひたし、さあくうば殿御覽なされ、これ見ませうとのぞき手を打て、是はしたり紋盡じや、

（九）大悲の利生

日本廻國六十六部のひじりと、さもいかつがましくごしゆく修行者、雨岡橋を渡りかゝりしに、折節川の中にさんげく六根罪障、大山大小もさゝず、しかも九はだか垢離取共、丹誠をなしてらいはいするを、往來の人大勢立とまり見物す、修行者も、ちと我にも見せ給へとて人の中をおしわくれば、もぎどう成無分別ものありて、愛な六十六部めは人をつきのけ見たがるは、男を見そこなふたかといゝさま、むなぐらつかんで川の中へなげ入るれば、難レ有や大ひくわんせ音菩薩、紫雲に乘じてあらはれ給ひ、もつたいなくも左右の御手にて、六十六部が兒を抱、橋の上へおし上給へば、修行者は最前の奴をとらへ、己めにくいやつかな、たちまち報を見せん、うぬがせしごとく川の中におとすぞと、まつさかさまにつきいれければ、やつこ、何と觀音樣われらをばすくひ給はぬか、南無觀世音々々々々々ととなへければ、觀音是を御覽じ、なんぼすくひとうても、やつこのはなりませぬ、

（十）盲人の七日參り

兩眼がしいては半分死んだも同じ事、至心に佛ばさつを祈らば、またひらく事もありやせんと、淺草の觀音へ日參、一七日め其夜は寶前にこもり、祈念を致しながらとろ〳〵と眠りければ、有レ難や大悲觀世音顯れ給ひ、汝が願望何とぞかなへてやりたし、しかし當分目玉の出來たがない、きつと思ひだしたり、惡七兵衞景淸が兩眼、むかし我に預たり、先々是を得させん、善哉々々となへ給ひ、かきけすやふにうせ給ふ、夢さめ兩眼を開きたりを見まはせば、何にても殘る所なくあきらかに見ゆる、是は〳〵難レ有や忝なしとふし拜、我家をさして歸るとて、淺草橋の見付の內より、ねほれたる樣成貌にて、ゑぼし白張きたる鹿島の事觸、ひよこ〳〵とくるを見付四五間とびさり、腕ざしにそりを打てそれへきたらせたまふは、まさしく右大將賴朝也、かくごなされい〳〵、

（十一）初心なきつね

龜井戶の藤見にゆかんとぶら〳〵と行けるに、小狐此男を見てばかさんとや思けん、忽うつくしき若衆にばけて來り、あとや先に成て行ける、此男はじめより化たるを見すましけるが、態としらぬかほにて、是是おまへはおひとりそうなが、どこへ御出なさる〻といふ、いや私は龜井戶の藤見に參ますと云、かの男私も藤見に參ます、幸の事御同道申ませう、さやうならば御つれ被レ成て被レ下ませいと打つれ、程なく龜井戶に着、ふじ最中盛成を見あるき、いかうくたびれました、酒一つ上ませうとて茶屋へ寄料理抔い〻付、かの化若衆にひじいにくはせ、日もたけましたいざ歸ませうと打つれ、もと來し道に歸りけるに、はじめ化出し所とおぼしき邊にて、かの若衆、私は此近所の者、扨々けふはかたじけなふござりますといふてわかれける、かの男跡よりかの化若衆をつけて見けるに、狐の穴とおぼしき所へはいりける、あなへ耳をよせひそかに聞ゐたりしが、穴のうちにて云樣、扨々けふはいかふ馳走に成てと云、それはどこでといふ、さればば〳〵と右の趣をかたる、親狐にや有けん云樣、だまりやれ、それは馬糞であらふ、

（十二）かはつた相撲

そんじやうそこに勸進相撲あり、いざ見にゆかんと、四五人うちつれ行けるに、相撲程なく始、段々取ける

程に、寄の方よりいかにもたくましき男出ける、名のり合はせて、行事いざと聲をかけ、兩方既に組合けるが、しばしが間は勝負は知ざりけり、ゑいやつと云て目より高くさし上げ、あゝ見へたか〳〵と下よりこへをかくれば、さしあげられていながら云樣、いやいや見へぬ〳〵、若なげて見よ、左の方へなげたらば左の胴腹けやぶらん、右の方へなけなば、右のひざけをらんなどといへば、此男なげられはせずこまりはて、やはりさしあげていながらいふやう、人ごろしよひとごろしよ、

新話笑眉卷之一終

新話笑眉卷之二

(一)釣舟のうらかた

だまれ〳〵喰さがつたぞ、此やうな時高聲すれば、魚がにぐるものじや、さあ〳〵こはせがかゝつた、こゝな人は何をいやる、まだ釣竿をあげもせぬに、いやどうでもちがひはないと釣上て見れば、こはせなり、何とがをおつたか、此次には小ぶなをつらふといへば又小ぶな、うなぎといへばうなぎ、是れはこれは我折た、何としてしれますぞ、是れには大事のくりがござる、一つ二つ云てきかせうか、夫はよう御座らう教へたまへ、まづはじめのこはせはいか成占ぞ、されば水中にはりを入ると、一度に懐中の鼻紙袋がうごきましたさかいで、こはせとはうらないました、扨もきこへましたる占かな、又只今の鮠は、時ならぬやつがかかりましたの、うろたへふぐ、まぐれあたりでござらうと存ずる、どうしてふぐとはうらなはしやれたぞ、されば〳〵大事の事の、釣竿に死脈がうちました、

(二)かはつた出來口

淺草川のかつば若衆に化て、三囲の土手下涼舟のかかりたるあたりを、氣の毒そうなかほしてゆくを舟より見付、ひやうき成男舟ばたへ出、若衆樣は何ぞ落し給ふかといへば、仰の通りはな紙袋を落しました、其中に大切なかいた物がござりますといふ、それこそ私水中は得もの、取てしんじませうとてはだかに成、川へ入さまに、取てはしんじませうが御合點かへと云、化若衆聞て、夫は此方に望でござります、

(三)鷄鳥問答

或時雞とからすと出合てはなしけるに、烏にはとりに問曰、私の夜明に時を定めて鳴さへ、奇妙なといふ人あり、貴鳥は時々をたがへず鳴給事、數學によりてなる事か、さりとはふしんに候、鷄答曰、是にこそ大事のならひ候へ、われら時のつくりやう極秘なれ共、御志深ければあらあら語申さん、先天の行度を能し至りては重々口傳と、自慢顏してしさいらしくいへば、烏敢問、扨々尤そふな事かな、しかし爰に不審有、雨ふりや闇の夜には何を目當になさるゝぞ、にわ鳥是にこまりて、正直はめつた鳴じやじや、

(四)春雨四天王

春の夜の降暮したるつれづれに、頼光の御前にはいつもかはらぬ四天王、茶のみ雜談さまざまに、蛇むじなの物がたりとりどり成中に、坂田金時口不調法成男にて、むづむづとして居たりしが、何とかしたりけん、屁一つ二つぼんぼんと取はづしければ、座中眞貌に成るも有、くつくつと笑ふも有、其時金時眼を見出し、きばをかみこぶしを握りて云ふ樣、天晴眼にさへぎるものならばと、そこらをねめまはしたは、いかゐ候の、

(五)道中付の二度よみ

朝鮮扇十三文、模樣はだんだん御望次第、道中付もござりますと賣ありく處え、うつけたる男來り、どれその道中付の扇望とてかいとり、そろそろ開き讀ながら行、まづはじめに品川より川崎えの道のり、其次段段上方迄の宿次を、扇兩面をよみおさめ、なんの心もなくうかうかと扇をかへし見れば、又品川川崎とあれば、うつけものぎやうてんして、扨はばかされしと心得、指の先に唾を付、左右のまゆ毛をひつたりとぬらして、油斷はせぬぞといふた、

(六)關守の藝所望

地獄の道に新關をたて、まぎらはしき者を吟味し、其中に藝の有そふな者をとらへ、役者のこわ色拆望て聞かゝりける所へ、いかにも糸びんきいの小作り成男來る、せき守の鬼かれをおさへ、汝は何ぞ一ふしいへそうなやつじや、なんでもいへさあ〳〵とせがむ、それなら半太夫ぶしかたりませう、夫はよかろおれが三味線ひき申さふ、小鬼共そのさみせん〳〵とひきかゝれば、夜あけ烏もいわばきけと語り出し、順禮が情にて迄かたり、跡の鬼一口がさし合、何の氣もつかずうか〳〵とあんじしが、爰できれてはなるまいさ、いんぎんにこそかたりけり、東様口をのがれしもといへば、あかおに三味をなげすて、此男はぶひやうし成やつかな、じあまりで三味せんがひかれぬはとはらをたてた、

(七)夜明のとりちがへ

年たけたるかげま、もはやつとめやめてよい頃じやとて、吉日をゑらんで元服し、以ゝほかに大成ぶてうほうな名をつき、よいきみじや〳〵と月代をなでまはし、したゝか酒をのんでねぬ、夜あけがたに目覺、おぼえず我月代へ手をやり、やはり前の氣で、もしへもしへ夜が明ましたといふ、そさうなわろの、

(八)身は寒けれど口は大名

おはをうちからしたる浪人、なに程の寒氣にも垢びかりのする袷ひとつ、やぶればかまをもめん糸にてぬい合、大小のつか頭落、さやのわれたるを古元ゆいを墨に染てくゝり、それでもはなさぬくゝりづきん、じうめんつくりてはりひぢし、通町を行むかひより、町人のちか付來りけるをとらへ、頭巾もとらずに、扨扨久しや、おてまへは身共が方へはすきと見へぬ、近日ちと見へたらよかろふなどと、大へいにいゝちらす、町人もよいかげんにあいさつして立わかれければ、あとよりともの、もし旦那様、只今のは何やつでござります、あれは浪人衆じや、何にもせよずないやつかな、あの様なものにおかまいなされずに、見ぬ貌で御通なされたがよいといへば、主人いや〳〵、あの人は大へいながよい、あのなりでいんぎんなれば、乞食にまがう、あれでもつた人じや、

(九)川越じゆれい

世間にはやるくわん音講中、十二三人も云合、秩父順

禮と心ざし、祖父祖母まじりに、一ばんにはとゆりかけうたひながら、五六番も札打、かなたこなたとめぐりありく、道に小川いくつもをゝかりしに、一ところはゞ廣なる川へ行かゝり、何とやらんふかさうなが、此内に水心しりはおはせぬかと云て、川のおもてを見まはせば、先え壹人わたる男有、中ほどを渡るを見れば、首斗出して行、講中見て、川のふかさも大かたしれた、あれよりふかい所はあるまい、いづれも渡り給へと云合川に入、行共々々腰だけ也、是はしたり先の男は首だけ成しが、今の間によもや水は落まい、是はくわん音御かごならんと、先の男を見やれば、やはりくびだけにて渡る、いかさまふしん成事と目をつけて、くがへあがるを見れば、道理こそいざりじや、

（十）こまつたあいさつ

此裏にかし店有とのはり札に付、其家主の方え行、かし店の見へまする、かりましたいがと望む、御商賣はとゝへばつきごめや也、夫ならば成ませぬ、家がひづむやら柱がさがるやら、たまるものでなしとてかさず、又其跡より色黒くせい高く、がんじやう成男來り、御店かりましたいと云、御商賣は、井戸掘、以の外なりませぬ、先程つき米屋にさへかしませぬ、ねだも何もたまつてこそ、是はがてんの参らぬ御あいさつかな、つき米屋とちがひ、先々をあるいて掘ますれば、御家のかまゐに少もなる事では御ざらぬといわれて、家主、私は手前でほりてうるのかとおもひました、

（十一）狐のしやれ

ある隱遁者ゐせきの笠に桑のつゑにて、ぶら〳〵遊びに出られしが、道にて心あひの人につい知人に成て、つれ立行に、龜井戸へ行かと思へば根津に來り、根津かとすれば佃島邊也、ふしんに思ひ、板へぎの樣成小脇指に手をかけ、己め何ものぞ人間ではあるまい、正體をあらはせ〳〵とせめられ、彼男後むきに成、したゝか成尾を出して、正直は是で御座りやす、

（十二）日待の雜談

春の始の日待なればとて、一家一門は申に不レ及、常にはなす友だち、あたり隣の心あいを呼あつめて、酒ゑん碁將棊双六や、遊藝さま〴〵事をはり、よも山の咄になりぬ、かたはらより進出で云樣、あのするがのふじは、建久四年のいつ何日に出現したと申が、一夜

の内には扨々大な山が出來ましたのと云、物知顔成親仁すゝみ出て、いや〳〵それは俗說也、夫より前の富士の歌が萬葉集にござる、又一人すゝみ出、こなたのが道理じや、建久四年に出來たと云は僞り、是もみな梶原がいゝ出した事とおぼしめせ、

新話笑眉卷之二終

新話笑眉卷之三

（一）新藤戶

是は佐々木の三郞盛綱にて候、扨も今度藤戶の先陣を仕りし御恩賞に、備前の兒島を給つて候、今日吉日にて候程に、只今入部仕候、所の人の渡り候か、狂言處の者の御尋は何事にて候ぞ、ワキ近頃申兼たる事に候へ共、此所不知案内の者にて候、急用に候間、厠を敎へて給り候へ、狂言いや〳〵此事においてはなりますまい、なぜに、うらをおしへたら又殺されましやう、

（二）松によする鯛

若殿樣鯛があがりたいとおしやる、それ〳〵とありければ、小鯛の燒物びん〳〵としたるを參らする、片身まいり今一つ喰たいとの御意、替りなければ何とせんと思案し、御庭の松を御覽遊しませと云樣、うらかへしまいらすれば、其も皆あがりしまふて、何と今一度松が見たいとの御意、ぬかるものではない、

（三）淺間がだけ

かたい日蓮宗土用干するとて、箱の底より眞黑に成

たる紙によささうな手跡で、なにやら經文の書たる紙きれ出れば、不審に思ひ裏の方をかへし見るに、法然上人の御手跡とあり、じやうこわ大きに腹を立て、身共が家にかやうの物有べきやうなし、何者か入置けん、さながら捨られもせず、さらば火中せんとなべをはづさせ、燒火の中へ打入けれは、ふしぎやな煙のうちに、もめん衣に手巾ひつさげ、膝切のぬのこ着て股引したる道心者あらはれ出、首に懸たる鉦鼓打ならし、念佛ひたもふしに申せば、此男彌〻腹を立、さまざましかりてもきへうせず、女ぼうかしこきものにて、かまどのきわへつか〳〵とはしり行、是〻御坊宗旨が違ふたといわれて、かきけすやうにうせにたり、

(四)乞食張郎

白髮たるしわき親仁、あたらしき雪踏をはき、橋の上を通りしが、何とかしたりけん、せきだ片て川の中へおとし、あたりを見まはせば橋のもとにひとりの乞食有、その方が名は何といふぞとゝへば、長兵衞と答ふ、其時おやじ、やゐいかに長兵衞、あのくつ取てはかせよと云、長びやうへやすからず思ひて、たゞは成ませぬ、又親仁それならばしあんが有とて、例のしわいさん用を出し、殘りかたぐ〳〵のせつたも蹴こみ、さあ〳〵長兵衞南方で一文やらふ、

(五)文盲の柱暦

至極文盲な者、柱に略暦の張て有を見て、あれは何と申物でござりますとゝふ、是は柱暦でごると云、其柱暦は何になりますぞ、扨〻文盲成人かな、一年中の事をしるものでござる、さては年中の事はなんでもしれますか、さやうならばちとたづねませう、今年のかほ見せに、嵐喜世三郎はどこへまいります、

(六)佛前の寶鏡

今日觀音參いたし至心に禮拜をなし、下向いたしますれば、きだはしによい鬢鏡が落てござりました、あたりの人に、いづれものではないかとといましたれば、主はござらなんだと語る、親仁是を聞、其御鏡は觀音の御授けであらふに、なぜに取て歸らぬぞと云、されば私も取ふとぞんじ、そばへよりつくばい手迄出したれど、取ましなんだ、夫はなぜに取ぬぞ、むすこ云樣、下から人が見ていました、

(七)腹をかゝゆる歸さのかご

品川がよひして、所でも little程はのきく男有、時朝の歸

るさに、亭主門へおくりて出、ちとお待なされませ、かご申付ませうとて、所のかごかきを呼、さあ〳〵めしませい、ふとんがなふてはお居所がいたみませうと、内えかけ入もめんぶとん引さげ來る、是は〳〵かたじけないなんど云て手にとれば、裏の方になにやら白きもよふあり、引かへして見れば、そめぬきに踏馬御免と大筆に有、是はならぬぞ、

（八）律義な謠嫌ひ

うたひといへば七里逃、つゞみ太鼓には耳をふさぐきらひ有、ある夜うたひ講の場所は、ふと行かゝりければ、三番め松風最中、曲はかゝる前にて、神のたすけも波の上、哀れにきへしと大聲にてうたふ、歸られはせず、かたはらにいやながら暫くいれば、曲のおし哀古をと下音にかゝれば、かのきらひていしゆの袖を引て小聲に成、拙者はもはや歸ります、私への御遠慮ときこへます、やはり前の通り高ふ御諷なされませいとて、こそ〳〵と逃て歸た、

（九）鍔のほめすごし

古き鍔をもとめ、こしらへいかにもりつぱにして、ある座敷にさしてゆかれしに、さて〳〵見事なおこしらへかな、いかふしほらしいつばてござりますと云、されば〳〵よほど能つばとぞんずる、しかしうすふござるといへば、いや夏はよふござりますといふ、

（十）盤上の出來口

心やすき座頭の坊夜咄に來りければ、亭主、今夜ははなしを止て、將棊にしませう、貴樣はいかふつよいときいた、將棊盤もてこいとて取よせなをし、こまばらばらとならべ、さあ指ませうと互に向ふてさせば、座頭は殊外工夫強きものなれば、亭主よほどまけ色に見へける、をりふし燈ふときゆる、坊樣少御待あれと手をひかへおるに、座頭、是は何としてとゞこほりたまふぞ、いや灯が消ました、座頭、くらくてはさゝれませぬか、どうしてくらふてさゝれませうぞ、ざとう聞て、さて〳〵めあきは不自由なものかな、

（十一）大學講談

頃日文字讀しならひ、集註さへ讀もせいで、はやかうしやくこそおかしけれ、大學の道は明德をあきらかにするに有と讀出して、何やらゑ知れぬ事をよさそふに取つけ、一座かうじをはりぬ、てうじゆのうちより一人進み出、ちと尋申度事有、此書の内に彼淇(キ)ノ澳(クマ)

を見ればこは何の事にて候や、承り度候、講師のいわく、よい御氣づき也、いひてきかせ申さんとて、つかもなき事いわるゝこそおかしけれ、かのきのくまとは、唐は大國なれば深山廣野多し、其所の大木のうへへ、熊があがりて晝ねして居ますするを、唐人ども下よりふりあをむひて見た所をかくは申也、扨々おもしろきせつかな、其下に妻たる君子有とはいかに、答て曰、こなたはおわかいが、肝要ばかりとふ人かな、某もこゝには骨を折たり、近き頃こびたる書にてかんがへ出し候、本草綱目で見當りました、ひたる君子とは、君子のみいらになつたを申す、

（十二）片言の禁句

そんじやうたれはじつの兄弟といへば、少も似た所なし、腹がわりならんと雜だんする中に、いかにも文盲にてしかもこびたがるものさし出、あれは私能ぞんじました、成程十死一生の兄弟でござるとかほをあかめて云、こゝな人は麁相な人かな、一腹一生の事かといへば、あゝそうでござります、

新話笑眉卷之三終

新話笑眉卷之四

（一）獨江の翼

うつそりとしたる男、ある夕暮に天狗につかまれ、山山嶽々廻り〳〵しが、彼天狗ちと草臥がついて、汝もそこに少し休めとて、岩の上につきすへ、其身は羽をゆふ〳〵とのばし、泰然として坐す、彼男何とぞまかれんと思ひ、天狗の側に近々と寄、有たけの智惠をふるつて、てれん云こそおかしけれ、さても〳〵こな樣の羽は、日本ではついに見ませぬ、渡り物か、なんといふものぞ、見事な物かな、四座の能大夫も此やうな物は持ませぬぞと、めつたにほめはやせば、天ぐじまん貌にて、さあといふて尋ねて見よ、今はこんなはないさ、

（二）寸尺の取ちがへ

段々寒空になれは、革頭巾がなふても成まいとて、切付屋へ行、頭の本さらせて、もよふいかにもだてにこのみ、いついつか出來ます、其節取に參らふとて、其日になれば、なんと先日あつらへた頭巾は出來候や、

取りに參りたり、成ほど出かしましたと取出す、是は是はよいお手ぎは、さらばきて見ませうとかぶれば、頭の本取そこないけるか、きしみてあたまいらず、紙を御出し被成ませいとて、一枚頭にのせ無理にすりこめば、大かた入ぬ、まだ思ふやうになしといへば、かわや云樣、二三町おあるき被レ成ますれば、とくと入ますと云、たびかなんぞのやうに、

(三)朋友の了簡ちがひ

上方に久しぶりにて下りたる人に、江戸橋にて出合、扨々お久しや、いつお下りぞ御無事か、何として長々御逗留、定てよい事づくしで、お下りがおそかつたと存ずるといへば、いや／＼御察と違ひ申候、拙者妹が死ましたゆへに、久々とうりうと語れば、聞もあへず手を打て、夫は誰とゑとて氣もつぶれ貌、上方の女がしんだとさへいへば、兎角心中と心得たは一笑々々、

(四)秘事はまつげ

今月は祝ひ月、殊にけふは朔日、神明參詣せまいかと二三人誘引し、芝飯倉の方に行ば、宇田川橋のうへ、したゝか荷付たる馬引て行、連立のうちとんてきもの飛かゝりて、馬の尾を四五本指にからんでぐつとぬく、其内年かさ成もの、かのとんてきをしかりて曰、しりたまはずや、馬の尾はぬくものではなし、いかふしさいの有事也とて、ぎやうさんさうにしかられて、扨々ひよんな事しました、いわれの有を夢にも存ぜず、かたりてきかせ給へ、いや／＼大事々々途中にて申ぬ事也、きかねば氣にかゝる少しはなし給へ、しからば語て聞せ申さふ、道ゆく馬に飛かゝつて尾をぬけば、馬がいたがる、

(五)年は經ぬれど新い口

六十の賀も、三四年先に過たらんと見ゆる親仁、色町をうそ／＼のぞきありけば、遊女共見て、扨も／＼其ふるい貌で、こゝらへは似合ぬ、きついしわ哉と笑へば、けふはしわが多いはづ、夕部たゝまずにねました、

(六)化性のはいかい口

獨り旅のもの、日は暮かゝる、足を早めて山ぎわを行けば、どうやらぞつと寒くなるほどに、ふりあをぬいで見れば、山のかいよりはな火しゆつしゆと出ると、例の幽靈太鼓どん／＼とうてば、三里の灸あて額にあてたる幽れい顯、やい／＼と呼かくる、旅人飛しさり、腰のものにそりをうつて、狐狸の所爲ならん、正

體をあらはせと大音あげていへば、ゆうれいひたいをおさへて、ぶる〳〵とふるい、あゝら峯くるしやと云、かの男此ことばを聞て、扨は山のせいにきわまつたとて行過ぬ、

（七）客のはまり

ある夜四五人うちより、咄もしみて夜もいとふけゝるに、鼠のさはぎあるき、梁をつたふを見て、こざかしき男猫の鳴まねをしけるに、ねづみはりの上にてふりかへり見て、白人藝には餘程よいといふ、

（八）町代の律儀

堺町中村市村兩座共に新狂言、朝の六つから群集する事ゑいさう〳〵、それ〳〵のひいき〳〵、竹之丞え行もあり、又揚三え心ざすも有、こゝに御屋敷の女中がた六七人、ふうりう出立、或は中村源太郎がもんつけたるもあり、又嵐喜世三郎が紋付たるも有、おもひおもひの役者のもん付、づらり〳〵とおやじ橋を渡り、堺町の方えゆくを、見せ守りの若いもの見つけ、扨も〳〵だて成女中かなといへば、どれ〳〵といふてとなりからも立、むかいよりも出、方々の家々から若いもの共、樣ばなへ出立さわぐをみれば、自身番所より六十餘りのおやじ、町代とおぼしきが出て、わかいしゆさはがせらるゝな、かはらのけぶりでござる、

（九）錢を趣向に狂歌の返答

すこし小ばいかいもせらるゝ樂人、金澤八景を一見し、夫から鎌倉の谷々、其外古跡共見めぐり、籠釋迦に參り、御本尊の開帳をのぞみしに、同宿がいわく、錢百文御出し被レ成ねば、おがませます事なりませぬと云、風雅人例のくせをおこし、やたてより筆ぬき出し狂歌一首、

此ほとけ錢をださねば見せぬじやか
木じやかかごじやか扨は欲じやか

とかき、是見給へとて同宿に見せければ、此坊主とんさくものにて直に返歌、

欲じやかといふはばかじやかたわけじやか
さてはうき世のあばれものじやか

（十）そさうのほめ過し

始て行たる所にて、さま〴〵の物語ありて後、さあさあ御ねころび有て御咄候へと云ながら、ていしゆ勝手より幼子をいだきて座敷へ出、客の中にもそさう成男有、其子を見て、さて〳〵よいお子かな、御壽命

もながゝらん、第一鼻の下がのびてよし、おとしはおいくつぞと問、亭主、いやせん先月生れ申たり、龜相者、夫にはいかふおわかふ見へます、

(十一)野郎の心中

ずんど粹な男、舞臺子にふかくなじみ、ある夜のたわぶれに、いかにしてもそこもとの心中の程、心もとなしなどいへば、彼野郎云樣、私が心のほどを、竹ならば二つに割て見せたしといへば、客、いや〳〵二つにわつたらくそがでよふ、

(十二)一向宗の尤な不審

祖父祖母つれ立御堂參して、ありがたそふに本尊をらいはいし、さて同宿にちかづき、こなた樣に尋申たきことあり、此方のしうしで、肴くふてもくるしからぬは、どうした事でござります、同宿の曰、くるしうないしさいがござる、先我等がそしの御名が肴の名にて、しいら上人とはいゝませぬか、其上お師匠は黑鯛ほね上人、それでわたくしどもの名も、どじやう坊主と申ます、

新話笑眉卷之四終

新話笑眉卷之五

(一)日本人のはまり

毎年江戸え商にくる阿蘭陀人、品川まで來り、いつもよる茶屋に行、江戸入なれば裝束などしかへ、亭衆にむかい、おらんだ口にて、なんの事やらいゝちらす、ていしゆ通辭にむかひ、あれはどう云事でござるとへば、通辭、あのことばは馳走の仕樣がわるい、料理が散々でくわれぬと腹立ていふ事也と語る、ていしゆ、扨も〳〵にくいおらんだめかなと思ひ、用有げにそばへ立寄、日本言葉は通じまいぞとおもひ、つうじの聞ぬやうに、已にくそをくらはせたいといへば、おらんだ人聞て、うぬくらへといふ、

(二)僕が作意は御無心の種

葛西あたりの草深い所がおもしろいとて、江戸から隱居したる人有、隙さへ儘に、あるときはふせへ參るの、鹿島え行のとて、大かた宿に居る事はまれ也、留守預りの僕に、うのくそ久六とて大氣じやうなる若もの有、隙のまゝに毎日晝ねをこたる事なし、有時背

戸の藪よりしたゝかなる狐來り、能ね入たる所をこそぐりつ、はなげをぬいつ、さま〴〵になぶる、久六目をさましかつぱとをき、彼狐を取ておさへひざの下にしき付、犬の眼に角をたて、扨々うぬめはにくいやつかな、かゝもないうのくそをたぶらかさんとは、なか〳〵ぞんじもよらぬ事、命をとらんと思へ共、忌の日なればたすくる、自今こゝへ來るな、若來りてもまがいなきやうに、印付てくれんとて毛ぬき取出し、耳の上迄とうけん額にぬきあげ、それ行おれとつきのめす、狐うれしさうに尾をふつて、藪の方へ逃さりけり、其後又晝ねしている所え、例の狐來り枕元につくぼう、久六むくと起、またうせたか、此度は殺すぞとぎしめく、狐、おさわぎなさるゝな、化しにはきませぬぞとて、なが〳〵とねころびひたいをさすりて、なんと隙ならひとつぬいてくれやれ、

(三)料理人のとんさく

ある手ずき、くわしや看板を頼まれ、書かゝりて司と云字はたとわすれ、せつ用集など取出し居る處え、近所の料理人に、世話文字少覺へたるもの來り、是は何を御覽なさるゝと云、手かき右之段物語しければ、其文字私覺ました、つかさど云字の書やうは、同じくと云字を片身とりて、はね付の方を用給へと云、扨々相應なおしへの、

(四)馬耳の東風

子曰道不レ行と本文をよみ、聖人の何と作られて、かふ遊してなどゝ講釋あるを、門弟の供に來る奴臺所にて聞、聖人とは何んの事と云、儒者の僕、扨々こゝな人は文盲な事いやる、聖人とは孔子の御事、やつこ、又孔子とは、はて古今第一の道しりといふ、やつこ聞て、なにほど孔子の道しりでも、番町に使やつて見たい、てきとまよはしやらう、

(五)番太の了簡違

何の國、何寺、本尊は誰の御作、れい寳も樣々有と、削りたてたる横板に、墨黒々と大筆にしるし、町々の門えうつてまはる、往來の人立寄こぞつて是をよむ、あまり大勢あつまりければ、番小屋より親父棒つき出、大せいの中えわつて入、扨々いかい人だかりかな、是是いづれも見る事ではない、とふらつしやい〳〵、

(六)かなの讀ちがい

かなよみそこなふ人、常政のうたい本見て、いかなる歷

歴なれども、扨々あたらしい事かな、つね政はあほうさうな、それはなぜなれば、上歌の所にさればかのつねまさはとある程に、

（七）豆腐やが聞ちがへ

秋は夜長に、いづかたにも夜食くふ時分、六十にもあまるべきと思ふおやじ、たうふ〳〵と門をうりありくを、小者立出、是たうふ〳〵とよびかけゝれ共、此親父我よび聲に計せいを入て行を、ひたとよびかけてもいらへなし、小ものはらをたて大聲あげて、あの親父めは耳がきこへぬそうなとよばゝるを漸々聞付、いや〳〵今夜は耳はうり切ました、あすのばんもてまいりましやう、

（八）云なし様でおかしい病氣

いかにも文盲なる病家え、いしや殿見まはれ、なんとおやじきしよくはいかゞ、どれ脉見せよとるみ手でかゝれば、おやじ手を出しさまに、まだ思やうにもござりませぬ、是はどうした病でござりますといふ、いしや脉を考、どうしても是は血熱の故じやといわれければ、ばゝすゝみ出、扨も〳〵おまへ様はよう脉御取被レ成ました、成程けつねつにきわまりました、夕部も尻をまくりてねやりましたほどに、

（九）直をしてはまる商

四五人打つれ、江の島それから鎌倉と心ざし、七里が濱をおどけくるひながら行ば、海面を大なる鮹ひとつぶら〳〵と行を見つけ、あたり成獵舟をまねき、あのたこ取てくれ給へと云、獵師聞て、我々はすきあい也、隙らしき事をいふ人かな、いや錢を出すべし百文やらふ、いや〳〵百五十文か、それなら取てもしんじやうと、鮹の行かたまぢかく舟こぎよすれば、かのたこいだけ高にのび上り、三百でもないとて沈だ、

（十）樵夫の名言

心あいの友四五人、いざなぐさみながら湯治せんとて、木賀となんいへる所え行、こゝかしこ遊びありきける、むかふよりきこり一人來りしを、かの男に向ひて、此所の東西はどうじやとゝへば、東西とはなんの事でござりますと云、いやにしひがしの事じや、木こり又いふやう、おやすい御用なれども、昔から爰もとに西東はござりませぬ、

（十一）比丘尼の心中

奴ふかくあひたるびくにに云やう、此年月そちとね

ん頃にあへども、さしたる心中も見ずといへば、びくに指を切べしやなどいへば、いや〳〵それはいらぬもの、何ぞ慥な心中が見たいといへば、さやうならば重て來り給へ、わしが心中を見せませうといへば、奴嬉しく其日は歸り、重て來りて、いざけふは心中を見んといへば、びくに、いざ心中を見せ申さんと、頭巾をとるを見れば、いかにも高くさうけんびたいにぬきあげたり、

（十二）五兵衞が安堵

やい〳〵こちの五兵衞は内にをるか、けふは頭痛がいたしますとて、二階にふせりております、はてふしぎな事かなといゝながら五兵衞が側に行、やい〳〵とてゆりおこし、先ほど糀町をとをれば、たをれもの有て、大ぜいあつまり見る程に、我も立寄て貌を見ればお方也、南無三寶是はしたり、先宿へ歸りせんぎせんと思ひ、大いきついてかけ歸りたりと語れば、五兵衞聞てむくとおき、あいさつなしにかけだし、片時が間糀町へ行たをれ者を見て歸り、だんな樣御氣づかいなされますな、私ではござりませぬ、

正徳二年壬辰正月吉日

日本橋南三丁目戸藏屋

新話笑眉卷之五終

話稿 鹿の子餅序

山の手を飛歩行尻やけ猿、下町にすむ腹一ぷくのいづれか、おとしばなしをせざりける、こゝにその落を拾ひあつめたる帖あり、話の稿なれば、わようの響ゐるをもて、鹿の子餅と題す、意味深長の旨味は、ひとつゞく讀で御らんなされ、數は六百八ほどありと云云、

明和壬辰の太郎月　　山風

話稿 鹿の子餅

○桃太郎

むかしくの桃太郎は鬼が島へ渡り、もとでいらずに多くの寶を取て來たげな、これほど手みじかな仕事はない、しかし犬と猿ときじが供をしたとある、おれもきやつらをごまつけるがよいと、かの日本一の黍團子をこしらへ、腰につけて行く、向ふの岩ばなに猿が出て居る、まづしてやつたりとうれしく、件の團子ぶらつかせ行過るを、猿よびかけ、おまへどこへござる、「おれかおれは鬼がしまへたからを取りにゆく、「腰につけたは何でござる、「是は日本一のきびだんご、猿うかぬ貌にて、「こいつうまくないやつだ、

○牛と馬

總たいけだものゝ中で、爪の割れた物は道が早い、犀などゝいふやつ、爪がわれて居るによつて、波を走ること飛んだこつた、「ハテナ、しかし馬は爪がわれてなけれど道が早い、あれはどうした物だ、「あれは爪が割て居ぬからまだ人が乘られる、あれが爪がわれ

て見やれ、不断飛ぶやうで、中々人が乗られる物ではない、「牛はどうした物だ、あいつは爪がわれてゐれど道がおそいは、あれかあれは爪が割て居るから道をあるく、あいつが爪がわれぬとだいなしうごくこつちやない、

○煙艸入

古代の裂にてたばこ入を數々こしらへ、咏唫を上る者あり、「是で見ればいかにもおもしろききれあり、まづ此にしきはいかふけつかうなきれそうにござります、これはいつ頃のきれでござります「それは寶盛がにしきのひたゝれのきれさ「いかさまそふもござりませう、又この蝶のちら／＼見へますは「それこそ曾我の五郎がはん切のきれでござる、して又こゝに白地のきれに赤い所のみへまするは「そりや牛若の大口のきれ、そのあかい所はいがきのもやうのきれたのでござる「扨よくおあつめなされました、どうしてこふはあつまりました「みんな人形屋で貰て來ました、

○鞠

まりにはまつた息子へ、親父遠廻しの異見、いかな事聞入れねば、ある時よびつけ油をとりて、九損一德何のやくにたゝぬ藝、向後ふつつりやむべし、鞠があれば蹴たくなる、そのまりうつちやつて仕廻へといふに、むすこしほ／＼と鞠を出し、手代をよび、今までもてあそんだ此まり、無下にすつるもあんまりじや、せめて庭の隅をほつてうめ、しるしに柳をうへてくりや、

○俄道心

相店の八兵衛欠落して行衛しれず、程少し過て兩ごく橋の上でひたと出つくわした所、ぐつそり剃た道心すがたでもゆるさず、胸ぐらひつとらへ、コリヤ、八兵衛坊主に成たとてりやうけんはならぬ、いつぞやの八百のかしたつた今かへせ「これ坊主に成たと思つて安くするな、かう成ても心まで坊主にやならない、

○盗人

ぬす人の用心に親父藏に寢る、それでもぬす人來て家尻をきり、まづ一人藏の内へ入れば、外の一人は持出す道具うけとる手筈でしやがんでゐたり、時におやぢ目をさまし、壁に穴の明たるは合點ゆかずと、件

の穴よりあたまをさし出したるに、外に居るぬす人「ム、やくわんから先キか、

○挑灯

夜ばなしの歸みち〳〵、家來と咄しながらもどれば、家來も咄しが盡て、もし旦那此てうちんにはなぜくさりをつけた物でござります「それはひよつとりふじんものが切た時、きれはなれぬ用心じや、「シテそのときはだれがもちます、

○浪人

雨のふる日は眞の浪人と來て、晴間まつ張肘の門口、おあまり貰が立て、おあまり下さいませう、浪人、くすみ返つて「あまらぬ

○馬鹿娘

なんぼ馬鹿でも十七なれば、もふ袖をとめてやつたがよいと袖つめた日、近所のわかいしゆ來て、こりやおむす袖とめめでたい、ごりや見たいといへば、むすめ右の手をあぐる、コリヤどうもいへぬといふ時、娘左の手をあげこつちやも、

○薺

朝とく起てやうじ遣ひながら、垣の透間から隣を覗けば、寐みだれすがたの娘ゑんがわにこしかけ、あさがほの花をながめて居る、これはかわゆらしいと息もせずのぞき居るに、庭におりるりに咲た一りんをちぎり、手のひらへのせて見る風情、ごふもいへず、歌でも案ずるよと いよ〳〵ゆかしく見て居たるに、今度は葉をひとつちぎりたり、何にするぞと見て居たりや、チント鼻をかんで捨た、

○鼻捻

殿の御好みで出來た鼻ねじり、御預ヶ被レ遊たにより、かんぶくろをこしらへ、これに入て御次の間にかけた所、白ふて見とむなければ、御鼻ねじりと書付たが、御鼻ねじりでは旦那の鼻をねぢるやうなれば、書直して鼻御ねじり、

○鶉

うづら好せ給ふお大名、承つたへ聞にまいる者へは、御料理など被レ下、甚悦ばせ給ふよし、お出入の宗匠衆を頼み、私もきつい鶉好きと申入て、曉起し行た所、さすがお大名の御手の廻つた事、朝つぱらからいろ〳〵のむまごと、酒たらふく下されのみくらひして居る内、チヽツクワイトの一聲肝をつぶして、あれ

は何でござります、

○御髭

御大名御髭を剃らせ給ふ時、お舌でお鼻の下や御頰べたをふくらませ給ふ、なんとおれが髭を剃る時、したをまいてはたらかせ、ふくらませるで剃よくはないかとの御意、「イヤハヤ格別仕りやう御座ります、「其等是はおれが工夫じや、

○劍術指南所

諸流劍術指南所と筆太なかんばん、人物くさき侍來て、何流なりとも、わたくし相應の流儀御指南下されい、御門弟に成りましたいとの口上、「其元樣は表の看板を見てお出でござりますか、「左樣でござりまする、「ハテ埒もない、あれはぬす人の用心でござります、

○蜜柑

分限な者の息子、照りつゞく暑にあたり大煩ひ、なんでも食事すゝまねば、打寄てなにぞのぞみはないかとのくらうがり、何にもくいたうない、そのうちひいやりとみかんなら喰たいとのこのみ、安い事と買にやれど、六月の事なればいかな事なし、爰に須田町にたつた一つあり、一つで千兩一文ぶつかいてもうらず、もとより大身代の事なれば、それでもよいとて千兩に買、さあおあがれと出せば、むす子うれしがり、まくらからおく起上り、皮をむいた所が十袋あり、にこにことと七袋くひ、いやもふうまふてごふもいへぬ、これはお袋樣へあげてたもとのゝる、三袋手代にわたせば、手代その三ふくろをうけ取て、みちから欠落、

○醫案

これも一人息子、よほどの日數をぶらぶらわづらひ、くすりや針の驗も見へねば、親父くらうがり、少し通り者を出し、心安い若いしゆをひそかにまねいて、市之亟が病氣、引つこんでばかりのよふせうは、けつくめづらいでわるい、貴樣たちは不斷も心やすいはこんな時じや、ちとさそふて遊び所へつれて行て、氣を轉じさせて下さいとの賴み、得手に帆とうけ合、息子にあそびすゝむれど、一ゑんすゝみなく、どこへも出るはいやとのあいさつ、そうでは濟ぬ、それなら船といろいろにいへば、何もかもいや、しかし芳町なら遊んで見たい氣もあるといへば、安い事とおやぢに內々かたれば、どこでも大じござらぬ、なれどちよつ

といしやどのへきいてみての事にして下さいと念を入れて、直ぐにいしや殿へ行、扨市坊もおかげでよほど心よふ、しよく好みがでました、どふぞよし町へ遊びにまいりたいと申ますが、どうでござりませう、イヤそれはちとゆるしにくい、野郎はうま過てもたれると不承知のてい、「しからば内にきれいな二才がござります、これを用ひませうか、「いや〳〵地穴は毒氣がある、これもなるまい、「それではせつかくの好みが無になります、どふぞ御了簡を被レ成て下されませ、「ハテこまつた物と、机の上からこまかに書た大冊の書物取出しひらき、眉に皺よせくり返しみ、ハヽアあるは〳〵、「何でござります、「寒ざらしのやつこのけつがよい、

○下女

ごふだおさんどの久しい、どこへござる、「けふは宿おりに出やした、「してことしはどこに居さつしやる、「アイ、ことしは下谷のもちやに居やす、「何もち屋、そんなら大ぶらちをくふだあらうの、「なおにきよおれんは湯屋に居たけれども、

○初夢

寶船敷て寝たあした、友達へひとを廻しよびあつめ、亭主何やら大よろこびの體、神棚へみきをあぐるやら、客へは酒さかな出すやら、上を下への大さわぎ、なんでも初春早々めでたい事と見へた、どんなこつちや、おらもちつとあやかりたい、いつてきかしやれ、「されば聞てくりや、ゆふべめでたい夢をみた、「何をみやつた、「丸づけをみた、「何丸づけを見た、丸漬がなぜめでたい、」ハテ、一富士二たか南無三まちがつた、

○田舎者

いなか者はじめて堺町へ行、芝居見物して歸りけるを、けふは芝居へござつたげな、どつちへござつた、「たしか勘左衛門とやら、勘三郎とやらへ行ましたが、何かはやわるい日ゆき申て、ろくだま狂言はしもうしなんだ、「それはさん〳〵で有たそしてどんな事がござつた、「さるおもだかの鎧とやらがなくなつたとつて、一日ハイそのさはぎで仕廻ました、

○新五左殿

俳名なくて爲になる客と來て居るお國の御家老、たま〳〵家內引つれ江戸への出府、出入の町人芝居ふ

るまい、翌日機嫌きゝにまいれば、直に居間へ通され丁寧の禮、町人は本田屋銀次郎、當世しやれのひつこぬき、昨晩もそつと茶屋に御座なされましたら、奥様や尉さまへ露友が唄おきかせ申、一瓢が身もおゐにかけませうとぞんじましたに、おいそぎ遊ばしまして、早ふお歸り遊ばし殘念にござります、又近い內觸を申付ませうなどゝくるめかければ、いやもうきのふはいかゐ世話、めづらしい江戸芝居見物して、皆もよろこび申す、扨あの祐經に成た役者は、何といふやくしやでおじやる、「あれは松本幸四郎でござります、せけんでかの親玉々々と申てござります、「何親玉とはあれが事でおじやるか、いやはやよい人品、何を云つけてもつとめ兼まい男、いかうさしはたらき、分別もあると見うけ申た、それにつけてもあの音八郎がたわけは、

〇雪隱

兵法の師匠の所へ、大水の見舞に行てみれば、床上へはあげず、師の坊雪隱と見へて、雪ちんにて聲有、その聲はねるたび〲尻をひねるやうすにて、トウ〱どこへ〱とのかけ聲、トゞはづしそこない、しやびつしやりと尻へはねる音したれば、な無三あひうちに成た、

〇小便

雪の夜中小便つまりて目さめ、起て立出雨戸明にかかつた所、氷ついていかな事明かず、仕かたなければ敷居へかゞんで小便をたれかけ、扨明て見れば氷とけてぐわらりとあいたり、よしと云て出た所が何の用なし、

〇悔

神道者の親父が死んだ時くやみに行き、扨おやじ樣は此間高間が原へ御出なされましたげな、おちからおとし申しませうやうもござりませぬとの口上、おもしろし、おれも其道にやらかそうと行、扨おちから落し申しませうやうもござりませぬ、親父樣は此中うねめが原へお出被レ成ましたげに御ざる、

〇屁

初會のざしき、女郎ぶいとの仕そこない、若い者ひつかぶり、旦那御免、出ものはれ物所きらわずと、あたまをかけば、客もさるものにて、ひつたものこいとの事か、コリヤ放屁をやり山と一分はづめば、ぶいでは

ない粋様といたゞき、さあおゝ床にいたしませうと出て行郎下、女郎も何くわぬかほでつゞいて出、うはぞうりゆたかにならしてよびかけ、八兵衛やはたらいてやつたによ、

○文盲

草臥のびれの字は、五へんに卜の字とおぼへたやつ、書畫の囃しの中へ罷出、下谷和泉ばし通に居られます、唐やうとやら唐りうとやら書れる人は、達者そふな手なれど、ひとつぱもよめませぬ、いかふつやのないきたない手でござる、「それは誰でござる、「その書た物に則名も書てござつた、何さきちうべいさ、

○戀病

戀はをなごのしやくのたね、むすめざかりの物思ひ寢、たゞではないとみてとる乳母、しめやかに問ふは、おまへのしやくもわたしがすいりやう、ちがひはあるまい、だれさんじやいひなされ、となりの繁さまか、「イヤ「そんなら向ふの文鳥様か、「イヤ「してまたたれじやへ、娘まじめになり、「だれでもよい、

○無筆

物もう、「ドレイ、「北佐野三右衛門御見舞申ます、「今日は旦那まかり出ましてござります、「しからば御玄關帳へしるされ、おかへりのしぶんよろしう仰上られて下されませう、「イヤ、わたくしは無筆でござります、そこもと様御自筆に、帳面へ御名を御書なされて下さりませ、「拙者も無筆でござります、「ハテ、こまつた物だナア、客「しからばかういたしませう、取次「どうなされます、客「まいらぬぶんになされて下され、

○海鼠腸

御肴に今出すこのわた、料理人お風味をするとて、ずる〳〵とのむところ、やれいまおざしきへ出すのを、みんなにしては濟ぬと傍からいわれ、引出しながら、こいつ出這入にうまいやつだ、

○牽頭持

西の國の御家中品川に奢り、翌は立て國もとへゆかるゝまで、牽頭もちには一分もくれず、大かた見送りに行たなら、いとま乞の時はづまれうと思ひ、四五人言合せてのおくり、六郷の萬年屋でも沙汰なく、駕にのらるゝ時貌を見て居れば、みなさらばじや隨分まめでゐやれと、駕の戸ぴつしやり立て行跡見送り、

「誰がまめでゐるものだ、

○名所知

わしは歌まくら修行して國々をめぐり、名所舊跡どこでも問ふて見さつしやい、しらぬ所はない、「それはうら山しい、そんなら問ひませう、まづ嵯峨とやらはどんな所でござる、「嵯峨といふてはみやこ第一の風景、大井川とて石の流る川もあり、向ふは金谷、こちらは島田、繪の名所でござる、「八つ橋のかきつばたは、「それはなり平の晝めし喰れたところ、花の時分はいやはや見事な事さ、「よし澤のあやめは、「澤中一面のあやめ、どうもいわれた所じやござらぬ、「松しまの茂平治は、「是がまた大きな禪寺じや、

○試合

先生このあひだ試合に參つた者がござりましたげな、さだめて手ひどいめにあわせて遣はされましつら、「なるほどいやもうまだ〳〵至極未熟な劔術、立合ねばおくれたなど丶ぞんずるがいやさに、おとなげないとおしかりでござらうなれど立合ました、敵しなへをふりあげ眞一もんじに打てまいる所、さそくのはやわざは愛じや、「どうなされました、「額でうけた、

○上り兜

ちんぼうの看板たてる幟かなど、人にもいわ丶れたむすこ、その母のろまの玉子をのむと夢見て孕しゆへにや、廿越へても古今のぬけ作、四月のはじめから二階へ引こもつて、何をするかしれず、五月の節句前に出て來て、先途からちつとばかり細工をいたしました、これ賣て小遣ひ錢にでもなされませと、うつくしいきれではりぬいた上りかぶと、二親もきもをつぶし、人にもふいちやうし、日頃は足らぬやつとおもふていたが、大きな相違とほめちぎる親馬鹿、その上りかぶとも時節の物とて早速に賣れ、思ひ寄らぬ錢もうけ、聞く人舌を振ひし、又八月のはじめから二階ごもり、今度は何が出來るぞとおもふて居た所、九月節句前に出て來て、先途からこしらへました物おめにかけませうとの事、今度は何じや早ふ見たいといふに、出した所又あがりかぶと、

○炮碌賣

霞が關の辻番の前で、ほうろく賣仲間に逢ひ、國ものとてしみ〳〵との咄し、久しうてあふた、まづ貴様も

まめでめでたい、時にどうぞ酒でも買てふるまいたいが、爰はおやしきの中酒屋は遠しと、少し案る身ありてうなづき、ほうろくを一つ手にとると、辻番から「そこをごみにせまいぞ、

○料理指南所

料理指南所と看板かけて、小ぎれゐな格子づくり、弟子にならんと朝とく來て案内乞へば、髭むじや〳〵とはへた佛頂面のおとこ取次に出て、まだ休んででごんす、馬鹿々々しい早いござりやうだ、晝過にごんせと懷手であしらい、一先づかへり、八つ時分に來て案内乞へば、かのにくていなやつ、ふせう〳〵の取つぎ、內へ通れば亭主出、ようこそ御出なされました、料理御執心で御ざらば、御相談申あげませうといふに、「それは近頃忝うござります、扨こなたのお取次は、いぢのわるそうな人、山下次郎三と來て居るにくてい、あれは御家來でござりますか、「ヱヽ、あれかへあれは手前のからしかき、

○翠玉

鎗もち角內、疝氣で翠玉の大きくなる事十塚のごとし、本道外科手を盡せども直らず、外科もことより長崎流にて、今迄かゝつた事直さぬといふ事なし、是を直さねば名代がすたる、今日は仕かたありとて見舞、本道も來合せ見て居れば、角內を庭へおろし、耳くじりぬきはなして、首中にうちおとせば、切くちよりながるゝ血にまじり、無間の鐘の手水鉢のごとく、吹出す水につれ、件のきん玉次第々々にちゞみ、不斷の通りに成たり、外科鼻を高くし、「なんと奇妙かといへば、本道感心し「いやはやきめう〳〵、しかしちつとあらりやうじだ、

○唐樣

唐樣書の客有てかきちらさるゝ、最中、鳶の者來て、おらも一番書て貰いたいと出しやばり、もしへわしにも一枚書てくだんせ、つがもないまたあまくちな事はいやです、何ぞがうきな事が書て貰ひたうごんすといふに、「安い事何ぞ好んだがよい、詩がよかろふか語がよからうかといわるれば、「四の五のと小さい目は氣がごんせぬ、ちつとふさ〳〵しいが百千萬と書て下んせ「ヲツト合點じやと筆をてんじ、百の字の横の一畫書かるゝと、「イヨ、ひやの字出來やした、

○薪屋

神田川出水に、筋違の薪こと〲く流れるを、柳原の乞食川端へ出て居て、鳶口にひつかけながるゝ薪を引あぐれば、たちまち乞食が薪屋になり、薪屋が乞食に成た、

○物知

時頼記の序に、將軍宣下といふ事が書てある、あれはどんな事じや、「あれはかの源の頼朝公などが、金のゑぼしを召してまん中にござると、和田北條畠山そのほかの大名、ゑぼし素袍でならび、まん中の頼朝公が將軍宣下とおつしやると、みんなが一ごに、「さんげ〱六こんしやう〲、

○尻端折

竹之丞寺の開帳まいり、非番連の二人兩國橋わたりかゝつた所、橋の中ほどで喧嘩、そりやぬいたと大騒ぎ、されども侍が來かゝつて、跡へとてはもどられまじ、まづずるけたなりでは濟ぬとかい〲しく、貴様も尻をはしよつた、おれもはしよると七圖までひつからげ、脇ざし横たへ刀はぐいとおとしざし、腕まくりに身ごしらへ、サア貴様はよしか、「能うござる、よくば早く大橋へ廻りませう、

○座頭

座頭晝中錢湯へ來て、御免なされませう冷物でござりますと呼わり、風呂へ這入たところ、ふろの中には人ひとりも居ず、座頭しばらくして、「まづかう云たものさ、

○雷

けふはどうやらふりさうな空と、案じながらの暑氣見まひ、御かしらの屋敷近くへ來ると、大つぶな雨ばらつき出し、門に至ればぴかりと光つて鳴り出す、雷門をかけて這入ながらの觀音經、うんらいぐうせいでんと唱へ、下座敷の際へ行と、取つぎおりて手をつく、かみなりきびしく鳴に、ごうばくちうだいうととなへながら、死身に成てひれふせば、取次聞て、廣間の帳附の方へ、ふりむき、がうばく十太夫様、

○喜勢留

客二人あり、たばこ盆一ツ出す、きせる壹本あり、一人の客そのきせるをとり、吹て見るに通らず、小よりをして吸口に通し、吹どもまた通らず、側の一人其きせる早くよこしやれといふ、ハテせわしないと云ながら、いろ〱して通せど通らず、側の客腹をたち、

はやくよこしやれとひつたくりにかゝる、「やれせわしないさわたさねば、亭主見かねて勝手のかたをのぞき、「コリヤ、たれぞあなたへも一本通らぬきせるを持てあげろ、

○豆腐屋

きれいな裏に豆腐屋あり、まい朝早起して、夫婦名だいのもろかせぎ、しかるに起た時分、一朝もかゝさずに朝まつりごと、たれいふとなしぱつとした評判、ちら〳〵覗く人もたへぬ様に成ける、或朝路次口明六ツ時分、かの朝まつりごと見に来たもの大勢おち合、ぞや〳〵と這入りかゝつた所、おなじ裏借屋の牢人、原減右衛門用事有て出かゝり、朱鞘の大小紙子羽織、編笠手に提、人物くさく、コリヤ、各大勢づれ何用有て、早朝に此裏へは這入らるゝぞと、小むづかしく問れてみな、「イヤ、ちとこの裏に見ます物がござりまして、アイまいりましたで、ナフござりますと、みんなが顔を見あわせていへば、牢人のみこみ、「ムヽ、それかそりやもう済んだ、

○角力場

釋迦が嶽に仁王堂と来ては、近年にない大入札を買ても這入られぬ、木戸の込合仕かたなければ、裏へ廻り囲をやぶり、犬のやうに這て入りかゝつた所、内に居る世話やき見つけ、コリヤ〳〵そこから這入る所じやないと、あたまを取ておしもどされ、得這入らず、しばらく工夫して、今度は尻から這入かゝつた所、又内の世話やき見付、コリヤそこから出る所じやないと、帯をつかんで引ずりこんだ、

○十字

悔みにきても寄かゝるは傾城のつね、まして無心いふときのしなやか、偶のことなりや生返辞にもならず、のみ込んだとの安うけ合して、またいくらほど入るときけば、それはかほを合せてはいわれんしんといふに、そんならおれが背中へ指でかき給へと、大肌ぬぎに成て背中さし向れば、そんならかきんすによと、まづ一の字を、人さしゆびにてしつかりかく、よしがつてんだとうなづく所、十の字の竪の畫、ちりげの所へ指をつけると、客身をひいて、ヲツトそこには灸がある、

○將棊

せうぎといふ物人のさすに、さしてさゝれぬ事はな

いはづ、さして見よふと駒をむしやうにならべ、やたらにさし、さてしばらくよどみ、いかうむづかしく成た、御手に何、「王が二まい、「ホヽヲいやな物の、

○大石

裡店へ引越して來た牢人、世帯道具はさつぱりとなく、ひとつ竈と飯焚くほうろく一つばかり、見舞に來る者へ何もないときつい味噌、總たい武士たるもの、衣類諸道具持ぬ物でござる、つね自由過ると、さあ軍といふた時、身が倦んで困る、そこで我らはなにも持ぬです、「それは聞へましたが、この上り口の大石は、ふみ石とも見へませぬ、何でござります、「それか、それは寒い時もちあげるのじや、

○唐相撲

長崎の唐人やしきへあそびに行た時、日本人と見ると、こくうにすまふを取たがる、もとより好の事なれば、取くんだところ、なんの手もなく唐人になげられ、目をまわして起あがらねば、唐人肝を潰し、人參をしたゝかほうばらせ、水をのませければ、漸氣がつき見たりや、口にくゝんだは人參、おもひもよらぬ金をもふけ、味をしめてまたすまふはいやかとすゝめる身ぶり、唐人うれしがつて立合、組かくまぬにわざと負て目を廻したふり、唐人袋から何やら出すと見へしが、こんどはしたゝかな灸をすへた、

○菜うり

本所から來る菜うりに、何んとまゝの紅葉はもふよいかと聞ば、「ナアニ、もみぢはもふ赤くなりました、

○芳町

鳶の者はじめて野郎を買、床になり若衆に向つて、「モシ、ちつと大屋へでもあづけやせうか、

○大錢

四文錢の通用日々に重寶、たしかに今すたつて居る大錢も、近いうちに通用するであらう、其時は太い緡が急になくてはならぬ、今からこしらへてためて設ると、ふといさしをない溜るを、隣のやつ見かじり、あいつに負ずおれも設けやうと、やがて柳原へ行、古かねの中の鞘と小刀を買、ふる風ろしきにつゝんでひつしよい、朝つぱらから町中を、「錢箱の穴をひろげう、

○借雪隱

不忍辨才天の開帳、參詣ぐんじゆ、此島はむさと小便

のならぬ不自由、そこを見込んで茶屋の裏をかり、かし雪隱、わけて女中がたの用が足り、一人前五文づゝときわめ、おびたゞしい錢もふけ、是よい思ひ付、おれも借雪隱と地面の相談、女房異見して、最はや一軒出來た跡、今建たとてはやらぬは見へてある、ひらによしにさつしやれといへども聞かず、建た日からの大入、今まではやつた隣の雪隱へは、行人怪我に一人もなく、こつちばかりの繁昌、女房不審しどうしてこつちばかりへ人が來ますと聞ば、亭主高慢鼻に顯れ、なんと見たか、あれはそのはづ、隣の雪隱へは一日おれが這入て居る、

○九郎助

傾城の遠い思案も遠からず、隨分ぬけめない女髙、駒下駄鳴らし新町のいなり樣へまいり、やゝ一時慾心滿々の願ひ事、内陣の戶帳さつとひらき、稻荷の神體あらわれ給へば、神も納受しなんしたどうれしく、何んと云なんすと見て居れば、神體無言にしてじろりと貌を見やり給へ、前なる散錢箱ひつからゐて御這入、

○夜發蕎麥

夜發蕎麥一つ辻へ集り、さて總兵衞と十兵衞、米が高くて蕎麥きりも合ぬ〳〵と云たが、夕部から內へもどらぬといふ事じや、出奔したか又は狐にでもばやかされてどこぞに居るか、何にもせい可愛いこつた、どうであり〳〵夜道、手ン〴〵によんで尋てやらうじやあるまいか、いかにもそれがよかろふと、面々箱をかついで立わかれ、聲はり上げて、「十兵衞やそうべい、高にして、「そばきり〳〵聲

○藥鑵

やくわんながれて釜山海の湊へ寄る、唐人見つけ、替つた物がながれて來たと取揚、大勢よつて、是はまあ何であらふと評議まち〳〵、中でも智惠のあるやつがいふは、これはどうしても日本の道具じや、その中にもこのかつかうおほかた兜であらう、それにちがひはあるまひといふに、側からかぶとにしては口が附てある、しかも長く附いて居る、是はまたどうした物じやとの不審、ハテ、㧞しれた事、これをかぶるど耳がふさがる、その時脇から物をいふその口さ、「なるほどそれでよめた、しかしそんなら兩方にありそうなもの、こつちらにはない、こりやどうであらう、

「それもしれた事、寐ころぶ方さ、

○伊勢物語

母親仁に向かひ、おはなもよほど手があがりました、最う百人一首でもござらぬ、ちと伊勢物語でもよませたらようござらう、親仁うなづき、なるほどそれよかろう、どうで伊勢へはまいられず、

○通小町

或お公家さまの御姫様に、おもひ〳〵の文つけたれば、今宵より百夜通ふて、夜ごとにかよふたしるし、車の榻にきずつけな、百夜過なばかならず逢んとの返事うれしく、雨のふる夜も風の夜も、かよひ〳〵て九十九夜め、車の榻へきずをつけ、立かへらんとせし所へ、こしもと出て袖をひかへ、お姫様のおつしやりまする、おかよひなされて九十九夜、一夜ばかりはまけにしてあげませうほどに、わたくしにつれまして、お寐間へすぐにまいれとの事といへば、この男たゞいやはや〳〵とのしりごみ、「ナゼそのやうにおつしやりますといへば、「アイ、わたくしは日雇でござります、



〇朝鮮人

朝鮮人歸國の時、友だちが取卷て、なんと日本ではさぞめづらしい事が有たらう、まづ何が其内にもかわつた事じやぞと問ふに、いやはや何もかもめづらしい事ばかりで有た、中にもめづらしいは、鞠といふ物がある、けだものじや、まづ庭へ垣をこしらへ、その垣の内へ人が四人這入と、かの鞠めが出て、無性に人の足へ喰らひつく所を、食付かれまいと蹴とばすと、叉向ふの者の足へ食付く、愛でも蹴る、かくする事暫らく有て、どふした拍子やら中の一人が足許へ來る所、はづして踏殺したりや、屁をひつて死んだ、

〇比丘尼

足輕の心和らぐ前句附、その前句より比丘尼には目が細ふなつて、菖蒲染華をぐすとぬぎかへ、ぬつと二階へあがり、まてどくらせど敵の來ぬに退屈し、呼んとせしが、名を聞ねば名も呼れず、樣とはゐんぎんなり、殿ではかたし、坊主あたまからおもひつき、二階より覗いて、はやう來たまへびくに老、

〇押込

押込ども相談して、とかく小さい所はよい仕事にならずと、越後屋へ這入にきわめ、人にきず附ては、呉ふく物などよごれてはせにならず、兎角此方大せいで手はづをよくし、出るほどのやつ縛り、猿轡をはめ柱へくゝしつけ、扨心次第にごふく物持出すべしとて這入た所、ソリヤおしこみといふよりかけて出る手代、判とり、下男、出るもしばり出るもしばり、片はし猿ぐつわをはめ、柱へくゝしけるに、叉跡からも出る、しばれば叉出る、しばれば出る、どうもしばりつくされず、そのうちに夜が明て烏がかあ〳〵、

〇小鼓

息子の小つゞみ、親仁以之外の立腹、友達へ逢ふても其小言、友だちも氣のどくがり、いやそのやうにおつしやりますな、主のつゞみはいかう器用で、それしやも我を折ます、まづちとあの音をおきゝなされと、むすこをよび出し、さあ〳〵なんぞみじかい事、おやぢ樣におきかせ申たい、早ふはじめ給へといふに、鼓とりあげしらべた音色、いか樣の妙音、親父も肝をつぶし見て居れば、息子鼓を肩よりおろし、其かわへくひさき紙をして張らんとする時、親父、「一まいではれ一まいで張れ、

○野等息子

いがみの權と來て居る息子、夜更てかへり、火もきへてまつくらやみ、親仁のあたまに蹴つまづき、ハア勿躰ないといふ聲、母聞つけ、コレおやぢどの、こちのむすこもこゝろが直つたか、こなたのあたまにけつまづき、もつたいないといひました、息子聞て、「ナアニおれはめしつぎかとおもつた、

○糞

古人の糞を集める奴あり、執心の客來つて一覧を乞ふ、亭主よろこびて、香箱やうの物いくらともなく取出し見するに、一つ〳〵に見て、「扨々おどろき入ました、めづらしい糞どもでござります、せつ者もとし久しう好きまして、大概は目利もいたしまする、ちとあてゝ見ませうかといへば、それはたのもしい義で御座ります、せつ者も修行の爲、いざお目利を承りましたい、「先此くそは時代凡六七百年、しかし勇ある大將のくそ、しかし旅にくるしんだ相がござれば、大かた源のよしつねの糞でござらうやとぞんじます、「なるほど義經のくそ、御目利いやはや神のごとくでござります、「扨このくそは、侍かとぞんずれば坊主くさい所も見へ、是もつわものゝくそ、時代もよしつねと同時代と見へますれば、これはもし武藏坊辨慶が糞ではござりませぬ歟、「辨慶で御座ります、御功者の程感心いたしました、いざ〳〵迚もの事其次も承りましたい、「ハヽア、これはむづかしい、ちとしれかねます、「それは此方でもいろ〳〵吟味いたしまするがしれませぬ、「いやしれぬと申事はないはづ、これも辨慶と同じ事で、出家と武士とのひりませに見へまするが、いかう位が有てうづ高うござります、少し削て見ましてもくるしうござりますまいかな、「そつともくるしうござりませぬ、おけづりなされませ、然らばと削り、扨こそしれました、是は最明寺の糞でござります、「してまたそれは何でしれました、「ハテ、削つた所にちら〳〵粟が見へます、下司咄屎果以二古語一先此卷是切、

稿話 鹿の子餅終

鹿子餅後篇譚囊序

落たるを拾はざるは、聖の御代のならはし、それが中にも拾つてくゐしからぬは譚しのみ、兎角して嚢ひとつに滿つゝ號てこれを譚囊といふ事タンノウ、

初音の時鳥ころ

鹿子餅後篇譚囊

○猿

一つ長屋左次兵衛妻、乍レ恐申上候、私夫左次兵衛、當春ふと罷出、四國を廻り猿に成罷歸り候處、悴と晝夜中あしく、難儀仕候との訴へ、代官聞かせられ、夫は悴め不屆千萬、たとへ猿に成つたればとて、もとが親なれば大切にいたすべき事と、悴を御呼出し御吟味の處、中のわるいも道理、佐次兵衛が留守の內、むすこが侠に成た、

○見せ物

このごろ南國に、とんだれいほうといふ見せものが出たげな、大入との評判、お身は見たか、「ウヽ、見たみんなさいくものだつた、八文では安い、ゑゝかんぶつ物だ、「それでも聞たところがまつかうくさい、外の見世物のやうにはやしかたはあるまい、「ある〳〵あたりの芝居でたいこをたゝき立ると、三ン絃のみだがヒウヲ〳〵、

○あまいだ

うらだなにかた法華の夫婦あり、子の虎松を呼で、これ〳〵このごろあまいだといふ飴が來る、あれをかならず買ふな、おらがしうしではならぬ、もし口へ入れても直にほつけ出せ、

○禁酒

久しく見舞わぬ友達の所へ見舞た所、これは忝いともてなし、それ御盃を出せと女房へのいひつけ、きやつ元からしわんぼうだが、何を思ひ出したかち走ぶりと心に不審、幸と禁酒なれば、「イヤモウ、その世話よしにしてください、わしはちつと願が有て、きびしい禁酒だと聞、「なに禁酒だ、そんならなを盃を出せ、

○地藏

因果地藏、くわんをんへ夜ばなしにござつて、さて今度も又大あたり、嘸御悅びでござりませう、「貴僧も近年ははやつてゑいわさ、「さればでござります、私も元はさいのかはらの子どもの世話ばかりでござりましたを、いつの間にかゐんぐわといふ名をつけて、いろ〳〵な願ひをいふてまいりますにはこまります、剩城木屋の丈八めまで、いけもせぬつらで色事の願、とんだことにくろうを致ます、なんのゐんぐわだやら、

○ともよ

ともよが事は力婦傳にくわし、それを何人やらん狂歌に、

畠から出たとはむぐらもちならん
ことにをんなのちから持とは

男にさへ力は稀なるを女で大力、何さまむかしの木曾殿の妾、巴山吹などにおとらざるまじ、そこでともよは巴のひゞき、似かよひたるでついた名、山吹は損じやといふ、側からいや損でない、此中淺くさでとも代が芝居大入、朝から小便に行ひまさへなかつた、晝過に成てともよ雪隱へ行、半時計り出ず、見物は一ぱい這入退屈のてい、世話やきこらへかねてたいこをたゝき出すと、ともよもせいて雪ちんを出た所、いちかりまたでやう〳〵力もちをした、跡できけば其時はともよなまぶき、

○若殿

御世つぎの若殿御誕生にて、奥のざゝめき表の恐悅、一國歡の眉をひらき、御宮まいりの御規式もすらすらと濟せられ、けふは御錠口外のおもたる士衆へ御

目見へ仰つけられ、御乳の人抱き奉つて出らるれば、實盛役の奥家老上座にて、皆々あたまを疊へほり込、さんたし奉り見上申て、奥家老申さるゝは、「イヤハヤ、御きれゐな御生れ、そして御丈夫さま、もう少し御笑ひ遊すそうな、これは〳〵とあたまを上げ、憚ながらバア、

○孟宗

親孝行といふものは、日本にはすくないはづ、唐の四百餘州にさへたつた二十四人、其内にも孟宗などは親玉だ、「なぜ、「ハテ雪の中で竹の子をとつて來たはサ、「なあにそりやうそだあらふ、「ほんの事よ、「ほんならさぞ高かつたらう、

○其二

繪などにある、雪ふりに竹の子を掘てゐるが、孟宗とやらか、「ヲヽよ、おのしはまだそれをしらぬか、三つ子でも知つて居る事を、「おれも三つ子の時はおぼへて、四つ子のときから忘れた、

○狼

狼と山犬は、似たやうな物でしれぬ、「これはしたり、お身はそのめきゝをしらぬか、「イヽヤしらぬ、「しらずばおれがおしへてやらう、まづ狼らしいやつが出たら、棒をもつてぶつがゐい、山犬なればにげる、狼なればとびこんでくらゐつく、

○和藤内

國性爺の和藤内は、どうでも日本をしくじつて追出され、唐へ行たやつと見へる、「ソリヤなぜ、「ハテサテ、千里が竹で虎に出合た時、御祓箱を出したはサ、

○附子

親仁様、附子といふ物はきつい物でござります、向ふの私が病氣もふいけぬといゝたとき、人參ばかりでは行ぬと、いしやどのが參附湯を用られましたが、本腹でござります、「ウヽ、ぶしはきつい、渡しでさへ錢を出さぬ、

○新宅

家見に來た客、方々をみて肝をつぶし、てもよい御ふしん、まづ杜長押などがみな檜、釘かくしが五へんくらいのめつき、切目椽で疊もかうらいべり、庭のかゝり總たいのきれいさ、在家にはとんとない、寺のやうだといふを亭主氣にかけ、ざん〳〵不興、茶さへろくにふるまはず、早々に客を返し、はじめて新宅へ來

て、寺のやうだとぬかした、是は祝ひ直さずばなるまいと八助をよび、これ日本橋へ行て、三兩でも五兩でもよいから、鯛を買て來いととりよせ、新らしい臺にのせ、家中を自身持てあるきながら、寺じやあないない〳〵、

○常念佛

すみだ川の常念佛、哀れでどうもいへぬ、本所五ッ目あたりに建たら、哀れそうな物だとたてた所、成ほどしゆせうで評判もよかりし、或日七ッ打ても常念佛の代りが來ず、しやう事なしにいつもの通り申て居た所、やう〳〵七ッ半時分代りが來て、さあ代らうといふ、お身とほうもない、何時だとおもやる、七つに代るはづがもうおしつけ日がくれる、しかたがないからおれが念佛を申てゐた、是がだれだといゝて、申たくて申念佛じやあない、

○雪隱

亭主座鋪の雪隱へ行き、あやまつてしたゝか踏板へたれかけ、女房へ終ぞない事折入ての頼み、どうぞ掃除云付てくりやと云ふて居る所へ、花見歸りの四五人、たゞ今御見舞申すと僕を以てのしらせ、外の事はこまらぬが、此後架はどうしませうと女房の氣の毒がり、亭主仕形があると、雪隱の戸へ張紙、此所大小便無用、

○新宿

新宿の女郎品川の女郎を譏て曰、品川の女郎衆は總たい下卑さ、あれは船頭につき合ふからだのう馬士どの、

○巫女

湯島天神樣の開帳に、神子がよいとの評判行て見た所、評判に違はぬうまさうな半元服、わけて劔の舞のりゝしさ、拔た時やつひしたゝく神樂堂との句も、今日のまへに有て、立まふ姿わすられず、ぶら〳〵戀わづらひ、其中にくさりかたびらを密にあつらへるやうす、氣でも違つたかと二親の氣遣ひ、心安い友達を頼み聞て見れば、ちつとも氣遣ひな事はない、あれを着てぬきみのなかへ飛び込みとるつもりだ、

○暦

吉ぼう替る事もないかと、ぬつと這入て見た所、烏帽子大紋でしやにかまへて居る、「これはどうだときけば、「このごろのおれはまい日こよみの通りにして居

る、けふは大めう日だからこんな形だ、「問へたと云て歸り、又ゐした行て見れば、棕帚をもちうろたへて居る、けふはなんだと聞けば、今日は十方にくれた、

○蕎麥切

御やくそくのそばを申付た、サア〳〵あがれと盞を取て、亭主も少し喰て見、これはどうしたやら、けふのはきついきれやう、せつかく御呼申ておそれ入たといへば、客「どうもいへませぬ、宿ではこれよりきれぬ飯さへ下されます、

○切腹

友達の所へ見舞た所、大肌ぬぎになり、腹へ仙の字を書て居る、貴樣それは何をしやる、亭主「わるい所を見付られた、おれもどうでいけぬから、いつそ腹を切らうとおもふ、しかし廣治が紋の十文字に切るは古いから、めづらしく助五郎に切らふとおもふ、「ナアニ、十文字々々といふが、そうおもふやうに行物ではない、やつぱりざうさもなく門之助にしやれ、

○宿札

刻烟草屋の塵へ仲間來て、谷中三崎といふは爰らでござりますか、「成ほど爰です、「こゝらに淸水藍澤といふ醫者衆がござりますか、「ござる、「どこらでござります、「其向ふがわて、四五軒めの格子づくり、宿札が古くなつて、何んだかよめぬ所がそ、

○風鳥

いつぞや護國寺の開帳で、風鳥といふ物を見たが、あれはおかしな物で、足がなくてゝうござつくりに羽ねのはへたやうな物だ、あれは餌をくふときはどうする、「そこで餌とては喰ぬ、風を餌にして居る、「糞はどうする、「なに糞をするもんだ、屁ばかり〳〵、

○忠臣藏

四方都（よもいち）どうだ、「どうだ所じやござりませぬ、ゆふべもろのふ樣に泊つたら、夜半時分ゑんや樣の御けらい四十七人とやらが、かたきうちにおしこみ大事よ、やう〳〵私もやねへにげて命を助りました、「それはどうも合點がいかぬ、椽の下へにげそうな物を、めくらのざいにやねへにげたとは濟ぬ、「されば、椽の下はみな御家中、

○蜂

今日は天氣もよく亭主庭いぢり、木鋏など出して若葉のしげりを苅こんで居た所、いづくともなく蜂が

飛んで來て、小びんさきをした丶かさして行く、たちまち大きくはれあがり、おびたゞしい痛み、折ふし傍輩來合せ、それには齒くそをつけるが藥たと、うぬが口から齒くそを取て附てやれば、亭主よろこび、扨よいおたしなみでござる、

○因緣

物には因ねんといゝて、いやといわれぬ事が有もんだ、太鼓は馬の皮で張た物だから、かわに成てもたゝかれる、鼓は猿の皮で張た物だから、肩へあがる、「そして大つゝみは脇の下へはさむ、あれは何のかわだ、「あれは鯛の皮だ、

○弔ひ

鳶の者の女房ごねたを、ちつともはやくおつかたづけるかゐいと、寺へ人をたのんでやり、早桶を買、あんまり急いで佛をさかさまに入、是でもよしとはやぬのをかぶせ、あら繩でからげ、寺へもち込みかくと云入れば、まづかう剃をあてんと、弟子坊主桶の蓋を明て見、大きにおどろき和尚へ何やらつぶやく體、和尚も出て來て件の桶を覗て見、けでんの貌、施主に向て、あれは佛が違ひました、此方では弔れませぬ、「ソレハなぜでござります、「さればさ、何だかあれは胸に毛がまつ黑にはへて居て、肩がいかつてふとつて、どうでも首のないすまふとりの死骸さうでござる、

○火事頭巾

蔵りきんだ御家中、むかしの鎧兜は、今の世での火事せうぞくじやと、物人かまわずあつらへられた、四五日たつと、出ねばならぬ方角に火事沙汰、かのせうぞくを取にやつた所、御頭巾は出來ましたが、お羽織が出來ませぬとの斷、頭巾ばかりでもよいととりよせて見た所、五枚しころでそのりつぱどうもいへず、かぶらねばかんにんならぬと引かぶり、窓から首を出してハイハイハイ〳〵、

○魚田

本田銀ぎせるの通り仲か間、四五人連で中の町の茶屋へ來ると、亭主これはどなたもお久しぶり、サアサアまづ一つあがりませ、時に鰹がござります、あれを上げませうといふに、「なんだ鰹、かつをは三月かやう〳〵四月一ぱいの物、五六月に成て一口もくらはれるもんじやあない、「さればさ、さしみは古ふござります所を、魚田にして上ます、「魚田とはおもしろ

い、はやく出し給へといへば、「そりや御らうじませ、めづらしうござりませうが、さあ／＼か丶あ味噌をすれと、さかなを燒にかゝつた時、むすこ手習から歸り、「おらあ晝めしが喰たい、何があると云ふ、「やかましいなにがあるもんだ、そこのめしつぎを出して、ひやめしをくへ、「さいはなんだ、「香の物でくや、「かうの物計りじやいや、あれさつ樣が鰹を燒てゐなさる、しかもみそをつけてやきなさる、おれもあれをくわう、亭主ふり向て、「うぬもおんなじやうに馬鹿をつくせ、

○四文錢

淺草の開帳に、なんぞおもひつきをして錢もうけをしやうと、息子おやぢへ元手二百兩の無心、合點ゆかぬと思ひながら、まづわたした所が、大はやりのよし、なんでもそれはよいこと丶、くわんをんさまへ參り、かへりによつて見た所、みせはおびたゞしい人で、なか／＼よりつかれず、うらから廻つて見れば、むすこさいはいをもち高い所に居れば、革羽折など着た若い者大ぜい、四文錢が三文四文錢が三文、

○雷

雷吉原の二階へ落て、あがらうともがくうちに、雲はれて大ごまりの所へ、若い者來て、おめへ雲がなくつては、どうで天へはのぼられますまい、いつそ女郎衆を上げて御遊びなされませ、「なるほどそうもせう、ひとり見たてゝつれまし來てくりやといへば、のみこみ山と下へおり、盃など出すと、おし付け傾城出ながら、能うお落なんした、

○其二

雷の正體を見たいものだ、どうしたらとらまろふ、「仕方がある、大風呂しきの角々四人で引ばり、おちた時おさへると、なんのこともなくつかまるはサ、是はどうもいへぬといふ內、大夕立雷こくうに鳴て來て落た所、心得たと大ぶろしきを四人で引ぱり、いさいかまわずおつかぶせれば、雲ははれて風呂敷の中でうごく／＼、先づ太皷の撥を出した所、こいつは逃たがる、ふといやつと其ばちをひつたくれば、又こちらへ太皷を出す、それもひつたくり、もう明けて見ようと風呂しきを取れば、中から法華坊主、

○徒つ子

ヲヤ／＼／＼と雪の降た朝、相番の所へ行たに、お心

安いからお通りなされど勝手へ通され、念頭のあいさつ、小藏の事なれば何が羽向たら〲の所へ、いたづらつ子が起て來て、樣がわから雪の中へ小便、その小便での丶字をひよぐれば、客手をついて、「扨も御器用な御手でござります、

○貧乏神

ことしはめづらしう、回向院でびんぼう神の開帳が有との事、方々へ札が出て居る、讀で見たれば、御參詣無之御方え者、此方より御見舞申候、

○探幽

客よしはらへ來て、このぢう品川へ行たが、いやもう女郎がおかしくつてならぬ、床に布袋の畵が懸て有つた、ひようたんの印で守信とあつたから、これはよい探幽だと云たら、女郎が側で、なあに布袋さんだ物をと云たさいへば、傾城たばこをすいながら、ほんにさ、布袋さんの俳名もしらないで、

○助太刀

敵うちの助だちたのまれ、のつぴきならず、明日といふに、いろ〱の支度のうち、赤いふんどしを借りにやる、どこにもないを大ごまり、まだ白なればある、なぜ貴樣は赤いのがのぞみだと聞けば、ハテ、逃る時尻をまくる其折の見へだ、

○中堂

上野の御修ふくも出來上り、正遷座も濟で、おびたゞしいくんじゆ、俠二三人連で中堂を見、よく出來たな、あの中には何が入てある、「あの中にはなやくし樣が入れてある、「ハテもちつとゑい物を入れて置さうな物だ、

○小豆餠

朋友の病氣久しい事、だまつても居られず、ひきの屋へ小豆餠百が取にやり、もたせやつて、暫くして見舞へば、これは忝いとまくらをあげ、さきのもちの禮、「時にまづどうだ、ちつとづ丶もこ丶ろよいかときけば、「イヤモウ、せつしよく閊前、いまの小豆餠も此通と重箱を出す、客蓋を明て見れば、たつた一つ殘てあり、合點行ず、「こりやどうだときけば、「のこりはくつたが、その一つがどうもくへぬ、

○太公望

傳へ聞、太公望は釣をたれてかくれ居たを、周の文王とやらがかぎ出して、金々物にしたとある、おれも釣

をして居たら、よいめに合ふと、毎日川へ出て釣りをすれど、何もかゝらず、たづねてくる者もないに、くたびれた牢人、同じ長屋の權兵衛通りかゝつて見付、またゑい事もござりませぬか、浪人「まい日川にかゝつて釣をすれど、なんのゑい事もないによつて、翌日から山にかゝらうと存る、

○追剝

このごろは世間ぶつさうときゝ、夜など出やらば、隨分用心したが能と云て歸た晩、門を夜更てしきりにたゝく、どちらからと聞けば、晝行た所のやつの聲で、おれだ〳〵といふ、明て見た所眞つ裸、そりや見やれ、それで晝行た時、夜歩行きやらば用心をしやれと云た、どこで剝れた、「どこでも剝れはせぬ、隨分用心をして内から裸で來た、

○願人坊主

はんじ物をひらりとなげ込で行く願人を女房みて、あれは願人のなかでも、むさいきたない形じやといふを、亭主とめて、「これめつたの事をいわぬ物じや、得て弘法樣が人の心を引見るため、きたない形でおあるきなさる、それかもしれぬといへば、願人行ながら、南無三あらわれたと云ふ、亭主おかしく、あいつ太いやつだ、おれがもし弘法樣だもしれぬと云たら、もふ弘法樣になつて、あらわれたとはなんの事だといへば、願人「南無三又あらわれた、

○蓼

旦那樣、また隣から鮓につけて給ますから、蓼を下されと申て參りました、旦那「さてしつこい、きのふも同じ口上で貰ひに來て、けふも來るはあんまりだが、ちつと斗やれとやり、これ久助隣へ行て、蓼に付て食ますから、鮓をちつと下されと云て貰つて來い、

○魔法

おれはこの頃まほうを修行するが、段々手に入て、人を馬などにするはたちまちだよ、「そんならおのしを馬にしてる、何人が馬に成物だ、「とんだ事をいやらう、「こりやおもしろい、そしてどうしてしやるといふ時、前へ廻つて何やらとなへ、あたまから顏へかけ、からだまでなでれば、なるほど馬に成たり、これはひよんなことを云て終馬に成た、これではつまらぬ、もとの人間になをしやうがあるか、それも自由だと、又何やらとなへ、あたまから顏のあたり、そろ

そろなでればもとの人間になる、まづこれで安堵し、扨段々にからだをなで、またぐらの所をなでやうとした時、「そこをばなでずに置てくりやれ、

○左官

左官近所の數寄屋へ行、靜に上ぬりをして居るとき、あわたゞしく同長屋の者が來て、おやかた〳〵大事がある、貴様のかみさまの前へ、へびが這入てどうしても出ぬ、早くかへらつしやいといへど、左官一ゑんさはがず、やつぱり靜に壁をぬつて居る、追々人が來れども、いさゝかおどろくけしきなし、しばらく過て又一人來て、もふかへらつしやるにおよばぬ、今出て行ましたといふをきゝ、左官かべをぬりながら、其はづあのくさゝでは、

○薬賣

雪隱へ行たいを、こらへ〳〵て行く侍、兩國まで來、雪隱を方々さがせども見へず、橋の際に薬うり、色青さめて荷ひの棒にこしをかけて居たるまゝ、爰らにせつちんはないかときく、薬うり、「わしもたづねますがござりませぬ、「そんならお身もたづねるか、たづねるものがなぜぢつとして居やる、薬うり「立てば出ます、

○三人一座

三人で三歩なくなる悪智を出した友だち寄合、此中の初會はおもしろかつた、今夜裏に行うじやないか、「づいぶん氣ありだが、今夜行と花が入る、「ヲットそれはおれが所にある、是をやる其かはり、引ばりにして三人でやるからは、いつでもゑい五匁づゝ、二人ながらおれが所へよこしやれ、がつてんだと飛ぶがごとくに行、二階へ上れば、例のらうそく酒さかな出ると、傾城たちも早く來て、また初會とは格別、わかい者も盃持て、旦那上げませうと云ふを、一つのみやれとひらりとはづめば、側に居たやつも口を出して、一つのみやれ、角に居たやつものび上つて、一つのみやれ、

○俳名

先生、わたくしも俳名がなくては、通らしうござりませぬ、何ぞ名をつけて下さりませ、「せうちした、何ぞあらうとの事、二三日過て行て聞けば、「ヲゝ書て置た、そのうちで氣に入たをついたがよいと、唐帋へ書た物を出され、その類弁とあるは詩經の字、丹鳥とは

文選の字、ほたるをもよむ、螢や雪をあつめて、學問をした故事もあれば、それなどが能からう、仕廻のは文町、それはなにゝもない、そうして熟字でもないが、まづ書て置た、「どれもよさそうでござります、其内文町がよさそうでござります、まづ申して申ませう、文町坊やぶんてうぼう、文町さんやぶんてうさん、アイ文町にいたしませう、

○麻疹

どうだ八兵衛久しく逢ぬ、かはる事もないか、「かはる事の段か、去年はしかで總領むすこをやらかした、なかつさへもなくして、あげくのはてに、いつち仕廻のあまめまでやつてのけた、子がみんななくなつて、おやばかりのこつて、いもうりのはんだいのやうに成た、

○鰹

郭公の初音を、聞たのきかぬとのはなしの中へ出て、おらあきのふ鰹のはつねを聞た、「十方もない事をいやる、何鰹が鳴く物だ、「それでもきのふ初直が一貫五百だと云た、

○料理

五郎夕部ノヤ二數様の所へ行たが、とんだふるまひよ、「うまい物が有たか、「さま〴〵の物が出たが、平皿が强氣にむまかつた、「何だ、「まづがんだかかもだかなんでも鳥よ、そして松たけナせりナ長いもナ、もふ一トいろあつたツけ、ヲヽそれよはいとりもち、

○繪圖

明て十五のお姫様、來年は早々去るおれき〳〵へ御こし入との事なるに、大切のおまへえ何やらお出來物が出來たとて、御くらうがり、御側の女中もひそひそ氣にして、御外料しゆに御見せ遊ばせと申せど、いかな〳〵御合點のないにこまり、お乳母どのあまり氣遣ひ、そんならわたくしが繪にかきませうから、おでき物の遊ばした所を、印し付ておみせ遊ばせと、おうばどのはじめての繪ぶ器用に書きらし、毛を書たるをおひめさま御らうじ、わたしにはまだそんな物はないと仰らるれば、おうばどのまじめになり、それでもこれをかゝねは、上下がしれませぬ、

○盗人

盗人二人、背より樋合に忍んで居けるが、久しいうち下冷して、一人の盗人屁を一つひつたり、今一人の盗

人、耳少し遠かりけるが、いかゞしてか今の屁の音をきゝかじり、今のはなんだと小聲にきく、「今のは屁だと小聲に答ふ、聾なれば聞つけずに、「今のは何だときく、「ハテサテ屁だと云ふにといふ、まだ聞入れず、おし返して、「今のは何んだよときく、めんどうに成り、われを忘れ大聲にて、「屁だといふに、

〇紋傳

紋所には一つ〳〵傳がある、まづ巴は、唐で眉間尺の首が、釜の中で王の首と友だちの首とが、ぐる〳〵まはつた所だ、「ハテナかたばみはへ、「あれは眉間尺の屁だ、

〇夢

一生は大夢のごとし、是非の堺を論ずべからずと悟て見ても、唯はなれがたきは慾心なり、しかし下司のらくは寐らくと、寐た所おもしろい夢、淺草へまいり、吉原へ行かふとどてへかゝつた所、財布が落てある、人も見ぬゆへ拾てそつと明けて見れば、百兩ばかりの小判、うれしく内へ持てかへり、置所にこまり、庭のすみを掘てうめ上へしたゝかくそをたれ、これでは誰もしるまいとおちつくと、夢はさめて最ら夜明け、金は夢で有つたか、屎は本で寐所中ひりくるみ畢ぬ、

鹿子餅後篇譚囊終

跋

先衆見はしたる鹿の子餅も、軸は屎にておさめたり、其吉例もて又屁　屎を以てす、一帖見る人屎のごとくとわらはむ、笑はゞわらへ、此方屁とも存せぬ、

馬場氏

雲壺

明和九年壬辰正月吉日

本石町四丁目大横町
堀野屋仁兵衛

堀留町二丁目
和泉屋藤吉

下谷御成道唐人飴横町
紙屋德八

高笑序

彡甫先生纂ニ述當世新話一、名曰ニ高笑一、廼命ニ序於余一、余辭曰、拜民素幣許曩讃之、先生曰、勿ニ馬鹿道ニ而不レ可、因作ニ之序ニ曰、高者何、高聲也、笑者何、捧レ腹也、夫高聲而捧レ腹、則男子屁々如也、婦人屁々如也、類々屁々、天地萬物之情可レ見矣、今彡甫先生所レ著、足レ使ニ世之男女類々屁々上、則名曰ニ高聲ニ者、不ニ亦大之蹴鞠一乎、書叙曰、誼ー伯仲ー伯作ニ典寶一、雖ニ則素屁之鄕ニ乎、仲印不レ删レ之、余之序ニ茲編一、蓋竊比ニ於彼親王ニ者焉乎爾、

丙申六月

陳奮翰撰

高笑ひ

○高慢

大根ばたけの地廻りの咄しに、今度さかい町へ見世物に出た友世は、腹の上へ臼を乘る、きつい事と自慢するを、吉原の地廻り、何さ〳〵松葉やの瀨川などは、一二千兩三千兩の屋敷をさへのせる、

○囃子方

笛吹がいふ、拙者などは役を仕舞歸るじぶん、笛を懷中し、寒夜にはふところ手してごふもいへませぬ、太皷打、イヤ拙者もさして道具が邪魔にも成ませぬ、先調をはづし、其調ですぐに革を結び、撥を通して肩にかけます、「胴は、「ころがして、

○勘略

貴殿は苦勞して咄を拵らさ有が、きつい損じや、咄本がいろ〳〵出て有、「イヤ〳〵德じや、「ナゼ、「本屋のは錢が出ます、

○買出し

木曾の山家へ材木買出しに行さて、旅宿に泊りしに、

追立の樣成風除の繪に、浪の中に槙の焚さしのやう成もの、御亭主あの繪は何でござる、「ハテ江戸衆があれを知らしやらぬとは、夫でもしれませぬ、「あれは鰹節といふ肴さ、

○挨拶

番頭どの晩には遊びに行ふ、ばんは旦那が留守じや、そんならあすのばん、あすは勘定日だ、そんならあさつて、そのよに出ると蕩をうつ、

○湯屋

今うめたに又たゝく、釜屋の三介、たつた今うめました、それでもうめろ、又うめる、又たゝく、あんまり度々ゆへ、ていしゆやがてはいり、素人衆にはあつい、

○初心

二人連にて北州へ行、連の發明にてすごく面白く遊び、二三日過て裏に行といふ、連當分は出る事はならぬと云ふ、是非なくひとり行て歸り、連のところへ行ければ、連がいふ、裏だによつて肴が出よふ、一分やりやれといふたがやつたか、「いんにややらぬ、「ナゼ名代か、いんにや、若ものか代りか、いんにや、せんどのさ、ハテ肴が出る筈だが、何も出なんだか菓子が出た、

○焔魔

淺草のゑんま、正月も十六日に降られ、又七月もふられ、どふも仕方なく觀音へ金を借に行、觀音あい給ひ、金が何ほど入ます、「三十兩かして下され、成程三十兩なら貸てもやらふが、なす時は貴さまはどんなかほでなさつしやる、

○兩國

此中兩國へいたがきついものさ、人がねからねエさむしい事よ、其はづさ、ひるま大かめが出る、

○野がけ

去御大名の若殿樣、御供あまた召つれられ、野がけに御出遊され、きうに日にてり上り暑く成ければ、若との笠を〳〵、早く〳〵と御意遊ばされ、にわかに有合ねば、御供のしうも大きにこまり廻るとき、秋田城之介共いふべき御側、ト仕形をして御頰かぶり、

○醫者

よく所かへをする醫者あり、小田原町にて風と行逢、おまへは今の御名は何と申ます、「今では鈴木鯛庵、又其後吉原の土手であい、「おまへはまた爰に御出な

されますか、今のお名は何と申ます、沖奈三情、

○拾物

鯡とうなぎ啗しをして居る所へ、わきざしの引はたを落して行、うなぎひろいしをたこおれにくりやれと云、「おぬしは何にする、「股引に、「とんだ事を云ふ者だ、八本の足を一本計り入てもつまるまい、そして御ぬしは又何にする、「蒲焼の時の火事羽をり、

○新無間

盗人女郎買に行、歸りに何ぞぬすまんと心懸、小きかなだらいの有しを、こそと羽をりの下へ入れて出る、女郎門へ送て出、「よふ來なんしたとせなかを一つたたくと、ぐわんとなる、ヲヽコハ何でありんすへ、盗人「逢てわかるゝ鐘の聲だ、

○道心

表を道心坊が通るを見て、内義扨々こぎたない坊主じやといふ、「主めつたな事を云ふな、弘法様だもしれぬといふを聞、坊主立どまり「なむ三顯われたといふ、「主扨も〳〵ふとい坊主だ、弘法さまだもしらぬと云ふたりや、顯われたとぬかしたといわれ、坊主「又顯はれた、

○息子

硯箱と脇ざしを持て、あわたゞ敷二かいへ上る、親父のぞいて見れば、腹へ十文字に墨をする、親父、何たわけをすると咎めければ、「何をかくしませふ、私がなじみの女郎が二百兩で今度請出されます、それがあまり殘念さに、切そこなわぬやうにすみをして切腹致しますといふ、「たわけ者めが、それしきな事に死ぬことがある物か、二百兩くれるからわれ請出せと百兩なげ出す、「今百兩なければ成ませぬといふ、「あとは晩でもやろうから、まづ竪の棒一本消てをけ、

○店越

きほひ裏店へ引越、店廻りをしける、隣に浪人居られしが、此人はなはだ大へい成あいさつ、きほひ以の外はらをたてども、引こすと早々けんくわもならず、しばらく居なじみ、大家の所へ行、もし大家さん、隣の浪人殿あふへいな人ゆへ、長屋の者が腹を立て居ます、あのやうな人を置ては、御まへの御ために成ませぬから、早々店を御たてなされたらよふ御座りませふといふ、「大家はて儘にしてをかつしやれ、詞でも

大へいにいわねば、乞食とまがひます、

○宥經

法花宗と淨土宗と一同に所作をくるに、とかく法花宗の方が數とりが早く廻る、はてふしぎな事と思ひ、法花宗にたづねたれば、法花「まづ貴樣はどうくらしやると問ふ、淨土「わしらはなむあみだ佛〳〵とくりますといふ、法花「それで遲ひ、わしらは南無妙法蓮華經と一つとなへ、夫から跡は同々々と云ます、

○淺草

江戸を一向しらぬもの兩人して、なんと飛鳥山は定めて最中であろふと云ふ、一「アイ飛鳥山の花は日本一じやといふ、一「淺草はどうであろふといふ、一「此男淺草をしらねば挨拶にこまり、淺草は死んだといふ、一「ハテおしい角力を殺した、

○格子

天狗吉原へ行、兎角との見世を覗て見ても、格子へ鼻がつかへてろくに見へず、是非なく格子の間へ鼻を入ると禿が見付、「モシ𢈘相な、爰は小用所では有んせん、

○會合

三人寄て一人がいふ、扨々おれは珍らしひ火事に逢ふた鱗形の、「そりやだうして、「深川の三角やしきでといふたれば、「イヤ〳〵まだ〳〵おれはお花ごまと云ふ火事にあいました、それは何國で、京の六角堂の飛火で、殘りの男「それは珍らしふない、わしは輪違の火事に逢ふた、「こりや珍らしひどふして、「丸やけに二度、

○鷄

つんぼう春さき庭を詠めて居しが、にはとり時をつくるを見て、人をまねき、いかさま永い日でござる、鷄さへ退屈したかあくびをします、

○地藏

田舍の地藏堂から火を出し、村中半分燒ければ、住寺地藏に向ひ、外の火事をもけのがして下さり、うらのおまへが手前から火を出すと申は、扨々情なきなされ方と恨らみを云へば、地藏「かふ成ては地藏では行ぬ、土藏を賴め、

○口上

頃日隣屋敷では能く口上を云ふ家來を抱たげな、何と聞に行まいかと、二三人云合せ行ければ、コレハコ

レハよふ御出、さだめて家來が事を御聞及御出有べし、幸ひ使に遣したれば、追付歸つて返事申でござらふといふ所へ、家來歸り云ふ樣、よふ御使を下されまする、仰下されまする通り、段々冷氣におもむきまする、彌御別條もござりませいで、目出度存ます、今晩は新そばとござつて、私まで召呼れ忝ふ存まする、それへ參つてお禮を申ませふと定めておつしやるでござりませふが、今日はおるすで御座ります、

○古道具屋

盜人が道具やの見世へ來て、大小を盜でさし一さんに欠出すを、隣のてい主見付知らせければ、道具や追かけ行、しばらく過てすご〴〵と歸る、隣のてい主、どろぼうは逃のびましたかと云ふ、「イヱ〳〵二三町で追付ました、先も侍めつたな事はいわれませぬ、

○醫師

下手な醫師どの病家から歸るとさじを拜む、女房ふしぎにおもひ、何ゆへ拜み給ふといふ、はて馬鹿な事をいわつしやる、是がなければとふに解死人に成ます、

○幽靈

ばくちにまけ丸裸に成て歸る、女房は袷一つ着て居しが、引ほどき裏を夫、表をわか着ながら、モウばくちをやめて下され、此寒いに單物一つでどふ命がつゞきましやう、若こゞへて死ばわしが幽靈に成て出ます、「何きものもなくて、「はて此引ときを着て、「はてびんぼうなゆうれい、そして何といふ、「アヽラ裏ほしやナア、

○畫

鯨の繪を書て居るを見て、私にも書てくされと鼻紙を出せば、鯨は大魚なれば、此やうな小さい紙へは書れぬといへば、そんなら百匁計書て下され、

○きほひ

弔に甥が供に立、燒香のとき和尙のまへに行、アイをしやうさん御くろうでごだりやすといふて輿の前に行、是伯父御、おいといつちやあいつでもをれひとりだ、

○大師

大師さまに角のはへて有はどふした譯だ、アノ坊樣に聞ふとやがて坊樣の側へ行、もしアノ大師樣に角のはへたはどふした譯でござりますと聞ば、坊さま

何も知らねば、イヤ高くはいわれぬ事、あれは牛の生れかわりで御座る、

○觀音參

おれは今日くわんのん參して來た、「コレくわんのんくわんのんといふが、くわんのんではない、くわんをんといふ物だ、時に大分遲かつた、どこぞへ廻つたか、「いんにや何方へもよらぬが、ぎのん豆腐で呑で來た、

○奴

品川へ使に行けるが、赤羽のあたりへ行と急にひだるく成、何でも喰たい物と思ふ所へ、のり賣が通りければ、五十が姫のりを喰ひ、そろ〳〵行内に日が當つて來たれば、骸がしやきばり手も足も動かず、なんぎの所へ醫者通けるを呼かけ、樣體を咄し藥を乞ければ、ムウよし〳〵ときものをぬがせ、川へざんぶりとひたし奴に着せた、

○掛乞

大晦日の晩、「頼ます、「たれだ、「米やでござります、「留主だ、「はてさつきも留主といふたが、憶に亭主の聲と思ひ、障子に穴を明け覗き見れば、てい主火燵にあたつて居る、もしおまへはるすだとおつしやりますが、そこに御座ります、てい主腹を立、せうじになせ穴を明た、假にもおれが城郭だ、是は不調法穴をふさいで上げませふ、と能つくろひ、アイ能なをしましたといふ、ムウそんなら見へぬか、アイ見へませぬ、そんならるすじや、

○燈籠

新五左初て吉原へ行、ぶしやれの上に燈籠見物に出、ほら〳〵あるき、連にはづれて内が知れず、むしやうにかほを出して、こんな男をしらつしやらぬか、

○番人

火之用心に廻り歸り、番屋のわきを見れば、首を縊らんと帶をさげて支度をする、番人見付て、是何をすると咎られ、首縊番人の袖を引、申御慈悲でござります、私はだふも立ぬ事がござりますから、どふぞ知ぬぶんになされて下さりませと、袖から四文錢一本渡せば、そんなら早く〳〵つて行け、

○火燵

夫婦連にて寺參りに行とて息子に云付、もふ段々寒く成から、おらが留主の内火燵を切て置と云付、歸つ

て見れば三角に切て置、親仁むすこになぜ四角に切ず三角に切た、ハテ是でよふござります、先づ爰がおまへか爰がかゝ樣爰が私、ムゥ來年は呼でやろふ、

○高慢

候といふ字は外にも讀様がござるかと問れ、高慢なやつ知たふりに、有共々々、候といふ字はでつちとよむ、すべて字といふ物は、理くつで拵へた物で、中候の御座候のと物の跡に附ゆへじや、そんならてうちん持のでつちは先きに立が、あれはだふだ、候べく候の候だ、

○虚空

御月さまはそばで見たらどれほど有らふの、あれは十方もなく長い物だ、何さ丸いによ、何さあれはこぐちだ、

○馴染

夜鷹のなじみ客、是おぬしはどふして此やうな商賣をする、アイわたしが親はもと歴々で御ざんしたが、譯有てこんな身に成やした、コレ酒を買た、一つ盃呑みやれ、こんにやくの田樂を肴にと差出せば、戴いて撮切て喰ふ、ハテ昔はむかし、今かふ成ては喰ついてくつたが能、わたしや齒が御ざりやせん、

○元日

物忌いの人、明日は大切な元日だから、何でも目出度と云へと、家内の者に云付ければ、翌朝下女が目出度と云へと、家内の者に云付ければ、翌朝下女が槙を取に行しが、餘り高く積で有ゆへ、中から拔んとする、上より落かゝる、コレ八介どの目出度事が出來そうな、早く來てくんなといふこへに、八介はちまきをしながらとんで行、もふおれがきちやあ、めつたにめでたくはさせぬ、

○角力

千田川ひゐきの男、今日は千田川と稻川との取組、何ぞ千田を勝せたいと心に願ごめして、角力場へ行見物す、程なく彼勝負に成ければ、血まなこに成、かたづを呑んで、互ひの取組目もふらず守りけるが、何とかしけん、千田川すさんと負ければ、此男狂氣のごとく成、それより宿へ歸り、いろ〳〵りやうじすれども快氣せず、是はとかく祈禱が能とて、山臥を頼み祈りければ、さつそく全快したり、餘りふしぎに、如何いたした奇妙の御祈禱でござると山臥にきけば、何さあの位な事はそふはござらぬ、千田は負きやあしゐ

ねい〳〵〳〵〳〵、

○無盡

きさまは何方へ行、「今夜むじんが有が是非取らねばならぬ、それで不動樣へ百度參りに來た、「ムウそんなら能まじなひを敎てやろふと、ふところへ杓子を入て行きやれ、奇妙に當る、是は有がたしと、入て行たが當らず、「ごふだ當つたであらふ、「ゐんにや當らぬ、「ハテナいくら懸だ、「二分むじんを半口だ、「ヱヽそんなら初手にそふ云へば能せつかいをやるもの、

○國府

こくうに味噌をあげたがるおとこ、國府をのんで、どふだ匂ふか〳〵といへば、又すかしたか、

○紋所

丁子屋の雛鶴を買、ひなづるを紋に付ていつたら大きにもてた、「そふだあろふ、おらあ此ぢう透腹で信濃屋へいつたら、大きに喰へた、

○單物

内の年季者を呼、われは大ぶん能働らくから、別にひとへ物を一つ着せてやらふが、島が能か小紋が能か、わが好に望め、「アイ私は鼠がよふ御ざりますと、小さな聲でいへば、「なんだ大きなこへで云へ聞へぬ、「アイ鼠がよふござります、「ナニ鼠か、「もしそこに猫が居ます、

○あざみ

鼻の欠た男女郎買に行、女郎の貌を見た所が大あざ、こいつ忌々しいと思ひ、床をみればあざみの花が生て有、いよ〳〵小腹が立、引ぬいてすてれば、「もしへはなが落やした、

○きり〴〵す

大すべたな姉と、きりやうよしの妹二人連にて、藥師參りの道にてきり〴〵すを買、妹が手のひらへ上げたれば、指を喰つかれ、姉さんきり〴〵すが喰付やしたといへば、なんの大そうな、見せやと、姉が手のひらへあげたれば、きり〴〵す貌を見て舌打、

○初會

雷吉原へ落、くわらりと日和になりければ、仕樣なく短はをりにほうろく頭巾、見世につゝと上り、女郎を上げてくれと云ふ、男出てどれぞ御さしでもござりますか、イヤ誰でもよい出してくれと云、新ぞうずつ

と出て雷の手を取、落なんしたか、

○信濃

干物のあたま計殘りしを、食たき釜の下で燒て居る所へ、ほうばいの小僧が見付、是干物のあたま喰ふといふ事が有る物か、信濃物は犬のやうなといへば、いや／＼そふ云わしやるな、燒て喰ふと大ていうまいこつちやないといへば、そんならちつと下さい、

○笘船

船まんぢうの客折介、おれは是ほど馴染て來るが、なんとおぬしが肌を見せぬか、「心安い事見なさいと、はだをぬげば、折介なで廻し、ほんに雪だぞ／＼、「そのやふに白いかへ、「いんにやつめたい、

○時代物

此印籠はきつふ古く見へるが、東山どの時代でも有ふか、いや／＼まだ後の物でござらふと、評義して居るところへ、古道具屋が參りましたといへば、是は能所へ見へた、是へ通せと直に呼、このいんろうの時代はいつごろで有ふ、目利して吳と有れば、道具やつくづく見、是は明智じたいと相見へますと云、それには定めて見所が有であらふとあれば、樂を三日は持ませぬ、

○天目

茶碗の事を天目といふが、なぜてんもくと云ふの、「はて天がもく／＼とするから、それで天目さ、「成ほど夫で茶碗の義理までしれた、

○甲酉

祭のだしに雞が太鼓の上にとまつて居るは、どふしたわけじや、「あれはむかし唐土で目出度御代の時分、太鼓を出して置て、訴訟が有れば其太鼓をたゝく、なれ共太平にて誰一人訴出る者がないから、太鼓に苔ができ鷄が遊び所に成た、諫鼓苔深ふして雞驚かざる目出たい事故、だしに作つた物さ、「そんならアノ御幣を持た猿はなんじや、「あれは鷄驚かざるのさるだ、

○練間

馬附大根うり、七つをきして江戸中を引步行ども、不仕合にて一つも口に當らず、最早日も暮懸りければ、馬士むまに向ひ云ふやう、今日は不仕合にて一口も賣らず、さぞおれも草臥成べし、是からおれが替りて脊負とて、大根をおろし一つに束てせをひ、サア是か

らわれに乘ぞ、

○餅賣

五文取が二文々々と夜々賣步行、何とかしけん犬ども大勢とりまき、けわしくほへければ、動轉して三文ごりが五文々々、

○仕合

伯父貴が死なれたとては、角屋敷一ヶ所に金五百兩の篋おくり、舅ごのが往生せられたとては、大船二艘に質兩替の株に代物を添ての形見、其外叔父嫁おば聟にいたる迄、往生の度毎に金儲をしけるが、有とき兼てびんぼう者の從弟死去としらせ來たり、今度ははや桶を買手あてもなければ、こと〴〵く世わに成ければ、初めてちからを落した、

○隱密

火之見番、今夜はどふか小氣味惡い晩とおもふ所へ、天狗ずつと來り、コレ番人、其方どもは何に寄らす見聞たる事を云まいと云ふ誓紙をして、勤めると聞たが違ひはないか、成ほど左樣相違ござりませぬ、「そんなら四文錢を一本借てくれ、

○三月

雛をかざりながら、何と殿さまが左か奧樣が左りかと聞ば、しれたる事男が左りさ、「それでも隣のとは勝手が違ふやうなといへば、「ハテそんなら灸をすへるを見たがよい、男は左り、

○常上下

是は久しぶりごふだ〳〵、「久しふおめに懸りませぬ、私もお世わになされて下されましたが、先御悅びなされ下さりませ、常上下を着て勤る格に成ました、それは目出たい屋敷つとめか、イヽヱ芝居の後見、

○つんぼ

やれすさまじい雷といふ中に、つんぼはきよろりくわんとして居る、側の人大雷と書付て見せれば、さて存じませなんだ、藝は身を助けるじや、

○看板

湯屋のかんばんに矢はづを出すはごふした譯だ、あれは人のいるやうにとの事さ、「そんなら酢屋のかんばんに、すいのうの底のないものをするはごふじや、「あれはなんぼ射ても素矢、

○茶の湯

數寄屋ふるまひに行、あるじさま〴〵の道具をかざ

り置しを、賞客いち〳〵ほめそやし、扨々御ていしゆ様は能道具もちと云はれけるを、末座の男、したがあつたら道具持に髭がない、

〇信州

淺間がたけのふもとを道心者とふりかゝり、見る内に黑雲淺間山をひつ包んで、其内より炎も八出、ばんじやく火のことなりて飛音のすさまじさ、道心じやしばらく念佛申て見ければ、かの山ぶる〳〵とふるひ、天もひゞける大をんにて、あら峯くるしや。

〇饅頭

殿さま御用人に仰らるゝは、此ごろ求めたる刀きれあぢがしれぬゆへ、様しものはないかと有、御用人聞、まんぢうを十重ねて下まで切ますれば、二つ胴を切ますと同じ事で御ざります、夫はやすひ事じやと、直に用意して切給へば、物の見事に帶迄きれたり、用人見て、扨もよふきれました、天晴の御道具、さらば死がいを申受ませう、

〇赤銅

小道具やにてしやくどう鍔を見て、是は似せではないかといへば、賣人イヱ〳〵正身にまがひござらぬ、しやうこには百足を乘て見れば必ず死ます、それこそとむかでをひろひ取乘けれ共死なず、是見や正身ではないといへば、賣人なるほど赤銅に違ひはないが、其むかでが似せでござらふ、

〇乞食

酒の醉まぎれぶら〳〵あるき、辻にねて居る乞食を切けるに、明日に成ておもひ出し、扨々ゆふべのこじきはふびんな事をした、まだいきて居るかと辻へ行見れば、かの乞食物の見事にあたまの鉢を切落され、其おちた鉢を手に持て、是へ一文々々、

〇繪師

大名の床に鷺の繪有しを、繪師見てあざ笑ひ、扨も下手な繪かな、かんじんの鷺のかたちはひとつもない、我らが家のさぎは又かふした物ではないと、自慢いふ所へ、庭の泉水へさぎ來るを、そんならあのやうな鷺でござらふといへば、マダ〳〵あのやうな物でもない、

〇雪ふり

夜小べんに起て戸を明んとすれども、宵より雪ふりこをり付てあかず、能事を思ひ出したりと、敷居のみ

ぞへ小便をしかけゝれば、心安く戸も明き外へ出たれば、何も用がない、

○膏藥

用心深い人思ふやう、骸の内に第一大切な物は眼なり、其まなこを二つながら一度に用ひて、ひよつと怪我でも有た時は不自由なりと感をつけ、かうやくにて片目張ふさぎ、まさかのときの用心と心がけしが、はたして眼病をこりつぶれければ、扨こそかうした事も有ふかと、兼ての始末は此時と、張ふさいだ膏藥を取すて見れば、家内に有合ふ人皆しらぬ顔、

○食焚

をらが親方は米が高いとて、荒骨おる者に粥を喰せ、貳分が槇を今日中に割と、あんまりいま／＼しい、槇は堅木なり腹はかゆばらなりと云ながら、うしろを見ればヾ旦那殿が立て居る、併養生喰にはよい、

○色紙

小道具屋の見世を見れば、みしりの有金紙の色紙おれば、正しくおれが内に有た金紙へ、じやうだんに歌を書しが、先達て何やかや取集め拂ひしが、扨は其中へ入れて拂ひつらん、おれが手はさして能とも思わぬが、錢に成ばこそ桐の箱に入て有れば、なぐさみに直段を聞んと、もしあのしきしは何ほどでござるといへば、あれは五匁に致して上げませうと云ふ、扨はおれが手は餘程能こふなと心によろこび、ナント百ばかりに賣しやれといへば、亭主お前もめつそうな事をおつしやります、アノ金紙は昔もので、十匁に買ふとおつしやつてもござりませぬ、畢竟歌が書て有ればこそ、

○鸚鵡

頃日おれが内に鸚鵡を飼たが、奇妙な事人が來るとおれがおもふ事をいふ、「めつそうな事を云ふ者だ、あふむは人の口眞似こそすれ、何心におもふ事をいふ物だ、「大誓文それが僞だと思ふなら、晩にでもおらが内に來て見給へ、「そんなら後に行ふと約束して、彼方へ行すつと座敷へ通り見れば、亭主はだまつてゐる、鸚鵡が聲をかけ、來給へ、おれが云ふ通り違ひは有まい、三貫お茶汲おたばこ盆持てこいと、何も角もていしゆの思ふ事鸚鵡が皆云ふ、客も肝を潰し、あきれ果、たばこ一二ふく呑居れば、鸚鵡もふ歸ればよい、

○手紙

雷落て腰が抜る、近所の寄合ごふなされたさ問ば、怪我をして此分にては天上登られず、何とぞ迎ひを呼に手紙を遣たい、書て下されさいふ故、何さ書ます、一筆啓上申候、其次はな、ひかれば、

本石町四丁目
板元　堀野屋仁兵衛

高笑ひ終

鳥の町序

南海に矢口の名所あり、其名道然にしられ、北國に鳥の町のきまり有、その名頭の事に盛也、南北の地名武江に高くして、遊樂山人酒餅の豪傑、我も〳〵とおし合有さま、大晦日の掛取の如し、一夜明れば初春のことぶき、祝ふ酉のまちの序びらき、
安永五さるの春

來風山人書

鳥の町

○年玉

女郎の方より、あらたまの文にとし玉を取そへ來る、ひらき見れば有ふれたるぶんていに、包をとけば黑ちりめんの頭巾、引かへし〳〵見て居るところへ、親仁によつときかゝる、息子はちやつと文は隱せしが、頭巾をば隱しかねたるを、親仁目ばやく、其頭巾は買たのか、イヽエ、貰ふたか「イヽエ是はひろいました、「ドレ〳〵みせろとためつすがめつ見て、前かたおらが若いじぶんひろつたよりは地がわるくなつた、

○大根

庄屋畑を持大根をつくらせけれども、二三年思ふやうにできぬゆへ、大かた男どもの仕なしの悪い故と、じしんはたけへ出て、つちを堀て居るところへ、支配下の百姓通りかゝり、是は〳〵旦那さま、男衆におさせなされませいで、御じしんになさるのは、お憚りでござりますといへば、文盲成庄屋腹を立、おれが大根をつくるに、薬計とは不屆なりといふ所へ、又一人來

かゝりて、是は旦那さまの御腹立御尤、しかしながらあれは何の分別なしに申たので、根も葉もないでござります、

〇釣棚

此中貴さまに釣てもらつた棚が落て、大きにこまつた、あの様な麁末な事をしてといわれて、「ハテナ、おちるはづじやないが、それは大かた何ぞ揚たであらふ、

〇猥藉

承はつて參りました、此御寺に櫻のさかりとござる、何とぞ見物仕たしと云入れ、五六人づれにて庭せんを見あるき、中に一人の若きもの一ト枝手折んとせしを、和尚見咎め、コリヤ〳〵なぜ櫻に手をさすぞとしかられて、「ハテそふもぎだうにおつしやりますな、「見てのみや人に語らん櫻花と申歌も有ではござりませぬか、「イヤ〳〵埒もない事をいふ人じや、入相のころは鐘さへもつかせぬに、

〇きさま

きさま〳〵といふが、あれは何の事だ、「ハテあばたの事よ、「それで聞へた、おれがあばたが有によつて、なぶつてきさまといふで有ふと、それより餘所へ出かける道にて、我より大あばたのちか付の友だち、向ふより聲をかけ、きさまはどこへ行ぞといへば、「をれよりうぬが大きさまだ、

〇見舞

人形芝居の木戸番怪我をせしゆへ見舞に行、ごふじやけがを仕たと聞たが、「サレバ二三日あと階子をふみはづして落た、「それはあぶない事だ、どこからおちたぞ、「三段め〳〵、

〇地口

此ごろおらが大家どのが、かみさまを呼ばれたから、わしが地口を云ました、何といふたぞ、おふやさんにようぼう大師、「是は能できた、しかしもそつとかるくいふがよい、それをいはふなら大家御縁組、

〇楊弓

お姫様の出臍、りやうじ手を盡すといへ共引込ず、楊弓の名人聞及て、一ト矢にて引込せ申べしと、取次を以て申上る、お姫様へ右のわけ申上候へども、はづかしく思召御とく心なし、お乳の人おなだめ申、私もごしやうばん申べしと申上、漸御得心にておちの人と

立ならび、おなかを出して五間ほど向に待玉ふ、ときに彼楊弓ねらひを極めひやうと放す、矢おうばの腹にあたり、「ごん、

○硝子

扨近々に金儲のつるに取つく事が出來た、「それは耳よりごうじや〳〵、「されば先年から川々に埋れたる金銀おびたゞしく有に依て、見出す工夫を付たが、ごうだ〳〵、「それは面白い、おれも半分乗たひ、「それならば舟を借玉へとて、兩人舟に打乗り、兩國の邊へ漕り出し、兼て用意の大硝子を取出し、此中へはいり玉へと入て能口をしめ、綱を付て水底へさげ、ごうじや有か〳〵、「有とも〳〵錢金わきざし金物おびたゞしひ、「早くとりやれ、「手がでない、

○摘菜

いものくきを割菜となせいふ、わりやしらぬか、「いんにやおらしらぬが、それよりな、此の内こんにやく島へいつたらナ、肴に鮪のあしを出して、つまみなとよ、

○吉原

此ころは久しくお出なんせん、お心がはりかといふ、「イヽヤ心がはりではないが、さん〴〵痔が起つてそれゆへ來なんだ、「それはさぞおこまりなさんしたでござんしよ、殊に出痔の、いぼじの、走り痔のと色々あるそふでござんすが、おまへのは何痔でござんす、おれがのは親仁だ、

○刀の銘

波平行安の刀の銘よめぬゆへ、別に書付て儒者の所へやりければ、なみだいらかにして行こと安しと讀で來る、刀の銘にはおかしい事じやと、お寺の和尚に見せければ、是は波平行安じやが、先祖の戒名でござるか、

○借上

身上を女郎にいれ上げ、一家一門に見限られ、つゐに菰をかぶり、寺町邊にねてゐる折ふし、前かたなじみの女郎通りかゝり、此ていを見るより、扨々おいとほしや、わたしゆへに此やうな體にならんしたかと、すがり付泣いだせば、こりや〳〵聲が高い、おれは敵うちに出たのじや、

○骸廻り

しらみども云合せ、からだめぐりせんと、背中より肩

さき腕など歩行、おやゆびの中ほどまで來て、是は大きながけじや、皆はやくこいといへば、年寄じらみ聲をかけ、ヤレ若い者どもそこへ行な、そこが親しらず子しらずだ、

○煙草

貧しき煙草や、思ひがけなく金儲けして、俄に見世を取ひろげ、日本にわれにつゞく煙草屋はあるまじと、じまん心でゐたる折ふし、ちかづきの人來て、扨々大きな見世になされた、たばこやの三井でござるといへば、てい主大きなかほつきして、服部、

○ぶせふ者

くわんおんに參らふと思ふが、ちと空腹なが喰も面倒なといふ、男聞てやき食を竹の皮に包み、道にてあがれとふところへ入てやる、道へ出たればしきりにひだるく成、向ふよりひもじそふな顏色なる男、菅笠をあたまへのせ來るを、是々貴樣はひもじさふだが、おれがふところに食が有から喰て、跡でおれにもくわせて下されといふ、「とんだ事をいふ人だ、そなたに喰せるくらゐなら、此笠の紐をむすびます、

○押

小身なる所に押奉公に濟しが、誰もたづねぬゆへ、いとまをとり、大きな所へすみ、早速御供を云付られければ、何でもけふは云ふと思ひすまして、出ると其まゝ、どなたでござるととふ、「ちつとさふもござるまい、

○茶人

深川邊へ出かけしが、立派なる住居有、枝折戸が明てゐるゆへずつと這入ば、きれい成庭、四疊半に爐も立て有、見れば誰もゐず、ずつとざしきへ上り、先づ茶をのむ、奥より小僧が見つけ、モシ旦那樣あれごろうじませ、とんだやつが參りました、大方ごろ坊でござりませふ、ぶちのめしてやりませう、イヤ〳〵先まてといふ内、かのやつ手を二つたゝく、イヤとほふもないやつでござります、「どふするか行て見ろ、小僧は彼やつがまへに手をつき、何の御用でござります、「勝手がさわがしい、

○雷

大かみなり鳴出し、親父は大きらひにて、かゝや是はごふもならぬと、おし入をあけ内へにげ込、子ども、かかさんや、あすは父御節句か、

○桶屋

お袋と養子とけんくわをして、息子を出さうといふ、家主あいさつに這入、なんぼお袋がそういつても、あれを出しては身上が立ぬ、夫では店にも置れぬと中を直させ、狂歌、

木と竹とあわせる物は底が親
たが何いほと儘にして桶

○信者

二三人寄會、とかく私共が宗旨は有がたい、此ごろも飴賣がうたに、おめこ買ねばおとりこじやないと云ます、浄土宗が聞て、イヤ〳〵あみださまが有がたい、あめ賣も仕舞には、十夜々々じゆや計だと云ます、

○紅葉

なんと二三日の内、海安寺へ紅葉見に行ふじやないか、「それはよかろふ、下男是を聞、それはよしになされませ、ナゼそふいふぞ、「先日品川へお使に參たつゐでに寄ましたが、皆赤く成ました、

○仕事師

吉原へ手傳に行、もし女郎さん、あわびかいに火をくんなさいといふを、外のが聞付、是わりやばかな事をいふ者だ、なんぼこちとだとて、ふだんあわび貝で煙草のみはせまいし、「ヲヽ合點だ、もし女郎さん、お茶を一つ拜見いたしやせう、

○礫文字

手紙をひらき見れば、晦日を借用申度との文言、サアこれは讀ぬは、二三人評義して、大方平生あて字を書やつじやによつて、是は朔日のたちであろふと、讀で見てもすめぬ故、先方へ聞にやれば、晦日のごりの字じや、柳ごりをかりたい、

○香物

御寺から少しながら漬物を上ますと申て參りましたと、取次の男が差出せば、イヤ是はよい匂ひじや、御寺はどふして漬さしやる事やら、匂ひなら風味ならどふもいへぬといへば、アイ私が春中も御使に參つた時、勝手で見ましたが、久しく漬て置ますさふで、重しの石に年號が彫付てござつたが、たしか永祿二年八月五日とござりました、

○豆腐

小僧とうふを賣に出て内へ歸り、けさは賣れませぬ、

漸々半丁うりましたといへば、つんぼうの親父、ナニ半鐘を打た、イヽエ豆腐の事さ、「遠くならよい、

〇貧福

用有て出かけるむかふから、こゝろやすい友達來るゆへ、びんぼう神どこへ行、ヲヽわが内へ行といふて行過る、ハテいま〳〵しひやつじや、びんぼう神がおれが内へ來ては氣がゝりと思ひながら、用をたし歸れば、右の友だち又むかふからくるゆへ、こんどはいわふて、福の神どこへ行、「ヲヽ今そつちから出て來た、

〇根問

鶴は千年生るといふがほんの事かの、「ヲヽサ生ればこそかまくらに賴朝の放しつるが有ではないか、「そして千年過ればどふする、「それからしぬのさ、「しんでどふする、「それから十萬億土へ行のさ、「極樂へ行てどふする、「アヽ六かしい男だ、極樂で蠟燭たてに、

〇國穿鑿

下女四五人あつまり、おさき殿は江戸産れかと思つてゐたに、此中やどから便りの時、國から便宜が有たとの咄し、おまへはどこうまれだ、「アイちいさいとき江戸へ來やしたが、産れは房州さ、「おたき殿はどこへ、「わたしは神奈川在さ、「おみわどのゝ在所は、「アイ私はといゝかねる、「ハテどこでござんす、「アイわたしはびろうながら葛西、

〇不孝

きさまはもはや四十に及んで、親に不孝な事だ、もろこしの老萊子は、七十に餘りて子供の小袖を着てたわむれしは、歳わかしと親におもわせんとの心づかひした人さへ有に、たしなみやれとの教訓、不孝もの尤と思ひ、大しまの布子をこしらへ、おやのまへで飛だりはねたり、さんぼがへりしたりして見せければ、お袋なみだをながし、さて〳〵長生すれば色々のかなしひ事を見る、どうぞあいつがほんの氣ちがひにならぬ先に行たい、

〇臆病

五十人ばかり夜討がはいり、俄の事ゆへうろたへ廻り、八方へきりちらされ逃たる者多かりける、其後事すみて、彼にげたる人々に出合云けるは、むかし堀川の御所へ、土佐坊が五百餘騎にて夜うちに押寄せしを、わづか三四人にて五百余騎をさん〴〵に切なび

け、討手の大將土佐坊を討取たるためしも有に、わづか五十人にたらぬ夜うちに切立られ、逃廻るとはひきやうな事じやと、さん〴〵におろされ、「イヤサイヤサその龜井かたおかむさし坊のやうなやつが五十人來たゆへに、

○飛鳥山

田舍客あすか山はおもしろい所と聞ました、國もとへ歸り咄しのたねに見て行たいと云ふ、ていしゆ、わしが案內しませふとつれ立行、てい主せわしき者にて飛脚のやうに步行、茶屋へも寄せずにたばこもあるきながら吸せ、飛鳥山から道灌山、日ぐらしいろは茶屋、夫より息もつかせず上野へ出ければ、「まだ飛鳥山は遠くござるか、「ハテもふ通つて仕舞ました、それさくらのたんと咲た所があすか山サ、「ハアおらは物をぼへがわるい、わすれてしまつた、

○信濃もの

しなの者をおきしが、亭主向の內へ呼れて行ける、急に用が出來ければ、內義は是おしな、向ふの內へ行て手をつゐて、珍兵衞に用がござります、一寸と歸りますやうにと、おふへいに云ふ物じや、「ハイと云ふて向ふへ行ければ、折ふし珍兵衞見世に居合せ信濃を見つけ、わりや何に來た、「われを呼にきた、今歸りやれ、

○間違

おでん〳〵と每晚よんで通るが、あいつを喰たい物だが、呼もぐわゐぶんがわるし、下男「すぐに買て參りませう、「夫ではさめる、あれは釜から出すみそを付る、すぐにしてやらねばと云ふ所へ、おでん〳〵といふと、物いわずに自身欠出し、おでんが肩をつかまへて、むせうに引て來るおでんは鹿子もちといふ身で、ごゆるされませ、夜あきんどの義で御ざります、不てう法がござりますなら、幾重にもあやまりました、「イヽヤ何もいふなと店下へ連てきて小聲になり、二三本みそをつけろ、「お安ひ御用とつけて出すを、はいり口にてしてやる透間を見合せ、をでんは逃のび溜息をつき、アヽひやいな目にあつた、

○吉原

京町へ新見世が出來たと聞たから、ゆふべ行たがおつな內よ、「ハテナ家名はなんといふ、「伊勢やといふが、元茶わんばちやで有たけなから、瀬戸物いせやと

云ふ、「そして何といふ女郎を揚た、にしきでといふ部屋もちよ、「わかひ者の名は、「五郎八、

○道樂者

太平樂しなん所といふ看板が出たから、おらア行かふとおもふが、わりや行かぬか、「ヲヽおれもそりや氣があると、家督を持て行、たのみませうといへば、是はよう御出なされました、先づしばらく御抑へなされませと云ふて内へはいり、まてどくらせど何の沙汰もなき故、大きにはらを立、「こりやまあとほうもないやつだ、のろまが咸陽宮の城をあづかつたやうに、いつ迄かふして置きやあがるこの惡たい、おくよりせうじを明て、よほど御したちがござります、

○違謡

聞取謡をしつたふりにてうたふ、みだたのむねがひも四つの御山を〳〵けふ立出る旅衣きの知盛がたつか弓「はてそれは誓願寺かと思へば、舟辨慶のやうな所もあり、何といふうたひで御ざると咎られ、是はせいくわんじさ、「それでもごふか「是は元誓願寺、

○業平

わかき男わづらひにて眉毛少し薄く成しを、見ぐるしくおもひ、まゆに墨をぬりしを、三十二文ほど不足のむすこ、「もしおまへはまゆをなせ墨で塗なさつたといへば、見付られてにくさもにくし、是は今はやる業平まゆといふ物じやと聞て、内へ歸り眉を剃おとし墨にて塗ければ、親父見付、おのれが其つらは何じや、しつかいなりを見るやうなといへば、「イヨ親父のしやれめ、平をいわずに、

○嫁姑

むせうにむりをいふて嫁をいじる姑有り、あの無理はどふしたら直ろふやらと、明暮嫁のくろう、どふぞしかたは有まいかと思ふ所へ、町内から寄會をふれて來る、アイあるじが留守でござります、歸りましたら申聞せませうといふを、しうとめははや鳴出し、おれが内に居るに、何でもおれにはひし隱しにする、何の寄合じやとしかられ、嫁はさそくに、イヤ外の事でもござりませぬ、此町内に嫁をいじるしうとめが二人有ほどに、異見をして事のないやうにせよと有寄合でござりますといへば、「ハテナ今一人は誰じや、

○茶代

京者江戸見物に來り、馬喰町に宿をとり、供に連し男

にいふやう、當所は道中と違ひ、茶屋へ寄ても茶代を二三文づゝは置れぬ、明日から見物に出るが、茶やへ寄て六介と云たら六もん、八介と云たら八文置と云付、毎日遊山に出る、又觀音へ出かけ、閻魔堂のあたりにて夕立に逢ひ、是おれは此茶やに待て居るから、内へ行てかさを取てこひと云付やり、二三町も行と思ふと日和になる、アヽもそつと待ば能かつた、是御ていしゆ、今八介が歸つたら、くわんをんの方へこい、茶代も八介に拂つてこひといふて下されと賴み行、「なんだあの人はめつたに八介々々と、ハア聞へた、此ちう六介と云たら茶代を六文、けふは手間どつたゆへ八文といふ事であらふといふ所へ、傘を持て來る、「是旦那は觀音にござつた、百介に茶代を拂つてこひとおつしやつた、「十方もない旦那はきつひむりいひ、爰にたつた三十四五介、

〇庵室

相撲へんを通りかゝり見れば、庵しつに三十計りの男唯一人、机にもたれ書籍を見て居る體を見て、あのやうにして暮したらばなあ、さぞ面白い事であらうと、うら山しうおもへば、庵室の男ずつと出、のびをしながら、アヽ金がほしい

〇金物見世

田舍者二三人連にて柳原をとほり、らうそくのしん切を見て、あれ江戸には馬の毛拔までござると、つれに咄せば、金物やの男、大きなとうへんぼくだといふを聞付、何じやとうへんぼくとは何の事だ、イヽヱおまへ方のやうな、田舍の大藷衆をばとうへんぼくと申が、江戸のはやりことばでござります、「ムヽおれも餘ほどのとうへんぼくと見へるか、

〇丁稚

何しても何いふてもでかした〱といふ旦那、食まへに出られ、膳立をして待てゐる所へ、旦那かへりければ、でつち、だんな樣お食を上りませといふ、「イヤをれは喰ふてきた、われくふてしまへ、でつち、「でかした、

〇臆病

大をくびやうなる侍、夜うらへ行に氣味わるく思ひ、内義に手燭をかゝげさせ行しが、雪隱の内より、何とそなたはこわくはないかといふ、なんのこわい事が御ざりましよといへば、「流石武士の妻ほど有、

○火燵

能好きなる男、勸進能を見物して歸りに、西風烈しく吹立られ、早く歸り火燵にあたりて寒さを凌がんと、急ぎかへり見ればこたつに火はなく、ふとんはたゝみてやぐらの上に有ければ、ふとんを目八分にたづさへて、うらめしさうに、「ト見ればなつかしや、

○守刀

錆光がかゝが産をしたが變な物を産だ、「何をうんだ、「守り刀を、「そりやとんだ事だ、行て見よふと四五人よりあつまり、拔てみよふと一寸許り拔た所が、大の錆がたな、ずつとぬけばとぎやあ〳〵、

○地獄

地ごくの鬼ども寄合して、扨きんねんこんきう故に、風の神をたのみはやらせても、醫者といふ者が有てよくする故、死ぬ者が少ない、何ごともしやばの醫者どもをなくす手段は有まひかとの相談、中に年かさなる鬼、いや〳〵それは悪い相談、あいらが有ばこそ間に〳〵來るではないか、

○儒者

物堅き儒者、弟子衆のさそひにて芝居見物して歸り、今日若殿に成ました、色の白い悪形は何と申ますと問わるれば、あれは市川八百藏と申ますが、悪形ではござりませぬ、實形でござりますと云へば、はてあれが悪人でござるまいか、一國の主たる身にて、傾城にまよい身を放埒に持くづし、國の亂れを引出すものが、所謂悪人にて有まじきや、

○茗荷

あほう成庄屋茗荷を多年喰ひ、或とき村の年寄どもを招き云渡すは、別の事でもない、もつぱら世間でめうがをくへばあほうに成といふが、おれは數ねん茗荷をくへどもあほうにならぬ、此とほりを村中の者へふれて、安堵させておへりやれ、

○虎

犬のほへるとき、虎といふ字を手に書て握つて居れば、ほへぬと貴さまに聞て、大きな目に逢た、「何としたぞ、「ゆふべ夜更て歸るとて、何が犬めがほへかゝる所へ、にぎつた手を出したら、是此樣にしたゝか喰ひ付れた、「ムウそりや無筆の犬であらふ、

○占

南國の占見世の前で、子供たこを上ながら、爰のうら

なひはあたらぬ、下手だと悪たいをいふ、古ひ者腹を立ち、こいつらは毎日見世さきでたこを上るさへ有るに、にくひやつらだ、うぬらはどこから來をる、あてゝみな、

○大黒

旦那寺へ參り、玄關にて案內こへどもあいさつなきゆへ、勝手へまわりのぞきみれば、和尚鮹をりやうりして居らるゝ、見付られてはさぞ氣毒がらるゝであらふと、又玄關へ廻りたのみませうと大聲でいへば、漸取次出て、先づ御上りと座敷へ通し、和尚も出あいさつ有て、盃を出し二三ばいのむ、是は何もお肴がなしといふ、「和尚さまそふおつしやりますな、おたのしみを存てをる、是ほどお心安いわたくしに、なぜおかくしなされます、「ムヽごらふじたか是非に及ばぬ、コレおふじお心安いお方じや、出ておちかづきになりやれ、

○雷

夕だち大かみなりしきりなりしが、去るお大名いたつておきらひにて、雷の鳴所を目當に、鐵炮をすぽんすぽんと打かけ玉へば、空にて子どもかみなり大におどろき、かゝさんぽん〳〵がこわひとなき出す、親父雷、コレかゝ蚊屋を敷てやりやれ、

○同

雷太鼓を質に持て來る、子供が大ぜいついて、ヤア此かみなりに鳴そふな物だに、根からならぬとはやし立る、雷ふりかへり、ならぬから質を置、

○大屋

貸店の札を、子どもがいたづらにはなす度々に及べば、大屋どの案をつけて、厚板にかし店と書て釘にて丈夫に打つけ、是では二三ねんはこらへる、

○時節

雪ふりに庇の雪をおさしけるが、相長屋に住浪人、路次を通りかゝる、家根よりしたゝかにあびせければ、我等いかに斯ろう〳〵すればとて、餘り踏付たる仕方と以の外の腹立、てい主とんで出、誤り入たる風情にて、眞ぴら御免下されませ、誠にじせつたふらいと申ものと詫ければ、浪人甚だ感じ入、扨々貴殿は學者なり、今こそはつめい致たり、まことにじせつたふらいの文字は、時の雪頭に來ると云なれば、了簡いたし申さふ、

○高砂

當春西國へ參りまして、高砂の松尾上の鐘も見物致しました、それはお浦山しひ事の、「それに付ておまへにおたづね申たいは、アノ高砂のうたひに尾上の鐘の落すなりとござるが、やはり釣てござります、「そのはづ〳〵、「ナゼナ、「ハテあかつきかけてと有からは、

○泰平樂

音樂社中女郎買に行、さて〳〵はゞかりながら先生、此間のゐてんらくは能お出來なされました、「イヤ足下の太平樂が、女郎「お人がらにもお似合なされぬ、

○春興

先生歳旦を致しました、「それは御きどく、何となされた、「此扇下さるならば有がたい、「ム丶是はよふできましたが、しかし扇といへば春の目出度を祝へども、夏の氣どりに成ゆへ、どふぞ春の意を云たいものの、「そんならこふ致ませふ、「何と〳〵、「此扇くだ春ならば有がたい、

○釣指南

つり好の男しなんの看板を見て、弟子入し稽古にかかる、師匠釣竿に糸をつけ弟子に持せ、しせうは針さきをそろ〳〵引きながら、此ひき何とおかんがへなされた、弟子しばらく案じ、はぜの針あんばいと覺ます、「成ほど〳〵、餘程お下地がござる、明日からきすに致さふ、

○平目

夕部おらが前の下水へ、二尺ばかりのひらめが游で來た、珍らしひ事じやないか、「それは飛んだ事の、しかし貴さまの前の下水は、わづか幅が一尺許、それに二尺のひらめはきつい萬八、イ丶ヤ竪になつて、

○出物

十七八のお小性お目見へにあがり、次の間に扣へてゐるときに、取はづしぶつとやる、御家老かたはらに有て、是れおわかしゆ、御前がちかひ不禮有な、又ブウ、はて扨ごせんがちかひ、又ブウ、はて是非に及ばぬナア、

○講釋

百人一首講釋とかんばんをかけ、どのやうな事をいふぞと聞ば、講師しかつべらしく、今晩は在原業平朝臣の詠歌の下を申ます、この歌はちはやふる神代も

きかず龍田川、からくれなゐに水くゞるとは、是は其かみたつた川と申すまふとりが、千早といふ女郎の方へたび／＼かよひましたが、張のつよい女郎でござつて、愛らしい事もなかつた、されども龍田川はことの外執心にて、かむろの神代といふを頼みましたが、神代も同じく邪見ものにて執もちを致さず、さるに依て千早振神代もきかず龍田川と申ます、扨夫よりほど過まして、龍田川も老年に及び、すまふをやめて豆腐しやうばいをしてをりましたが、ちはやも右の心いれがつのりまして乞食となり、龍田川が内ともしらず、きらずをもらいに來ましたを、龍田川は見付、あれこそわれにつらくあたりし者ゆへ、きらずをやるなと男どもに云付てやらぬゆへに、千早は世をあじきなく思ひ、淵へ身を沈めました、それできらずをくれぬといふこゝろを、からくれなゐと申ます、聞人、成ほど水くゞるまではすめましたが、しまいのとはといふ二字はな、「とははちはやが稚名、

○石垣

權や聞きや、をらがとなりの杓子めがもふ孕だ、「そりや孕そうな物よ、をらが出入やしきの、此春したおもて長屋の石垣さへもうはらんだ、

鳥の町終

江戸自慢序

空を翔る放し鳥、水を潜るはなし鰻、いづれもはなしの善根にして、その筋の長焼、煮花でむしたる味みの鹽梅、ぴんと小粒のつぶゑりに、三笑亭の滑稽たつぷり、可薬も味ふ漬加減、きけばきくほど面白ければ、茶漬とくふとも風下の隣にて、鼻と耳を聳て給へとしかいふ、

晋米齋玉粒

癸未初春

江戸自慢

○江戸じまん

さるむすこ母のざいしよへゆき、きんじよのわかいしゆが、えどのはなしをきゝたがるゆゑ、まづでほうだいに、「ソレ江戸にはまア珍らしいはしがある、まアうしのくそばしには牛のくそがある、あらめばしにはあらめがある、おやぢばしには大きなおやぢがゐる、まだそのうへに三がのつのはしがありやす、ソレ江戸ばしか、ソレ京ばしか、そこで大坂、イヤなむさん町だつけ、

○春の花むこ

こゝに梅の仙人と名づけたる古木、庭のすみの白い桃にほれて、ひめゆりを仲人にたのみ、金銭花を持さんにむこ入りをしける夜、おりしも植木屋木ばさみをもつてはいりければ、花どもこれをおそれて、ちいさくなつて居るゆへ、うへ木屋「ハヽアこれは今宵はなむこのくるそうな、これをむじやうにきるでもないと、すたすたかえりければ、仲人の花かほをあげ

てみて、「サア此うちどなたも、おひらきなせへ、

○うそつき彌二郎

上みがたより歸りきて、京都は花のみやこほどあつて、けしからず上品なところじや、まづだいだうをあるくせんざいやなどが、ゐぼしひたゝりで、○あしびきの山のいも〳〵と、かみくずかいは、○千はやふるかみくずかはふといふ、せきだなをしは、○しるもしらぬもあふさかのせきだなをし と申てあるきます、そばにいる人、「ハテナ、そしてたびやなどはなんとよびますな、彌二郎これには大きにこまり、あたまをかきながら、「ヲ、それ〳〵、たびやは、○かんけこんの たび〳〵、

○諸國珍物

善光寺のかいちやうへ、諸國ちんぶつといふ見世もの出ければ、通人二三人きたりこれをみるに、口上いひ、「さてこれにござりますは、けいせいこくよりわたりましたる、女里のさいけんでござります、これをあてにとうくをぶちぬくときは、たちまちふらるる、つぎなるは彌二郎といふ人、あてずつぽうにてうちとりましたる、からうそのかわでござります、さてつぎは氣長島からわたりましたる遊々かんの玉、一度けみする人は、一生短氣のやまひをのがるゝとある、つぎは人魚と申ますするうほ、一名渡女郎とも申まして、おほくは辰巳によく住うをなり、此うをのつりよふは、川竹のつりざほにねがひのいとをむすび、心のうきにおしのおもりをつけ、いきはりといふ針に、金銀のゐさを付てつるなり、くはしくは繪圖面にてごろうじつけられまし、(挿圖略)是なるは口先の虚言にて、兩親の目をくらまし、よふ〳〵とつり出しましたる一つ穴の狐、ずいぶんまゆ毛をぬらしてごろうじつけられましやう、うへなるははらんだからわたりましたるりんげつのみかゞみ、さてつぎは唐のうぐひすでござります、よくなきごゑにおきを付けられませう、つう人、このなきごへをきくに、キコウライバア〳〵となく、其のそばにまた日本の鶯がいて、これはホウホケキヨウ〳〵となくゆへ、つう人、「モシこのからのうぐひすは、めづらしいが、そばにいる日本のうぐひすはなんだね、口上いひ、「ハイそれはつうじでござります、

○風流はつゆめ御まくら紙

此枕がみをあてゝげしなりますれば、めでたいことを夢に見ますといへば、ある人このまくら紙をもとめ、其夜なんでもめでたいゆめを見よふと、かのまくらがみをあてゝねる、其夜のゆめに太神宮と荒神さまと、大けんくわをするゆめを見て、大きにはらをたち、目をさまして見れば、其箬紙がもめていたトサ、

○鳥づくしの駕屋

かや町へ鳥づくしにて、四つ手あんぼつつかはし候といふかんばん出ければ、ものずきな人一人きたり、わしはすゞめで竹門までやつて下さいといふ、かしこまりましたとかごをかつぎ、チウ／＼とかついで行、また一人きたり、おれははとでやつてもらいたい、かご「かしこまりました、はとならさんし百廿四文でまいりますと、かごへのせボウ／＼とやる、其あとへ三四人きたり、をれはてつぽう見世へゆくから、雉子でやつてくれといふ、いま一人はときわ町迄雁でたのみますといふ、今ひとりは仲町の梅本迄鶯でとたのむ、あとの一人は吉田町まで鷹でやつて下さいといふ、又夜更にひとりきて、わしはひとりできみがわるひから、こまがたあたりまで時鳥でやつて下さいといふ、かご「ごふいたして今じぶんくたびれあしで、おまへさんのよふなふとつたおかたを、時鳥ではやられませぬ、客「なぜくたびれあしではほとゝぎすでやられぬ、かご「ハテてんぺんからかけねへけりやあなりません、

○とふせいじん

こゝにいたつてげいしやずきのおくさまありけるが、とのさまのおぼしめしもあしければ、用人に申付、男げいしやを當世人と名づけて、とのさまの御目通りへ出しければ、とのさま仰らるゝは、「コリヤ三太夫、異國の人には髭があるときいたが、かれはひげはいかゞいたした、三太夫「御意にござります、髭はあまりなでましてなでなくしましたともふします、との「ハヽアして言葉抔もちがふであらふの、三「御意にござります、との「そのほうぞんじておらぼ、いち／＼つうじをいたせ、三「かしこまりましてござります、かれが國におきましては、

○おめしを　さいこう　○きせるを　てうけい
○酒を　清三　○たばこを　孫右衛門
○肴を　たつぼ　○小つぶを　小げん

○茶を　しぶたら
○生酔を　ぶんずい
○きものを　むき
○おびを　ぐる
○羽をりを　はつぴ
○ねる事を　せぶる
○止る事を　せかす
○ながひ事を　ねんだい
○小言を云事を　馬を上る
○髪を結ふ事を　さんびを祭る
○大きい事を　やつかい
○ごうぎなとを　てこい
○あたまを　しみけん
○目を　こつぱり
○鼻を　三月
○口を　佐平治
○耳を　九月
○手を　ゑんこう
○美事を　ゑむ
○悪い事を　白い黄ロイ共云ふ

○小ばんを　大げん
○ぜにを　太郎
○一つを　平
○二つを　まゆひき
○三つを　おやまこ
○四つを　さゝき
○五つを　かたこ
○六つを　さなだ
○七つを　ぬま
○客人を　きんちやく
○尻を　七兵衛
○あしを　たこ
○男のを　ぞせん
○女のを　たれ
○さみせんを　三四郎
○うそを　與太郎
○ごろぼうを　源四郎
○ばかを　金十郎たいこうともいふ
○蚊やをつる事を　かちくりをすくう
○こまかと云事を　せめ

○内の事を　しんか　○ささまを　どうじく
○いろの事を　がつ　○ひつツこいを　たんすふな
○そんりやうを　さくとら　○ていしゆを　しんでん
○しちやのことを　八屋　○女ぼうを　わこ
○たいくつのことを　ひらめかんむり　○むすめを　がり
○あつかましいを　ぬるなべうんこ　○むすこを　ゑご

と、あらましかよふにござります、その「なるほど是はいつ興じや、してかれが國の歌はごふじや、三「ヘイ歌はやはり和言でござります、歌「わしがはなせばのろいといふが、さきでいふことさかさんせ、○さやうだいにりやうひぢつひてかほ打ながめ、こうもやつれるものかいな、○こゑはすれどもすがたは見へぬ、ヱヽモじれつたいほとゝぎす、などとうたひます、その「なるほどこれはきみやう〳〵、さだめしかれらも女郎かいなどにゆく事であろうの、三「女郎かいに参ります事を、てう〳〵をまいに行と申ます、との「ハヽアして其ゆく時は象にでものつてゆくのか、三「イヽヱ、との「馬かの、三「さよふでもござりません、との「そしてごふしてゆくな、三「客人におぶさつてばかりまいりたがります、

○八百屋お七

こゝに八百屋久兵衛といふもの有りけるが、だんな寺は駒込吉祥寺にて、毎日むすめのお七をつれて參詣しけるが、此寺の小性吉三郎とお七は、たがいに思ひそめけるを、下女のお杉がとりもちにて、二人りはふかき中となる、又此寺の納所に辨長といふごふらく僧、かのお七に心をかけ、まがなすきがなくどけども、お七はさらに聞入れず、辨長つらく思ふよふ、わが戀のかなわぬといふも、これ吉三郎がなすわざなり、とても此の戀かなわぬうへは、吉三郎にもうきめを見せてくれんと、吉三郎があづかりし、松竹梅のかけものをうばいとつてちくでんなす、かくて吉三郎は大せつのかけものゝふんじつなしたるとがによつて、吉祥寺をかんだう受しが、いつたいお七が親久兵衛は、吉三がためにはけらいすじの者にて、内のかゝへ傳吉にそうだんのうへ、松竹梅のかけものたづねいだすまでは、しばらく吉三をあづかりしが、傳吉もかねてお七と吉三がわけあることをさとり、何とぞ辨長が行衛をさがし、かけものをとりかへし、吉三がかんどうのわびもゆりなば、ふたりをめでたくしうげんさせんとおもへども、辨長がありかも知らず、ことに久兵衛は三年以前、釜屋武兵衛がかたより百兩かり受、其時の證文に金子とゝのわざる時は、のぞみの通りお七をつかはし申べくとのやくそくなれば、武兵衛が方より日々のさいそく、お七は武兵衛を風かみにもいやがるゆへ、久兵衛もせんかたなく、いかがせんとほうにくるゝ折から、三月節句前、おもて口より釜やの武兵衛、けわたゞしく久兵衛殿は内にかな、傳「コリヤアたれかと思つたら武兵衛さんかへ、アヽいつもくおうるはしいおかほばせ子、武「やかましい、傳吉けふはおぬしがしやれをきゝにやあこねへ、かけとりにきたのだ、わるくじやまをすると、われにもいゝぶんがあるぞ、傳「よふごぜへす、いぶんがあらばきゝやしやうが、何もおめへがそう地がねになんなさることたあねへ、そして又おめへくるたんびに、こはいかほしてにらめなさるが、もしなんぼおめへが大きくても、あんまり太平樂をいゝなせへすな、また大きい人がちいさい人にかちッこなら、一寸八分のくはんをんさまの御門番を、仁王さまがしちやあいねへは、山椒は小つぶでもからし、大き

くてもかぼちやは人がもちひねへから、あんまり中の字をいはずさ、おくでだんなさおはなしなせへやし、ドリヤ帳めんでもしらべませうかさいふところへ、でつちの彌作かへり、モシ傳吉さんかけはね、傳「どうした、あつまつたか、彌「まづよこさねへ所が、ねりべいこうじの板がき黒兵衛さまが、當分のうちふしんについてお拂いなしね、そこであらばちさまは、晩ほどもたせてやらうさ申やす、傳「あらばちさは、彌「あら物屋の八兵衛さまさ、傳「わりい所でしやれるから、ねつからげせねへ、そしておか村さまじやあ、彌「どうもおか村さまへはまいられません、傳「なせ、彌「せんざいつたさき、おかみさんがかわいらしい子ぞうざんだと申て、おそないのやいたのを〱れやしたから、あんまり恩をしらぬやうでござりやすから、まいられやせん、傳「あほうめ、おそなへのをんよりは、旦那の恩をわすれねへやうにしやれ、そして渡邊樣は、彌「わたなべさまでは錢がないさ申ますから、私が青物づくしでこゞさを申やした、傳「なんさいつた、彌「いつ來ても錢がなすびさおつしやつては、内へ歸つてなんさわたしがもうそう竹、なんぼはかなひでつちでも、あまりずいきのずいがへりでは、あれ三つ葉ぜりさちそのそしりもはづかしいが、それともなくはかつてに白瓜さ申てかへりやした、傳「べらぼうめ、そんなにほねをおつても、さらずにきちやア何にもならねへ、そして狂歌師の川成さんは、彌「アイ川成さんの所では、なんだか手紙をよこしました、傳「どれなんだ、今ははやありたけしちもおきごたつ、かゝらう島のふさんだになき、おきやあがれ、かりたものもよこさずに狂歌などとは、あんまりあつひつらの川成、彌「其かわり、もし傳吉さん、畵のかいた扇をもらつてきやしたが、おめへにあげやしやう、そしてわつちがお飯をたべるうち、竹村上庵さまの書出しを、かいておいておくんなせへとおくへゆく、傳吉は帳めんのしらべにかゝる折しも、おもてへちよんがれ坊主、「ヤレ〱〱〱きいてもくんねへ、歌「コレハ八百屋のどらむすめ、はや口「ちん〱巣鴨のあじをわすれず、十五のさしからこせふの丸のみ、まる山あたりをたづねて、大つかひらに平つかはだしはよしねへ、なんでも田畑で草履を白山、歌「こひし〱小石川、はや口「はいしィごふでも駒込近

所をたづねて日ぐらし、夜るの谷中ゟ根津に根岸をさがしてあるくは、さりとは〳〵うるせへこんだにチヽミ引といふを聞て、傳吉どりやしんぜまうかと、門口で貌見合せ、コリヤ辨長さま、辨「傳吉どのか、傳「今のおめへの此體は、辨「でん吉殿、とはれてかたるもはづかしいが、去年の暮に吉祥寺を出奔なして、それからはわか者どもの世話になり、夕今じやァゆすりあらかせぎと、だん〳〵心はふとくなり、ほそくなるのは首ばかり、なんとマァ傳吉どの、いんぐわなことじやござらぬか、傳「てもなさけねへ辨長さま、おめへの親御様は、何の何がしとて虫もころさぬけつこう人、其御子息ともいわるゝ人が、そのよふなふちなことじやァすみませぬ、辨長さんこれから心を切かへて、出家に立かへらしやる所存はござりませぬか、辨「かたじけない傳吉殿、これ迄におちぶれた此わしを、もとの出家に立かへれとは、これ傳吉どのわすれはおかぬ、うれしうござるが、其世話ついでにをりいつての頼がある、傳「してそのおたのみとは、辨「ほかでもねへ此かけ物、これをうつてもらいてへ、傳「ヤコリヤふんじつなしたる松竹梅、辨「なにがなんと、傳「よふごぜへます、賣てしんぜませうが、して其金の高は、辨「おゝくでもねへ三百両、傳「ホヽウとんださよの中山、あめでもちをくうよふな仕事だが、そうこれうまくいけばいいひが、何にしろマア咄してみやしやう、ちつとのうち辨長さま、この戸棚の中にしのんでござらつしやりまし、かならずわしがくる迄出なせへすなへと奥へゆく、入りかわつてお七吉三郎出、お七「申吉三さん、今とゝさんのおはなしでは、わたしをあの武兵衛づらが所へよめらすとのこと、とてもおまへとそわれずば、たつた今おまへの手にかけて、ころして下さんせいな、吉「そりや此吉三郎とても同じ事、松竹梅のかけものゝゆくへもしれず、上人さまへのおわびがすまねば、そなたとそふこともかなわず、いきてかひなき二人りが中、かくごきわめてお七どの、七「ヱヽうれしうござんす吉三さん、この世のゑんはうすくとも、かならずみらいはみやうとでござんすぞへ、吉「みらいのゑんはあだおろか、二世も三世もかわらぬみやうと、七「うれしうござんす、吉「かくごはよいかとぬきはなさんとする所へ、傳吉かけ出、ヤレまつたおふたりとも、おゝ方こ

んなこともあろうかと、けさからわしが氣を付たに、あんにたがわぬ此塲のしぎ、さりとはやぼなおぼこ氣で、心中なぞとはむかしのこと、ましてやつぼみの花とはな、さいわいこゝにこの扇子、これにかいたもやつぱり花、しかもつぼみのコリャひめゆり、うへに何や一しゆの歌、隣りごし中よしがきの花ちらす、ろんはあらしにとがをゆづりて、△お七さんおめへはさしづめこのひめゆり、二人りが中は深見草、たとへ武兵衛のおにゆりが、金錢花を鼻にかけて、どのやうなむりをゆふがほでも、氣づかひなしの花、あんまり心をせきちくで、もしものことがあつたときやあ、わし迄はぢをかきつばた、はてかんぞううけた吉三さんは、いつたんわしがかくまうて、すへつむはなの末までも、ながいうきよにながらへて、たげへにひよくのとりがぶとゝ、しゆびよくそはせもふしたなら、そのうれしさは山ぶきの、ほんにはなれぬめうと中、其内こともすみれ艸、スリャ傳吉がかほもたつ花、ここをとつくりきゝわけて、死ふとかくごきわめたのも、此のばでみんな水あふひ、ふうふのえんは朝貎でも、わしがむすんだ小より菊、きゞくにせづにお七さん、いつまで草のいつ迄も、かならず持病のしやくやくでもおこさぬやうに、モシゑんと時節のすへをまつがいゝじやあござりませぬか、二人り「かたじけない傳吉どの、そんなら此ばは、傳「氣遣せずとござらつしやりまし、△おくより武兵衛、武「ふぎもの見付た、傳「何がなんと、武「傳吉くはんねんとぬきかくるを、かのあふぎにてとめ、傳「姫百合二ばんめはじまりさよふさいふと、坊主戸だなをあけて、辨長よしかナべん長、

伯樂街遊子金鶴樓主人
三笑亭可樂戯作

江戸自慢終

馬喰町二丁目
山口屋藤兵衛板

落咄彌次郎口序

膝栗毛の彌次郎兵衛が、無差禮と方言の問屋から、つけいだしたるはなしの本馬、お定りの貫目より、輕口ながらしつかりと、おもひつきなる新作ばかり仕入れして、荷物の駄賃帳、雲助が鬼ころしの酒代にせんと、編りしは新板物の鹿島だち、花の江戸より發行して、京大坂への通し馬、仕合せよしと得手勝手に、覩せし作者のほてつぱらをあらはす事左のごとし、

文化子端月

十返舍一九誌

落咄彌次郎口

○年ごもり

此度としごもりに遠州の秋葉へゆきやしたが、なるほど秋葉は大きなものだとはなし出すと、ひとりの男「イヤ〳〵それよりか甲州の身延山は亦大きな物だ、まづ汁の實をはこぶを見たが、大きな鍋の上にあゆみ板をわたして、汁の實を刻んだのを、大の男がふたりしてもつこうで荷つて來ては、一日鍋の中へ打あけてはこんでゐるは、ナント肝のつぶれたことじやねへかといふと、秋葉自慢の男「イヤあきはではそんなことじやねへ、飯をたく男が釜の中をおよいで、水かげんをするは、

○法華宗

法華宗の坊さま、橋のうへにてダブ〳〵〳〵〳〵とお經をよみながら、いかゞしたりけん、橋を踏はづして川へはまると、往來のもの、ヤレぼうさまが川へおちたと立ちさはぎ、さつそく小ぶねを出してさがすに、見へず、ある人いふ、水中の死がいをさがすには、

箱のふたの上に鷄をのせて、川へながすと、そのしがいのある所で、きめうにときをつくるものだといふゆへ、ところの人にはとりをもち乘り、箱のふたにのせてその川へながすと、かのぼうさまのしがいのあるところさ見へて、鷄羽ばたきをしながら、「ほつけぼう引ず、

○和歌

「ナント此頃は、みなが歌とやらをよむといふことだが、おれもちつとよんで見たい、歌はむつかしいものかね、「ナニサなんのぞうさもねへものだが、初心のうちは骨がをれる、なんでもはじめをすら〳〵とやさしくいひ出して、中ほどをふつてりと實のあるやうにいつて、それからばら〳〵としまいの所を、しつかりとうごかぬやうにとめるがかんじんだといへば、かのをとこ、「ヲツトよし〳〵、それで一首よんで見やうと、しばらくかんがへ、「ヲヽ出來た〳〵、「はやくよんだな、なんとよんだ、「きさまのいふとをりに、何のざうさもないものだ、いとすゝき布袋の腹にはへにけり、あられまじりのかなづちぞふる、

○道理

ものゝ道理といふものにはあらそはれぬものだ、ねんころ〳〵といふうたが、此ごろはやつたから、そのあとで引風がとんだ大はやりにはやつたと、はなしてゐるをきいて、側にゐる親父が、「なるほど〳〵きこへました、その理でとめたことがある、「それは何でござるな、「イヤ此頃はごもんせきさまで、さんもんのどうづきがはじまつた、

○曾我狂言

さる田舍にて五月鎭守の祭禮ありけるが、庄屋どの思ひつき、村の若いものをあつめ、芝居をさせて見んと、曾我の狂言をしくみ、庄や組頭百姓代の子供などは、五郎十郎祐經の役廻り、庄屋の頭取にて始めければ、水吞百姓は、おこし、松風、茶などを中にて商ひ、見物もあるつもりなれど、ゐなかものゝしろうと狂言ゆへ、おもしろくもなんともなければ、見物もなく役者も退屈なれば、五郎十郎始、中賓のおこし松風などをとつてくらひ、狂言もろくにはじまらねば、なかうり商人もくわしはうれず、役者はくつても錢をよこさねば、これではもとねがはづれる、損をしてはなるまいと、くわしうりはせわ役の庄やをとらまへ、

「もし〳〵祐成時宗すけつねどの、三人で十八文が松風をくつた、錢を拂てくだされといへば、庄やは役者氣ごりにて、それがしは曾我たいめんのもん句、「な丶なんといふくわしうり、それがしは不レ買にくつたおぼへはないぞ、くわしうりもはらをたちまけぬ氣になり、同じく役者氣取にて、「庄屋はしらねど子はくつた、ハテわうちやくをいやるなあ、此さわぎに、五郎十郎すけつねもがくやより出れば、くわしうりは頭にのり三人にむかひ「五つや三つのあんころより、十八文のだまつ風、不レ買にくつたとなのつた〳〵、五郎十郎「ち丶のかたよりたれも錢をいたゞかず、祐經「なのるまじとは思へども、かはずにくつたはかくいふ左衛門なるはやい、くわしうり「さてこそなア、かはずにくつたうへからは、あたへもわたさず、手をむなしくかへすのか、庄や「い丶や手をむなしくはかへすまい、コリヤ此赤いわしをわたしおき、五月下旬までかりおく、是をしやうこにはらいをとれ、くわし「まづそれまでは、此場はこのま丶たちわかれん、庄や「してそのくわしの勘定は、くわし「十文祐なり五文時宗、工藤三文祐經どの、三人「ハテはづかしい借錢じやなア、

〇夫婦喧嘩

ふうふぐらしの亭主、をり〳〵あそびに出かければ、女房はらをたち、やきもちげんくわをはじめ、すりばちすり小木なべかまをなげちらし、大さはぎをやるゆへ、近所のもの家ぬしまでもかけつけ、やう〳〵とりしづめ、ふたりへいけんをすれば、ふうふはなほくち〳〵にわめくを、いへぬしはふんべつ顔に、イヤこれ〳〵先々御亭主だまらつしやい、總體貴樣が口がすぎる、なんでもあそびに出たのがわるいから、其のやうに女房にくちごたへをせぬがよい、まうこんどから夜歩行はせまいといふあやまりじやうもんをかいて、か丶あどのにやらつしやれ、亭主「ごふもてい主がか丶あに、あやまり證文をだすといふ法は御ざるまい、家主「イヤあることでござる、亭「夫は又なせ、家「さればサ、にようぼうにも筆のあやまりといふ古事があるて、

〇旦那

旦那「人といふものはかわつたもので、幼少とき馬鹿なものは、成人するときはめて利口になり、また子どもの時りこうなものは、大きくなるとはたして馬鹿になるものだといふと、側にきいてゐたるをとこ、「さやうならば、はゞかりながらだんなさまは、御幼

少の時はさぞお利口でござりましたろう、

○田舍芝居

田舍のまつりに、所の若い者どもあつまり、芝居をするとて忠臣ぐらの狂言に、七段目のおかるをつとめるをとこ、二階にてたばこのむとて、おかる手のひらへすいがらをはたきてすいつけると、「ヨウ／＼こまかいぞ／＼、

○西瓜賣

「すいかんやァ／＼と呼ゆくと、あるおやしきの内から、「すいかん／＼、西瓜うり「ハイ／＼およびなされましたか、やしき「旦那がよべとおつしやつた、お玄關へまはれ、西瓜「ハイ畏りましたと、玄關さきへ荷をおろし、まつてゐると、やがて旦那とおぼしきが出てきたり、旦那「コリヤ／＼すいかんを見せやれ、西瓜「ハイ／＼是が百三十貳文、こちらが百文でござります、旦那「ナニすいかんといふはそのことか、さてさて其方は文盲なものだな、それはすいかんといふものではない、西瓜といふものだ、身共は水甘ときいたからよんだのだ、すいかんといふはまりの裝束のことじや、それは以來すいくわとよべ、無調法なやつでござるは、西瓜には用事はない、早くいけ／＼といわれて、すいくわうりそう／＼立出、すいくわやァ／＼と呼んでいくと、又隣屋敷から、「コリヤ／＼すいかんもつてこい、西瓜うり「ナニすいかん、もふその手はくわぬ／＼、

○鰶

松緣びゐき二三人あつまりて、「ときに今度の武智のきやうげんには、をとはやが出ねへが、あれはどふしたの、「三朝は夏しばゐから病氣だといふことだ、「なるほど／＼、瘧とかを煩つてゐるときいたが、まだよくねへか、「ナニサそれから出勤して、こんどは食あたりだといふ事だよ、「なるほどきこへた、そのはづだ、「そりやあなぜ、「ハテこはだがあつたからさ、

○客物語

去る家の娼妓たち、夜みせまへに一所へあつまり、もしへ此ごろは色男にさつぱり緣がおざりいせんが、百物がたりをしいすと、化物が出るとまうしいすから、客ものがたりをしいしたなら、客人がきいしやうから、意氣な人の咄斗しいしやうと、車座に成り、色男のうはさばなしを一つはなしては、行燈へとうし

みを一すじとぼし、二つはなしては二つともし、段々咄てあかりをまし、とふ〳〵九十九すじはなして、百すじめになるとき、夜みせをしらする鈴の音がぐわら〳〵と聞へると、二階のはしごをばた〳〵と上るをみれば、ひつこ抜の色男四五人、きやくものがたりのざしきへ來るをみて、おゐらんたちはきもをつぶし、もしへおまへさんがたは、どこからおいでなんしたへと聞くと、かの男ども、わたしどもはおはなしにひかれてきた、きやくものがたりの幽靈さ「ナニばからしいぬしたちのやうな意氣で、どこもかもまんろくなはつきりとわかるゆうれいが、おざんすものか「イヽヱこれでもおまへがたにのぼせてきたゆうれいさ、女郎「なぜへ、客「ハテ腰から下はおるすだものを、

○狐狸

狐狸いろ男にばけて女郎買と出かけ、青樓へ上り初會のざしき、おさだまりの通りにて、てれぼうゆへ色身ばかりして、人をばかすほどの手も出ず、どふかこつちがばかされさうだとぶる〳〵ものなれば、氣をたしかにもたんと思ひ、さけをぐつと一盃づつのんで、のまぬふりをして女郎へさす、女郎「もしちつとお丶さへまうしいしやう、狐「わたしども丶いつこう下戸でごぜへすから、マアおあがんなせへ、女郎「うそをおつきなんし、今一ぱいあがんなんしたじやァおざんせんか、よくみておりゐしたよ、ぬしたちやァかくし上戸とやらの、尻尾がいつそみへ丶すよ、といはれて狐狸きもをつぶし、南無三正體をしられたか、

落咄彌次郎口終

春遊機嫌袋序

それ詩歌に六義あり、所謂る風賦比興雅頌これなり、落し咄にまた是あり、昔々躰、化物躰、馬鹿聟躰、行過躰、仕形躰、下懸體、いわゆるこのたぐひなり、近世家家にあらはすところの咄し本、まことに梁に滿ち牛に汗するといへども、偶々一二片の繪入にして、曾て兒童の眼を歡し、かつ耳をおどろかすにいたらず、よつて此春のなぐさみと頓者の頓寫と書かけぬ、こひ願くは四方の合子、しまひは坐右腰張にと爾云、

書工　戀川春町

春遊機嫌袋

○寶船

正月二日、今夜は初夢、例のとをり福神たちたからぶねへ寄合ひ、さて今年もあいかはらず、おたがいにほつ年いたし、めでたうござる、今夜も枕の下にしかれて、諸人によひゆめを見せましやう、まづいわゐに一ぱひのみかけ山、なんとさかなはあるまいか、ゑびす樣「おゝあるとも〳〵、わしが日ごろのたしなみもこんなときの用心、みそずと出かけやうと、わきのしたのたひをおろし、まな板にのせてこけをふくと、下が木地、

○大黑

神々がより合て、サテ例年正月とて、われ〳〵へ家々でみなそなへ餅をくれるが、いつでも大こくどのゝつかはしめのそつはが、みな引てしまつて、おらが口へは入ませぬ、よつてことしは、此わけを大黑へことわりましやうと、みな〳〵神々そろつて、大こくへいつゝけられました、「大黑大きに腹をたち、日本國中

の鼠を呼び集め、さて〳〵にくきやつら、わいらがおかげで大きにしりをくつたと、日本國中の鼠を、みんな宮のうちへ入れて戸をしめ、外に大こく様番をなさつて、もふかゞみびらきがすんだから、さらば久しぶりで俵へのらうと戸を開き、鼠をぼい出し、俵へこしをかけると、ぺつたりとからもの、

○龍宮

近頃龍宮の水みちが殊の外低くなつて、道普請をいひつかり、うろくづどもより合、りうくうぢうの井戸から水を汲みあげ、ひくいところへおくけれども、さみづでねつからまぢらず、とびの五郎八がさいかくで、にがしほを一へんしいて、其上一へんみづ、またにがしほをしひてはまた水をおき、なんなく水道をつきあけ、サアこれからどうづきのだんと、かめのこもつてきて、ひとつおろすとづふ〳〵〳〵、これではならぬ、どうしやうこうしやうと、ひやうぎさいちうに、おやぶんのなまだこからするがよひと、まをのけさまにねて、八ほんのあしをのばすところを、大せひで引ぱつてさんよ〳〵〳〵、

○うたゝね

雨おちのきしやごなかま、つか〳〵とは入て、これでい、もふほんよみのずいねか、おきたまへ〳〵とゆすりおこされ、ていしゆ、あくびまじくら、エヽいまいましい、ゑゝゆめを見て居たもの、友立「能ゆめとはどうした、ていしゆ「マアきゝやれ、北國へずひいきと出かけたところが、きついきまり、友だち「そしておらがてきはごふした、ていしゆ「のこらずきてきついうらみ、ナゼつれだつて來てくんなんせんと、ごふぞあしたのばんといつた、「そしてどうした、ていしゆ「そこでおれがいふに、口でばかりではしやうこがねふといつたれば、そんなら文をあげんしやうから、とゞけてといふところを、ぬし立がおこした、友だち「おしひことを、そんならまたねて文をもつてきてくりやれ、

○立うす

きねと臼より合て、なんとこのくれはつゞきますまい、こうまい日もち米をつかれては、おたがいにめいわく、一ぱいのみかけてねましやうと、ふたりでしたたかくひのみ、ぶんずいになつて、このまゝではまた見だされると、むしろをかぶりねたところが、ふたり

ながらゑいきげん、むしろもいつかふみぬき、うつゝごゝろに、なんときねごの、しんしゆのせひか、だいぶまくらがおごるご目をさまして見たれば、いつのまにか米つきがウヽヘン〳〵、

○物おぼへ

草履取の八助は、さて〳〵ものおぼひのよい男、まい月くる禮者の名をそらで覺へていふ、禮帳紙のいらぬばかりも大ごく、酒でも飲しやうと、銚子ともにあてがへば、ちやわんでぐひのみ、八助とつちりものになつて、へどをはいた處が、みんな禮者の名ばかり、

○試毫

若旦那書初をなさります、嘉辰令月もふるしと、唐詩選でだん〳〵書初め、酒泉の大守と書かゝる所へ、出入の福都「御慶申上ます、シテ何のお催し、そばの見物「若旦那の書初、ふく市「シテ何と云字、そばで「誰もかも好な字、福市「ウヽ例こくと云字か〳〵、

○萬歲

三河から萬歲が、江戸へくだります道中の松原で、おひはぎが出て、コレ萬歲酒手をおひて行け、萬歲「今江戸へ下りがけ、なにも御座りませぬ、何も相談江戸へきい藏になつて出てくだされ、とりためたらばあげましやう、おいはぎ「これはよかろう、そんなら文句を教へもらおふ、萬歲尉をひらいて、「とく若に胡摩のはいしは、をいはぎ「太夫どの、そりやまたまんざらだ〳〵、

○ねわすれ

きん〳〵風の息子あそびにゆき、ねわすれておそく歸る道すがら、たしかにおやぢが起て居て、今朝はたいていの事ではなひと、頭痛八百案じくらして、土手を歸る向うから、手代がすた〳〵、モシ若旦那どうした事でござります、おやぢ樣が大ごと、むすこ「なんだはらをたつてか、手代「いゝへゆふべから御大病で、今朝こつくりお果なされました、むすこ「それで安堵、

○はつ湯

裏町のお內儀初湯に出かけるとて、八丈のかわりじまに金しもん、雨ごくおりのはゞひろをしめかけ、內もゝまでおしろいをぬりかけ、そこ八文字にあるきかけらるれば、通りの人、あれ見やれとほうもねふしろいことの、黑田樣の上屋敷のよふだとの惡口、とも

の調市きもをつぶし、うろつくひやうしに石にけつまずいて、內儀の裾へばつたり、內ぎ「ふりかへつて、長松や今のはなんだ、長松「アイわたくしがけつまずひてころびました、內ぎ「ムヽおれはまた仙人かとおもつた、

年々歳々花あひ似たる趣向も、いさふるめかしく、こゝに歳々年々人同じからぬ、戀川春町の筆をかりて、春雨の御なぐさみにそなへ侍りぬ、なをおひ〳〵出板いたすべく候、

安永四歳未正月

板元　鱗形屋

春遊機嫌袋終

笑府衿裂米叙

中街の夕鰺、江戸前の活きといへども、河岸を三遍廻るに及んで、既にこれを腐しとせん、今新や作のおとし咄といへども、今日見たる人は、明日必らず古しとせん、小田原河岸の天明も、富澤町の虎淵も、古は古をよしとし、新は新をよしとす、黒羽二重の年數ものより、寧生木綿の切立にはしかずと、しつけ苧の糸もて綴りし、仕立おろしの赤本となすことを、曲亭馬琴がいふ、

癸丑のとしの青梅じまの風光るあした

遠山小もんの山わらふ日

笑府衿裂米

○御慶

ねんしの禮に、元日のあけ七つじぶんからでかけて、ぎよけい〳〵といつてあるけど、どこのうちでもおきず、のちにはじれがきて、むりやりに戸を明てはいらうとすれば、うちではきもをつぶし、うちから戸をおさへてゐる、外でははいらうとするはづみに、戸がばつたりはづれ、たがいに顔を見合せて、あけましておめでたう、

○長しり

ながしりのきやく、よのふけるもしらずはなしてゐれば、女房ぐつとたいくつして、ほうきをたてゝかへるまじなひをすれば、そろ〳〵きせるをしもふ、ヤレうれしやもふ歸るそふだとおもふところに、ほうきがでたりころぶと、又きせるをだす、女房大にせきこみ、ほうきをたてればころび、たてればころびすれば、きやくもきせるをだしたりいれたり〳〵、

○開帳

かいてうまいりのばあさま、ふたりゆきあひ、ヤレヤレ久しぶりでおめにかゝりました、わたしはモウ六十じやが、おまへはおいくつだ、「わたしもてうど六十一さ、「そんならいねんわたしはおないどしだ、

○角力

つんぼうはじめてすもうけんぶつにゆき、とりくみを見てけんくわとこゝろへ、そろ〳〵べんとうばこをしまひ、にげじくたくをするうち、とう〳〵ひとりのすもうがなげられ、ぎやうじがうちわをあげると、けんぶつがどつとほめれば、つんぼうけゞんなかほをして、ハテはやいなかなをりだ、

○仁王

もしへつかぬことでおすが、あの仁王さんのわきに、いゝすふたりの子供は、なんでおすねへ、あれはこんがらどうじ、せいたかどうじといつて、ちやうど女郎しゆの、ふたりかむろを見るよふなものよ、「ムゝ、それでわかりいした、そんなら大きくなると、仁王さんになりいすかねへ、

○上戸

さけずきのきやくじん、おれは人とちがつて、さけをのむにおさへるのひかへるのといふがきらいだ、それはいつそさつぱりしてようござります、又あいをたのむもきらいだ、それは又あんまりさつぱりとなされすぎますといへば、ありつきりひとりでのむがいゝ、

○芝居の馬

しばいずき大せいあつまり、しばいといふものも、ほんのきやうげんだとはおもひながら、せうずのしうちをみれば、なみだがこぼれる、そのせうずのあるなかで、馬のあとあしになるほど、おちのこぬやくはあるまひといへば、ひとりの男が、「ナニサ、しばいの馬は、おり〳〵ははねやす、

○長者

あるてうじやようかんをもらひ、大せいのけらいにくわせければ、みな〳〵くちをそろへて、この長餅はよいながもちでござりますといふ、てうじや、そのほうたちはものをしらぬ、これはながもちといふものではない、ようかんといふものじや、けらい、それでも此もちにかぎつて、一とさほ二さほと申ます、

○年禮

あるおとこだんなでらへねんれいにゆき、はなしのついでに、モシおせうさま、よのことわざに、百日のせつぽうへ一つとまふしますが、へを一つひりますれば、せつぽうにもむかひますかな、「イヤ〳〵、それはこゝろへちがひ、へと申ものは、きついほとけのおきらいなさるゝことじや、そこでほとけにはむかふものをば、へのおとゝおなじこさだといふこゝろで、ぶつてきと申すてや、

○神主

けふはとしのはじめとて、初ぞらもゆたかに、かすみのしめなわ引はへたるは、おのづから神代のこゝちせらる、何がしとよばれぬるかんぬし、日ごろよりそそかしきおのこなりしが、元日のことなれば、ゑぼししやうぞくあらため、おのがだんなばへねん禮に出し道にて、ふとこゝろやすきおとこにあひ、かのおとこ、こしをかゞめて、「みやもりさま、あけましてはよいはるでござりますといへば、かんぬしあわたゞしくゑぼしを おさへ、「ごめんなさいかぶつて おります、

○四もん屋

八もんづゝのものをうつて、八もんじやといふがあるから、四文づゝの物をうつて、四文屋はごふであらふ、これはよかろうと、四文づゝの物をうれば、ことのほかはやり、こゝへも四文あそこへも四文とかいてがくる中に、さばのやいたのを一トくしくださいと、たつた二文おいてかつてゆけば、うり人大にはらをたて、「おまへもマアばか〳〵しい、四文屋とかいてあるに、二もんものがあるものでござりやすかときめつくれば、かいて少しもさはがず、「わしは又四文やといふから、二文鯖もあるかと思ひました、

○河原崎

かわら崎の座元、大にはらをくだしなやみければ、いろ〳〵りやうぢをするに、つんぼう程もきかず、これはごふしたものであろうと、あるゐしやによふすを見せるに、ゐしやみやくをうかゞひ、これは世にいふ金くそをひるといふびやうきでござるといへば、みな〳〵きもをつぶし、それはごふしたわけでござりますといへば、いつたいきよねん半四郎があたりました、

○大黒

りちぎなる男、淺草の市で大黑をぬすめば、しあわせがよいといふことをきゝ、いろ〳〵くろうをして、よう〳〵一つ大黑を盜んだところを、うり人に見つかり、あとからおつかけられ、とう〳〵つらまれば、大黑のあたへ六十四文やりて、よう〳〵いひわけをしてうりてをかへし、まづ大黑が大事じやとふところへ手をやつて見れば、大黑はおつかけられた時におとした、

○野干

わかき人々手ならひの師匠の所へゆき、モシおしせうさん、つかぬことだが、きつねの事をやかんと申やすは、どふいふわけでござりやす、しせう、しばらくかんがへ、「やはり天狗をごびんといふとおなじことさ、

通油町

蔦屋重三郎　板

笑府衿裂米終

落噺 無事志有意序

庭增ニ氣色一晴沙綠、林變容輝宿雪紅といへり、草木も春を迎へて長閑なる折から、吉例の噺初の三立日、氣樂ご聲をかけたは何やつだヤイ、

牛島の方より市川白猿 氣が樂きがらくきがらぷう、

當時なんでもおほひまあけ、ほくてきせけんをはゞからず、天地乾坤の其あいだに、苦勞はちつともない田の不動に五代のこういん、七左衛門といふしんまいいんきよ、當年正月廿一日、なんとみな樣まださむいじやござりませぬか、かじけはもとより御ぞんじの、納豆ゑぼしをぬぎすて丶、黑い頭巾にねずみの胴服、あかざの杖に高あしだ、高いはおやじがゆづりの鼻、はなが見たくば秋葉へござれ、はるはあきばの花盛、年々歳々花あいくち、焉馬がはなしをするならば、七左衛門が聞ふさは、河豚に大こん鴨に葱、市が榮る下津町、祖父は山の手祖母は川端、橋々に噂の評判、四里四方聞べい、見るべい、はなすべい、庚申まちに白猿が、三筋たらねへ序のせり譜、福茶にうかれた戯言と、ホ丶うやまつて坊主にはなりませぬ、

幾千代も葉なしにしげれ梅の花

噂計入道先肝積團十大盡白猿述

落噺 無事志有意

立川談洲樓焉馬撰

談洲樓作

○歳旦 若水

春は曙やう〳〵しろくなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲の細くたなびきたるさ、清女のかゝれしもむべなるかな、一夜明ればかけ乞の、つれなく見へしわかれより、曉がたは扇々寶舟々々と賣聲に、裏住居のひとりものも目をさまし、若水汲んと手桶さげて井戸ばたにいたれば、とくにもおきて釣瓶ながら水をあびて居るもの有、だれだ福藏か、ムゝ徳右衛門か、いゝ春だな、ヲゝサいゝ春だな、いつもげんきだ、はやくおきたな、何さ夕べから、おやかたのかけとりの供にいつて、今かへつたから、すぐに水をあびるは、去年の春もあびたら、一年中風もひかねへ、おのしもあびやれ、ムゝおれもあびべいとはだかになり、あたまからざつぷり、ヲゝひやつこいといふところへ、十五六な娘が手桶をさげて來て、ヲヤヲヤふたりながら水をあびてさ、一寸つるべをかしておくれ、おとみさんかとつさんはどうした、とつさんは福壽草を賣に、そう〳〵錢もうけだの、あぶないおれがくんでやろふと手桶へいつぱい、其跡へ長屋の女房二三人、サアいゝ所へ來た、おいらにもくんでくんなと、面々たのんで汲でもろふところへ、一人ずみのどうしん者のばゝあが手桶をさげて、ヲゝいゝ所へ來やした、どふぞ一ッぱいおくれといへば、顔のみな、コレそんなにいゝなさるな、娘や若いかみ様たちには汲でやつて、そふはしないものといわれて、てめへくんでやれ、ヱゝおらあ着物を着たといゝながら、ふせう〳〵井戸をのぞいて、おやすい事だがあればいゝが、

○春興 神遊び

松友亭長綱作

ゑびす大黒、初卯參りより梅やしきへ行んと、福神仲間をさそいに行、壽老人は福祿壽と二人こたつにあたつて、けふはよしにせふといふ、布袋はごぶつであるくはごめん、そんならばびしやもんと辨天、是で面白かろふとむだをいゝながら野道を行、龜井戸の玉やへあがり、めづらしく蜆のすい物、外になんぞ呑る

ものを出してくれとあつらへ、出來る內たばこをのんでいる、大こく、コレゑびす、貴樣のたばこは匂ひが能が何じや、おれはきついのがすきじやによつて、まいをのみます、ムヽゑびすまいじやな、おれも大黑まいをのむ、びしや門は何をのまつしやる、おれは此よろいかぶと小手すね當、軍のなりの樣じやによつて、たてをのみます、イヤ是は尤、辨天は何をのまれるぞ、アイわたくしは龍王、成程こいつもいゝはといふ所へ、稻荷が跡から來て、福神たち爰にか、なんぞめづらしい事でもござるか、イヤたばこのはなしさ、時に貴公は何をのまつしやる、おれはまづ五穀を守る役じやによつて、新田をのみます、まことにそれ〳〵のおもひつき、ごふも〳〵いへたものでないといふ內、となりの座敷をのぞけば、面體髮の毛迄赤く、緋純子の羽織にひざやのうわ着、下着はひぢりめんひじゆすのおび、少ししつそを守るとみへて、あかねのたびをはき、ひいろの大ぎせるに朱らうをすげ、がん首あがりにくわん〳〵とくゆらせている者あり、あれはだれだ、猩々とやらいふやつか、なにサほうそう神だ、こつちへよんだがいゝ、コレほうそう神、これは〳〵どなたも、さつきにからおものごしはうけたまわりましたが、ゑんりよいたしておりました、イヤゑんりよには及ばぬ、おてまへもきんねんは流行して、だいぶくめんがよいげな、いふくさいゝきせるまで、ちとおたばこ入をはいけん、ムヽ是は紅皮おじめはさんごじゆ、ねつけはだるま、さだめてよいたばこであろふ、一ップくおもらい申さふ、イヤそはでござります、何さ此たばこ入ではと、一ップくのめばことのほかわるいゆへ、これはごふしたものだほうそう神、あんまりわるいの、アイわるふござります、これは何だ、ハイまつかわでござります、

○歲暮　年の市　　談洲楼作

あるおやしきにて、淺草の市のみやげに、はりこの松だけを、奥女中へ小買物方より進上す、ヲヤ〳〵いつも大黑樣か、大ばんをかつて來てくれながら、此よふな物を銘々にくれたは、いかな事でもあんまりなといへば、ハテおまへ樣方には、ずいぶんおよろこびの土產、ことしはしだしの松だけ、役者の彼物をせう寫にいたしたのゆへ、このうちに女がたでも立やくでも、敵役の御ひいきのお方のまで、色々の形違ひはご

ざりませぬといふ咄が殿様へしれ、いか様めづらしい事、併四十七本もあるを、どれがたれのじやといふせうこはあるか、御意でござります、其證據は仲間どもへ竹の皮を賣ます與兵衛と申者、彼は彼者の一物をこと〴〵くぞんじておる故、是を御召御聞被レ遊ませ、然らば皮與をよべとて御前へ召れ、此四十七本のはりこの松だけ、其方目利を以て、是はどの役者といふ事をきつと申べしとの仰、かしこまりましたとおめる色なく立よつて見れば、所も名にしおふ淺草市のこみ合に、馬じや〳〵といふ程の紫色、雁高、しゝ頭、拐白黒は其人のうまれ立にもよるぞかし、あるひはちよつぺい筋太く、しころのなきはすぼけ物、皆それ〳〵に名を印し、一つも違ひはそうらわずと指出せば、ありあふ人々殿にも感心あそばして、ハテ拐能も覺しものかな、かくせうせきを申子細は、ハイわたくしはもと堺町の芝居に二十年程おりました、ム、役者といふ面でもなし、木戸番でもいたしておつたか、イヽヱ、そんなら幕引か、イヽヱ、髪ゆひか、イヽヱ、そして何をしておつた、がくやにおりました、ムムがくやにては何の役を勤た、ハイ居風呂を焚ておりました、

○蓮牡丹　　緑青人作

今は昔、本所猿江の寺にめづらしき蓮の花が咲、形ぼたんの様なるとて、貴賤群集して是を見る、かほどの賑ひでも、錢を儲る心なきは出家かたぎ、とかくめんどうだから、花はもふちつてしまふたといふてかへしたがよいと、切戸口をしめて人を入ず、旦方から來てもことわりをいふ、折から門番にかご立させ、供の女中二人が、下男に何かさゝやくと、うなづき臺所へ行、ちとおたのみ申ませう、遠方から參りましたものでござりますが、此お寺様にめづらしいはすがござりますと承ました、どふぞはいけん致とふござりますといへば、寺の男、イヤもふちつてしまいました、それはこまつた物じやと、かごのそばへ來て、右の次第をいへば、こんどは女中が來て、只今承れば花はもふちりましたよふにござります、せめて其跡なりとはいけんを願ひますと主人も申ます、何とぞ御取次被レ成て下りませ、ハテおまいがたは遠方々々といゝなさるがどこだへ、ハイ品川邊でござります、ムヽとおひ所からだの、したが花はまだ咲ていれど、見物が

あつて面倒だから、見せるなとおせう様の言付でござる、モシ御納所様、今お開なさる通りだ、見せておやり被レ成ませ、そんなら外はならぬ、其人斗りと見せてかへす、そのあくる日又來て、きのふは有がたうござります、今日も又參りました、ハア羅漢へかへ、イヱ〳〵あなた樣へ蓮を見物に、夕部主人も歸りますと、あのよふなめづらしい蓮がある物かと、きついほめてゞござりましたが、今日は朝よりしたく致して參りました、とほうもない一度見たらよかろふに、早く見て歸りなさいといへば、悦び主從見てかへる、又そのあくる日もきて見物を願ふ、どんだすいきような、おまへの旦那はなんだ、ハイ芝口の町人の後家でござりますが、むすこにやしきの十ケ所もゆずつて、今は高輪の石橋萬やのとなりへ隱居しておりまする、ハテな風雅人だな、そんならおせう樣にそう申て見ませうと、右の次第をはなせば、おせうきいて、ハテかわつた物好、けふで三日來るか、左樣でござります、其上に後家か、左樣でござります、そんなら見せろサといへば、女中は庭の内へ皆々はいる、和尙も衣をひつかけて、あいさつに出よふと、座敷の障子の内たばこぼんなど出させている、庭の方に女の聲として、誠に蓮は花の君子、ぼたんは花の富貴なる物といふが、いくど見てもあかぬ詠めじやのといふ物ごしおく床しく、障子からのぞいて見ると、後家の貌が獅子鼻、

○直段　金銀舍作米作

五六人連にて、深川へ遊びに來て、硯蓋が出ると、コレ見やれ、くわへにふきのとう、九年ぼ、蒲鉾、黑い物はよく跡へのこるやつだから、直ぶみなしにいくらが物が有、ドレ〳〵八分々々、もちつとかつたり、九分々々、一匁々々、まけろ、ヨイ〳〵と手拍子を打、サア此てうしと盃、こいつは飛鳥山でかりるよふな銚子だ、いくらが物がある、一匁々々、一匁二分、一匁五分々々々、ヱ、まけろ、ヨイ〳〵〳〵と手をうつ所へ、女郎が並ぶと小ごへになつて、アノ上座に居る中どしまはいくらだ、あれは七匁五分が物はある、五分つけよふおれにくりやれ、どふして〳〵、そんなら八匁五分、ヱ、買てやれ、ヨイ〳〵、その次はやつと七匁五分よ、三番めは新ぞうだ、きれいな物だが、ほねぶとで首がみじかい、六匁五分、七匁々々、ヨイ〳〵

ヨイ、サアあのさしまは引まみゑへ、其の次は耳のわきにかんにうが有、いつちあさのは、ひたひがやかんできはずみでかくしてある、よく見やれへこがあるそふな、三人一所にいくら、文で壹分よ、あんまりだ、拾六匁々々々、拾八匁々々々、ヱ、まけろと手をうつゆへ、女郎もずつと立、廻しの女が、モシお前がたは何の事でござりやす、ついぞねへといへば、コレ此のついぞねへが尻はいくらが物がある、三匁々々でも氣がねへ、サアちつとねよふ、みんなどこへ行のだといへば、廻しの女が廊下へでて、コレおよしどん、此お客を見たおしへとふさつせへ、

○以上　伊豆千別作

コレお前は物しりだが、アノ手紙に以上と書が、なんのいわれでござります、ハテ以上とは上を以てするといふ事よ、人の位にも上の人を以上といふはサ、ムムかみをもつてするといふ事か、ハヽアそれで穴賢がわかつた、

○竹光　砂邑亭文好作

今はむかし、神田邊を折助が酒によつて千鳥足を、子供がはやして、ヱ、なまゑいやいべらぼうめと笑ふ

を開て、なんだなまゑいだ、うぬいつ酒をのませた、おれがすきでおれがのむに、すいさんなやつださいふ、すいさんもすさまじい、折助やいのみまやいとはやす、何ぬかす、眞二つにするぞと脇差にそりをうつと、ハアイうぬがごう切事がなるものだ、拔て見ろぬいて見ろといふ故、こたへ兼てひらりとぬけば竹光、それみやあがれそれで切る物か、ハアイ／＼と笑へば、何うぬらさげを立てやるぞ、

○きん酒　月盛樓紫園作

兩國の駒止橋のあたりへ非人があつまり、けふは三河屋に大寄合があつて、おあまりのむまいものを大ぶんもらつてきた、おのしはごふした、おれはコレ見やれ、めしと鯛のあら、六はどのよふな物に有りついた、ヲ、サ京屋で太々講があつて、一ばんすきなしたみ酒、梅干おけに一つぱいある、こいつはありがたいまんぷく長者、三人連れて外の宿なしどものこぬ内、お屋敷の塀のかげでたのしもふと打つれ、時に酒は一口づつ茶の湯にまはして、肴はぶれいこう手をつつこみ、ア、手前ばかりのむ、イヤこうせうけんをせう、てまへしつているか、こいつ乞食をばかにした、

けんをしらぬ事がある物か、いぜんは三つぶさんにも坐した男だ、ヲ、そんなら旦那衆の時とはちがふ、けんにかつた者が呑つこ、がつてんだ三けん折づめだ、ムメヤりやん、さんな、むつつ、はまで九といふと、辻番から通れ、

○大皷　紅楓亭丹盛作

ある地主のむすこ、大つゞみを毎晩けいこせしを、長屋の者共家主へ言よふ、まいばんの大つゞみの音で、盤木かとぞんじて夜がねられませぬ、大風の吹時などは、御無用になされて下されと願うゆへ、此旨を親ちへいへば、もつともな事とて止させける、出入の仕事衆が來て、若旦那此頃はなぜつゞみをお打なされませぬ、イヤそれはつゞみの音が、火の見のばん木の音にまちがふから、止てくれろと大屋のたのみ、夫で何のなぐさみもないといへば、それはわたしが仕様がござりやすと、小さな板へつゞみを繪に書て、小刀をもつてほりぬくから、夫は何にするとといへば、是は屋根の火の見へ、つゞみのけいこのけむじるしさ、

○けいこ所　千林亭萬善作

今はむかし、娘のけいこ所へ、年頃四十五六の米やの手代、何かのせはをやいて、或時けふは雪もふれば誰もけいこにこず、お前もこたつにあたりさないと、母おや娘のあたつている中へ足をふみ込、ついあちな心になつて、娘の手だと思ひ母の手をにぎりければ、はゝも大きにきもをつぶし、此里風さんはあきれもしない、何をしなさるといふこへに、娘も氣の毒がりて立てゆく、母親の云様、是里風さん、おまへにかぎつてこふゆふ事は有そふもない物、あの子の親ちともお心やすいゆへ、何もかも御ぞんじの上の事、後家を立て居るのも、あの子を相應な所へ遣りたいばつかり、夫に娘の手と取違へてわたしが手をにぎるといふは、おへねへおまへもしつぶかな人だ、コレおふくろまつたくそふゆふわけではない、おまへの手としつてにぎつたのだ、そんならわたしをなぶるのか、なぶるのでもない、相應な所が有から縁付なさるかといふ相談さ、ばからしい手を握らずと口で云たがよい、イヤサ手をにぎつたわの、五十兩の支度金と云事よ、

○蛇　美知丸作

是も今はむかし、隅田川邊へ摘草に行しに、下女のま

たぐらへ蛇が這込大らんを入る、江戸へ醫者を呼にやろふと云所へ、武藏やの若い者來かゝり、氣遣ひなされますな、蛇は今出て行ますと云うち、へびはよわつたかたちでぬけて出る、人々こいつはきみやう、どうして今出るといふ事をしつて居るといへば、若者そこにはちつと見所がござりますと云、そんなら夫を傳授してくれろと、旦那が金貳分出して頼めば、大事のことだがおしへて上げませう、女中のまへゝはいつた蛇の首に出ると申たは、あの女中の顔をごろうじろ、顔がどうした、ほうが赤い、

○りちぎ者　黒羽二亭金埒作

今はむかし、かせぎにせいをだして、芝居を一度見た事もなく、女郎かいはなをの事、錢の出る事はつき合もせず、夜から夜まで遊ぶ事きらいなもの有、長やのうちにそうれいがありてゆかねばならぬゆへ、淺草邊の寺まで行、かへりに友だちがあんまり吝いやつじやによつて、あいつを吉原へつれていて、やみつかせてやろう、こいつはよかろうと相談して、コレ徳兵衞、おのしは三十になるまで、吉原を見た事はあるまい、せめてけん物にでもあゆみやれ、錢さへ出ぬ事ならゆかふと連立、大門をはいると女郎の道中、コレあれが女郎か、ヲ、サモウ見世が出たと、格子先へつれて行見せれば、うつくしい事だ、一とばん一兩もでるか、何サあれが二朱だ、うそをいふぜへ、うそじやあねへ、酒肴に本膳めしをはら一つぱいくつて、ねどうぐがにしきひぢりめん、アノ女郎を抱て寝て二朱よ、ハテなそれで二朱とは二朱銀はありがたい、内へかへつてだいて寝よふ、

○大屋　裏住翁作

おまへの御子息様は、扨々御はつめいでござります、まことにすへたのもしいとほめければ、イヤ左様おつしやつても、悴めもはつさいで口がすぎますといふ、さては思ひつきのしやれをいふとこゝろへ、なる程人には色々がござる、此間大の男が、こしにもへぎのふといひもで、文箱とごぜんかごを荷つて行を、何だと云たら、五才じやと云ましたといへば、一人の男がいふには、夫はめづらしくない、むかし利久時分には、茶の湯をした人に三才さへあると云、こちらに居た男がまじめな顔で、何さ夫より私共の大屋さんのむすこは、二才でまいばん五人組を頼みます、

○湯どうふ　奥久作

ある所へ夜噺に行ける折から、子供出で、旦那さまお夜食をおあがり被レ成ませといふ、あなたにもあげろ何ぞ出來たか、ハイとうふでござります、ム、八はいどうふか、イ、ヱ、いしやきか、イ、ヱ、くずかけか、イ、ヱ、そして何だ、ハイゆでたの、

○名酒屋　橘作

今は昔、深川へ名酒やといふ茶屋ができた、まづい、女郎は紙やのお菊、もめんやの梅といふから、呼にやつた所が、今汐留まで二だん送り荷いつたといふ、隅田川のお汲は寒の見舞にいつたといふ、ごふで此一座でずつとは歸られぬ、ちつとわるいのでもいゝといつたら、アイサちつとわるいのも、新川の出ばんで直しになりやした、

祭り　反哺齋作

今年のまつりには何がよかろふ、ばか太鼓や唐人でもねへから、おどりを町内の子供にをしへ、二十人ばかりそろへたら、りつばでよかろふといへば、また雀おどりか、こいつも久しい物だ、ハテ雀おどりではない、鶯踊といふ思ひ付、まづいせうを鶯茶繻子の半へり、ひぢりめんに梅をぬつた下帶のそろひで、二十八ごふだろふ、こいつはよかろふと、やたいを梅の大木にして、囃子方梅の花笠、その日にもなつておし出した所が、花やが所望の拍子木を打ば、うぐひす踊が所望じやがつてんか、ヲ、サテがつてんじやとおどりを見て、皆々がこいつはいゝ、あれは何所のまつりだ、おふ桶町、

○女郎の鶯　千露作

今は昔、吉原へ通ふ道に、女郎の鶯駕昇があるといふ噂にちがはず、雪のちら〳〵ふるに、こま下駄で裾を引ずりながら、かごをやりんせう〳〵といふ、大門迄いくらでやる、今宵は雪がふりんすから二朱でおざんす、三百にまけねへ、ばからしうおす、そんなら四百よ、マアおのりなんしとのせて、棒組さんよふおすか、アイお出でなんし、ヨッスチッス〳〵といつてそろり〳〵とやる、コレこゝはどこだ、アイ駒形でおす、ごふもゆきでなりんせん、酒手をおくんなんし、どうでもせうはやくやつてくんな、アイだんなもやぼではありんせん、ヨッスチッス〳〵といつてもねつからやらず、客もきをもんで、ヱ、じれつてへ、はやくやら

ねへかといへば、ぱからしい、おめへさんばかりおやりなんし、

○米　始亭作

是も今はむかし、つゝ米やの荘治が藏にて、仙臺米の仲人にて、播州米の方へ美濃米が娘お米を嫁にやりし所、ほどなく懐胎して、當る十月に虫氣つき、やれ米あげざるよさん俵とさはぎたち、升取ばゝが來て、コレハちとむづかしい、大門通りの萬石どうしを呼、俵をもみながら通にかけても出かねるゆへ、腰のあたりを二つ三つたゝけば、とたんの拍子に子米が出る、みな〳〵いゝ、子米だと見れば、糠ア〳〵、

○白眼競　三毛作

今は昔、にらめくらの會を催、角力のごとく東西に立分れ、土俵へあがりにらみあひ、笑たる者は負と行事是をさだめる、扨だん〳〵に取あがり、大關になり、東大目玉々々、西はまじめ顔々と双方立向ひにらめる暫く勝負つかねば水をのませ、それよりひじゅつをつくしてにらめて居ると、だん〳〵目玉がいたくなるゆへ、兩方の關取も手を出して目をいぢろふとすれば、見物からこすりはならねゑぞ〳〵、

○柔術　青奴作

コレ八や、此頃おらが長やへやわらの師匠がこして來た、おのしやおいらも、どんな事があるめへ物でもねへ、習にゆかふと、アイおたのん申やすといへば、先生立出、どつちからござつた、ハイ長やの者でござりやす、ごふぞおしへて下さりやせ、ム、下地でも貴様たちはあるか、したぢと申てけんかといふと、そつぽうをなぐるよりほかはぞんじませぬ、ハ、それは何の役にたゝぬ、まづぶつてかゝつて見さつしやい、それどうだ、アイタ〳〵、こいつはいたい、時に是が露のあたりむそうがへし、ア、先生様あやました、サ是が表、又裏をとればすぐにこういたす、吉やとんだこつたなあ、モシ先生様、やわらに裏表がござりやすか、私はおもてよりうらにいたしやせふ、おもてはわるふござりやす、なぜおもてはわるい、ハテおもては知つた人にあつた時めんどうだ、

○玉手筥　玄武亭龜樂作

今はむかし、堀貫の井戸ことの外はやり、ある所のむすこ井戸をのぞき、つい中へ落たる所、そこともしらぬ大海にまん〳〵とわけ行ば、金銀珠玉をつくした

る楼門に、海月の門番出で、何者ぞと云、我は日本の者也、こゝはいづくぞとゝへば、龍宮城也、あやしきやつと龍王の御前へ引すへ、大魚あつまりせんぎの所、乙姫ちらと見給ひ、鯛の局をめされ、どふぞあのものをみづからが殿御にしたひとの願ひ、龍王にもいにしへ浦島の例もあれば、早速聟になされける、扨かのむすこ、龍宮は日本ほど面白くなければ歸りたく思ひ、乙姫をそゝなかし欠落の相談をすれば、そんならわたしは跡から、おまへは先へ此玉手筥をもつてと、ある夜ひとりしのび出、むせうにおよぎて海邊につきしが、くらさはくらしいづくともしらず、けつまづきて玉手筥をほうり出し、蓋のあいた儘とり集ている所へ、鯱をはじめ鰐鮫其外追かけ來り、こゝに居るとゑりつかんで引立、こいつではなひ、コレ今こゝへ若い男は來なんだか、

〇十軒店　　　　明石月影作

頃は二月のすへ、ある小道具やにて、去年の賣殘りの雛を出し、今年ははやくうれるように、御酒を上げていわふ、かの雛大きに酔て、なんと次郎左衛門、おのしなどはむかしでの安くない男だが、近年の出來ぼしめらにおし付られて、うれないとはごふはらな事だ、なる程善次が云ふ通りだ、もふ十軒店に下りめらが出ているだろふ、たゝきこわしてやろふと、大勢づれで雛店へ行、こいつらはなんだ、しやきばつて居るが、まだ江戸の料理はくつた事はあるまい、どけへぞうせろ、つがもないといへば、京人形ども、こなはんどこからござんした、めつそうなきよとひこといわんす、何おきやあがれとさわぐゆへ、近所から盃臺小重筥が來てのぞひて見て、わるいやつらが來た、二三年あとまへ店にいた、次郎左衛門と善次だ、どふぞしよふがあろふと出て、コレおのしたちがいふもむりではない、マアこつちへ來やれとつれて行、しばらくあつてモウすんだといへば、京人形共どういふ事でいんだぞい、酒でもこうたか、インニヤあの上に酒ではやかましいから、大孫で樟腦を買て出したら、コリヤたまらぬ、首をひつこぬいてしまわれるといふて逃た、

〇釣り好　　　　世事廣丸作

深川の木場の邊で、一心ふらん闘釣をしている所へ、もしこゝへ廿四五な男は參りませぬかといへば、ア

イ來ました、島の羽おりを着ておりましたか、アイはおりを着ていました、なんぞ喰ながらきましたか、アイくひます〳〵、アノ女のつれがありましたか、アイ有ました、女も若い娘でござります、アイ左様々々、ホイ逃たわい、どつちへ逃ました、イヱ大きな鮒を、イヤサ其人はどこへ參りましたといへば、ヱ何をいいなさる、

○虎　　　烏亭百馬作

和藤内異國をしたがへ日本へ歸り、こふしているもむだなれば、なんぞあきないをしよふ、まづ國性爺藤内といふ町人になり、料理見世も松東庵とまちがへば、呉服やがよかろふと、幸ひ唐より持來りし織物を賣、正札付の大見世、唐人を野郎にして、手代とんきんひやうへ、じやが太郎兵へ、かぼちや右衞門、そろばんをひかへて、はんとりハア、ちやばんよハアといへば、とらは大伴頭、ことの外商内があれば、虎も半分いろ男になつて女郎買、地獄になじみができて、着た物をぬいで、ふんどしの敷ぞめをしてやるとの沙汰、和藤内是を聞、につくいやつ生膽を取て、木藥やへ賣てやろふといふを、母がとゞめ、虎を呼付、コレこなたは女郎になじんで虎をうつげな、此のちやめにしや、たび重るとまた御祓筥だよ、

○疊ざん　　　前庄作

吉原の安見世の女郎、馴染の客が外へ行を、つけことわりの文をやつても、やつぱり呼ゆへ、とらまへてやろふと、新造を大門へつけて置、新ぞうも寒いゆへ、ごふもしれんせんといふ、又あすの夜おいらんいふよふ、あしたは早く七つから大門へつけていなんしといへば、新造アイと言ながら、かんざしを疊へ打付かぞへて見て、モシおいらんへ、あすきつと居續でありんす、行はむだでおざんす、オヤけしからねへ、おめへの疊ざんできつとした事がしれるものか、イヱイヱ主居續は違はおつせん、夫がどうして知るへ、此かんざしは流しでおつす、

○ひろひ物　　　鶴步作

今は昔、せつた直し貮朱銀一枚ひろい、女郎を買に行二階へあがると、廻しの女が、モシおなじみがござりますか、インニャふりだ、そんなら中どしま衆がよかろふと、盃もすみ酒もした〻、かのんで床へいれば、女郎もてのあるやつで、こんやはおめへのなじみがな

くてわるいねへ、わつちも名代のこゝろさといへば、何さこゝへはじめてよ、そんなら是から來てくんなさい、一度ばかりでこられないでは、新造衆とちがつてわつちも茶やの手めへがわるい、うらはつけてくんなさい、夫からは又はなしあひもある物だ、ヲヽサ裏はイヽ皮があつた、ばからしい人をてうす事ばかりといふ所へ、モシおむかひでござりやすといふ、ヲヽもふ歸らふといへば、コレサ裏にくる氣なら直していなと引止れば、眼の下へ指をおつ付てべヱイべヱイ、

○摺鉢の巻　曳尾亭素的作

殊の外しわいやつ夜咄に來て、とかく摺鉢が第一でござる、鬢もあついと油がいります、糸びんにすりこかして、夏のうちはぼうずでもすみます、また飯のさいには干物、これも朝は頭をとつで、よくやいてもんできらずの汁の中へ入て喰、其跡を片身づつ一日にくへばよい、此外だん〳〵御指なん申さふ、イヤおいさま申ませふ、おかへり被レ成ますか、ろうそくをともせ、おぞうりが見へまい、それがもふついゐでござる、是ごろふじろ、くら闇でもぢきにしれます、ハテ扨奇妙さぐりでしれますかな、イヤサ爪のさきのあかりで、

○十露盤　本肆樓要賀作

コレサおのれも十五になるが、行燈を見ると眠る丁稚だ、手習をしおれ、そろばんは三年かゝつて八算をまだおぼへぬ、たわけづら、サアこゝへ來ておいて見ろ、夫十二萬三千四百五十六石七斗八升九合、それからおいて見ろ、なんと申たべらぼうめ、二一天作の五、ア、又わすれたか、是よく譯をきゝおれ、二一天作の五とは上の玉をおろして、それ此十といふ玉を上の玉を五玉といふは、十を二つにわると五つになるは、これわけがしれたか、玉をみろやい、アイ〳〵、ではすまぬ、ヱヽ玉をみやあがれ、なんとしれた、アイしれました、なんとしれた、ハイ洲走りの臍と、

○脇差　古今亭獨歩作

今はむかし、有德な町人有、出入の道具や來りて、旦那よい脇差のさしぬきができました、おかい被レ成ませぬか、どれ見せさつせへと目鏡をかけて、ムヽなんだ目貫は稻穗、縁は麥藁、すじに稗蒔、頭は芥子、なゝこ鍔は阿波の鳴戸形、鞘は豆かいらぎ、こいつはよい思

ひつきだ、身はなんだ、ハイ小豆長光でござります、テモ好がおもしろい、直段はいかほど、アイ此間の相場では五十両ほど、天氣次第で相場がくるひます、今一腰の脇差は、ム、目貫が猿に衣、頭は鳶に鷹、縁は狐を馬にのせた所、鍔に鯰にひやうたん、小柄は猫に小判、鞘に月があるから、兎がさぐりに有そうなものじやが、身はなんじや、アイ身はおまへ様のおすきな物、ム、亭主の好な赤鰯か、イ、ヱ鞘の銀の月を用ひてきせるいれに、なに月をもちゆるとは引こぬけば、すつぽん、

○みへ坊　　仙臺　文珍尾守作

女郎買の居つゞけに、新造が鼠を飼ているを、ドレちつとかしな白鼠だの、近年は大分ある、アイわつちがのは唯の鼠でありんす、ム、こいつはいたづらをするやつよ、國に賊人家に鼠とみんなわき物だ、それだからむさくろしい人には虱がわく、身だしなみが第一だ、おいらは薬にせうといつてもねへ、しらみたかりには、おめへがたもあやまるだろふといふ内、モシヱぬしの衿を見なんし、それうはゞいをしんすにへといへば、どれと見て、ハ、ア噂をいへば影がさす、

○富士講　　芝樂亭慈悲成作

どうだ權八、替る事もねへか、ヲゝ能きたな、サアあがりやれ、ム、あがる、一ッはい呑せるか、酒を買うにも錢が一文ねへが質くさもなし、ホンニおつりきな物が有、富士講の行衣が有、今は止になつてこいつもいらねへ、二三百はかすだろふ、待て居やれ今かりてくると質やへ行、コレ伴頭是で三百かしてくだせい、何こんな脊中に佛様とふじ山に猿がおして有、どう貸れる物か、ハテ扨是にはかまはずと、おれが貌で二百でもかさつせへ、おめへの顔づくも久しい顔だといゝながら、錢五十だして、サア是でよくば持てゆかつせへといへば、手を合せ、コレ富士せんげん様のだ、何とぞ一筋にたのみたてまつる、

○はやり謡　　四角堂治呂花作

いまは昔、妓女二人ありけり、姉は實子にて妹はかゝへの娘なれど、あね様〳〵といゝけり、そのいもと外にて潮來節の新文句の唄をかいてもらい、内へかへり取落してありけるを、母ひろいけれども無筆ゆへわからず、此程座敷に出ても、夜更て歸る事度々なれば、色事の文とこゝろへ、實の娘を呼でいふよふ、な

んでもあいつは虫がついたと見へる、油斷しやるなよ、コレかゝさん、かわいそふにおとなしくしている物を、インニャおれが證據を持ている、是を讀でみやとさし出す、娘おしひらいてよむ、まゝよ田舍もまた住よかろ、母おや、ふといあまめだ、欠落をする氣だ、

○星　烏亭龍馬作

是も今はむかし、むせうに虚言をつく者有、どうだうそつぱち、ひさしく逢ぬがどこへいつた、ヲ、とんだところへ、去年雷にさらわれて天竺へよ、ナニてんぢくへ、こいつは面白かつたろう、てんぢくはどこに居た、四日市に、ハテナあつちもさむいか、寒いだんか、雨がみな氷てふらせる事がならねへ、ひねの雨をあられにして漸ふらせるくらいだ、天の川を見たか、ヲヲサ見た、星は大ぶんあろふな、ぬかぼしは皆踏で通るは、まづ牽牛織女といふは七夕様よ、夫から七曜九よう夜ばい星ははだかでいる、澁柿のよふな面のを何だと聞たら廿干、顔のしわのよつたは梅ぼし、二つ巴の侍は大星、又やせこけてあごで蠅を追ている、あの星は何といふと聞たら、あれはとぼし過たの、

○化物　琴多樓鹿兒善作

百物語のひまにや有けん、化物大勢あつまり、中にも見こし入道、ナントいづれもじよさいなく、秘術を盡してばけるといへども、當時の歌舞妓役者ほどばける事はなるまじ、岩井半四郎などは一人りして七化をするよし、是は見ておかしやれといわれて、一つ眼と河童が其芝居はどこだと猫またにきく、まづ富澤町から長谷川町横へ、人形町といふを行と、虎やといふ菓子やの蒸籠がつんで有、角から右を見ると、芝居の看板あつてにぎやかなと、さすが飼猫のあがり程あつて、くわしくおしゑる、そんなら化物とみへぬよふにしてゆかふと、かつぱは手拭を米やかぶりにすれば、一つまなこはほうかぶりを鼻の下で結び、おしへられた通り行、中村やの前の木戸をはいると、向ふより芝居者が、ほうかぶりかつぱといへば、化物、おきやあがれづおふへいな、

○にわか　五明作

年わすれに思ひつきの俄狂言、忠臣藏がよかろふと、てん〳〵にこんたんをする中に、あんまの椀伯老はなで付ゆへ本藏の役、せりふのしれぬ所は淨るりでとつて間に合せ、もふ鑓をつゝこまれ手おひながら

もぬからぬ本藏、イヤ〳〵それはひが事ならん、用心きびしき高の師直、障子ふすまはみなしりざしと滑るりをかたる内、ごふも身ができぬゆへ、思ひついてたばこ入よりたばこを出し、鑓の疵口へおしこむ、見物がイヨこまかと譽ると、インニヤこまかではない五分切だ、

〇ほしいもの帳　富存作

今はむかし、ほしい物帳といふ帳をこしらへ、持ている男有、中にはたばこ入レきせるは銀と書付、あるひは八丈羽織、上着は黒ちりめんに五所紋、下着は八丈島唐ざらさ、帶ははかた織、みな繪にかき、其外たんす長持手道具までこと〴〵く記し、女房は近所の器量よしのおひな、めかけおさく、なじみの女郎は扇やの瀧川、是はにしきゑをはりつけ、ふだんながめてたのしみいる、又其あたりに、此とおりこしらへ持ている者とよりあひ、たがいに帳をひろげ、おれがたばこ入は越川、てめへのは丸角でかつたと書てある、あれこれと見る内、女房おひなは手まへの帳にも有、コレおのしは間男だ、インニヤこなたが間男だといゝつのりけんく(わ)になる、大屋きて、貴様たちはなんのけんくわをする、モシ御聞なさい、わたしがほしい物帳にある女房を、あいつが間男をして、帳にかいてあります故の事でござる、どれ二人りの帳を見せさつせへ、ム、成程貴樣の帳はおとゝしの年號、こなたのは去年の書付だ、ま男にちがひはない、七両二分ださつせへ、大やさんとんだ事をおつしやる、ハテ此大やがかしてやる、イヤ金ではない、ちゑをといゝながら、二つ帳へ書て出したを見れば、あちらの帳へ金二両二分出、こちらの帳へは七両二分入、

〇松魚　東南西 北平作

儒者めきたる浪人の門口を、鰹々と賣こへ、あるじ立出、コリヤ魚賣人々々々と呼、エゝわしが事かへ、ヲヲサその松魚(しようぎよ)は價いか程じや、なんの事だ、あきんどにあだ名を付けてなぐさむのか、イヤ左樣ではない、魚賣人とは肴うりの事、松魚とはかつをの事じや、小むづかしい言ようだな、鰹はそくろんじさ、ムゝそくろんじとはいか程の事じや、アイそくは一貫の事、ろんじはしれやせう、イゝヤ知れぬ、ハテろんじは六百の事さ、不佞はじめてゑさく致したといへば、肴うりエゝおめへも論語よみのろんじしらずだ、

○唐女　山徳作

今は昔、筑紫松浦潟へ唐船一艘吹寄せたり、浦人たちより是を見るに、宮女と見へて羅綾のたもと錦の袖、花のかほばせ雪のはだへ、オヤてんこちもねへ、唐の女だといへば、日本人々々々なむからたんのうとらやあ〳〵といへども、ひとつもわからねば、コレ女中、とおい所をたつた一人りか、おやじどのかおふくろでもついて來たのかといへば、唐女バア〳〵といふ、ムヽばあ樣とか、

○玉　桃多樓語吉作

やしき出入の道具や、劔持力右衞門樣に毛巾着をたのまれ、王子の稻荷參りの歸りに、本郷のほし見世にて、狐の皮のたばこ入れに、尻尾をきせる筒にしたのを買、是でけふの小遣ひは有と酒をのみ、唐の芋を二つ子倅がみやげにせうと、兩方の袂へ紙に包て入れ、日も暮方にのろ〳〵行けば、駕をやりませふ安い安いといふ、市谷迄いくらだ、二百下さりませ、とんだ事を百なら乘べい、エヽもどりかごでもあんまり安いが、旦那もじよさいはあるまい、サアおのりとのせて、だん〳〵お茶の水のほうをいそいでゆく、駕がゆれるひやうしに、かの尻尾のきせる筒が、羽織合から出ると、跡棒が見付てたてる時、棒組ちよつと見やとめくばせして、うさんなかほで、モシおめへさんは王子へお出被レ成ましたとおつしやつたが、市谷はどこ迄參ります、茶の木の稻荷の近所迄、ヱ扨こそ棒組ことしは仕合がいヽぞ、モシ旦那お願ひがござります、ムヽ願ひとは酒手か、イヽヱもつたいねい事、おまへ樣の物をどうして、何ぞ福を御授被レ下ませといふから、道具やもさぐつて見れば、きせる筒がさがつてあるから、扨はとこヽろへ、まじめになつて、あすは又半田稻荷迄用事がある、ヘヱ御苦勞でござりますといふうち、市谷へつけば、太義々々其方たちへ是をやると、唐の芋を一つ宛やれば、ハア有がたいと跡ふしおがみ分れ行、ようすを見て狐ニ疋立出、今のを見たか、サレバ今は素人にゆだんがならぬ、

○三人男　橋々亭萬羅作

今は昔仇なる女、夫にかくして忍び男二人り有けり、ある時一人りの間男來りいる折ふし、又一人りの間男來て、寢て居る所をおさへ、此野郎めはふとひやつだ、おれが念ごろにしている女を、よくしめやァがつ

た、ごふしたと、コレヱうぬが色をして居る事をたがしる物だ、うぬ惚なやろうだと、つかみ合いる所へ亭主歸り、是はごふした事だ、人の內へ來て、ヲ、御亭主か、こな樣がくればモウ百年めだ、つがもねへ事だが、あの女を三年色をして居る、夫にあいつが太平をぬかすから、がつてんしねへ、コレヱうぬが三年なればおらあ五年のなじみだ、サア間男にちがひはなひ、是からは見事におれにくれろ、はなしのよふななんの事だといへば、亭主、こいつらは五年の三年のと、あかくなつた味噌をあげやアがるが、おれはあの女を女房に十年して居る、

○俊寛　白寳舍晋家作

今はむかし、中宮御產の御祈によつて、非常の大赦行はる、鬼界が島の流人丹波少將成常、平判官康賴二人赦免にして、船にのせてこぎ出す、俊寛一人り跡に殘り、磯ばたに伏まろびいる所へ、海人の千鳥かけ來り、てゝ樣よ、せなや兄丈はどこへいきめしたときけば、ヤア千鳥か、二人はおゆるしあつて都へかへる、早く呼かへしやといへば、アイと千鳥が岩の上へかけ上りて、コンナむかふのふね引、

○伊勢參り　紫雄作

丁稚子供より合、コレ竹松どん、おいせ樣の太々をうつとうまい物をたんと喰とよ、ほんにかそんなら龜吉どん、おいらもぬけ參りをして、だい〳〵をうたふと、そこらの心ざしある人をたのみ、ろぎん少々こしらへ、お師の名は聞およべば、なんなく山田のお師をたづねて、お賴申ませふ、御師の手代出、どこからござつた、アイ江戶藏前の伊勢やから參りました、太々をうちとうござります、これはよふ御出、舊冬參つた時おはなしもなかつたが、存寄らぬ事、跡から大ぜい御出か、イ、ヱ私共二人り、ハテなさいふ內、錢百文づつ紙に包、モシ是で太々を打たふござります、ナニ太太を、此子は氣がちがつたか、コレそつちの旦那の太太は五十兩、ざつとして二十五兩だ、とんだ事をいふといへば、竹松どんどうせう、モシそんなら此百で太太がならずば、きんかんでも、

○百夜車　水魚亭魯石作

今は昔、小野小町は美人の名高く、歌は世にしれる所也、されば戀したわざる物なし、深草の少將思ひのたけをしらせんと、雨のふる夜も雪の夜も通ひて、車の

楊に其數を書て、九十九夜通ひしかど、此戀叶わずして思ひ死せられしと云取沙汰、女中達これを聞、小町のおそばへ參り、少將さまには終におはて被レ成ましたといへば、小町聞て局を呼給ひ、コレ其帳を出して、少將どの丶所は消しておきや、

○稚名　　坂彦作

是も今は昔ある人の出生の男子、おさな名を非人に付てもらへば、そく才延命也と聞て、早々非人をよび寄る、旦那樣なんの御用でござります、外の用でもない、悴が名をつけてくりやれ、ハイお生れなされたのか、よふおふとり被レ成て、そして男の御子でござりますか、ヲ丶サたつしやな名がよい、達者なお名なら虎松樣か牛藏樣か、アイヤずいぶん丈夫な目出たい名がよい、左樣なら石藏樣、ム丶せき藏とはなぜ、ハテ石藏毎年まいとし、ム丶めでたい、はびろのおにわへどんどととびこむ、そふだははねこむ、ごいわい申せば目出たいそふだは、ア丶コレ〳〵昔からある名で、壽命の長い名がよい、左樣ならアノ三浦の大助樣はどふでござります、三浦の大助とは百六つと、まつと長いはなひか、浦島太郎は八千歲、まつと長いはないか、東方朔は九千歲、まつとながひは、西の海へさらり、

○妙藥　　鶴聲樓作

コリヤア寸伯樣よふ御出被レ成ました、おやじが氣色がわるいと申ます、どふぞ御藥を、ドレ〳〵脉を見ませふ、是は痰じや、此くすりをのませて見さつせへ、あす參らふといふて歸り、翌日來て、どふだな、アイ同じ事でござります、ドレ脉を見ませふ、これはきのふよりもわるい、腫が見へるといへば、モシどこもそふは見へませぬが、ハテどふしてこなたしゆにしれよふ、かほの内手足にむくみのあるのが、しゆのあるのだ、此藥がよかろふとおいて行跡へ友達が來て、どふだおやじ、ヲ丶徳右衞門聞てくりやれ、アイ醫者どのがきのふは丹だといつたが、けふは朱だといつた、毎日赤くなる病だそふな、ハテな夫にはおれが妙藥をしつている、おらが小僧が疱瘡の時、紅を顏へなすつた、おやじも朱から紅にならねへ内、上からなするがい丶と、病人の顏へ紅をなすると、おやじがコレ徳右衞門どふする、ハテだまつていさつせい、ねから直してやる、コレはながでるが風だろふ、はなをかんで

やろふ、ふんといわつせへ、まつと〳〵といふ内、のぼせて鼻血が出ると、おやじどの病ひは直る、おれが請合だ、コレ丹から朱になつて、はな血が出た、赤い物は是ぎりだ、

○野狐　一陽亭秀蔚作

今はむかし、田舎にて狐出て人を化すといふ事、武邊自慢の侍、退治せんとかの所へ行てまちいたる、十六七の器量のよき娘来り、私は向ふの村迄参る者でござります、どふぞおつれ被レ成てくださりませ といふ、ふといやつ、うぬは此あたりに住で、人をたぶらかす狐であろふ、おれが女好だといつて、そふうまくばかされるものか、おきにしろ出なをせ〳〵と言ば、忽男に化、私は江戸の者、一人り旅なれば、何とぞ御同道と言、うぬも今の狐だ、よしにしろといへば、おぢいに成、モシお侍様、ナンダ又祖父に化たか古い古いといへば、こんどは祖母になる、ばゝあでも狐だといわれて、しよふがなさに猫に成、それみろ尓め、己生捕にするぞと追欠れば、狐は叶わじと逃、追詰られて藪の中へ入る、尻尾をとらへひつぱる拍子に、コンコンクワイ〳〵ときつねはなきながらしつぼがぬける、扨こそみせしめに是をみやげにするといふうしろから、百姓がなぜ大根をぬいた、

○雷の玉子　桑楊亭喜丸作

今は昔雷の玉子をもらい、本の物かどふぞかへしてもらいたいといふてもしよふがない、イヤ私が雷にかへして、お目にかけませふが、是には大ぶん物が入ますから、金子二十両ばかりお出し被レ成ませ、ム、ずいぶん物にさへならばとたのみ、夫より十日程過て、モシ旦那、玉子がわれて中からちいさなかみなりが出ました、夕部もコヨ〳〵と鳴ました、ハテナどれはやふ見たい、ソレおめにかけませふと袂をさがして、コレ道で落たかとんだ事だと大はだをぬいで、ヲヲ有た〳〵、是ごろふじませ、あらそわれぬ物でござります、どふした、臍にひッついて、

○文　うす姉敷姉作

吉原の女郎より毎日々々の文、こん夜もゆかねばならぬと、客もあつくなつて行、友達がうそをいふやつといへば、うそなら髪結床の市五郎に聞て見やといふから、床の亭主に聞ば、アイサ毎日此のよふに情のある女郎でござりやすと、文を一束出して見せる所

へ、かの男來り、なんと浦山しいか、ほんにおのしはあやかり物だ、定めて面白い事があろふとふけて見れば、漸いろはを習ふたよふなかな釘の折、これはよめぬ、是をおのしはわかるか、してまいばん行な、ハテやぼな事をいふ、わからぬからまいばん聞に行くワサ、

○そゝか　三升鶴女作

殊の外そゝかわしき女房、堀の内へ參りて歸り、モウ五つでもあろふ、大きにくたびれた、湯へはいつてこよふと、下女をつれてゆけば、入口でひたひをくらわせ、いたくはなかつたかといへば、下女も承知して居れば、イヽへきずは付ませぬといふ、湯の中にて近所の内義に逢、おそふ御出被レ成たねといへば、アイ今日は堀の内へ、それはおくたびれ、イヤもふ鳴子から先が道がわるくてといゝながら、その内義の足を洗ふゆへ、おかみさん何をせうだんしなさるかといへば、コレハごめんなさい、わたしがおみあしかとぞんじて、

○無筆　萬葉の假名女作

一字不通の者、年玉の半切へ、近所の人を二人りたのんで名を書てもらふ、扨々無筆といふ物はふじゆうな物、おかげであすはやく禮に出ますといへば、一人りの男、何と字といふ物はよく拵た物、氣をつければしれます、先口といふ字は口のなり、目といふ字はめのかたち、耳といふ字も同じ事、鼻ははな毛まであります、のふ仁兵衞さん、左樣々々時に夫でわしも思ひ出した、いつぞや本店へいきやしたら、小僧が小づかい帳をつけて居る、なか〳〵あじをやると帳を見たら、なが三文、八文あぶらげ、四文子と書てあるから、是はなんだと聞たら、酢でござりやすといふ、酢に子の字を書ものかといつたら、それでも金子の子の字でござるといひやした、ハヽと兩人笑へば、亭主、仁兵衞さんおめへ小供にはぢしめられたの、

○孝行　千鳥連作

今はむかしまづしく暮せしもの、母親春の末に笋を望む、安き事なりとてはる雨ふりければ、みの笠を着て鍬をもち、竹の林をたづね掘けれども、一本も得ざりければ、扨は我孝心天へ通じざるか、又あすも來りて掘て見んと歸る、其夜竹の林の近所の櫻の木がいふよふ、なんと桃の木、竹といふやつは物をしらぬや

つだ、親孝行な者がたけの子をほりに來たのにつらも出さねへ、唐では廿四孝の孟宗が、雪の中でさへ掘出したげな、心ないやつらだ、日本の面よごしだ、おいらが先祖は、正直爺が枯木に花を咲せふといつて、灰をぶつかけられてさへ花の盛を見せた、左樣々々おいらは子供が桃の木柿の木とたづねてくれば、實の中から芽を出してやるに、竹のしれねへやぼなやつらだと噂を竹が聞て、仲間一どう相談して、あいつらにいわれてはすまぬ、あしたは殘らず出んと待ている所へ、又蓑笠に鍬を持、けふこそ授け給へと、てうど掘れば、待かまへたる笋によひと五尺ばかりのが出る、びつくりして又掘れば、二本三本前後出る程に、一町四方は竹の子、孝行ものも出る事がならずいる内、下から六尺ばかりの竹の子、尻をつきかけるから、前へ飛拍子帶へつッかけてさしあげられ、コレハごふじやと鍬をかついで見廻す所へ、家主が通るゆへ、モシ／＼大屋さん、稗蒔はいりませぬか、

○七十二候　　扇鶴亭百人作

吉原の居つゞけの客へ、仲の町よりおくり物に、蛤の千鳥燒を持てくる、こいつはいゝ物が來た、雀閨中に入て蛤と成、一つのもふとしやれる、女郎がモシあのすゞめは蛤になるといゝ、すがほんの事かへ、違ひはなひのさ、七十二候の内にいろ／＼かわる物が有、腐草化して螢と成、田鼠化して鶉と成、芋虫がてふ／＼となり、船虫がさんぼになる、其外虫も色々變化する物よといふ、側に新造が、モシそんなら遣り手衆は毛虫のなつたのかへ、

○駕好　　仙路亭蘆翠作

子供にも色々の好があるものにて、商人やの丁稚十二三にて、使にやると一町ほど歩行と、木戸際の駕舁に、コレ淺草までいくらでやる、アイ二百でござりやす、百五十にまけな、だれが乘なさる旦那かおかみ樣か、インニヤおれがのる、とんだこつたの、サア使にゆくのだ負らばはやく、棒組まけてしんせろとのせてゆく、いつでものるゆへ後は駕かきもなじみになつて、けふは子僧樣が使が有そふな物だとまつて居る、扨其かごちんはどこからもやりてがなければ、見世の小錢をちつとづつためてのる、それがだん／＼しれて、伴頭がごふもふしぎなやつとひつとらへて、コレうぬは此頃錢を二百おとしたがなんにした、使

にいつても早く歸る、どふも氣がしれねへ、譯をぬかせとくらはせれば、泣ながら、お使に行とき駕にのりやした、何かごに乘た、おごつたかきあだ、おごりじやあござりませぬ、おごりでなくつてなぜ足をかばつておくのだ、なんとぬかす、あしをかばつて何の用にたてる、抜參りにいきやす、

○茶漬　吾友軒米人作

武藏野御茶漬といふ見世を出して、殊の外うれる、友達が來て、コレきつい繁昌だげな、時に障子にむさしの御茶づけとかいたが、ちつとむりだと思ふ、アノ茶づけの始りは、淺草に海道茶漬といふが有た、夫から銀座町へ山吹茶漬がおちやづけの始り、宇治の茶に山吹といふが有からきこへたに、むさし野に茶があつてつまる物か、成程そふいふはもつともだが、おれも海道茶漬が有から、木曾海道茶漬としよふとおもつたが、一度でこり〳〵せふとおもつてむさし野とつけた、心ははら一ッぱい喰せる思ひ月さ、

○田舍者　森羅亭萬象作

どうらく成むすこを、おやじ勘當せふといふを、母親の情にて田舍の乳母を賴み、こゝろの直るよふに、一二年もそつちでせはしてくれとのこと、乳母の亭主ももんもうなれど、正直者ゆへ、まことの主人のごとく、朝夕こゝろを付ける、むすこも始めの內は小づかひふ自由ゆへ、內にばかり居けるが、のちは村のむすこどもとつれだち、宿場へ二三里馬にて泊りに行ければ、乳母も亭主と相談して、一と先親旦那へわび言してかへし申がよかろふと江戶へ來て、兩親の前へ出、さて〳〵若旦那樣にも、はや一年程いなかに御出被レ成ましたゆへ、こゝろも直りました、ばゝアめも參るはづでござりやすが、しつけ時でいそがしくござり申から、わしが參りやした、どふぞ御かへし申てくださりませといへば、おやじ、成程忰めもふ二十五といふもの、ちつとは思ひしりおつたろふ、おれも六十に及ぶ、じつていになりおつたら、とりしまりの用心にも呼事もあろふ、アイじつていまでは參りませぬが、鼻ねじり位には、

○閑居　清凉亭菅伎作

江戶より田舍へ引込し醫者、久ぶりにて來りて、さてさて私も唯今では在所へまいりてモウ五年、貴公樣にも御壯勝でお目出とふござります、イヤおまへ樣

も只今では、おらくでいなかに御出被レ成との事、いつみてもおわかい、江戸よりはおなぐさみがおゝいそうで、いぜんよりおふとりなされた、夫はふだん麥飯をたべて、野びろい所におるゆへでもござりませふ、何事も不自由がちさ、其かわりに衣服にりつぱもいりませず、家來は一人あれども供もつれずとよし、左樣でござりませう、羽織も袖なしですみませう、左樣々々、藥もおまへがふところへ入れて御出ですみ、左樣々々、病人も向うから歩行て參りませふ、左樣左樣、人參のかわりに干大根を入れてもすみませう、いしや、夫はちと出來ませぬ、

○丁稚の無心　紀輕人作

ある年季の丁稚、下女のりんが側へよつては、コレおりんどん、こんたに無心が有〳〵とたび〳〵いふ、何だ小ましやくれたがきだ。いけすかねへといへ共、條りたび重れば、いな舟のいなにはあらず、少しはとうがらしでもくつて見たい心の所へ、又おりんどん無心があると云、さいわひ人もあたりにいず、コレ太郎吉どん、無心とはなんだよといわれ、ごふもはづかしくて云ひにくい、コレおッつけてください、なんの事だ、おつ付てくれろとは、おれにおッつけてくんなさいといふ事よ、コレサそばへよつていわつせへ、おッつけろとは何を、おれがくふ飯をば杓子で、

○高尾　萬龜亭江戸住作

今は昔足利賴兼公、遊女高尾が追善の爲、大川におゐて花火をあげ給ふ、こゝに土手の道哲とて、たつときも道心の念誦して有ける時、ふしぎや紅葉のかげより、たへなるこへにて、たばこのんでもきせるより、のどがとふらぬうすけむりと、あらわれ出でたる高尾がゆふこん、申々道哲さん、そふいふは高尾でないか、賴兼公の仁心にて、大川にて花火をともしたまふも、そなたの追善くようのため、未だうかまぬか、エヽ淺ましやな、アサアその追善にごふぞ花火より外の事を、ム、花火はそなたの爲にわるいか、アイとぼされるにはあきんした、

○辻八卦　白鯉舘卯雲作

願ひのぞみ當卦はんけのうらない、失物待人夢はんじ、相撲の高下まで見ごふしのうらないと、辻に立て居るところへ、きおひが二三人つれて來て、萬八ちつとまつてくれ、おらがかゝあがはらんだが、男のがき

かあまか、十二文がうらなつてもらふべい、コレサよしやれ、おのしが子なら男だとも女ともいへばいゝが、鬼子だともいわれると外聞がわるい、ハテおに子なら見世物に出して錢もふけをするわい、なにさしよせん辻八卦が言事があたる物じやあねへ、夫よりは十二文出して、一つぱい呑がいゝといふを、八卦おきが聞て、コレあんまり安くするな、そんなのじやあねへ、なんでも見とふしだ、なんだ見通しだ、おく座敷が聞てあきれるは、こいつが〳〵家業の邪魔をしやあがる、うぬはどこのやつだといへば、きおひ、あてゝ見や、

○家名　淺草菴市人作

コレ此中土手で里遊にあつたら、五明樓へいつたといふたが、どこの事だ、扇やの事さ、五明の扇といふ事があるから、夫でいふのさ、そんなら大文字やは何と言、文樓と、ハテな丁子やは、丁子樓よ、松葉やは、松葉樓よ、こいつはおつりきな、そして玉屋は何といふ、あれは玉樓と云、そんなら越前やはといわれて、こまつた顔をして、越前やかアノ番多樓、

○閏七月　四方眞顔作

年ごとにあふとはすれど七夕の、ぬる夜のかずはすくなかりけりといへど、七月に閏ありて、織女も二度逢給ふ、御よろこびかず〳〵にて、牽牛のかたより御文に、こんどは牛もおそくのろつき候まゝ、そくじつ鬼が四つ手かごにて參り候はん、そもじにも家根船にて天の川の岸に御まち、めじるしには竹の枝に短冊をおつけをきとの事、織女もそう〳〵したくなされて、天の川に待給ふ、牽牛もかごより乘りうつり給ひ、今宵は船にとまる支度、蚊が出たらどふせふといふ所へ、風の神のこへとして、萠黄の風やァかせかぜと賣きたる、さいわいと是をもとめ、サア是からは天人の藝者を呼にやれと、夫よりびわ琴をひいて、辨天乙女といふ藝者のこへに、天道丸の出來星がありがたい〳〵といふ所へ、船頭の明星が、もし舟をさげやせふといふ、それはなぜ、今あそこへ雷がばか太鼓で來ます、

○福鼠　談洲樓焉馬作

今は昔甲子の夜、白鼠一疋來り、見ている内十二疋子を産、その十二疋がまた十二疋づつ産と、だん〳〵産で二三千疋になると、出ていつてしばらく過て、大き

な鼠は大判をくわへて來る、中鼠は小判、小鼠は小つぶをくわへてくる、後には千兩筥を車につんで鼠がひいて來るやら、もふ內に置所がないゆへ、居所にこまり二階へ上ると、又二かいへもいられぬ程金をはこぶ、戶を明て庇へ出よふとすると、ひさしへもだんだん金がつんである、こいつはたまらぬと、漸く大屋根へに逃出、ほつといきをついでいる間に、出る事のならぬよふに金をならべ、下を見れば大勢のねづみが、車で金をつんで來る、コレハたまらぬ、ア、寶船寶船、

落噺無事志有意終

跋

いさましき物初雞の聲、顏見勢のしばらくと、例の借上なごんも、三升贔負の口癖なり、遠からん者は落噺にきけ、近くは讀で目にも見よ、桃栗山人柿の素袍、談洲樓の戲談のむしろ、其秀逸を開き見れば、頓に笑を催して、お臍に福茶を沸す、嗚呼此草紙の世に弘らん事、東は奧州外八文字の姉女郎、西は新造禿遣手、南はきの字や臺の物、北は夜毎の地俠客まで、通言の及ぶ所、千里も行き萬冊も賣れ、春の始の初幸便、無事志有意と題せしを、卷末せよと需に應、智恵をふるつて花咲の翁、おこがましくも是をしるす、

近世文藝叢書第六 終

神戸龍治
野澤富惠
校

明治四十四年一月廿五日印刷
明治四十四年一月廿八日發行

（近世文藝叢書第六奥附）

非賣品



編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者　早川純三郎

印刷者　東京市神田區蠟燭町八番地
武木信賢

印刷所　東京市神田區三河町三丁目四番地
武木印刷所